

別冊歴史読本 特別増刊 '95春

# 時代小説大全 PART⑦

## 名手競作！江戸情話

伊藤桂一／早乙女貢／澤田ふじ子／
高橋義夫／宮部みゆき

奇謀と軍略によって戦国の動乱を生き抜いた
希代の知将の生涯！ 600枚一挙掲載

## 「謀将 真田昌幸」

南原幹雄

珠玉エッセイ〈私の習作時代〉

神坂次郎／北原亞以子／永岡慶之助／
典厩五郎／もりたなるお

【第19回歴史文学賞佳作！】

## 「梅花二輪」 山名美和子

新選組・斎藤一の維新後の軌跡！

## 「明治無頼伝」〈第三弾〉

中村彰彦

〈新連載〉北の大地を駆ける男の夢と
ロマンを描く一大叙事詩

## 「北海道人—小説 松浦武四郎」

佐江衆一

'94年度 歴史・時代小説ベスト10

# 時代小説大全

別冊歴史読本 特別増刊 '95春

PART⑦

## 名手競作！江戸情話

伊藤桂一／早乙女貢／澤田ふじ子／高橋義夫／宮部みゆき

奇謀と軍略によって戦国の動乱を生き抜いた希代の知将の生涯！ 600枚一挙掲載

## 「謀将 真田昌幸」

南原幹雄

**珠玉エッセイ〈私の習作時代〉**

神坂次郎／北原亞以子／永岡慶之助／典厩五郎／もりたなるお

【第19回歴史文学賞佳作！】

## 「梅花二輪」 山名美和子

新選組・斎藤一の維新後の軌跡！

## 「明治無頼伝」〈第三弾〉

中村彰彦

〈新連載〉北の大地を駆ける男の夢とロマンを描く一大叙事詩

## 「北海道人―小説 松浦武四郎」

佐江衆一

'94年度 歴史・時代小説ベスト10

---

別冊歴史読本 特別増刊 時代小説大全 '95春 PART⑦

伊藤桂一
早乙女貢
澤田ふじ子
高橋義夫
宮部みゆき

神坂次郎
北原亞以子
永岡慶之助
典厩五郎
もりたなるお

〈一挙600枚〉
南原幹雄

〈連作第3弾〉
中村彰彦

〈歴史文学賞佳作〉
山名美和子

〈新連載〉
佐江衆一

---

別冊歴史読本

平成七年三月二十四日発行 第二十巻第十二号

新人物往来社

定価一五〇〇円（本体一四五六円）

雑誌69645―89 Printed in Japan

T1069645891502










別冊歴史読本
特別増刊'95春

# 時代小説大全

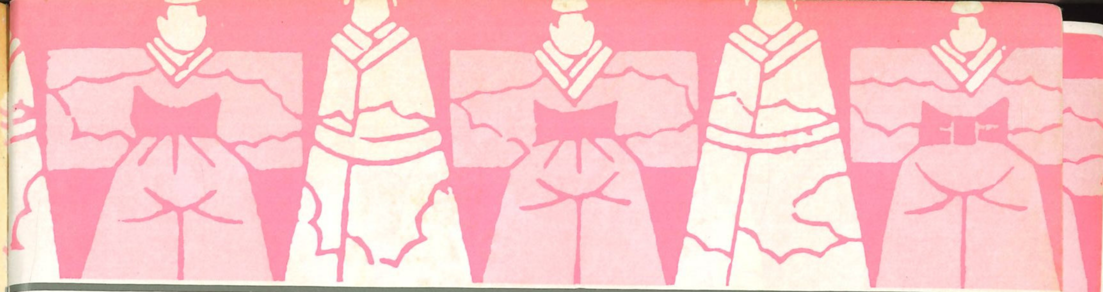
目次

## 珠玉エッセイ〈私の習作時代〉









実力派が放つ歴史長篇！　600枚一挙掲載

# 謀将　真田昌幸

たぐいまれな軍略と奇謀によって戦国動乱の時代を生き抜いた真田幸隆・昌幸父子——。父幸隆は武田信玄に仕えて頭角を現わし、信玄の謀将として活躍。幸隆亡きあと、真田家を継いだ昌幸は、長篠の合戦後、主家武田家の滅亡を予感し、戦国の争覇戦に向けて真田家の自立を決意する…。希代の知将の生涯を描く渾身の歴史長篇！



南原幹雄　208

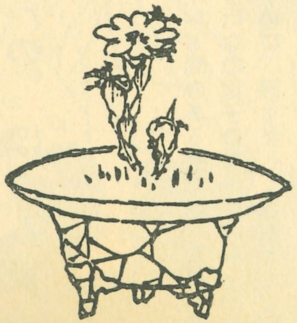
'94年度　歴史・時代小説ベスト10
選者／縄田一男・清原康正・石井冨士弥　195

日本(死)人名事典【作家篇】……古井風烈子　90・122・160

●表紙画／蓬田やすひろ
●本文挿画／熊田正男・西のぼる・田村元・今森洋輔・辰巳一平・文月信・東啓三郎・鴇田幹・宇野亜喜良
●本文カット／永美ハルオ

別冊歴史読本特別増刊 '95春

# 時代小説大全



特集 名手競作！江戸情話

# 外は月夜

伊藤桂一

西のぼる画

日暮れ方に、花売りの吾助が、クメに、
「余り物だけれどね、ミヨちゃんに」
といって、芒に吾亦紅とおみなえしを添えて、届けてくれている。
八月の十五夜の時は、花に月見団子を添えてくれたが、今宵は後の月である。クメは、花を縁先に活けて、月見のたのしみとする。
花をくれての帰りしなに、吾助は、
「空には一点の雲もないし、なんともよいお月見ができますよ」
といったが、クメは、
「うちへ、月見に寄りませんか。ミヨも喜びますし」
と、よっぽど声をかけようかと思ったが、ちょっとばかりためらう気持があって、何度も会釈をして、礼をいうだけで、すませた。
吾助は、まだ四十にはだいぶ間のある齢だが、女房を死なせて、四年になる。女房孝行なのは子のないせいもあったろうが、労咳だったのを、まめに、涙ぐましく看取って、死なせた。
「お上から、おほめにあずかりそうな、親切な亭主ぶりだったね」
と、いうのが、この長屋はむろん、近所近辺の噂だった。
むろん、女房も、いい女房だったし、そんな女房に死なれた痛手は、一生消えないものだろう。
クメが、吾助を誘うのに、ちょっとためらった理由も（そこまでしては）という、遠慮があったからである。
それで、お月見は、七つになる娘のミヨと、ひっそりと仲良くやった。月は、暮れ切ってまもなくすると、クメの、九





尺二間の狭い家の、玄関先からも、よくみえた。
　クメは、ミヨに、
「ミヨ。今夜はきっと、ウサギさんの夢をみるよ」
　といって、寝かせたが、その日の夜更けに、長次が、迷い込んでくるとは思わなかった。
　亥ノ刻（十時）を過ぎたころ、しきりに、戸を叩く音がする。人の来るはずもないので、隣の家か、と思ったが、呼びかけてくる低い声が、
「すまねえ、おれだ、長次だ。助けてくれ。頼むよ。クメ。長次だ。開けてくれ」
　と、戸を、控え目に、叩き叩き、呼びかけてくる。
（なんで、いまごろ？）
　と、クメは、目を覚まして、まず、暗い予感をおぼえ、
（どうせ、ロクなことではないだろう）
　と、そのことは、長次の声の調子でもわかった。
　クメは、起きて、表の戸口までは行ったが、戸は開けずに、
「この夜更けに、何の用ですか。なんの用もないはずでしょう」
　と、それは、はっきりといった。
　たしかに、何の用も、ないはずである。
　妻子をすてて、七年、行方をくらまし、手紙一通寄越さない。
　それどころか、ミヨが、まだ胎(はら)の中にいるというのに、とりすがるクメを、足蹴にして、すてて行った男である。
「おれだ。長次だ。開けてくれ。たのむ。ひと目、娘の顔をみたくてな。お前にも、あやまりたい。たのむ。ひと目でいいんだ」
　長次は、クメに声をかけられ、いきおいずいたかに、くり返す。必死のさまである。
「あんたは、あたしには、もう用はないはずですよ。開けません。帰ってください」
　と、クメは、ピシャリと、いう。
「おれはな。追われている。身体も参っている。ひと目、お前に会って、詫びもいい、娘の顔もみたかった。娘のことは風の噂できいていた。娑婆っ気が起きてな。こうしてやってきた。すぐに出てゆく。追われているんだ。ゆっくりは、してられねえ。たのむ。開けてくれ」
　その声の、せがみ方は、どうやら、尋常でない。
「長次さん」
　と、クメは、とっさの思案で、つめたく突き放した声で、いう。
「お前が、追われていようといまいと、この家には入れたくないよ。ミヨには、父っつァんは死んだ、といってある。でも、追われているし、病気なら、むげにもことわれないから、あたしが仕立仕事をもらっている婆さんの家で、今夜はかくまってもらいな。あたしが案内する。お前の頼みごとは、その上で、ひと晩、考えさせてもらうよ」



　クメは、そういい、戸は開けずに、急いで身仕舞だけは直して、裏口から、こっそりと出て、路地を、表へ廻った。
　長次は、戸口へ、へたり込むようにして、すわり込んでいた。
　その長次を、うしろに従えるようにして、クメは、小船町の家を出て、路地をくぐりぬけ、更け切った道を、堀割沿いに歩いている。
　月あかりは、なるほど皎々(こうこう)と、あたりを照らしている。たしかに、昼をあざむくよう。
　長次の影が、うしろに、くっついてくる。
　よろめき歩きである。口先だけではなく、かなりつらそうな歩きぶりだが、むろん、支えてやる気はない。
「クメ。ちょっと待ってくれ」
　と、しばらく行って、長次が呼びかける。
　みると、道べりに、くぐまり込んで、肩を喘がせている。
「歩けないのかい？」
　と、立ちどまって、クメがきくと、
「疲れと、腹もへってるしな。休み休み、ゆくとしよう。遠いのか？」
　と、きれぎれに、いう。
「もうすぐだよ。親切な婆さんだからね。ひとり暮らしだし、心配はないね」
　クメは、そういったあと、少しあともどりして、長次を、引き起こすように、手を貸す。
　その手に、支えられて、長次は、やっと立ちあがる。そこからは、堀割沿いの道を、クメは、長次を支えつづけて、ゆっくりと歩いた。
　ゆっくりと――歩いて、四、五間行った時、クメは、ふいに、非常な力で、長次を、堀割へ突き落とした。
　激しい水音をたてて、長次は、堀割の中へ落ち、ゆるい流れだが、引き潮だから、それに乗って、流されてゆく。
「死ね、死ね、お前なんか」
　と、クメは、激しく、声に出して叫び、長次は、もがきながら、数間流されたが、一本の杭に、やっとつかまると、
「クメよ、悪かった、ゆるしてくれ。お前が、ゆるしてくれる、というなら、もうそれでいいんだ。おれは、この水の中から、匍(は)いあがる力はない。この手を放して、溺れてゆく。おれが悪かった。かんべんしてくれ。あやまる。お前が、ゆるす、というなら、おれは、それで、この場で死んでゆく。なア、クメよ、ゆるしてくれ」
　月あかりは、水の中まで、照らす。
　その月あかりを浴びて、杭にとりすがった長次が、必死けんめいに、呼びかけるのである。
　嘘ではないだろう。声はむろん、弱々しく涸(か)れているが、けんめいの様子はわかる。
　クメは、堀割のほとりで、長次をみつめた。
　長次の、いまは哀願するだけの眼が、クメを、みつめつづ

ける。その眼が一途に、クメに向けて、なにかを訴えつづけている。
「クメ、クメ、たのむ。ゆるしてくれ」
長次の声が、ふと、弱まった時に、クメは、堀割のふちに、とっさに、膝を突き、手をのべて、杭につかまっている、長次の手をつかもうとする。
「この手に、つかまりよ。お前さん。早く、しっかりとだよ」
いわれて、長次は、さしのべられたクメの手を片手で、つかみ、さらに、もう一方の手を添え、クメは、堀割のへりに身を倒して、互いに引き合うようにして、ようやくに、長次の手を、岸にかけさせた。その長次を、助け助け、クメは、長次を匍いあがらせる。
匍いあがらせると、長次は、濡れ鼠のまま、地面に両手を突き、
「かんべんしてくれ、かんべんしてくれ。助けてくれて、ありがとうよ」
と、何度も、頭を下げつづける。
「風邪を引いちまうよ、お前さん。さあ、あたしと一緒にうちへ帰ろう。なんか食べて、寝て、元気になりな。さあ、あたしにつかまってさ」
クメは、長次を堀割に突き落とす前とは、まったく違った口ぶりで、長次に呼びかけ、長次を支えて、起きあがらせると、半ばは背に負うような支え方で元来た道へ、引き返す。
「婆さんの、とこへは、行か、ないのか」
と、長次は、きく。
「バカだね。うちへ帰るのさ。介抱してあげるよ。――ずいぶんと、痩せちまったねえ、お前さん」
と、クメはいった。
なんとなしにだが、クメは、泣いていたのである。
長次の病気というのは、労咳ではなかったが、もっとタチの悪い、内臓の病気のようで、あまり、食事もすすまない。
助けて家へ連れてきた時、長次は、粥を少々食べ、ミヨにやる落雁を、これも少し、いかにもうまそうに食べ、それでやっと、いくらか元気をとりもどしている。
濡れた着物は、浴衣に着更えさせてやっている。その時、長次は、
「このユカタは、昔の、おれの着ていたもんじゃないか」
と、クメにきいている。
「そうだよ」
「とっておいたのか?」
「すてるわけにもいかないしさ」
それで、長次が浴衣を着て、腹に物を入れている間に、ミヨは、ずっと眠っていた。子供だから、少しぐらいのことでは、眼はさまさない。
長次は、その晩は、死んだように眠り、つぎの日の夕方まで、寝つづけた。よほど疲れていたものだろう。



長次のことは、ミヨに、クメが以前、親切にしてもらった近所の兄さん――と、とりあえずは、そういうことにしておきたかった。ふいに、父親があらわれた、ともいえない。まして、いったんは、死んだ、といってある。
それに、長次は、追われている――といったから、それが事実とすれば、病気の療養もだが、外からはわからぬよう、かくまわねばならない。その場合、ミヨに、どういいふくめればいいか。子供だから、うちに知らないおじさんが来ている、と、嬉しそうに、いいふらすだろう。
また、医師を呼ぶことも、むつかしい。
そんなことを、長次の介抱をしつつ、クメは考えたのだが、深く考えても仕方がないので、とにかく、部屋の隅に、寝かせたのである。
長次を寝かせた翌る朝、ミヨには、長次のことを、親切にしてもらったお兄さん――と教えたあとで、つけ加えて、
「ほかの人にはだまっておいで。お兄さんは病気が重いし、それをいうとみんなに嫌われて、家を追い出されるからね」
と、いいふくめた。ミヨは、素直に、ききわけている。
あとは、なりゆきにまかせるよりほかはなかった。
長次は、元気をとりもどせば、家を出てゆくだろう。夜中に戸を叩いた時の口ぶりや、やつれ方からみても、ここで所帯をもどすような気があったとは思われない。ミヨを、そばにみながら、しばらく暮らせば、気もすむだろう。発つ時は、細々と蓄めてきた金を、旅立ちの餞別に与えよう、と、クメは思っている。それ以上のことはできない。また、してやる気もない。しかし、奇妙に、揺れている気分はある。
長次を助け上げた日の夜のことだが、長次は、ミヨの寝顔をみて、
「いい子だなあ。あした、起きてるのをみるのがたのしみだ。いい子だなあ。なんとも、かわいいじゃないか」

と、涙ぐみ、痩せた手で、涙を払って、そんなことをいいつづけたものだった。

（この人は、世間から追いつめられているかもしれないけれど、自分の病気にも追いつめられている。どっちみち、長くはないかもしれない。とにかく、だいじにしてあげよう）

と、クメは思い、長次を、こっそりと庇いながらに、そのあとは、近所には、なに知らぬ顔を、しつづけた。

ミヨは、毎日ほとんど寝ている長次の枕もとで、その、ふしぎなおじさん――を、みつめていることがあった。

そうして、ひと月たった。

やはり、月のいい晩に、ひょっこりと、死んだ父親の峯造となじみだった、堀江町の親分と呼ばれる、御用聞の鎌吉が訪ねてきた。

「――少々寒いが、いいお月見だなあ。月あかりの下を歩くと、五体が、こう、浄められるような気分になるね」

鎌吉は、戸の外で、

「いるかい？　おれだよ、鎌吉だ。そこらまで来たので、ミヨ坊の顔でもみようと思ってな」

と、声をかけてきたのだ。

それで、なかへ入ると、外の月あかりのことを口にしながら、玄関の上り框に腰を下ろす。

クメは、返事をしておいてから、茶を出す。

「ミヨは、遊び疲れて、寝てしまいました。いま、起こします」

と、クメがいうと、

「そういったまでさ。用事はほかにある。奥で寝ている人のことだ。わしだって、つらいが、役目でな。クメさんよ。世間の眼は早いな。それに、お上だって、人さがしには抜け目がないしな。わしが出なくたって、だれかがここへやってくるが、ほかの者より、このわしのくるほうがいいと思ってな。それで、つらいが、役目を引きうけた。かんべんしな」

鎌吉は、そういったまま、あとはなにもいわない。茶を、ひと口飲む。

「うちの人ですが、よほど疲れ果てていましたので、いたわって、かくまってます。かんにんしてください、おじさん」

クメは、そういい、自然に、手を合わせた。

「かんにん――て、みのがせ、と、いうことかね」

と、鎌吉は、静かに、きく。

「自分じゃなんだか、よくわかりません。ただ、かわいそうになってきてます。はじめは、憎い一心で、堀割へ突き落としたんです。ほっとけば、流されて、死にました」

クメは、逆上して突き落としてしまった、と、あの夜のことを口早に語り、あとは、声をしのばせて、泣き、袖で、眼を拭う。

「わかるよ。いっそ、包丁で、刺したいところだったろう」

と、鎌吉は、いう。

「あいつは、根っからの遊び人だ。口ぐるまに乗るな、と、



わしはあの時、何度もいった。だが、その時にはもう、お前さんは、ミヨ坊を孕んでいたんだな。男女の色ごとに、あまり無粋に口はさめなかったよ。お前さんはわしを、恨みがましい眼でみたもんだし」

「かんにんしてください、おじさん」

「いいよ、昔のことだ。長次には、女は何人もいた。天性の女たらしよ。男振りがよかったしな。役者顔だ。仲間と悪事をして、江戸に住みづらくなって、逃げて、旅芸人の一座にもぐり込んで、三年ほどドサ廻りをしていた。江戸へもどってきて、また悪事をした。それも盗みに入って、人を殺めた。三人組んでやった。二人は捕えた。残る一人が長次だ。身体もこわしていたし、稼いで、いなかへ逃げて、療養しようと考えたのだろう。だが、そううまくはいかない。天罰だ。世の中、甘くはないと知ったろう。――まあ、お前さんには気の毒だし、わしだって、助けてやりたい。でもな、どうにもなるまいよ。南の旦那方をなだめて、わしに任せてもらって、こうして、やってきたのだ。わしなら、こっそり連れ出せるしな。お前さんにも、気のすむまで、別れを惜しませてやれようし」

そこで、また、鎌吉は、茶を飲む。

「おじさん、あたし、覚悟はしてました。長次は自分で、追われている、といっていましたし」

「うん。この世の別れに来たのさ。お前さんも、いいことをしてやった。なんといっても、ミヨ坊の父親なんだからな」

「昔、仲のよかったお兄さん、と、ミヨにはいってあります。ご近所さんにも、ずっと、内緒にしてます」

「バカだな」

と、そこで、鎌吉は低く笑い、

「ご近所は、とっくに、みんな知ってなさるよ。夜中に戸を叩きゃ、ほかの家まで、目を覚ましちまう。ご近所は、知ってるってことを、逆に、お前さんに内緒にしてくれていたのさ。そういうもんさ。そこが、世間のいいところなんだな」

と、いわれ、クメは、あっ――と思い、また、涙ぐんでしまう。

鎌吉は、そこで、

「わしは、半刻ほどして、また来る。長次も奥で、耳をすませて、きいているさ。なにもいわんでもわかっているさ。――じゃアな」

そう、いいおいて、鎌吉は、出てゆく。

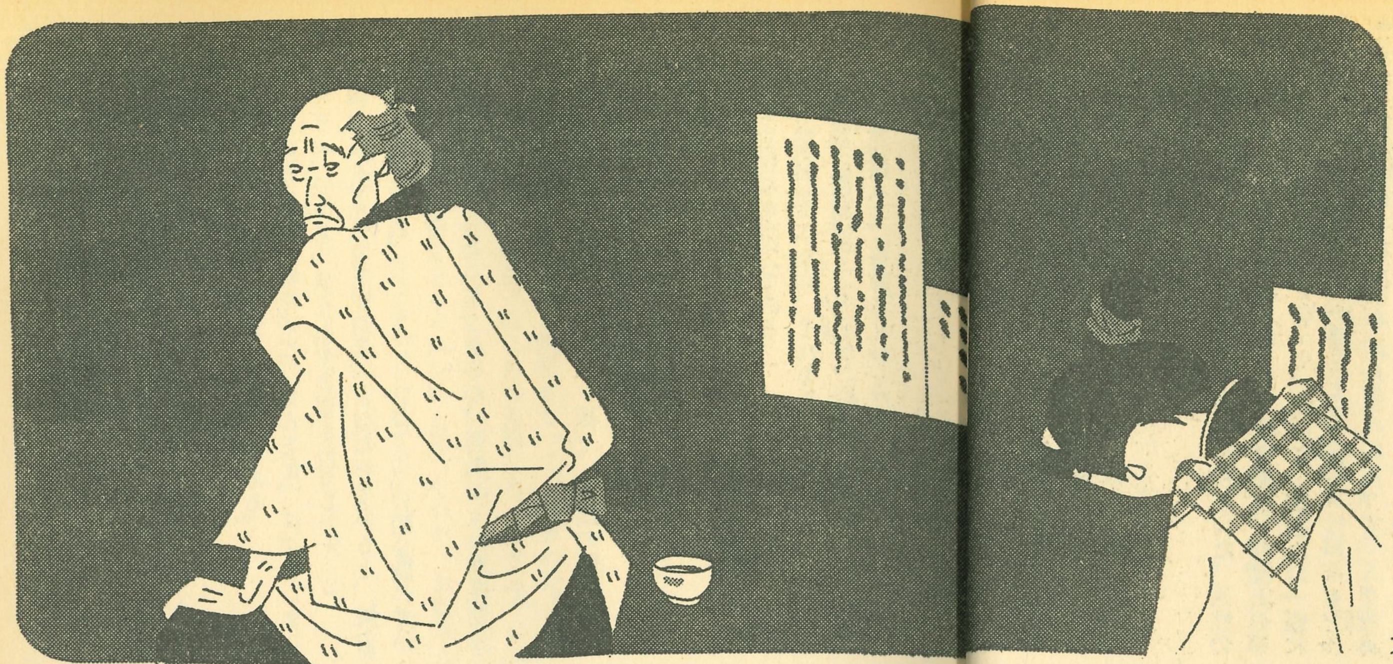
そのうしろ姿を、これも、思わず、クメが手を合わせて拝むと、それがわかったように、鎌吉は、顔半分を、振り向き、

「おれを、泣かせるなよ、おクメ坊」

と、いい残した。

鎌吉が、そのつぎに、クメを訪ねてきたのは、長次がお縄になってから、ひと月余りのちの、夕方のことである。

ミヨに、羽子板を持ってきてくれた。



師走――という月になっている。

両国の広小路には、にぎやかに、羽子板の市が立っている、という。

羽子板をもらって、嬉しそうに礼をいい、外へ、羽子板を見せに飛び出してゆくミヨを見送ってから、鎌吉は、

「あの子には、どういった？」

と、きく。

「おじさんは、遠くへ旅に出た、って、いっときました。やっぱり、父子なんですねえ。あのひとが手をひろげると、すぐに抱かれるんです。血のせいかしらん、と思ったら、どうしても、泣けました」

クメは、しみじみと、いう。

「若いころのあやまちは、だれにもあるもんさ。お前さんが、長次に身をまかせたのは、山王さんの祭の晩だろう。大伝馬、南伝馬からは、賑やかに山車(だし)も出たし、若い奴らは、わっと沸いちまったからなあ。あの晩、孕んじまった娘が、どの町内でも何人もいるだろうよ。だがみんな、それが縁で、いい所帯を持ってる。祭の晩に抱かれて孕むのは、神様の子を孕んだんだ。だから、抱いた女をみじめにしちゃア、神様の罰があたるのよ。――ま、かんべんしな。どうも、齢をとると、口ぶりが説教じみてな」

鎌吉は笑って、出された茶を、ゆっくりと飲み、なにか、ききたがっているクメを、承知しながらも、口をきかない。いいことを、いうわけでは、ないからだろう。

「おじさん。いいんです。あのひとのことを知らせに、来てくれたんですね」

と、クメのほうから、きく。

「どう考えても、どうにもならなかった。なにしろ、仲間の奴らが吐いてるしな」

鎌吉は、いかにも残念そうな、口ぶりになる。

「やっぱり、打首か、なにか――」

息をのむ、クメに、

「やっと、遠島にはした。八丈へだ」

と、鎌吉は、いう。

「ほかの二人は、小塚っ原で、処刑されちまうが、わしは、長次を、同じ町内でよく知っている、仲間に誘われてどうにもならなかった、昔は、町内の世話もよくした、などと、けんめいに話して、減刑してもらった。とはいっても、あの身



体じゃ、島へ着いても、まもなしに、死んじまうだろう。島の空気はいいから、少々は生きのびてもな。ご牢内で、血を吐いていたしな。それもあって、奉行所も、島送りを認めてくれたんだ。八丈の島番所へは、わしも手紙やら何やらことづけて、親切にしてもらうよう、たのんでおくよ」

クメは、ただ、ふかぶかと、頭を下げる。

島番所への手紙に、かなりの金子をつけてやるだろうことは、クメにもわかる。いまは、鎌吉を頼っているしかない。

クメの父の峯造と鎌吉は、子供のころからの遊び仲間だったが、父親はもともと病身で早死にをし、母親がクメを育てたが、父親の長患いのため借財もかさみ、細々とやっていた荒物の店も売り、裏長屋に引っ込んで、母は手内職をして、口を糊した。

クメは、縁戚筋の小料理屋の女中になっていたが、そこで、長次に、目をつけられたのである。

鎌吉は、そのころのいきさつを、よく承知しているのである。クメは、そのころは、罠にかかった鳥のように、長次に夢中になっていたのだ。

「峯の奴は、死ぬ時、黙っておれの手を握りやがってな」

と、あるとき、ふっと、鎌吉のいった言葉を、クメはよく覚えている。鎌吉は、わかった、と、うなずいてくれたのだろう。それで、安心して父親は死んだのだろう。しかし、残された母親も、疫病(えやみ)で死に、クメは、長次にすてられたあと、ミヨを抱えて、不仕合せな暮らしをつづけてきたが、そ

れをみまもる鎌吉もつらかったろう。
(ほんとに、おじさんには、心配ばかりかけてしまって)
と、クメは、いまさらに、申訳なく思う。
「霊岸島へは、おれが見送る。お前さんは、もう、なにも考えないほうがいい」
と、鎌吉は、いう。
八丈送りの船は、霊岸島から出るからである。
「でも、いのちだけは助かって、ほんとに、ほっとしました。おじさん、どうも、ありがとうございました」
クメが、頭を下げ、そのまま、うなだれていると、鎌吉が、ひょっと、気のついたふうに(しばらくの間を置いてからだが)、
「いい侘助が活けてあるじゃないか。吾助がくれた花だろう?」
と、言葉をかけてくる。
近所の建具職人からもらった余り板を、部屋の隅に置いて、その上に、侘助を活けた花瓶が飾ってある。
「冬でも、花は咲くしな。いい花だ」
と、鎌吉は、いう。
畳四半分ほどの板の上に、それにしては立派な花瓶に、侘助のこれも立派な活け方である。
鎌吉は、感心したように、それをみつめている。
「あの花瓶は、備前焼で、火肌が、侘助の花によくうつる、といって、花瓶ごと、吾助さんがくださいました」
「ふーん。そのうち、吾助に、身体ごと、移ってきてもらっちゃどうだね」
と、鎌吉は、明るい口調になって、いう。
「え?」
と、クメが、すぐには意味がつかめずに、きき返すと、鎌吉は、
「吾助と、新しい所帯を持ちな、ということさ」
そこで、そうだろ? ——というふうに、クメの膝を軽くたたく。
「そんな。おじさん」
と、クメは、急にいわれたし、羞じらうしかない。うつむいて、いるしかない。
鎌吉は、いいさとすように、ゆっくりと、いう。
「世間の人は、なにもかも、よくみてるもんだね。吾助が、侘助を活けた花瓶を運んできたことも、この界隈で、知らぬ者はいないよ。吾助は、花屋もやるが、折り折り、寺の和尚さんに、古流の活け方を学んでいるそうだ。世間じゃ、お前さんと吾助が一緒になるだろう、と、まるでそれを信じ切っている。ミヨ坊に、吾助のことを、父ちゃんと呼びな、と、知恵をつけてるかみさんもいるしな。わしだって、そうなってほしい、と思う。お前さんには、なんといっても、長次のことが、ずっと頭に引っかかっていたろう。しかし、それも、片付いた。まアまア、いいようにな。あとは自分のしあわせを考えな。お前さんがしあわせになってくれると、実は



わしも、しあわせになれるんだ」
「おじさんには心配のかけっ放しで、なんのご恩返しもできず、心苦しいばかりです」
と、クメが神妙にいうと、
「心苦しくなくなる法が、ひとつ、あるんだがね」
と、鎌吉は、いう。
「なにか、あたしで、役に立つことでも、あるのですか」
「うん。わかるか?」
「いえ。なにも。あたしには」
「つまり、お前さんが吾助と所帯をもって、生まれた子をひとり、わしにくれるのさ。わしらは夫婦とも、もう五十に近いが子はないし、生まれることもない。気ごころの知れたところから、養子か養女をもらいたいと思っていた。お前さんと吾助の子なら、わしだって、どんなに安心か。吾助にな、先日そういったら、喜んで親分の意に添います、と、はっきり約束した。つまり、おクメ坊と所帯を持ちます、と、いってることじゃないか。わかってくれるな?」
鎌吉は、そういって、立ちかける。
「わかりますけど、でも、そんな、おじさん」
と、思わずそういって、眼は鎌吉を引きとめようとするのを、
「もし、不承知だとすると、これから吾助のところへ寄って、因果をふくめねばならないしな」
鎌吉は、笑い、クメが、両手を頬にあてて羞じらう、それをみて、
「ひとつ、きき忘れていた」
と、いってから、
「水に溺れかけていた長次を、どうしてお前さんは引き上げたんだ。ほっとけば、それでもすんだんだ」
と、きく。
「月あかりの中で、あのひとの眼が、なにか、かがやいて、あたしにせがみました。気がついたら、助けあげていました。だから、なぜだかわからない、って、おじさんにも、いったんです」
「それで、いいのさ。助けなければ一生、重い気分を背に負うて生きねばならないしな。お前さんは、いまは、吾助と一緒に出直せるよ。——じゃアな」
鎌吉は、家を出ると、
「ほう、師走の、氷のような夕月が、もう出てるぜ。ミヨ坊は吾助の家に行っているよ。吾助を、父ちゃん、と呼んでるぜ」
「おじさん」
と、クメが呼びかけた時には、鎌吉は外に出ていて、声だけがきこえた。
「お月さん、寒そうですねえ。この世の人はみんな苦労をしてますよ。お月さん、どうかみまもってやっておくんなさい」
(了)

私の習作時代

# 熊野ひとり塾



神坂次郎

《青春が美しい、だなどとは決して言わせない》と叫んだのは、フランス人の作家ポール・ニザンだが、元飛行兵のひとりとして第二次世界大戦末期、沖縄天号作戦で死んでいった特攻兵や直掩隊の若者、少年たちを身近に見ていたので、戦争で死ねなかった者の後ろめたさや悔恨の思いが五十年後のいまもつきまとっている。

当時、成功率十八パーセント、百死零生の特攻出撃にむかうト号（特別攻撃隊）要員が飛行服の腕に縫いつけた日の丸は〝畏れ多くも天皇陛下がくだされたもの〟だという風説が流れていた。噂はともあれ、やりきれなかったのは外出した特攻兵を世間は、「生きている軍神」だと独り勝手に讃美し、なかには感動のあまり土下座し合掌し落涙する老婆もいたことだ。そんな世間やマスコミが、にわかに掌を返し特攻兵を罵倒するのは敗戦の八月十五日以降である。「特攻くずれ」、それが新聞やラジオや民衆が、戦場から命をひろって帰ってきた若者たちに浴びせかけた声であった。

そうした屈辱感のなかで私は、十八歳で幕をとじる筈であった人生のかわりに、幾百、幾千もの人生を貪欲に生きてやろう、垣間見てやろうという念いが猛然と湧きあがってくるのをおぼえた。演劇ならそれができる。一つのドラマ、一つの人生。『テアトロ』『悲劇喜劇』などの演劇雑誌や、『スタニスラフスキー自伝』、村山知義の『現代演出論』、岸田国士の『現代演劇論』などを手当りしだいに読み漁った。このころ私はシングというアイルランドの劇作家に鼻血が噴き出すほどのぼせあげていた。シングは西の涯、アラン島での創作活動のなかで、荒くれたメヨの漁夫や農民や、浮浪者の群にまじって彼らの裸の姿を凝視め、かれらが語りあう素朴な、訛濃いアングロ・アイリッシュをペンにふくませ、近代演劇の傑作と称われる Ridehs of the sea をはじめ民族性のつよい作品を描きあげている。このシングや、日本での木下順二、阪中正夫など、いずれもコトバに強い関心と愛着をしめした劇作家たちの姿勢が、二つのコト



バをもつ地方人の私に、勁い共感を与えずにはおかなかった。だが、演劇への情熱はあっても生きていくには苦しい飢餓の時代であった。俳優座演出部をはじめ演劇関係を転々し、やがて生活に窮迫し都落ち。故郷に帰って土木の世界に〝顎を預け〟熊野の奥地の野丁場（工事現場）にむかう。当時の主な仕事は、ダイナマイトのライセンスを生かしての発破作業であった。演劇への夢は、こうして挫折する。劇作をつづけるには東京にいて、月に何本かの上演作品を観ていなければ駄目であった。が、小説なら書ける、と思った。これが私の小説の〝習作時代〟の第一歩であった。この熊野三千六百峰の山中の工事場で書いた短編『鬼打ち猿丸』（平成五〜六年、オペラ化上演）が週刊Ａ誌で賞を貰った。長女が生まれた三十歳の春であった。

以来、熊野を中心に紀伊半島の各地の工事場を、トランクがわりのダイナマイトの頑丈な木箱に文学書を詰めこみ、ジープで移動し、小説を書きながらの土木屋暮し二十四年。そのころの作品集『黒潮の岸辺』（中公文庫）に司馬遼太郎氏が〝解説にかえて〟として筆を寄せてくださっている。

《（略）このとき日常の話をされるのだが、現場員への愛情というのが体ぜんたいににじみ出ていて、その愛情が、ときどき紀州の人間風土に転移したりする。まれに小説の話もされる。「田舎者が、うんと田舎臭い小説を書いた」といわれるような小説を書きたい、と言われたとき、私は感動をおぼえた。（略）神坂氏が小説を書きはじめてから、もう十年以上になる。べつに小説を書いて浮世をどうこうというつもりはなく、事務所や飯場の片すみで書きつづけて、それが自分に似たひとびとに読んでもらえれば幸いだとおもっているひとである。しかしながら、氏の作品の愛読者は私の知るかぎりでも多い》

地方にいて独り細ぼそと筆を走らせている者にとって肝がふるえるほどの嬉しさ、望外の喜びであった。

演劇への恋々の思いは、中公新書『元禄御畳奉行の日記』を発表した後、前進座の依頼で三時間半の上演台本を書きあげ、音楽いずみたく、作詞岩谷時子、客演有馬稲子という豪華なもので、東京、名古屋、大阪と七十六回公演し、年来の渇きを癒すことができた。

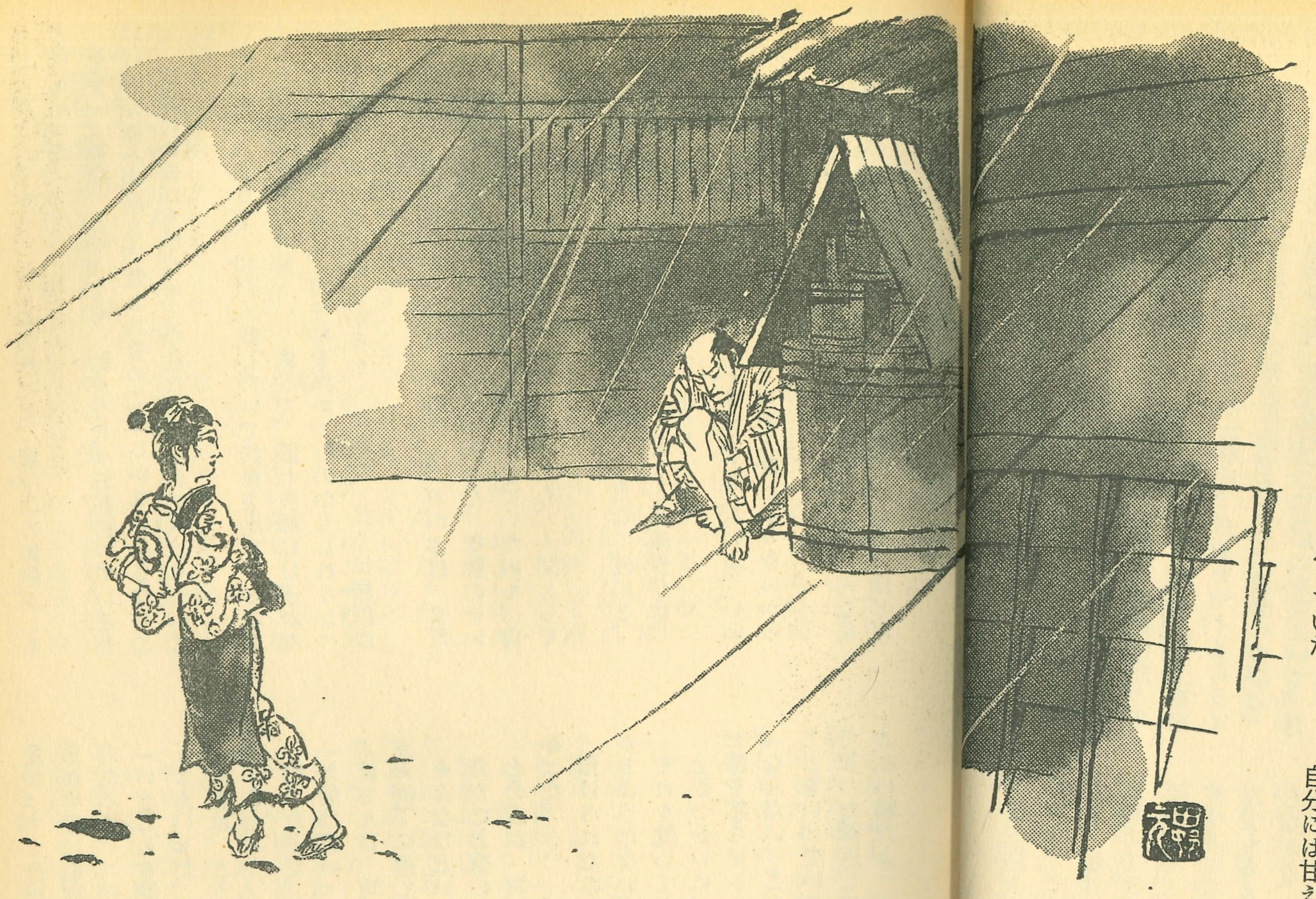
私の創作活動の原点であった、沖縄天号作戦で散った特攻の若者たちへの誄詞も、敗戦後三十七年ぶりの旧特攻基地、知覧行を機に、三年がかりで書きあげ、富士山麓の文学者の墓の墓碑銘に、私はその書名『今日われ生きてあり』（新潮社・新潮文庫）を刻みこんだ。文学者の墓は、その作家の代表作を一つ刻むことになっている。

〝私の習作時代〟は、この日おわった。

特集 名手競作！江戸情話

# 深川しじみ河岸

早乙女 貢
田村 元画



一

おさわは両親の顔を知らなかった。物心ついたときから、深川の船宿で働いていた。七つ八つのころから、台所仕事や拭き掃除、洗濯までやらされた。働くことそれ自体は、何とも思わなかった。そうするのが当り前のことだと思っていたから、辛いことも苦しいことも、黙って小さな胸に受け止めていた。ただ、冬場の寒さと水の冷たさで、いつも手足にひびやあかぎれが切れて、痛いのがたまらなかった。

同じ歳ごろの女の子などが母親に甘えている姿を見ると、悲しくなることがある。

自分には甘える相手がいない。

船宿「上総屋」の女将おのぶは、養い親で育ての親だった。

「お前の両親に頼まれたのでねえ」

と、度々、言ったが、その両親が何処にいるのかも、父母の名前も教えてくれなかった。

おさわのほうでも、聞くのは悪いと思って質問をしたことがない。教えてくれ



ないのは教えたくないのだと思うだけの分別が、幼いうちからついていた。

（あたしは貰いっ子なんだ、貰いっ子だから）

我儘は言えない立場だと知っていた。

汐見橋の下で時たま見かけるしじみ取りの男の子も、寒風の中で辛そうだった。見ているだけで掘割の水の冷たさが、こちらの手足をも凍えさせるようで、

（あの子も貰いっ子なのかしら）

と、思った。

永代橋を小網町の方から渡って来て、右へ折れて深川の相川町。街なりに左へ曲ると、正源寺の門前へ出て、福島橋を渡るとすぐに八幡橋。

富岡八幡の門前の通りで、一ノ鳥居が見える。

正しくは永代寺門前町。深川で一番華やかで賑やかな通りだ。その一ノ鳥居をくぐってすぐの畳横丁の露地をぬけると蛤町の河岸へでる。

蛤町に架けられた橋だから、蛤橋。名前ばかりでこの辺り蛤なんかとれない。

しじみがとれるから、しじみ河岸だと、羅宇屋の源爺がしたり顔にいった。
船宿「上総屋」といっても、釣舟を大小五艘持っているだけの客の休み場所も六畳と八畳の二間しかない小さなもので、河岸にいまにも倒れそうな危なっかしさでへばりついていた。
船頭も三人きりで、客の人数しだいで釣舟を出す。おのぶと伜の藤七に女房のお徳という家族で、藤七夫婦には子がなかったから、おのぶは、おさわを預かったのかもしれなかった。船頭は、やくざな連中が多かったから、長くは居付かず、始終、入れ替っていた。
愛情というものはなかったが、それでも、おのぶは、まだしも、お徳に比べれば、優しいところがあった。年齢のせいもあるかもしれないが、孫のような気持がしていたのも、自分が育てたからだ。血はつながっていなくても、人間としての情はある。
だが、そのおのぶが、流行のコロリで、呆気なく死ぬと、気の弱い藤七を尻に敷いて、お徳が、女将として威張りはじめた。
「いままでとは違うんだからね、甘えるんじゃないよ、いいかえ、あたしゃ、のぶ婆さんのようにお人好しじゃないからね」
葬式の晩から、お徳は、おさわに厳しくいった。そんなに言われるほど、甘えたおぼえはないし、おのぶがそれほど可愛がってくれたとは思えなかったが、お徳にしてみれば、自分が今度は船宿の女将になったのだとはっきりさせたかったのだろう。
「いうことを聞かないと、ほうり出すからね」
ともいった。
「お前は、どうせ拾った子なんだから、また表へほうり出すだけさ」
拾った子だ、と聞いたのは、そのときがはじめてだった。
「お前は貰いっ子なんかじゃない、捨て子だったんだよ。のぶ婆さんは、可哀想だから言わなかっただけさ。お前は摩利支天横丁に捨てられていたんだ、鬼っ子だよ」
そんなひどいこともいわれた。
ただのお徳の意地悪さだけではあるまい。
おのぶが、両親の名前を明かさなかった理由が、それでわかった。
預けられたのなら、名前くらいはわかる。捨て子なら、わかりようはない。
それを聞いても、おさわは涙も出なかった。
上眼づかいに、凝っとお徳を見つめていて、それがまた、お徳を怒らせるのだ。
「なんだい、この子は。なんてえ目つきだ、あたしゃ本当のことをいっているんだからね。捨て子は捨て子らしく、育てて貰った御返しに一所懸命働くんだ。いいかえ、働かなきゃお払い箱だよ」



藤七は、おさわが虐められているのを見ても、女房をたしなめることも出来ない気の小ささで、酒を飲んだときしか、自分を取り戻せない。祭りの晩に大酒を喰らって、木場の堀に落ちて呆気なく死んだ。
後家になってから、お徳はおさわに辛く当るようになった。いくら虐めても、かたちの上では母娘ということになっているから、近所でも口は出せない。それをいいことに、朝から晩まで、おさわをコキ使う。雑巾ならとっくにスリ切れているという表現があるが、おさわの若い体力も消耗して寝込んだりすると、お徳は同情するどころか、
「病気は気からだ、怠け者だから罰が当るんだ、おさんはおさんらしく、働きゃいいんだ」
と、口汚く罵って蒲団を剥ぎ、箒を押しつけるのだった。
おさわをお徳はおさんと呼び捨てにする。おさんはお三とも書くが、下婢の代名詞になっている。むろん、それを意識しての意地の悪い呼び方だった。
そんなお徳だから、近所の子のような小遣い銭も、おさわは与えられなかった。
食事も残飯しか与えられず、人並みにおさわも買い食いをしたい。その気持が、富岡八幡のお賽銭のこぼれを拾うことをおぼえた。
御祭礼や富クジで混雑したときなど、遠くから銅銭を投げるから、銭箱のまわりに落ちるものがある。それを素早く拾うのだ。
悪童たちも、何人かいて奪い合いになる。乱暴な男の子に殴られた事も何度もある。
殴られようが威されようが、おさわには、他に小遣い銭を得る道はない。お徳の眼を盗んで、祭礼には賽銭拾いに走っていった。

## 二

悪童たちばかりではなかった。富岡八幡の社僧や男衆にとっ捕まったこともある。
「この賽銭どろぼうめ、女のくせにふてえやつだ」
と、髪をつかんで曳きずりまわされたこともある。
おさわには、お徳をはじめ、世間の誰もが敵に見えた。あたしには味方はいない、と小さいときから諦めていた。他人は誰も助けてくれないのだ。そう悟ってしまえば、哀しいことはなかった。
そんなおさわにも、二人だけ、味方がいた。
十二の春、富クジで沸いている境内で、お賽銭を拾っていると、悪童数人に囲まれて、鐘楼のところまで連れてゆかれた。
「やい、おさん、帯を解きな」
いっぱし大人ぶったかれらは、洟水を垂らしながらでも、この道だけは早熟ている。
「賽銭どろぼうは、お仕置きをして構わねえんだ」
「尻を剝いてやらあ」

もう少しで裸にされるところを、見知らぬ女が助けてくれたのだ。
「お前たち、男だろ、女の子を虐めるんじゃないよ」
といって、財布から銭を摑み出して、一人一人渡した。
身なりから見ても、そう裕福そうではなかったが、世の中には、同情深いひともいるのだと、おさわは嬉しかった。
「どこの子か知らないけど、もう、こんなことするんじゃない、いいかえ、これァ少ないけど、小遣いをあげるから」
一朱銀を貰った。少女にとっては、莫大なお金で、おさわは、臍の緒の入ったお守り袋に入れて肌身離さず持っていた。その臍の緒だけが、捨てられたときに、首に掛けてあったということだった。
おさわは、その中年の女の顔をいつまでも憶えていた。
もうしちゃァいけない、と忠告されたにも関わらず、おさわが賽銭箱に吸い寄せられるように富岡八幡へ行ったのは、唯一の財産の一朱銀をお守り袋ごと、お徳にとられてしまったからだった。
いつも首にかけていたのだが、紐が古くなっていて切れたのが、身八ツ口から落ちた。
「お見せ、何だいそりゃア」
と、お徳にひったくりとられ、中を改められた。
「この一朱はどうしたんだい、あたしの巾着から盗んだんだろう」
と、ひどいことをいわれた。
一朱失くなれば、わからないはずはない。船宿の収入は大して多くはないし、お徳は吝で、いつも銭勘定をしている。巾着から一朱銀が消えていて、気がつかないお徳ではない。
どんなにわけを話しても、理解するようなお徳ではなかった。
お賽銭を拾っていたなんていえないし、見も知らぬ――居所も名前も知らない女の人から貰ったのだといっても、誰も信じるはずがない。
言っても無駄だと思うと、おさわは無言で通すしかなかった。
「強情な子だこと。こいつは、あたしが預かっておくからね」
と、守り袋ごと巻き上げられてしまったのだ。
(行っちゃアいけない、もう拾うのはやめにしよう)
と、思いながら、おさわは、用事で門前町にゆくと、ふらふらと境内へ入っていった。
お祭りでなくても、参詣の客はいつも多いのである。富岡八幡といえば、深川を象徴するお社で御利益もあるらしい。いつも善男善女の参詣が多く、お賽銭箱の下や脇に、銅銭が落ちているのも珍しくはなかった。
おさわは、かたちばかりに手を合わせながら、そのあたりに視線を走らせた。
石階の下に、銅銭が見え、おさわは、あたりを見まわしてから、ちょいとしゃがむふりをして、つまみ上げた。



三歩と歩き出さないうちに、ふっと、男が寄って来た。
「やい、何を拾った。この女、ふてえやつだ」
たちまち数人の男たちがとり囲んだ。
どうやら、見張っていたらしい。おさわは、本堂裏に連れてゆかれ、男たちの好色な眼がぎらつくのを見て戦慄した。
男たちは、境内の掃除をしている者たちで、住職の眼が届かないところで、博奕に興じたりしているのを見たことがある。こういう荒くれたちは身よりのうすい女たちが参詣にくるのを狙っている。おさわは、大人の眼から見れば、まだ少女だが、中の一人が洩らした言葉は、
「こいつでも裸にすりゃ、おんなだぜ」
運がいいというのか、その様子を見て近づいて来た男がいた。
「また妙な真似をしていやがる」
といったのは、この連中が始終やっていることを知っていたのだ。
「いい加減にしねえか、まだ子供じゃねえか」
男は藍唐桟の着流しに白献上の一本独鈷をきりっとしめた一見して遊び人風の若者だった。
寺男たちが、こそこそと去っていったのは、この男の啖呵と、懐中に手を入れたところが匕首を握っていると見えたことだ。
かれらが立ち去ると、男はにやりと笑って、
「早く帰んな」
と、笑顔を見せた。
皓い歯が、おさわには眩しく見えた。
「しじみ河岸の上総屋だろう、知っているぜ」
と、いってそのまま、おさわから離れた。
釣舟を出したことがあるのか。おさわの顔を知っていたのだ。
そのときは、それっきりだったが、それから何度か、町で見かけた。
すらりとした姿勢ときびきびして、いなせな感じが、少女には男らしく見えた。
何度目かに、名前を知った。
「百本杭の十蔵」
というのが、その男の名前だと、左官屋の小僧が教えてくれた。
「あの十蔵あにいは凄いんだ、匕首で長脇差と斬り合っているのを見たことがあるぜ」
と、眼をキラキラさせながらいった。
何を職業にしているのかわからない。地回りらしいが、ただのやくざというのとは違う。
「むかしは木場の中乗りだったそうだ」
と、門前の蕎麦屋の出前持ちがいった。
その百本杭の十蔵の姿が、ふっと見えなくなったのは半年くらい経ってからで、どこへいったのか、誰も知らなかった。

おさわは、淋しさを知った。男への憧れの心が、虚しくなったことが、哀しみを誘った。居なくなって、十蔵への思いが――それは少女の憧れの範囲だったかもしれないが、孤独な少女には、唯一の心のときめきだっただけに、哀しみは尠くなかった。

三年あまり経って、おさわが十六歳になったとき、十蔵と再会した。

それも船宿に来たのだ。おさわが河岸で洗濯をしているところを、店から裏へ抜けて来た男が踏板を渡りながら振り返っていった。

「おさわといったっけ、大きくなったな」

あの皓い歯が同じだった。爽やかな笑顔に見えた。

「あら、十蔵さま」

と、思わずいって、おさわは立ち上った。男の視線が、裾をからげた脚に注がれたような気がして赧くなった。

「いい女になったぜ」

それだけいうと、屋形船へ入っていった。

おさわは、洗濯物を手にしたまま、佇んでいるだけだった。思いがけなかったし、再会した喜びだけでなく、そんな情のある言葉をかけられた喜びで、胸が躍り、時間の経つのもわからなかった。

「何をぼんやりしているんだい、お客さんにお茶を持ってゆくんだよ」

と、お徳のかん高い声に、弾かれたように、勝手口に駆けこんだ。

客は十蔵のほかに二人いた。五十がらみの商人風の男と、十蔵の同年輩で三十歳前後の大名屋敷の中間というような感じで、変った組み合わせだった。

おさわが茶を運んでから仕出し屋の寿司をとる。お徳にいわれたように、お酒は何本にしますかと聞くと、十蔵が微笑しながらいった。

「そうか、忘れていた。てめえが飲めねえもんだから、つい気がつかねえ、万屋さんは強いんでしたかねえ」

と、商人ていの男に聞いた。

銀の細身の煙管でうまそうに紫煙をなびかせていた男は、頰のたるんだ丸い顔をますます丸くして、指を開いてみせた。

「万屋さんは四本だそうだ、源助は底なしだな。だが、海上だ、今夜はちっと荒れそうだから控えるがいい。まあ、二本くらいにしておきな」

「では、あの六本でいいでしょうか」

「そうしてくんな」

十蔵はまた微笑を向けた。

それだけでおさわはまた赧くなった。きれいになったな、といわれたことが、耳に灼きついた。

酒が飲めないというのも嬉しかった。釣って来た魚を料理させて、べろんべろんに酔っては少女のおさわに戯れかかる男たちに腹立たしい思いを何度もさせられていたし、酔って



河岸から落ちる騒ぎもあったし、中には死んだ者もいる。

男たちのそうした姿を見て来たおさわの眼には、酒を飲まない男は清々しく見える。

「どうしたんだい、おさん、馬鹿に嬉しそうじゃないか」

と、お徳が不審な眼を向けたほど、おさわは浮々していた。

## 三

好きになれば、もっと深く知りたいと思うのは自然の成り行きだ。百本杭の十蔵がどういう職業なのか、どんな暮しなのか、そして独り身なのかまで、気になってくる。おさわは十六歳。このころの女では、もう子持ちもいる。

それとなく、船頭の治平に聞くと、

「変な客だったぜ、あの三人は得体が知れねえ、でも静かなもんさ、ひそひそと話をするだけでね」

飲んで騒ぐ客は、船頭も迷惑することが多い。静かで祝儀をくれる客が有難い。

その次におさわが会ったのは、十日ほど経ってからだった。

風の強い日で、お徳に酒を買いにやらされた。

客のいない夜はお徳は手酌で五合も飲む。そんなときが一番嫌だった。おさわをじりじりといびって肴にする。時には、物をぶつけたり、平手で撲ったりする。

「拾ってやった恩を忘れるな」

二言目にはそれだった。

一升徳利を抱えて、おさわは仲町の三河屋に走った。風に雨が混って、吹き降りになりそうだった。

畳横丁から河岸へ出る角の天水桶の陰に、うずくまった者がいた。

酔っぱらいかと思った。

こわごわ近寄ってみると、気配を感じたように顔をあげた。眼が合った。あっと思った。

「おさわか」

あの笑顔が、すぐに歪んだ。

「ちょっと、怪我をした。な、なあに、掠り傷だがな」

掠り傷というには痛そうだった。

「あの、お医者さまを……」

「いいんだ、大したことァねえ。それより、ここにいちゃ、まずい。人目につかねえところでちっと横になってりゃ大丈夫だ、手を貸してくれ」

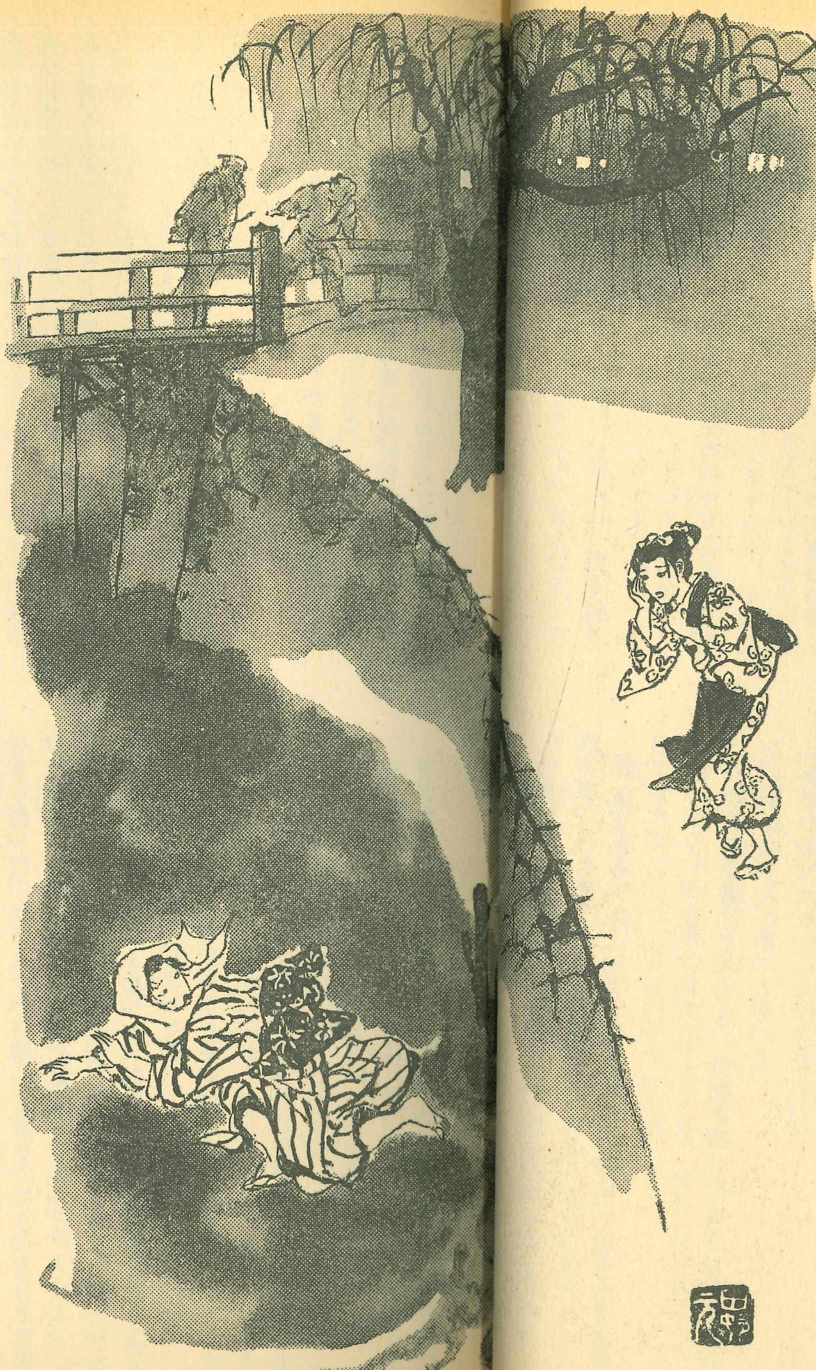
一升徳利を傍へ置いて、身を起すのを助けると、十蔵は、

「有難てえな、こんなところで、おさわに会うとは、天の助けってことだ」

といって、歩きだそうとしたが、一人ではやはり苦しげ

だ。近くの石置場まで、おさわは支えていった。徳利は、十蔵が提げて、
「おれが酒飲みでなくてよかったぜ、好きなやつなら飲まれてしまうところだ」
十蔵さまが好きなら、どんなことをしても、飲ませてあげたい、とおさわは思った。
大島町に久庵という医者がいる。知り合いだから、呼んで来てくれないか、と、十蔵は頼んだ。
遠回りになるのを承知で、おさわは一升徳利を抱えて走った。久庵に知らせてから、上総屋に帰ると、恐れた通り、お徳は目を三角にして、
「どこで油を売っていやがったんだ。お前、まさか色気づいて、サカリのついた犬の真似をしたんじゃあんめえな」
と毒吐いた。
酔ってくると、お徳は眼が据わり、妙に青くなって来て、饒舌も独り言になってくる。そうなると、誰かれの区別がつかなくなる。おさわは今夜ほど、その時のくるのが待ち遠しかったことはない。
漸く脱け出して石置場に急ぐ間、まるで、あいびきをする娘の気持ちだった。
あんなところで夜を過しては、お腹も空くだろうとおさわは、握り飯をこっそり作って、香の物と竹の皮に包んで持っていった。
「おう、おめえか。久庵は来てくれたぜ」
と包帯をした大腿部を見せた。布に血がにじんでいる。
匕首で刺されていた。内臓ではないから、大事にはなるまいと久庵は言ったが、歩くのは困難だった。
「いい娘だな。恩に着るぜ」
「いいえ、そんなこと。女将さんがやかましいから、お世話できないんです、済みません」
「なあに、これだけして貰えば充分だ。久庵のくるのが遅かったら、血止めができなかったろう」





こんな石置場などでなく、なぜ家に戻らないのか。十蔵の家はどこにあるのかを、むろんおさわは知らなかった。
(あんな大怪我をしているのに)
医者の久庵に聞いてみれば、何か知っているかもしれないと、帰り道も考えた。
翌日もおさわは、いそいそと出かけた。石置場は舟便のために河岸にあって、広大だから、石の陰に身を潜めておれる。
だが、何度か石置場に通えば、人目にも立つ。
帰り道に大島橋の上で、あの女に会った。
いつぞや八幡さまの境内で、悪童どもに虐められていたのを救ってくれたひとだ。
「おさわだったねえ、おぼえているかい」
「ええ、忘れはしませんわ、助けて貰ったんですもの」
「あら、そんなこと、いいんだよ。でも、お前も大きくなったよ。ほんとにきれいになったねえ」
懐かしそうに見る女の眼は、ずっと昔からの知り合いのような気さえした。
「十六になるんだねえ、もう立派な大人さ。でもねえ、男には気をつけなきゃアいけないよ」
「ええ」
「男ってやつは、みんなろくでなしの、女を食い物にするものさ」
「……」

「あの百本杭の十蔵は気をつけた方がいい」
「えっ、でも」
「いいえね、あたしゃ何の関わりもないけどさあ、あの男には、気をつけた方がいい」
その忠告も、いまのおさわには無理だった。
不満げなおさわに、とどめを刺すように女はいった。
「こんなこと言いたかないけどさ、町奉行所のほうから目をつけられているんだよ、関わり合いになっちゃいけない」
その言葉が、いつまでも耳に残った。
どうして、そこまで忠告するのか。行きずりの者なら、他人の身の上がどうなろうと、知ったことではない。おさわは、その女の名前を知りたいと思った。
(何をしているひとかしら)
濃い化粧と派手な着物と、いつも河岸や橋の上でぶらぶらしているところから見ると、男に春をひさぐ、卑しい女なのか。
「ああ、あのお松かえ、あれなら、もうずっと、そこらで商売をしている女さ。そうさねえ、もう七年か八年やってるんじゃねえか」
尾張屋敷の門番が教えてくれた。
御三家の尾張屋敷といえば、大したものを想像するが、ここは幾つもある尾張家の下屋敷の中でも、納屋のようなものなのだろう。それでも大名屋敷に違いないから門番がいる。
七、八年というのが、確かかどうかわからない。あるいは五、六年かもしれない。人の記憶などいい加減なものだ。
それにしても、百本杭の十蔵の悪い評判は、おさわには残酷な話だった。おさわは、その夜、上総屋の納戸で、忍び泣いた。

## 四

親切なひとだと感謝していたが、十蔵のことを悪くいうのは、お節介がすぎると思ったおさわも、源助と呼ばれたあの時の男の死体が木場の汐見橋であがってから、お松の言葉を肯定するしかなかった。
源助は脇腹に匕首が突き刺さったままだった。下手人の詮議が取沙汰されて、深川では、どこへいっても、その話で持ちきりだった。謎は人々の好奇心を掻き立てる。自分に被害が及ばないから、高見の見物の楽しさである。
源助が小名木川の銀座御用屋敷の中間だったことがわかってから、騒ぎは大きくなった。数日前に御用屋敷で吹き立ての一分銀の御用箱が紛失している。二百五十両入りの物で、盗難は内密にされていたが、源助殺しで、明るみへ出てしまったのだ。
お徳は噂を聞くと、船頭やおさわに口禁めした。
「誰に聞かれても、源助なんて男知らないというんだよ、うちの舟を貸したなんて金輪際、いっちゃいけないよ」
犯罪との関わりを恐れるのは、誰しものことだ。
おさわはひとり小さな胸を痛めた。十蔵が盗ッ人だと思いたくはなかった。だがあの事件と関わりがあったのは明らかだった。その十蔵は久庵の家に匿まわれていた。石置場も危うくなって来たのだろう。
いつもの場所に姿が見えなかったので久庵の家に安否を尋ねにいったのだ。
「お前さんならいいだろう、こっちへおいで」
と、裏の小部屋に伴われた。十蔵は行燈の下で黄表紙を読んでいた。
「お前か。あのときは世話になったな。傷も大分よくなった。お陰さまだ」
よかった、と心から思った。源助のことも御用屋敷も、二百五十両も、十蔵とは関係ない。犬に咬まれたようなものだ、と石置場でも笑っていた十蔵だったが、そうなのだ、その傷さえ治ればいい。あたしは恩返ししただけなのだとおさわは心にいった。
しじみ河岸に帰ると、また、お松に会った。
夜の河岸で男の袖を引くのは御法度だと知りながら女たちは河岸に立つ。生きてゆくためのそれが職業だった。
「あれほどいったのに」と、お松は、おさわを呼び止めていった。
「もう、近づいちゃいけないよ、源助って男も、十蔵が殺ったんだろ、どうせお縄になる。そんな男に惚れちゃいけない」
「――いいんです、あたし」
お節介はよしてくれ、といいたかったが、その言葉は口にできなかった。
「よかァない。悪い男に惚れちゃァおしまいだ」
「いいんですよ、あたし」
どうせ捨て子の自分なのだ。どっちに転んでも、この人生に善いことなんかありゃしない。せめて、一人だけでも好きになった男と、少しの間でも楽しみたい、それだけが望みなのだ、とおさわは訴えたかった。
「まだわからないのかい、これだけは言いたくなかったけど、聞いておくれ、このあたしがいい見本さ。これでも昔は、柳橋で左褄をとっていた。福松という名前で出ていたのさ。自分の口からいうのも何だけど、売れっ妓で、そりゃァ鳴らしたもんだ。そんなあたしが」
と言いさして、ふっとお松は口を噤んだ。
そこへ、なかまの夜鷹が小走りにやって来た。
「お松さん、逃げなきゃァ、狩込みだよ、早く。すぐに岡っ引がくるよ」
「ああ、わかったよ」
「さ、早く。下手をすりゃ、吉原で一生奉公だ」

その女はちらっと、おさわを見ただけで、また小走りに立ち去った。

お松が、口を噤んだのは、その女が駆け寄って来たからではなかった。言わでものことを口にしかけたからだったのか。だが、どうしても言わねばならない。

「ねえ、おさわ。わかっておくれ、男に惚れるのはしかたがないさ、悪い男に惚れないことよ、それだけが、それだけが、お願い、それだけ忘れないでおくれ。それだけが、このお……このお松がいえることだよ」

「どうしてあたしに」

おさわは、はじめてのように疑問がこみあげた。お松の眼に光るものがあった。どうして、この女の人は、あたしなんかに、そこまで忠告してくれるのだ。お役人が捕えにくるというのに、早く行けばいいのに。

「ね、わかっておくれ。幸せにしてあげられないあたしの、たった一つのお願いだ、ねえ、忘れないで」

町奉行所の同心と岡っ引らしい男たちが、向う河岸を急ぎ足にやってくるのが宵闇の中で見えた。

お松はちらっとそっちを見た。そして、はじめておさわの二ノ腕をしっかり摑んだ。

「いいこと、聞いて。忘れるんじゃないよ、ね、このお松のたった一つの願いだから。誰のためじゃない、お前のためだよ。わかっておくれ」

わかったというまで、お松は去らないだろう。おさわはあわてた。

「行って。お役人が来るって。早く」

「わかったかい、聞いておくれ、ね、ね」

岡っ引がこっちを見た。指さすのが見えた。

お松は、そっちを見た。が、動かなかった。

「うんといっておくれ、おさわ。あんな悪い男には、もう近寄らないって。ね、いまからなら、まだ遅かァないんだよ、ね、そして、せめて、まともな人と一緒になってくれ。貧乏でもいい、まともならいい。まともに生きてさえいれば、お天道さまは見捨てやしないんだ、ね、わかって」

滂沱と涙が頰を伝わった。おさわの眼からも涙が吹きこぼれた。

役人たちが橋を渡って、急いでくるのが見えた。

おさわは、頷いた。お松の涙に汚れた頰が弛んだ。ほほえみが顔中にひろがった。

「有難うよ、じゃア、あたしは。もう、……もう会うことはないかもしれないけど」

「逃げて」

役人たちが走って来た。

お松は身を翻した。裾から白い脚が宵闇の中で躍った。

「逃げて、おっ母さん」

おさわの叫びが夜の河岸にかん高くひびいた。それは、この十六歳になるまで一度も出したことのない大きく切ない叫びだった。

（了）

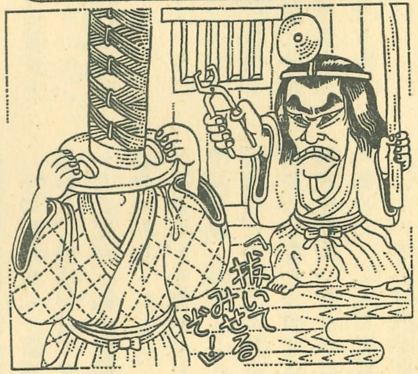


時代小説・時代劇にみる

# おもしろ余話

縄田一男

## 名台詞・きめ台詞




### 「たとえ天下の平安を遮ってまでも――」

場所はとある道場――。今、自分が木剣で打ち殺した相手の死体に一瞥もくれず、白頭巾の剣客竜胆月之介に向って、「抜け！」と叫ぶ一人の剣鬼・蒲生鉄幹がいた。

「抜かぬ」と月之介。

「何故だ？」

「この竜胆月之介のきさらぎの剣は天下の平安のためのみに抜くのだ」

「抜け！」

「抜かぬ」

ややあって鉄幹、ニヤリと笑うと

「そうか……抜かぬ者を斬るわけにはいかんな、だがな、俺は貴様のいう天下の平安とやらを遮ってまでも、必ず抜かしてみせるぞ、その刀――」

と言い捨てて去っていく。

いやもう、大変な殺気である。月之介＝市川右太衛門、鉄幹＝近衛十四郎、五味康祐の『如月剣士』を映画化した昭和三十年の東映映画「きさらぎ無双剣」（監督佐々木康、脚本結束信二）からの一場面である。

永田哲朗の名著『殺陣――チャンバラ映画史』（教養文庫）に記されている様に、近衛十四郎は一度スターの座を失った者は返り咲くことはできないというジンクスを破って奇跡的に主役の座にカムバックした役者である。そのハンディを「乗り超えて主演スターの地位を得ることができたのは、やはり彼の剣技以外にはない」のは衆目の一致するところだ。

それだけに東映の重役スター、市川右太衛門を向こうに廻し、一歩も譲らぬ気迫を見せ、しかも、思想的に悪に加担するというのではない、あくまでも、主人公と剣の勝負がしたいがために天下の平安すら平気で覆さんとする――こうした剣以外には考えられぬ生きざまを示す剣鬼というのは、正しく近衛十四郎という役者の生き方がそのまま台詞になった様で、強く見る者の心を揺さぶるのだ。

映画はこの後、ラストの大チャンバラで獅子奮迅の立ち廻りをしている右太衛門のところへ近衛が駆けつけ、

「抜いているな、その刀」

と、本当にうれしそうな顔をして一戦に及ぶ――あァ、良きかな、剣豪スター、近衛十四郎の一幕である。

## 私の習作時代

# ジャリの会



北原亞以子

昭和四十四年、私は第一回新潮新人賞を受賞、同時に小説現代新人賞の佳作にも入選した。幸運なスタートだった。が、以来二十年間、平成元年に泉鏡花文学賞を頂戴するまで、鳴かず飛ばず、沈みっぱなし立ち止まりっぱなしの状態がつづいたのである。

普通だったらやめている筈とよく言われるが、私の場合、先輩や友人、それに担当編集者にめぐまれたのだろう。同情されるような、つらい二十年では決してなかった。

さて、当時、新潮新人賞への応募は、同人誌の推薦が必要だった。私は文学地帯という同人誌に入っていたが、入会したばかりで、とても推薦をうけられるとは思っていなかった。ましてや受賞など思いもよらず、広告写真スタジオ勤務の合間をみて、同人誌へ投稿するつもりの時代小説を懸命に書いていた。

だが、落選ときまれば、やはり淋しい。私は書き上げた小説を同人誌へ送る気になれず、たまたま書店で見た小説現代の新人賞に応募した。

その数日後に、新潮新人賞の候補作となった知らせが届いた。候補作はすべて新潮に掲載されることになっていたのだが、同人誌経由であったため、私への連絡が遅れたらしい。

しかも、小説現代に応募した時代物も最終候補に残り、結局、佳作として掲載されることになった。当時の編集長だった三木章さんに聞いたところによると、笠原淳さんと私が受賞——と決まりかけたところで、有馬頼義先生が待ったをかけたのだという。

「しめた、二人だと思ったんですけどねえ」

と三木さんは残念がってくれたが、新潮編集部の田辺孝治さんは「よかったあ」と私の落選を喜んだ。

田辺さんを喜ばせた有馬先生から葉書をいただいたのは、それからまもなくだった。石の会に顔を出してみないかという、お誘いをうけたのである。高井有一、後藤明生、早乙女貢、五木寛之、色川武大、渡辺淳一などという錚々たるメンバーの名前を見たら、誰だって有馬邸へ素っ飛んで行くだろう。

私も無論そうした。笠原淳さんが私と同時に入会、その後、立松和平、中山あい子、萩原葉子などの皆さんも入会したが、むずかしい文学論などは決して出ぬ会だった。

高井有一さんは「高井お伝」などと言いながら有馬夫人のつくったおでんをおいしそうに食べていたし、五木寛之さんの食欲もすごかった。何の会だったか西荻窪のレストランに集まった時、笠原さんと私がフルコースの料理をもてあましている時に「パン、おかわり」と言ったのは今でも覚えている。

渡辺淳一さんには、飲みに行こうと誘われたことがある。その頃の渡辺さんはほっそりしていて、私はひそかに胸をときめかせたのだが、狙いは私のそばにいた某女流作家だった。何のことはない、私はあてうまだったのである。

若かった。早乙女貢さんだって、伊豆へ向かうマイクロバスの中で、はしゃいで窓ガラスを割ってしまったことがある。石の会ではなくてジャリの会だと、有馬先生が苦笑いしていらしたのも無理はない。

が、五木さんは「青くさいと言われてもね、たまには唾の飛ぶような熱弁をふるうことも必要なんですよ」と、よく言っていた。渡辺さんは「雑誌はみな新聞に広告をのせる。妙な区別をせずに書くこと」と教えてくれたし、早乙女さんは「二百歳くらいまで生きないと、いい小説は書けないよ」と健康を案じてくれた。中山あい子さんには、しばしば晩ご飯をごちそうになったものだ。沈みっぱなしでものんきな顔をしていられたのは、こういう先輩達にかこまれていたからにちがいない。

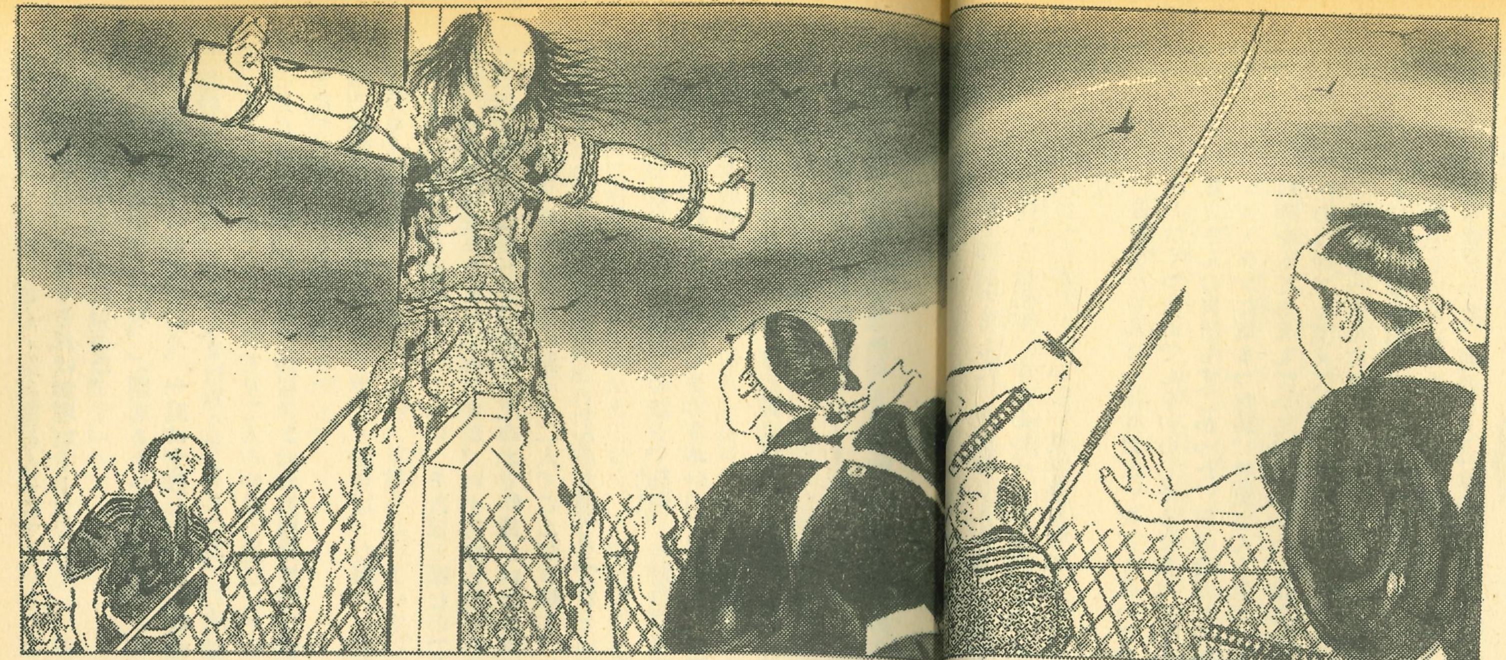
話はかわるが、当時、すぐ近くに福岡徹さんという作家がいた。この方に誘われて、ある同人誌の会合に顔を出したのだが、その時、赤いワイシャツを着て、一人で喋りまくっている若者がいた。

聞けば、同人でも何でもなく、お姉さんの結婚式に出席するため、留学中のアメリカから帰ってきたところ、同人のお父さんが出席する会合をのぞいてみたという男であった。後の芥川賞作家、高橋三千綱である。

彼とは一の会という勉強会をつくり、同人達の作品を批評しあうというようなこともやったが、口はわるいわ気は短いわ、幾度泣かされたかしれやしない。それでも、お互いお金もなかったのによく飲んだし、こちらこそジャリの会だったかもしれない。

が、みっちゃんは、さっさと芥川賞を受賞、笠原さんもそのあとを追った。愚図な私がまず鏡花賞を受賞した時、二人は私のいないところで祝杯をあげ、色紙に「北原亞以子バンザイ」と書きちらしたらしい。

ほかに、私のへたな原稿につきあわされつづけた新潮社の川野黎子さんについても書きたかったが紙枚がつきた。次の機会にゆずることにする。



特集　名手競作！江戸情話

# 朧夜の影

澤田ふじ子　文

文月信　画

一

東の遠くに八坂の塔が見えている。

梅の花がさかりをすぎた頃から、京の東山はどことなく春めいた色をうかがわせてきた。

日脚の長くなった太陽が、魚籠を左手に下げ、釣り棹を肩にした土田宗兵衛の背に、まだ射していた。

「ご隠居さま、うちにせめて魚籠なと持たせとくれやす」

宗兵衛の後ろにつづき、与力屋敷にもどろうとしている老僕の松吉が、たびたび宗兵衛の魚籠に手をのばした。

「松吉、おぬしはこのわしを、ご隠居さまご隠居さまと気安く呼んでくれるが、わしは五十七、おぬしは六十一歳になるわなあ。四つも年上のおぬしから、老人呼ばわりはないのとちがうか。屋敷でご隠居さまといわれるのは、仕方がないとしても、外に出たら主従のへだてはないことにいたそうと、つい先日、二人で話し合うたばかりやないか。大堰川で釣り上げた諸子は、すべてわしのもの。少々はおぬしにもくれてやるが、獲物を入れた魚籠を下げて屋敷にもどるのは、釣り好きには誇らしいもんなんや。ほっといてくれへんか」

七年前まで、東町奉行所の与力をつとめていた土田宗兵衛は、若い頃から屋敷に奉公し、いまも実直に働いている松吉のもとめを、ぞんざいな口調で断わった。

町奉行所与力の職は、嫡男又十郎にゆずっていた。

又十郎は三十一歳、四年前に与力見習いを終え、お役目にもいよいよ脂ののる時期だった。

与力屋敷には、又十郎の妻佐世と六つになる又一郎がいる。松吉は婿夫婦といっしょに、屋敷内の別棟に住み、婿の藤市が又十郎の下働きについていた。

宗兵衛と松吉の格好は、ともに茶筅髷をゆい、渋柿色のふくら袴に筒袖。袖なし羽織をつけ、ちょっと見には、とても主従とは思えなかった。

「そうでございましょうが、旦那さまのつぎにはご隠居さま、そうそう気楽に宗兵衛はんなどとは呼べしまへんでえ。主従は主従。うちのためを思うてくれはるんどしたら、やっぱりどこでもご隠居さまといわせとくれやす。そのほうがどれだけ気楽かしれしまへん」

「なるほど、おぬしがもうす通りかもしれん。わしらお互いに余命いくばくもない身、もはや身分のへだてなく生きてい

きたいと思うて、松吉はん、宗兵衛はんの仲でまいりたいと考えたのじゃが、やはりそれは無理か——」

かれは嘆息するようにいった。

「へえ、それは無理も無理。ご隠居さまから松吉はんといわれるたびに、うちは胆が冷え、一度に十日も二十日も寿命がちぢむんやないかと、ほんまは思うてますねん。ご隠居さま、もうここらあたりで、年寄り二人の仲良し遊びはやめにしときまひょうな。うちはご隠居さまのお気持だけで、十分幸せにすごさせてもろうてます」

松吉は宗兵衛の横にならんで歩き、四角ばった顔に、哀願の微笑をうかべた。

「そうか、おぬしが寿命についていい、それほど頼むのであれば、二人の仲をまたもとにもどすか。いずれにしたところで、わしとおぬしはともに寡夫、死ぬまで仲良くいたさねばならぬわなあ。今日は魚籠の諸子を二人でこんがり焼き、この間入手いたした信楽の徳利で、しんみり酒でも飲むといたそう」

「そうしとくれやす。釣りたての諸子で熱燗、お屋敷にもどったら、すぐ七輪に火をおこしますさかい、ご隠居さまは諸子を料っとくれやす」

熱燗の言葉にうながされ、宗兵衛は魚籠を松吉の手にゆだね、足を急がせた。

釣り棹は肩にしたままだった。

天竜寺村や嵯峨野村などから、京の町へ野菜や薪を売りに出かけていた村人たちが、荷車をひいたり空籠を背にしたりして、下嵯峨街道をもどってくるのに、たびたび出会った。

重い疲れが、かれや彼女たちの顔ににじんでいた。

何人かが魚籠に目を止めて行きすぎていった。

下嵯峨街道は鷹ヶ峰のほうから流れ下ってくる天神川（紙屋川）をこえ、つぎにお土居の濠にかかる小橋をわたり、洛中の二条口につづいていく。天神川の東に沿い、豊太閤が築いたお土居が、ところどころにいまも残っていた。

天神川をわたりお土居の濠までは、わずかな距離。だが周辺に人家がなく、春とはいえ、あたりは蕭殺とした風景だった。

京や嵯峨野に住む人々は、日没がすぎると、あまり下嵯峨街道を通りたがらない。まわり道になっても、北の丹波街道をえらんでたどった。

なぜなら、下嵯峨街道の天神川の畔に、「西土手処刑場」がもうけられていたからであった。

西土手処刑場は、昼間でも陰気で、広い敷地のなかには草がぼうぼうと茂り、卒塔婆が無数に立っていた。

鴉が一斉に飛びたつこともあり、ここを通りすぎる人々は、いつも足速になった。

「きのう磔にされた罪人の首が、西土手の入口にさらされているそうや。気味悪いこっちゃ」

のび放題の髪と髭、口から血をしたたらせた生首を胸に思いうかべ、婦女子や小心者は、足をすくませるのである。



京都にはこのほか、東の東海道筋の粟田口に処刑場があり、罪人の処刑は公開、あとのさらしも同様であった。

京都所司代や東西両町奉行所は、犯罪には厳罰主義でのぞみ、掏摸でも捕えれば、多くを処刑にしていた。

さらには牢死者でも、磔、さらし首にするという残酷な方法で、治安の維持につとめているのであった。

多くの犯罪者を処刑してきたこの西土手の入口までくると、宗兵衛は刑場と墓場をかねたそこから、下嵯峨街道に男がすっと下りてきたのに目を止め、急に足の運びをゆるめた。

男は街道に姿を現わすと同時に、それまで脇にかかえていた菅笠を素早くかぶり、あご紐を結びながら、お土居のほうに歩いていった。

色のあせた紺色のもも引き、筒袖に草履をはいていた。

骨格ががっしりしていた。

「ご隠居さま、いかがしはりました」

松吉は宗兵衛の異変にすぐ気づき、かれに小声でたずねかけた。

紺色のもも引きの男は、たくましい背中を二人にむけながら、足速に歩いていくものの、どこか背中がわびしげに見えた。

「松吉、おぬしあの男に見覚えはないか」

「あの男に見覚え。はて、うっかりしてましたさかい、男の顔なんか見てしまへんけど。ご隠居さま、いったいなんどす。いうておくれやすな」

再び足を速めた宗兵衛に、松吉はたずねかけた。

「確かあれは、千本釈迦堂近くの石屋で働いている石工。九蔵とかもうす男のはずじゃ。なんの用があり、西土手の刑場にやってきたのやろうなあ」

「どこか怪しいのどすか——」

「ああ妙じゃわい。そもそも普通の人間なら、なるべく立ち寄ろうとしない場所に、堅気の者がわざわざやってくるのが、変やないか。それに西土手から街道に姿を現わしたときの物腰が、わしには人目をはばかるように見えたわいな」

「ご隠居さまにいわれましたら、顔は見いしまへんどしたけど、それだけは確かどした」

松吉は宗兵衛にあいづちをうった。

九蔵はすでにお土居の濠をわたりきっていた。

夜には寂しくなるとはいえ、二条のお土居口はさすがに京七口の一つ、洛中への道筋の両側には、腰掛け茶屋や餅屋が店を開け、客の姿もちらほらうかがわれた。

「九蔵とやらが、どんどん行ってしまいますがな。うちがいそいであとをつけまひょか」

気をきかせたつもりで、松吉は宗兵衛の顔を仰いだ。

「ほっておいたらええのや。あれの住んでるとこぐらい、はなからわしにはわかっているわい」

宗兵衛は妙な胸騒ぎをおぼえながら、松吉にそっけなくいった。

長年、町奉行所の与力をつとめていただけに、役職から退(の)いたとはいえ、かれの第六感にぴんとひびくものがあったのである。

「お客はん、ご道楽のおもどりどすか。お疲れさまみたいどすさかい、一服、お茶でも飲んで休んでいかはらしまへんか——」

腰掛け茶屋の土間から、前掛けをしめた三十すぎの男が表に現われ、愛想よく呼びこみの声をかけてきた。

「あほたれ、なにがお疲れさまみたいじゃ。わしも供の親父も、まだ年寄りではないわい。釣りも単なる道楽ではないぞよ」

宗兵衛は釣り棹をふりかねない勢いで、茶屋の男に叱咤をあびせつけた。

陽がだいぶ西に傾きかけていた。

二

「父上さま、またお酒でございますか——」

組屋敷の表で、又十郎のもどりを迎える佐世の声がひびいてすぐ、又十郎が離れの隠居部屋に姿を見せた。

差し料は佐世に預けてきたらしく、脇差だけだった。

「そなた、わしに苦情をもうしているのか」

宗兵衛は又十郎にまあ坐れといい、つぎに微笑して皮肉った。

「いいえ、そんなつもりはございませぬ。いくら肴(さかな)がうまいとはいえ、一昨日、昨日、今日と御酒を召しつづけておられては、お身体によくないのではないかと、案じただけでございます」

「なるほどそうか。わしの身を心配してくれてありがたい。嫁の佐世にも同じようにいわれたわい。だがな又十郎、わしとて無性に酒で気持をまぎらわせたいときもある」

かれはぐっと盃をほし、空(から)のそれを又十郎に突きつけた。

「ありがたくいただきます」

又十郎は宗兵衛に一礼し、両手で盃を受けた。

「なにも改まって、わしに礼などいわんでもええのとちがうか。この伏見の銘酒は、そなたが奉行所からいただいてまいる扶持でもとめておる」

「また嫌味をもうされまする」

盃に満たされた酒を一気に飲み、又十郎は宗兵衛に笑いかけた。

このとき東町奉行は安藤駿河守、西は中根摂津守。所司代は松平紀伊守が任じられていた。

東西両奉行は一カ月交代。所司代の指図をうけ、京の市政、治安の維持、社寺の監督、京の近くに散在する幕府直轄領にまで目を配っていた。

与力は二十人、同心は五十人。与力の扶持は二百石、同心は十石三人扶持。あたえられている組屋敷は、百六十坪ほどの広さがあり、土田家の台所はかなり豊かであった。



「父上さまが酒でも飲み、ご自分の気持をまぎらわせたいともうされるのは、一昨日、西土手の処刑場で九蔵を見たゆえでございまするか——」

「いかにも、それやわいな。わしは役職から退いて七年にもなるが、暇にあかせてあれこれ思い返すにつけ、案じられる事態がうかんでくるのよ。在職中、自分が手がけた事件だけでなくても、どこかに権勢を笠にきて民(たみ)を痛めつけたり、また恐ろしいことに、無実の人間を処刑したりしたのではないかと、心の中で検索しているのやわい。それで千本釈迦堂脇の石屋で働いている九蔵について、調べてくれたんやろうなあ」

宗兵衛は返された盃を再び又十郎にわたし、諸子の塩焼きを盛りつけた伊万里(いまり)の皿を、折敷(おしき)のまままかれの膝許にすすめた。

大堰川は丹波の水を集め、嵐山を流れ下っている。嵐山のあたりで桂川と名を改め、やがて淀川に合流していくのである。

ここの清流で釣り上げた諸子を、宗兵衛は松吉に仕度させた七輪の火で、一匹ずつこんがり白焼きにして塩をふりかけた。

諸子の味をそこなわないためだった。

「この諸子、昨夜も賞味させていただきましたが、なかなかの美味。頂戴いたします」

「さような世辞はどうでもよい。九蔵についてわかったことを、早うきかせてくれへんか」

余裕を装っていたが、本当のところ、宗兵衛はじれていた。

又十郎の足音をきいたときから、心が急(せ)いていたのであった。

与力の職を辞すしばらく前に起った事件、それは単純な掏摸(すり)だった。だが犯人として捕らえられた西陣の機(はた)職人磯次は、きびしい御定法にしたがい、晩秋の日、市中引き廻しのうえ、西土手の処刑場で磔、さらし首にされていた。

自分が取り扱った事件ではないものの、東町奉行所の総与力（目付）から、検死見届役の一人にくわえられていた宗兵衛にとり、当日の光景はいまでも忘れられないほど凄惨なものだった。

磔に処せられた磯次は二十三歳。小川通り御池上ル西側にかまえられた牢屋敷から、市中引き廻しのため、裸馬にのせられ出発した。そして西土手の処刑場に到着するまで、かれは泣きわめいて無実を叫び、最後にはついに錯乱。無理矢理、太柱にしばりつけられ、槍をつけられたのであった。

死際、磯次は傷の痛みから正気にもどった。

「わしは無念でどうにも死にきれへん。わしの調べに当った役人、わ、わしをこんなめにあわせた奴を、あの世から呪ったるわい——」

かれは口から血泡をとばし、検分のため床几に腰を下ろした宗兵衛たちにむかって叫んだ。

灰色の獄衣に血泡が垂れ、それは胸と腹部から吹き出した

鮮血と一つになり、かれの両足を濡らしつづけていた。
「う、うらんだる。お、おまえらもじゃ。み、みとれよ。う、うわっ、いい気味じゃ。わ、わしは、おまえらを地獄に引きずり落したるぞ。お、おぼえてやがれ――」
処刑に馴れた者たちが、何度槍をつけても、磯次はなかなか息絶えなかった。
二度、動きを止め、かれはがくっと首を垂れたが、すぐまたかっと目を剝いた。血に濡れた蓬髪をたてがみのように大きく振り、槍をつけた下役にも呪いの言葉をあびせつけた。
最後は喉をぜいぜい鳴らし、うひひひっと気味悪い笑い声をたてた。
「ご検死役さま――」
処刑執行人の一人が、恐怖で顔を引きつらせ、床几に腰をすえた宗兵衛たちに訴えた。
かれらは四人、いずれも気持をひるませていた。
西土手の処刑場に集った見物人の間から、恐れをまじえたどよめきが湧き上がった。
処刑の検死見届役は、黒紋付に袴をはき、白い鉢巻きと襷をしめている。
「お上のお調べに落度はない。往生際の悪い奴じゃ」
このとき宗兵衛の横にいた堀部右衛門が、床几からすくっと立ち上がり、腰に帯びた黒鞘の差し料をぎらっと引き抜いた。
このまま見すごせば、人心を不安に落し、町奉行所の権威をそこなわせる。罪人に苦痛をあたえつづけることもはばかられた。
「右衛門どの、いかがいたされるのじゃ」
宗兵衛と同役の小杉彦助が口走った。
「知れたことでござる。仕手の四人が怖じ気づいたとなれば、われらが罪人を斬らねばなりますまい」
堀部右衛門もさすがに目を釣り上げてつぶやいた。
かれは顔を蒼白にさせ、刀を下段にかまえ、土中に掘り立てられた太柱に一気に近づいた。
「おに、白襷をかけた鬼がきたがな」
血泡を垂らし、きれぎれにつぶやく磯次にむかい、右衛門は両腕を高くかかげ、素早く刀を一閃させた。
「ぎゃっ――」
まだ気力を残していたのか、磯次は驚くほど大きな悲鳴を迸らせ、今度こそがくっと首を落し絶命した。
処刑場に集った見物人たちは、このむごたらしい推移を眺め、粛然として声もなかった。
だが右衛門が血に濡れた刀を懐紙でぬぐい、それを黒鞘に納めると、誰からともなく慟哭の声が湧き、同時にどこに隠れていたのか、数十羽の鴉が一斉に叢から飛びたった。
不気味な声で鳴き、空で輪をかいて飛びつづけた。
「鴉など気にいたすことはない。わしたちはお役目をまっとういたしただけじゃ」
堀部右衛門は鴉の群をにらみ上げ、宗兵衛と小杉彦助に同



意をもとめた。
「右衛門どののもうされる通りじゃ。およそ罪を犯した者は不逞の輩。図太い奴は、どこまでも冤罪をいい立ておる。あの磯次も相当の曲者。七本松の賭場に七両もの借金をこしらえていたほか、女癖も悪かった。調べに落度のあろうはずがござらぬ――」
小杉彦助は右衛門にだけではなく、自分をも励ますつもりで声高にいった。
処刑された磯次には、新町今出川上ル東新在家町の裏長屋に、年老いた両親と十七歳になる妹がいたときいていた。
かれは西陣の織屋で高機職人として働き、三人を養っていた。
処刑の原因となった犯行は、その年の夏、祇園祭の当日、四条室町の雑踏のなかで起った。
仲間とつれだった下京の酒問屋「但馬屋」の息子佐之助の懐中から、磯次が財布を掏り取ったというのだ。
自分の懐中から財布を掏られたことに、佐之助はすぐ気づいた。
「すり、掏摸や――」
かれはまわりの人ごみにむかって叫んだ。
多くの人々がぎょっとし、一斉に佐之助に視線が集った。
「こんなかに掏摸がいてる。気いつけや――」
佐之助の目が、このとき数間先で狼狽する男の姿をとらえた。
それが不運にも磯次であった。
「みなさん、あ、あの男をつかまえておくれやす。わしの財布を掏り取ったのは、あの男にちがいありまへん」
かれの叫びで、仲間のほか近くの人々が、磯次を逃さないようまわりを取り囲んだ。
「掏摸やなんて、わしはなんにもしてしまへんがな」
町の番所に引ったてられてきた磯次は、急いで現われた東町奉行所の同心に、強気で抗弁した。だが身体を改められ、かれの懐から、佐之助がもっていた縞の財布が発見されたのだ。
「金に困っていたてまえは、あのとき、もし自分が腕ききの掏摸やったら、この人ごみのなかで、そこそこ稼ぐことができるのになあと、考えながら歩いていたんどすわ。そやさかい、佐之助はんが掏摸やと叫ばはったとき、思わず狼狽しただけどす。てまえの懐中にあった財布は、ほんまの掏摸が、逃げるためとっさにてまえの懐中にねじこんで行ったものにちがいありまへん」
磯次は奉行所の取り調べに対し、必死に弁解した。
だがこれは、現場で取り押えられた掏摸の常套文句。七本松の賭場に七両の借金があり、暮しにも窮している磯次のいいわけにはならなかった。
「何卒、きちんと、きちんと調べとくれやす。賭場に借金があったかて、てまえは人さまの懐中を狙うほど根性は腐ってしまへん。家にはてまえが面倒をみなならん両親と、病弱な

妹がいてます。お慈悲をかけて、どうぞしっかり調べてもらいとうおす」
　奉行所も冤罪を恐れていた。
　かれの取り調べは慎重に行われたが、状況証拠はかれを不利にするものばかりで、ついに磯次に磔の刑が課せられたのであった。
　当時の検察は、強盗、放火、殺人ら強悪犯だけではなく、掏摸や金銭詐取などの事件にも、厳罰主義で対していた。
　元禄二年（一六八九）の犯科帳を例にとれば、一年の総入牢者は百四十一人。うち三十一人が死罪、二人が牢死、二人が流罪、百六人が釈放となっている。
　この処刑率は、時代が下がってもさして変らなかった。
　それだけに与力や同心たちは、自分が手がけた事件を心に止めている暇もない。宗兵衛が致仕前の事件をふと思い出したのは、磯次の最期があまりに凄惨だったのと、西土手の処刑場で偶然にも、顔見知りの九蔵を見かけたからだった。
　だがなによりいまのかれには、往時を思い返すだけの余裕が生じていたのである。
「父上さま、昨日から今日にかけ、九蔵についてわたくしが直々に調べましたが、意外なことが判明いたしました」
　又十郎は自分から銚子に手をのばしていった。
「それはいかにも思いがけのうございました。これをどのように計らうか、父上さまともゆっくり思案いたさねばなりませぬ。心の重い相談でございますわい――」
　かれのつぶやきが、宗兵衛の首をすくめさせた。
　石を打つ音がいくつもひびいてくる。
　鋭い鑿の音が千本釈迦堂のまわりの空気をゆるがせていた。

## 三

　千本釈迦堂は、正式には大報恩寺という。
　北野釈迦堂とも呼ばれ、真言宗智山派。開創は鎌倉時代の承久三年（一二二一）、求法上人義空が、「猫間中納言」として知られる藤原光隆の従者岸高から、寺地の寄進をうけ、小堂をかまえたのが始まりであった。
　以来、足利尊氏や豊臣秀吉などから庇護をうけ、応仁の乱のほかたびたび戦火をこうむりながらも、篤信の人々に支えられ、京市中最古の木造建築物として寺格を高めていた。
　千本――の名は、往古、このあたり一帯が、京都東山の鳥辺野や嵯峨野とならぶ葬野であったことから起った。蓮台野といい、また〈さみし野〉とも呼ばれた。
　京都のなかで台地となるここは、時代を追い、死者を葬る卒塔婆が、何千本となく立てられては朽ち、朽ちてはまた立てられたさまを、地名にとどめているのである。
　宮本武蔵はこの地で、吉岡清十郎と雌雄を決したとも伝えられ、江戸期には、人家が軒をつらねるようになったが、それでもどこか寂しげな風情をまわりにただよわせているのであった。



　千本釈迦堂の近くには、大小の寺院が甍をのぞかせていた。
　それだけに石屋も多く、遠近から石を刻む音が、間断なくきこえている。
　鋭い音をひびかせているのは、宗兵衛が西土手の処刑場から出てくるのを見かけた九蔵であった。
　いまかれが聖観音像を刻んでいる石屋「阿波庄」の仕事場の、その東には、瑞雲院がかまえられている。同院は土田家の菩提寺。それゆえ宗兵衛は、九蔵を遠くから眺め、なんとなく見知っていたのだ。
　九蔵は筒袖に紺のもも引き、しかもそれは洗いざらしたもので、髪も後ろでたばね、無造作な格好であった。
　ひたいにびっしり汗をにじませている。
　うっすらのびた髭面だけを見ると、かれはただの石工ではなく、修験者か武芸者にも似て、気安く近寄りがたい雰囲気をそなえていた。
「いま阿波庄の仕事場で鑿をふるっている九蔵は、ほんまに変った奴、四十近くになりながらまだ独身。酒をまったく飲まないばかりか、博打も女子遊びもせんと、ただひたすら仕事をして、阿波庄の親方に重宝がられておりますのじゃ。変った奴ともうすのは、三十すぎまで九蔵は、まわりの誰からも爪弾きされる極道者、それは手に負えぬ男でございました。あの仕事場で喧嘩は始終、お二人の前ではばかられますが、一時は盗みでも働いているのではないかとの噂すらございました。ところがある年の秋から、それがぱたっとやみ、全く人が変って無口となり、仕事一筋の石工になりましてなあ。あんなならず者が、どうして真人間、しかもどはずれた精進まがいの暮しを行なうようになったのかと、この界隈では不思議がられておりますのじゃ。九蔵が住んでいるのは、仕事場の脇の掘っ建て小屋。裏に自分で板庇をもうけ、

竈をこしらえ、煮炊きをしておりますわい。阿波庄からの給金を、あ奴はいったいどうしてしまうのやら。石工仲間では、誰かに貢いでいるとか、法外な賭場の借金を返しているのだとか、あれこれいわれておりました。だがいまではもうとやかくもうす者もおりませぬ。九蔵が石を刻む姿は、まさに大願をもって苦業にはげむ行者のそれ。この拙僧すら、自分が念仏を唱える声と九蔵の鑿の音のどちらが尊いとたずねられますれば、九蔵の鑿のほうがありがたいと答えて、はばかるものではございませぬ。近ごろでは九蔵を名指しして、やれ観音さまを刻んでほしいの、地蔵さまをお願いしたいのとの依頼があいつぎ、阿波庄も九蔵には、墓石や灯籠など刻ませぬそうでございますわい。それにしても土田さま、親子おそろいで、またなんで九蔵のことなどおたずねになりますのじゃ」

瑞雲院の住職法専は、方丈で宗兵衛と又十郎にむき合い、生まじめな表情でたずねた。

瑞雲院は浄土宗知恩院の末寺。文禄三年（一五九四）に創建され、本尊の阿弥陀如来立像は有髪、俗に児如来といわれ、洛中の「名弥陀」の一つにかぞえられていた。

「いや、さしたる理由があったわけではない。かねがね誰からともなく、九蔵の評判を耳にしていたゆえ、墓参のついでにふと口にしたまでじゃ。それほど名高い石工なら、父母の菩提を弔うため、わしも尊像を一体刻んでもらい、当院に寄進させていただいてもよいなあ。どうじゃ又十郎――」

宗兵衛は少しあわてていいつくろった。

「さようでしたか。九蔵の噂は町奉行所にまでとどいているのでございますな。若い頃はともかく、九蔵も果報な奴でございます。人間は誰もが、九蔵のようにありたいものですなあ」

法専は冷めた湯呑みを、膝許から取り上げていった。

「ご住持どの、本日は突然お訪ねいたし、ご迷惑をおかけいたしました。さればこれにておいとまいたしまする」

「いやいや、父子おそろいでよくぞおこしくだされた。又十郎どのもご立派になられ祝着じゃ。久しぶりにお目にかかり、重畳でございました」

「ご老師さまもご壮健でなにより、組屋敷の近くにおいでの折は、是非とも当家にお立ち寄り、父の話し相手になってあげてくだされ」

三十をすぎただけに、又十郎の挨拶にそつはなかった。

法専は瑞雲院の四脚門まで見送りに出てきた。

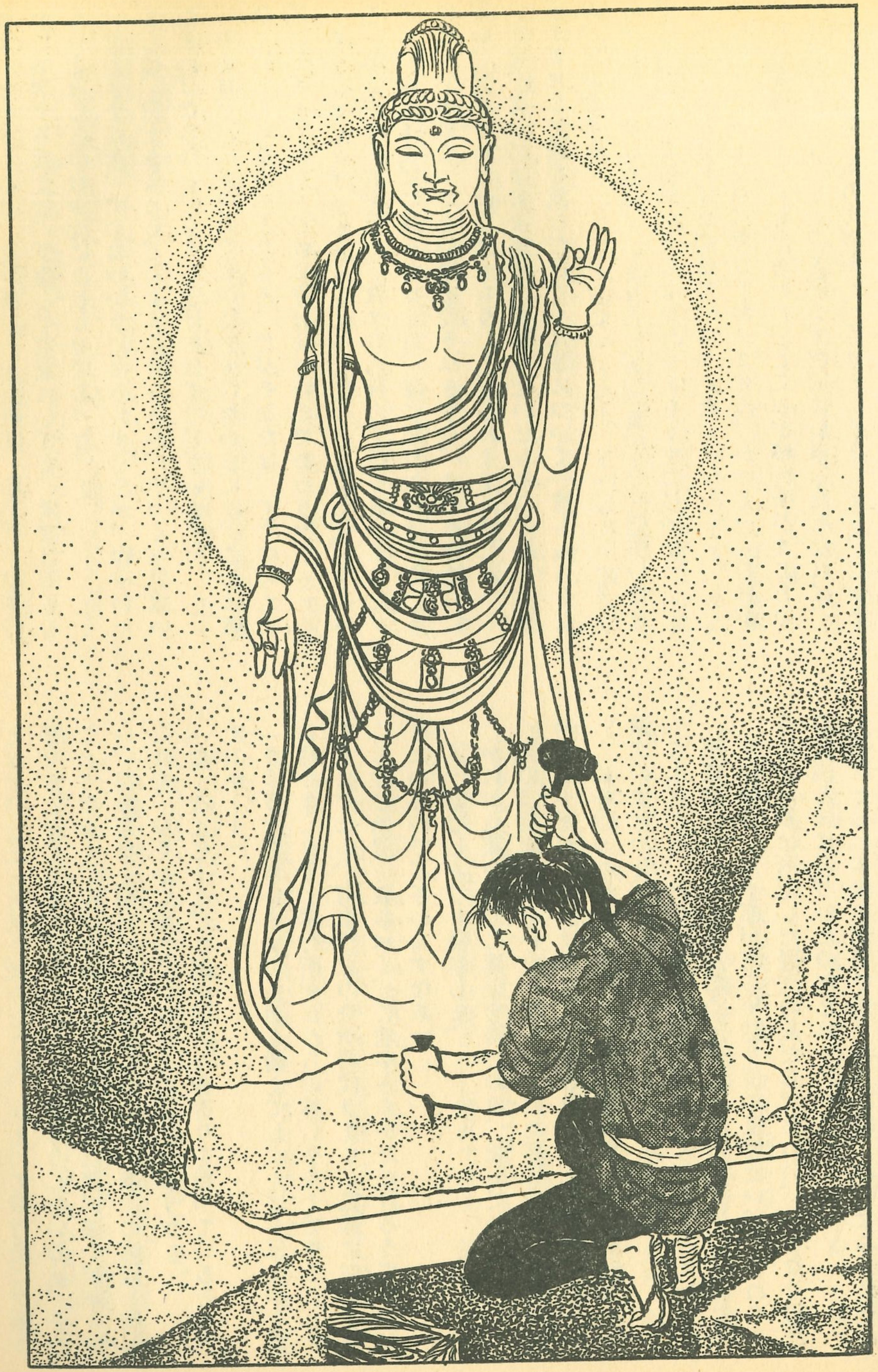
阿波庄の仕事場のほうから、少しの休みもなく鑿の音がひびいていた。

「又十郎、九蔵についてたいした話もいたさず、いきなりわしを瑞雲院につれてきたのは、町の噂を住職の口からきかせるためやったんかいな」

宗兵衛は足をなんとなく阿波庄の仕事場にむかわせ、又十郎に苦笑した。

かれの言葉が武家言葉になったり、ときにそれに京訛りが





まじったりするのは、江戸幕府の出先機関、所司代や町奉行所に奉職する武士は、世襲して京馴れしても、武家言葉をもちいるべしとのお沙汰によるものであった。

「父上さまには、すぐおわかりになられましたか。昨夜わたくしは、父上さまともどのように計らうか、ゆっくり思案いたさねばならぬと、もうし上げたはずでございます」

「なるほど、瑞雲院の住職の話をきいたからには、これは慎重に考えねばならへんわなあ。だがそなたは、すでに考えを固めたうえ、わしもそれに従わせたいのであろう」

「お見すかしでございましたか。わたくしは町奉行所の与力、父上さまの意を汲み、直々に九蔵の身辺を洗いました。結果、磯次は九蔵に罪をきせられ、磔になったのは確実。されど、いまになってその罪を問うべきやら、きのうは迷いに迷い、父上さまにはなにももうし上げられませんでした」

昨夜、又十郎は意味深長な言葉を吐いたものの、あとは諸子を肴にして酒を飲むだけで、九蔵について一言ももらさなかったのである。

「ずいぶん前の事件、いまさら九蔵が真犯人と判明いたせば、町奉行所の威厳がそこなわれるともうすのじゃな」

宗兵衛は思案深げな表情でつぶやいた。

「いいえ、さようには思うておりませぬ。かつて一人の男が無実の罪をきせられ処刑された。ところが奉行所がまことの犯人を探し当て、この非を隠さず世間に公表したとなれば、下々の者は奉行所の失態を、一旦はそしりましょう。だがあとはその公正と勇気を褒めたたえ、かえって奉行所に信頼を寄せると存じます。されどわたくしがもうしたいのは、そのことではなく、磯次が磔になったあと、九蔵が深く前非を悔い、自分の身を鞭打つような暮しをして、磯次の両親と病弱な妹を、ひそかに養っていることでございます」

「な、なんじゃと。九蔵が磯次の身寄りを養っているともうすのか――」

「さようでございます。九蔵を捕えてしまえば、三人が生活に窮しましょう。奉行所がかれらの暮しを支えてやることはできますまい。町奉行どのや所司代さまも、冤罪に対してそこまでの処置を取るべく、ご老中さまがたに計ろうていただきたいものでございますなあ」

又十郎はしみじみ嘆息した。

かれが九蔵の旧悪に確証を得たのは、簡単だった。

父の宗兵衛からだいたいをきかされた翌日の宵、かれは掘っ建て小屋から出かける九蔵のあとをつけたのである。

九蔵の行った先は、東新在家町の裏長屋、磔に処せられた磯次の家だった。

「こんばんは。わし九蔵どすが、開けとくれやす――」

平気でかれは名乗り、磯次の老いた母親に迎い入れられた。

その翌日、又十郎が町の年寄り役に直接会い、たずねてみると、九蔵は刑死した磯次の友だちだといい、いきなり磯次の両親と妹に近づいたのだという。

「磯次とは七本松の賭場で知り合った仲。あんなふうに死んでしまったのを見て、わしはつくづくいままでの自分が嫌になってしまいましたわいな。これからは真正直な人間になって、しっかりすごそうと思うてます。磯次の代りに、暮しの面倒はわしにみさせておくれやす。阿波庄で働いてはる九蔵はんは、最初、磯次の両親にこういうたんやそうどす。それから八年、九蔵はんはいうた通り、死んだ磯次の身寄りの面倒を、ずっとみてきているんどすわ。昔、あの九蔵はんが世間の鼻つまみ者やったことはきいてます。そやけど、磯次が掏摸を働いて失敗し、西土手の処刑場で血まみれになって死んだ光景を、九蔵はんはきっと見たんとちがいますか。こないにしてたら、自分もいつしかあんなふうになってしまう。そやさかい、心を入れ替えはったんどっしゃろ。町年寄りのなかには、病弱やけどいっそ磯次の妹と世帯をもったらどないやと、すすめるお人もいてはります。けどあの男は、なんとしても諾といいよりまへんね」

その町年寄りは、黒茶碗に湯をそそぎ、茶をたてながら又十郎に説明した。

彼の話で又十郎には、掏摸の真犯人は九蔵、被害者から大声を上げられ、九蔵がとっさに掏り取った縞の財布を、近くにいた磯次の懐にねじこむ光景が浮かんできた。

祇園祭の雑踏、それくらい容易であった。

九蔵は磯次が真犯人とされ、引き廻しから磔、さらし首になる一切を、おそらく見とどけていたのであろう。

磯次の凄惨な死が、九蔵を深く悔悟させたのだとしか考えられなかった。

「こうなったら、わしは死んだつもりで、一生かかって償うよりほかないがな――」

又十郎には、かれの決意が痛いように察せられた。

「父上さま、わたくしが調べた結果は、まあさような次第でございました。九蔵の心意気は、ただものではございませぬ。あの男が素知らぬ顔で、ぬくぬくと暮しておれば、わたくしも即座に捕え、旧悪をあばいてやる存念でおりました。されど、この八年来の切ない姿を知ると、単純にそうもなりませぬ。わたくしが父上さまにゆっくり思案、心に重い相談ともうし上げたのは、そこのところでございます」

又十郎は九蔵の石を刻む姿を少し離れて眺め、宗兵衛に告げた。

――父上ならいかがいたされまする。

こうたずねたい言葉を、ぐっと喉の奥に飲みこんでいた。

「又十郎、あいわかった」

宗兵衛は重い荷を背負わされたような声で、ぽつりとつぶやいた。

春の陽が西に沈みかけていた。

九蔵は前かがみのまま、鑿をふるいつづけている。

その姿が宗兵衛の意識のなかで、西土手の処刑場に移る。

かれには朧夜の底で、九蔵が春萌えの草を叩いて慟哭し、許してくれと磯次に叫んでいるように見えてならなかった。

(了)

# 私の習作時代

# ドブロク水筒肩にして



永岡慶之助

果して、これが「私の習作時代」と称してよいものやら分らぬが、すでに直しの利かない人生を生きてしまったのだから、ありのままに書き辿るほかはない。

終戦直後、会津盆地の田舎町の、小便臭い芝居小屋の廊下で、一人の長身の青年にめぐり合ったのが、私の物書きの世界に迷い込む発端となった。

青年の名は、赤田哲也君。実は、名作『碑』や『厚物咲』で知られた中山義秀先生の息子さんだが、亡き母方の姓を継ぎ、戦後、独り暮しの祖母の家に身を寄せていたのだ。

以来、この哲也君とは、家が近所だったこともあり、連日、顔をあわせてはドブロクを傾けたり、暗い田舎町の夜を彷徨したが、酔って語る彼の鎌倉文壇のあれこれは、田舎暮しの身にはひどく新鮮であった。この時点での私には、しかしそれは色彩ある別世界でしかなく、おのれが作家への道を歩もうなどとは夢にも考えなかった。それが、やがて哲也君と二人で、ガリ版刷りの同人誌『猟人』を発行した。仙花紙雑誌の粗末さもさることながら、作品も稚拙の極みで、ただの一号でポシャッてしまった。

運命といおうか、哲也君とは更に行動を共にすることになる。人生の展開を求めて、上京を決意したのだ。といっても、彼の場合は、父君が鎌倉に在られるからよいが、私には住居も職の当てもない。ためらう私に、哲也君曰く、「鎌倉がある」。若さとは、まこと無茶をするものである。

忘れもしない昭和二十一年二月、えらく雪の吹雪いた日の夕景、二人はドブロクを詰めた水筒を、肩から吊り下げて汽車に乗り込み、酔った勢いで故郷脱出の感傷を断ち切った。

義秀先生は、突然息子と一緒にあらわれた私にも、格別驚いた風もなく、ただちに酒の相手をさせられた。そして幸いにも、中山邸の垣根一重の隣家に部屋がみつかった。先住者は、『銀座八丁』で知られた武田麟太郎氏の未亡人母子で、稲村ヶ崎の新居に移られたのだ。私はすぐさま引っ越したが、この家は土地の漁師が建てた貸別荘で、隣室には旧公卿華族の側室母子が住んでいた。

その藤棚のある部屋でごろごろしている中、やがて銀座の小さな出版社に職もみつかり、東京へ通勤する新生活が始まった。私は毎日、出社前に中山邸を覗いた。

当時の中山邸は、一種「梁山泊」の趣を呈していた。玄関側の三畳間のテーブルでは、英文学者の吉田健一氏が翻訳の仕事をされているかと思えば、明治の文豪国木田独歩の子息虎雄氏や河童で知られる漫画家の清水崑氏、あるいは大戦末期二十八歳、清新リリシズム溢れる『雁立』の一篇で芥川賞を受賞した気鋭の作家であり、現鎌倉文学館長の清水基吉氏などが座敷にたむろし、義秀先生が一仕事終えて離れからあらわれるのを待つといった按配なのであった。やがて酒宴となるや、濁酒に陶然とした虎雄氏などは、ボードレールの『悪の華』を朗々と暗唱したものである。

義秀先生の表情には精気が漲っており、時に凄味さえ感じさせられた。そのころ、『華燭』『テニアンの末日』など矢継ぎ早に話題作を発表され、意気昂揚されていたのだ。今にして思えば、目のあたりに、一行の文章に彫心鏤骨する作家の姿を見、また時に酒のお相手をしながら、しみじみと人生のあれこれを伺いえたことの仕合わせを感謝せずにはいられない。ところで、右の『華燭』はお嬢さんの結婚をテーマとされた作品だが、その結婚式は川端康成氏のお宅で行われた。その際私も鎌倉文庫の女性編集者と共にお手伝いしたが、何の用事であったか、川端先生の御用で奥の書斎に赴くことになった。書斎には蔵座敷を通り抜けるが、そのとき異様なものが目に入った。ピラミッド型にうず高く積まれた膨大なそれが、全国から寄せられた同人誌と知って私は立ち竦んだ。

同人誌『南北』については、すでに安西篤子さんが記しておいでなので、詳しくは触れない。表紙は高村光太郎の素描、同人は横光利一氏系、義秀先生ゆかりの人々という豪華さで、同人会でひっそりと控えていた美少女が、他ならぬ彼女だったのである。末席につらなりはしたものの、私はあの川端邸で目撃したピラミッド型同人誌の幻影に悩まされていた。

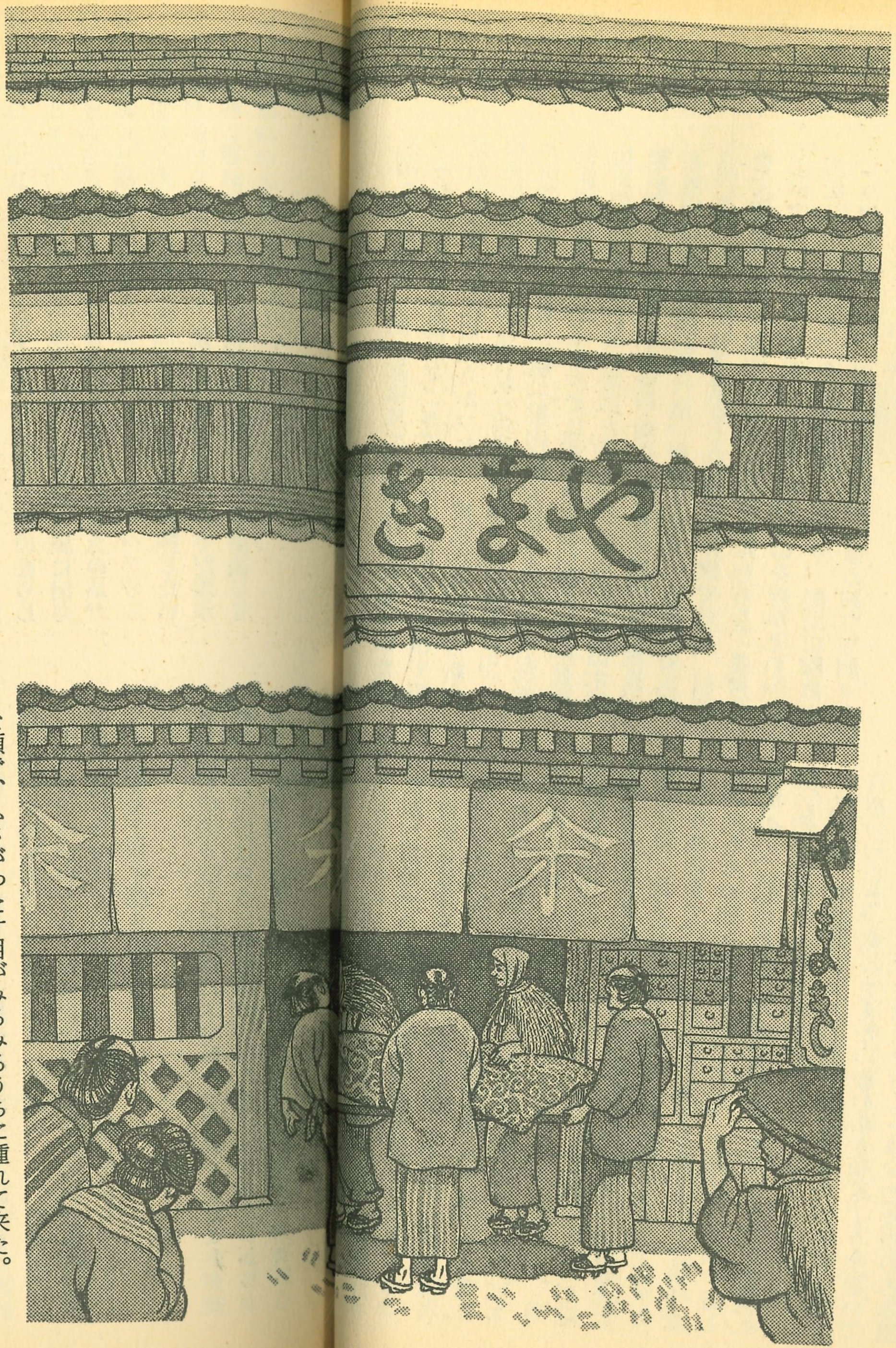
私には、有楽町のカスバ街を泳ぐように飲んだくれた日がつづいた。先の見えない霧の中を辿るような思いであったが、ある夏、会津に帰省した時、若松市の古本屋で偶然、小冊子を手にして以来、会津藩関係の書物を漁るようになった。小冊子の会津藩朱雀隊生き残りの若き藩士の覚書に触発されたのである。そして同人誌『新樹』に足かけ四年間、九回にわたって書き上げたのが『斗南藩子弟記』であり、処女作にもかかわらず、直木賞候補に推され、また賞を逸しこそすれ、文学にきびしい義秀先生から望外の評価をいただけたことで、記念すべき作品となった。

特集 名手競作！江戸情話

# キヨ命(いのち)

高橋義夫(たかはしよしお)

今森洋輔画




一

夜ふけに降った雪が下駄の歯を埋めるほどに積もった。朝日が屋根の雪を輝かせ、目が痛かった。雪の返照に目をくらませられたか、荷車の車輪が雪に滑ったか、神田雉子(きじ)町のなだらかな坂道で、炭俵を積んだ荷車があともどりして、炭屋が尻餅をついたままひきずられた。

荷車は半回転してとまり、炭屋は雪まみれになって立ちあがる。

「あれっ、だいじょうぶかい」

と、うろたえて大声をあげた。荷車が人にぶつかったらしい。女が雪の中に倒れていた。下駄が放り出されている。額が切れ、血が雪を染めた。髪を短くして茶筅髷(ちゃせんまげ)に結い、五十五、六の年恰好である。目をしっかり閉じていた。

「しっかりしなよ」

炭屋は女を抱き起こした。女はぐったりしている。真っ青な顔で、ふさがった片目がみるみるうちに腫れて来た。

近所の商家から人が出て、雪を蹴散らして駈け寄って来た。

「お栄さんじゃないか」

「お栄さんだ」

と、駈け寄った人々が口々にいう。

「横丁から急に出て来たもんで、気がつかなかったんですよ」

炭屋は困りきって、哀願するような顔になった。

お栄は雉子町の道具屋の後家で、年は五十二になる。店は婿養子にまかせ、近くのこどもたちに手習いを教えたり、よく人のめんどうを見もし、また信心深いことでも近隣に知られていた。

手早く戸板が外され運ばれて来た。お栄は戸板に乗せられた。

暖簾(のれん)に余と染めてある。「やまき」と読ませるのである。その前に来たとき、お栄はわずかに手を上げて、

「勝手口へ、勝手口へ」

と、つぶやいた。店を騒がせたくないという心づかいだった。店先から、お栄の娘のおきみと婿の藤兵衛が飛び出し、戸板にとりすがる。通りに面して、両側に小さな店が軒を連ねている。人々が出て来て、戸板を囲む。

「あいすみません。ほんとうに気がつかなかったもので……」

炭屋が恐縮しきって、踏み荒らされて泥になった雪道に膝をついた。お栄は戸板の上で、苦しい息をつく。額の傷は小さく、血はとまったが、内出血をした顔の片側がふくれあがった。

お栄は家の中に運びこまれ、ふだん居間にしている仏間の隣の四畳半の間に寝かさた。やがて医師が呼ばれて来た。

台所でおきみが女中を叱責した。

「おっ母さんが勝手口から出て行くのを誰も気がつかなかったはずがないじゃないかえ。なぜとめてくれなかったのさ」

おきみはやり場のない怒りをぶつけているのだった。お栄はこの一月ばかり体調がすぐれず、寝たり起きたりの暮らしだったのである。雪が積もった寒い朝に、わざわざ表に出て行く用事があるわけでもなく、なぜそんなことをしたのか、娘のおきみには理解ができなかった。

医師が診察をおえて四畳半の間から出て来た。打撲じたいはそれほど強いものではなく、顔の腫れもやがてひくだろうが、打ちどころが頭だから、容態の変化をしばらく注視していなければいけない、と医師はいう。

「それよりも、雪の中に倒れて身体を冷やしたから、風邪をひかせないように暖かくしてやりなされ」

あとで膏薬を届けさせるといって医師は帰って行った。どうやらたいした怪我ではないとわかって、家の中の空気がゆるんだ。

瀬戸物の火鉢に炭火をおこして暖めた部屋で、おきみはお栄の枕元に座っていた。お栄は顔の半分がふくれあがり、青黒く変色し、片目はふさがっている。まどろんではすぐに目覚め、軽いうめき声をもらす。

「おっ母さん、痛むのかい」

おきみは掻巻（かいまき）の上からお栄の肩をさすった。

「だいじょうぶだよ。心配しないでおくれ」

と、お栄はしっかりした声で答える。少し邪険（じゃけん）と感じられる響きのあるいつもの母親の声なので、おきみは安心した。

「あんなに早く、しかも雪の朝だというのに、おっ母さんはどこへ行くつもりだったの。用があるならそういってくれれば、使いを出すんだよ」

と、おきみがいうと、お栄は顔を動かし、開いているほうの目で見た。考えるようだったが、めんどうになったらしく、掻巻を上げて顔をかくした

お栄が炭俵を積んだ荷車にぶつかって怪我をしたことが知れると、町内はいうまでもなく、日本橋、本所あたりからつぎつぎに見舞いがやって来た。「やまき」の暖簾の力というよりは、お栄の人徳だった。

お栄は顔の腫れがひかず醜い顔になったことを理由にして客には会わなかった。それどころか居室にひきこもり、便所にも夜になって店の者がみな寝しずまってから壁を手さぐりして行く様子だった。若いころは小町の名で呼ばれた美人で、五十を過ぎても整った上品な面影はさほどの衰えを見せないお栄だったが、ふだんは化粧もせず、身を飾ることに無関心だから、顔の青痣にそれほどこだわるのは、いささかお栄らしくなかった。

他の者が居室に入ることは拒み、おきみだけは許したが、炬燵にもぐりこんだまま、顔をそむけ、目を合せようとしない。怪我をしてから、食がすすまなくなった。

お栄がつれあいの先代藤兵衛を亡くしたのは、二十七年も前である。お栄は二十五で、娘のおきみは三つだった。おきみの上に三つちがいの兄があったが、疱瘡にかかって亡くなっている。

まだ若いお栄が、大店とはいえないが店一軒の重荷を両肩に背負わされたのだから、その苦労は察するにあまりある。

先代藤兵衛の弟で、簞笥職人になった紋三郎が、しきりに暖簾を譲れと迫り、親戚の一部も紋三郎の肩をもってお栄を追い出そうとしたこともあったが、おきみに婿をとるまではと必死に守り通した。先代藤兵衛より十歳上の番頭の献身的な働きもあり、得意先もお栄のあとおしをした。

お栄が女らしく身を飾ることもせず、男のような口をきいたのも、世間から若後家だからと色目で見られることを嫌ったためだった。よその店の内儀のように芝居を見に行くでもなく、家を出るとすれば先代の命日のお寺参りくらいなもので、

「女大学が羽織を着たようだ」

と、人に笑われるほど、つつましく生きて来た。

おきみが十七のとき、その時分はまだ健在だった番頭と相談して、小僧からたたきあげた仙吉を婿にして、藤兵衛の名をつがせた。婿はおきみより五つ年上だった。温和で仕事熱心な人物だった。

翌年、孫が生まれた。男の子だった。それを期に、お栄は四十だったが、髪を断髪にして茶筅髷に結い、すっかり媼の姿になった。近所のこどもたちを集めて手習いを教えたり、向島の尼寺に和歌の会のために出歩くようになったのは、それからである。

五十を過ぎてから、時おり身体の不調に悩むようになった。痛いとか苦しいとか、弱音は口にしない性分である。娘のおきみにも、なかなかお栄が苦しんでいることは知られなかった。寝こむのはよほどのことである。

朝は暗いうちに起きて、店の前を掃くのが日課で、そんなことは小僧の仕事だとおきみや藤兵衛がいくらとめてもやめなかったのだが、この一両年、よほど膝や腰が痛むとみえて、外に出なくなった。自室の炬燵に背をまるめて、日がな一日ぼんやりとしていることが多かったのである。

「なんであの朝にかぎって、外へ出たのかね。雪の朝は足腰によくないのに」
と、おきみは藤兵衛に話しかけてみた。藤兵衛にその理由が答えられるわけがないが、その疑問を自分一人の胸におさめていられないのである。
「おっ母さんは、なんにもおっしゃらないのかい」
桐胴の手焙りの上で手の甲を表にしたり裏にしたりしながら、藤兵衛は炭火をみつめてつぶやくような声を出す。大きな声を出したことのない男だった。
「それを聞くと、黙っちまうんだよ。なんだかいらいらした顔をしてね」
「頭を打ったんだろう。もっと腕のよい医者に見せたほうがよくはないか」
「なにしに行くところだったか、自分で思い出せなくなったとでもいうのかい。よしておくれよ。おっ母さんはまだ耄碌(もうろく)する年じゃないよ」
おきみは藤兵衛の背中を軽く叩いた。つぎの瞬間、耄碌という言葉を自分が口にしたことに気づいて、ぞっと肌に粟を生じた。急に気力が薄れて炬燵にうずくまっているお栄のうしろ姿を見たとき、その言葉が頭をかすめたことがあったのである。
仏間のほうで、かたかたと襖が鳴る音がした。やがて襖が滑り、お栄の足が畳をひきずる音が、かすかに聞こえて来た。手燭(てしょく)も使わず、闇の中を壁を手さぐりに便所へ行くところである。
人に気づかれることを怖れて、息を殺している。

## 二

顔の痣が消えるとともに、お栄はいくらか気分が晴れたらしく、自室から出ることが多くなった。表情に精気がなく、めっきり痩せたのは食が細くなったせいばかりとも思えない。放心していることもあった。縁側に座りこみ、庭にぼんやり視線を投げて、おきみが声をかけても返事が返って来ないのだった。お栄が縁側に座るようになってから、二、三日後のことである。その日は縁側に春めいたおだやかな日があたり、庭の霜がとけて土がしめって黒くなっていた。おきみは針箱を出し、繕いものをしていた。座敷から見るともなしにお栄の横顔に目をやった。
裏の戸をあけて、息子の仙太郎が庭に入って来た。仙太郎は十六になったが、身長は父親の藤兵衛に負けない。根がやさしい性分で、友だちの影響を受けやすく、ぐれたというほどではないが、勇みを気どって丁髷を横にくずし遊び歩いていた。誰でもがその年頃には通る道だと、藤兵衛がうるさいことをいわないのが、おきみにはもどかしい。
前の晩も友だちとどこかで遊んで、朝がえりだった。
「キヨちゃん」
と、お栄が声をかけた。いままでおきみが耳にしたことがない、若やいだ甘いお栄の声だった。



「キヨちゃん、来てくれたんだねえ」
仙太郎は驚いて足をとめた。とまどった顔を、お栄に向ける。
「なんだよ。婆ちゃん。ふざけるなよ。キヨちゃんだって」
仙太郎は薄笑いを浮かべた。お栄は絶句した。目にいぶかしげな色が浮かび、それがすぐに狼狽に変わる。
お栄はゆっくりと手を支えにして立つと、自室に向かって壁を伝い歩いた。仙太郎は座敷のおきみに気づき、気まずそうな顔になって店のほうへ歩いて行った。
おきみは胸の動悸がしずまらなかった。お栄は孫の名を忘れてしまったのだろうか。名を忘れるならまだしも、他人とまちがえているのだろうか。
おきみは繕いものを脇に置き、お栄の部屋をのぞきに行った。お栄は炬燵に入り、なにか考えごとをしていた。横で三毛猫がまるくなっている。おきみは炬燵の脇に座り、猫の頭をなでながら、
「おっ母さん、キヨちゃんて、どこの人なの」
と、訊ねた。
「えっ」
お栄は遠くを見る目になる。心もとなげに首を横に振った。
「知らないの」
「知らないねえ。どこの人だろう」
精気のない目をした。仙太郎にキヨちゃんと呼びかけたときの、色気をふくんで輝いた目と、甘い声はまるで別人のものだった。
お栄が辛そうな顔をしたように見えたので、おきみはそれ以上は訊かずに、部屋を出た。台所で仙太郎が井戸水を柄杓で呑んでいた。おきみを見ると、親指を立てて見せる。
「お父つあんは」
「向島で道具の売りたてがあるって、朝早くから出かけたよ」
「じゃあ、帰りは夜になるな。しばらく寝られる」
仙太郎はいくらかほっとした表情になった。叱言をいわれなくとも、父親は煙たいのである。
「いいかげんにおしよ。遊んでばかりいて」
「へっへっへ」
憎らしい笑い声をたてて、台所から仙太郎が出て行こうとする。
「ちょっとお待ちよ」
「なんだい」
「さっきお婆ちゃんが妙なことをいったろう」
「おれの顔を見て、キヨちゃんといったな。とうとう耄碌がはじまったか。キヨちゃんて誰なんだい」
仙太郎はそれだけいい、意気がって肩を揺すり、台所から離れた。そのうしろ姿に目をやっているうちに、おきみはその名前に覚えがあるような気がしてきた。ずっと昔、おきみが五つか六つのころ、よく聞いた名前のようだった。

おきみがこどものころの店の雇い人は番頭をはじめあらかた鬼籍に入ってしまい、昔のことをよく知っていてなおかつ近くに住むのは、須田町の長屋で暮らす元の女中のおかつだけだった。

「キヨちゃん」

というお栄の呼び声が耳から離れず、翌日おきみは須田町におかつを訪ねた。

おかつは六十になる。亭主を亡くし、息子夫婦、三人の孫と一緒に狭い長屋で暮らしていた。若いころから働きすぎたせいか腰が曲り、髪は白くなっている。前歯が欠け、よけい年をとって見えた。おかつは、

「嬢ちゃん」

と、いい年をしたおきみを昔のように呼ぶ。手土産の菓子折をありがたそうにおしいただき、神棚にそなえた。

「こんな汚い所へ、申しわけありませんねえ、番茶くらい出したいんですけど、なさけないことにお茶っ葉も切らす始末で……」

と、涙声になる。嫁は気をきかしたつもりか、井戸へ洗いものに行った。孫はみな成長しているので、昼間はよりつかない。おきみは草履は脱がず、上がりがまちに腰を下した。

「おかつさんに昔のことを聞きに来たのよ」

「なんですか」

「わたしが小さいころ、キヨちゃんという人が、店に出入りしてたんじゃないかね」

「嬢ちゃんが小さいころって、先代がお亡くなりになったあとのことですかね」

おきみはうなずいた。おかつは遠くを見る目になった。

「キヨちゃんねえ。男ですか、女ですか」

「たぶん若い男。おっ母さんより年下か、同い年くらいの」

おかつは指を折りながら、男の名前を口ずさんだ。十数人あげた名の中に、キヨちゃんはなかった。

「御新造さんは、若い男を出入りさせるってことはありませんでしたものね。女中のおきよっていうのは短い間だけれど、いましたよ。たしか信州佐久の生まれで。その女中のことじゃありませんか」

おきみは首を横に振った。お栄の目に一瞬浮かんだ輝きは、恋人にたいしてのものだという確信めいたものがあった。

「清次じゃないですか」

と、おかつが自信がなさそうに口に出した。

「清次」

「そうそう。頭がキヨって呼んでいたものね。先代のころは、火消の勇みの若い衆が出入りしていたものですよ。その中に清次というのがいました。たしか御新造さんより二つばかり年下でしょう」

勝手口に若い男たちが立っている姿をおきみは思い出した。おきみが小さなころである。お嬢、お嬢とかわいがられたものだった。しかし、おきみが七つ八つになるころには、火消は店に寄りつかなくなった。女が主人の家には、小遣いを貰いに来るわけにはいかなかったのだろう。しかし土蔵の目塗りのときには、初老の男が来ていた。いまでも火消屋敷とはその程度のつきあいがある。

勝手口に立つ若い男たちは、手首まで入れ墨をしていた。肩を揺する歩きかたが、いまの仙太郎と同じだった。

「火消じゃない」

と、おきみはつぶやく。「女大学が羽織を着た」お栄とはどうしても結びつきようがない。

須田町から帰ってからも、おきみはそのことが気になってならなかった。しかし、お栄に面と向かって、清次という男を知っているかと訊ねる勇気はなかった。

日一日と、お栄の耄碌はかくしようがなくなってきた。人の名を忘れたり、いいまちがえたり、自分がどこにいるかを忘れたり、考えてみればそのような徴候は以前からあったのだが、おきみはそれをお栄の性格のせいだと思いこんでいた。他人には背すじのぴんと通った隙のない女、男のような性格のさっぱりした人柄だと思われているお栄だが、若いころからなにかに熱中するとほかのことを忘れてしまう、うっかり者のところがあったのである。

荷車にぶつかって顔を怪我してから、もともと進行しつつあった耄碌が一気に進んだといえる。時おり娘のおきみを他人を見る目で見ることがあった。

それから半月ばかりたち、庭の梅の枝に蕾がついた時分だった。仙太郎がおきみが一人で座っている座敷にやって来て、おとなびた仕草で胡座をかいた。

「婆ちゃんの様子がおかしいぜ。色呆けしやがったみたいなんだ」

と、気味悪そうな顔を向けた。

「へんなことをいうもんじゃないよ。色呆けだなんて」

「ほんとうだからおそろしい」

「どうしたんだい」

おきみは声をひそめた。身体がふるえた。仙太郎はいいにくそうに、

「またおれの顔を見て、キヨちゃん、来てくれたんだね、といったんだよ。薄気味の悪い目で、じっとみつめてよ。おれの手を握って、キヨちゃん、帰っちゃいやだよって、妙な猫なで声を出すんだ。おれはおそろしくなって逃げ出したよ」

「おまえ、そのことを誰にもいうんじゃないよ」

おきみは仙太郎を睨み、ひそめた声に力をこめた。仙太郎の目に怯えの色が浮かんだ。

「いいやしないよ。祖母が色呆けしたなんて、みっともなくて人様にいえるかってんだ」

おきみの目に涙が湧き出した。うつむいて嗚咽をこらえる。肩がふるえる。仙太郎は黙って座敷を出て行った。また夜遊びにでかけるつもりにちがいない。

その晩、おきみは藤兵衛に、火消屋敷へ行き清次という男の消息を訊ねて来てくれと頼んだ。



「なぜそんな者に用があるんだ」
藤兵衛はいぶかしい顔をした。勇み肌の男たちとつきあうことを、あまり好んでいないのである。
「昔、先代が面倒を見たんだよ。そのころのことで聞かなくちゃならないことがある。行方を調べて来ておくれな」
と、おきみはいいつくろった。
お栄が「キヨちゃん」と呼ぶ男が、火消の清次だったら、お栄がその男に会うことがきっかけになって、また頭がはっきりしてくるのではないか、とおきみにはそんな気がするのである。

## 三

清次は神田明神近くの裏長屋に一人で住んでいた。中気で寝たきりだそうだと、藤兵衛に聞かされていたが、おきみが訪ねて行くと布団の上に起き上っていた。
肘から曲ったままの手がふるえ、首が揺れる。雨戸は閉めきり、しばらく身体を拭いていないとみえ、悪臭がこもっていた。枕元の盆に水を入れた徳利が置いてある。言語は不明瞭だった。
「雉子町のヤマキから来ました」
と、おきみが言うと、清次は舌を動かし、ああと声を出した。
着たきりの縕袍（どてら）の襟は垢で光り、袖からのぞく腕やはだけた胸に、入れ墨がある。色あせてしぼんだ花びらだった。わかいころは、色白の肌に入れ墨が映え、苦みばしった男前で女たちに騒がれたという。
「清次さんは、キヨちゃんと呼ばれたことがおありですか」
と、おきみが問うと、かすかに清次の頰に含羞に似た笑みが浮かんだ。清次はうなずいたが、首が揺れてその仕草ははっきりとしなかった。
「おっ母さんが、お栄というんですが、昔キヨちゃんと呼んだのは、清次さんのことでしょう」
しばらくためらったが、清次はうなずいた。
「おっ母さんとは、どういう間柄なんですか」
清次はふるえる手を前に出し、一所懸命になにかをしゃべろうとする。しかし彼の口からもれる音は、おきみの耳には意味のある声には聞こえなかった。しばらく悪戦苦闘し、首を動かし、舌を出したが、清次はついにあきらめて、うなだ



れた。
「深い仲……だったんでしょう」
ためらいながら、おきみが訊ねる。清次は目をみはり、首を横に振りながら、声をもらす。
「めっそうもない」
といったようだった。あるいは、「もったいない」かもしれなかった。
清次の姿を見た瞬間から、おきみはお栄と会わせることを断念していた。どちらも家から出ることはできないのである。
清次は人の言葉を聞きとることには不自由はない。おきみは母のお栄がすっかり弱り、昔といまが頭の中でごったになっているらしいことを話した。すると清次の顔が激しく歪み、泣き笑いのようになった。
清次の目尻から、涙が流れ出た。
「やっぱり二人の間にはなにかあったんだねえ」
おきみがひとりごとにして、つぶやいた。清次は必死の面もちになり、声を絞り出した。
「こんりんざい……」
と、いったようだった。神かけてそのようなことはないという否定である。苦しそうに横になる。おきみはなぜか清次を拷問にかけて苛（さいな）んでいるような気がして来た。
「長っ尻をしてしまいましたね。悪いことをしてしまった。わたしは帰ります。もしおっ母さんが少しでもよくなった

ら、清次さんのことを話してもいいですか」

と、横たわる清次に声をかけた。清次は自由になるほうの左手を顔の上で振り、またしても泣き笑いの顔になった。おれのことはいわないでくれというのである。

話し残したことがいくらもあるようで、心残りではあったが、おきみは清次に別れを告げて、外に出た。長屋の空地にはこどもが群れて遊んでいる。清次の住む部屋だけが、暗く日陰になっているように見えた。

おきみは清次に会うために神田明神近くまで行ったことを、お栄には話さなかった。話しても理解を得られまいという諦めもあった。

それから二、三日後、お栄が自室から出てどこかへ行ってしまったのである。荷車に衝突した怪我で十日ばかり寝こんでから、めっきりと足が衰え、庭へ下りることもしなくなっていたので、まさか遠出をすまいと店の者たちも油断して、目を離していた。あいにくおきみは所用で外出中だった。

鏡が出ていて、紅の貝殻がその横に放り出されている。毛髪のからまった櫛もそのままだった。急に思いついて、口に紅をひき身づくろいをしてあと始末を忘れて飛び出したといった様子である。

お栄の姿が見えなくなったことに気づき、店の者は手分けして探した。藤兵衛は火消屋敷にも話をして、若い者を出してもらった。

お栄は暗くなってからみつかった。本郷菊坂あたりで、途方に暮れて道ばたにしゃがみこんでいたのである。駕籠に乗せられて店にもどったときには精根つき果てた様子で、ぐったりしていた。

なぜ本郷あたりをさまよったのかも不思議だが、弱った足でどうやって本郷まで歩いたのかも、思いもよらないことだった。

「おっ母さん、しっかりしておくれよ。どうして黙って本郷まで歩いたのさ」

仙太郎に背負われて店に入ったお栄の背中に抱きつくように、おきみは声をかけた。身も世もないほど気を揉んでいたから、叱る口調になったのもやむをえない。お栄はおびえた顔を仙太郎の背に埋めた。

「そんなに剣突をくわせるものじゃない。かわいそうにおっ母さん、ふるえていなさるじゃないか」

藤兵衛がおきみの肩をつかんだ。

晩にお栄は高熱を発した。荒い息づかいが襖ごしに洩れて、おきみは容態の急変に気がついたのである。深夜のことで医師を呼びにいくこともできず、おきみと藤兵衛はお栄の枕元に座り、冷たい水に手拭を絞って額にのせ、看病した。夜遊びに出ることが多い仙太郎もその晩は家にいて、井戸水を汲んで手伝いをした。

「おっ母さん、しっかりおしよ」

と、おきみが励ますが、お栄にはその言葉が耳に届かない



らしく、眉をひそめ口をあけて荒い息を吐く。そばにいても熱の高さが伝わって来るようだった。

世帯を持っている番頭は通いで、店に住みこんでいるのは小僧が三人と女中が二人だが、騒ぎに目覚めて目をこすりながら奥をのぞく。明日の仕事にさしつかえるから、藤兵衛は女中一人を残して、寝所にもどした。

暁近く、おきみは女中と一緒に冷えきった台所に立った。寝ずの看病をする藤兵衛と仙太郎に温かい粥でも食べさせようと、かまどに薪をくべる。手焙りの種火から火を移すと、煙が流れ出す。頬をふくらませて火吹竹を吹く女中の背後に立っていると、おきみは煙が目にしみて涙がにじんだ。

米をといで鍋をかまどにかけ、糠味噌の漬物を洗う。

「おっ母さん」

と、仙太郎がぼんやりした顔で、台所をのぞいた。

「まだお粥は炊けないよ。もうしばらくお待ちよ」

おきみが背中をむけたまま、湿った声を出した。

「婆ちゃんが、息をしなくなった」

「ええっ」

おきみは転げるように台所を出た。お栄の居所の襖の縁をつかんだ。藤兵衛が掌でお栄の顔をさすり、目を閉じさせたところだった。藤兵衛はうしろを振りむき、沈んだ口調で、

「おわっちまったよ」

といった。

「おっ母さん」

おきみは膝から崩れ落ち、蒲団の上からお栄の足にしがみつき、声を放って泣いた。

空が白むと、藤兵衛は仙太郎と小僧たちに指示して、大家、名主、檀那寺、番頭などに手分けしてお栄の死を報じさせた。おきみがお栄の枕元でぼんやりしているうちに、近所から手伝いの人々が集まり、店の中に線香の匂いが流れた。駈けつけた番頭が、手際よく人々をさばく。哀しむ間もないほど、店の中は不思議な活気に満ちて来た。

須田町から、元の女中のおかつが息子夫婦とともにやって来た。おかつは緊張にひきしまった顔になり、心なしか曲った腰が伸びたように見えた。お栄の顔を見て、

「お若いこと」

と、つぶやく。お栄の死に顔は四十代のころにもどったようだった。おだやかで、鼻すじが通って唇が小さく、眉が細く、肌もまだ温かくて、充分に美しかった。

おかつは片襷をして、手拭を頭にかぶると、台所に立ち孫のような年齢の女中たちと一緒に働きはじめた。

棺が届けられた。湯灌をしなければならないが、おきみは他の人々にお栄の身体を見せたくなかった。おかつを呼び、二人でお栄を清めることにした。

お栄は痩せ細っていた。下腹だけが異様にふくれ、固かった。柔らかい布をぬるま湯にひたし、ていねいに拭き清める。しばらく湯に入れてなかったので、悪臭の立つ太腿のあたりを念入りに拭こうとして、

「あっ」
と、おきみは小さな叫びをあげた。
痩せて太腿骨にへばりついた皮膚に、「キヨ命」と小さく入れ墨がある。股のつけ根に近い部分である。針をさし、墨を塗りこんだのである。下から上にその文字があるので、お栄が自分で彫ったものにちがいない。
おきみはうろたえて、入れ墨をかくそうとする。おかつは見ぬふりをした。
初七日までおかつは泊りこんで手伝いをした。
埋葬もすませ、弔問客の対応も一段落して、吹き荒れた嵐がおきみの気力も体力も吹き飛ばして去ったようだった。夢を見たようである。仏間の脇の襖がかたかたと鳴り、いまにもお栄が立って来そうな気がする。
「お疲れでしょう」
声をかけて、おかつが座敷に入って来た。おきみは炬燵に足を入れ、寝ころんでいたが、上半身を起こした。おかつは盆に湯気の立つ湯呑を二つ載せていた。
おかつは炬燵に、よいしょと声を出しながらもぐりこんだ。
「キヨちゃんのことで、思い出しましたよ」
と、おかつは上目づかいにおきみを見る。おきみは湯呑を持つ手を途中でとめた。
「どんなこと」
「御新造さんは清次さんが気に入って、キヨちゃん、キヨちゃんと重宝に使っていましたよ。あるときからお出入差しとめのようになったんでしたね。だけども、なにかその、男と女のことはなかったと思いますがね」
と、最後のほうは自信のない口調になって、おかつがいった。
「そうね。なにもなかったんだろうね」
と、おきみは合槌をうった。
幼いころ、お栄がせつない声でしのび泣きしながら、息がつまるほど強く抱きしめたことを、そのおそろしいような感触とともにおきみは思い出していた。清次とお栄に身体の関係があったことは疑いないと、おきみは思っている。
おそらくそれはたった一度のあやまちというべきだろう。逢わなくなってから、お栄は「キヨ命」の入れ墨をひそかに彫ったのである。女一人で店を背負って立った孤独な身の支えにするためか、あるいは心の裡で生涯清次を想いつづけたのか、それはおきみにはわからない。雪の朝に荷車にぶつかったり、本郷のあたりをさまよったりしたのは、その方角から考えると、神田明神の清次の長屋を探しに行ったとも想像できるのだった。
「キヨ命」の入れ墨をお栄の太腿にみつけたときは驚いたが、それは「女大学が羽織を着た」女ではなくて、母にもふつうの女の血のたぎりがあったことの証拠のように思えて、おきみは祝福したい気持にさえなっているのだった。
春の予兆の突風が吹き、雨戸が音を立てる。
（了）



時代小説・時代劇にみる

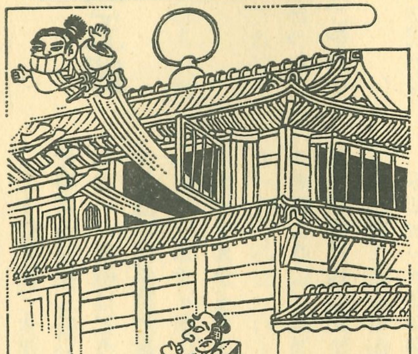
# おもしろ余話

縄田一男

## 名台詞・きめ台詞

### 「青春二十一、まだ遅くはない――」

随分、昔のことだが、ある映画雑誌がチャンバラ映画のベスト10のアンケートをしており、その中で、「宮本武蔵」――特に戦後、昭和三十六年から四十年にかけて東映でつくられた内田吐夢版の五部作を挙げている人が、かなりいた。
この作品は、後から思えば東映時代劇が下り坂になりはじめた時期からその終焉期に到る五年の歳月をかけて、監督の内田吐夢が、武蔵を演じる中村錦之助（現萬屋錦之介）の成長とともに武蔵のそれを描く、といってつくられたもの。
吉川英治の原作を成田昌義、鈴木尚之が脚色し、武蔵以外の主な配役を挙げれば、佐々木小次郎＝高倉健、お通＝入江若葉、朱美＝丘さとみ、本位田又八＝木村功、沢庵和尚＝三国連太郎、吉岡清十郎＝江原真二郎、といったところ。



特に第四部「一乗寺の決斗」で、一乗寺下り松において、武蔵が吉岡一門七十三人を相手に死闘を繰り広げる箇所は、それまでカラーだった画面がいきなり殺気をはらんだ白黒になり、迫力満点の場面に仕上っている。
ところが前述のアンケートで多くの人が挙げていた名場面の一つに、第二部「般若坂の決斗」冒頭で、あばれ者だった武蔵が姫路城の幽閉から解かれて、頼むは孤剣のみと広い世界へ旅立っていく、その場面が忘れられない、というものが多かった。その時の武蔵の台詞が、「青春二十一、まだ遅くはない――」である。
アンケートの解答には、オールナイト上映で「宮本武蔵」を見ていて、この台詞に出くわした時には思わず涙が出た、というものもあった。ことほど左様に、「宮本武蔵」の魅力とは剣の勝負の面白さもさることながら、彷徨する青春の魅力なのだ。
戦後、吉川英治の原作は、戦時中、太平洋戦争を支えた庶民から支配層にわたる保守的なものの考え方の拠りどころとなっていたと批判されることもあったが、そうした時代性を超えて、「宮本武蔵」が今なお新鮮な感動を与えているのは、この作品が永遠の青春文学であるからに他なるまい。「青春二十一――」の台詞はそのことを端的に証明しているのである。

## 私の習作時代

# 火事場の馬鹿力



典厩五郎

私には習作の経験がない。

もともと小説家になるつもりなどまったくなかった。筋金入りのなまけ者である私につとまるような、やわな商売ではないことをよく承知していたからだ。

私の家は約五〇〇年前から富士浅間（せんげん）神社の神主だったという家系で、親類筋もやたらと元神主稼業が多く、一族のきわだった特色はといえばそろいもそろってなまけ者ばかりであることだ。

働き者の神主などがいてもすこしも世の中の助けにならない。したがって神主などという余計者は、ひねもすのたりのたりと人さまの迷惑にならぬように暮らさざるを得ず、これが五〇〇年も続けば、スペンサーいうところの適者生存にあてはまるかどうかはともかく、ダーウィンの進化論を補強する生きた標本ぐらいになっていても不思議はない。

なにしろ、しんどそうなことはいっさい避けるべしと先祖の血がうるさく騒ぐ。

三十数年前、大学卒業寸前になっても、私はまだ楽な仕事ばかり探していて就職先がきまらなかった。

「おい、就職はどうするんだ」

恩師の梅原猛助教授に呼び出されて詰問された。

「シナリオライターになるつもりです」

シナリオライターのなんたるかも知らずに私はこたえた。

それより二、三ヵ月前のことである。京都・一乗寺の友人宅で月刊『シナリオ』なる雑誌を目にした。

〈なんだ、こんなかんたんなものならおれでも書ける〉

みじかいセリフが並んでいるだけの映画脚本を生まれてはじめて見た私は、これぞ自分の天職ではないかと思った。

しばらくして、再び梅原助教授に呼び出された。

「依田義賢さんに紹介してやる」

だが私は考えた末にことわった。

その当時、依田義賢氏といえば、溝口健二監督と組んで『雨月物語』や『近松物語』という名作を生み出していた名シナリオライターで、こいつはしんどいにちがいないと私の頭の中で警報が鳴り響いたからだ。

大学卒業後、まず浴びるほど映画を見て研究することだと、大阪の夕刊紙に映画記者としてもぐりこむ。

週末になると、取材と称して東映と大映の京都撮影所へ通い、徹夜して書き上げたプロットやシノプシスをせっせと売り込んで歩いた。

そんなある日のこと、東映の黒住企画部長にこういわれた。

「そんなことをしていてもまったくの無駄だ。これはと目をつけている脚本家はいないのか」

私がこれはと目をつけている脚本家は、『十三人の刺客』と『大殺陣』を書いた池上金男氏だった。

「だったら池上さんの弟子になれ。私が話をつけてやる」

「お願いします」

いきがかりでやむを得ない。しかも池上氏は時代劇の脚本家のくせに東京に住んでいた。しまったと思ったがもうおそい。行きたくもない東京へ行くはめになった。

そんなわけで、いまや池宮彰一郎の方が有名になった池上金男氏のもとでの修業時代が、私にとっての習作時代といえばいえるだろう。

二年後、日活からチャンスをもらって一本立ちのシナリオライターとなる。

日活時代には、池田一朗氏（隆慶一郎）をはじめとして多くの知己を得たが、私の人生を変えることになったのは、当時、日活企画部にいて「小説現代」新人賞を受賞したばかりの南原幹雄氏と知り合ったことだった。

よせばいいのに私は南原氏にカッコをつけて、いまに私も小説を書くぞと宣言してしまった。

数年後、南原氏は日活を退社して小説専業となるや、あっという間に時代小説の売れっ子となる。

一方、私はといえば相もかわらず、「いまに書く」とお題目をとなえるのみ。会うたびに南原氏の目がきびしくなってゆき、追い込まれた私は南原氏に見放されないためにも、小説を書いてみせるしか逃げ場がなくなった。

書き上げた長編小説（『土壇場でハリー・ライム』）を「サントリーミステリー大賞」に応募したのは、当時としては圧倒的に高額だった賞金に目がくらんだからである。

しかしながら、あんなしんどいものが書けるはずがないと信じて疑わなかった長編小説をものにできたのは、火事場の馬鹿力以外のなにものでもなかったといまにして思う。

特集 名手競作！江戸情話

# 敵持ち（かたきもち）

宮部みゆき（みやべみゆき）
熊田正男画

思いあまって用心棒を頼もうと決めるまでのあいだに、加助は三度刺し殺された。三度とも夢のなかでのことだったけれど、汗をびっしょりかいて飛び起きる寸前、傷口を押さえた手に感じられた血の感触は、とても夢とは思えないほどに生々しかった。食欲もないまま、食わないことにはしょうがねえと朝飯を詰め込んでいるあいだにも、箸を握る手のなかにその感触がよみがえり、ぶるっと震えがきたものだ。

おこうは、もともと加助以上にひどくぶるっていたので、彼のこの決断に、一も二もなく飛びついて賛成した。となると、彼女にとっての問題は先立つもの、用心棒を雇うといったいどれぐらいの金がかかるかということだけになる。「誰を」雇うかということについては、もうとっくに決めていたからだ。同じ十間長屋の端に住む、小坂井又四郎である。

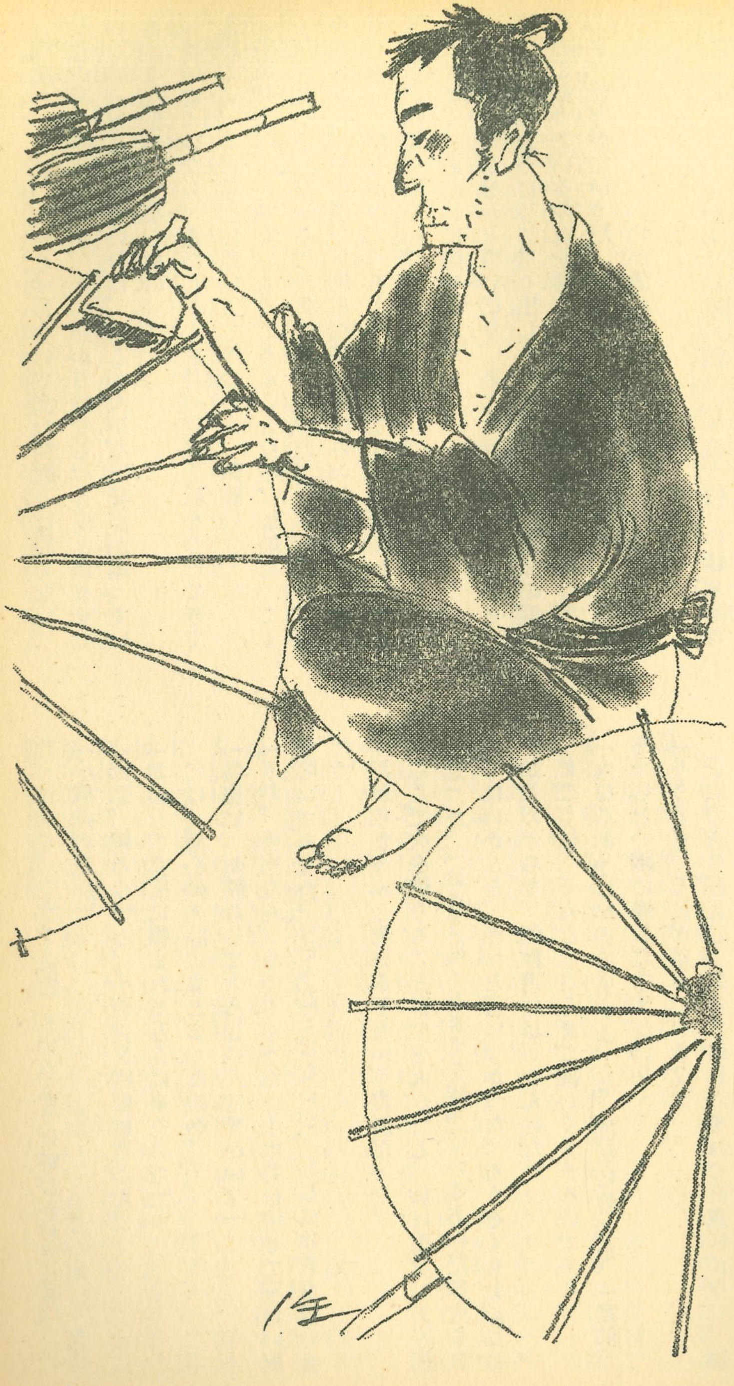
「小坂井の旦那なら、きっと安く引き受けてくれるだろうよ」と、おこうは言った。「痩せても枯れてもお侍なんだから、傘張りなんかしてるより、用心棒の方がやりがいがあるに決まってる。高いこと言いやしないよ」

「けど、あの旦那の腕前はどうだろう」

小坂井又四郎は久しく浪人をしている。加助とおこうのあいだにできた、一粒種のおもんは今年六つになるが、又四郎がこの長屋に引っ越してきたのは、彼女がまだむつきをあてているころのことだった。その当時から、彼は傘張りをしていたのである。もしも彼がかつては相当の遣い手であったにしても、いい加減、その腕もなまっていそうなものだと思われた。年齢的にも、加助よりは若いが、それでも四十はこえているだろう。

「刀だって、とっくに売っぱらっちまってて、竹光かもしれないぜ」





加助がもごもごと疑問を呈すると、おこうは荒れた手を激しく振って、

「そんなこと、どうでもいいんだよ」と言ってのけた。「用心棒ってのは、お侍で刀を持ってるってことだけに意味があるんだから。腕っぷしの強い素っ町人が薪ざっぽう持って立ってるよりも、腰抜けでもお侍が刀さして立ってる方が強く見えるんだ。そういうもんさ」

「だけど竹光じゃ……」

「抜かなきゃ、竹光だってこともわかりゃしないじゃないか」

加助としては、わかりゃしないで済む問題とは思えない。亭主の身は守りたいが、そのかかりはなるべく安く済ませたいというおこうの言い分は、どこか大事な出発点が違っているような気がしてならない。
「言いにくいなら、あたしが小坂井の旦那と話をつけてきてあげるよ。あの旦那は恐い人じゃないよ。気安いよ」
小坂井又四郎が気安い人物であることなら、加助だってよく知っている。だからこそ気抜けするのだ。仕事へ出かけてゆく加助に、井戸端で下帯を洗濯しながら「おう、精が出るな」などと声をかけてくるような浪人では、用心棒と頼みにする気にはなりにくい。
「とにかく、あたしに任せなよ」
おこうはせかせかと言い切り、あんたは仕事に行きなと、背中を押すようにして送り出した。加助は、まだ湯気の温もりのこもっている弁当を腰につけて、とぼとぼと出かけてゆくより仕方がなかった。おこうと小坂井との交渉が、首尾よくまとまって欲しいのか潰れて欲しいのか、自分でもはっきりしないままに。
その夜、いつものように夜の四ツ（午後十時）の鐘を聞きながら店をしまい、お鈴に挨拶をして扇屋の勝手口から外に出ると、痩せて貧弱な南天の木の陰に、小坂井又四郎がぬうっと立っていた。
加助は仰天して飛び退いた。小坂井は、火を入れていない提灯を左手に、右手を口にあてて大あくびをしているところだったから、「ふぁ～助」というふうに呼びかけてきた。
「小坂井の旦那」
「加助、帰ろう」と、小坂井又四郎は言った。「おぬしの女房に頼まれて迎えに来たのだ」
では、用心棒の話はまとまったのか。
「本当に、お頼みしてよろしいんですかい？」
「うむ。手当なら、もうもらった」小坂井は痩せて平たい胸を叩いてみせた。「そう高くはないが、わしには有り難い金だ」
だからちゃんと務めるぞという表情だった。
「ここで火を借りることはできんか」と、彼は扇屋の方を振り返った。「おこうに、おまえを待っているあいだは火を入れてはいかんと、きっと言いつかった。ろうそくもおぬしのかかりだからな。無駄遣いはいかんのだ」
おこうは、そんなところまで細かくケチるのである。
「火ならあっしが点けますよ」と、加助は言った。「旦那、あっしと一緒に帰るんですかい？」
「そうとも。それが望みだろう？」
子供の送り迎えじゃあるまいし、それでは意味がない。加助は溜息をついた。
「おこうはどういうふうに話したか知りませんが、あっしは命を狙われてるんです」
小坂井は頭をぼりぼりとかいた。「ああ、そう聞いたぞ」
「旦那が一緒に歩いてくれたら、そりゃあ襲われることもねえだろうけど、でも、それじゃあこのあと一生そうしなくちゃならなくなる。あっしとしては、旦那にはこっそりとついてきてもらって、あっしが襲われたなら、そのとき駆けつけてきてもらいてえんです。で、襲ってきた野郎を斬る――」
加助はちらりと、小坂井の顔と、彼が腰に帯びている柄の古ぼけた大刀を見比べた。小坂井はとぼけた顔をしたままだ。
「――ことまでしなくても、二度とあっしをつけ狙ったりしないように、こっぴどくこらしめてもらいてえんですよ」
「ははあ、そういうことか」と、小坂井は顎を撫でた。夜目にも、無精ひげが浮いて見える。「それだと、おこうの言っていた話とは違ってくるぞ」
やっぱり。
「おこうはちゃんと話さなかったみたいですね」
「おぬしが客にからまれて、脅かされている。夜道を襲われるかもしれない。だから用心棒が欲しい。なに、長くても十日も旦那に夜道を送ってもらえば、相手も頭が冷えて諦めるだろうからという話だった」
十日とは、おこうもまた安く見積もったものである。いったい、一日いくらの約束をしたのだろう。
「そんな易しい話じゃねえんですよ」
小坂井は片手に提灯をぶらぶらさせながら、「ふうん」と呑気な声を出した。
「とにかく、今夜はわしと一緒に帰ろう。偶然行き会ったようなふりをすればいい。それで今夜のところは無事だろう。で、道みち事情を話してくれんか」
仕方がない。歯の根も凍るような二月の夜風を嚙みしめ、加助は語ることになった。

そもそもの事の始まりは、昨年の暮れに、扇屋の亭主徳兵衛が中風で倒れて動けなくなったことだった。
扇屋は、新大橋の袂、御籾蔵脇の深川元町にある居酒屋である。昼は飯も出す。徳兵衛と女房のお鈴のふたりで切り回し、そこそこ繁盛している店だった。
板場は徳兵衛ひとりが受け持っていた。お鈴は今年三十五の大年増だが、芸者あがりの仇っぽい女で、客の取り持ちはいいけれど、大根一本切ったことがない。徳兵衛に倒れられては、その日のうちに店が立ち行かなくなった。
「それで、あっしにお鉢が回ってきたんです」
加助はもともとは、日本橋西河岸町の「ひさご屋」という飯屋の通いの板前である。子供のころにここの板場に雇われ、使い走りや掃除の仕事を振り出しにずっと鍛えられて一人前になった。魚河岸や青物市場の目と鼻の先にあり、飯屋にしては法外な間口二間に二階建ての構えを持つひさご屋は、通いの板前だけでも四人を雇っているという大所帯だ。店は大繁盛だし、身代も安定していて、加助は生涯、ここで通いの板前として働くことができればいいと思い決め、真面目に務めてきた。

このひさご屋の主人が、扇屋徳兵衛と古い知り合いだった。扇屋の窮状を知った彼は、放っておくわけにはいくまいと、せめて徳兵衛の病状がはっきりし、店を続けてゆくことができるかどうかの見定めがつくころまで、うちの板場からひとり人を貸そうかと、お鈴に持ちかけた。

「ははあ、それでおまえに白羽の矢が立ったというわけか」

北風に提灯をぶらぶらさせながら、小坂井が言った。ふたりは猿子橋を渡り、左に南六間堀町の町屋を、右手に井上河内守の屋敷の塀を見ながら歩いている。この先、富川町のところで右に折れて小名木河端へ出るあたりまで、右手はずっと武家屋敷の塀ばかりが続いている。道は広いが、気味の悪い道中だ。後ろからわっと襲われて、冷たくごつい塀に押しつけられ、ぐいと合口を刺されたらそれでおしまいである。加助は、ときどき肩越しに後ろを振り返りながら先を急いだ。

「ひさご屋さんはあっしの恩人だし、助っ人とは言え飯屋一軒を任せるという仕事をあっしに振ってくれたんですから、最初は感謝してたんですよ」

それに深川元町なら、加助の住む柳原町三丁目の長屋から日本橋まで通う道の途中だ。寒い冬のあいだ、通いの距離が短くなるのも、じじむさいようだが、今年四十五になる加助には有り難い話だった。喜んで承知して、年明けに松がとれた早々から、彼は扇屋に通うこととなった。

「お鈴さんておかみさんは、ちっと気は強いけど、なんせ美人だし」と、加助はおこうの前では言えないことを言った。「事情が事情であっしを頼りにして大事にしてくれるしで、仕事はやりやすいし、最初の十日ばかりのあいだは、そりゃもう愉しかったんですけどね」

そこにとんでもない落とし穴があった。

「扇屋の常連のひとりに、勇吉っていう若い男がいるんです」

歳は二十五、六だろう。つるりと色白の男前で、話は巧いし酒は強い、金払いもいいとあって、扇屋にとっては上客のひとりだった。

「えらくきれいな手をしてるんで、堅気じゃねえだろうと、最初に会ったときからあっしはにらんでました。まあ、小博打でも打ちながらぶらぶらしてる遊び人でしょう」

この勇吉が、おかみのお鈴に目をつけて、岡惚れをしていたらしい。

「お鈴さんに聞いてみた限りじゃ、何度か誘われたけど、自分は亭主持ちの身だし、あんな男は好きじゃないし、そりゃまあ上客だから愛想のひとつやふたつは言っても、隙を見せた覚えはないっていうんですけどね。向こうはすっかりのぼせ上がって、どうやら、その気になればすぐにでもお鈴さんをものにできるようなつもりでいたようなんですよ」

そこへ持ってきて、亭主の徳兵衛が倒れた。勇吉は、ここぞとばかりに舌なめずりをしながら扇屋に乗り込んできた

——



「するとそこに、青ぶくれたようなおぬしの顔があったということか」と、笑いながら小坂井が言った。

「青ぶくれはひでえや」

ぴゅうっと唸るような北風に、加助は首を縮めた。彼は綿入れを着込んで襟巻を巻いているが、小坂井は袷の着物一枚だ。袖がぺらぺらとはためいている。寒くないのだろうかと見あげると、のっぽの古侍は、顔をそむけて大きなくさめを放った。

「それでその、勇吉がおぬしの敵というわけか」鼻をぐしゅぐしゅいわせながら、小坂井は言った。「早い話、逆上した岡惚れ男につけ狙われているというわけなのだな」

「そうなんです」加助はしょんぼりとうなずいた。

道中のやっと半ばを過ぎた。もうすぐ富川町だ。しかしここは、左右と前方を武家屋敷の塀にはばまれて、いちばん怖い場所である。ここを通りたくないばっかりに、昨夜はわざと遠回りをして、北森下町の方から町屋のなかばかりを抜けて歩いてみたほどだ。

新月の夜、寒さのあまりとてもじっとしてはおられないというように、星ばかりがせわしくちかちかとまたたいている。加助は襟巻をまき直した。

「勇吉は、あからさまにおぬしを脅しているのだな？」と、小坂井が訊いた。

「ええ。最初に扇屋で会ったのが一月の二十日ごろでしたかね。その日は、ぎろぎろとあっしを睨みつけながら酒をくらってるだけでしたけど、翌晩、あっしが帰るのを勝手口で待ちかまえていて、『命が惜しかったら、お鈴から手を引けよ、もう扇屋には足踏みするんじゃねえぞ、わかったか』なんて凄んでみせて、懐から刃物をちらちらさせたんです。あっしはただ、ひさご屋さんに頼まれて手伝いに来てるだけなんだって、一生懸命話したんですけどね。てんから聞こうとしな

かった」

「脅しはそれきりか?」

「とんでもない。そのあと、はっきりとわかるように夜道を尾けてきたのが——そう、十回じゃきかねえな。で、一昨日の晩は——」

　思い出すだけで腹が冷え背骨が凍る。

「この先の、深川西町のところで待ちかまえていて、家の隙間からさっと飛び出してきて、あっしを刺そうとしました」

　以来、加助は、刺し殺される夢を見続けてきたというわけである。

　小坂井は動じた様子も見せない。「うまくよけられたのか?」

「あっしだって必死ですもの」

「おぬしがよけたら、それ以上は追ってこなかったのかの?」

「うまい具合に、道の向こう側から夜回りが来たもんで。そうでなかったら、あっしはおだぶつでしたよ」

　小坂井は、北風にあおられる提灯を手で押さえつつ、「それはよかったなあ」などと呟いている。

　そうこうしているうちに、ふたりは新高橋の手前まで来た。ここを左に折れると深川西町である。

「昨夜はここを通れませんでした」

　加助は、自分でもそれと気づかないうちに小坂井にすり寄りながら呟いた。

「そりゃあそうだろう。おぬし、ひさご屋の主人に事情を話して、扇屋から手を引かせてもらおうとは考えなかったのか?」

「そんなことをしちゃ、申し訳がたたねえ」

「律儀だの」

「あっしが今、一人前に女房子供を養っていられるのも、ひさご屋さんのおかげなんですから」

「無駄とは思うが、お鈴に話して、勇吉を取りなしてもらうということはしなかったのか?」

「お鈴さんも勇吉を怖がってて、駄目なんです。お願いだから店を辞めないでくれって、あっしに泣いて頼むしさ」

「お鈴は自腹を切っておぬしに用心棒を雇おうとは言わなかったのか?」

「そんなこと、思いつきもしないでしょう。亭主の医者や薬にだって金がかかるし、あの人は女だし」

「おぬしの女房のおこうだって女だろう」

「旦那は女房ってもんを持ったことがないんですかい? あったら、そんなことは言わないね」

　小坂井の前歴はまったくの謎である。加助たちの住む長屋の差配人は頑固者で、堅い請け人がない店子は入れない。その差配人のめがねにかなったのだから、小坂井もそうそうでたらめな人物ではないのだろうが、元は御家人だったのかどこぞの藩士だったのか、どういう事情で禄を失ったのか、長屋の住人たちのあいだに、噂話のひとつとしてもこぼれてこ



ないのだ。

　風体だけを見ていると、生まれたときから浪人だったように思えてしまう小坂井の、昔の暮らしについてまともに尋ねたのは、これが初めてのことだ。加助も、さすがに気が咎めた。

「すいません、余計なことを言いました」

「なに、気にすることはない」小坂井はぶるんと胴震いをした。「しかし寒いな。手当はいらんから、おこうは一杯飲ませてくれぬかな」

「ようがすよ。あっしも飲みたい気分だ」

　深川西町と、その先の菊川三丁目の町屋を隔てる小道にさしかかり、右手の川を渡って吹き抜ける風に、ひときわ大きく提灯が揺れた。そのとき、小坂井が足を止めた。

「なんです?」

　加助は気色ばんだ。小坂井は、横着にも提灯をそのままかざして前方を指さした。

「誰か倒れておる」

　加助は目をこらした。なるほど、小道の手前の町屋の戸口に、大きなたらいが立てかけてあるのだが、その陰に、人の頭のようなものが見えているのだ。

「旦那……」

　動けなくなってしまった加助を後目に、小坂井はのしのしと歩んで、そちらに近づいた。提灯を片手にしたまま膝をつくと、倒れている人の首筋のあたりを探る。北風の冷たさに目に涙がにじんでくるのを感じながら、加助はそれを見守っていた。

「どうです?」

「死んでいるな」

　小坂井が答えたそのとき、加助の背後ですっとんきょうな声が響いた。

「あ、人殺しだ、人殺し!」

　加助はあわてて振り向いた。月もない夜の暗闇に、明かりと言えば小坂井の手のなかの提灯だけだ。しかも、一間と離れていない場所にいるその男は、手で顔を覆うようにしていた。振り向いた加助から後じさりするように後ろに跳ね飛ぶと、

「人殺し!」とわめきながら、一目散に逃げ出し、すぐに角を曲がって姿を消した。

「人殺し……なんかじゃねえよぉ」

　追いかけて叫んでみたけれど、無駄なことであるようだった。

　寒くて難儀だが、逃げるのもかえって妙だと小坂井に言われ、その場で亡骸の番をしていると、近所の連中は飛び出してくるわ、近くの木戸番の番人と土地の岡っ引きとが駆けつけてくるわで、騒ぎはすぐに大きくなった。聞けば、さっきの男が番屋に駆け込んだものであるらしい。

「まあ、当たり前であろうな」と、小坂井は懐手などして鷹

揚に言った。亡骸を確かめて、その胸に古びた合口が突き刺さったままになっているのを見つけたときも、ほほう、やっぱりな、などと呟いただけで、けろりとしていた。頭のなかがひっくり返ってしまっている加助とは大違いである。

最初から罪人扱いというわけではなかったが、小坂井と加助は、険しい顔をした岡っ引きに引っ立てるようにして番屋に連れていかれた。加助はしどろもどろになってしまったので、尋ねられたことには、小坂井が答えた。浪人者とは言え相手が武家なので、岡っ引きもしゃにむに突っ込んではこず、丁寧に話を聞き出してくれた。

「旦那をお頼みしていてよかった」と、加助は言った。小坂井はうなずくと、

「おぬしが今考えている以上に、よかったと思うぞ」と、謎のようなことを言った。

殺されていたのは、向島に住む島屋秋兵衛という素金貸しの老人だった。向島の者がこんな時刻に菊川町でうろうろしていたのは、ここに若い妾を囲っていたからで、彼女の元で夜を過ごしたあと、帰り道にこの難にあったものであるらしい。懐からは財布が抜かれ、腰につけていた銀の煙管もなくなっていた。しかし、合口で胸をひと突きというのは、物盗りとしてはひどく荒っぽい手口である。

そのあたりまでは、恐ろしい出来事だけれど、加助にとっては他人事だった。事がおかしくなったのは、岡っ引きが、妙にあやふやな口調で、凶器に使われたその合口が、加助の持ち物じゃないかと訊いてきたときだ。

「あっしの?」

加助としては、啞然とするほかない。

「あっしは合口なんか持っちゃいませんよ」

「本当かい?」

この岡っ引きは、つい先年跡目をとって前の親分の縄張を引き継いだばかりの若者である。岡っ引きなど、加助には縁のない存在だが、この若親分に限っては、長屋の差配人のところに出入りしているのを、一、二度見かけたことがある。若親分の方も加助が誰だか承知しているらしく、

「ひさご屋は辞めたのかい?」などと訊いてきたりもした。

「合口なんざ、あっしには用のねえもんです。あっしには包丁だけあればいいんだから」

番人に所望して、図々しいのか悠長なのか、茶などいれてもらって飲んでいた小坂井が、

「親分、誰がそんなことを言っているのか、当ててみようか」と言い出した。

若親分は小坂井に笑顔を向けた「ほう、旦那にはわかりますかい?」

「見当はつく。扇屋のおかみのお鈴だろう」

加助は腰を抜かしそうになった。若親分の笑みが大きくなった。

「当たりですよ。あっしらが、あそこに通りかかっただけだという旦那と加助さんの言い分を確かめに、扇屋に出かけていったら、おかみの方から言い出したんです。殺しに使われた合口はどんな合口ですか。加助さんは、このところ合口を持ち歩いてますよ、ってね」

「そんな馬鹿な話があるかい」加助はわめいて腰を浮かした。「お鈴さんがそんな嘘を言うわけがねえよ」

「しかしおめえさんは、勇吉とかいう、お鈴に岡惚れしている客に脅されてたんだろう? で、身を守るために合口を持ち歩くようになったんだって、お鈴は言ってるぜ」

小坂井が、口をぱくぱくさせている加助に向かって、

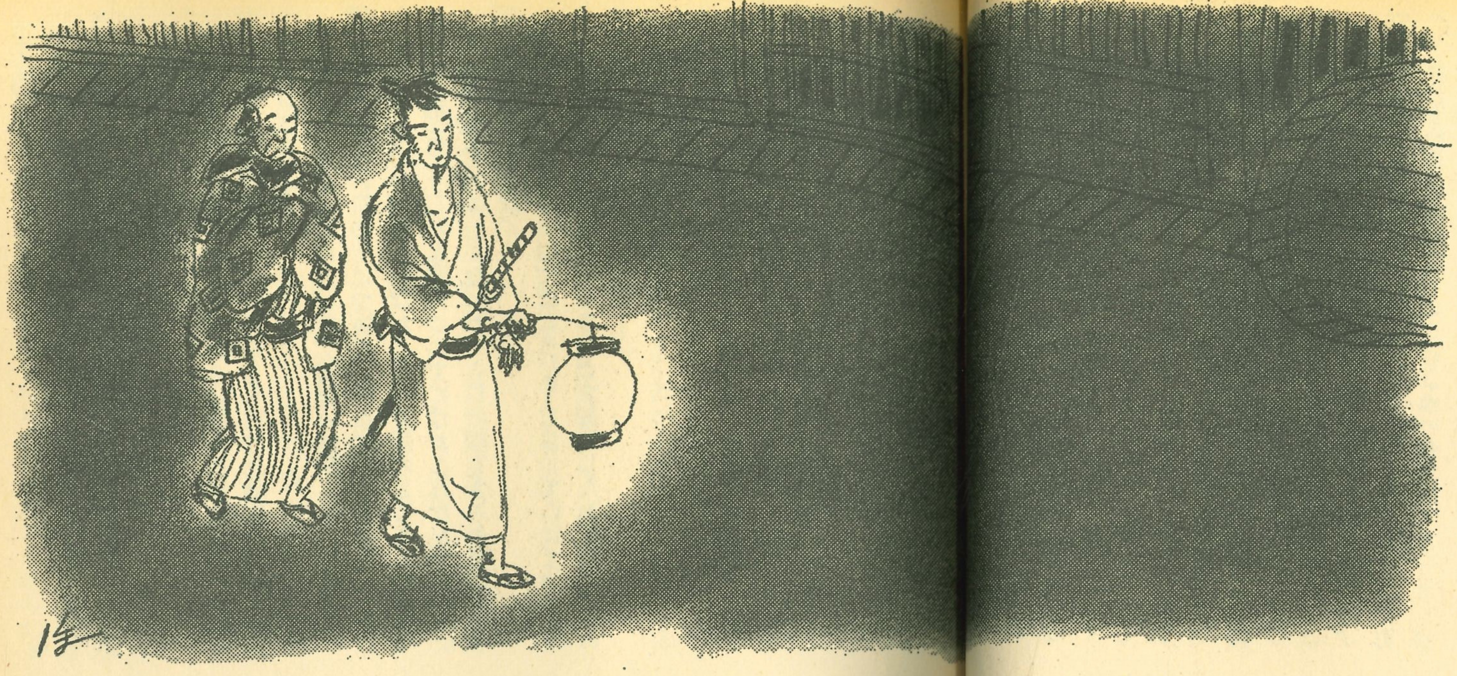
「おぬし、はめられたな」と言うと、がぶりと茶を飲んだ。

「いや、正しく言うなら、危うくはめられるところだったのだ。わしを雇っておいて、本当によかったな」

とんと舐められんもんだ、俺だってそれほど馬鹿じゃねえやと言いながら、若親分はがしがしと探索を進めた。事がはっきりするまで、加助は家にこもっていたのだが、若親分が訪ねてきて、苦笑しながら絵解きをしてくれるまで、事件から中四日しかかからなかったのだから大したものだ。

「お鈴と勇吉は、本当にできてたんだよ」と、若親分は言った。「勇吉は、殺された素金貸しの秋兵衛に、なんだかんだで五十両からの借金があった。大方、博打で負けたんだろう。それを帳消しにするために、お鈴と組んでひと芝居打ったってわけだ」

お鈴に岡惚れしているふりをして、勇吉が加助に因縁をつける。そうしておいて、秋兵衛が妾を訪ねてくる日を選び、帰り道に襲って刺し殺し、わざと合口を残しておく。あとはその亡骸を加助に発見させ、騒ぎになったところで、お鈴が出てきて「それは加助さんの合口でございます。いつも身につけていました、なぜならば勇吉に脅されて——」と、しゃあしゃあと嘘をつくという次第だ。



むろん、亡骸を発見した加助たちに、「あ、人殺しだ」と叫び、御注進とばかりに番屋に駆け込んだ男も、勇吉とお鈴の一味である。若親分の調べたところでは、どうやら勇吉の博打仲間であるらしい。

この男の役目と言ったら、まずは、加助が秋兵衛の亡骸を見つけたとき、人殺しと騒ぎ立てて番屋に駆け込むこと。次には、あとでお上に調べられたら、

「はい、あっしはあの加助って男があの人を刺すところを見ました」と、嘘八百を並べること。「懐を探って金をとるところも見ました」なんてことも言うつもりだったろう。図太い嘘吐きには、それほど難しい役割ではない。

だがしかし、加助にとっては運良く、お鈴と勇吉にとっては運悪く、この男の頭の中身は月夜の蟹の身のように痩せていた。このお膳立ては、加助がひとりきりで現場を通りかかり、ほかに証人がいないときに限って有効なのだということを考えず、加助が小坂井と連れ立っていたのに、ただただ素直に仕組んだとおりに騒ぎ立ててくれたおかげで、事件自体が妙ちくりんなものになり、隠すそばからボロが出たというわけだ。

「ああ、本当に小坂井の旦那をお頼みしておいてよかった」

心底から、加助はそう思った。

「旦那はこれを見抜いていたから、あの時あっしにそう言ったんだな」

ひたすら感動する加助に、負けじといいところを見せたくなったのだろう。若親分はふんと鼻を鳴らすと、

「たとえおめえがひとりでいたって、俺はこんな馬鹿な企てにはひっかからなかったよ。真面目な板前のおまえさんが、たとえ合口を持っていたって、どうしていきなり追い剥ぎめいたことをやって秋兵衛を殺さなきゃならねえ？　理由がねえじゃねえか。勇吉は、てめえが借金で尻に火がついてたもんだから、人を見れば理由もなく金を欲しがってるように見えちまったんだ」

「ははあ……」

「それにおめえ、自分でも言ってたじゃねえか。あっしには合口なんか用はねえ包丁がいいって。板前はそういうもんだよな。慣れてる獲物をつかうわな。お鈴の阿呆は、板前の亭主を持ちながら、そんなことなんかちっともわかっちゃいなかったのよ」

鼻息も荒く親分が帰っていったあと、加助はとっくりに五合ばかし酒を買って、小坂井のところまで提げていった。浪人は今日も傘張りに精を出していたが、嬉しそうに笑ってとっくりを歓迎した。

「頭の切れる若親分がいてよかった」と、いそいそと縁の欠けた茶碗を出してきながら言った。

「けど旦那は、もっと先からあのからくりに気づいていなすったでしょう？」

「ふん」と、小坂井はちょっと首をかしげて言った。「道みち、話を聞いていたときにな」

「どうしてです？」

「勇吉が、口先でおぬしを脅すばかりで、本気で襲ってはこなかったからだ」と、小坂井は言った。「先に深川西町で襲ってきたというときも、おぬしが逃げたら深追いはしなかったそうだな。つまりは格好だけだということだ。実際には、勇吉は、秋兵衛が妾のところにしけこむ夜を待っていたわけだから当然だが、しかし、あやつが本当に、いきなり刃物をちらつかせずには済まぬほど、お鈴に歪んだ岡惚れしていたのなら、一月の半ばから今まで、一度もおぬしを傷つけずに放っておくということはあるまいよ。狂気に急かれて、すぐにも襲ってきたろうよ」

加助としては、唸るばかりだ。

「そういうもんですかね」
「そういうものだ」と、小坂井は何やら考えこむような顔つきでうなずいた。「わしはこれでも、気違いについてはちょっと一家言持っている」
　それから半月ほど後のことである。小坂井又四郎が、いきなり長屋から姿を消した。一晩のうちにきれいに立ち去ってしまったのである。
　加助もおこうも大いに驚いた。物堅い差配人は、噂話が大嫌いだし、店子の身の上について、ぺらぺらしゃべることもしない。それがわかっていながらも、差配のところに押しかけて、旦那はどうしたと問いつめずにはおられなかった。
　差配人は干し柿みたいなしわだらけの顔をさらに歪めてしばらく考えていたが、
「旦那も、あんたら夫婦にはよろしくと言っていなすったからな」と呟くと、他言無用をきっと念押しした上で話してくれた。
「実は、あの旦那は敵持ちだ」
「かたきもち?」
「そうだ。ただの仇討ちじゃないよ。そんなのは、とっくに御禁令が出ているからな。上意討ち――つまり、小坂井討つべしという殿様のご命令で、昔の同僚たちに追われていたのだ」
　差配人は藩の名前は言わなかった。
「小坂井さまは、八年前まで、ある藩の江戸藩邸で用人頭を務めておられた。偉いお人だったんだ。ところが、小坂井様があんまり頼りになるからだろう、奥方さまが何かというと小坂井、小坂井というもので、殿様が悋気したんだな。有り体に言えば、小坂井様が奥方と密通してるんじゃないかと疑ったわけだ」
　差配人は、腹立たしそうに、手にしていた煙管を振り回した。
「この殿様っていうのが、もともと気性にそういうところのあるお方でね。狂気の血というのかね。可愛いとなったら呆れるほどに可愛がる。いったん憎いとなったらすぐに首をとるほどに憎いと、こういうわけだ。で、追っ手を向けられて、小坂井様はやむなく逃げた。奥方は実家に帰して、自分は脱藩して浪人したわけだな」
　加助は、小坂井が（気違いには一家言持っている）と言ったときの、あの茫洋とした目つきを思い出した。
「だけれども、藩のなかでも、殿様の狂気を案じている人たちは多くてな。特に跡継ぎの若様が、ああいう父親は早く隠居させて自分が跡目となるのがお家の安泰にも繋がると、ずいぶんと運動をしておられるそうなんだ。この若様と若様のご一党が、小坂井ほどの有能な者をあたら理由もない上意討ちにするわけにはいかないと、今までこっそりかばってこられた。殿様を隠居させるまでの辛抱だぞと、小坂井様にも約束してな。で、小坂井様も江戸を離れずに隠れ暮らしておられたわけだ」
「……そういうことでしたか」
「そうだ。ただ、今度のことで、小坂井様の名前が外へ出てしまった。町場での事件だから、心配はないだろうが、万が一ということがある。いくら若殿はかばってくれていると言っても、今の殿様とその腰巾着は、小坂井様を追いかけている。念のために隠れ場所はかえた方がよかろうということで、屋移りしたという次第だよ」
　加助は黙ってうつむいた。自分は旦那に用心棒を頼んだおかげで助かったが、旦那にはずいぶんと迷惑をかけたことになってしまったのだ。
　小坂井はあわてて発ったので、長屋の部屋のなかは大方そのままになっていた。荷物などほとんどないが、内職で張った傘を、届けずに長屋に残していった。あとのことは差配が頼まれているということだったので、加助も手伝って、それを問屋まで運んで行くことになった。
　差配と出かけようとしているところに、若い侍が訪ねてきた。いかにも勤番侍らしいもっさりとした風情で、かすかに言葉になまりがあった。小声で、丁寧な口調で差配を呼びつけた。
　しばらくのあいだ、差配はその侍と、頭を寄せてひそひそと話していた。その様子では、若侍は追手の側ではなく、小坂井をかばっている側に属しているらしかった。生真面目なその顔を見ているうちに、むらむらとこみあげてくるものがあって、加助は声をかけてしまった。
「小坂井様は、帰参がかないそうですか」
　差配が怒った顔でにらみつけ、若侍は目をぱちぱちさせて加助を見た。が、ちょっと微笑して、
「きっと、間もなくそうなる」と返事をした。
「あの方は、我が藩にはなくてはならぬ方だ」
　加助はほっと、気がゆるむのを感じた。
「そいつはよかった。折がありましたら、加助がうんと御礼申し上げていたとお伝えくだせえ。旦那に用心棒をお頼みして、あっしは本当に助かった」
「用心棒?」詳しい事情を知らないのか、若侍はきょとんとした。「ほう。小坂井様がな」
「そうですよ」
「あの方は、剣術はからきし――」言いかけて、若侍ははっと口をつぐんだ。真顔に戻して、「確かに申し伝えよう」と、角張った口調で言った。
　話をしているうちに、雲に閉ざされていた冬空から、ぽつりぽつりと冷たい霙（みぞれ）が降りだした。差配が、若侍に傘を勧めた。
「小坂井様の傘か」
　どこか懐かしそうに呟いて、若侍はそれを広げた。霙がしとしとと落ちてきて、傘の上で丸い水の球になり、ほろほろと転がり落ちた。

（了）

## 「あの屋根の上にいる娘は私どもが守ってやる」

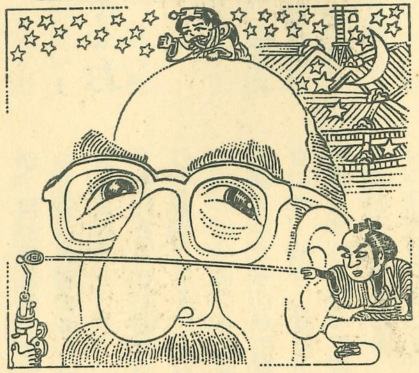
かつての時代劇映画は、原作の意図や思想を実によく伝えていた。たとえば、長谷川一夫の当たり役だった「銭形平次捕物控」の第九作「死美人風呂」(監督加戸敏、脚本小国英雄、昭31、大映)はどうだろうか。

映画が、はじまって間もなく、さる大名の御家騒動に巻き込まれた軽業小屋の太夫・美空ひばりが侍の一団に追われて逃げてくるシーンが映される。

執拗な追跡に持って生まれた身の軽さ、ひばり太夫が、武家屋敷の屋根へ飛び乗って逃げようとすると、業を煮やした侍の一人が懐から短筒を取り出して狙いを定める。ひばり危うし！と、どこからともなく飛んで来た六文銭が侍の手もとを狂わす。

時代小説・時代劇にみる
# おもしろ余話
縄田一男

### 名台詞・きめ台詞



「何者だ！」

と憤怒の形相凄まじい侍たちの前にニッコリ笑って登場する銭形平次。

「武士のすることに手出し致すか」

と一喝されながらも銭形平次、少しもひるまず、

「へい、御武家様方が何をなさろうとあっしたちの知ったことじゃございませんが、あの屋根の上にいる娘は、私どもが守ってやる筋合いの者でございます」と言い放つ。

このくだりを見て、私はさすが才人小国英雄、野村胡堂が書き継いで来た原作の心をしっかりつかんでいるな、と感心したことをおぼえている。

野村胡堂はいっている。

——私は銭形平次に投げ銭を飛ばさして法のユートピアをつくっているのだ、と。

胡堂は『銭形平次捕物控』の執筆に当たって留意したこととして「一、容易に罪人をつくらないこと。二、町人と土民に愛情を持ったこと。三、侍や通人を徹底的にやっつけたこと。四、全体として明るく健康的な捕物にしようと心掛けたこと」の四点を挙げているが、この信念から生まれたのが、江戸を大衆の持つヒューマニズムが貫徹される理想郷として捉える発想に他ならない。

「あの屋根の上にいる娘は——」という平次の台詞は、その日その日を懸命に生きている庶民たちの権力からの誇らかな独立宣言なのである。

## 私の習作時代

# 発想、曲折、転換



もりた なるお

小説を書く前段として、発想（着想）がある。発想には自発的なものと他動的なものとがあるのは、誰も同じだと思う。

かくかくしかじかの題材で何日までに……と原稿を依頼された場合、発想は他動によって行われる。

応募原稿、持ち込み原稿、あるいは自分史を小説仕立てにして書くこと、出版の目当てはないが、書きたい衝動によるときなどの発想は自発的である。

発想の段階に入った場合、発想にもさまざまなケースがある。

苦心して脳天茶巾絞りのとき、きらりとひらめくとき、もやもやゆらゆらと陽炎が立つ具合のとき、なんとなしに感じかけていたことが、ある現象に触発されて形が整う場合と種種さまざまである。

わたしの場合もいろいろだが、総じていえるのは、ワラビ採りの要領が多い気がする。

ワラビは生えているところがなかなか見つからないが、目が馴れるにしたがい狙い定めることができる。いちど狙いが定まるというと、次から次と生えているのが目に入る。

それと同じ要領で、発想は次から次へと広がっていくのである。ワラビ（わたしにとっては小説の発想）が籠にいっぱいになると同時進行の形で習作の段階に入る。本稿に与えられた主題が、わたしの習作時代ということなので、拙作〝真贋の構図〟（オール讀物推理新人賞）の習作について述べてみる。

この小説はもともと応募作品として発想したものではない。依頼原稿でもない。発表のあてはないが、歴史小説を試みようという自発的動機ではじめたものだ。

源頼朝の伊豆流配につき多少の関心があった。というのは、歴史書にもよったが趣味の釣行でしばしば伊豆狩野川にいき、狩野川のかつての中流域が、頼朝の流された蛭ヶ小島だったので、いっそうの関心を持った。

頼朝が流された頃の蛭ヶ小島は狩野川の中州で、川なかの小島であったという。供としてついてきたのが、藤九郎盛長であった。

主従ではあるが、ことによったら盛長は平家の監視人であったかも知れない。あるいは刺客ということも考えられる。

頼朝は盛長を忠実な家来と信じていたか。それとも疑心を抱いたか。盛長の実体はどうだったのか。両者の心理を根に置き、北条氏や伊豆の目代山本判官兼隆らの思惑などを織り込んだ一編を書こうと発念した。

陽春の某日、取材を兼ねて伊豆に釣行した。余談になるがわたしの釣行の足は鈍行の電車が専らである。新幹線や急行には乗らない。釣はビジネスではないから、秒きざみで急ぐことはないのである。ゆっくり時間をとり命の洗濯をすべきであろう。

閑話休題。伊豆箱根鉄道の韮山駅で下車して、真っ直にのびた農道を辿って、頼朝流配跡地を訪ねた。

頭上に雲雀の囀りがしていた。菜の花畑に蝶が舞いまことに気持ちがよかった。記念碑の碑文を写しとり、史跡の様子を写生し終えて、格好の石があったのでそれに腰を下ろしてひと休みした。

足もとには春の草花が咲き乱れていた。再びスケッチブックを開いて、気の向くままに野草の花々を描いた。

家に帰り、一週間くらいしてから小説のすじ書きをつくった。すじ書き作成を終え、下書きを進める途中で、取材行のときのスケッチブックを開いた。写生したものには往時を確認し得るものはひとつもない。蛭ヶ小島は跡形もない……と思いつつ草花の写生を見て、待てよと考えた。人為的なものはことごとく消滅したが、草花にはさほどの変化はないはずだ。このタンポポも……いや待てよ。現在日本各地に生えているタンポポは、明治初年に渡来した外来種だという。

「頼朝が流された頃の蛭ヶ小島に生えていた日本タンポポも、外来種にとって替わられているだろう」

わたしの考えは、永暦から昭和にとび、タンポポの在来種と外来種に関心が移ってしまった。この二種を材料にして小説はできないだろうか。歴史を現代に投影させて、真贋を争う推理ものはどうか。そこで思い浮かんだのは、主人公は昭和期の日本画家とし、歴史画によって頼朝流配時代を扱うことだった。

改めて下書をはじめると、ワラビ採りのでんで、次々と新しい仕掛けが浮び、進展が見えてきた。この習作をもとに推敲して出来上がったものを応募作品として提出したのである。

近頃考えているのは、これとは逆で、現代の事象をとらえて、歴史の舞台へ転換する推理小説である。習作として試みるつもりだ。

# 日本死人名事典●作家篇⑯有吉佐和子

「佐和子は燃えつきたのです。寿命です」と五十三歳の娘を見送った八十歳の母は言った

●死亡場所●東京・杉並区堀ノ内三の一六の六、自宅二階の書斎兼用寝室のベッド上。

●死に方●病死。

●死因①●急性心不全。

●死亡年月日●一九八四（昭和五十九）年八月三十日午前八時ごろ。

●生涯●五三年七カ月。

●第一発見者①●「急性心不全だった。朝、いつまでたっても起きてこない母を起こしにいって、祖母が見つけた。たった六秒で魂がぬけるのだそうだ。たった六秒の魂の迷いを、どうやって地上にひきとめることができただろうか。どうやって、この速攻から母を守ることができただろうか」（有吉玉青『身がわり』）

●第一発見者②●「九時過ぎに二階へ起しに行って、佐和子さんの手の冷たさに驚いたお母さんは、すぐ近所の主治医と救急車に連絡をとった。だが応急手当の甲斐もなく、主治医が午前十時十分死亡を確認したという」（丸川賀世子『有吉佐和子とわたし』）

●死の前夜●「前日の夜は普段どおり夕ごはんを食べ、そのあとは一階のテレビで、ナイターを観ていたという。巨人の勝ちだけど、いい勝ち方ではないと試合の批評をして、それでもきげんよく『ママ、おやすみ』といって二階へ上っていったとか」（同右）

●死亡記事●（毎日 昭和59・8・30夕刊）

「親しい人の話によると、有吉さんはここ二、三年そううつ状態がひどく、いらいらしがちだったという。（中略）気分の変化が厳しく、昨日言ったことと、今日言うこととがまったく違うといったこともあり、関係者をとまどわせたことも多かったという。

気分転換をはかるためか、深酒をすることも多く、親しい人には『こんなことをしていては駄目になるので、八月には入院しようと思う』と語っていたという」

●死因②●不詳。

「三十日朝急死した作家の有吉佐和子さん（五三）の遺体は、死因解明のため同日午後、東京都文京区大塚四丁目の東京都監察医務院で行政解剖された。杉並署に同日夕報告された解剖所見によると、肉眼検査ではくわしい病名は特定できず、さらに詳細な検査をすることになった。

所見によると、死亡推定時刻は三十日午前八時ごろ。胃に薬物は残ってなかった。睡眠薬の大量服用時にみられる発汗などもなく、心臓も肉眼で見る限り異常はなかった。

検視の結果、同署は病死とみているが、死因をさらにはっきりさせるため、血液、尿、臓器の精密検査結果を待つことにした」（朝日 8・31）

「死因は当初『心不全』とされたが、司法解剖にまわされることになった。自殺の疑いがあったのである。しかし結果は自殺、病死、いずれの判定もくだされず、『死因不詳』と記録された」（関川夏央「サーモスタットのない人生」『知識人99人の死に方』）



●葬儀●九月四日午後一時から、東京・文京区の東京カテドラル聖マリア大聖堂。

●墓地●東京・東村山市萩原町1都営小平霊園25区12側15の「有吉家之墓」。右側面に父真次、兄に次いで「マリア・マグダレナ有吉佐和子　昭和五十九年八月三十日帰天　五十三才」と刻まれている。隣の行には「寿徳院真室浄知大姉　昭和六十三年五月十日歿　俗名秋津（佐和子の母）八十四才」。



有吉佐和子

●追想文①
「世間的な義理づきあいを一切しない性質だから、人が死のうが生まれようが知らん顔で一人天下の勝手気ままな生活態度だ。睡眠薬を多用しているとか、精神安定剤を呑んでいるとか、そんな噂が聞えて来るばかりで会う機会は全くなかった。『恍惚の人』は百万売れたのにその次の『開幕ベルは華やかに』は部数がのびないので機嫌が悪いなぞという裏ばなしまでが何処からともなく聞えてくる。『恍惚の人』の百万部が彼女の人生を狂わせたような気もするし、噂を聞くたびにはらはらしていると、今度は死因不明の死亡だという。何処までも人騒がせの一人天下だ。死後に寄せられた批判がどれも幾分の冷たさを含んでいたのも已むを得ない。そんな事を気にする有吉でもなく

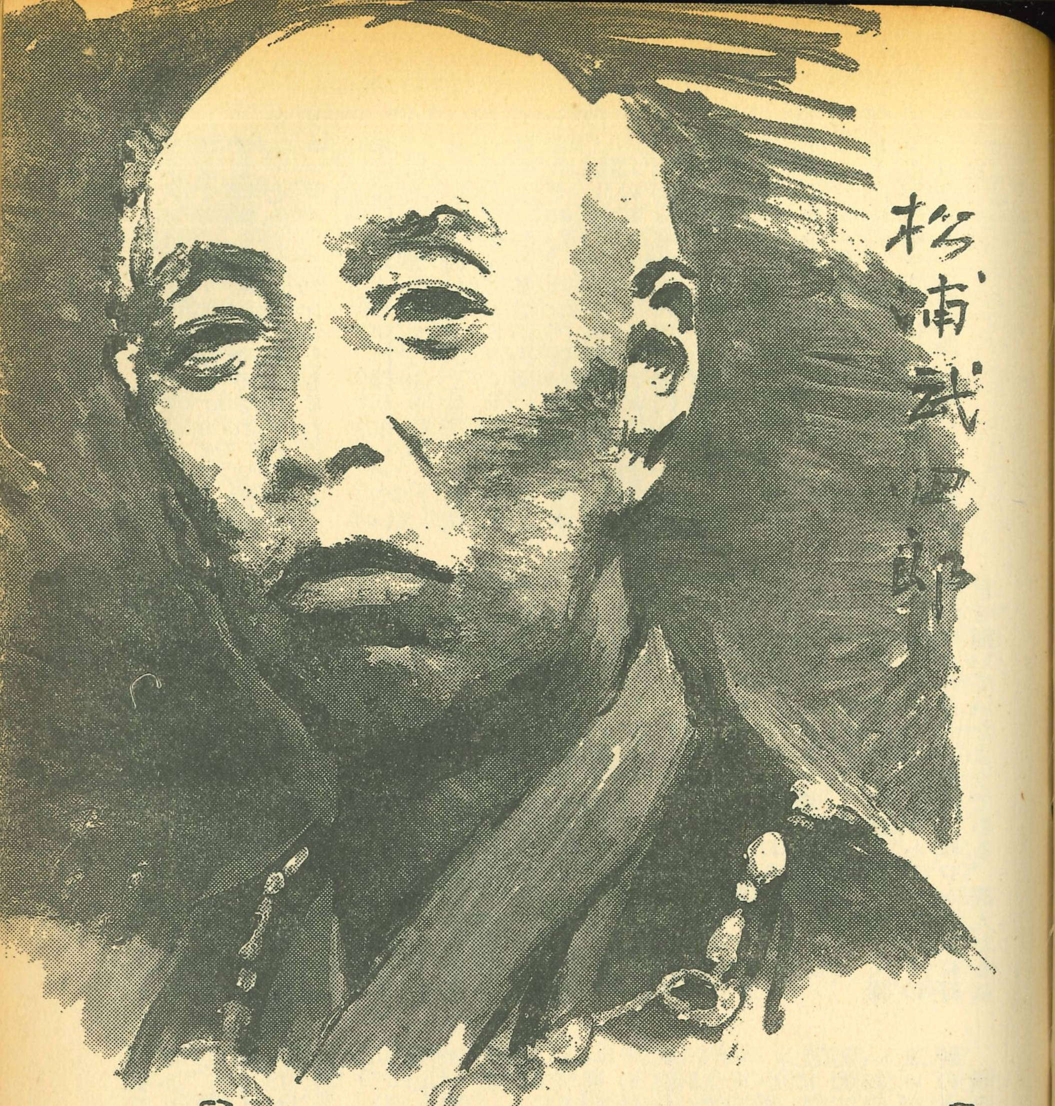
『私が死んだって誰にも来て貰いたくない』

といってるような気がする」（川口松太郎「佐和子可愛いや」『すばる』84年11月号）

●追想文②
「有吉佐和子は速足で、また、靴のつまさきの内張りに深い指の跡が残るほどに前のめりの人生を歩いた。誰でも人生のエネルギーは定量である。凡人はいたずらにそれを気化させて散じるが、非凡人たる彼女は燃焼効率よく集中して燃やし、多数の小説を書いた。しかし、才能に恵まれたかわり、彼女には体内のサーモスタットが生まれつき欠落していたから、肉体の加熱に気づかず、小説を生みだす体内の炎がついに彼女自身をも焼いた。私にはそんなふうに思えるのである」（関川夏央、前掲書）

●追想文③●
「最近彼女が、SFやポルノを書こうとしていたと聞き、彼女がいたましくてならない。ポルノは、従来の有吉さんとは、もっとも遠い世界である。社会的テーマを追う有吉さんが、ポルノを書こうとして、身を以てレズビアンの研究をしていたことを聞き、壮絶という思いを禁じることができなかった」（梅原猛「有吉さんを偲ぶ」『すばる』84年11月号）

（古井風烈子）






●〈新連載〉北の大地を駆ける男の夢とロマンを描く一大叙事詩！

# 北海道人

佐江衆一

宇野亜喜良画

## 竜飛岬へ

### 一

—危うい。危ういのう。

日本海の海鳴りのひびきに、そのことばが繰りかえし耳底からせりあがってくる。

—蝦夷地は、オロシャにかすめ盗られますぞ。

松浦武四郎、二十七歳。

弘化元年（一八四四）の晩秋である。

この青年は蝦夷地をめざして、日本海に面した西津軽の鰺ヶ沢にいる。この湊は津軽藩四浦のひとつで、蝦夷地の松前まで海上はるか十八里だが、北前船が寄港し、人家千軒といわれてにぎわっている。武四郎は魚屋市兵衛方に止宿し、船問屋村上勘兵衛に松前への渡海をたのんでいるのである。

去年、僧であった長崎で、津川文作という老人から北辺の切迫した情勢を、胸裡に刻まれるごとくきかされていた。

ロシアの南下で、蝦夷地は日ならずして侵食されるという。

そのことが、武四郎の人生を大きく決定したといえるであろう。

津川文作は長崎で乙名と呼ばれる、代々町年寄り格の酒屋町の庄屋で、たいそう博識な老人である。蝶園と号して本草学にもくわしく、山野を跋渉して珍種の薬草を採集したり、ときには長崎奉行所に召し出されて漂民の口供書を代筆したりもする。多少のオランダ語と支那語も解したであろう。

当時、商人や漁民の船が難破して異国にたびたび漂着した。漂民とはその漂流民のことで、ついでながら、日本で最初の漂流帰還者は伊勢の大黒屋光太夫であ

る。
光太夫はカムチャッカに漂着、ロシアに滞在すること十年、女帝エカテリーナ二世に拝謁して帰国をゆるされ、寛政四年（一七九二）、第一回のロシア使節アダム・ラックスマンにともなわれてようやく帰国した。
鎖国後はじめての洋行帰りといっていい。世人の好奇心をすこぶる刺激した。
しかし、幕府は光太夫を官宅に軟禁同様に居住せしめてロシアの実情をきびしく聴取し、海外事情が民間に伝播することをおそれた。ロシア側が光太夫らを手厚く遇して、日本の国情や語学を熱心に学んだのにくらべるときわめて閉鎖的だが、漂流帰還者と異国の漂民はナマの海外事情を知りうる唯一の情報源だったのである。
光太夫の口述は、医師で蘭学者の桂川甫周が二年後には『北槎聞略』として著わし、この書は公刊されなかったが、蝶園老人は市井に流布した光太夫の話をまるで四十数年まえに自分が露国をみてきたかのように武四郎に話したであろう。
漂民の口供書を代筆する蝶園は、おのずと海外通の老人であった。ばかりではない。唯一、海外に開かれた長崎はうわさの宝の市だが、文化元年（一八〇四）十一月には、第二回ロシア使節ニコライ・レザノフが通商をもとめて二隻の黒船で長崎に来航していた。
「あのときは、わしは二十歳をすこしすぎたばかりの血気さかんなころでな、竹矢来に囲まれた梅ヶ崎の館に四か月も滞在したオロシャ使節の一行を、毎日のようにみにいったものじゃよ」
と、蝶園老人はつい昨日のことのようにこのときの見聞を語った。
大勢のロシア人が翌年まで滞在して日本の春を迎えたことは広く世人の感興を惹き、余談ながらかの俳人一茶までが句を詠んで敵愾心をもらしている。
神国の松をいとなめおろしや舟
門の松おろしや夷の魂消べし
公用で長崎に出張した大田蜀山人は、ロシア船二隻が異国の楽の音を奏で帰帆する光景をつぶさに叙していて、その光景からみると、長崎人はロシア人に好意を抱いていたようである。商人たちは日露交易の開始を見越して、長崎の商人ばかりか諸国の商人までが長崎入りをし、通詞を介してレザノフに用達の申込みをした者もすくなくなかったという。
「だが、所詮むりじゃったな」
と、蝶園老人は吐き捨てるようにいった。
「ご公儀が交易をゆるすはずもないが、あのレザノフという使節、くわせ者じゃ。尊大でせっかちで、傲岸不遜な嫌な男よ。オロシャ人を信用してはならんな」
その証拠に、と老人はいう。
「通商を拒絶されて怒ったレザノフは、その後、軍船をもって蝦夷地に来襲し、大砲を撃ちかけ、村を焼きはらい、狼藉をはたらいたではないか」
「そのような狼藉を……？」
小柄だが体格が頑強で、声が人並み以上に大きい武四郎はききかえした。胸が万力でしめつけられるようである。
「お前さまの生れるまえのことゆえ知るまいが、蝦夷地からもっとも遠いこの長崎の者でも知っとるわい」
蝶園老人は叱るような声音である。



たしかに、老人のいうとおりであった。
通商を拒絶されて怒ったレザノフは、ロシアの目的を達するには武力しかないと肚を決め、帰途、オレウト列島からこのことをロシア皇帝に具申した。帰国すると部下のフォストフに命じて、文化三年（一八〇六）九月、カラフトのクシュンコタン（久春古丹）を砲撃し掠奪、さらに翌四年（一八〇七）四月には、エトロフ島のナイホとシャナを砲撃、シャナに上陸した。シャナ会所では間宮林蔵が勇ましく迎撃を主張したが容れられず、シャナ会所の幕府兵は敗退している。
ロシアの武力南下による蝦夷地の情勢は、この文化年間、にわかに急を告げた。余談ながら、蝦夷三官寺のひとつ有珠・善行寺の鸞州和尚は、アイヌたちまでを武装させて集め、次のようにいいきかせた。
――即今、赤賊来寇して干戈眼を遮る。衆心風旆の如く手足の置所を失う。汝等この干戈の時にあたりて、怖るる事なかれ、驚く事なかれ。ただ心を決して念死念仏のほか事あるべからず……。
文化八年（一八一一）になると、ロシア海軍のワシーリィ・ゴロブニンが千島列島の測量を名目に軍艦ディアナ号でクナシリ沖に来航した。
「あのときは、高田屋嘉兵衛が敵に捕えられ、こちらがゴロブニンを捕えて牢に入れたから、翌年、引替えて難なきをえたが、その後、オロシャが鳴りをひそめておるのは、軍船をととのえ大軍をようして蝦夷地を侵略せんと、虎視眈眈とねらっておるからじゃ。ひきかえ、ご公儀のなされようは歯痒い。危うい、危ういのう。このまま蝦夷地を捨てておくと、オロシャ国にかすめ盗られますぞ」
歯をむくほどに、蝶園老人は力説した。
このほぼ半世紀、幕府は北辺の防衛をおろそかにしたわけではないが、主なものは、天明六年（一七八六）に最上徳内をエトロフに差しむけたこと、寛政十年（一七九八）に近藤重蔵をエトロフに至らしめ、重蔵が山頂に立てられていたロシアの十字架を引きぬき、
『大日本恵土呂府』
と大書した標柱を立てたこと、寛政・文化年間に間宮林蔵がカラフトを探検し、カラフトが島であるのをたしかめたこと、そして享和二年（一八〇二）、蝦夷地の箱館以東を幕府の直轄地とし、箱館に奉行所をおき、南部藩・津軽藩などに命じて各場所に藩兵を配置し、文化元年に有珠・様似・厚岸に官寺を建立して僧を派遣したくらいである。ほかには、日本全国の沿岸測量をした伊能忠敬が、文化四年（一八〇七）に実測図をつくり、忠敬の死後、林蔵によって完成したことが主だった事柄といえる。
もっとも、幕府は文化四年には全島を直轄したものの、その経営の実をあげえず、文政四年（一八二一）には、直轄を廃止し、松前藩に還している。
しかし、文政元年（一八一八）には、イギリス人ゴルドンが浦賀に来航、交易を要求するなど、日本近海に異国船の出現が多くなり、幕府は文政八年（一八二五）、異国船打払令を発した。
天保二年（一八三一）には異国船がウラヤコタンと有珠に来航、守備兵と交戦した。

そして爾来、海防論が沸騰し、近年にわかに攘夷論も台頭してきたのである。

「先年のモリソン号の一件はどうじゃ」

蝶園老人はこの話に釘を打つようにいった。

「モリソン号と申しますと……？」

探検家として先達である、幕吏の最上徳内、近藤重蔵、間宮林蔵のことはよく知っていたが、このときの武四郎はその事件をくわしく知らない。

六年まえ天保八年（一八三七）六月、アメリカの貿易会社の快速帆船モリソン号が日本人漂民七名を乗せて浦賀に来航、幕府は砲撃して撃退したが、モリソン号は鹿児島にあらわれ、ここでも砲撃をうけて退去した事件である。この事件では翌年、『オランダ風説書』がモリソン号をイギリス船として警告したため、これを伝えきいた渡辺崋山、高野長英らは有名なイギリス人の中国学者ロバート・モリソンが来航したものと誤断し、この問題にふれて長英が著わした『夢物語』が口実となり、蘭学者弾圧の蛮社の獄がおこり、長英は捕えられたのだが、蝶園老人はもっぱら異国船来航による国難を誇張して話した。

鎖国以来、唯一の開港地として異国人に接してきた長崎人は、頭のやわらかい、開明的な人間が多いが、この蝶園老人は老いて頑固になったのか、それとも攘夷思想にかぶれたのか、かなり過激に蝦夷地の危機を他国者の僧である武四郎を焚きつけるように説いた。

――そうか、蝦夷地があったか。

これまで蝦夷地のことは頭からすっぽり抜けていた武四郎にとって、蝶園の話は青天の霹靂といってよかった。剃髪の頭が興奮で血ぶくれした。

武四郎は昨年、壱岐・対馬に渡り、荒海の海峡のかなたに朝鮮の山々を遠望して、

――朝鮮にわたってみたい。

と、切願した。しかし、鎖国の禁を犯しての渡海をあきらめ、対馬に半月ほど滞留したのみで、平戸の寺にもどったのである。

蝶園老人に出会った直後、長崎で入手した林子平の『三国通覧図説』『海国兵談』をむさぼるように読んだ武四郎は、心身が均熱すると同時におのれの不明を恥じた。

――朝鮮、琉球さることながら、なんと、蝦夷地こそ急務ではないか。

すでに六十年もまえの天明六年（一七八六）に出版された『三国通覧図説』は、朝鮮、琉球、蝦夷三国の地図をかかげ、全巻の三分の二以上が蝦夷地にかんする記述と絵図である。

その記述は、享保年間よりオロシャ国が千島列島に勢力を伸張し、エトロフにきて交易をはじめたが、その本心は測りがたく、あるいはエトロフを併呑する意図ではあるまいかと注意を喚起し、日本と蝦夷地は唇歯の国なのだから警戒しなければならないとして、蝦夷についてつぎのように述べている。

――蝦夷人の性は愚にして善である。オロシャ人のかれらに接するをみれば、かつて干戈を用いず、暴逆を働かず、柔順である。したがってオロシャ人は、蝦夷地が寒冷の地なので、胡椒を喰わせて氷寒をしのがせ、褞袍を与えて寒気をふせがせ、醇酒の良さをあたえて夷人の口をよろこばせ、ときに大砲をとどろかせて威厳をしめすなど、文武をかねて夷人をして馴れなびく術を施す。

――蝦夷地の文華ひらけず未だ開闢のときとおなじなのは、智者が出て教えることがなかったからである。日本、唐、オランダ、朝鮮が文物国となったのは、大智の人が出て、永年にわたり教化をすすめたからで、蝦夷にもかかる智者があらわれれば、開かれること疑なし。

さらに子平はいう。

――蝦夷人は和人を慕っているのであるから、すこしく招論すれば上国の風を望んで、その俗にたちまち変化するであろう。すなわち、欧羅巴諸国が遠く万里をへだてた他国をよく招論帰服せしめたごとく、蝦夷の俗変化すれば、すべて日本の領内になるであろう。

そして『海国兵談』は、「江戸日本橋より唐土および阿蘭陀までも境目なき水路なり」という名文句の海防論である。

この二書に武四郎は、脳天を玄翁で強打されたごとく衝撃をうけ、血の沸きたつのを覚え、かつ心がひろびろと世界へひらけるのを感じた。

人は、出合った書籍により人生が変わるものである。

武四郎は林子平の論に心酔し、子平に私淑した。

そして、再三にわたり蝶園老人を訪ねて、くいいるように話をきいたこの青年僧は、

――よし、蝦夷地にゆこう。

ひびきに応じるごとく、その肚を決めた。

蝦夷地。

津軽海峡のかなたによこたわる、山間河川の地理が未ださだかではない、北のさい涯ての未知の大地。古来、蝦夷人が住んでいるというが、冬は氷雪におおわれ、氷海でオロシャ国と地つづきになるとさえいわれる蝦夷島。

これまで北は陸前から南は九州まで、本邦のほとんどを歩き、未知の土地があればおのずと躰がうごき、そこに山があればおのずと足が高鳴って登ってきた若者である。こんどはそれだけではなかった。蝦夷地は外敵のオロシャに侵食されるという。異国船がひんぱんにわが国をおびやかす国難の時期に、武四郎はおのれの使命を自覚したのである。

性剛直、ほとばしるような情熱のもち主で、旅が飯よりすきなこの若者の当然の結論でもあった。

「蝶園どの、かたじけない。目から鱗が落ちたとは、いまの心境をいうのでしょう」

坊主頭を叩頭した武四郎は、満面に笑みをたたえていった。

「明日にも帰郷し、はじめは生国伊勢から、つぎにはかならず蝦夷地から、そして三度めはエトロフあるいはカラフトより、お便りいたします」

こうして武四郎は、足かけ六年をすごした長崎、平戸を去った。

去年十月、なんと十年ぶりの帰郷である。

## 二

大坂、京都に寄って、津の城下をすぎた武四郎は、夕暮れの伊勢参宮街道を急いでいた。

日暮れちかい時刻なので、行き交う旅人はすくないが、この街道はその名のと

おり、お伊勢参りの諸国の人びとで一年じゅうにぎわう。ことに春は参宮客が多く、街道が老若男女で埋まるほどである。

西方に伊賀盆地につらなる山脈がのどかに横たわり、土地の者が青山とよぶ山が、夕陽をあびて紅葉がひときわうつくしい。東方一里に伊勢湾があり、南北に平坦な田野がひらけ、冬は雪の降る青山から冷たい北西風が吹く日があるけれども、気候は温暖、なごやかな土地柄である。

やがて雲津川の流れと対岸に立つ石造りの常夜灯がみえてきた。

十七歳の秋に家郷を出奔して以来である。

渡し舟で雲津川をわたる。四十がらみの舟頭は、円頂黒衣の武四郎がすぐ対岸の須川村の庄屋の四男だとは気づかない。武四郎は合掌して岸にあがった。常夜灯のある土手の二、三町さきに、うねうねとした街道の両側に建ちならぶ須川村小野江の人家が見え、武四郎の生家は街道沿いの左側にある。

わが家の瓦屋根と黒塀が目にとびこんできた。さすがに懐かしく、鼻の奥がツンとした。

門を入り、母家の表戸をあける。どこへいったのか、たれもいない。薄暗い土間の、ひんやりとした三和土の匂いがする。旅の途中、ときおり想い出したわが家の匂いである。

文政元年（一八一八）寅年の二月六日の寅の刻（午前四時）に、伊勢国一志郡須川村（現・三雲町）小野江の郷士の四男として武四郎はこの家に生れている。

先祖は肥前の松浦党の一族で、伊勢にうつり、多気の城主北畠氏の家臣として土着したという。家紋は梶の葉、平戸の松浦氏とおなじである。

父は時春（桂介）。本居宣長の門下として国学を修め、敬神家の名望があったのは、伊勢神宮のある伊勢という土地柄であろう。母はとく。

武四郎は幼名を竹四郎といった。

四男の末子であるから、厄介者といっていい。幼少から父の感化で俳諧などの風雅をこのんだ。ちなみに蝦夷地の直轄が廃されたのは、四歳のときである。

七歳で曹洞宗真学寺の和尚に手習をまなび、疱瘡を病んだ九歳のとき、「お坊さまになりたい」としばしば口にし、父から許されず、みずから誦経をおぼえたが、名所図絵や地誌などをこのんで読み、他国の山河をうつしとったりして、あきることがない。

街道にしゃがみこんでは、門のまえをとおるお伊勢参りの旅人をじっとながめて、これまたあきない。

――変わった子だ。

父と母と兄たちは、おもったであろう。

文政十三年（一八三〇）。十二月に天保と改元されたこの年は、六十年に一度のおかげ参りがおこなわれ、春三月ともなると、家のまえの幅二間ほどの街道は、

おかげでさ　するりとな
ぬけたとさ

と、口ずさみながら絶え間なくとおりすぎてゆく老若男女の群れで、まことにふしぎなにぎわいを呈した。

手に手にひしゃくを持ち、講の者は揃いの白衣、なかには野良仕事の最中に抜け出してきたような服装の者もいれば、



老人の手をひく娘、疲れきって足をひきずる夫婦連れもいる。街道沿いの家々からひしゃくに布施をもらっては「おかげさま」と口々に礼をいって駆けてゆく年少の一団は、傭主に無断でお伊勢参りにきた「ぬけ参り」の連中であろう。

東は江戸はもとより関八州や東北から、西は備前、備後、安芸あたりはもちろん、四国、北九州あたりからまで来た。お国ことばもまちまちな大群衆が狂ったようにとおってゆく。

この年三月から五月までの、閏月をはさむ四か月のあいだに、三百七十万の参宮者が宮川の渡しを越えたという。一年間では五百万人にものぼった。

参宮という一生に一度の、諸国から集まったおびただしい人の群れである。

武四郎、数えて十三歳。

その武四郎の姿が閏三月のある日、夜が明けると屋敷から消えた。須川村の南隣は月本の追分で、奈良街道との分岐点であり、駕籠かき、馬子などの立場があってにぎわっている。そこに武四郎がいたと知らせてくれた者がいたが、夜になっても帰らず、八方さがしたが行方がわからない。参宮客にさらわれたのか。それとも神隠しにあったのか。大騒ぎになった。

翌朝、夜のしらしら明けに、武四郎はけろりとしてもどって来た。おかげ参りの大群衆にまぎれて、伊勢神宮の内宮・外宮に参拝してきたのだという。

「おもしろい」

そういって十三歳の少年が笑っている。旅がである。

参宮街道のかたわらに生れ育った武四郎の、生来の血がさわいだのだ。

お国ことばもまちまちな人びとをみて育ったこの少年には、人は旅するものであり、道は全国津々浦々に通じており、国境など無いのだというおもいが、肌にしみついていたであろう。

――旅に出たい。

とおもった。

しかしこの年、津藩の儒者、平松楽斎の塾に入門した。楽斎は声望をもってきこえていた。ついでながら、のちに武四郎と深い交友をむすぶ吉田寅次郎（松陰）が、長州萩城下の松本村にこの年八月四日に生れている。

三年後の正月、国学も学んだ武四郎は、突然のように平松塾を辞して家にもどった。そして、出奔して東海道を単身江戸に下った。十六歳の若者の心が、長途の独り旅へと駆りたてられたのである。

――俺は考えるより先に足が前に出、躰がうごく。

それがなぜか武四郎にはわからない。

江戸では、のちに生活の資ともした篆刻の技をわずか一月たらずで身につけた。生来器用であり、絵心の天稟があり、物事に熱中する性なのだが、しかし一月もたたぬうちに郷里から迎えの者がきて、帰郷せざるをえなかった。

帰途、中仙道をとおり、戸隠山、御嶽に登った。以来、登山が病みつきになった、というような生まやさしいものではない。全身全霊、山に憑かれ、旅のとりこになったといっていいであろう。

翌天保五年（一八三四）、武四郎、十七歳。九月九日、父からもらった一両をふところに、ふたたび家を出た。家人は、四男なのだからどこに行ってもいいが、どうせ二、三か月で舞いもどってく

るだろうとたかを括っていた。ところがである。この日から十年、家郷にもどることはなかったのだ。
武四郎は誌している。
――我れ今より諸国を遍歴せんとす。何を以てその資を得べきや。絵師たらんとするもその技拙なり。俳諧師また可なるも世に文盲者多し。未だ糊口を充すに足らず。若かず篆刻家たらんには、と乃ち諸方を訪いしも容易に師を得る能わず。ここにおいて発奮し、自ら一本の鉄筆と一冊の印譜とを懐に、飄然として浪華の街に下り……。
大坂では大塩中斎を訪ねている。中斎は大坂東町奉行所の与力であった大塩平八郎である。すでに隠居して、陽明学者として名高く、洗心洞塾をひらいていた。
「貴公、当地にしばらく滞在してはどうか」
と、中斎はこの若者に塾生になることをすすめた。しかし、武四郎はこれを辞した。
この二年後の天保七年（一八三六）、中斎は塾生を率いて、大塩平八郎の乱をおこし、翌年、自害している。もし武四郎が塾生になっていたなら、運命は変わっていたであろう。
大坂をあとにした武四郎は、播州、備前をへて四国にわたり、讃岐、阿波をまわって淡路から紀州和田にきて、印南谷の猪小屋に野宿して越年した。一両の路金はとうにつきている。手行李には鉄筆と一冊の印譜がある。ゆく先々で篆刻をして、糊口をしのいだ。
伊勢人の気質は吝く、よくいえば堅実である。武四郎もその例にもれない。
翌天保六年（一八三五）、十八歳になった武四郎は、紀州の田辺、富田、串本をすぎ、那智山に登り、熊野本宮に詣で、高野山にも登り、粉河寺から和泉の槙尾峠をこえて歓心寺に南朝の古跡を訪い、河内、大和、山城、摂津、丹波、播磨、但馬、丹後、若狭をへて越前に出、敦賀、福井、三国、吉崎、加賀の大聖寺をすぎ、白山に登ろうとしたがまだ雪にとざされていて果せず、中宮までで引きかえし、能登にいたり、越中の石動山に登る。そのあと飛騨に入り出瘡を病んで難渋する。村役人の宅などで四書、唐詩を講ずるなどして糊口をしのぐ。
その後、美濃高山から三河の鳳来寺山、光明山、秋葉山に登り、信濃をへて甲斐の金峰山、身延山に登り、五月初旬、一万二千尺の霊峰富士山にはじめて登攀した。
そして、八王子から江戸に入った。
江戸ではその夏、水野越前守奥向へしばしのあいだ奉公したり、真言宗の寺でにわか出家をしたりしている。束縛を嫌う青年が屋敷奉公に尻が落着くはずもなかったであろうが、法体であれば旅には便利であったろう。江戸を出ると、日光、白河、仙台、松島、相馬まで北上し、水戸、鹿島、香取、九十九里浜をへて江戸にもどり、十一月、三州御崎より便船で鳥羽にゆき、伊勢のわが家にはもどらず、熊野路をへて、船でふたたび四国にわたり、讃岐の八栗山のふもとで越年した。
天保七年（一八三六）も四国八十八カ所の遍路からはじめて伊予の石槌山に登り、天狗岳にいたり、六月には剣山に登る。近畿にもどり、中国地方から山陰、山陽をへめぐり、大山に登り、尾道から





広島に入って越年した。
天保八年（一八三七）、武四郎、二十歳である。正月四日は宮島に参詣、岩国、山口、室津をへて九州小倉にわたり、博多、太宰府、唐津、名護屋、伊万里に出て大村に泊る。ここではじめて大坂の大塩平八郎の乱のうわさをきいた。これより、長崎、天草、鬼界ヶ島から島原にいたり、雲仙、妙見、普賢の三岳に登り、諫早から佐賀、久留米、高麗山、柳川、三地をめぐった。ちなみにモリソン号事件はこの六月である。七月、筑紫の不知火を見て、鎮西修験道で名高い英彦山、耶馬渓の奥の院、求菩提山、宇佐八幡に詣で、別府、田原、臼杵より肥後の都留へむかう途中で三人の賊に遇う。
――わずかに貯うる一朱銀二箇を遣したり。賊、決して賊にあらず。実にただ凶作の故なるべし。余、今日にして三日米一粒も不レ喰。蜀黍のみを喰す。
と手記に誌している。
鹿児島へは他国者は入国がゆるされないので、曹洞宗の僧になって入った。九州をくまなくへめぐり、富岡で越年。
天保九年（一八三八）二十一歳を迎え

た正月、富岡から長崎に入って疫病にかかり、高熱を発した。
この大患がひとつの転機となった。
——あのとき、近江の僧弁流どのと長崎の藤崎惣左衛門どのの二人が手厚く介抱してくれなかったなら、他国のひとくれの土と化し、行き倒れになっていたであろう。
十七歳で家郷を出て以来、一度として家郷にもどらず、足かけ五年もの歳月、旅に明け暮れたのである。それも、道があれば歩き、そこに山があれば登り、川があれば渉り、海があれば船に乗った。みちのくの半ばを除いて、ほとんど全国の山に登り諸国を遊歴した。
人が見れば、旅狂いというであろう。驚くべき行動力である。
天性の漂民。
この漢こそそういえる。体格は頑強、脚は勁く、速い。
だが病いは武四郎の足を止めさせた。人の情にも心をひらかせた。
人の恩をふかく感じ、病いが癒ると報恩のため、臨済宗禅林寺の謙堂和尚のすすめをうけ、禅宗に転じて、

文桂
と名をあらためた。三月二十八日のこの日、郷里では父が病没したが、その訃報に接するのはこの年の暮れである。
翌天保十年（一八三九）、二十二歳の文桂は、禅寺の若い雲水となった。五月、蛮社の獄がおきたが、武四郎は平戸にわたり、参禅修行ののち宝曲寺の住職となり、天桂寺の寺務も兼ねた。天保十三年（一八四二）には、粉引村の千光寺に移った。
この三年間は、武四郎の生涯で唯一、平穏無事な歳月であった。だが、無事がなによりという齢でもなく、生来の漂蕩不羈の血が鎮まったわけではない。
千光寺の目のまえには海があり、生月島、小鹿島がみえ、北には壱岐、対馬が望まれ、その海峡のかなたに未知の朝鮮半島がある。海外のうわさの市の長崎も近い。
蝶園老人の蝦夷の話は、ひととき鎮めていた血を沸き立たせたのである。
弘化元年、十年ぶりに伊勢の生家にもどって二十七歳を迎えた武四郎は、二月十三日、母の三年忌とあわせて父の法要をすますと、蝦夷地への壮途にあたり、伊勢神宮の内宮と外宮に参詣した。しかし、古来から僧は広前での参拝がゆるされないので、武四郎は坊主頭に附髷をして広前に額づいた。
——このときふと思うには、皇国の民にして今、皇神の御前に額拝すること叶わざるぞうたてける。是れ我が髪をおろせしが故なり。いざ今日かぎりと思いきって、今まで前に結びし帯を後ろえとまわし、僧の念を絶されば……
と、自伝に誌している。
武四郎は皇大神宮に祈願して、還俗し、蝦夷地をすみずみまで探り、いつの日か皇国のためになろうと、みずからに誓ったのである。
武四郎には伊勢人として父ゆずりの国学の素養がある。いささか大げさにいえば、皇大神宮の御前での、憂国の志士の誕生といえるであろう。
二月二十五日、家郷を出立した武四郎は、しかし一路、蝦夷地に直行したわけではなかった。京に上り、大坂に滞在してから近路地を北陸にむかい、越中の立山に登ろうとしたが雪が深くて果せず、



越後路を通り、新潟から会津に入り、磐梯山に登り、山形に出てまず蔵王山の山頂をきわめた。そして出羽修験の霊場、出羽三山の湯殿山、羽黒山、月山に登って参詣、さらに鳥海山にも登り、秋田、弘前をへて、九月十二日、ようやく鯵ヶ沢についたのである。
還俗はしても、朝夕、般若心経と楞厳神咒は口にかかしたことはなかった。般若心経は長崎で病中に禅僧から口授されたのであり、楞厳神咒は役の行者を神変大菩薩と尊崇する山岳行者が口誦して怠らない。役の行者の衣鉢をつぐ者と自任した武四郎は、この二経をかかさなかったが、みちのくの霊山を踏破することで、十年の歳月の放浪に区切りをつけようとの想いがあった。
さて、あしばやに秋がすぎ、早くも雪さえ降った西津軽の鯵ヶ沢で、蝦夷地への渡海を待っている武四郎である。

## 三

「松浦さま、松浦さま」
あわただしく駆け込んできた亭主の市兵衛が、狼狽した面もちでいった。
「お役人衆がご詮議に……」
あとのことばを呑みこむようにして、武四郎の顔をまじましとみている。
「宿改めですか」
それには馴れている。しかし五十がらみの市兵衛は、もう七日も滞在している武四郎をはじめてみる相手のように、疑いの色さえその目ににじませてこわごわみつめている。
そこへ役人が六、七人も踏み込んできた。津軽藩の捕吏である。血相を変え、六尺棒をにぎっている。
有無をいわせず武四郎を引き立て、近くの名主宅に連行した。尋常な宿改めではない。
名主宅には郡奉行所の同心が待っていた。
「姓名、生国をうけたまわりたい。いずこより来たりて、いずれへまいられる？」
ことばは丁重だが、えらの張った顔つきの同心は、配下に目くばせして武四郎をとり囲ませ、きびしく訊問した。
武四郎は伊勢大神宮のある伊勢国の者で、諸国の霊山をまわらんがための「修行者」として関所を通っている。このときもそのことを告げ、さらに伊勢大神宮の御師であるともホラを吹いた。
御師は神人でも武士でもないが帯刀をゆるされており、諸国をまわって伊勢神宮の御札をくばり、参宮の講を結ばせたり講の参宮客を伊勢まで連れてきたりして御師の館に宿泊させ、参宮のいっさいの世話をする。今日でいえば、参宮ツアーのツーリストとホテルの社長といってもいいであろう。ともかく伊勢ではむろん諸国でも力をもっていた。
「伊勢の修行者で御師か……」
津軽あたりでは伊勢参宮は、願ってもかなえられぬ夢である。同心は一目おく表情になったが、懐から人相書をとり出し、武四郎の面貌と仔細に見くらべた。
「ふむう……」
ようやく違うと判断したらしく、
「造作をかけ申した」
と会釈をした。

「お役目ご苦労ですな。たれをお探しです？」
「いや、なに……江戸の蘭学者でござる」
疑いを解いた同心は、根は純朴な津軽者らしく、黄ばんだ歯をみせて苦笑し、
「役目とは申せ、面倒なことでござる。江戸の牢を破牢した高野長英なる者が、このあたりへ立ちまわっておるやもしれぬとの公儀のお触れにて、きびしく詮議しておる。松前へわたるのではないかとのうわさもござってな」
天保十年（一八三九）五月、蛮社の獄で渡辺崋山らとともに捕えられた高野長英は、その年十二月、永牢の裁きをうけ、江戸伝馬町の牢に五年余もいたが、この年六月三十日未明、獄舎が火事となり、慣例により囚人の切り放ちがあって牢を出て、そのまま行方をくらましていた。洋学を弾圧した幕府は躍起となって追っており、長英は南部藩領水沢の出身で、母が郷里に在ったため、奥州方面へ立ちまわる可能性ありと、とくにきびしい探索がおこなわれていたのである。
松前への渡海を待っている武四郎は、そのことでも怪しまれたわけだが、疑いは晴れたものの、同心は松前への渡海を厳につつしむようにといい、武四郎を宿に帰した。道理で渡海を頼んである船問屋からよい返事がないわけである。
この地で知り合いとなった医師の篠崎太仲と松本寿庵が、
「来春まで滞在されて、よい機会を待たれてはいかが」
と、親切に助言してくれた。
しかし、武四郎の気質では待つわけにはいかない。鰺ヶ沢を出立し、北へむかった。
すでに初冬。小雪さえ舞っている。日本海の荒海から北西風が吹きつけ、断崖沿いのほとんど道なき道を、七里長浜、十三浜、小泊へと、武四郎はひたすら北上した。
小泊は本邦西海岸での北端の湊で、北前船の中継地でもある。その北およそ四里に、津軽半島の最北端、竜飛岬がある。
——此の間、行路の千辛万苦、筆紙に尽す可らず。
と、自身記している。旅の熟練者である武四郎が、本邦で味わったもっとも苦難の行路であったであろう。
小泊の湊でも渡海できなかった武四郎は、ようやく竜飛岬に立った。
風が強い。身を切り裂く北西風である。遙かオロシャの方角から日本海をわたり本邦の北端の岬に吹きよせてくる烈風。からからと怒濤の鳴りひびく津軽の海が眼前によこたわっている。
竜の飛ぶ、風の岬。
海峡のむこうに、蝦夷地が望める。
午後の陽をあびて、雪の岩肌がくっきりとみえるのは、松前領の白神崎であろう。左右に、まだらな雪におおわれた山々のつらなる広大な大地がひろがっている。
竜飛岬から白神崎まで、わずか水程六里である。
武四郎の目は鷹のように鋭い。遠目が利く。
白神崎のはるか左手に、福山城を見た。小高いなだらかな山頂に、松前侯の城砦の甍と白壁が芥子粒のように蝦夷地の陽をあびている。
松前氏は文化四年、蝦夷地全域が幕領となったため陸奥国伊達郡梁川に移封さ



れたが、文政四年、幕府が直轄を廃したので旧領復帰をゆるされ、翌五年に松前にもどった。米が取れぬので石高は無きにひとしいが、蝦夷地の交易で数万石の内情である。弘化二年のこのとき、藩主は幼君の十一代志摩守昌広。
のちのことになるが、松前藩から憎まれ、刺客にしつこくつけねらわれることになる武四郎は、このときはじめて津軽海峡のむこうに福山城を芥子つぶほどに目にしたのである。
白神崎の右に目を転ずる。雲のわだかまるあたりが箱館であろう。さらに右手に恵山岬が望見でき、うっすらと山脈がつづき、あるかなきかの雲と溶けあって、東方へ限りなくつらなるごとく消えている。
「蝦夷地——」
その三文字のことばを、武四郎は竜飛岬の烈風に吠えるごとく声に出していた。
夢にまでみた大地である。いくらみてもみあきなかった。津軽の海のすぐそこに穏やかに横たわる大地が、オロシャ国に侵食されようとしている。
——あの蝦夷地をこの足裏で踏みたい。
武四郎という漢の余人とはきわだったちがいは、大地を踏みしめる足裏で物事を考えることである。足心が頭脳といっていいであろう。
さらに東方に目をうつすと、津軽の三厩の海岸線のかなたに高野崎が津軽海峡に突出し、その先の本邦の最北端、下北半島はみえない。三厩の湊から白神崎までは水程七里である。当時、蝦夷地への最短の渡海は、松前なら三厩、箱館なら南部領下北半島の大畑、佐井、大間からであった。
西方に目を転じると、はるか松前沖に離れ島の大島、小島が影絵のように望め、日本海に真紅の夕陽がかたむいていた。
小さな竜巻が、日本海から津軽海峡へと、海面をきらきらと波立たせてさながら竜神の飛翔のごとく通り抜けてゆく。
それを合図のように、みるみる雲がわき、視界がとざされ、いっそう激しい風

に雪が舞った。

岬の崖上に佇立したまま、武四郎は風雪を全身に受け容れるように受けた。海峡の潮流と断崖の直下に打ちよせる怒濤が轟々と鳴りひびいている。

この海峡には三つの潮ゆきがある。竜飛鼻の潮、中の潮、白神の潮。

いずれも方向が異なり、しかも日にいくどか方向を転ずる。

陽はまだ日本海に没していないのに、薄暗く、日昏れのようである。断崖の眼下にある岩山のような帯島も見えなくなった。それでもなお武四郎はかっと両眼をみひらき、風雪に打たれて立ちつくしていた。

ついでながら、吉田松陰が竜飛岬を訪れるのはこの八年後、嘉永五年（一八五二）の早春、二十三歳のときである。松陰はこの岬で詩を詠んだ。

去年の今日巴城を発す
楊柳風暖かに馬蹄軽し
今年北地更に雪を踏み
寒沢三十里路行き難し
行き尽す山河万夷の険
……

武四郎はようやく崖上をおり、怒濤の打ち寄せる水際に立った。無人の小屋が数軒、断崖の岩肌にしがみつくように立っている。人影もなく、磯に小舟の一艘としてなかった。

よぶんなことだが、今日では四十二年の歳月をかけて完成した全長五三・八五キロにおよぶ世界最長の竜飛海底トンネルが、このあたりから北海道を結んでいる。

武四郎は怒濤が打ちよせる磯の小径を三厩へとむかった。雪はやみ、雲がきれて日昏れの空がのぞいている。竜飛岬から二里ばかりきた小聚落で、武四郎の足がぎくりとして止まった。小屋のまえで火を焚いていた者と顔が合った。老女である。口もとに黒ぐろと刺青をしている。

「夷人（アイヌ）」

身なりは和人だが、眉が濃く、耳飾りもしている。老女はすぐに面をふせた。俯いた顔に焚火の火影が映っている。

武四郎はこのとき生涯ではじめてアイヌに出会ったのである。

そこは宇鉄村といった。ウテツは和語



とはおもえないが、さりとてアイヌ語でもない。よほど訛った地名なのであろう。傍らに小川があるから、「川尻に簗がある」意のオ・テン・ウン・ぺがオテシ——オテツ——ウテツと転訛したのであろうか。ちなみに、ツガルはツガリ（崖）からきているであろう。

ともかく、武四郎はこの宇鉄村で村人から話をきいた。村の者はみなアイヌの子孫で、寛政のころまでは髪をのばし髭をはやし、女は口に入墨し、耳環をつけ、たれもが着物を左前に着ていたが、いまはそれを秘して人に語らず、家にある太刀や行器もみせないという。

——酋長の名はタマタカイン、アシタカイン、クロタカイン、権助、左之吉。

と、武四郎は旅の手控帳に記した。

その夜に泊った三厩の湊からも松前への渡海ができず、大浜、青森、小湊へと、訪ねる人があれば訪い、野辺地にい



たって、島屋という家が最上徳内にゆかりありと知った。かつて松前藩に蝦夷地への渡海をはばまれた徳内が土地の人びとと親しむために鋏細工をしてあたえ、徳内膏薬を調合して売り、この家の養子に入って蝦夷地の様子をさぐっていたというのである。武四郎は蝦夷地渡海の困難さを徳内に照らして味わった。

下北半島では恐山に登り、東海岸の尻屋岬に出て、大畑の湊、そして最北端の大間崎まで足をのばし、佐井の湊へもいったが、津軽海峡のかなたにエリモ岬、すぐ目のまえに箱館の恵山岬を望んだのみで、ついに渡海の機会はなかった。

しかし、下北の里人は伊勢神宮の御師さえ来ることのないこの辺地に武四郎が来てくれたとよろこび、伊勢大神宮の御祓いに涙をながして武四郎を歓待した。

すでに厳冬である。武四郎は止むなく引きかえし、八戸、釜石まできて、さらに峠をこえ、仙台領唐丹村で越年し、蝦夷地への渡海を新年に期した。

——今年こそは。

弘化二年（一八四五）、武四郎二十八歳である。

# 蝦北の雁

## 一

東北の遅い春も闌けた四月初旬、ふたたび鯵ヶ沢についた武四郎は、さきに懇意になった人びとの世話で、松前と江差の商人斉藤佐八郎の持ち船に乗ることができた。

半年待ちあぐねての渡海である。

鯵ヶ沢の湊をでた船は小泊の沖をすぎ、やがて竜飛岬を右にみて、いよいよ津軽海峡にかかる。

空はちぎれ雲を浮かべて晴れわたっていたが、風が強い。紺碧の海に怒濤の白波が立っている。

まず難所のひとつ、竜飛鼻の潮である。岬の鼻にある岩礁に潮流が渦まき、渓谷の早瀬のように海峡のほうへと奔流している。その潮に船を乗せながらも岩礁に寄らぬよう、西からの強風に逆らって柁をとらねばならない。船頭も水手も、海藻で編んだ簑を頭からかぶり、大浪にさらわれぬよう腰に命綱をまきつけ、喚くような大声で調子をあわせながら、柁をとり帆をあやつる。

——たいしたものだ。

海にいのちを賭けた男たちの息の合いようが、である。それが羨しくもおもえる。武四郎は仲間もなくたった一人で、おのれの使命にいのちを賭けねばならない。

——それが漢だ。

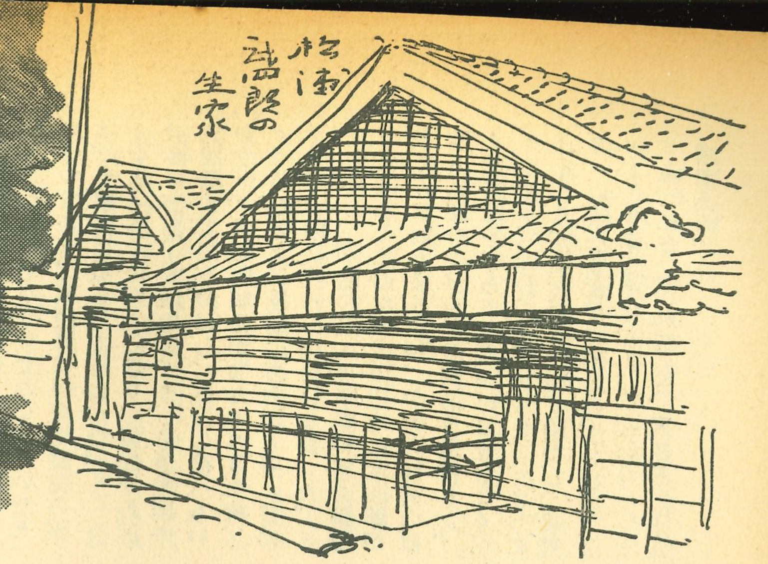
ようやく竜飛岬を離れると、中の潮に逆らわぬように乗り切る。蝦夷地の白神崎が近づいてくるが、第三の難所、白神の潮が待ちうけている。

——転柁の業も如何ともしがたく内地無比の嶮潮なるべし。

翌年の五月から記す『初航蝦夷日誌』に武四郎は記している。

津軽海峡を乗りきり、松前の湊についた。

波静かな入江に北前船の弁財船をはじめ大小のおびただしい船が錨をおろし、伝馬が燥ぎまわる童のように漕ぎまわっている。




全身ずぶ濡れの武四郎は、その草鞋ばきの足裏に蝦夷地を踏んだ。砂のぬくもりが感じられる。小石まじりの砂浜である。一歩一歩たしかめ、踏みしめた。

松前の城下町が山すそにひらけ、三筋の川が流れこむ街衢は人馬でにぎわい、山上に小体な福山城の城郭がみえる。

この時期、まだ天守閣はない。貧弱な城といっていい。武芸にすぐれ、英邁の世評たかい松前伊豆守崇広がこの四年後の嘉永二年（一八四九）に十二代藩主となり、幕府から海防のため幕政時代異例の築城を命じられ、旧城を壊し、天守閣、城門十六、砲台七座をそなえた福山城が完成するのは、のちの安政元年（一八五四）である。

武四郎は佐八郎の店に逗留し、さっそく西蝦夷地へ出立した。日本海側を海沿いに上ノ国をへて江差に入った。

江差は鰊漁で湧きたっていた。湊ばかりか、小高い山の斜面にひらける町そのものが、網に入る鰊の大群で波立つ海面のように湧いている。

——松前をしのぐ活況ではないか。

驚かざるをえない。

鰊は「魚ニ非ズ」とも書く。すなわち鯡は、魚肥となり、北前船で大坂に運ばれ全国に出まわり、綿作の肥料として欠かせない。金肥となる鯡は、魚にして魚ではなく、金子といっていい。

またこの町は附近に檜山があり、ヒノキ材の積出しでもたいそう潤っていた。湊には弁財船がおびただしく船がかりし、浜には艀の入る張り出シというつくりの船主や豪商の家が軒をつらね、湊のすぐ沖には弁天社を祀った弁天島（鷗島）があり、エゾ桜がちらほらと咲きそめ、花見客でにぎわい、千畳敷と呼ばれる広々とした岩場では海をながめて弁当をひらく老若男女が遊芸を楽しんでもいる。

佐八郎の店を足溜りとした武四郎は、海沿いの小径を熊石へとたどった。右手に草山と雑木山がつらなり、なだらかな弧を描く白砂の浜がつづく。乙部の小聚落をすぎ、岩山の崖下の荒磯をまわると、熊石の聚落である。江差からおよそ四里。ここまでを、

和人地

という。アイヌ語のシャモは、シサム






（隣人）から転訛したもので、「和人」の俗称である。その和人地または松前地と称する地は、西北はこの熊石まで、東南は噴火湾のヤムクシナイ（山越内）までで、渡島半島のほぼ三分の一にすぎない。広大な蝦夷地ぜんたいからいえば、西南に飛び出した鱏の尻尾の先といってよく、その他はすべて、

アイヌ・モシリ

である。アイヌは「人間」、モシリは「大地」の意であるから、蝦夷地のほとんどは、

人間の土地

といえるであろう。その境界である熊石とヤムクシナイには関所が置かれ、松前藩の役人が人別を改めていた。

きびしく取調べられた。見るからに卑しい面相の小役人である。伊勢の修行者も御師もここでは通用しない。罪人でも小突くような手荒な扱いである。高野長英がいまだに捕縛されず、その詮議が蝦夷地にまで及んでいたのだが、そればかりではなかった。

「江戸者か。怪しい奴だ」

胸ぐらをつかまれ打擲された。護身の小脇差をさしているが、武四郎は武士ではない。さりとて町人でもなく、胡乱な旅人である。

「通行まかりならぬと」

と怒鳴る小役人たちの目に、憎悪と不信の脂が浮かんでいる。

——公儀の隠密とでも疑っているのか。

幕府により蝦夷地を召し上げられ、ようやく旧領に復帰した松前藩の侍は、公儀に不信をいだき、江戸者を蛇蝎のごとく毛嫌いし、極度に警戒している。小心でありながら横柄である。

剛毅な武四郎は無理におし通ったが、四月半ばをすぎたというのに身を切るほどに吹きつける寒風に逆らって、沖合に島影を望みながらセタナイ（瀬田内）まで北上したものの、ここでも小役人に通行を禁じられて、やむなく引きかえすほかはなかった。

——これでは、和人地の外へは出られない。いっそ、江差の人別帳に入るか。

佐八郎にたのみ、蝦夷地の和人になった。今日でいえば、江差で住民登録をしたのである。

知己となった箱館の商人白鳥新十郎に同行して箱館にゆき、和賀屋孫兵衛の手代ということで、東蝦夷地へ出立した。
　蝦夷地にも初夏がおとずれた、六月八日である。

## 二

――寛政以来、幕府より有司を遣せしも皆海岸のみを巡り、内部を探りし者なし。於是、深く山脈、川筋を究め、人情物産を探り、いつの世にか国の稗益に資せんと期し……。
と二十八歳の武四郎は志のほどを記している。
　噴火湾に出て、何なくヤムクシナイ（山越内）の関所を越える。アブタ（虻田）、ウス（有珠）、モロラン（室蘭）、シラオイ（白老）とすすみ、日高路を一路、エリモ岬のシャマニ（様似）へとむかう。難所の日高越えをしてトカチ海岸に出、ビロウ（広尾）から海沿いをトカチ川河口へとたどり、さらにクスリ（釧路）、アッケシ（厚岸）へ。厚岸には有珠と様似同様に蝦夷三官寺の一つ国泰寺がある。
　蝦夷地は松前藩の息のかかった商人による場所請負制の交易経済で成り立っていた。幕府はこの弊害に気づき、幕領にして直轄制をしいたのだが、ついやした費用にみあう利益をあげることができずに、松前藩に返したのである。
　商場すなわち「場所」ごとに「会所」と呼ばれる交易所が設けられ、松前の役人と場所請負人である商家の支配人、通辞、帳役、番人が駐在し、アイヌを傭い、鮭・鱒・鰊などの漁場と熊の皮・ラッコなどの交易を一手にとりしきっている。労働力はアイヌであり、漁場の番屋を管理して直接アイヌの使役にあたる者が和人の番人である。
　その場所場所では馬一ぴきを貸してくれ、止宿の待遇も鄭重であった。このあたりの場所受請人は白鳥新十郎らであり、武四郎が新十郎の添状をもつ和賀屋の手代だからである。
　――これでよいのか。
　しかし武四郎は道々おもわざるをえない。旅には便利だが、真の人情風俗が探れるであろうか。
　武四郎はアイヌ語がまだわからない。
ヤムクシナイでは、アイヌの乗馬のたくみさ、幣を家々のまえに立てて天地の神を祀っている風俗に感心し、さらにかれらの勤勉の風にも感じ入って、
　――夷人といって、和人はその風俗を卑しむけれども、挙げるべき尊きことが少なくない。
と、こころを動かされながら、シャクシャイン合戦の古戦場クンヌイ（国縫）では、アイヌの古老が合戦譚を語ってくれたにもかかわらず、アイヌ語がちんぷんかんぷんで、
「ふむう、ふむう」
と、きき捨てた体たらくである。これではいけないと、アイヌ語を日々手控え、覚えてはいる。しかし、話のほとんどは会所の支配人などの和人からきかざるをえない。
　好奇心が人一倍強い。地理、風景をみる目は数年におよぶ本邦遊歴で、正確に細部まで視る目が鍛えられている。しかも武四郎の特技は、ほとんど歩を止めることなく手控帳に風景をすばやく描き、見聞した諸事をこれまたすばやく克明に記せることである。しかも、その日のう



ちに手控えを整理しなければ眠らない勤勉さが身についている。
　その手控帳をもとに東蝦夷地第一回の旅を『初航蝦夷日誌』として誌した文章は、なかなかの名文であり、例えばヌフルベツ（登別）の温泉をたずねた箇所はつぎのようである。
　――ヌフルベツ、訳して温気川と云う也。麁朶橋を渉り東詰より左りニ入る。老木陰々として天日を見るも難きが如く、草老繁、細道行事凡十三、四丁にして清水の小流を渡る。又行くこと七、八丁にして川有。歩行渡り。此辺両岸虎杖、款冬、笹有る。
　此辺凡本川を隔つこと凡七、八丁也。又少しく行き川有り。渉りて直ちに坂有。甚険ニもあらざれども人跡絶たりとも云うべき境域のことなれば、其嶮筆紙に尽しがたし。凡此坂十丁余も有るべし。満坂皆雑樹。峠ニ至り少しの平有り。則此処迄は馬を速むるニよろし。東を望めば廻り凡壱り半ともおもわる湖水壱ツ相見え、其の木の間より纔に是を見るニ蒼波相起り、腥気颯々として物淋し。西を望めばモロラン嶽、西方の方巒峯渺々たるを隔て則臼ヶ嶽の沼ニ距るよし。只夷人の指当ニ依て是を見るのミ也……。
　このあと湯治人の滞留する小屋と神々を祀る幣場の様子を描写し、温泉の効能を、
　――金瘡、打身、疥癬、諸療を第一とす。
と記し、その温泉元の湯のたぎる音は「百千の雷を轟かすごとく」で、湯治する人はその音に頭痛を生じて帰る者が多いと諧謔味に筆をすすめ、
　――此処にて一宿いたさんと思えども、あまり物淋しく湯治人も居らず、連行し夷人もしばしば帰程を促せば、此処にて焼飯を喰いて休らい、一度沐してかえりける。
と、結んでいる。
　自生する植物、地形と距離、周辺の展望、アイヌの風俗習慣がまことに克明に記録され、一歩一歩、歩をはこぶ者の心に映りこんだ風物が活写されている。
　しかし、この旅では、深く山脈、川筋を究め、人情を探るには至らなかった。
　それにしても、前途にみえるものは、果てしない海岸線と山野である。
　――広い。
　足裏が痛むほど感じている。だが、たどっているのは前人未踏の道ではなく、先駆者である幕吏の最上徳内、近藤重蔵が半世紀もまえに踏みわけた道である。
　ネモロ（根室）からシレトコ（知床）までは、和人の案内人までつけてもらえた。
　シレトコ岬に立ったのは、箱館出立からひと月余の七月十二日卯ノ下刻（午前七時）である。オホーツク海のはるか洋上に朝陽が昇ろうとしていた。
　朝霧にかすむクナシリ・エトロフの島々を眺望して、
　――勢州一志郡雲出川南　松浦武四郎。
と、大書した標柱を立てた。
　武四郎の興奮と感動の深さがうかがえる。往路、さして難渋することはなかったとはいえ、幕吏でもない伊勢国の一郷士が独力で、北方のさい涯ての岬にはじめて歩をしるしたのである。
　帰路、武四郎はアイヌの暮らしを知ろうと努めた。アイヌ語ができぬので和人

から聞きとるほかはないが、ノツケ半島のあるシベチャ（標津）では、場所請負人の理不尽なやり口を知った。

シベチャのアイヌは昔からクスリまたはシャリ（斜里）のアイヌと縁組してきたが、これを場所の支配人がきびしく禁じ、縁組を場所内にかぎるので、この場所では人口がふえるけれども、アイヌ全体では減っているという。これは、請負人が自場所の労働力が減るのを嫌うからである。また、自場所の権利を確保するために、松前藩の家老や用人へ袖の下が必要であり、そのための利潤追求にもアイヌの労動力を他場所へやりたくないのである。

このために、ある場所では男ばかり、ある場所では女ばかりとなり、人口が減っているという。

——実に他場所に縁組を禁ずること、この地の一大弊風なり。

と、武四郎は手控帳に特記した。

和人の番人がアイヌを棍棒で打擲しているところも一度ならず目にした。その番人がアイヌの娘を幾人も妾にしているともきいた。

アイヌたちの、和人である武四郎を見る目は、深い悲しみの色を宿している。

——純朴な連中だ。

と武四郎はおもう。アイヌの老若男女から感じられるものは、つねにそれである。男たちは漆黒の髪と髯をながながとのばし、たくましい体軀なのに、もの静かでおとなしい。といって怠弱かといえばそうではない。挙止は優雅で、その笑顔は野卑や陰険からほど遠いのに、五体の奥に芯の強さが感じられ、耐えに耐えているものがなにかを撥ねかえそうとしている。しかし視線があうとニコリと愛想笑いをして目をそらすのである。

——わたしが場所請負人の手代の和人だからか。

おそらくそうであろう。

——心せねばなるまい。

と、おもう。しかし、武四郎がアイヌの人びとに心をひらき、同情を超えた深い想いにたち至るのは、さらに蝦夷地を歩いてからであり、この第一回の旅で覚えたものは、

——蝦夷地を松前藩には任せられぬ。

という強い危機感であった。どの場所も藩兵の駐屯はほとんどなく、あっても台場は貧弱、ことに越冬の兵はすくない。

——ロシアの南下をこれでは阻止できぬ。アイヌをかように処遇していては、かれらをして外夷へ随従させるだけではないか。

箱館への帰途、その想いは募るばかりである。

憂国の情熱に胸がはりさけるようであり、東蝦夷地をつぶさに見ただけの一介の郷士である無力なおのれへ、武四郎は声を発していた。

「力がほしい！」

## 三

箱館にもどった武四郎は、多くの友人知己をつくり、かれらの助力をもとめた。

はるばる蝦夷地にくるような男たちは、野心家か世を捨てたか変わり者が





多い。人間の器がどこか破れていて、時代を観るその器の計り方がちがう。

若いときから諸国を放浪した武四郎は、強情で負けん気が強いにもかかわらず、偏狭にかたよらず、高慢にならず、社交性がある。

——身分も資力もないわたしには、人とのつきあいが人間の位だ。

と、武四郎自身、これを大事にしている。

友人の一人に、白鳥雄三がいた。雄三は近江商人の新十郎の次男で、松前藩の代官を勤めたこともあり、ロシアに拉致されたとき覚えてきた中川五郎治から種痘をうけ、京都に遊学もし、箱館にもどって五郎治に種痘の法を学んだ男である。

その雄三が、箱館で入手できる蝦夷地に関する書を武四郎が熱心に繙いているのを見て、訊ねたことがある。

「東蝦夷地に出かけるまえに読まなかったのかね」

多少の揶揄と忠告がその問いにこもっていた。雄三にすれば、事前に読むべきだとおもったのであろう。

「頭はからっぽのほうがいい」

武四郎は答えた。

「予見や予断なしに歩かねば、せっかく自分の足で歩いた甲斐がないではないか」

なまじあらかじめ調べて予断があると、真実を見る目がくもるという。

「そうかもしれぬが、知らんでは見落すものも多く、深くは観られまい」

雄三も負けてはいない。

「そういうものでもないさ」

武四郎は人なつっこい笑みを浮かべていった。頭につめこむ読書の知識は、おおむね机上の空論となるが、経験による知を読書で補強すれば、深い知見となるというのである。

「こうして実地に歩いたあとに読むと、その書の一字一句が立ちあがってきて誠によく理解でき、また書き手の誤りにも気づく。たとえば古松軒のごときは、なんともいい加減なものだ。公儀の巡見使に同行して松前地を見たのみで、蝦夷地ぜんたいをさも熟知しているごとくに記しているから、江戸の大木戸より外を知らぬ者は、これが真実だと信じるだろうよ」

古松軒とは古川古松軒のことで、天明八年（一七八八）に幕府の巡見使に随行して、『東遊雑記』を著わしていた。

「それに」

と、武四郎はいった。

「見落したところはまたゆけばよい。広大な蝦夷地が一度や二度の行脚でわかるものでもあるまい」

武四郎の勤勉さは、まず未知の土地を裸の足裏で踏み、足裏で考えたことを万巻の書を繙くことで頭脳ではなく足心で沈思し、さらに歩くことである。ちなみに同時代人の吉田松陰が、東北の旅にあたっても調べつくしてから出発し、のちに密航を企てるにあたっては欧羅巴の学問をはちきれんばかりに頭脳につめこんで行動したのに対して、武四郎は対極をなす体質といえるであろう。

もっとも、からっぽの頭で蝦夷地にきたわけではない。唯一、林子平の書が聖

書である。その点では、武四郎にまったく予断がないとはいえないが、この時代こころある若者が林子平の書で鎖国のそとへ目をひらいたのであり、その一人である武四郎は、古松軒が自著で子平をあしざまにいっているのに腹をたててもいた。

武四郎は東蝦夷地を歩いたその目で、工藤平助の『赤蝦夷風説考』、新井白石の『蝦夷志』、本多利明の『赤夷動静』、幕府直轄時代の箱館奉行羽太正養の『休明光記』など先人の書を読み、とくに蝦夷地開拓論の数々に目を通した。

そして十一月、突然、箱館を出立した。厳冬の蝦夷地へではない。津軽海峡をわたり水戸へむかった。

――烈公に会いたい。

徳川御三家のひとつ水戸徳川家の徳川斉昭である。

――まずは会沢正志斎に面晤をえるか。

九代水戸藩主であった斉昭に会えるはずもなく、水戸藩に知己があるでもない。藤田東湖とならぶ水戸学の碩儒、会沢正志斎に面会がかなうあてもないが、

――蝦夷地開拓と海防について烈公はたれよりも熱心であり、『新論』を書いた正志斎に会いたい。

との強い想いが、武四郎の足を矢も盾もたまらず水戸へむけさせている。

正志斎は水戸学に立脚した『新論』を文政八年（一八二五）に脱稿、過激な内容のため世をさわがすことを恐れて公表をひかえたが、しだいに世に知られ、武四郎もその内容を箱館で耳にした。攘夷論の聖書といえる書である。

伊勢で国学を学んだ武四郎の思想は、正志斎らの水戸学にちかいといえるであろう。

しかしこのとき、斉昭は天保五年に蝦夷地開拓計画をたて二代藩主光圀の遺志をつごうとして幕府の忌諱にふれ、謹慎中の身であった。正志斎も彰考館総裁の職を解かれていた。

武四郎はその正志斎を私邸に訪ねた。

「ほう、伊勢人のあなたが蝦夷地からまいられましたか」

五十四歳の正志斎は、水戸人らしい骨ばったするどい面貌に、にこやかな笑みを浮かべた。初対面の武四郎に親しみを感じたようである。

武四郎には魂胆がある。

――蝦夷地をくまなく探検するには後ろ盾がほしい。それは水戸烈公と水戸藩をおいてほかにない。

とのたくらみがある。『新論』の著者会沢正志斎は、その自分を売りこむ唯一無二の相手であり、志をわかってもらえるとの自信もある。

武四郎はかなり気負って、東蝦夷地のシレトコ岬までおのれの一存で遊歴してきたこと、その見聞によればオロシャの南下侵食を阻止できる海防ではないこと、松前藩にまかせておいては蝦夷地の夷人はオロシャの威風に日ならずしてなびくであろうと、その危機感をことばをつくして開陳した。

「なるほど。松浦どのもさようおもわれましたか」

膝をたたくように正志斎はいって、大きくうなずいた。その目がなぜか懐かしそうに、武四郎にそそがれている。

――この男、わしの壮年のころをみるようだ。

と、おもったのである。



「それがしが異国船の異人とはじめて面談したのは、貴殿とほぼおなじ年配のころでした」

正志斎は遠くをみるような目になって、そのときの話をした。

文政六年（一八二三）六月に水戸の外港というべき那珂湊に国籍不明の異国船が船上の異人の姿がみえるほどに接近し、藩をあげて大さわぎになり、鉄砲数十挺の藩兵を派遣し、異国船は退去したが、翌年五月末には大津浜にまたも異国船が来航、異人十二人が上陸した。このとき、藤田幽谷の高弟であった正志斎は、筆談役として異人に対面した。

「オロシャ人とばかりおもっていたところ、筆談してみるとエゲレス人とわかり、のけぞるほどにおどろきましたな」

と、正志斎はすこし剽げるしぐさをした。当時の驚愕と衝撃の大きさを初老の正志斎は揶揄する余裕をみせたのであろう。

筆談をすすめてみると、英国の捕鯨船で、水と食料をもとめているだけと判明したので、かれらを本船に帰したがロシア人ではなくイギリス人だと知った水戸藩の危機感は増大した。

大英帝国はわが国からはるかに遠い。その地球の果てともいえる遠国から水戸の海に異国船があらわれたおどろきばかりではない。唯一鎖国をひらいているオランダから、長崎のオランダ商館長を通じて幕府はイギリスに東洋侵略の意図ありとつねに警告されていた。オランダは日本との交易国としてその権益を他国に犯されぬよう、折にふれて、ことにイギリスの侵略意図を誇大に日本に吹きこんでいたのである。モリソン号事件でアメリカ船をイギリス船とした『オランダ風説書』もそのたぐいであろう。ちなみにイギリスの中国侵略のアヘン戦争がおこるのはモリソン号事件から三年後の天保十一年（一八四〇）だから、オランダの警告は誇大とばかりはいえないけれども、水戸藩でもとくにイギリスに脅威を感じていたのである。

このとき藤田幽谷は子の東湖に、無断で上陸したイギリス人を斬るべしと命じて現地にゆかせたほどで、釈放してしまったあとだったので事なきをえたが、のちに東湖は生涯で三度死を決したうちの最初であったと述懐していて、水戸藩士民が身近に攘夷の思想を募らせた大事件であった。

つぶさに英国人と筆談して、わが国の危機をせつせつと肌に感じた壮年の正志斎は、胸中の血のたぎるおもいでその翌年、『新論』を書きあげたのである。

「しかしながら、西欧の脅威は武力ではありません」

正志斎はそういって、茶を喫した。

――わからぬことをいう。武力のほかになにが脅威か……。

武四郎はわずかに怪訝な表情をにじませた。

「西欧の強盛さの秘密は」

と、正志斎はことばをついだ。

「智勇、仁恩、礼楽刑政、神造鬼設などが卓越しているからではありません」

礼楽刑政とは諸制度の完備をいい、神造鬼設とは人為をこえた神わざをいう。

「蝦夷地をご自身で歩かれた貴殿には、すでにご承知のことです」

――持ちあげるようなことをいう。

悪い気はしない。弱輩の武四郎を認める懐の深さをみせる正志斎を、武四郎は

胸をはるここちで師を仰ぐようにみた。

「東蝦夷地の風はどちらから吹きます?」

と、正志斎は日常茶飯の話題のように問うた。

「厳冬にはモスコビヤの方角よりカラフトをへてきびしい北西風が吹きつけ、流氷の溶けます春ともなればカムサスカより北東風に変わり、花々の咲きみだれる春が闌けますころには本邦より下りともうす南風が吹きまする。されど、夏でも山せが吹きまと、草木が枯れるとのことでございます」

「さすがにおくわしい。されど風の方角を知っただけでは政治はできません。モスコビヤやカムサスカより吹くオロシャの風も、寒さに馴れた夷人にはここちよいのではありますまいか」

――謎のようなことをいう。

武四郎は試されているようで、眉を寄せた。

「オロシャにしろエゲレスにしろ、西欧より吹く風は、まことに巧みに人のこころを誘いこむ力があるとそれがしはみておる。蝦夷地に吹く本邦からの南風も、こころの衣まで脱がせるほどに暖かでなければなりますまい。西欧の強盛さの根本がその風を他国に吹かす伎倆のたくましさにあることは、ご貴殿が蝦夷地でえた知見です」

これは書物の知識ではなく、実際にイギリス人に接した自分と蝦夷地を実地に踏破して夷人と会ってきた武四郎二人の知見だ、というように正志斎は武四郎の目の奥をのぞきこんでニコリとした。そして、西欧の強盛さの秘密は、

「耶蘇教あるのみ」

と、きびしい声で断言した。

正志斎の考えはこうである。

耶蘇教(キリスト教)の教義そのものは浅薄ではあるけれども、巧妙に人のこころを誘い込む力がある。西欧の侵略の仕方は、まず交易によって他国の実情を偵察し、隙あらば一挙に襲撃、不可ならば宗教によって民心を掌握する。民心をつかむことができれば、国の併呑はおのずからなる。むきだしの軍事力以上に、民心を収攬する耶蘇教こそ西欧脅威の根本だ、というのである。

「たけだけしい軍事力は、人のこころを脅えさせ、たとえ戦さに勝ったとしても、寒衣でこころを覆わせます。しからば民心を攬るにはいかにすべきかを、西欧は充分に承知しているのです」

武四郎が蝦夷地で見聞したロシアのやり口もそうではありませんかと、同意をもとめるように正志斎は武四郎にうなずいてみせ、

「しかしながら、この民心収攬の方法は、本来、わが国のものです」

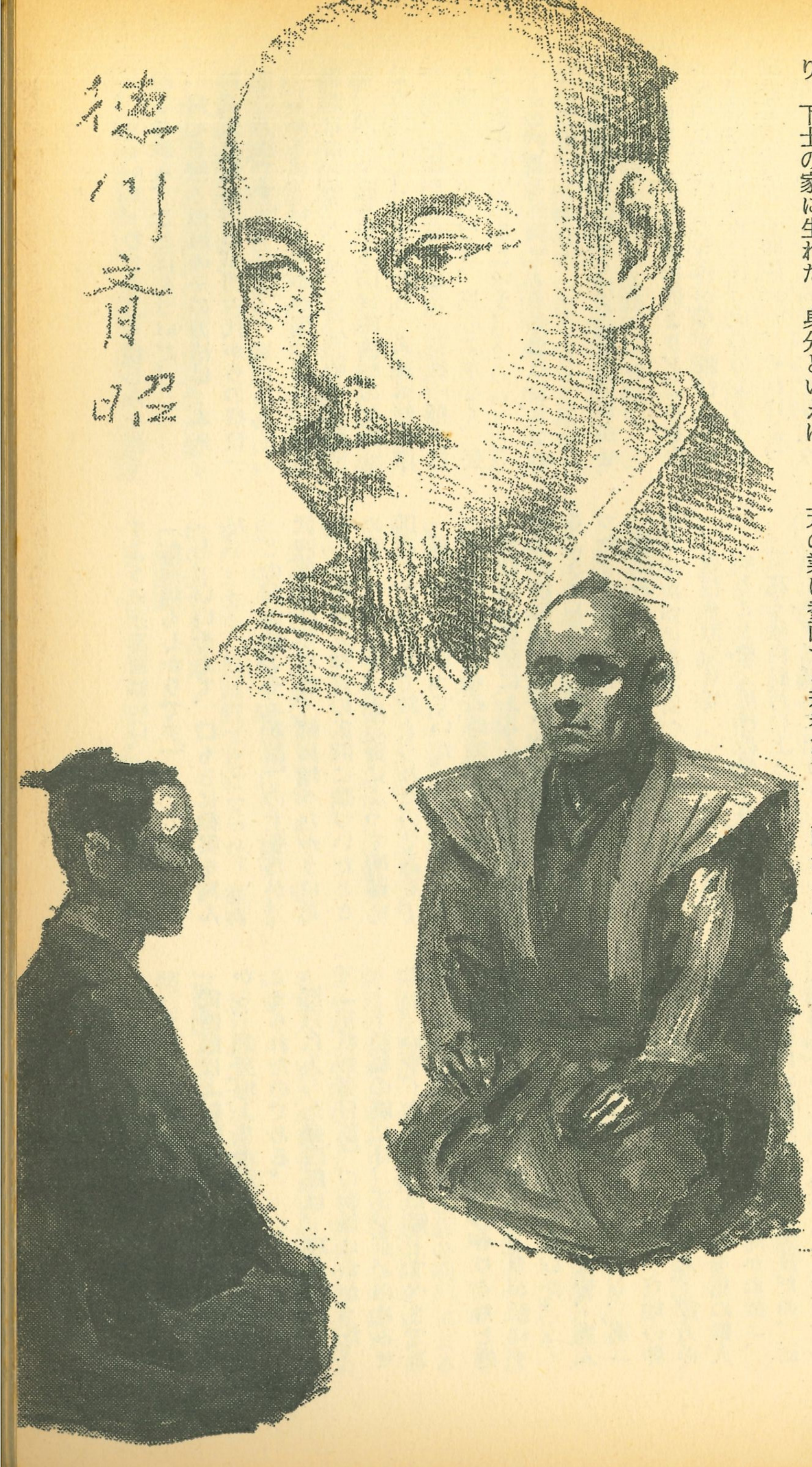
と、さわやかな声でいった。微笑さえ浮かべている。

しかし武四郎は、この稀代の学者が『新論』で主張したわが国の〈大経〉を承知してはいたが、その詳細をまだきいていないので、追従の笑みを浮かべず、固い表情をしていた。

――我の強い男だ。

正志斎は武四郎にそれを感じたであろう。水戸人も我が強く、よくいえば剛直壮悍で、わるくいえば荒っぽく偏狭だが、自我をまげない男は志が深いところにあり、真情がとどけば信じあえる相手になり、誠実この上もない。この男には若さという一途さもあり、まだしなやか






さがたりないのであろうが、それが快く感じられる。

――身分のせいか。

ともおもう。正志斎も百姓の子であり、下士の家に生れた。身分といえば、藤田幽谷は一介の古着屋の伜であった。水戸藩の改革はそうした身分のひくい者たちによってなされてきたのである。そしてこの時代、やがて明治維新という回天の業に参画する若者たちは、薩長土肥いずれも下級武士あるいは農民出身の者である。

時代は新しい潮がみちるごとく、急速に奔流しているのである。

正志斎は武四郎に性情といい出自とい

い、志といい、ひびきあう親しみを強く感じながら、ことばをついだ。
「民心を攬る西欧のその方法は、本来、神武天皇以来、わが国古代からの祭政一致の方法です」
しかるに、いまやわが国は祭政一致の理想にほど遠く、民心は体制から離反し、民心を統合する国家的機軸の欠如ははなはだしい。すなわち、幕藩体制秩序の動揺は深刻さをくわえ、百姓一揆や打ち毀しなどがつづき、民心に主なく、民心は離反しているという。
「この内憂と外夷による外患はひとつのものです」
正志斎はそのことばを深くひびかせた。
つまり、民心の精神的よりどころを失った国は、内からも外からも滅びるという。滅びないためには、民心のよるべき国家の〈大経〉を明確にし、それによって民心をつかまねばならない。そうすれば、国内秩序の回復はもちろん外患も一挙にとりのぞける、というのである。
「わが皇国はかくあるべきです」
そうではありませんか、とまた念をおすように正志斎はいい、
「蝦夷地もしかりです」
と、いいそえて、口もとに微笑を刻んだ。
この国体論こそ『新論』の主張だが、武四郎は昨年早春、蝦夷地へむかうにあたって伊勢大神宮の広前に額づいたときに誓った素志を、正志斎によって明確に国家の大経として教えられたのである。
庭の陽がかげっていた。
辞去せねばならぬ時刻であった。
武四郎が感動にふるえる声で礼をのべ辞去の挨拶をすると、正志斎はまた訪ねるようにといい、半紙に漢詩を書いて贈った。
墨痕あざやかにこう読めた。

暑往き涼来りて
疾きこと梭（織機の杼）の若し
天高く秋色庭河に上る
頭を昂げて試みに問う
南に飛ぶ雁に蝦北の風濤
近きこと奈何と

## 四

武四郎は『新論』の著者、水戸の碩学から、蝦夷地より水戸に飛来した雁にたとえられたのである。
江戸に入った武四郎は、寝食をわすれて『初航蝦夷日誌』の執筆にかかった。
――脱稿の暁には、正志斎どのにみせたい。いや、水戸烈公に献上すべきである。
筆がのるほどに松前藩のやりくちと蝦夷地を知らぬ世間の泰平楽ぶりが肚にすえかねて、つぎのようにも書いた。
――此地ニ勤番ニ来る人は皆、夷人の撫育の為とやら云わるれども、実ニ何を世話することやあらん。当地の弊風、志士はいかに思ふやらん。四方の大木戸（江戸四方）より外を見ぬ御人はこのようなことを見ぬ聞かぬ故ニ、最上徳内が蝦夷草紙みな虚談だの、近藤重蔵まやしかものだの、高橋三平（直轄時の箱館奉行所の幕臣）は時世しらずだの、間宮林蔵はまん八もの（ペテン師）だの、林子平は狂人だのと、おのれが三尺ニもみたざる机を一世界と志さだめし了簡を、この如く国禁さえなければ亜細亜州は更ら也、欧羅巴、亜弗利加、弥利堅の国々までも入らんと欲する志とを引きくらぶれば、杓子木はおろか提燈に釣鐘と云うべし……
江戸で知りあった友人たちと両国橋ちかくの旗亭で忘年会の宴を催したときは、
「いったいに日本人は眼孔が狭隘で、たとえて申せば、江戸の下町の者は山ノ手を知らず、川崎の外へ出る者さえ稀なくらいだ。海といえば品川の海、川といえば大川とおもいこんでいるくらいではないか」
と、酔ったせいもあるが高言した。
明けて弘化三年（一八四六）、二十九歳を迎えた武四郎は、正月二日には早ばやと江戸を出立して、ふたたび蝦夷地にむかった。途中、水戸に寄り、会沢正志斎を再訪した。ちなみに、藤田東湖はいまだに謹慎中である。
松飾りのある水戸の城下に小雪が舞っていた。
年賀の客を門口まで迎り出てきた正志斎は、武四郎をみると、莞爾として旧知のごとく自室に招じ入れた。酒肴を供し、新年の挨拶がすむと、書棚から一冊のぶあつい書籍をとり出し、武四郎の膝前においた。表紙に、

北方未来考

とある。遠慮なく見るようにという。七年まえの天保十年（一八三九）に水戸藩が蝦夷地の経営について詳細に考察した論考である。
武四郎は手にとり、くいいるように目を走らせた。まず現今の松前城と城下を考察し、新城を築くにはいかにすべきか、その縄張り（設計）を、城壁の築き方、砲の据える場所など図入りで具体的に記している。それも従来の築城術ではなく、どうやらオランダ式のようである。
――このようなものをわたしに見せていいのか。
武四郎は胸の高鳴りを覚えた。吐く息、吸う息が熱く感じられる。頁をくる指がとまり、目が釘づけになった。蝦夷地の国名を改め、日出国と、すべきだと記されているではないか。
「日の出国、でございますか」
思わず声に出していた。
「さよう、松浦どのはほかに妙案でもありますか」
にこやかに正志斎は訊ねた。
「……」
「日の出国は烈公のご発案です」
さきを読むようにと、正志斎は目でうながした。
論考は東西蝦夷地全域の郡名も改め、水戸湊からはもとより江戸、京坂の湊から太平洋まわりの直行の船便をひらき、日出国にそのあらたな湊を築港すべきだとし、日出国における耐寒の家屋づくり、要所要所の台場と城砦の砲門による強固な海防、金銀銅鉄の鉱山開発による財政のゆたかなありようなどを考察し、さらに、仏教はもとより神道の普及による和人・夷人の教化に紙幅をついやしている。
北方の広大な未開の大地に、正志斎の『新論』が説く国体論の皇国の誕生を企図しているのである。
――いかがか。

と、問うように、読みおわった武四郎へ正志斎はおだやかな視線をむけた。

武四郎はきつく口もとをくいしめたまま、黙って論考の書冊をかえした。性情に打てばひびくするどさを隠しもっているのだが、それをことばにしなかったのは、むきだしのするどさは抜身の匕首のように人を警戒させるものだと旅をつづけてきた武四郎がおのずと体得していたからとはいえ、そればかりではなかった。蝦夷地を歩いたおのれの足心がこの論考はなにかちがうと、ことばにはだせぬ違和感を感じたからである。それがなんであるのか、わからない。いささかでも躰が納得のいかないとき、それさえも面にあらわさず、この男は木石のごとく黙るのである。

「なに、粗い素案です」

正志斎は口調に軽みをふくませ、

「義公（光圀）以来、わが水戸藩は蝦夷地を研究してまいったが、烈公はことのほか気宇壮大でござってな」

と、さも楽しげにその話をした。

蝦夷地への着目は、二代藩主徳川光圀にはじまる。すでに元禄年間、光圀は快風丸という大船をつくらせ、三度にわたって松前を調査、石狩川をさかのぼって四十日間にわたり内陸まで探索させた。ロシア使節ラックスマンが来航したときは、水戸藩は立原翠軒の建議にもとづき、翠軒の門人木村謙次、武石民蔵の二人を派遣してラックスマンの行動と松前藩の内情をさぐっているし、近藤重蔵の蝦夷地探険にはやはり本村謙次が随行した。

そして斉昭が九代藩主となると、御三家のうちでもっとも領地がすくなく、蒟蒻のほかにはこれといって産業もない、財政難の水戸藩の活路を、藩政改革と同時に蝦夷地にもとめた。

「烈公はみずから蝦夷地にゆかれ、夷人の女を数多く側室になされて、強健な日本男子の子孫をふやされるとのおおせです」

はっはと正志斎は笑い、烈公夫人の登美宮も共にゆかれると楽しみにしていた、といいそえ、烈公の蝦夷地開拓論を語った。

烈公のそれは藩の次男、三男はもとより、全国の浮浪の徒まで幕府からもらいうけ、若い男子大勢を率きつれてゆき、国防と金銀銅鉄山の開発、新田開発、さらには蝦夷地の商権を独占する松前藩の利潤をも掌握する一石四鳥をねらったもので、北方の未開の大地に和人と夷人による新たな一国「日出国」を創り出する企図である。

このことが蝦夷地を領有するつもりかと幕府の忌諱にふれ、烈公は藩主の座を追われたのである。

しかし、正志斎の語り口にはみじんの暗さもなかった。そこに烈公がいて、天真爛漫、気宇壮大に新たな一国誕生の夢を、しかし夢ではなく、大まじめに信じきって楽しげに語っている姿が見えるようで、

――憎めぬ、底知れぬ御仁だ。

と、武四郎は斉昭という人物にふしぎな陶酔をおぼえた。

もっとも、蝦夷地開拓論は田沼意次が老中であった天明五年（一七八五）に蝦夷地調査にふみきって以来、いくつもある。意次のときの案は、穢多弾左衛門の輩下七千人をまず蝦夷地に移住させ、ゆくゆくは全国から計七万人を移して国防と開発にあたらせるというものであった。その後、本多利明の策は、大日本の国号を東蝦夷地のカムチャッカに移すという途方もない構想であり、佐藤信淵の策にいたっては、蝦夷地を開発してカムチャッカを攻めとり、オホーツクを根拠として沿海州および北アメリカの開発までを論じた空論といえる大構想で、平田篤胤の影響をうけたかれは、皇国を中心とする神道的宇宙観の世界政策『宇内混同秘策』をうちだしたくらいである。

これらにくらべれば、水戸烈公の蝦夷地開拓策は、はるかに現実的といえるであろう。

――水戸藩はおもしろい藩だ。

と、武四郎はおもった。正志斎のうしろに攘夷派の急先鋒で蝦夷開拓論者の烈公がおり、さらにいえば、その足下に時代をきり拓こうとしている荒っぽい気骨の水戸藩士がいる。江戸にしばし滞在し、こうして水戸を再訪して、武四郎は水戸人の進取の気風を信じるようになっている。どこか自分に通じるものを感じており、その勘は、諸国を旅して諸国人を肌で知っているこの男の冴えであり、当っているといえるであろう。たしかに水戸藩は、本来なら将軍家の永続と安泰をはからねばならない御三家の立場にありながら、もっとも多くの犠牲をはらい、維新にむけて時代の最先端を走ってゆくことになるのである。

「いかがなされた。酒がすすみませぬな」

黙ってきいている武四郎へ、正志斎は気づかいをみせ、酒杯をほすようにといった。

酒は肺腑へここちよくしみた。

「きっと烈公のお役に立てましょう」

その一言に想いをこめた。しかし、自分はまだ東蝦夷地をひとたび歩いたにすぎず、その日誌をおおかた書きあげたにすぎない。

慎重な男である。というより、蝦夷地の山川草木、鳥獣虫魚、そして、かの地に住む夷人の純朴なやや哀しげな顔が武四郎を呼んでいる。正志斎の『新論』に心酔し、烈公に尊崇の念さえいだき、憂国の真情が滾るほどに強い武四郎の、北方の未知の大地をすみずみまできわめたいとねがう探険家の人なみすぐれた濃い血が、蝦夷地へと呼んでいる。

――わたしは蝦北の雁。

と、武四郎はおのれにいいきかせるようにおもった。蝦夷地とこの水戸を季節がめぐるたびに往復するであろう。

いくばくかの路銀を頂戴して、正志斎の居宅を辞した。

小雪はとうにやみ、雲がきれて、翠色の初春の空がのぞいていた。

風がわたってゆく。

ふと背中に視線を感じた。窺う者の不審な視線である。何気ないふうにふりむいた。正志斎の居宅の門前に男が立っていた。武四郎とほぼ同年配の、瘠せぎすだが骨太な感じの武士である。目が鋭い。

視線があうと、武士はふいにニコリと破顔した。まるで、悪戯をみつけられた童子のような笑顔である。

――妙な男だ。水戸人は諧謔味もあるのか。

思わず武四郎も笑みをかえしていた。しかし、すこしきてもう一度ふりむくと、正志斎へ年賀にきた客なのか、それとも行きずりの者なのか、武士の姿はなかった。

（次号につづく）

# 日本死人名事典●作家篇⑰柴田錬三郎

魯迅を研究しリラダンやワイルドに傾倒した空想少年はいかにして剣豪小説家になったか

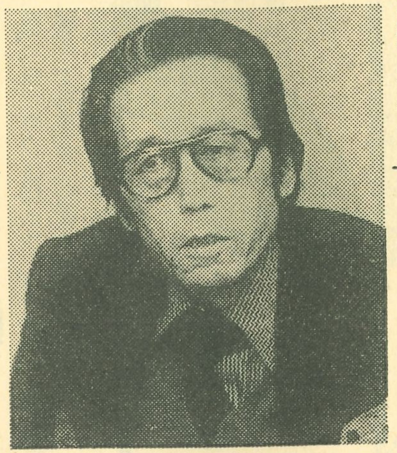
●死亡年月日●一九七八（昭和五十三）年六月三十日午前二時四十五分。
●生涯●六一年三カ月。
●死に方●病死。
●死因●①肺性心②白血病。
●入院中のことば●①「今は原稿を書いているのではない。文字を書いているんだ」②「俺は、自分の肉体が信用できなくなった」③娘の「目が見えるの？」に対して「見える」（中村勝三『柴田錬三郎私史』）
●最後のことば●「苦しい」（同右）
●絶筆●
「孫太夫は、庄左衛門の暗い表情を、長く眺めていられないらしく、そそくさと、座を立って行った。
軽い空咳をしてから、庄左衛門は、仰向けに倒れた。
少年の日、若くして逝った母のおもかげが、うかんだ。
母は、美しい人であった。
——ひとりの女子をだますのを、母者は、許してくれるかどうか？
深い淵の底へひき込まれるような暗澹とした気分で、庄左衛門は、目蓋を閉じた。熱が出て来たせいもあったろう」（『柴錬忠臣蔵　復讐四十七士』週刊文春）
●死亡記事●（朝日　昭和53・6・30夕刊）
「眠狂四郎　病に勝てず
肺性心で　柴田錬三郎さん
死去

『眠狂四郎シリーズ』や『赤い影法師』など、空想力を奔放に働かせた剣豪小説、伝奇小説で人気のあった作家柴田錬三郎氏（しばた・れんざぶろう＝本名斎藤錬三郎）が三十日午前二時四十五分、肺性心で東京・信濃町の慶応義塾大学病院で死去した。六十一歳。告別式は七月十日午後二時から東京・青山葬儀所で。喪主は妻エイ子さん。現住所は東京都港区高輪三ノ一九ノ五。

大正六年、岡山県に生まれた。天性のストーリーテラーで、少年のころからたちまち一編の冒険小説を仕立てて友だちに聞かせるのが得意だったという。慶大支那文学科在学中から文学に志し、『三田文学』に『十円紙幣』『挽歌』などを発表。卒業後日本出版文化協会に入ったが、間もなく召集を受け、乗船中の輸送船が撃沈されたため、バシー海峡で七時間も漂流、奇跡的に助かるという体験もした。

戦後は『日本読書新聞』の復刊に尽力するかたわら〝カストリ雑誌〟に読みものを執筆。昭和二十四年勤めをやめて文筆一本になってしばらくは、生活のため、世界名作の児童向けダイジェストを書くような生活を送っていたが、師の佐藤春夫の励ましで発奮し、同二十六年に発表した『デスマスク』が芥川賞候補になったのに続き、『イエスの裔』で第二十六回直木賞を受賞した。

本領とする時代小説に手を染めるのは直木賞を受賞してから。とくに同三十一年『週刊新潮』創刊号から連載した『眠狂四郎無頼控』で、五味康祐氏とともに昭和三十年代の剣豪小説ブームに火をつけ、一躍流行作家となった。〝円月殺法〟という異常な剣法で、情け容赦なく相手を切って捨てるニヒルな剣士眠狂四郎は、戦後時代小説の生んだ最大のヒーローと評されている。


柴田錬三郎

三万枚近い眠狂四郎シリーズのほか、『剣は知っていた』『赤い影法師』『孤剣は折れず』『運命峠』『柴錬立川文庫』『図々しい奴』などの作品があり、『英雄ここにあり』は第四回吉川英治文学賞（昭和四十五年）を受賞している。

想像力の貧しい純文学作家をなでぎりしたり、テレビタレントに毒づいたり、歯に衣きせぬ毒舌家としても知られた。四十一年上半期から直木賞の審査委員をつとめていた。

昨年九月から、息苦しさなどを訴え、肺性心（慢性の肺の疾患がもとで、心臓に負担がくる病気）で同病院に入院し、闘病生活を続けていたが、最近、回復し、『週刊文春』に『柴錬忠臣蔵―復讐四十七士』の連載を再開したばかりだった」
●同じ日に死んだ人●本多顕彰（評論家・英文学者）七十九歳。
●追想文①
「あとで聞くと死因は結核でなく白血病だそうで、その墓は師佐藤春夫の眠る小石川の伝通院に建っている。今私の住んでいるアパートのすぐ近くなので、毎日の散歩区域でもあり、墓の前へ立って、
『バカヤロー』
と叫んで泣きたいと思っている」（川口松太郎「柴錬亡き寂しさ」『忘れ得ぬ人忘れ得ぬこと』）
●追想文②●
「一度、柴田さんに褒められたことがある。
『おめえは感心だ。一度も、愚痴を言ったことがない』
私は大病したり、その他いろいろ厄介至極のことが重なったが、自分でも感心するくらい愚痴を言わなかった。ところが柴田さんが亡くなった昭和五十三年ころから、愚痴ばかり言って毎日を過ごすようになっている。なさけない」（吉行淳之介「柴錬さんの個人講義」『懐かしい人たち』）
●死後名●蒼岳院殿雋誉円月錬哲大居士。
●墓地●東京・文京区小石川三—一四　伝通院。「斎藤家之墓」と記された墓碑と、その左隣の文学碑は横尾忠則の作。

（古井風烈子）

第十九回歴史文学賞佳作！

# 梅花二輪

山名美和子
辰巳一平画



〈1〉

まだ、夜は明けきっていない。

室内はほの暗く、戸障子ばかりがわずかに白んでいる。

——父上が烽山にお発ちになる日だというのに、また雨。

ふすま越しに、父母の話している声が友の耳に届く。

「藩のなさりようは、あまりといえばあんまりな……」

母の気弱な口調は、雨の雫にかき消されそうだ。

「今さらあれこれ言ってみても、仕方ないではないか」

「藩校教授の任を解かれたからといって、なにも、辺境警備のお務めなど」

父が身支度を整えている気配がする。

秋口に入り、雨続きの毎日だ。小柄な父は、ぬかるんだ山道に難儀することだろう。

「まあ、ともかく、異国船の接近を烽で伝えよ、ということなのだから」

「オロシャは、ほんとうにすぐにも攻めてくるのでしょうか」

「開港を求めて長崎に来て以来、たびたび船影が近づいているので、そんな危機感に煽られるのだろうが……」

「だといって、だんなさまが、まるで防人のような任を……」

「教授職でなくなれば、十五人扶持の平士の身。藩命であれば……。烽などと、ばかばかしいと言えばそれまでだが。それも、やってみなければ分からんのだろうよ」

途切れがちに伝わってくる父の口ぶりに、進んで出発するという響きはない。

「山の頂きで、作詩や読書に励むよい機会だと思えばいい」

「念願の書室が、おととい出来上がったばかりだというのに」

母にしたって、どうしても諦めがつかないのだろう。

「やっと、この百道松原の塾も落ち着いて、学問もはかどっている、とおっしゃっていましたのにねえ」

「ああ。二度の火災の痛手から、ようやく亀井塾が立ち直ろ

うとしている矢先のことだからな」
母をなだめていたはずの父からも、嘆息まじりの声が漏れる。
福岡城下を舐めつくした寛政十年の大火で、唐人街の屋敷や塾、書物や稿本を消失した亀井家は、二年後、また貰い火に遇った。その後、ここ百道に移転してきて十年。わずかずつ貯えてきた資金を投じて、十五坪の講堂と書室を増築したところだった。
「だんなさまが、お留守になるのですもの。塾生たちだって、学問のとどこおることを不安がっていますでしょう」
「代講者との打合せは済ませている。学業を怠らぬよう、心配りを頼む。子どもも幼い。いち、お前には辛い思いをさせるが……。半月後には、明け番で帰れることだし」
烽山勤務を命じられてから、二十日たらずのうちの上番だ。父は、昨夜遅くまでかかって、塾生たちそれぞれの当座の教程を書きつけていた。それでも、留守のあいだの家塾の手配をすべて整える余裕はなかった。
「いずれ、烽山など無駄だったと、藩でも気付くだろう。そうすれば、塾に腰を据えられる日が戻ってくる」
「義父上さまに講義をお願いできたら、どれほどいいかと……」
「そのことには触れるな。お父上は謹慎蟄居の身だ。こまごまとした塾の世話は、源吾に任せなさい。源吾も、塾に住み込んで五年だ。もう、二十一歳になるか？　そう心配するな」
福岡の近郷、三原村の富農の家に生まれた三苫源吾は、父昭陽の又従兄弟にあたる。
父をよく助け、塾の雑事を手ぎわよくこなしていた。講義や討論、成績判定などを細かに記録し、多忙な父にとって、なくてはならない助手の役目を果たしている。
亀井塾は、荻生徂徠の儒学の流れをくむ。
五代将軍に仕えた徂徠の唱える学説は、かつて、
——狂える野火のごとし
と例えられる勢いで諸国に伝わっていった。
友の祖父亀井南冥は、壮年期に、福岡藩西学問所の総受持に任じられ、学問所・甘棠館には、いつも百名ほどの門弟が集まり、文字などには疎い人びとも講堂に詰めかけるような時期があった。
各藩に学問を盛んにする機運がおこり、こぞって学問所を開設していたころのことだ。
福岡藩では、貝原益軒以来の朱子学を講じる東学問所・修猷館と、徂徠派の西学問所・甘棠館の二つの藩校を持つことを、学問の先進藩として、誇りにしていた。
「何より、自発的に学ぶことが第一。古典からひもといて、朱子にとどまるなら、それも仕方ないだろう。しかし、古典も知らずに、政事の具として、朱子の論理だけ玩ぶのでは儒者と言えない。まず、孔子から学べ」
江戸開幕以来の、修身・治国論に安住している朱子学派の矛盾を、このように衝く祖父南冥の豪放な舌鋒は、藩内ばかりでなく、近隣の諸藩でも人気が高まる。
学問所には藩士しか入門できない。そのため、隣地に、学問を志す町家の子弟



や、藩外からやってきた塾生六、七十人の寄宿する家塾も併設していた。
もともと、亀井家は、姪の浜で大庄屋などを務める商人の一族で、祖父南冥の父の代に福岡に出て町医者を開業した。
祖父は、学問所総受持として士分にとりたてられたころのことを、
「城下では、破格の大出世と大騒ぎされたものだ。多忙きわまりなかったから、結局、医術の方は、代診に任せることになったのだがな」
得意そうに話したものだ。
学問所と亀井塾での儒学教育に、祖父は全力を傾けた。
が、朱子学を鋭く批判する亀井儒学は、寛政期になって、異学の禁に触れる。
祖父は西学問所総受持の職を罷免となり、家禄百五十石は召上げのうえ、終身蟄居の刑を受けることとなった。
その刑には、訪問者と会うことはもちろん、手紙のやりとりさえ禁じるという、厳しい条件が付帯していた。
亀井家では、祖父の処分が決まったときの家老職評議のようすを、亀井儒学に信頼を寄せる中老のひとりから聞いている。
「異学の禁の対象は、そもそも、湯島聖堂での講義に関してだった。湯島では、朱子学者以外の儒者が免職や減俸にはなったが、刑を受けたりはしていない。今でも、外様ばかりでなく、親藩や譜代で、徂徠派の学問所を持っている藩は数多い」
徂徠学旋風の余熱は、まだ根強い。が、湯島に始まった異学の禁は、次第に諸藩にも及び、さまざまな学問や風俗に禁令をふりかざしての圧迫が強まっていることを、父も十分承知していた。
それにしても、祖父への処罰は、あまりに重い。
「なぜ亀井ばかりが？」
「南冥殿の人気に、朱子学派の反感がつのっていた。しょせん商人あがりではないか……。あんな臭気を帯びた輩の手になるものなど、紙一枚、墨一片、触れたくはない。ことごとく廃棄せよ、という激しさだったとか。噂では、かなりの賄賂も動いたようだ。幕府の湯島への沙汰にかこつけて、南冥殿の追い落としにかかったと思う以外には……」
こうした経過を、友は、幼いころから、繰り返し耳にしている。
祖父が総受持を追われた後、父昭陽が学問所の教授補に任命されたのだが、それも一時期のことだった。
まもなく福岡の大火で藩校学舎や屋敷が焼失すると、藩議は再建を引き延ばしたあげく、西学問所の廃校を決めた。
父は藩儒としての任を解かれて、城代組に編入となり、城内見廻り、城門番などの下級職にあたることとなった。
祖父は、家業の医術も学ばせず、儒者として育て上げた息子へのこの処置に、
「父子二代を締め上げて、亀井学を潰す気か。身体を拘束しても、学問は壊せぬぞ」
と、激怒したと聞いている。けれど、藩命に抗する手立てなど、あろうはずがない。
城代組士を務める傍ら、父は唐人町の焼け跡に家塾と屋敷を建てた。各地の門下生から寄せられた資金や、姪の浜の親戚の援助があってのことだった。
父と母は従兄妹どうしにあたる。
古くから縁戚関係を結んでいる両方の家は、廻船業、紙問屋などを裕福に営

み、学問への出資を惜しまなかった。曾祖父や祖父が医術や儒学を学んだときも、火災からの復興の経費も、全力を挙げて支えた。

豊かな財力で育てた身内の医者や儒者が、実力を認められて士分となった。このことは、姪の浜の親類たちにとって、身分の壁を乗り越えたという誇りでもあった。

友は、しばしば夜中にうなされることがある。

よみがえってくる記憶は、屋敷が二度目の火事に遇ったときのことだ。

闇を照らし、炎が瞼の裏を焦がす。

火の粉を吐き、路地を駆け抜ける熱風は、まだ三歳だった友の四つ身の裾をめくり、おくれ毛を焼いて渦を巻く。

水桶を次々と渡して消火にあたっていた町の衆も、もうただ、後ずさりして延焼する火勢を眺めるしかない。

そんな中を、父はまだ、蔵書を取りに、炎に包まれている屋敷に飛び込もうとしていた。

「だんなさま、だんなさま」

母が悲鳴を上げる。

「いち、離れなさい。友が火傷をする。誰か塾生はいないか。いちと友を連れて実家へ。姪の浜へ早く」

友の手をにぎる母の掌は、汗ばんでいるのに、怖いほど冷たい。

おりから、博多湾の潮をとどろかせて荒れ狂う北西風は、わずかな書籍を持ち出すゆとりも与えなかった。

激しい音とともに、家々が崩れ、炎はいっそう高くくねって夜空に昇った。

この、火災の後、藩は、旧藩校敷地に隣合うことなどを理由に、家塾建築の認可を渋り、一年が過ぎても、再建は思うようにいかなかった。

家族は姪の浜の親戚に分散して暮らしていたのだが、父は、唐人町を諦め、城下西方の新開地百道(ももち)に、家塾と寮舎、一家の住処を構えたのだった。

「唐人町にいるよりは人目も少なく、お父上のところへの人の出入りも、いくらか可能になったではないか。母上もここへ来てからは、気分がよさそうだ」

すっかり衰弱している祖母のことも気遣う。

「唐人町からは半里と離れていない。本当に学びたい者にとって、そう遠い道のりではないだろう」

多くの塾生を募りたいという理由で唐人町での開塾にこだわった父だった。こんなふうに家族をなだめて、自分を納得させたのかもしれない。

祖父の蟄居生活の監視の任を、父は十代の終わりから二十年間にわたって担ってきた。

「お父上に、赦免はもとより、減刑の沙汰の気配さえないというのは、どういうことだ」

憤懣を隠せないのだが、

「とにかく、家族も、塾生も、今は目立たぬよう、人の口の端にのぼらぬよう。いち、くれぐれも気を配れよ。ささいな失態などを起こして亀井の儒学が今以上に統制を受けたら、立ち直りは、いっそう難しくなる」

そうした状況になることを父はとても恐れ、ことあるごとに家族を諫める。

職務のあいまに、講義し、稿本をしたためてきた父だったが、塾には、かつての隆盛はない。

その父が、今日からは、六ケ岳(むつがたけ)の烽台(ほうだい)



番(ばん)に就く。

沿岸への異国船のあいつぐ来航に、幕府は鎖国政策をいっそうひきしめる方針をとっていた。

長崎鎮台は、異国船入港をいちはやく大坂城代経由で幕府に知らせるため、長崎、佐賀、福岡、小倉の諸藩の見通しのよい山地に烽台を置かせた。

小倉まで烽で伝え、山陽道を早馬で駆けようというものだ。

福岡藩は、烽山番士として、城代組士三百余名のうち、五分の一ほどの人員を割りあてた。

「いち、お父上の世話を、くれぐれも頼む」

烽山に発つにあたって、父は、塾よりも、祖父のことが、気掛かりのようだ。

「塾生や、近在の門弟たちが、お見送りしようと、塾舎に集まっておりますが」

「いや、おおげさなことは、しない方がいい」

「皆、あんまりな勤番と、悔し涙さえ浮かべて」

「言うな、永の別れでもあるまいし。いちと友が送ってくれるだけで十分だ」

――父上、幼い妹や弟、母上のことも友に任せて。おじいさまのお世話だってしますから、どうか心配しないで。

父母の声を聞いていると、こんな思いが友の胸に湧いてくる。

十二歳とはいっても、幼いころから、意気の激しい亀井塾の男子門下生と対等に、学論を闘わせてきた友にとっては、なんの気負いもなく、そう思えた。

父は、そっと襖を開けて隣室から入ってくると、まだ眠っている妹や弟の頬をなでる。それから母と友を促して、祖父の住む離れ屋草香江亭(くさがえてい)に向かった。

気が急くのか、父はもう、祖父から譲られた漆塗りに金の家紋の入った陣笠と、合羽を付けている。

「雨で傷むのが心がかりだが……」

帯刀を許されるようになった祖父が自慢にしていた陣笠だった。

「しかし、今日ばかりは……。亀井学は決して押し潰されぬという誇りだ」

大柄な祖父の陣笠は、父の体格には合わず、何度も緒の加減を調節している。

父の、浅黒い頬の上の鋭い眼光だけは、祖父によく似ていた。

身支度を済ませている父は、祖父の居間の敷居際に座って、膝脇に拳をついた。雨に濡れた手の甲には、父の緊迫感を表すように、蒼く血管が浮いている。

「見送りもできぬ身だが……」

薄暗い座敷に正座した祖父は、少し咳きこんで言葉をとぎらす。広く張った肩が、前にかがんで揺れる。

雨音がひときわ激しく軒を叩く。

――あんまりだ。まるで雨までが、父上を打つみたいに。

父の烽山行きは、祖父にとってどれほど無念なことだろう。が、誰よりもそれを感じているのは、家塾を空け、労役に就く父のはずだ。

「飲み水に注意するのだよ、昭陽。食いものに気をつけて。早く帰って来いよ。早く」

祖父のこんな気弱な声を、今まで聞いたことはない。

二、三日の旅でも、痢病などに罹り命を落とすことも稀ではなかった。往復の日も数えて、半月にわたる烽山番に赴くのだ。母も友も、どれほど不安かしれな

い。

〈2〉

——そういつまでも続かないだろう
という父の予想に反して、烽山での監視の政策は、一向に廃止になるようすはない。

石峰、六ケ岳、天山など、六カ所の烽台を次々と巡る番士を、父はもう三年近く務めている。

父の烽台番が長引くにつれて、祖父は無口になり、居室に閉じ籠もっていることが多くなった。

百道に移って来てしばらくの間は、ひそかに祖父を訪れる門弟たちが、けっこういた。

父が考えたように、城下を離れたことで、祖父は、人目を避けて客と酒食を共にすることや、浜へ出て詩韻を交わすことも可能になった。

多忙だった時期から筆を起こし始めていた論語の注釈書『論語語由』も、精力的に書き上げた。

友が学問に励むようになったのも、祖父の勧めがあったからだ。

友が生まれたとき、

「女か、いらぬ子だ」

父は、そう言って落胆したと聞いている。

教授補を務める西学問所を福岡の大火で失い、祖父が蟄居の刑罰に服している中で、父がどれほど跡継ぎの男児を期待していたか、想像することはできる。

友が五歳になったころ、論語の素読をまねているのを目にした祖父が、

「どうだ、友にも習わせてみたらいいではないか」

こう口添えしたのをきっかけに、父は友の学問を熱心に見るようになった。

亀井家では、かな文字はひとりでに覚えるもの、として教えない。

孝経の素読、筆写から幼児教育が始まるのだが、友は父の教えをどんどん吸収していった。

そのころ祖父には、まだ、活気が漲っていた。

「おお、友か。この丸っこいやつめが……」

祖父は、よく、すれちがいざま、小太りの友の頬をなでた。そのざらざらした手の温かさを、友はよく覚えている。

——屋敷の中だって、袖や袴が音をたてるほどの勢いで歩くおじいさま。廊下で出会うと、つい端によけたものだけれど。

そうすると、

「友、こっちへ来い」

腕をひろげて友を止め、懐に抱えて、皺の刻まれた顔を寄せる。

「どうだ、孝経は進んだか。女だからといって、自分を甘やかすんじゃないぞ」

お気に入りの紺地に青海波の模様の袴は、清国とのあいだに隔たる波濤だと、祖父は言う。濃茶の袖無羽織が、白髪のまじった髷や顎髭によく似合っていた。

抑揚のある唐音で、からかうように友に話しかける。

「友も唐音を学べ。亀井の学問は、孔子の原点にたちかえることだ。そのためには、唐音は欠かせない」

「おじいさまは、どこで唐音を習ったの」

「長崎には、清国人もいる。若い時分には、唐音の達者な徂徠先生の弟子も、ご存命でいらした。亀井の塾生には、もっと唐音をやらせねばなあ」



そして、友にも、なぞってみるようにと、ひとこと、ふたこと唐音を声に出す。

友は、絵も得意だ。父の蔵書の中から清国の画集などを取り出して眺めているうちに、いつのまにか、葡萄や菊といった草花、猫や子犬などの小さな生き物を描き始めるようになった。

「息苦しいばかりの修身道徳から心を放てば、詩情が湧き、書が生まれ、絵画が育つ。詩は形のない画、画は形のある詩だ」

のびのびと画紙にあふれる友の絵を、祖父は好んだ。

十歳を過ぎると、友は、

——少女ながら、なかなかの画才

と、藩内外の文人たちの話題に上るようになった。

長崎奉行から友への画幅の所望や、父が開催の協力をした、秋月藩の催す太宰府書画展への出品の許可などに、友はずいぶん励まされたし、祖父や父の喜びも大きかった。

が、友が、書物を開き、絵筆をとる時間は、そう十分にあるわけではない。

どこの家でも、女児は、炊事や子守など、母親を助けて家内のこまごまとした仕事をするのは当然のことだった。

女子が学問に興味など示そうものなら、

「漢籍などと小賢しい。和歌や俳諧でいいではないか」

「男子門弟などに混じっていたら、嫁のもらい手がなくなるぞ」

そう一笑される。

父親が漢詩の手ほどきをするくらいのことはあったが、娘を儒学塾に通わせるなどという者は、まずいない。

友も、もう、十五歳。嫁に行ってもいい年齢を迎えているが、朝の家事を済ませると、書物や、半紙、筆などをひとまとめにした包みを抱えて、家塾の講堂へと急ぐ。

——おじいさまへの処罰は、決して罪を犯してのことではない。人の身を押し込めても、学問や文芸を潰すことなどできない。

身体の芯まで染みついたこの響きが、友を駆り立てる。

祖父を訪れる客もほとんど見られなくなった。ときおり、叔父が慰問に立ち寄るのだが、

「これは珍しい。墓参りのつもりで来たのか。線香の煙などまっぴらだ。帰れ、帰れ」

祖父は、そんな皮肉を浴びせて追い返してしまう。

「だんなさまの烽山のお務めも、ずいぶん長いこと……」

炊事の手を止めて、母は溜め息まじりに呟くことがある。

父は十日勤務の後、十日間明け番となるのだが、上番の前後に、近い烽山なら二日、遠方だと四日間の往復の日数がかかる。

男の子たちの躾や学問を考えると、父の不在が、母にとっては心細くなるのだろう。

跡取りの義一郎は七歳。次男の鉄次郎は四歳のいたずら盛りだ。その下には、生まれたばかりの妹がいて、母は育児から手が離せない。

買い物や外仕事を任せる手伝いの者は雇っていたが、母に代わって、勝手を引き受けるのは、十五歳の友と、二歳年下

の妹敬（けい）の役目だ。
　年のそう離れていない友と敬は、身長もほとんど変わらない。小柄なのは、両親ゆずりだったが、友も敬も丸顔で、いくらか太りぎみの身体つきは、母に似ている。
　友の方が、よりふくよかなのだが、目尻の上がった二重瞼の眼差しや、引き締まった口元のせいか、勝気そうに見え、年よりもずっとおとなびた印象を与える。
　家族や塾生の食事の支度、洗い物、裁縫、そして、弟たちの世話も、友の肩にかかってくる。
　早朝、竈に火をくべ、菜を洗う水の冷たさに指がかじかむとき、
　――男児ならば、学問や武術に励むだけでいいのに。
　こう思ったことも、二度や三度ではない。それでも、友は、勝手仕事などの手を抜くことはなかった。片付けの最後まできちんとしないと、気が済まない。敬も、よく手伝う。
　父が帰宅する日は気持ちが浮き立って家事がはかどる。
　母の表情も明るい。
「烽台小屋では、変わりばえのしないお菜ばかりなのだから。お酒の用意も十分でしょうね」
　酒の支給のない烽山では、門弟や友人から届けられる酒が楽しみだ、と父から聞いているので、母はいそいそと気を配る。
　廻船業の家に生まれた母は、やりくり上手だ。
　父の俸禄は、十五人扶持、年七十五俵。それに烽台番の役料が十俵加わる。
　番士は、四、五人扶持程度の微禄の者がほとんどで、加料を望み、願い出て烽台番に就く者も多い。
　役料を足しても、番士たちの生活は苦しく、烽台の監視のあいまに、毛筆や元結などの小間物作りの手内職に励んでいるというから、ほかの番士に較べれば、父は、恵まれているといえる。
　月半ばの明け番のときに、父は城代組頭の役宅に赴いて、俸禄分の米切手を受け取ってくる。一日あたり七升五合に役料一升を加えて、その月の日数分が俸給となる。
　母は、米切手を出入りの商人に渡して、必要な米や銭に替えた。
　屋敷の東を流れる樋井川で採れる貝は、父の食卓を賑わせる。
「敬ちゃん、おいで。しじみを拾いに行くから、ざるを持ってね」
　川筋に近い家では、どこでも、女や子どもたちが貝採りをする。
　塾の午前の講義が済んで休息をとる昼さがり、暇そうにしている塾生の、ひとり、ふたりにも声をかける。
「友さまが貝拾いなどなさらなくても、われわれが採ってきますよ」
　漢籍の輪読、解釈、そして作詩などに取り組んでいる塾生たちも、貝採りにことよせて、水辺にたわむれるのは楽しみのようだ。
「だめだめ、あなたたちに任せておくと、やたらとたくさん持って帰るのですもの。それも、石ころが混じっていたり、小さい貝まで採ってきてしまうんですから」
　姉さんぶった言い方をするけれど、友も、まるで川遊びに出かけるような気分で心が弾む。堤の草むらを先に立って下りるのは、いつも友だ。



　紺千草の桟留縞（さんとめじま）の単（ひとえ）を、帯の辺りでたくし込むと、ふくらはぎを少し覗かせて、浅瀬に足を踏み入れる。
　袴の裾を括った塾生が後に続く。
　少し上流、今川橋の橋杭の周りでも、四、五人の女たちが貝を採っている。
　初めのうちはおもしろがっていた敬も、すぐに厭きる。
「姉さん、もう足が痛くなっちゃった」
「冷えるといけない、敬さま。貝もたっぷり採れたから、もういいだろう。かがんで腰も痛くなってきたことだし」
「じゃ、ざるを水につけて、貝に付いた砂を洗ってちょうだい。それから、小さいのは食べづらいから、川に放しましょう」
　塾生たちも、塾での論議とちがって、こうしたときは友に一言の返しようもない。
「あなたたち、袴がすっかり湿っているじゃないの。少し乾かしたら」
　ころあいの石に腰掛けて袴の裾を振る塾生の傍らで、ざるから小貝を見つけては川に投げる姉妹の、よく似たぼっちゃりとした頬に、水面（みなも）を渡る風がそよぐ。
「姉さん、夕方には、父上がお帰りになるのでしょう？」
「そうね、日暮れ前には。今夜は、しじみと葱の汁をこさえようね」
　番明けで帰ってくる父は、家族の手料理を楽しみにしていた。
「そうか、お前らが採ってきたのか」
　猪口を片手に頬をほころばせる。
「以前は烽台小屋に酒や干物がよく届けられたものだが。このごろは、訪れる者も少ない。勤番に行く方も迎える方も、珍しいことではなくなってしまったからなあ。この十日間の上番中は、誰もやって来なかったよ」
　こんなぐちをこぼす。
「まあ、今回の石峰の烽台は里からも遠い。足を運ぶのも容易ではあるまい」
　仕方のないことだ、と付け加えるのだが、酒をあおる父の顔色はよくない。
　めったに口にしなかった烽山での苦労を話題にすることが増えた。
　――塾での講義や、著述などにかける時間が、どんどん削られている。父上はどれほど苦痛を感じておいでか。
　父の胸中の焦りを、友は推し量れるような気がする。
　烽山では、三人の番士が交代で、昼夜烽火台の監視にあたるのだが、明け番で下山した後、腹痛や発熱などを理由に山に登ってこない者もいる。
　番を逃れる口実ということもあったが、実際、烽山番士の発病は、あとを絶たなかった。
　役料を期待して烽山番となったものの、勤務の過酷さに耐えきれなくなるのだ。
「同役がひとり、病気だと言って番に就かなくてな」
　杯を傾ける父に、
「では、おふたりで、お務めだったのですか」
　――また、今度も
　とでも言うように、母は眉をしかめて問い返す。
「ああ、急だと代番が補充されずに二交代になるから、番に上がっている者の負担は重くなる」
「息抜きの間もありませんでしょう」
「烽を見落としたら一大事だからな。ここが痛む」

父は、親指と人指し指で、目頭を強く押す。
「今の季節は、まだいいが。秋の声を聞くと、寒さとの根較べがやって来る。どの番小屋もにわか造りで、風通しはこの上なくいい。雨だって、雪だって、ためらいなしに訪問してくれる。そんなときには、掛け布団をこうして」
背中から被るような仕種をして見せる。
「雨風で荒れると、里からの食糧や炊事番がやって来ないのが困るのだよ。鶏の一羽でも届けば、鍋で煮立てて、一日中食うものには事欠かんのだがな」
——我が家はいい。
碗を手にすると、父は貝の出汁の効いた吸い物を、目を細めてすする。
父は一日として欠勤したことはない。勤番に入るときの引き継ぎにも、
「途中で何があるか知れないのだから。次番の者の遅れを待っているときほど厭なものはない。俺の性には合わん」
と、必ず早めに家を出るのを習慣にしていた。
帰宅しているときの父は、早朝から塾に出て、講義、解釈、詩の添削など、側で手伝う友が心配になるほど多忙だ。
酒の量が増えたこのごろでは、夕食後、いっとき横になったりするのだが、それからは、夜遅くまで机に向かっている。
留守中の塾の代講記録に目を通し、次の勤務中に依頼する講義の予定を組む。『烽山日記』や詩稿などの著述に筆を執る父の書室には、いつまでも灯影が消えない。
夜ふけ、友は井戸端の水音に目を醒ましたことがある。
父が顔を洗っている。
「父上、こんな遅くにどうなさったの」
「いや、眠気ざましだ。お前は、もう寝みなさい」
手拭いで叩くように顔を拭うと、友に笑顔も見せずに背を向け、書室の障子を閉じた。
——眠気ざましなどではない。
父がなかなか寝つけないで苦しんでいるのを、友は、母から聞いて知っている。
昼夜三交代の不規則な烽代番や、わずかな怠慢も自分に許さないという張り詰めた明け暮れに、父は心も身体も休まることがないのだ。
父の帰りを待ちわびていた母も、弟たちに、
「静かになさい、家の中を駆けまわったりしないで」
そんなことばかり繰り返して、おろおろしている。
書室の片付けや、稿本を整理したり綴じたりするのは、友の仕事だ。端正に引き締まった父の背中を見ていると、友はときどき近寄りがたい気持ちになる。

〈3〉

「よく参られた。さあ、早く上がれ」
秋月から原震平（しんぺい）が訪ねてきたと知ると、父は玄関まで小走りに迎えに出る。その喜びようは、ふだんの父の姿とはまったく違う。
いつもと同じく、震平は、友と同い年の娘猷（みち）を連れている。
父より七歳ほど年上の震平は、長年、秋月の藩儒を務めていた。





祖父南冥のもとで学び、
——文に昭陽あり、詩に震平あり
と称され、父と才を競い合った同輩だ。
草花を栽培したり、笙の笛を奏でるのが趣味だという。
かつて、祖父南冥は、月に数日は秋月へ赴いて、先代の秋月藩主・黒田長舒（ながのぶ）公に儒学を講じていた。その侍講の役は、祖父が刑を受けると、父が代わりを務めた。
長舒公が、江戸参勤に父や源吾を伴い、藩費をもって祖父の著書『論語語由』の出版にあたらせたのは、五年ほど前のことになる。
本藩の城代組士にすぎない父が、長舒公に従うことができたのは、公のたっての願いで、務めを免除して貰えたからだ。
福岡本藩では長いあいだ幼君があいついでいたため、幕命によって、支藩秋月が、本藩の後見役、長崎警固役のうちの長崎巡察を担っている。
支藩である秋月が、本藩の排した亀井家を厚遇することができたのも、こうした事情があってのことだった。
福岡で、とうにその学派としての立場

を失ってしまっていた亀井家にとって、長舒公の変わらぬ庇護は、大きな拠りどころだったし、亀井儒学の誇りでもあった。

原震平も、恩師南冥に報いようと、苦境に陥っている亀井家と秋月藩との仲介に全力を注いできた。

秋月から百道までは十里と少し、途中、太宰府で一泊してやってきた震平と猷が、汚れた手足を濯ぐのももどかしそうに、父は居間に招く。

父が秋月へ通っていたころは、友もたびたび一緒に行って、猷と、原塾で机を並べたり、野山で遊んだりした。幼なじみの猷に会えるのは、友も嬉しい。

「源吾、原殿がみえたぞ」

源吾を呼ぶ父の声は、いつになく大きい。

「さあ、酒だ、酒だ。お前も一緒に飲め」

長舒公の江戸参勤に父と同伴した源吾には、それ以来、震平も何かと心配りをする。

父の補佐をしている源吾のことを、震平は、まるで亀井の跡取りのように扱うのだが、

「先生方とご同席など、めっそうもない」

源吾は、いつも控えめだ。

「友さんも猷も、源吾殿がご一緒だとほっとするんじゃないか。親父たちの酒の相手にはうんざりするだろうから」

震平は、源吾の遠慮をほぐすように誘う。

友と猷は笑顔を見合わせる。

「源吾兄さまは、いつも、わたしたちのおしゃべりに付き合って下さるけれど」

歯切れのよい友の口調に続けて、猷が面長の頰に少し朱をにじませて、

「ほんとうは、兄さまの方が、お逃げになりたいのかもしれませんわ」

穏やかな小さめの声で言葉をつなぐ。

その言葉遣いは、友よりずっと年上のようだ。

幼いときから見知っている源吾を、友も猷も、

「源吾兄さま」

と呼ぶ。

源吾の、亀井の血筋によく見かける二重瞼のくっきりした目が、困った、とまばたきをし、分厚い掌が後頭部を掻いている。

そんな源吾に助け船を出すように、

「源吾兄さまが、お困りですわ、わたくしたちの相手などと」

猷が震平に訴え、

「ねえ、友さん」

と、相槌を求める。

「ええ、源吾兄さまは、どうぞ、父上たちと」

「わたくしと友さん、ちっとも退屈なんてことありませんのよ」

猷の長い睫毛の眼差しと頷き合って、友も震平に振り向く。

「そうか、そうか。亀井殿が秋月へいらっしゃらなくなって、猷たちも、なかなか会えなくなったからな。ゆっくりとおしゃべりをするがいい」

「あら、わたくしは、四カ月ほど前でしたかしら、桜の時季にこちらへお邪魔しましたのよ」

「そうだった。猷は、そう言っていたな」

「父上が、参勤のお供で江戸へ行っていらしたときに」

去年の冬から、今年の夏にかけての半年間、震平は江戸で過ごしていた。留守



の寂しさをまぎらせようと、友の方から猷を百道に誘った。

「源吾兄さまのお迎えで、門弟の平七を連れて、太宰府のお花見がてら参りましたのよ」

長舒公が亡くなってまもなく、友の父は烽山勤めとなった。父も友も、その後、秋月を訪れていない。

多忙な震平も、なかなか藩を離れられず、百道にも、めったに来られなくなってからは、友が父に頼んで、猷を招くことが多い。

震平も、快く猷をよこす。

秋月への遣いに出されるのは、猷がよく馴染んでいる源吾だった。

すっかりおとなびてきた友や猷に、源吾の方が戸惑うのだろう。

めんどうを見るのはつくづく苦手だ、とでも言いたそうに、源吾は大きな身体をかがめて、不器用な動作で接する。

源吾が傍らにいると、なぜか友も猷も、はしゃいだ気分でおしゃべりが弾む。

秋月が新藩主に代わった後も、原震平はますます重く登用され、四人扶持、十四石の儒員から、上級職の馬廻役へ、翌年には、老職である納戸頭として百二十石の加増となった。

それは亀井にとっても朗報だった。閉じ籠もりがちになっている祖父南冥も、震平の話題になると、笑顔を見せ、声音が高くなる。

が、震平は、秋月での役職は荷が重い、と言う。

「藩での重任はありがたいことだが、二十余巻の詩稿の清書ができなくなってな。出版もいつのことになるやら。俺には、本当のところ、こっちの方が重要課題だよ」

「猷さんに清書させて、次の江戸行きの際にでも版木を彫らせればいい。詩集も大事だが、民生のための実学を主張する亀井儒学が、秋月で生かせるのは何よりのことだろう」

「ああ、建議が実って、数年前から養蚕に取り組みはじめたよ。猷が率先して、付近の女子衆に蚕の飼育や糸引きを教えている。猷は、実学にも詩稿にも、いい助手だ」

「家の蔵でも、お蚕さんを飼っていますの。桑摘みは、母とわたくしの仕事……」

「家内は、若い時分、江戸暮らしをしていたせいか、初め、蚕を嫌がりましてね」

「武士が農事に携わるのは、徂徠先生以来のわが学派の主張だ。けっこうではないか。民の暮らしに目を向けることこそが、今、儒者の果たす役目というものだろう」

亀井家では、男児がまだ幼くて、友が学問や書画に父の期待を受けている。同じように、原の家でも、猷の兄弟が病弱でなかなか学問にとりくめず、猷が父親の指導で優れた詩を詠み、福岡にもその評判が届いている。

同門で才を磨き合った父同士、娘に寄せる似かよった思いがあるのだろう。

「三従の身の女子が漢字などを知ると、ろくなことはないと、あれこれ言われるが」

「文字をなりわいにする家に生まれた娘だ。女子が、どこまで文字によって生きていけるか試みるのもいいではないか」

そう語り合って父たちは、それぞれの娘に満足そうな視線を向ける。

気心の知れた友人と交わす杯に、父の酔いは早い。

震平の前では、父も存分に酒に酔い、胸に積もっていることをぶちまける。

「板づくりの四角い望遠管など覗いたって、何が見えるものか。向こうの烽山の火など、星屑みたいなものだ」

「そんな程度にしか見えんだろうな」

「おそらくな。なにしろ、この三年、烽が上げられたことは、一度もないのだから」

「烽山などと、暇人の思いつきとしか考えられん」

「それでも、俺は山を見つめ続ける。まばたきの油断もせずに。寒さに震え、布団を身体に巻きつけてな。谷から霧でも上がってきてみろ。屋根を這う乳色のとばりを透かして凝視していると、しまいに、めまいがしてくる」

「学問を軽視し、異なる論議を切り捨てるから、異国に脅(おびや)かされるようなことになるのだ。儒者に学問のゆとりを与えなかったら、誰が若い者の教育にあたるというのだ」

「俺は、笞に叩かれて黙々と土を鋤く牛馬と同じだ。書物の文字を鋤き起こす暇もなしに、星屑捜しだ」

父がぼやく。

「烽の合図があれば、実際、大坂城代に素早く伝わるものだろうか」

本藩の烽台の状況については、震平も、人ごとではない。

「さあ、どうかな。すべての烽山が天候に恵まれ、番士が見落とさず、という上でのことだが。しかし、烽で伝えることができるのは、異国船の影が見えたということだけだ。烽火は、国籍や艦数、どの辺りに侵入しているのか、その勢いはどうなのかなど、語りはしない。つまり、船影が現れたと知ったところで、何も具体策は建てられんのだよ」

「結局は、追って知らされる文書によるしかないわけだ」

「烽に手間をとるくらいなら、急飛脚をたてた方がずっと早い」

「その任を、昭陽殿が、三年余にもわたって務めている。憤りは分かるよ」

「まあ、佐賀、福岡両藩にとっては、藩の存亡がかかっているからな。フェートン号の事件が、福岡の年番のときに起こっていたらと、重臣方は冷汗どころじゃないわけだ」

「どれほど経費と人員を注ぎ込むことになっても、思いつく限りのことを試みようというのだろうが」

英国船フェートン号の長崎港乱入は、佐賀藩と一年交代で長崎警固にあたる福岡藩にとって重大な事件だった。

長崎奉行は、幕府の指示どおりの警備船や兵の配置を怠っていた責任をとって自害。警固の年番にあたっていた佐賀藩主は蟄居の刑に処せられた。

その後、たびたび近づくオロシャの船影に、幕府は、筑紫北部の諸藩に、厳重警戒を命じた。

福岡藩が、警備の対策に奔走するのは、藩の命運をかけての大事業だった。

友と猷は、屋敷を出ると、西光寺の境内を抜け、紅葉(もみじ)八幡に足を向けた。

日の傾きが早い季節になっている。鳥居脇の石段に腰を下ろすと、目の前に鳥飼の湿地が広がり、秋の気配を帯びた少し冷たい風が、その先の砂丘から潮の香を運んでくる。



「縁談があるの」

猷が膝の上に置いた指を結んで、小声で言う。

「お嫁にいらしてしまうの？」

「お断りしようかと思って。まだまだ、嫁入りなどという気持ちになれなくて」

厚みのない背中を丸め、猷は肩を前に落とした。細面の色白の頬には、戸惑いが浮かんでいる。

「お父上は、どうおっしゃってるの」

「わたくし次第だと。父も強く勧めはしないの。父と親しい御納戸方役の方からのお話なので、お返事しにくいのだけれど、いろいろ事情もあって」

「お父上の塾の、これからのことを考えていらっしゃるのでしょう」

「それもあるわ。まだまだ作詩もしたいし。父の詩集の清書も手助けしなければと思うから。兄がもうちょっと元気になって、塾で教えられるようになればいいのだけれど」

猷は、小さく息を吐く。

「そういう理由ばかりではなく、わたくし……、嫁には行けないわ」

――どうしてと問いかけて、友は言葉を呑み込む。

薄い肌に包まれた猷の横顔が、いつになく沈んで見える。

「嫁に行ったら、詩や書画に費やす時間はうんと少なくなるのでしょうけれど」

友には、それしか言葉が見あたらない。

猷が、秋月を訪れる客に、見事な即興の詩を贈るということも、文人たちの口から聞いている。作詩に意欲を注ぐ猷の気持ちは、ますます膨らんでいることだろう。

友は、猷の紺縞木綿の膝に視線を向けた。しっかりと組まれた指には筋が浮き、爪の辺りだけ淡い紅色に染まっている。

友の、水仕事もすれば、屋敷内の菜園の草むしりもする、灰汁(あく)の滲み込んだ手と、何と違うことだろう。

猷は、

「ほかの理由、なんて大げさでしたわ。わたくしには、まだ早いと思っただけ……」

そう言いなおして、俯けていたうなじを友の方にまわす。濃いめの眉が、こめかみに向けて上がり、華奢な面差しに勝気さを覗かせている。

「もしかして猷さん、どなたかのことを？」

友が笑顔を向けると、

「そんなんじゃ……」

猷は、はにかんだ表情をして、砂丘へと視線を移す。

「ね、秋月の塾にいらしてた石田房(ふさ)さん、どうしていらっしゃる？」

猷は、え、と微かな声をたてて口籠もり、何度かまばたきをした。

原塾には、友や猷より三歳年上の女子がひとり入門していた。友も、秋月を訪れたとき、何度か顔を合わせている。

五人扶持ほどの、下役の武士の娘だと言っていた。十二、三歳で入門したころは、人目をはばかって、男子の身なりをしていたという。

――漢籍は値が高くてなかなか買えないの。父には、面倒はかけないから塾に行かせてほしい、と頼んだ手前、無理は言えないし。原先生に本をお借りして筆写をさせていただくから、何とかなるのだけれど。

ほつれた鬢(びん)の髪をかき上げて、筆写も

楽しいのよ、と、少しだけ白い歯を覗かせた。
「房さんは……」
猷は、言い淀む。
「七、八ヵ月ほど前に、旅に……。塾に来ることを、ご両親がだんだん強く反対するようになって、悩んでいらしたの。やはり、縁談があって。房さん、もう、十八を越えていたことだし。儒学などやるから嫁に行く気もなくなるのだ、と、お父上にずいぶんきつく言われたみたい」
「いろいろ手内職をして、紙や筆を買う費用をこさえていたでしょう?」
反故を細く切って、こよりを作っていた。
――それ、何にするの?
尋ねた友に、
――絹糸と一緒に織って布にするの。着物に仕立てると、柔らかくて着心地がいいのよ。
ひろげて見せてくれた風呂敷包みの中には、ていねいに縒ったこよりがたくさん入っていた。
幾度も水をくぐったと分かる質素な藍木綿の胸元からは、友が甘えてみたくなるような、やさしい匂いが漂っていた。
「とても熱心に学ぶので、父も房さんに期待していたの。几帳面で、正確な写本をなさるし、いい詩をお創りになるから。たったひとりの女子塾生だから、猷にもいい話相手になるだろう、と」
亀井塾にも女子の塾生はいない。震平が目をかけたのも分かる。
「房さんの母上も、内職までして恥ずかしいと、しまいには半狂乱になって塾をやめさせようとしたの。父も、そういうことなら、ご両親に従わなければと諭したのだけれど。房さん、頑として聞かなかった。そして、正月が明けたばかりの寒いころ、もっと詩を学びたいと、京へ……」
「京や江戸には、女の漢詩人もいると聞いたけれど」
「母は江戸で育ったから、わたくしも、よく耳にしていますの。秋月の狭い土地を離れて、たくさんの方と出会えれば、詩の勉強も、きっと進むでしょうね」
猷はしばらく考えるように黙ったあと、また続けた。
「房さん、日田から塾に来ていた男子塾生と一緒に、京へいらしたの」
――あの房さんが……。
「女人のひとり旅は、なかなか認められないから、仕方がなかったのかもしれないけれども。父も、ご両親に申し訳ない、娘さんをお預かりしながら行き届かなかったと、とても責任を感じて……」
猷の視線の先、妙見岬の木立に陽が落ち、砂丘は薄青い空の色を吸い込み始める。
「亡くなってしまったのよ、房さん」
「え、どうして? ご病気されたの?」
「とても疲れていらしたと。詩のことや、暮らし向きのことで。房さん、一緒だった男の方が留守のあいだに、自ら命を絶たれたの。お母上に宛てた便りがあったらしいわ。詩を創るのが辛くなったと。山峡の城下町秋月で描いていた学問や詩への憧れが、ほんの小さなものだと気付いたと」
ほつれ髪が揺らいでいた房の頬が、友の目によみがえる。
「京へ出て、半年と少ししか経っていなかったのでしょう?」



「そうよ、あまりに早すぎる……」
「誰だって、広い世に出れば、戸惑うことはあるでしょうに」
「父も、そう言って……。踏み堪えてほしかったと。房さんだって、承知していて旅立ったはずだ。暮らしの困難も、作詩の悩みも、不安を解く手掛かりが摑めるときが来る。そうすれば、次に踏み出す一歩も見えるものを。それだけの才能はあったのに、と」
「詩について、突き詰めて考えていらしたのね、房さんは」
「学問や文芸を培って生きるのは大変なことだと、房さんの死に教えられたような気がするの」
翳っていく岬を眺めたまま、猷も頷く。
「秋月では、ひとしきり、それ見たことか、という噂が行き交ったわ。でもね、房さんがうらやましいと思うこともある。わたくしも、京や江戸に出て、自分を試してみたい」
背丈ばかり高いけれど、ほっそりとして、ひ弱そうに見える猷の、どこからそうした大胆な思いが湧いてくるのだろう。友には不思議な感じさえする。
「房さんのように、命さえ賭けることになっても?」
「そういうものでしょう、学問も詩画も。そうしてでも求めるものでしょう?」
――ええ、祖父も父も、懸命に、亀井儒学を守り抜いているわ。でも、別の地へ飛び立つばかりが道ではない。
猷の視線は、岬の端に姿を消す鳥の群を追っている。
「その結果、自分は取るに足りない者だと分かるかもしれない。無力さに、心の綻びを感じるでしょうね。でも、それを知るのも必要ではないかしら」
「強いのね、猷さん」
――猷さん、わたしよりずっと早くおとなになっていく。
友は、胸の内で呟く。
夕靄が境内の砂地を這い、八幡宮の社殿を包む。

〈4〉

胸を圧されるような息苦しさを感じて、友は目を醒ました。
夢の中で猷とやりとりした言葉が、まるで現実のことのように思い起こされる。
――もう、猷さんは、嫁ぐことを決めてしまったのね。
友の口調は、咎めるような響きをともなっていた。
――ええ、あの方となら、一緒に学問を続けていけると思って。
猷は、首を前にかしげ、目を伏せて答えるのだが、声には自信が感じられる。
――源吾兄さまが、そう望んでのことなのね。
――そうよ。しばらくは、ふたりで江戸で学んで。それから秋月で、一緒に父の塾を続けていこうとお約束したのよ。
もう、今となっては、どうすることもできない……、友がどう努力しても、変えられることはひとつもないだろう……。そんなやりきれなさが重く澱む目覚めだ。
昨日、紅葉八幡の境内で、猷の縁談のことを聞いた。男子塾生と京へ行き、命を絶ったという石田房についても話し合った。
そのせいで見た夢だったのかもしれないが、猷の相手は源吾として現れてきた

のだ。

——どうして、源吾兄さまと結びつけて……。

自分に問いかけてみて、友は、心に萌しているものに行きあたったような気がする。

いつも、友と猷に、わけへだてなく細やかな心遣いを示してくれている源吾だった。けれど、その思いやりを、少しだけよけいに自分に注いでくれたら、という期待が胸の底にある。

秋月郊外の柘植の茂る山の麓まで、源吾や猷と、足を延ばした日が浮かんでくる。

灰白色の岩石が剝き出す樹林で、源吾は猷の足元を気づかった。

痩せた猷の足取りは、友の目にも危なっかしく映る。小径を踏みはずして木の幹に摑まったときなどに、指から血を滲ませているのを見ると、白い掌の血管がいっそう透けているように感じられ、友は、思わずその手をとって傷口に唇をあてたくなった。

そんな猷を思い出すと、源吾が、ついつい猷の方に心配りをするようになるのは、分かる。

仕種や声は、控えめな淡い印象を与える猷だが、そのたたずまいは、周りの者の視線を集めずにはおかない。

——草花を好む猷さんのお父上手ずからの、丹精の花なのだ。

亀井の家で、友が、次々と子の生まれる母の家事を助け、弟や妹の世話をし、男子塾生と論議を交わしている明け暮れを、源吾はよく知っている。

ふっくらと丸い頰を上気させ、きびきびと姉さんぶりを発揮する友。

——手を貸さなくても、友は上手に岩を伝って散策路をたどることができる。

源吾は、そう思っていただろう。

隣室に寝んでいる猷は、もう起きているだろうか。

目覚めぎわの夢のやりとりが、確かな重さを持つ塊となって、心の隅に場所を占める。

猷の詩の批評をする祖父は、上機嫌だ。

「清麗淡雅、とでも言おうか。猷君は細やかな心情に目を向ける。さすがに震平君が育てただけのことはある。震平君の、花を愛で、笙の音を楽しむ繊細な心の持ちようが、見事に刷り移され、香っている」

手放しのいつくしみは、友に対しても等しい。

「友の堂々とした情景詩もいい。まるで、清国の山水を眺めるようだ」

愛弟子の娘と、亀井の期待を担う孫娘、ふたりが、それぞれの性格を際立たせた詩を創ることが、祖父を満足させる。

「俺の言ったとおりだろう。亀井儒学は、豊かな情意を開かせたではないか」

二代、三代にわたって亀井学は枝葉を繁らせ、百年経っても残るものを育むのだと、久しぶりに思いのたけを吐く。

震平も父も手酌で呷って、すっかり舌先があやしい。

父の話はまわりくどくなっている。

「俺は長舒公のご好意に甘えて、つかのま立場を忘れた。太宰府書画会の開催にうつつをぬかし、長舒公の参勤に随身し、あのころ、俺は、まるで秋月藩士だった」



「それで良かったのだよ。長舒公の催した書画会では、友さんが初出品を飾り、昭陽殿のご兄弟の作品も数多く展示されて、亀井塾の健在を世に示した。いい機会だったではないか」

秋月藩と亀井家をとりもった震平は、なだめ役にまわる。

「本藩では、どれほど苦々しく受け取っていたことか。江戸行きはまずかった。無難に城内番を務めておれば、烽山勤めなんぞ、割り振られずにすんだ」

「何を言う。昭陽殿が江戸へ行ったからこそ、ようやく、南冥先生の『論語語由』が出版できたのだ」

「しかし、出来上がった『論語語由』は、文字の脱落だらけだ。どういう訳だ」

「版木は秋月にある。手を入れて原本どおりに再版しようではないか。長舒公さえご存命だったらなあ。序文をお書きになった長舒公も、あのままではご不満なことだろう」

長舒公は、父を伴った江戸参勤から帰着すると間もなく、長野巡察に出発。途中で不調を訴えての急死だった。疲労が重なっていたのだろう。まだ四十四歳の若さだった。

「時期が悪かった、悪すぎた。エゲレスが長崎港で大暴れしたと思ったら、こんどはオロシャの出没だ。油断だったのだ、俺の……。状況を読むのを怠った。異国の接近に、福岡藩は厳重な警戒にあたる義務があるというのに」

下級職にある父の立場では、藩議の情報をそう早くは捉えられない。だが、福岡を離れていなければ、門下生関係の誰かからは必ず伝えられたはずだった。

長引く烽台番勤務に、父は憤りのやり場もない。

「世の変化や突発事態に対応できる学問が盛んにならなければいかんのだよ。朱子学者が尊大ぶって、理に叶うとか叶わんとか振りかざしたって、理だけでは何ひとつ動きはしない。異国船の来航に右往左往して、俺たち民をこき使うだけではないか」

「こんなことじゃ、あの連中の思うつぼだ。人の情意や意欲が押しつぶされ、学問や文芸など、どこかへ吹き飛んでしまいそうだ」

震平が、気兼ねなく言えるのも、父や祖父に対してだけだ。

「唐音さえできれば、慌てふためかなくて済んだはずだ。エゲレスやオロシャの動きなど、即座に摑めたものを」

柱に寄りかかった祖父の嗄れ声に、震平も頷く。

「幕府の唐通辞は二十人もいないそうですな」

「なんたることだ。オランダ語など、訳解片手にしどろもどろじゃないか。清国の書物で、西洋事情など、すぐに知ることができるというのに」

唐音さえ阻んでしまった幕府の政策を、祖父はいつものように嘲る。

畳に片肘を付いていた父が、ゆらりと身体を起こすと、三味線を抱えるような身振りをして口ずさみはじめた。

「うぬぼれオロシャめが倭をおどす
悪魔の触手が襟くびをさする
俺はオロシャにひっかけられた
魔手の投げ網にとじこめられた」

急に祖父が立ち上がった。

「黙れ、昭陽」

激しい声を投げ、膳を蹴散らす。
周りの者たちは、一瞬息を呑む。
「腰ぬけめ、おどおどと辺りばかりを窺いおって」
「南冥先生、どうか、お席に」
震平が素早く祖父の脇に寄る。
「昭陽がなんだ、オロシャがなんだ」
「先生、少し酒が過ぎたのでしょう、お身体に障る。お座り下さい」
顔色を赤黒くした祖父は、
「おかしいことだらけだ、この世は。何もかもまちがいばっかりだ」
睨むように目を据えて怒鳴る。
それから後の祖父の大声は、もう言葉になっていない。
腕を押さえた父を振り払う。七十歳になろうとしている祖父だけれど、酒の勢いも借りて、小柄な父よりずっと精悍だ。
物音を聞きつけたのか、勢いよく障子を開けて、源吾が座敷に入ってきた。
友は、たじろいでいる猷の目と出会う。
猷はその視線を源吾に向けた。
――うん。
すぐに、頷くように応えを返した源吾が、祖父南冥の身体を抱きとめる。
源吾の体格と若さは、はるかに祖父を上まわる。
このとき、猷と源吾の呼吸が、素早く、ごく自然に行き来したように、友には感じられた。
――夢のせいだ。今朝方、おかしな夢を見たから、猷さんを意識してしまう。
父の机の前の障子は開け放され、色づきはじめた楷樹の葉がかすかに揺れる。
「どうにかして、亀井儒学を正しく伝えるために、『論語語由』の原本どおりの再版をしたいのだが。それができれば、お父上の気持ちも、少しは安らぐのではないだろうか」
手習いなどにまだ使える反故を整理している友の耳に、独り言のような父の声が届く。
窓の手前の父の背中は、庭の陽射しを逆光にして黒い影となり、動きを止めたままだ。
――この世はまちがいだらけだ。
祖父は、このごろ、こうしたことばかり口にしていた。
「あまり、お加減が良くないようですの」
障子の桟を拭いている母が手を止める。
「無理もない。この四、五年、お父上には、ことさら辛いことばかりだった。ようやく出版された『論語語由』も、ほとんど買い取り先がない。ずっと病気がちだったお母上も亡くなり、秋月の長舒公も突然他界された。そして、俺の烽山勤務だ」
――働き盛りからの蟄居に加えて、こうした出来事が、おじいさまの心を蝕んできているのではないだろうか。
「お食事をお摂りにならないこともありますのよ。原さまがお見えになったとき、楽しそうでしたから、ほっとしましたのに」
かつての磊落だった姿からは考えられない言葉や態度が心配だと、母は言う。
「お給仕をしようとすると、茶碗や箸を、お投げになったり」
友が近づいただけなのに、何かに追い詰められたように部屋の隅へと後ずさりすることがあった。
ときには定まらない視線で、いつまでも庭を歩き続ける。
「おじいさま、もう、お入りなさいませ」
声をかけると、恐ろしいほどの強い眼差しを返して、友を驚かせた。
儒学者として育てた息子が、今置かれている立場。そうなる原因となった異学の禁からの出来事。そして、異国船の来航という、筑紫の北部諸藩に吹き荒れている嵐。
そのひとつひとつが、祖父を、これでもか、これでもかと傷めつけているのだ。
塾生はもう二十人を割ってしまっている。



「医術の方で、何か……。薬局を見ていただくくらいは、大丈夫かもしれんな」
父は、あれこれと、祖父の心をひきたてる方策を思案する。
弟ふたりが、歓声をあげ足音も荒く、書室の脇の廊下を走っていく。
母は弟たちの名を呼んで、慌てて書室を出て行った。
「あいつらめ……」
父の表情が曇る。
「講義の最中にも、兄弟でふざけあって授業を乱す。半刻と席に着いておれんのだから。まったく、頼りにならんやつらだ」
「義一郎は七歳、鉄次郎はまだ四歳ですもの。もう少し経てば、おとなになりましょう」
「友はそうではなかったぞ。孝経、論語と、あの年ごろには素読していたじゃないか」
「あれたちは男の子ですから、きかん気で……」
「父親は家を空けるし、母親は赤子にかかりきりだ。そんなことで落ち着かんのだろうな。手がかかって大変だろうが、友、あの子らを十分躾(しつけ)てやれよ」
まもなく四十歳になろうとする父は、亀井儒学の、しっかりした跡継ぎをどれほど望んでいることだろう。
はしゃぐ弟たちの気配を追って肩を落としている父を見るのは辛い。

〈5〉

十一月になって、猷が門弟の平七を連れて、突然百道を訪れた。
震平とともに三日間滞在して帰ってから、ふた月ほどしか経っていない。
「しばらく昭陽先生のもとに、わたくしを置いて下さいませ」
切迫した響きが感じられる口調で話すと、猷は震平からの手紙を父に渡した。
それは、秋月藩の政変を報せるものだった。
先藩主長舒公の側近として、長年藩政に携わってきた二家老が失脚し、ほかに五名の重臣が解任されて平士(ひらし)に格下げとなったという。震平をとりたて、亀井家への支援をおしまない老職たちだった。
そうした報告に続けて、
——藩内の今後は流動的で、どのようなことが起こるか予想がつかない。指導している藩校への風あたりは強く、とても学問のできる状況ではないので、自分の詩稿のうち大切なものと、猷を、当分預かってほしい。
という旨が記されていた。
手紙を読み終えた父が、
「猷さんの身に危険がおよぶ気配でもあってのことか」
と尋ねると、猷は、
「それはないと思いますが、父は、わたくしの行動が拘束されますと、詩稿を守れなくなるかもしれないと」
震平の意思を、そう伝えた。
「原殿は、猷さんのことが心配なのだよ。こちらの家塾は小人数で物足りないことだろうが、落ち着いている。気兼ねなく過ごしなさい。友の隣の部屋は、いつでも猷さんのために空けてあるのだから」
父に言われると、ようやく、猷は笑みを浮かべた。
震平から何度か届いた便りには、その後、変事などは伝えられていなかったが、猷に秋月へ戻るようにとも記されて



はいない。
秋月のことは心配だった。が、男子門弟ばかりの家塾に猷が混じったことで、友たちは華やぎを感じて新春を迎えることができた。
三月、震平は藩主の供をして江戸参勤に発った。
不安は拭いきれていなかったが、震平が江戸へ伴われると聞き、あらかた政変の収拾はついたのだと思えた。
だが、間もなく、それが楽観だったと知る。
父は書室に猷を招くと、
「必要以上に心配しないように」
と前置きして、猷に伝えた。
「知人の口から耳に入った話で、確かなことが分からんのだが。震平殿が落雷に遇って怪我をされた、という。しばらく、藩邸の詰方部屋で療養なさるそうだ」
「怪我は、どの程度なのでしょうか」
猷の声が、微かに震えている。
「お命に別状はないと。おおやけにされていないので、詳しいことは……。つてを頼って尋ねてみるが」
父の努力にもかかわらず、ようすが摑めないうちに、さらに震平をめぐる状況が悪化した。
江戸滞在中の震平は藩儒、納戸頭とも罷免され、馬廻役平士に配置換えとなった。
——亀井儒学は、学術の純正をそこない、藩主、藩人を誤る
と、弾劾されたという。
その報せも、人伝に秋月の原家、福岡の亀井家に届いたきり、震平は江戸で行方を絶った。
続いて、秋月藩校の教授は全員が解任となり、後任にはすべて朱子学派の儒者があてられた、という報告も届く。
「とうとう、秋月も、そんな事態になったのか……」
祖父南冥が異学の禁に遇ってから二十余年、秋月公の庇護と、震平の学才や努力で守ってきた亀井儒学は、もっとも身近だった拠点を失った。
「一度、秋月の母のところへ戻った方がいいかと」
「いや、お母上のことも気掛かりだろうが、猷さんが詩稿を守るということを考えたら、もう少し待った方がいい」
「そうですね。焦っても、父を捜しようがありませんけれど」
猷は、すっかり、いつもの落ち着きをなくしている。
「だんなさま、お義父上さまが、刃物を……。お止めして、早くお止めして」
離れ屋草香江亭に昼飯を届けた母が、父の書室に駆け込んだのは、秋月の教授解任の報せを聞いて数日後のことだ。
父が源吾を呼んで屋敷を走り出る。
縁側に出てきた猷を、友は止めた。
「また、猷さんを驚かせるかもしれないから」
——おじいさまは、気持ちを乱していらっしゃるに違いない。猷さんには、お見せしたくない。
一瞬、そう思ってのことだ。友は、母と一緒に、父の後を追った。
祖父は離れ屋の上框に仁王立ちになり、激しく肩を上下させていた。抜身の脇差が祖父の手に握られている。
「お父上、どうか、どうか、お収めを」
なだめようとする父に、

「やかましい、下がれ」
一喝すると、祖父は、腰のあたりで脇差を払った。父が身をかわす。息を切らしているのか、声の割りには、祖父の腕に力が入っていない。
「俺に構うな。お前らに面倒を見てもらわずとも、己のことぐらい片を付けられる」
「よく存じております。どうか、脇差をお収め下さい」
蒼白になった父が、腰を低くして祖父の動きをさぐりながら近寄り、それから膝を付いて、そっと側に進む。そのあいだに、脇にまわった源吾が、祖父の腰を抱えた。しっかりと支えたところで、父が静かに祖父の手から脇差を離させ、膝の後方に置いた。
祖父はもう、抗うようすはなかった。左手首のかすり傷から、一筋、わずかに血が流れている。父は、傷口を確かめると、懐紙で押さえて、それを拭い取った。
「源吾、これを母家の方へ」
父から渡された脇差を受け取り、壁際に投げ捨ててあった鞘に納めると、源吾は、ぐったりとした母をいたわって母家へ戻った。
一時の昂りだったのだろう。次第に呼吸が鎮まると、祖父は、よろめく足どりで居間に入り、崩れるように座った。
祖父の言動に困惑することが増え、家族は心を傷めていた。落ち着いているときには問題はない。が、いったん感情が荒れ出すと、手の施しようがなくなる。
そこへもってきての、秋月の原震平への処遇だった。落胆した祖父は激しく動揺したのだろう。
「刃物は、母家に下げなさい。剃刀なども」
父は、友に離れ屋の中の危険になりそうな物を片付けさせた。

「源吾を医術に専念させようと思う」
母と友に、父が切り出した。
いずれそうするつもりで、長年、源吾を博多で開業している医師のもとへ、学びに通わせていた。この際、代診に預けていた医業を源吾に任せたい、と父は言う。
「お父上に、少し医術を担っていただこう。このままでは、お父上が気鬱になるのも当然だ」
代診によって、いまだに三百近い患家の診察に携わっている。
亀井の医術は古医方による。人体解剖に基づく清国古来の理論と、新薬モルヒネ、キニーネなどを用いた鎮痛、解熱、オヒームによる痢症の治療は、めざましい治療効果をあげ、信頼を得ている。
かつて、祖父は、
「幕府の公認する後世派の医術など、迷信みたいな勘に頼り、気を入れるといった手当てばかりだ。あれでは、治る者がどんどん命を落とす」
と、その治療法を批判した。
その後、蘭医学も広まってくると、改めて古医方の進んだ治療が見直され、期待が高まっている。
「ついては、一年ほど、源吾を長崎にやり、修行させたいと考えたのだが。もう充分に診療にあたれるはずだが、若いうちに多くを学んでおいた方がいいだろう」
祖父と医術修行の同輩だった医師が長崎にいて、健在で活躍している。
「けっこうなことだと思いますけれど……。塾の助手の方は、源吾殿がいなくても大丈夫なのでしょうか」
「いや、それは心配ない」
父は、母の言葉を軽くさえぎった。
「このところ、烽台番が割りあてられる回数も減ってきている。それに、塾では、友がなかなかの役割を果たしてくれるのでな。思い切って源吾を医術にあたらせてみてもいいかと。塾の会講で、友が最高点を取ることが多い。ここまでくれば、友に、代講を任せることもできる」
父の説明に、母はほっとした笑顔を見せる。
「このあいだの、礼記の内則篇の奪席は見事だった」
塾生が、それぞれ講義をし、たがいに○×をつける。塾頭である父や、塾生同士が講義者に質問をしては、その回答の内容に、また○×をつける。
最後に一番○の多かった者が、合格者として上座に着くという試験だ。
友のたびかさなる合格に、父は褒美として、自分の書室の一部を仕切って、友専用の書室をあてがってくれた。
半月ほど後に、源吾は長崎へ修行に向かった。

「お父上のその後のご消息は？」
震平の行方は、友の父にも掴めない。去年の暮れから秋月を離れている猷にも、調べようがなかった。それでも、友と猷は毎日顔を合わせるたびに尋ね合う。
「まったく分かりませんの。藩内でいろいろあってのことですから、家から江戸に遣いをやることもできませんし。藩の老職の方にお願いして、江戸屋敷に問い合わせていただいたのですけれど、一、二度、要領を得ない返事があったきりですのよ」
「ご無事だとさえ確かめられれば……」
――ええ。
声にしないで頷いて、猷は黙った。それから、いつもの俯きがちな姿勢で唇を開いた。
「友さんの、今までのお気持ちが、ようやく分かったような気がしますの。福岡藩の中で、南冥先生や昭陽先生がたどってこられた苦難も。秋月にいて、同じ亀井学の儒者の娘として、知らない訳ではなかったのですけれど」
猷は顔を上げ、右手をちょっと首筋にあて、髪の生え際に添わせた。
その指は、ひところよりいっそう白く細い。
「友さんが生まれたときから、ご一家が亀井儒学を守るために耐えていらした、その同じ立場を、わたくしは、今になって身に受けているのですものね」
「わたしは、幼いときからこういうものだと思ってきたから」
祖父や父が逆風に流されまいと堪えて生きる毎日を見て、友は育ってきた。
「去年、父とこちらにやって来たあのころまでは、穏やかでした」
紅葉八幡の境内で話した一年前の秋が、とても幼い日のことのようだ。
友も、猷も、年が明ければ十七歳になる。
「手元にある父の詩集、ほんとうにわたくしが受け継ぐことになりましたわ。父がこんなふうになって、あと世に問えることは、あの二十冊あまりの詩集だけ……」
「お父上、きっとお帰りになられます

よ、猷さん」
　思い詰めた猷の眼差しに、友は不安を覚える。
　――そんなに一途な表情をなさらないで。
　祖父のようすや、死を選んだ石田房のことを思うと、そう祈るような気持ちになる。
　友が祖父の姿を思い描いているのを察したように、猷は言う。
「南冥先生の口癖……。詩敵と、酒敵とにあたり恐れず、己を天下に問う。父もよく口にしていました。花をいつくしみ、笛を好む父には、あまり似つかわしくありませんでしたけれど。自分を世に問う……。わたくし、そんな道を選んでみようかと」
「世に問うって?」
「旅……。秋月にだけいては、父の詩も、わたくしの詩も、ほかの方と競い合うことができませんもの」
　語尾を笑い声にまぎらせて、
「酒敵に対しては、どうでしょうかしら。わたくし、ちょっとは、いけますのよ」
　猷は、友の目を覗き込む。
　柔和な微笑みは、旅などという決意を含んでいるとは感じられない。
「お父上のお帰りを待たれたら? 待っていても詩を創ることはできるわ。いずれ、お父上の家塾を続けなければいけないでしょう? 兄上とは、ご相談なさったの?」
　そう止める友に、猷は、今度は声をたてて笑って、
「父に従い……、兄に従い……?」
「それは、やはり伺わないと」
「父は、わたくしにとって、かけがえのない師ですわ。だから父の詩集を世に出したいの。父が側にいたとしたら、やはり、わたくしに、こうするようにおっしゃるでしょう」
　百道に猷を預けた震平の配慮を考えれば、確かに納得はできる。
「兄はね……。病気なの。手や顔が腫れて。目もかすんできているのよ。弟もそうなの。もう、ずっと前から秋月を離れて、山中で療養してますの。良くなる見込みのない病。そう長くは生きられない病。いつか、わたしくもなるわ、兄や弟みたいに。人前には出られなくなってしまう。だから、嫁には……」
　猷は、言いさしたことに少しためらいを見せ、膝を揃えなおす。
「そうなる前に、病気にならないうちに、詩集を。そんな焦りがあって」
　猷の兄弟が身体が弱いとは聞いていたけれど、それほど具合が悪いとは知らなかった。
　返す言葉を捜せないでいる友と反対に、猷はこれまでになく饒舌だ。
「父の詩集を、そして、できればその巻末にわたくしの詩を添えて出版したいの。いくら書きためてあっても、清書して自家蔵書として書箱に納めてみても、なんにもならないでしょう? いつか朽ちていってしまう。身体とおんなじように」
　父親の詩集を出版することばかりに、猷の心が傾いている。
「版木にし、本に刷り、たくさんの人の目にさらさなければ。南冥先生のおっしゃったように、百年、人の批評に耐えられるかどうかも、版にしなければ試せませんのよ」
　猷の言いたいことは、友にも理解できる。
　祖父の渾身の著書『論語語由』を出版しようと、父は懸命の努力を続けた。
　――南冥殿の業績を学界に打ち立てるために。
　先代の秋月公は、そう言って、父を江戸に伴い、小藩の乏しい財政の中から百二十両という費用をあて、序文まで添えて開版の支援をしてくれた。
　版にして出す。それがどれほど重い価値を持つか、友はよく知っている。
「源吾兄さまは、長崎でどうしておいでかしら」
　猷は、口調を緩め、いつものおずおずとして物言いで尋ねるともなく呟いた。
「医術を修め、ここへ戻っていらして、亀井さまの跡取りになられるのでしょうね」
「医家としての亀井を担うために、源吾兄さまは修行にいらしたのだけれど」
「じゃ、友さんの婿さまになられるのね」
「源吾兄さまが、亀井の医術を継ぐということと、わたしとは、別のことだわ。まだ幼いけれど、亀井家の跡取りはいますから」
　猷は庭先に視線を移す。
「佐賀から長崎へゆくつもりなの。文芸の盛んな土地で、たくさんの文士と交流して、わたくしの詩を磨いてみたい。そうした方たちのあいだで、わたくしの詩文がどれほどのものかも、測ることができる。向こうで源吾兄さまにお逢いできるかしら」
「旅に? いつそんなことを決めたの。猷さん。さっきおっしゃった旅って、そんなにすぐ発たれることだったの?」
「時が惜しいの。いろいろなものが、わたしの耳元で、早く、早く、と急かせるから」
「お父上の消息を確かめるまで、もう少しお待ちになれば。お母上だって、心細くていらっしゃるでしょう」
「父の門弟だった方にお願いして、藩から、それぞれの土地の文士を訪ねるお許しもいただいたの。長崎、それから京。できることなら、江戸へ行ってみようと……。父とわたくしの詩を携えて。父の消息も確かめたいし」
「お父上は、秋月に戻っていらっしゃるわ。待った方がいいわ」
「友さんなら、きっとそうなさるわね。昭陽先生のお家で一年暮らして、思ったの。百道の、この白い土……。もしかして、さらさらと崩れてしまうかもしれない砂地を、友さんは、あきらめずに踏み固めていらっしゃる。それが友さんの強いところ」
「そんなふうに悲観はしていないわ。家塾も、祖父や母、弟妹たちのことも、父と一緒に守らなければならないもの」
「そうね、わたくしも友さんに負けない。試してみるわ、自分の詩を。いずれは、筑紫を出て」
「そういうことならば、わたしも猷さんに負けない。負けたら、競い合えなくなってしまうものね」

このごろ、福岡や秋月の文人たちのあいだで、

——詩の原猷、画の亀井友

——筑紫の梅花二輪

と、噂されている。

「今までだって、わたくしたち、心のどこかで競い合っていたと思いません？　これからは、きっと周囲の人びとが、互いを気づかせてくれるでしょうね。福岡や秋月で漢詩文に手を染める女子は、ほかにいないのですもの」

男子門弟をしのいで学んできたのだ。友も猷も、それぞれ負けず嫌いに育つのは、あたりまえかもしれない。

「ね、鏡をお借りしていいかしら」

鏡架の前に座り、猷は髷を解き始める。ていねいに何度も髪を梳くと、紅鹿子の手絡で垂髪を束ねた。

「髷を下ろすなんて、ちょっと幼稚な仕種ね、決心を示すにしては。仏道に、ではなく、詩道に帰依して、詩韻の響きにわたくしを委ねて生きる。こんなありふれた言葉も、文字をたしなむ者としては恥ずかしいかもしれませんわね」

髪で覆ってしまったうなじを傾けて、猷は恥ずかしそうな笑みを浮かべる。垂髪の猷は、ひとまわり細く見えた。

十七歳の正月を迎える前に、猷は、一年余を過ごした友の家を後にした。

——お父上の安否を確かめてからになさったら。

そう繰り返す友を振り切ると、震平から受け取ったという脇差を抱え、原塾の門弟平七を供に、佐賀へと発った。

友の目に猷の姿が小さくなっても、冬の淡い陽が、髪の紅鹿子を浮き上がらせていた。

〈6〉

「これは難題だな。原殿の細君からの便りだ」

明け番で烽山から戻った父は、書室の机に秋月からの手紙を置くと、大きく息をついた。

父の脱いだ道中着を片づけていた母は、

「原さま、どうかなさいました？　また、悪い報せですか」

心配そうに尋ねる。

「いや、猷さんのことだ。源吾を猷さんの婿にと。内諾が得られれば、震平殿の弟を代人に立てて、正式に頼みに来ると」

「そんな無体な。源吾殿は、亀井の医術を継ぐと知っているのに」

「承知の上で、原家を助けてほしい、と」

「震平さまの行方のこと、息子さんたちのご病気、そして猷さんの旅立ち。いろいろなことで気弱になっていらっしゃるのでしょうけれど」

「猷さんは、今長崎にいるという。たびたび源吾のいる診療所を訪ねるらしい。その猷さんの便りを読んでの親心もあるのだろうが」

「では、なんですか。源吾殿と猷さんが、そんなふうに望んでいるとでも？」

憤慨しかけて、母は急に背筋を起こすと、友に顔を振り向けた。

母が気付く前から、友は動悸が打っている。

——まさか、そんな

という気持ちと、





——でも、予測していた。こんなことがあるかもしれないと。

その両方の思いが入り交じる。

「友、源吾殿の嫁にはあなたを、と父上もわたしも思っていたのだけれど」

「震平殿の細君は、源吾と猷さんの仲がどうとかは言っていない。猷さんは、門弟を連れているとは言っても一人旅と同然。父親や夫のように守ってやれる訳ではない。それをご心配になってのことだろう」

思いもよらない申し入れに、父も母も困惑している。いきなり耳にした友も、それは同じだ。

「父上、そのことはもう少し考えましょう。猷さんも、わたしも、源吾さまを兄みたいに慕ってきましたけれど、急にお話を進めるのは……」

ようやくのことで、気持ちを鎮める。

「いや、源吾が長崎から戻ったらとは思っていたが」

「亀井の一族だから、家塾に寄宿しているからといって、わたしの夫に、とはお決めにならないで、父上」

「しかし、こういう申し出があるとなると」

「なおのこと、急いで決めたりしたら、猷さんのお母上だって、いい気持ちではないでしょう？」

猷が長崎にいるということが気になるのは確かだった。

——源吾兄さまの気持ちが知りたい。

友は、初めて、はっきりとそう思った。

藩内の文人たちの口を通じて、長崎の猷の噂が届いてくる。

唐人と詩席をともにして、見事な応唱をしたと、たいそうな評判だ。長崎や秋月で、猷の詩を筆写し、愛誦する女人が大勢いるという。

秋風が散らすひと葉
悲しみの目をそらす
はらからも異郷の人
行く手にはただ別離の途

その詩の哀感やさしさが、いままで漢詩には縁遠かった女子に、親しみを覚えさせるのだと、耳にする。

すらりと伸びた華奢な身体つきが、はかなさを感じさせる猷。ひかえめに、ためらうような眼差しばかり見せていた。

そんな猷を求める縁談が、猷が身を寄せている儒者のもとに、いくつも持ち込まれるとか。猷自身はにべもなく断っている、という話とともに伝ってくる。

猷を梅花になぞらえるとしたら、紅梅に似ている、と友は思う。芽吹きの前の山野に慎しい紅色を点々とつけて、華やぎをともす。

——だとしたら、わたしは、白い梅だ。紅梅のように、人目を引くことはないかもしれない。けれど、寒夜にもその姿を浮き立たせ、花のありかを告げる。

風の冷たい季節に開く梅の、凛とした香気が友は好きだ。

「江戸に遊学して、もっと詩文をみがいてみたい」

佐賀、長崎を指して発つときの、猷の言葉がよみがえる。

——猷さんが江戸へ行ってしまったら、筑紫の梅花は、二輪ではなくなってしまうのではないの。



行方知れずの震平、いつ病に襲われるかしれない身体。今の猷は、明け暮れ、命の果てを考えないではいられないだろう。

その猷が源吾を求めるなら、そして、もし源吾も猷と生きたいと願っているのなら、辛いけれど、そのことを受け止めなければならない。

祖父や父、亀井の家のこれからのために、という理由だけで源吾に友を選んでほしくはない。

祖父の住む離れ屋から火の手が上がった。

余寒の風が肌を刺す日の未明のことだ。

「起きろ、火事だ」

父の叫び声で目を覚ました。

すでに、東窓の障子は真っ赤な炎の影に染められている。木材の弾ける音が激しく響く。

「離れ屋だ。早く消火を」

友は寝巻のまま屋敷を飛び出す。

炎がいちだんと高く上がっているのは、祖父の書室の辺りだろうか。

何度もうなされた、幼い日の火事の恐怖が戻る。肌に吹きつける熱風。髪を焦がす火の粉。あのときと同じだ。友の身体が小刻みに震え、足がすくむ。

「水だ、水をよこせ」

「早くしろ、奥に燃え移るぞ」

近所の人や塾生たちの、必死の消火が続く。

——おじいさま、どこ？　誰か早く。急がないと危ない。おじいさまを連れ出して。

塾生たちが、水を被り、燃え盛る離れ屋に近づこうとしている。

祖父を探しているのだ。

炎に照らし出される人びとの中に、祖父の姿はない。

四半刻も経っただろうか、

「ようし、下火になったぞ」

と声が上がる。それを合図のように、父たちが、まだ燃えている離れ屋に飛び込んだ。

全焼はまぬがれたものの、祖父の書室や居間の辺りは、跡形もなく焼け落ちている。

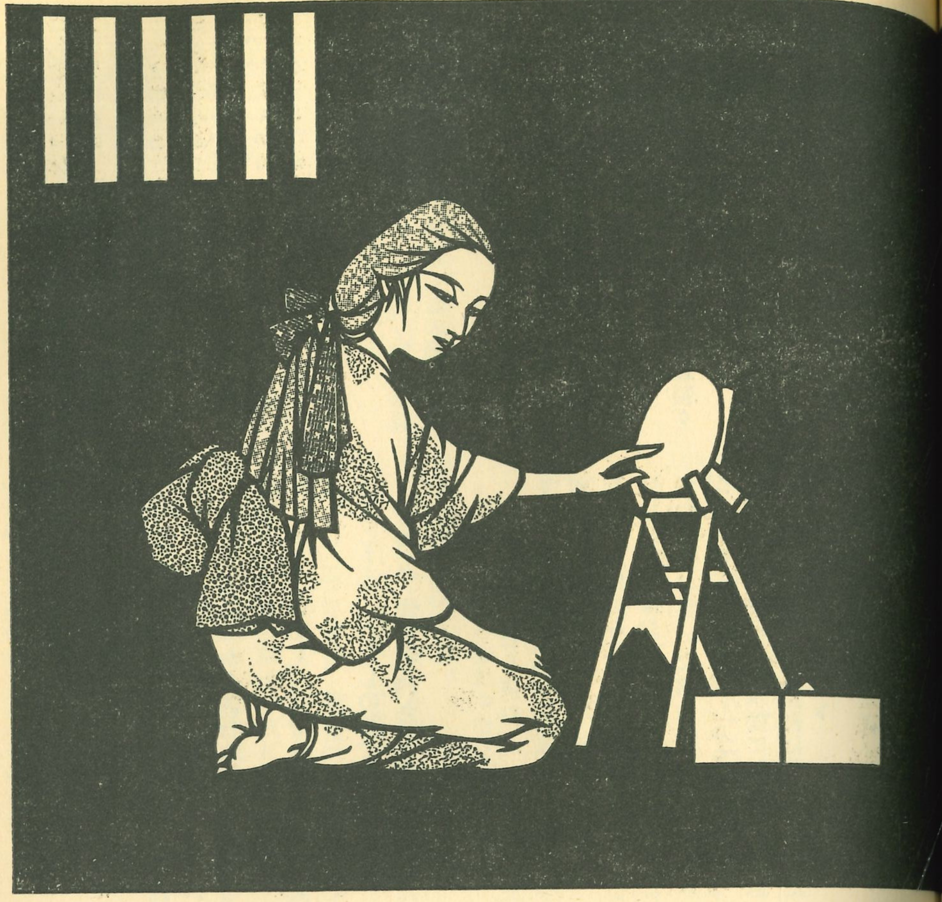
崩れた梁の下の祖父の遺体は、友が恐れたほどには痛々しいものではなかった。

庭の隅、手水台の脇に、祖父愛用の書物や稿本の束が置かれていることに父が気付いたのは、夜が明けてからだ。

吾亦跳身天半去

黄ばんだ紙のあいだに、目立って白い





画箋紙が覗き、祖父の筆跡が残されていた。

昔、父が著した詩の一節だった。

——身を跳らせて天半に去る……、おじいさまの、命をかけての、異学の禁に対する抗議だったのだ。亀井儒学に課せられた、認めがたい重罰への抗議。胸の内に長いあいだくすぶり続けていた、怒りの炎を屋敷に放ったにちがいない。

源吾も修行を切り上げて戻り、質素な葬儀を済ませた。焼け跡の始末などをする家族や塾生の嘆きにもまして、父の憔悴がつのる。

「正気を無くされてのことだっただろうが。そんなお父上を身近でお世話すべきだった。母家へお移ししておけば、防げたこと」

「小さい間違いも起こさないようにと心掛けて、だんなさまはお務めしていらしたのですから」

慰める母に、

「それを言えば、お父上を責めることになる。もう少し早く火の手に気付きさえすれば」

悔いても悔やみきれないと繰り返す。

父は、引責のための切腹を認めてほしいと藩に申し出た。が、

——軽輩の者の起こした微禍ゆえ、おかまいなし

との沙汰が、城代組頭から父に伝えられただけだった。

——存在を忘れていたとばかりの言い方ではないか。

亀井家の置かれてきた歳月を、まるで無かったことのように扱う沙汰は、いっそう父の心を沈ませた。

弟の成人を待たずに、隠居、家督相続を考え始めた父は、源吾と友の縁組を急いだ。

「原殿の細君には申し訳ないが、猷さんとのことは断る。源吾はよそへはやれん。源吾も長年亀井の家にいて、実の家族同様に暮らしてきたのだ。異存はないだろう」

父は、当然のなりゆきのように縁談を運ぼうとしている。

「父上、わたしは、源吾兄さまのお気持ちをきちんと確かめてからにしていただきたいの。ずっと亀井にいたからといって、わたしを嫁にするかどうかまで、お考えではなかったでしょうから」

「何、心配することはない」

父は軽くかわす。

「源吾兄さまにお話しするのは少し待って、父上。わがままを言うようですけれど」

物心つくころから源吾とはくったくなく接してきた。

——父上のお立場は分かりますが、大事なことですもの。源吾兄さまの考えていることを、わたしの耳で確かめたい。

そして、友の気持ちも源吾に伝えたい、と思う。

九州第一の梅

祖父の五七日も済むと、家族も塾生も、火事や祖父の死の衝撃から少しずつ癒されるようになった。何につけても、祖父が思い出され、目頭を押さえることには変わりはなかったが、以前はやかましいと感じていた弟や妹のはしゃぐ声が、かえって、皆の悲しみをまぎらせる。

屋敷裏の樋井川の水面に射す陽がまぶしくなるころ、友は源吾に詩文だけしたためた半切を手渡した。

今宵、君のために開く
花の真意を知らんと欲せば
三更の月を踏んで来たれ

「友、今から源吾が赤子の風邪の往診に行く。手伝ってやれ」

父から言われたのは、源吾に詩を贈って三日目の午後だった。

友は、この三日間ほど、源吾の動作のひとつひとつが気になったことはなかった。

源吾は、長崎から帰ってからは診療に忙しく、外出が多い。

屋敷で顔を合わせるときは、視線を向けまいと努めた。だが、源吾の立ち上がる気配がしたり、話し声が届いてくると、ついその方に目が行ってしまう。

——源吾兄さまの答えがほしい。

そう思って焦れた。父の指示とはいえ、友は重い気持ちのまま源吾と同行した。

郊外への往診だったので、往復に手間取った。そのあいだ、源吾も友もぎこちなく、以前のように気軽な会話はできなかった。百道の松原にさしかかると、源吾は足を止め、

「話のできる機会を持っていたので返詩が遅くなったが」

懐から箋紙を取り出して、友に渡した。

「ここで開いてもいいの?」

尋ねる友に、源吾は頷き返す。

花の盛りは誰が家の娘
薫風に揺れ真に可憐なり
君もし主を定めたらずば
吾こそ香に寄り添わん

大柄な源吾を見上げる友に、

「俺は、詩は苦手だ」

と、照れ臭そうに言って、節の太い手で後頭部を掻いた。

見慣れた仕種が友の緊張をほぐす。

「二年ほど前に、昭陽先生からそれとなく伺っていた。いずれ時期をみて、と。だが、南冥先生のお加減がかんばしくなかったし、その後、秋月の政変で原先生の消息が分からなくなったりと、縁組どころではなかった」

「そうでしたの。父上ときたら、わたしに何ひとつおっしゃらないで」

「昭陽先生から聞いていたら、どうだった?」

「いろいろ心配しないで済んだかもしれない」

「猷さんのことか」

「父上がどうおっしゃっても、わたしは源吾兄さまの気持ちを第一に考えたと思いますけれど」

「そんなに心配してたのか」

「わたし、猷さんも源吾兄さまをお好きだ、と感じていましたから」

「猷さんは、そんな素振りも見せなかった」

——そう、見せなかっただけなの。猷さんは強がりだから。

「渦に進んで身を投じるようなこのごろの猷さんに、俺は、はらはらしていたが」

猷は中国路の旅をしているという。その詩才をたたえる噂が、友にも届く。

「より厳しいところ、より高いところを求めるのだろうな、猷さんは」

「学問や文芸に臨む本当の覚悟かもしれない」

「そびえることばかりが儒学や詩文の目的ではないよ。学者や文人のあいだで地位を獲得するのも大切かもしれないが」

源吾は言葉を切ってしゃがむと、

「見てごらん」

と、足許の草を指した。

「日照りにも潮風にもめげず、砂地に根を張る植物もある。ここには、亀井の医術を求める患者が大勢いる。人に命があるかぎり学問や詩画を求める思いが湧き上がる」

「この地で、源吾兄さまと、わたしと、新芽を伸ばして生きていければ……」

源吾は、傍らにかがんでいる友の肩に腕をまわした。

「亀井儒学の苦難をものともしない、快活な友さんがけなげだった。この丸い頬が」

肩に置いた掌を友の頬に移すと、源吾は指をちょっと弾ませるようにして軽く叩いた。

——おじいさまの掌だ。ざらざらとして、温かくて。

なつかしさに胸が疼く。涙がひと筋、源吾の指に伝った。

「泣くのは友さんに似合わない」

そう言って、源吾は友の頬を拭った。

(了)

# 歴史文学賞

歴史・時代小説の分野に新風を！

第二十回記念募集 賞金二〇〇万円！

## 第二十回歴史文学賞作品募集中！

◉選考委員
南條範夫＋杉浦明平＋尾崎秀樹＋早乙女貢

◉応募規定
種目―歴史に取材した未発表小説（東洋史・西洋史も含む）
枚数―四〇〇字詰原稿用紙五〇～一〇〇枚（枚数厳守。ワープロ原稿可。ただし字詰を明記のこと）
賞金―二〇〇万円（受賞作一篇）
副賞―記念品（高級時計ウォルサム／平和堂プロパティ提供）
締切―一九九五年六月三十日（当日消印有効）
発表―『歴史読本』一九九六年二月号
宛先―〒一〇〇 東京都千代田区丸の内三―三―一 新東京ビル 新人物往来社「歴史文学賞係」

●応募原稿の封筒には、他の投稿原稿と区別するため、必ず「歴史文学賞応募作品」と朱書してください。
●原稿は必ず右上を綴じ、初めに題名、郵便番号、住所、筆名（本名）、年齢、略歴、電話番号を明記、別に八〇〇字以内の梗概を付けてください。
●受賞作の出版権、映像化権等は原則的に小社に帰属します。
●応募原稿は返却いたしません。また、選考に関するお問い合わせには一切応じられませんので、ご諒承ください。

歴史文学賞係



時代小説・時代劇にみる
# おもしろ余話
縄田一男

## 名台詞・きめ台詞

### 「その女の色がお前に斬れるか！」

意欲的な脚本家が原作のある時代劇を脚色していて最も腐心するのは、恐らくは、原作にない名台詞を工夫する時だろう。

その点、今、人気絶頂のTV時代劇「鬼平犯科帳」は実に良く出来ている。第一シリーズで、梶芽衣子扮するおまさが長谷川平蔵＝中村吉右衛門配下の密偵となるまでを描いた「血闘」を見てみよう。

この話で、おまさは盗賊一味に捕まってしまい、あろうことか、さんざん嬲り者にされてしまい、もはや身も心もズタズタ。

長谷川平蔵も一刻もはやく駆けつけたいところだが、今度ばかりはなぜかつなぎが悪く、火盗改の配下がなかなか来ない。

もはや、これ以上猶予は出来ぬと、意を決して単身、敵地に乗り込む平蔵、無頼どもの話からおまさが彼らのえじきとなったと知るや、怒りの形相凄まじく、刀を抜く。平蔵の侵入に気づいた敵の用心棒が、

「随分、頭に血がのぼっている様だな、貴様、あの女の色か？」

というや、正しく鬼と化した平蔵、

「その女の色がお前に斬れるか！」と相手を一刀両断にする。

カメラは、その凄絶な斬撃の前に、平蔵の言葉を聞いて、思わずハッと自らの胸をかき抱くおまさを映している。見ている方もこの瞬間、おまさとともに熱いものがこみ上げてくる、というわけだ。



おまさはこの一言によって救われ、以後、平蔵の密偵となる。だが、実は、この台詞、原作にはないのである。脚本を書いた小川英のオリジナルだ。うまい、という他はない。

近来は、いい時代小説があっても、うまく映像化出来ない、原作のストーリーを追いかけるのが精いっぱいで、つくり手の創意工夫や解釈を入れる余地がない、という状況が続いている。

私は原作ものの映像化というのは、一種の解釈論であると思っている。つくり手がどの様に原作を読み、それを映像にしたのか――その道筋が見えて来ないと面白くない。

その点、小川英のシナリオはあの一言によって池波正太郎作品の底に流れる市井ものの持ち味をよく捉えていたと思う。これは一つの作品論であろう。

# 日本死人名事典●作家篇⑱川口松太郎

**六十歳直前まで四人の恋人と四軒の家を持っていた江戸っ子大衆小説家の見た極楽と地獄**

●死・葬式観●「あのね、死にザマのあんまり悪いのはイヤなんだよ。首くくるのもねえ、ハナ垂らしたりするっていうからイヤだ」「青酸カリはいちばんいいや」「僕、この間ねえ。〃俺が死んでも葬式出すな〃って言ったら、浩(長男)が、そういうわけにもいかないよ。周りが承知しないって言うんだ。それじゃ俺、死ぬ前になったら葬式に来て欲しい人の連名書いとくから、これだけ来てくれって。その他の奴は絶対来ちゃいけねえって書いとく、っていったら、浩の奴、弱ってやがってさ。〃まあ、まかしといてよ、いいじゃないか。そのときはパパは死んじゃってるんだから〃なんて……。なあ、その通りだよ。もう、もう、やなこった。気に入らねえ奴が拝みに来たら、さぞ腹が立つだろうな」「やっぱり葬式はやりたくないや」(高峰秀子『人情話松太郎』)

●老いと死について●「無残なり生死に迷う老いの冬」(『愛子いとしや』)

●亡妻・三益愛子に●「だれにも迷惑をかけずに愛子のそばへ行きたい」(口ぐせ)「次の世に生まれ代っても三益愛子を妻に持ちたい」(毎日新聞)

●死亡年月日●一九八五(昭和六十)年六月九日午前二時四十三分。

●生涯●八五年八カ月。

●死亡場所●東京・東京女子医大病院。

●入院日●四月八日。

●入院から死まで●六三日。

●入院歴●①昭和四十九年に食道ガンで(七十四歳)②昭和五十四年にも同じく食道ガンで(七十九歳)③今回。

●死に方●病死。

●死因●肺炎もしくは老衰。

●最後のことば●「おう、帰ってきたか」(四月十八日、メキシコから帰った長男・浩に。読売6・10夕刊)

●うわごと●「一円五十銭あれば何人メシが食えるか」(同右)

●絶筆●(三月に稿了。読売新聞夕刊への連載は死後八月から約一年間)

「『坂道はつらいな。待ってくれよ。なぜそう急ぐのだ、もっとゆっくり歩け』

追いかけようとしたが足がもつれて動かない。坂道へかかると息が苦しくなった。名を呼ぼうとしたがもう声も出ない。おくろはどんどん先へ行く。息が苦しくなって坂の中途で足が止った。同時に息も止り、脈もぴたりと切れてしまった。

文明十三年十一月二十一日、八十八歳であった(終)」(『一休さんの道』)

●葬儀●六月三十日午後二時から。東京・青山葬儀所。喪主・長男浩、葬儀委員長・三田政吉(明治座社長)。



●墓地●豊島区南池袋四都営雑司ヶ谷霊園1種16号10側。正面に「川口一族」の文字。

●人物事典●「かわぐち・まつたろう　小説家、劇作家、演出家。東京都生まれ。本名松田松一。山谷堀小学校卒。さまざまな職業を経験したのち文学を志し、十六歳の時に同じ浅草生まれの久保田万太郎に師事した。一九一九(大正八)年、深川の講釈師、悟道軒円玉のところに住みこんで、口述筆記をしながら江戸文芸と漢詩を学ぶかたわら、芝居見物に熱中した。二十三年に小山内薫主宰の『劇と評論』に戯曲『足袋』を発表。関東大震災後は大阪に移り、直木三十五と雑誌『苦楽』の編集に従事した。二十七(昭和二)年に上京。三十二年の『牛肉問答』が菊池寛に認められ、『鶴八鶴次郎』『明治一代女』等で三十五年に第一回直木賞を受賞、これらは自らの脚色で新派で上演され、そのレパートリーとなった」(大笹吉雄『朝日人物事典』)



読売新聞の死亡記事(6月10日夕刊)

●追想文●

「これは最近のことであるが、或る芸能人の芸と人格を以前から私は大好きで、それをあるとき、ある会合の時に述べたことがあった。ところが、その芸能人は川口さんの身うちであった。川口さんは私に手紙をくれた。

『実にありがたかった』と、それには書いてあった。それが川口さんから貰った最後の手紙である。

不幸にして晩年の川口さんは病いにおかされたけれども、その才能筆力は、少しも衰えることがなかった。

その川口さんが、あるとき、『二度と人間に生まれたくないよ』と言ったのをきいて、私はびっくりした。

昔、ある貧しい噺家がいた。噺家は自分を相当にうまい芸人だと信じていた。それを世間がみとめない。仲間がよってたかって自分を殺している、そう思いこんでいた。くらしは苦しく、その日にも困って、『ああ、死にたい』と口ぐせのようにこぼしていた。

『病気にかからないからいいじゃないか』と慰めると、

『私は病気をする程、運がよかァありません』そして『ああ、死にたい、死にたいけれども、私には死ぬほどの運がこない』

死ぬほどの運がこない――私はこれ以上絶望的な言葉はないと思っていたが、川口さんの『二度と人間に生まれたくない』という言葉は、それ以上である。

いっときでも私が川口さんを羨ましい人だと思ったのは、私が浅はかな人間だからである。

川口さんは、いうにいわれぬ苦労をしょって一生を送った人である」(宇野信夫「二度と人間に生まれたくない」『すばる』85年8月号)(古井風烈子)

●〈連載第三回〉新選組・斎藤一の維新後の軌跡！

# 明治無頼伝

## 第三章　藤田五郎の誕生

中村彰彦
鴇田幹画

### 一

次の日、一戸伝八は、また中市村の佐川官兵衛を訪ねた。むろん高津仲三郎の脱獄について、そのあらましを報ずるためである。

「——そうか、あやつ、うまく逃げおおせられるかのう」

囲炉裏の火をはさんで耳を傾けていた官兵衛は、伝八が報告をおえると深い溜息をついた。

「赤塚軍司が、高津殿ではなく拙者を追ってきたところを見ますと、黒羽藩兵も手がかりはまったくつかんでおらぬはずです。なにせあやつらは、高津殿がいったんは兄八郎殿のもとへ逃れたことにも気づいておらぬのですから」

伝八は答え、とにかく凍え死になさらなければよいのですが、とつけ加えた。

すると官兵衛は、

「いや、からださえ元にもどっておれば、あやつが凍え死になどするわけがない」

と火に粗朶をくべながらいう。

「なにゆえに」

そうおっしゃるのか、と伝八が訊ねる前に、官兵衛はつづけていた。

旧会津藩には、

「会津五流」

と総称される、五つの剣の流派があった。太子流、安光流、真天流、溝口派一刀流、神道精武流。

うち仲三郎の学んだのは神道精武流の剣法であったが、この流派の奥義は剛より入って柔を知り、さらに剛に還ることにある。寒中の未明、積雪を裸足で踏んで素振り百本をおこなったあと、そのまま鶴ヶ城の外堀のまわりを十周することは当然の日課とされていた。

仲三郎は長年このような稽古に耐えて神道精武流剣法の奥義に達した男だから、雪に凍えることなどはまず考えられないという。

「ならばよいのですが、ところで佐川さまはこの四人を御存知ですか」

といって、伝八は中根米七、堀内滝江、黒河内八三、赤埴清の名を挙げた。いずれも国許にいたころ仲三郎が懇意にし



ていた者として、高津八郎が口にした名前である。
「うむ、よう知っておるのは中根米七殿だな。たしか米七殿はおれより十一歳年上だと聞いたことがあるから、もう五十になったはずだ」
と前置きし、官兵衛はその横顔を教えてくれた。
中根米七は、諱を兼高。旧会津藩で家禄三百石を受けていた中根源五右衛門の五男で、剣と柔術とに秀で、太子流剣法の師範をつとめていた。
幕末には官兵衛や仲三郎とともに京都にあり、鳥羽伏見の戦いにおいてはよく殿軍を果たした。藩主松平容保に従って会津へ帰国したあとは、三十六歳から四十九歳までの藩士たちからなる青龍隊に属して越後口へ出陣。鶴ヶ城籠城戦が始まってまもなく帰城し、奮戦したが、今はこの斗南のどこかに移住しているはずだという。
「おお、こちらに移っておられるのですか。そういえば仲三郎殿は八郎殿に対し、『ゆく当てはある』と語ってから姿を消したとか。仲三郎殿は、その中根氏を頼ったのかも知れません」
伝八が勢いこんで上体を乗り出した時、
「ただいま帰りました」
と破戸の方角から声がした。
官兵衛の末弟、正であった。伝八も正が準官として斗南藩庁に出仕し、救貧所掛をつとめていることは前回の訪問時に聞かされている。

**前号までの梗概**

明治二年七月十二日、束松峠において、若松在官軍の民政局監察方兼断獄の久保村文四郎（越前藩士）が斬殺される。斬殺犯の一人である高津仲三郎は、一年半近い逃亡生活と発熱のため、奥州街道福岡宿で倒れ、三戸郡を管轄する黒羽藩兵の隊長赤塚軍司に捕えられる。昏睡状態のまま雪の上を曳きずられていく仲三郎を狼の群れから救ったのが、元新選組の斎藤一改め斗南藩士一戸伝八であった。

一戸伝八——。弘化元年（一八四四）、元明石藩足軽から身を起こした山口祐助の三男として江戸に生まれた。文久三年、新選組に加入し、三番隊長を務める。戊辰の戦いには土方歳三らと各地を転戦、会津に拠った。榎本艦隊に合流するという土方と袂別し、会津藩に殉じ、鶴ヶ城開城後、越後高田に送られ謹慎。斗南藩が成立したとき、三戸郡の五戸村へ土着する途を選んだのだった。

年が改まった明治四年一月なかば、三戸の獄舎に投じられていた高津仲三郎が脱獄。伝八にこの報をもたらしたのは、共同生活を営んでいる高木盛之輔であった。高木家は、嫡男盛之輔のほか、未亡人克子、長女時尾、次女お民も一緒である。仲三郎を助けるため伝八は、ただちに三戸へ向かう。その伝八に、克子は時尾の同道を頼む。三戸に入った伝八は時尾と別れ、獄舎を調べたのち仲三郎の兄八郎宅を訪ね、匿まわれているであろう仲三郎に、赤塚軍司に気をつけるよう告げる。旅籠藤村屋に投宿した伝八は、そこではからずも悪質な口入れ人から逃がれてきた時尾を助ける。



三年前の慶応四年（一八六八）八月の籠城戦開始直前に一千石取りの家老職に大抜擢された官兵衛は、以後城外諸兵の指揮官としてしばしば官兵たちの心胆を寒からしめ、
「鬼官兵衛」
と恐れられた。
しかし鶴ヶ城の開城、会津滅藩とともにおのれを亡国の臣とみなした官兵衛は、
「わが事おわれり」
と思うあまり、おなじ家老職にあった山川浩からいくら懇望されても斗南藩庁に出仕するのを潔しとはしなかった。そのため、かれは自分の代わりに正をささやかな職につかせ、あえて赤貧に甘んじているのである。
正は雪沓と簑笠とを脱いで土間から上がり、伝八に礼儀正しく挨拶してから囲炉裏端に正座した。ふたりの母お俊は、隣家に茶飲み話に行っていて今日は姿を見せない。
「今日は、ずいぶん帰りが早いな」
と正にほほえみかけた官兵衛は、
「今な、中根米七殿の話をしていたのだ。明日藩庁へ行ったら、中根殿が藩内のどの村へ移住しているか調べてきてくれぬか」
とつづけた。
綿を入れた木綿の袷にたっつけ袴姿の正は、それを聞くとまだ髷を大たぶさに結っているおとなしい顔だちに怪訝の色を浮かべ、おなじ身なりで斜むかいに座っている長兄を見返した。
「あれ、兄上は、中根さまが五戸村におられることを御存知ないのですか」
これには官兵衛ばかりか、伝八も驚いた。灯台下暗し、とはこのことである。
「五戸のどの辺に住んでおられる」
伝八が訊ねると、
「会津町のお長屋です」
と正は即座に答えた。
救貧所掛の仕事とは、生活能力のない移住者を救貧所に集め、衣食住の世話をするかたわら会津伝統の漆器作り、製紙、機織り、陶器作り、下駄の鼻緒作りや畳作りなどを教えることであった。
その直接の指導は会津から藩士たちとともに移住してきた職人たちにゆだねられているが、正は食いつめてしまった者たちに救貧所入りをすすめるため、近在を歩きまわることが多いだけに、中根米七の住まいも知っていたのである。
「では早速、地蔵平へもどる前に会津町へまわってみましょう」
一揖して刀に手をのばし、立ち上がろうとした時、
（おっと待った）
と伝八は思った。
「そなたとのことはおれから佐川さまのお耳に入れ、佐川さまからそなたのお母上に話をもっていっていただくことにし

ようと思う。それでよいか」
「はい」
昨日、三戸から五戸へ帰る途中の雪道で、伝八は高木時尾とこういう会話を交わしていた。すなわち今日の訪問には、官兵衛に時尾とのことを打ち明け、媒の労を取ってもらうという目的もふくまれていたのだ。
「実はその、中根殿のこととはまったくの別件ですが、ちとお願いしたいことが出来ましてな、……」
それまで胡坐をかいていた伝八は、急に正座に直って口調を改めた。
「これは、近ごろ珍しく楽しい話を聞かせてもらったぞ」
時尾がすでに妻になることを承諾している、と告げられた官兵衛は、膝を打って笑い声を上げた。
「こら、斎藤一、いやさ山口次郎。おれはな、おぬしの剣がいかに凄まじいものかは鳥羽伏見のいくさの前からよく知っておる。しかしな、女子にもこんなに手が早いとは、いま初めて知ったぞ」
「いや、さような、……」
慌てて口をはさもうとする伝八に、官兵衛は愛敬たっぷりの笑顔をむけてつづけた。
「よいから聞け。おれはな、仲三郎の命を救うことができたら、おぬしと時尾殿との仲人を買って出てやるとはたしかにいった。けれどな、仲三郎の様子を探りながら時尾殿をものにしてしまえ、などとはいわなかったぞ」
「いや、ものにするなどと、そんなことはまだ、……」
伝八が柄にもなくへどもどすると、その尖った耳に朱の色が差してくる。官兵衛は、かぶせるようにいった。
「いいや、ものにせずとも手を握って抱き寄せ、目を見つめてから唇を吸うくらいのことはしてやらなければ、女子は仲人の口利きもなしに嫁入りの承諾などはせぬものだ」
「は。まあそれくらいのことは、昨日――」
困りきりながらも伝八が認めると、
「それ、いったとおりではないか。よしよし、あとはおれに任せておけ」
これが語るに落ちるというやつだ、といって、官兵衛はまたからからと笑った。

## 二

（これは、なんとも大仰なことになってしまったな）
五戸川ぞいの雪道を五戸へと引き返しながら、一戸伝八はあらためて佐川官兵衛の気の早さに驚いていた。
伝八をたっぷりと冷やかしたあと、官兵衛はこう宣言したのである。
「しかし、おぬしも今は斗南藩士。藩士が嫁を迎えるには権大参事を通じて藩知事さまのお許しをいただかねばならぬ。明日にでもおれが高木家へ使者に立ち、その足で山川浩の尻を叩いておくから案ずるな」
斗南藩知事とは、松平容保の側室お佐久の方が二年前の明治二年六月に出産した慶三郎あらため容大のこと。容保が明治政府への抗敵の罪を問われてなおも東京の和歌山藩邸に永預けとなっているのに対し、わずか二歳にして従五位下に叙され、斗南藩知事に任じられた容大は、五戸村の旧盛岡藩代官三浦伝七方に暮らしている。
すると、それまで微笑を浮かべてふたりのやりとりを聞いていた正が思いがけぬことを言い出した。
「おことばですが兄上、本日わたくしが早退して帰ってきましたのは、一刻も早く兄上にお伝えしたいことができたからです。祐堂さまにおかせられては間もなく和歌山藩への永預けを解かれ、この斗南藩へお預け替えになるそうでござります」
祐堂とは容保の隠居名であり、斗南藩へ身柄を預け替えになるとは、実質上の赦免を意味する。
それを聞いた官兵衛の武骨な顔だちは、不意の陽光を浴びたように明るくなった。
「おお、そうか。祐堂さまもついにこの斗南へお越しあそばされるのか」
かれは満面に笑みを湛え、ぽんと手を打った。
「うむ、そうだ。ならば伝八よ、おぬしと時尾殿とのことは祐堂さまに申し上げ、祐堂さま御自身に媒酌人をつとめていただくようお頼みいたそうではないか」
「いや、それは、あまりに畏れ多い」
話が突然大事になったので、伝八は二重瞼の大きな両目をまたたかせた。それも気にならぬかのように、官兵衛はつづけた。
「なにを申す、これも新時代となったればこそのことではないか。あの苦しかった籠城中も、祐堂さまは京都守護職をつとめておられた時代に手足となって働いてくれた新選組に、しきりに感謝しておられた。郭外の天寧寺に近藤勇の墓所を建てたのも、祐堂さまのお指図だったことはおぬしも知っての通りだ。その新選組で三番隊長をつとめ、北走する土方歳三らとも別れて会津に残留してくれたおぬしが、今は斗南に移っておって高木家の娘を娶ることになっていると聞けば、祐堂さまもきっと喜んで下さるだろうて」
こうして伝八は、松平容保あらため祐堂を媒酌人として時尾と祝言を挙げることに勝手に決められてしまったのである。
正が藩庁で聞きこんだところによれば、祐堂が斗南藩へ預け替えになるのはこの明治四年の春か初夏――すなわちあと数ヵ月以内のことのようだから、伝八の結婚話もにわかに現実味を帯びたのだった。
（しかし、高津殿の件をこのままにして、安穏と所帯を持つわけにもゆくまい）
今から九年前、十九歳の時旗本を斬ってしまい、敵討を恐れて江戸を逐電した経験のある伝八には、追われる身のつらさ、苦しみが痛いほど分る。
（できることならまず高津殿を探し出し、安全なところへ身

柄を移してやってから時尾殿を迎えたいものだ）
と思いながら、かれは五戸村の会津町へ近づいていった。

この会津町というのは、正式な町名ではなかった。

伝八の入植した五戸村東南部の地蔵平とはかなり隔たったところにある会津町は、町の体裁すら出来てはいない。あばら屋さえなかったため、荒地に移住者用の住居として長屋数棟が急造されたことから、そう呼ばれているだけの話である。

「会津部落」
「会津屋敷」
などとも呼ばれるこのような長屋は、斗南藩領のうちにはいくつもあった。

行くひともない雪道を縫って冠木門をくぐり、前庭の枯木から枯木へ渡した物干竿に干された粗末な洗濯物を横目に見て手近なひと棟に近づいた。

びっしりと軒下につらなっている氷柱の先は、落下すればからだに突き刺さらんばかりの鋭さである。用心のため、その氷柱の列を見上げてから一番手前の板戸を叩くと、

「だれじゃ」
と野太い声がした。
「一戸伝八と申す斗南藩士でござる。ちと、ものをお訊ねいたす」
と、答えると、
「手が離せぬから、勝手に入ってくれ」
という返事が返ってくる。
「失礼いたす」
（どうしてこの長屋のまわりには、まったく人影がないのか）
と不審に思いながら笠を脱ぎ、建てつけの悪い板戸を引いたとたん、伝八の鼻腔には血の臭いが吹きつけてきた。
（すわ、だれか殺されているのか）

咄嗟に腰を屈め、左拇指で大刀の鯉口を切った。

しかし、その伝八を迎えたのは、薄暗い土間に突っ立っている頭の禿げた老人の哄笑であった。

「こりゃあまた、ずいぶんと血の臭いに敏感な御仁じゃな。まさか、この老いぼれに斬りかかるつもりじゃあるまいの」

ゆらぐ燭台の灯に半身を照らし出されている老人は、手にしている抜身の脇差で土間に横たわった大きな肉塊を差し示した。

「わしは今、これをさばいていたところじゃ。で、なんのお訊ねかな」

つぎだらけの野良着に股引姿の老人の足もとには、すでに毛皮を剝がれ、腹を裁ち割られた動物の死骸がある。

「これは、なんですか。狼ですか」
思わず老人の問いも忘れて訊ねると、
「いいや、野良犬じゃよ」
と、老人は答えた。
「なかなか大きな犬じゃから、これでしばらくは飢えを凌げようて」
「え、犬の肉を食うのですか」
また聞き返すと、
「そうじゃ」
と、老人は、上がり框に腰を落としてうなずいた。

「汝も知ってのとおり、この斗南の土地は半年間雪に埋もれてしまう上に、雪が消えてから田植したとて米も穫れぬ。藩庁が下さる米だけではとても生きてゆかれぬから、ここの長屋に入居した者たちも次々とどこかへ離散してゆきおった。わしらゆく当てもない老いぼれは、犬の肉でも食らって生き延びるしかないのじゃよ」

女たちに身売りする者が相ついでいるのとおなじく、これも斗南移住者の実態であった。

返すことばの見つからなくなった伝八は、思い直して口をひらいた。

「――そうですか。拙者は中根米七殿を訪ねてまいったのですが、どの長屋にお住まいか教えて下さらぬのか」

老人の答えは、またしても意外なものであった。かれは中根米七を呼び捨てにして、
「米七はもうここにはおらぬよ」
と首を振ったのである。
「え、やはり食えなくなってどこぞへ立ち去ったのですか」
「いや、そうではない。早くいえば、脱走したということじゃ」
「もう少し、詳しく教えて下さらぬか」
というやりとりをつづけると、
「そういう汝は、どうして米七を探しておるのじゃ。黒羽藩の手の者か」
と老人はにわかに眼光を鋭くした。
「え、中根殿も黒羽藩兵に追われておったのですか。それでこちらに居づらくなって、姿を消したのですか」

伝八は、我知らず胸騒ぎを覚えながら問いただしていた。

## 三

一戸伝八は、日も落ちて雪原の表面がしらしらと小暗く燦めきはじめ、どこからか狼の遠吠えが聞こえてくる中を地蔵平の掘立小屋へ帰っていった。

誤解が解けたあと、中根米七の遠縁の者だと名のった老人が伝えてくれたところは、あまりに意表を突かれることであった。

（これは一体、どういうことなのか）
という疑問で頭が一杯になっていたため、伝八は銀杏返しに綿入れ半纏、もんぺ姿の高木時尾の晴れ晴れとした笑顔に迎えられても、ぎこちなくうなずき返すことしか知らなかった。

「佐川さまの御一家は、みなさまおすこやかにお過ごしでしたか」

夕餉の貧しい粥鍋を囲み、

「今日拙者は、中市村の佐川官兵衛さまをお訪ねしてまいります」
としか伝えていなかった時尾の母克子に問われた時にも、戸主の座に座らされている伝八は、
「ええ、そのようでした」
としか答えなかった。
「お代わりはいかがですか」
空になった茶碗と箸を持ってぼんやりしている伝八に気づき、時尾はふたりだけにしか分らない優しさを見せて塗りの剝げた会津塗りのお盆を差し出した。
「いや、もうけっこうです」
（案じることはない。そなたとのことは、うまく運んでいる）
という意味をこめて微笑を返した伝八は、
「ちと考えたいことがあるので、失礼」
と高木家の母子四人に言い置いて、自室に退った。
そして、持ってきた粗朶の燃えさしで燭台を灯すと、柳行李から紙と矢立を取り出し、つい先程会津町の老人に教えられたひとととの関わりを図示してみた。

高津仲三郎（脱獄）　　　　中根米七（脱走）
↑（追跡中）　　↘（訊問）
黒羽藩兵（赤塚軍司）

た。
伝八が時尾とともに三戸におもむいたその日、軍司は善照寺門前の黒羽藩仮屯所には不在であった。仲三郎の脱獄翌日というのに、軍司はどこでどう擦れ違ったものか、伝八たちとは行き違いに五戸村の会津町へ出張ってきていたのである。
老人が語ったところによれば、昨明治三年も押しつまったころ——すなわち高津仲三郎の脱獄以前から、中根米七のもとへはしばしば黒羽藩兵があらわれ、何事か訊問するのをつねとしていたという。
老人も仲三郎が三戸駐屯の黒羽藩兵に捕われ、獄舎に投じられたことは知っていた。しかも、米七のもとへあらわれる黒羽藩兵は、定期的に巡回してくるため顔見知りになっている五戸駐屯の者たちではなく、三戸から通ってきていた。
そんなことから老人は、
（中根米七は、高津仲三郎とのかかわりでなにか調べられているのではないか）
と、漠然と感じていた。
しかし、いかに遠縁の者でありおなじ長屋住まいとはいえ、米七に直接事情を訊ねるのははばかられた。かつて太子流の剣客として家中に名を知られた米七は、冬の間は炉端に端座して『孫子』に読みふけるばかりで、その姿にはひとを寄せつけない雰囲気が漂っていた。
その米七の生活態度に、にわかに変化が兆したのは正月も松の内を過ぎたころのことだったという。
あたかも旅に上るかのようにぶっさき羽織とたっつけ袴を着用し、両刀に柄袋をかぶせた米七は、午後遅く三戸の方角へ出かけては、翌日の昼前に目を真っ赤にして帰ってくる。そしていったん褥に入ると、また午後遅く長屋をあとにする



という、奇怪な生活をはじめたのである。
米七はなぜか三戸駐屯の黒羽藩兵があらわれる日時を先読みできるらしく、不在中に黒羽藩兵がやってき、その不在を怪しむ、ということはこれまで一切なかった。
ただし二日前、初めて米七の留守中に黒羽藩兵がやってきた。初めて見る顔だったその男は、老人から米七はいないと聞くと、
「ちいっ、やっぱりそうか」
という意味不明のつぶやきを残し、ふたたび馬に飛び乗って姿を消した……。
「ふむ、その乗馬の黒羽藩兵は、名を名のりはしませんでしたか」
伝八が訊ねても、老人は、
「うむ、名のりはせなんだ」
と答えるばかりであった。
「しかしその男は、角張った顔をしていて横柄な話し方をしたのではありませんか」
「うむ、わしのことをお前呼ばわりいたしおったわい」
「その男、黒ラシャの詰襟服に革のバンドを締め、右腰にピストルを吊るしてはおりませんでしたか」
「ピストル？　ああ、短筒のことじゃな。うむ、吊るしておったとも、背中には新式銃まで背負っておった」
老人とのこのような会話から、まず赤塚軍司に間違いないと判じられる。
しかも中根米七が姿を消した一室の板壁には、炭で謎のような文章が書きつけられていた。
《小子儀、所存ありて当地を脱走つかまつり候。いずれ大きく動くべく候。中根米七》
老人に案内されて米七の部屋に上がりこんだ伝八は、自分の目でこの文字を確かめてきていた。
（いずれ大きく動く、とはどういうことか。それはひとまず置くとしても、やはり高津殿はなんらかの手だてで獄中から中根殿と連絡を取り合っており、その中根殿と合流して姿を消した、と考えてよいのかも知れぬ）
会津町で知ったところを頭の中で整理しながら、伝八はふたたび、今紙に描いたばかりの三人の名前と矢印に目を落とした。そして、高津仲三郎と中根米七の名前を一本の線で結んでみる。
（それにしても分らぬのは、赤塚軍司がなぜ高津殿の脱獄以前から中根殿の身辺に目を光らせていたのか、ということだ）
改めて思ううちに、これはそう難しく考える必要はない問題なのかも知れぬ、という気もしてきた。

仲三郎は熱病に罹って寝こんでいるところを捕われたのだから、投獄後、まだ熱に魘されているうちに親しい中根米七の名前を口走ったのかも知れない。

それを聞き咎めた赤塚軍司は、米七が大変な剣の遣い手であることを調べ出し、このような男が屯所に捨て身の斬りこみをかけて仲三郎救出を図ったならば、黒羽藩兵に死傷者が続出する恐れがあると考えて、以後、米七に対する警戒を強めたのかも知れない。

（とすると、おれが佐川さまと高津殿救出について話をしている間に、いち早く中根殿が動き出していたということになるのか。そこまでは、思いもしなかったわい）

そう考えると、

（もしかしたら赤塚軍司は、高津殿と中根殿の動きにおれも一枚嚙んでいると信じこんでいるのかも知れぬぞ）

という気がして、伝八はぶ厚い唇を引き結んだ。

昨日、時尾とともに五戸へもどる途中の伝八を馬で追いかけてきた軍司は、こう啖呵を切ったのだった。

「そもそも新選組は、その局長近藤勇とやらも明治元年春先に官軍に捕えられて斬に処されたというではないか。さような佐幕派の社中におったならば、貴様とて叩けば埃の出るからだであろう。いずれ旧悪を暴き出して、引っ捕えてくれるから首を洗って待っていろ」

わざわざこれだけのことを告げるため、三戸から馬を駆ってきたのは、仲三郎と米七の行方がともに分らぬ以上、軍司が残った最後の糸と思いこんで伝八に注目しはじめたことを示しているようにも思われる。

（ちと剣呑なことになるかも知れぬが、逆にあやつの出方を見守っていさえすれば、高津殿の動きが分ってくるかも知れぬ）

伝八は不敵な笑みを湛えて、紙燭の灯りに視線を投げた。手にしていた紙片をその炎に近づけると、紙片は赤い炎を発してたちまちのうちに燃え上がった。





## 四

その夜、一戸伝八は、新選組の三番隊長をつとめていた斎藤一時代の夢を見た。

京は油小路花屋町北の料亭、天満屋惣兵衛方の中二階の八畳間。外には雪が音もなく降りつんでいる、と知りつつかれは酒を呑んでいる。

おなじ室内に車座になり、たがいに献酬を重ね合っているのは、

「人斬り鍬次郎」

と異名を取る大石鍬次郎をはじめ、中村小次郎、中条常八郎、梅戸勝之進、宮川信吉、蟻通勘吾、舟津謙太郎、前野五郎、市村大三郎の九人の新選組隊士たち。

斎藤一はこの九人と同じく袷と浅葱地に袖に白の山道つなぎの羽織の下に鎖かたびらを着こみ、額には鋳鉄の鉢金を巻いて身の左側に大刀を引きつけていた。

慶応三年（一八六七）十二月七日夜。

天満屋は紀州藩公用人三浦休太郎の定宿であったが、前月十五日には坂本龍馬と中岡慎太郎とが不意を襲われて斬殺されるという事件が起こっていた。

衝撃のあまり、その下手人を新選組、陰の指嗾者を三浦休太郎と思いこんだ土佐藩士の中に三浦襲撃の動きがあると聞き、斎藤たちは三浦のいる奥八畳とは襖一枚をへだてた部屋に詰めているのだ。

底冷えのする夜だったから、初めは重装備も気にならなかった。だが斎藤一は、酔いがまわるに従ってからだが火照ってきた。そこでかれは、
「ちょっと待て」
と酌にきた隊士を制し、鎖かたびらにつながる手甲のはじから出て左手の中指に掛けている紐の輪を外し、少しでもからだの熱さを冷まそうとした。
しかし、かなり酩酊していることもあって、なかなか外すことができない。
（おかしいな、どうなっているのだ）
と苛立つうちに、隣室廊下側の襖が静かに引かれる気配がした。
「三浦氏とはそこもとか」
「さようでござる」
というやりとりにつづき、
「えっ！」
と押さえた気合が発せられたのは一瞬の間のことである。
（しまった、刺客か！）
斎藤は、大刀を引っつかんだかと思うと隣室との境の襖へ突進していた。
からりと襖をあけはなつと、部屋の右側からは額を浅く斬られ、両手をうしろ手に突いて尻餅をついている三浦の姿が目に飛びこんでくる。そして左側には片膝立ちの姿勢から抜き打ちを試みたものの一撃で結着をつけられなかったと知り、立ち上がって第二打の構えに入りつつこちらに首をひねった刺客の姿が、——。
大柄な刺客は斎藤に気づくと、急ぎ右足を引き、斎藤に向き直ろうとした。その動きの先を読んだ斎藤は、咄嗟に腰を沈めながら大刀を捨て、脇差の鯉口に左拇指をかけている。
「やっ」
太刀風鋭く振り下ろされる大刀と、斬り上げられる脇差の蒼白い刀身が行灯の火に小暗く輝きながら交錯したかに見えた時、
「ぎゃあ！」
と悲鳴を上げたのは、刺客の方であった。
刺客は右手首から先を斬り飛ばされ、切口から噴き出す血潮を茫然と見つめながらその場にくずおれていた。
直立ちの姿勢から、天井の低さを念頭に置きつつも縦に円形線を描こうとした刺客の大刀と、低い構えから一気に右上方へ奔った脇差とでは、相手に達する速さが違う。刺客は斎藤の左肩めがけて大刀を袈裟に振った時、その右手首を下から迎えた斎藤の脇差にぶち斬られてしまったのである。
つづけて階段を駆け上がってきた土佐藩士たちは、同士討ちを避けるべく額に白鉢巻を巻いて合印としていた。この男たちと斎藤以下十人の新選組隊士たちとの間に、つづけて壮絶な斬り合いが始まった。
双方たがいに狭い室内を嫌い、舞台は次第に雪に明るんだ中庭へと移動したが、



「三浦は討ち取ったぞ」
と新選組のだれかが叫んだのをきっかけに、この死闘は終息にむかった。これを同志のことばと信じこみ、土佐藩士たちは潮の引くように散っていったのである。
（やれやれ、また生き残ったか）
いつの間にか庭に走り出て剣を振るっていた斎藤は、息を整えながら屋内へ踵を返そうとした。
その時であった。背後から左脇腹に銃口とおぼしきものが押しつけられるのを感じ、斎藤は凝然と立ち止まった。
「動くと、殺す」
というくぐもった声が、その耳朶に吹きこまれていた。その声を聞きながら、
（おかしい、おかしいぞ。おれは天満屋で、こんな目には遭わなかったはずだ）
とかれは思っていた。だが天満屋の騒動は、今起こりつつあることなのか昔あったことなのか分らない。
（どうしたら、この場を切り抜けられるのか）
油汗をかきながら必死で頭を働かせていると、押しつけられている銃口がにわかに脇腹を軽く叩くのに気づいた。
「もし、伝八さま」
と呼びかけてくる声は、なぜか女の声音に変わっている。
（いや、おれは一戸伝八ではない。天満屋騒動の時は、斎藤一と名のっていたのだ）
混乱する頭で思った時、
「もし、伝八さま。ちょっと起きて下さりませ」
とまた左の耳もとで囁かれ、はっとして伝八は上体を起こした。
「だれか」
と口をひらく暇もなく、意外な近さに身を寄せていた黒い影がまた小さな声で告げた。
「ああ、よかった。時尾でございます、お起こししてしまって申し訳ありません」
「おお、時尾殿か」
つられて声低く応じた伝八は、悪い夢を見ていたことに気づきながら褥の上に胡坐をかいた。右手につかんでいた大刀は、さりげなく闇のかなたに押しやる。
いつ、どこのだれに襲われても不思議ではなかった新選組時代からの習慣で、伝八は今も刀を抱き、からだを右下にして眠るのをつねとしていた。右を下にするのは、刺客に突然斬りつけられても右手が無事ならば立ち向かえるからだが、そのためにかれは、時尾が上掛けの夜着の上から左脇腹を軽くゆすったのを夢の中で銃口と感じてしまったのだった。
「——はい、済みませんが、家の者たちはよく寝入っておりますから、どうかお声を立てないで下さいませ」
とつづけるやわらかな声に、
「うむ」
と応じるうちにようやく闇に目が慣れ、褥の脇に座っている時尾の白い顔がぼんやりと目の前に浮かび上がった。一昨

夜、三戸の藤村屋で間近に嗅いだ芳しい鬢付油の匂いが、闇の中に漂い出している。

「一体、こんな時刻にどうなされた」

まだ夜明けまでにはかなり間があるはずだ、と思いながら訊ねると、

「まあ、伝八さまったら」

時尾は声をひそめながらも怨じるようにいい、伝八の膝を両手で揺すった。

「今日、いえもう昨日かも知れませんが、伝八さまが佐川さまをお訪ねになったのは、わたくしどものことをお頼みするためでございましょう。お帰りになってもどんな御返事でしたかなにも教えて下さらず、怖いお顔をしてこのお部屋へ引っこんでおしまいになるのですもの、わたくしは気が気ではなくて、……」

「それは済まぬ、気のまわらぬことをした」

実はそのあと高津殿の件でちと調べることがあったのだ、と伝八がいい、官兵衛の提案したところを手短に伝えると、

「まあ」

とまた時尾は、白い顔を揺らしながらいった。

「祐堂さまが、わたくしどものことなどお引き受け下さるでしょうか」

「おれの口からはなんともいえぬ。しかし佐川さまが自信たっぷりに請け合って下さったのだ、信じて待とうではないか」

「でもわたくし、白無垢羽二重など持っておりませんのに」

その意味を理解するのに、伝八には少し時間がかかった。それを敏感に感じ取った時尾は、

「当日の衣裳のことでございます」

上体を寄せ、大事な秘密を打ち明けるようにいう。

「三戸行きの時の衣裳でよいではないか。あのお召しは、そなたにとてもよく似合っていた」

女子とはもうそんなことを考えるものなのか、と思い、ふくみ笑いしながら答えると、時尾も華やいだ口調で応じた。

「ああ、それをお聞きして安心いたしました。これで怪我も、すぐよくなりましょう」

「え、そなた、怪我をいたしたのか、どこをだ」

思わず訊ねる伝八に、

「ここでございます」

と時尾はいい、衣擦れの音を立てて左手を差し出す。

「よく見えぬぞ、どの指だ」

「人さし指でございます。伝八さまがなかなかお帰りにならないし、帰っておいでになってもむっつりなさっているのですもの、わたくし、これはうまくゆかなかったのだなと思うと胸がつぶれてしまって、夕餉の仕度をしながら包丁でちょっと切ってしまいましたの」

「悪いことをした。もう手当てはしたのか」

「いいえ、それほどの怪我ではございませんし、この家に包帯などはありませんもの」

引かれそうになるその腕を、伝八は冷えきった闇のなかで



静かに捉えた。

伝八が驚いたのは、その疵口に触れたからではない。時尾の慣れぬ水仕事に荒れた手が、氷のように冷たかったためである。

「そなた、からだがずいぶん冷えきってしまっているぞ。風邪を引いてしまう」

時尾が安心しきってゆだねている左手を両の掌につつみこむようにしていうと、

「まあ、温かな手ですこと」

時尾はうっとりとしたように囁いた。

「わたくし、物音を立てて母上に気づかれてはいけないと思って、上に綿入れを羽織ってこなかったものですから」

その左手からは、時尾のからだの震えがたしかに伝わってくる。佐川官兵衛の返事を気に懸け、粥鍋の具も凍る夜更けに思いきって忍んできた時尾の心情を思い、伝八の胸には愛しさがこみ上げてきた。

「時尾殿」

力をこめてその手を引く。

「あ」

時尾はひそやかに叫び、伝八の夜着の胸に上体を預けてきた。

その両肩に手をまわすと、時尾のからだ全体が小刻みに震えているのが、掻巻の布地越しにますますはっきりと伝わってくる。

「そなたの、口を」

その耳に囁きかけると、時尾は素直に従い、心もち顔を仰向けた。伝八は、その口におのれの唇を押しつけていた。

初め閉ざされていた時尾の小さな唇は、伝八が唇を動かすにつれて次第にひらいた。思い切って強く吸えば、小さくてなめらかな舌が伝八の口に入ってくる。

からだが熱くなるのを覚えながら、伝八は心のどこかで、

(ここまでは、藤岡屋での抱擁とおなじだな)

と考えていた。

(今日は、もっと先へ進みたい)

という思いが湧き上がる。

いつか伝八の右掌は、時尾の左の乳房をおおっていた。その掌が乳房の豊かさを確かめるように動いても、時尾は身を引こうとはしない。

「時尾よ」

唇を離した伝八は、またその右の耳に口を寄せて声低く伝えた。

「おれは、そなたに惚れている。今宵、おれのものになれ」

## 五

身をずらした伝八は、時尾のからだを軽々と掬い取って自分の褥に横たえた。そしてその右側に横たわり、上掛けの厚い夜着でふたりのからだをおおうと、

「ああ、とても温か」

子供のように、時尾はつぶやく。
またその唇を吸いながら見つめても、時尾は目を閉ざして伝八を信じ切っている風情であった。
「そなたも、温かい」
伝八はその胸もとに右手を差し入れ、乳房を捉えた。そのまろやかな高まりを掌の中につつみこみ、見せてほしいと静かに伝える。
搔巻の胸もとを充分にくつろがせても、時尾は人形のように抗わなかった。伝八は上掛けを掛けたまま身を乗せかけ、両肘で上体を支えて顎を引いた。
なにも、見えなかった。しかしふたつの掌の内に、時尾の双の乳房はしっくりと収まって息づいている。
上掛けをずらすと、どこから洩れ入るのか、あるかなきかの月の光にその胸はたおやかな曲線をうっすらと浮かび上がらせた。時尾は斗南にきてからも、日中はどこかに匂い袋を忍ばせているのだろう、その仄白い上体からは白檀のえもいわれぬ薫りが漂い出している。
なぜか胸が一杯になった伝八は、その左の乳首を口にふくんだ。つづけて右の乳首もついばんでから、胸を胸でおおって時尾の右の頰にわが頰をこすりつける。
「きれいな胸だ」
と囁くと、今度は時尾の方から唇を求めた。
ひとしきり、舌と舌が戯れ合う。
「そなた、上手になった」
また顔を離した伝八に、
「伝八さまが、教えて下さったのです」
時尾は、掠れ声でいった。
「わたくし、舌のことまでは知りませんでした」
また舌と舌が遊び、伝八の手は乳房へ還っていった。
その手が腰の伊達巻にのびると、時尾はつとその甲に自分の手を重ねる。だが時尾は、
「いけません」
とは、いわなかった。
「わたくしが、——」
自分で伊達巻を解く、という意志を伝えたのである。
上掛けの下で時尾が無言のうちにその作業をおえたのを感じ取り、伝八はまたからだを寄せていった。かれが上になろうとした時、時尾は下から伝八の首を強く抱き締め、初めて震え声を出した。
「わたくしの下にあるものは、除けないで下さいね。お床を汚しては、申し訳ありませんから」
女といえば手練手管に長けた厚化粧の遊女たちしか知らない伝八は、時尾の健気さに打たれていた。自分も用意をおわっていたかれは、
「案じずともよい。からだを楽に」
と時尾にいった。ややあった後、
「あ」
と時尾が息を吸った時には、ふたりはもうひとつになって



いた。
やがてすべてがおわってからも、伝八はしばらく時尾を抱きすくめていた。それから静かに身を横たえ、時尾を招くと、時尾はその筋骨のよく張った胸に顔を埋めにくる。
伝八は、胸にかかる時尾の息がやや荒くなっているのを膚に感じた。ますます愛おしさを募らせたかれは、その首の下に左腕をまわし、右手で背中を撫でてやった。その背がしっとりと湿り気を帯びたように感じられるのは、時尾が伝八のからだの下で発汗したためのようであった。
「大事なかったか」
とくぐもった声で訊いてみたのは、今の今まで生娘であった時尾を気遣ったからである。
伝八の胸の中でこくりとうなずいた時尾は、
「でも」
と羞しそうに伝えた。
「でも、からだがとても熱くて」
たしかに上掛けの下には、いつの間にか炬燵の中のように温気がこもっていた。伝八も、自分の胸から腹部にかけて汗に濡れているのを感じた。
しかし、朝までこうして共寝していることはできない。
「さあ、もうゆかなくては。母上に見つかったら、叱られてしまいます」
ようやく息の整った時尾は、伝八の胸から顔を離しながら告げた。
「見ないで下さいませ」
音もなく上体を起こし、闇の中で身づくろいする気配だった。と、その手が伝八の肩に掛けられ、
「あの、ちょっとお腰を浮かして下さりませ」
困ったように、時尾はいった。
「あ、そうであったな」
伝八が身をずらすと、時尾は敷かれていた布地を上掛けの下から手もとに引き寄せ、くるくると丸めたようだった。
「少し、付いてしまったか」
伝八も身づくろいして訊ねると、
「さようなこと、訊くものではございません」
と、時尾はおだやかにたしなめる。
(今、時尾は顔を赤くしているのやも知れぬ)
と考えていた伝八に、
「もう、あちらのお部屋にもどらなければなりません。伝八さまもおやすみなさいませ」
と告げ、時尾は足音を忍ばせて去っていった。
(あの時尾が、おれの妻になるのだ)
掌になぞった時尾の肢体は、質素な衣裳をまとっている姿からは思いもつかない豊かさであった。そんなことを頭の中で反芻していると、時尾の残り香が鼻腔に甦って伝八にかつてない安らぎをもたらした。
伝八は時尾の薫りとぬくもりにつつまれて、深い眠りに落ちていった。

六

　下北郡の置かれた本州最北端の下北半島は、俯瞰すれば南北に走る奥羽山脈の右の肩口から北へむかって振り上げられた鉞のような形をしている。鉞の柄の部分が上北郡、西の津軽半島にむかって刃を見せた面積百八十三方里、三角形の半島が、檜葉の美林の多い下北半島である。
　この半島の南側に、西面してひらいた陸奥湾の北東部分――鉞の柄と三角形の刃とをつなぐくびれ南端に湾入した入江は、
「安渡湊」
と呼ばれていたが、このころ権大参事山川浩以下の斗南藩首脳は、旧盛岡藩五戸代官所に置いた藩庁をこの安渡湊から北西へ半里の丘陵地帯、田名部の地へうつすことを計画していた。
　下北半島には、大いに林業を興す余地がある。また安渡湊は天然の良港であり、陸奥湾の多様な魚介類、海藻類の豊かな水揚げが期待される。

〽南部の殿さま粟飯稗飯、喉にからまる菜っ葉汁

　農業生産力のあまりに低い封土ゆえに、旧盛岡藩の苦しい台所事情はこう嘲笑されたものであった。その旧盛岡藩南部家にとって、最後の頼みの綱は陸奥湾の海産物だったとも聞いていたから、山川浩たちは不毛の台地に散って呻吟する藩士とその家族たちの生活苦を打開すべく、この藩庁移転を思いついたのである。
　西方四里の距離に霊峰恐山山地を仰ぐ田名部は、
「妙見平」
と呼ばれる東方の丘陵地帯から雪解の水を集め、西流して安渡湊に注ぐ田名部川の北岸に位置する。
　この妙見平の原野を開墾の適地と見た山川たちは、藩名を取ってあたり一帯を、
「斗南ヶ丘」
と命名。すでに昨明治三年の秋口から、あらたに入植者を募るべく、
「新建て」
と呼ばれる檜皮葺きの掘立小屋を建てはじめていた。
　財力に乏しいため、これらはすべて雨露をしのぎ得る程度のものにすぎなかった。しかしその数は、一戸建て三十棟、二戸建て八十棟。
「第一新建て」
と名づけられたこれらの掘立小屋は東西に走る大通りをはさみ、一戸あたり敷地百坪の計算で整然と区画された。そのそれぞれは土塀をめぐらされ、大通りの両端には大門さえもうけられていた。
　斗南藩士たちの中にはこの斗南ヶ丘への再移住に踏み切る者たちも出はじめていたが、藩庁が大門の内では馬の乗り打





ちを禁じたこと、土地の者たちとの無用ないざこざを避けるべく、まだ中央政府も考えていなかった廃刀令を出したことなどは、斗南ヶ丘開拓にかける山川たちの期待のほどを端的にあらわしていた。
　五戸村の地蔵平は、この斗南ヶ丘からは二十一里も南へ下った位置にある。
　その地蔵平へ佐川官兵衛があらわれ、高木克子にむかって一戸伝八と時尾との結婚話を切り出した時、克子は、
「祐堂さまがお仲人をお引き受け下さるのであれば、高木家にとってこれほどの名誉はございませぬ。きっと泉下の夫も、大喜びしてお許し下さるでしょう」
と、嬉し涙をこぼしながら快諾してくれた。
　そればかりか克子は、官兵衛と伝八とに自家製のどぶろくを注ぎながら、伝八にこう相談を持ちかけさえした。
「去年のうちに、田名部の迎町と申すところには日新館もひらかれましたとか。盛之輔も戊辰のいくさ以来学業が続けられなくなっておりますから、わたくしども第一新建てとやらに移住いたしましょうか」
　日新館とは、会津戊辰戦争の際に焼け落ちてしまった旧会津藩藩校のことであった。
　江戸時代、日新館の学力水準は諸藩の藩校中最高だったといわれており、官兵衛や山川浩以下の斗南藩首脳たちも、すべて日新館を優秀な成績で卒えた者ばかり。山川たちは斗南

藩の子弟たちが貧に喘ぐあまり教育を身につけられなくなっている現状を憂え、田名部迎町の民家を借りて日新館の再興をもなしとげていたのである。

「それは、よいお考えかも知れませんな」

と、伝八は答えた。

第一新建ての二戸建てひと棟を割り振ってもらえれば、一戸は時尾との新居、もう一戸は高木家の母子三人の住まいに充(あ)てられるし、伝八にとっていずれ目の上のコブになるかも知れない黒羽藩の赤塚軍司の目が届かない、という利点もある。

高津仲三郎、中根米七の行方がともに杳(よう)として知れない以上、

（とにかく、時尾との暮らしを安定させる方が先だ）

という思いが伝八の内に芽生えていた。

「おれは田名部近くに移れば山川たちに藩庁出仕を勧められて面倒だから、移住はいたさぬ。戊辰のいくさに死なしめた多くの部下たちの後生を祈るためにも、おれはもはや世に出ることなく中市村に朽ち果てるつもりだ。

しかし祐堂さまが東京から田名部へお越しになる時は、きっと出むいてその方らのことをお頼みするから、おれのことは気にせずに事を運ぶがよい」

と官兵衛もいってくれたので、高木家の母子と伝八の気持は大きく再移住へと傾いた。

数日後、伝八が旧盛岡藩五戸代官所に置かれた藩庁におもむいて斗南ヶ丘新建てへの移住を申し入れると、早速田名部に希望を申し送ってまだ空きがあれば受けつけてくれる、という返事が返ってきた。

月が改まって二月になると、藩庁はこの願いをすんなりと受け入れてくれた。

のこる問題は、祐堂こと最後の会津藩主松平容保が斗南藩に預け替えになる前に、いかにして藩庁から伝八と時尾の結婚の許可を取っておくかである。

これには権大参事の承認が必要だから、一方の親である克子が田名部に行って山川浩に申し入れる必要がある。しかし女ひとり、雪深い二十一里もの悪路をゆくことは絶対に無理であった。

「なんなら、拙者が行ってまいりますぞ」

伝八はいったが、気丈な克子は決してうんとはいわなかった。

「いいえ。これは、わたくしが時尾にしてやれる最後のことになるかも知れませんから」

といわれては、伝八としてはそれ以上踏みこむことはできない。

するとまもなく、五戸村の旧盛岡藩代官三浦伝七方で育てられている三歳の斗南藩知事松平容大も近いうちに田名部にもうけられた新藩庁に移る、という話が伝わってきた。

その日の夕餉の席で、克子が伝八に切り出した。

「わたくしは、藩知事さまの御一行に同行して田名部の山川



さまに御挨拶してくることにいたします。その間、留守をよろしくお願いします」

「しかし、あちらが同行を許してくれますか。なんなら拙者が」

とまた伝八はいったが、克子は自信ありそうに答えた。

「御心配下さいますな。藩知事さまの乳母は、わたくしの仲良しなのです」

翌日、ひとりで代官所へ出かけていった克子は、本当に同行許可を取りつけてきた。彼女が容大一行とともに田名部へむかって旅立ったのは、二月十五日のことであった。

## 七

その夜伝八が褥に入ってとろとろしていると、ひとの気配がしてまた時尾が忍んできた。身を横にずらして上掛けを撥ねてやると、

「失礼いたします」

と時尾はひそやかにいい、素直に褥に身をすべりこませる。その首に左手をまわしてからだを抱き寄せた伝八に、

「またきてしまいました」

と時尾は、いたずらっ子のようなことばで応じた。

「うむ。そなたの温かさを感じるのは、ずいぶん久しぶりのような気がする」

強く唇を吸ってから答えると、時尾は怨じるようにいった。

「だって、あれからもう一カ月も経ったのですよ。ちっとも呼んで下さらないのですもの」

「それは無理だ。こうしていても、克子殿の留守を狙ったようでなんだか気が引ける」

「まあ、元新選組の隊長さまにしては気がお弱いこと。それではわたくしが、尻軽娘みたいではありませんか」

「いや、そういう意味でいったのではない」

「分ってますわ。でも、わたくしも来たかったのですから、仕方ないことです」

そんな他愛ないひそひそ話をしているうちに、伝八の脳裡に甦った光景があった。

この部屋に時尾が初めてやってきた翌日のこと、朝早く目醒めてしまった伝八は、時尾の姿を明るいところで見たくなって小屋の裏手にまわってみた。勝手口とつながった裏手の空地には、物干し場がある。

するとそこには、手ぬぐいを姉さんかぶりにしてもんぺを着け、雪沓を履いた時尾が小盥(こだらい)に浸けたなにかを懸命に揉み洗いしていた。

「どうして、共同井戸にゆかない」

背後から話しかけた伝八を振返った時尾は、色白たまご形のおっとりした顔だちを桜色に染めて答えた。

「お早うございます。なんでもありませんから、どうぞ囲炉裏端に座っていて下さいませ。わたくしも台所にいって母上を手伝い、すぐ朝餉をお運びしますから」

しかしもうその時には、伝八は小盥の中をみてしまってい

た。そこに浸されているのは、昨晩時尾が着けていたとおぼしき湯文字であった。
「――やはり付いてしまったか」
済まぬ、とつづけるのもどんなものかと思って伝八がためらっていると、
「そんなこと、気になさるものではありません」
時尾は顔をうつむけ、懸命に手を動かしながらいったのだった。
また舌と舌が遊び、伝八の手は上掛けの下で時尾のからだのふくよかな曲線をなぞりはじめていた。
時尾のそろえられた膝の間に膝を入れようとすると、その足先の冷たさが伝わってくる。時尾は一度褥に入り、妹と弟が寝入ったのを確かめてから裸足で忍んできたのだろう。
静かに手を下げて、掻巻の裾を割った。ひと叢の春草を掌におおって熱く濡れた息吹を指先に感じた時、時尾は小さく首を振って喘ぎはじめた。

五戸―田名部間は、雪深い難路つづきであったから冬季には三日の行程を要した。二日間だけ供をして地蔵平へ帰ってきた藩士のことばによると、松平容大の乗物の前後を守った一行は、悪路と寒さに苦しみながらも予定通りの泊りを重ねて田名部へ進んでいったという。
田名部まで供をしていった藩士たちの多くは、容大を無事に新藩庁に送り届けたならば、ついでに田名部、安渡湊、斗南ヶ丘を視察してこようと考えており、克子もその者たちと行動をともにする予定であった。
そして、
「母上のお帰りは明日か明後日ではないでしょうか」
と時尾がいっていた二月二十日、――。
昼前、前髪を笠に隠した盛之輔とともに近くの雑木林に仕掛けておいた罠を見にいった伝八は、白い冬毛の野兎が掛っているのを発見し、満足して帰途についた。
「ところで一戸さま。兎はどのように料理するのですか」
藁製の雪沓の下に降り積んだ雪を軋ませて伝八の一歩あとを歩いていた盛之輔は、白い息を吐きながら訊ねた。
「そうだな、吸物に仕立てて食せば、からだが温まる」
「でも姉たちに、野兎を屠ることができるでしょうか。よもや、可哀相だなどと言い出さないでしょうね」
父小十郎を幼くして失ったためか、すっかり伝八になついている盛之輔は、利発そうな目を生き生きと輝かせていた。
伝八は、雪原の眩しさに目を細めて答えた。
「その時は、おれがなんとかしてやろう」
「え、一戸さまは剣だけでなく、包丁もお遣いになれるのですか」
「いや、遣えるというのではないが、新選組にいたころには、自分の部屋で勝手に好みのものを煮炊きしていたからな」
伝八は、往時を思い出しながらいった。
「それに新選組は膂力をつけるにはももんじを食うのが一番



と考え、残飯で豚や鶏を飼っていた。なかにはこれらをつぶすのがうまい隊士もおってな。それをしょっ中見ていたから、どうすればいいのかは大体分るのだ」
「へえ、これは初めてうかがいました」
盛之輔は、すっかり感心したような声を上げた。
「新選組の方々は市中見廻りのみをしておられたのかと思っていましたが、豚や鶏を飼ったりもしていたのですか」
しかし、その返事はなかった。
それどころか伝八は、なだらかに下る斜面の中ほどにまだ生きている野兎の両耳を左手につかんで立ち止まり、麓の掘立小屋の列をじっと見つめている。
つられてかたわらに歩みを止め、その視線の先をたどった盛之輔は、
「あれ、馬が」
と、つぶやいた。
高木家の四人と伝八とが同居する小屋の前には、洋鞍を乗せた馬が一頭たたずみ、鼻面で雪を分けて野草を探していた。雪のため、その馬体は逆光に翳って青馬のように見える。
だが歩度を早めて近づくに従い、栗毛であることがはっきりしてきた。
（たしか、赤塚軍司が乗っていた馬も栗毛だった。あやつ、おれについてなにかさぐり出しおったか）
伝八は厭な気分に襲われたが、小屋の中には時尾とお民がいるはずである。高熱を発して足腰立たなくなっていた高津仲三郎に縄を掛け、雪の上を曳きずった非情な男と女ふたりを、いつまでもおなじ屋内に置いておくことは危険であった。
（そういえば、天満屋でおれが右手首を斬り飛ばした土佐っぽは、中井庄五郎という名前だったとあとで聞いた。赤塚がそれと知れば、あの一件だけでおれの罪を問うこともできるだろう）
そうは思ったが、ともかくこうなってはまず赤塚の出方を見るしかない。
「これを持ってくれ」
後肢を撥ねる野兎を盛之輔に預けた伝八は、大股になりながらたっつけ袴の左腰に落とし差しにしていた大脇差をぐいと突き出し、柄先下がりになるようにした。こうしておけば、鯉口を切るだけで抜き打ちすることができる。
江戸時代中期以降、脇差は刃渡り一尺以下の小脇差、一尺七寸以下の中脇差と一尺九寸以下の大脇差の三種が許され、それ以上の長さのものは禁じられていた。罠を見にゆくのに大刀は不要と考え、大脇差のみを佩びて出てきていた伝八は、
（いざとなったらこの大脇差に命を託そう）
と腹をくくったのである。
小屋の入口に近づきながら馬相を改めると、草を探しているのはまさしく赤塚軍司の乗馬であった。

## 八

粗朶が山と積まれている三和土に身を入れると、囲炉裏端

に怯えたように身を寄せ合っている時尾とお民の姿が目に映った。伝八の帰宅を知ったふたりは、暗い室内から白い顔をむけて安堵の表情になる。

（あやつはどこだ）

（あちらです）

目と目で会話した時尾が示したのは、伝八が寝室にしている北側の一室であった。うなずいた伝八は、大声を張り上げた。

「ただ今、帰ったぞ」

その声に応ずるように部屋の境に吊るされている筵が撥ね上げられ、赤塚軍司が黒ラシャ詰襟服の上体をあらわした。

「おぬし、なぜここにいるのだ」

伝八が厳しいまなざしを向けても、軍司は平然と近づいてくる。革長靴のまま室内に上がりこんでいた軍司は、

「なんとまあ、なにもねえ小屋だのう」

と蔑むような笑いを浮かべて三和土に跳び降り、上がり框に腰を据えた。その背には銃身の短いスペンサー銃が、右腰のホルスターにはコルト・ネイビー・モデルの黒光りする銃把が見える。

「おれは、なぜここにいると訊いてるんだ」

素早く軍司を間合の内に取りこんだ伝八は、声を荒らげた。

「おい、貴様。自分の立場が分っていねえようだな。訊問するのはおれの役目だ」

軍司はよく張った顎を撫でながら鋭い目つきで伝八を見上げ、

「貴様、井深元治という元会津藩士を知ってるだろう。どんな男か、正直にいえ」

と横柄な口調でつづけた。

「なに、井深元治だと。さような者は知らぬし、かつて交わったこともないな」

と応じた時であった。

（いや、どこかで聞いた名前だ）

という気持が動き、伝八は軍司の次のことばを待ち受けた。

「ふうむ」

その表情をうかがっていた軍司は、考え直したようにいった。

「そのことばに嘘はねえようだな」

「一体、その者がなにをしたというんだ」

伝八の問いに、軍司は相変わらず顎を撫でさすりながら答えた。

「知らねえなら教えてやらあ。井深元治とはな、二年前の七月、あの高津仲三郎らと談合しおって越後街道束松峠に福井藩士久保村文四郎を待ち受け、斬殺いたしおって姿を消した一味のかたわれよ」

「ふむ」

と、今度は伝八がうなずく番であった。そういえば、佐川官兵衛から仲三郎の閲歴を教えられた時、その名を聞いたような気がする。



「その方、なぜ今時になって高津殿ではなく井深殿のことなど訊きまわりはじめたのだ」

伝八の問いに、軍司は急にむっとした顔つきをして立ち上がった。

「おい、口の利き方には気をつけろよ。まあ貴様が正直に答えたようだから、いってやらあ。井深が大阪あたりに潜んでいるという噂が流れてきたんでな、その噂をわざと貴様にぶつけてみたのよ」

「ふん、そう聞けばおれが顔面蒼白にでもなると思ったか。御苦労なことだな」

と答えながら、そうか、と伝八は思っていた。

（井深元治が大阪方面にいるのだとすれば、高津殿と中根殿もどこかで落ち合って大阪をめざしているのかも知れぬ。これはよいことを聞いた）

その仲三郎たちと自分とがどこかでつながっているのではないか、という疑いが解けたのは、ありがたいといえばありがたいことには違いなかった。かといってこのまま軍司を帰しては、武士の一分が立たない。

「まあ今後は、とにかく胡散臭い動きはしねえことだ。新選組時代の旧悪を洗い上げるのを忘れたわけじゃねえから、楽しみに待っていろ。では、邪魔をしたな」

捨てぜりふを残して出入口にむかう軍司をやりすごすと、伝八は自分も屋外に出て、

「ちょっと待った」

と軍司を背後から呼び止めた。そして、

「なんだ」

と肩越しに振返った軍司との間合を測りながら、ゆっくりといった。

「おぬし、ひとの家に土足で上がりこみおって、詫びも入れずに帰れると思っておるのか」

伝八の部屋は、時尾と初めて同衾した寝所でもある。そこに土足で踏みこみ、家探しもしたであろう男に対する憎しみが、伝八の胸に逆巻いていた。

「なんだと、貴様。おれを怒らせてえのか」

軍司は殺気を感じて向き直り、腰のホルスターに右手を伸ばした。伝八が、

「はっ」

と押さえた気合を放って身を沈めたのは、ほぼ同時のことであった。太刀風が起こった一瞬ののち、軍司は、

「あっ」

と叫び、焼けた鉄でもつかまされたように右手を跳ね上げていた。その拇指のつけ根からは、鮮血が散って足もとの雪に小さなしみを作ってゆく。

（怒らせれば、軍司は腰のピストルを引き抜こうとするだろう）

というのが、伝八の読みであった。

そこで伝八は、目にも止まらぬ速さで抜き打ちした大脇差を、銃把の上で寸止めしたのである。銃把の代わりにその刃

をつかんでしまった軍司は、われから負傷してしまったのだった。
「無作法者はいつ何時天罰を受けるか分らぬ、ということだ」
白刃をなおも軍司の鼻先に擬し、伝八はギョロ目を細めて皮肉な笑いを浮かべた。
「分ったらとっとと屯所へ帰れ。二度とくるな」
「く、くそ、この礼はかならずしてやるからな。覚えてろ」
「ああ、その方こそおれのことばを忘れるなよ」
伝八が悠然と答えると、馬に飛び乗った軍司は左手一本で手綱を操って遠ざかっていった。
「伝八さま、危のうござりますから、どうかもうあのような真似は二度となさらないで下さいませ。伝八さまが撃たれたら、わたくしも生きてはゆかれません」
その夜時尾は、伝八の胸にすがりついて涙声を出した。

## 九

まもなく次第に日が長くなり、地蔵平に降り積もった雪に耳を当てると、その下からかすかに水音が聞こえるようになった。静かに雪が溶け、五戸川へむかって流れはじめたのである。
その雪解(ゆきげ)の季節を待っていたかのように、斗南藩領各地に留まっていた黒羽藩兵も、太政官政府の命令によって順次帰国していった。むろん赤塚軍司もその中にふくまれていたから、
（もう、あやつと会うことはあるまい）
と思って、一戸伝八は晴れ晴れとした気分になった。
しかし、この雪解のあとには大旅行が待っていた。斗南ヶ丘の第一新建てをめざしての、移住の旅である。
「祐堂さまがお越しになるのは、七月と決まったそうだ。その時にまた会うことになるが、斗南ヶ丘の開拓がうまくゆくことを祈っておるぞ」
佐川官兵衛にそう告げられた伝八が、高木家の四人ともども背と両手とに持てるだけの荷物を持ち、斗南ヶ丘にたどりついたのは五月上旬のことであった。
大門の内にならんだ檜皮葺きの掘立小屋のうちから二戸建てひと棟を与えられた伝八たちは、ひろい方の一戸には高木家の母子三人が、せまい方には初めから伝八と時尾が住まうことにした。
母親の直感ほど鋭いものはない。克子は首尾よく藩庁から伝八と時尾の結婚を承認されて地蔵平へ帰ってくると、すぐにふたりがもうわりない仲になっていることに気づいた。そして、第一新建てに入ると同時に、
「そなたは、一戸さまとずっと一緒にいた方がよいでしょう」
と時尾にいい、家族だけで盃事をしてふたりが同居することを許してくれたのである。
この掘立小屋での暮らしの貧しさは、地蔵平のそれと大同小異であった。
しかし、安渡湊の浜辺で獲(と)る蛤(はまぐり)やこんぶ、わかめなどの海



藻類がかれらを狂喜させた。日帰りで田名部からわずか半里のその浜辺に出かけ、裸足で磯を歩いて砂の下を手足で探ると、蛤は俵に入れて持ち帰らねばならないほど群棲していた。
おかげで伝八は、先住者から贈られたどぶろくを飲みながら、時尾が七輪で焼いてくれる芳しい蛤を堪能することができた。克子たちはこれを吸物にしたりぬたにしたりした挙句、腐らせまいとして大量に佃煮までこしらえた。
そんな一日、伝八は新藩庁の置かれた田名部の曹洞宗吉祥山円通寺に山川浩を訪ねることにした。むろん、二月中に訪問した克子に対し、時尾との婚姻を快く承認してくれた礼を申し述べるためである。
山川浩は、もとの名を大蔵(おおくら)。弘化二年（一八四五）生まれ



の二十七歳と伝八より一歳年下ながら、この人物は名家老として知られた山川兵衛の孫でもあったため、慶応年間のころからつとに令名高かった。
　慶応二年（一八六六）二十二歳の時には、唐太（樺太）の国境画定協議のためロシアにゆく幕府外国奉行小出大和守秀実に随行。ヨーロッパ諸国とパリ万国博覧会を視察したことによって世界情勢への蒙を啓かれ、攘夷勢の愚かしさを悟った。
　慶応四年正月三日に始まる鳥羽伏見の戦いの時から洋式軍服を愛用していた浩は、国許会津へ撤退後は日光口の守備を担当。八月下旬、白河口を抜いた官軍が若松城下に殺到したと聞くや、梅の枝に用所役人小川伝吾の詠んだ左の和歌を結んで日光口官軍への訣別の辞とした。

　時ありてしばしはひけど梓弓もとの手ぶりにかへさざらめや

　その退き口のみごとさは、武士の心を知る一部の官兵たちを感服させるに足るものであった。
　しかし、それにもまして山川浩の名を高からしめたのは、すでに官軍の重囲に落ちていた鶴ヶ城への水際だった入城ぶりである。
　会津西街道を若松へ急行し、若松西郊を南北に貫流する阿賀川（大川）西岸の川南村小松に達したかれは、一計を案じた。川南村小松は、毎年春の彼岸になると小松獅子をくりだすことによって知られた集落であった。村中の大太鼓、横笛を供出させたかれは、村びとたちの協力を得て楽手を先頭とする縦隊を結成、太夫獅子、雄獅子、雌獅子を中心に小松獅子の手ぶりではなやかに楽を奏でながら城へ近づき、官兵たちがなにごとかと首をのばして見守るうちに無血入城を果たしたのである。
　入城戦の白眉といわれたこの動きにより、鬼官兵衛、略して鬼カンの異名を取っていた佐川官兵衛とともに家老に抜擢されたかれは、
「知恵山川、鬼佐川」
　と謳われて勇名を馳せた。
　斗南藩成立後、その官兵衛や先任の家老たちが会津滅藩の責めを負い、政務を執ることを固辞したため、山川浩はかつての家老筆頭職に相当する権大参事に就任して斗南経営の事実上の最高責任者となっているのだった。
　その山川のいる円通寺をめざして田名部に近づいてゆくと、道の右側を流れる田名部川の川幅は徐々にひろまり、流れは次第にゆるやかなものになってくる。
　前方右手には恐山山地の外輪山のひとつである屛風山（標高六四六メートル）が、左手手前にはひときわ高い釜臥山（七八〇メートル）の青く煙る姿が望まれた。
　文字通りの形をしている釜臥山は会津磐梯山と山容が似ているため、移住者たちの間では、



「斗南磐梯山」
　と呼ばれている。
　田名部川の南岸沿いに移住者を除けば戸数四百戸足らずの田名部の家並に入ってゆくと、川面には安渡湊との間を往復する荷足船が何艘か舫っており、川岸には小体ながら廻船問屋も並んでいた。
　しかし、道をゆく地元の者たちの中には、
「厚子」
　という、おひょうの繊維で織って袖と裾、背中とに菱や渦巻状の模様をつけた蝦夷びと好みの衣裳を羽織っている者が少なくない。それが伝八に、この地が本州最果ての地であることを否応なく思い出させた。
　講堂に盛之輔も通いはじめた日新館の開校されている円通寺の山門をくぐった時、かれは境内が予想外のひろさであることに気づいた。正面に本堂、左右に杉、檜、赤松の老樹を眺めながら庫裡にゆくと、山川浩はその奥まった一室の粗末な洋式机にむかって、なにか書きものをしている最中であった。
　案内してくれた給仕の少年が去り、
「失礼いたす」
　と大刀を手にして入室すると、
「やあ一戸さん、よくぞまいられた」
　旧会津藩の軍服であった青ラシャの詰襟服を今もまとっている浩は、肉薄く鼻筋の通った顔だちに笑みを浮かべて迎えてくれた。
　鳥羽伏見の戦い以前、浩は松平容保の奏者番として京にあった。だから伝八とは、新選組時代からの顔見知りなのである。
　若松へ兵を引いて以降、日光口の防備にむかった浩に対し、斎藤一から山口次郎へと名を改めた伝八は、負傷した土方歳三に代わって新選組隊長となり、白河口へ出撃した。その出撃前の軍評定には、ともに出席した仲でもある。
　たがいに旧闊を叙したあと、机の横の椅子に腰かけて浩の澄んだ二重まぶたの双眸を見つめた伝八は、佐川官兵衛と相談の上、高津仲三郎を助けようとしたが仲三郎はひと足早く脱走して姿を消したこと、どうやら中根米七もかれと連絡を取り合って斗南藩から脱走したらしいことを正直に伝えた。
「それはわたしも聞きました」
　と浩の答える口調には、明らかに苦悩が滲んでいる。
「ふたりがなにを企んでいるのかさっぱり分からないのは不安だが、とにかく今は、捕吏につかまるなよ、とつぶやくことしかできません」
「ところで、井深元治という高津殿の元同志が大阪あたりに潜んでいるらしいという噂は御存知か」
　伝八の問いに、浩は静かにうなずいた。
「これもできることなら救ってやりたいが、大阪はあまりに遠いし、斗南藩庁として救済策を講じることもできません。

かれらが東松事件を起こした思いはよく分るだけに、亡き伴百悦殿の霊がかれらを守って下さるのを祈るばかりです」

そう語って目を落とす浩の姿を改めて見つめると、頬はこけて血色は悪く、軍服も着古され型崩れしていて、とても一藩を預かる権大参事の職にある者とは思えなかった。浩は斗南という不毛の大地に移住した藩士たちにいかに生活の途を伐りひらかせるかという問題で、不眠不休の毎日を送っているのである。

「拙者なら大阪の地理もよく心得ているから、高木家の母子の面倒さえ見てくれるなら、大阪方面を探索してきてもよい」

そういおうか、いうまいか、と伝八は迷った。容保がこの田名部にくるにはまだ間があるようだから、その前に高津仲三郎、中根米七、井深元治のいずれかの所在を探り出せるかも知れない。

すると、

「おお、そうでした」

と浩は急に声をはずませた。

「いや、初めから暗い話になってしまって申し訳ありませんでした。祐堂さまから書状を頂いたことを先にお伝えすべきでしたな。祐堂さまにおかせられては、喜んでお手前と高木時尾殿との媒酌人をお引き受け下さるとのことです」

「これはまことに畏れ多い。実は今日、拙者がこちらへまいったのも、この件を申し述べるためでござった」

「それは痛み入ります。ともかく祐堂さまには、近藤・土方両君も亡くなった今、新選組の生き残りで斗南移住にも同行してくれたお手前が旧会津藩士の家より妻を娶ると知ってことのほかお喜びでしてな。お手前に新たに一家を興すことを許すとまでおおせられているのです、ちょっと待って下さい」

上体をひねって洋式机の抽斗をあけた浩は、一枚の紙を大事そうに取り出して伝八に手わたした。

「これが、祐堂さまがおんみずから名づけて下さったお手前の姓名です」

そこに松平容保の自筆で墨痕鮮やかに書かれていたのは、

《藤田五郎》

の四文字であった。

「ありがたく、お受けいたします」

文久三年（一八六三）の新選組加盟以来、死生存亡をともにしてきた旧会津藩最後の藩主から新たな名を与えられたことを無上の光栄と感じ、伝八はうやうやしく腰を折ってその紙片を押しいただいた。

初めの名は山口一。その後斎藤一、山口次郎、一戸伝八と三度の改名をくりかえしたかれは、しみじみとその四文字を見つめつづけた。

（これがおれの最後の名前だ。決してこの名を汚してはならぬ）

と考えながら。

（次号につづく）

〈参考資料〉葛西富夫『新訂会津・斗南藩史』（東洋書院）

時代小説・時代劇にみる
# おもしろ余話
縄田一男

## 名台詞・きめ台詞

### 「役人だけが人の幸せを守るものではない」

城昌幸創造するところの若さま侍といえば、いつも居候を決めこんだ船宿喜仙の二階奥座敷で、看板娘のお染を相手にだらだら酒の毎日――何が起ころうと春風駘蕩のヒーローだ。

映画では何故か、戦前に近衛十四郎、戦後に黒川弥太郎と、どちらかというと武骨な感じのする役者がやっていたが、次の阪東鶴之助（この鶴之助版と近衛のものは未見）を経て、東映で大川橋蔵の主演シリーズとなり、ようやく板につき、昭和三十一年から三十七年にかけて十本が製作された。

面白いのは、前述の黒川弥太郎版（新東宝製作、昭和25～26年）で、若さまは大河内伝次郎扮する奉行の息子ということになっているのに、何事も派手好きの東映がつくる様になってからは、葵の御紋の入った紋服を着、原作の方も、はじめはさる高貴な身分の方とあり、若さまという通称以外、一切不明だったのだが、映画に連られて、次第に将軍家の血筋をひいていることをほのめかしている。



さて、その橋蔵主演のシリーズ第六作にして初のカラー作品「若さま侍捕物帖・鮮血の人魚」（監督深田金之助、脚本松村道平、昭和32）で、若さまは、幕府転覆の陰謀に巻き込まれた大川恵子扮する姫君を救うことになる。

はじめ姫君は、このブラリと現われた正体不明の、だが、どことなく貴公子然とした若さまに警戒心を抱く。あまりに自分たちのことをしつこく聞こうとするので、

「あなたは役人ですか？」

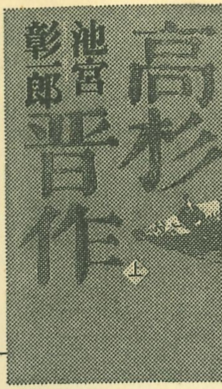
と問うと、それまで、「俺は若さまという暇人だよ」などとヘラヘラしていた橋蔵が、急に真顔になって、

「役人だけが人の幸せを守るものではない」

という名台詞を吐く。

当然、この言葉の裏には、役人などに人の幸福が守れるわけはない、という反語の意味が隠されていようし、映画では明らかにされていないが若さまという高貴な身分の侍が何故、市井に隠遁して、世の弱者のために立ち上らざるを得ないのか、その出生に絡む秘密が隠されているような思わせぶりな名台詞なのである。

講談社




定価各一五〇〇円

読売新聞社




定価各一四〇〇円

は晋作という英雄の軌跡を通して、その民族の血の解明を試みた逸品ということが出来よう。

**③永井路子『姫の戦国』上・下**

前作『山霧―毛利元就の妻』に続いて、戦国女性の実像を明らかにする意図をもって書かれた長篇の一つ。武将間の政略結婚は必ずしも女にとっての悲劇ではなく、彼女たちがむしろ性を伴った外交官ともいうべき存在であったこと等を示しつつ、本作は公家の中御門家から今川家に嫁いだ悠姫、後の寿桂尼が夫亡き後、当時、領国経営でトップを切っていた今川家をどう切り盛りしていったのかを描いている。

女の日常が歴史と切り結ぶ瞬間が見事に描かれており、従来、軟弱に捉えられて来た今川のイメージを一新させた作品としても評価したい。

**④白石一郎『風雲児』上・下**

昨年末十二月二十七日の刊行ながら、やはり、ベスト10には欠かせない充実の一作であろう。作品は日本人でありながらシャムの王族に継ぐ地位を得た快男児・山田長政の生涯を描いたもの。口入れ神主から六尺奉公、貿易商の手代の片腕と、様々な職業を転々としながら高山国(台湾)、そしてシャムへ渡った長政は、もとシャム国王の娘チアンと結ばれ、現アユタヤ国王配下の日本人親衛隊のリーダーにして日本人町の頭領となる。作者は、ビルマの象部隊の襲撃やスペイン艦隊との対決といった手に汗握る見せ場を用意しつつ、大国の利益追求の走狗となる楽土の姿や、アユタヤを内憂外患の国として日本の現状と二重写しにする視点、更には長政の非業の死を国籍を超えた人間が分かり合えないことの象徴として捉えるなど、今日に通じる様々な問題提起を行っている。

**⑤吉村昭『天狗騒乱』**

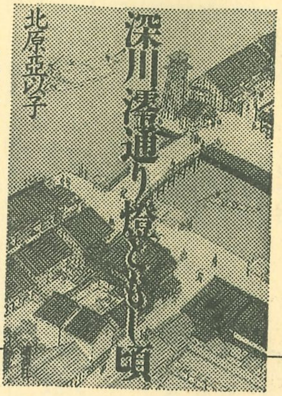
前作『桜田門外ノ変』の後を受け、外敵が侵入し得る海岸線を持つ水戸家に生まれた苛烈な攘夷運動が、その後、どういう変遷をたどっていったのかを活写した力篇であり、史伝作品の強みを存分に発揮し、綿密な調料踏査を経て、幕末維新史上最も酸鼻を極めた事件の全貌を捉えている。天狗党の行軍に象徴されるのは、幕末維新期に無為に費やされてしま

新潮社




定価一四〇〇円

講談社




定価一八〇〇円

ったエネルギーの行方であり、作者はその行方を見据えることによって歴史の持つ意味を問い直そうとしているのである。

**⑥池宮彰一郎『四十七人目の浪士』**

未だに義士か不義士かで論争の絶えない寺坂吉右衛門を主人公として、その後の忠臣蔵を描く全四作から成る作品集。巻頭の一作「仕舞始」で、吉良邸討入り後、大石内蔵助から事件の生き証人として、また浪士の遺族たちの相談役として生命を全うしてくれと命じられた吉右衛門は、死から生への急転換に惑乱に惑乱を重ねる。

今まで死を覚悟していた人間が突如として生きることを余儀なくされる——ここに描かれているのは、八月十五日は誰もが寺坂吉右衛門であったという主張に他ならず、この一篇ほど作者の戦中派としての思想を端的に示した作品はないだろう。

この一巻では『四十七人の刺客』で展開された生命の重みというテーマが吉右衛門を通して見事に描かれ、特に内蔵助とかるの間に産まれたかおを嫁がせる「最後の忠臣蔵」は涙落を禁じ得ない逸品である。

**⑦陳舜臣『耶律楚材』上・下**

チンギス・ハンを支えた陰の名宰相を描いたもので、今日のリーダーなき混迷した日本の政界に対するアンチテーゼとして、恐らく昨年、最も現実との緊張関係の中で読み継がれた作品ではないだろうか。しかし、作者の意図は湾岸戦争下、戦いの中に人間性を見据えることで鋭い状況批判となった前作『諸葛孔明』に続いて、本来は人間の最も高度な営みである政治の中へ忍びこもうとする軽薄さや欺瞞に対する根元的な怒りや批判を描くことにある。

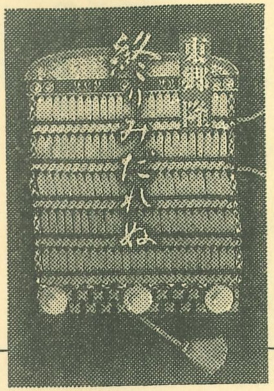
宮城谷昌光をはじめ中国ものの気鋭が盛んに活躍している中、巨匠健在の感を強くした一篇といえよう。

**⑧北原亞以子『深川澪通り燈ともし頃』**

作者の出世作『深川澪通り木戸番小屋』シリーズの第二弾。今回は中篇二本立てで、第一話「藁」は、ズバリ、人間の持つエゴイズムがテーマ。物語の閉じ方がやや十全とはいえないうらみがあるものの、作者はかなり高いところから話を進めていこうと試みており、この意欲的な姿勢は評価すべきであろう。また第二話「たそがれ」はそうしたテーマに骨肉の愛憎等が絡んでくる。

作品全体の彫りの深まりも頼もしく、従来の市井ものから一歩も二歩も抜きん出たところで勝負をしようという力作である。

文藝春秋




定価一五〇〇円

**⑨東郷隆『終りみだれぬ』**

若手の歴史・時代作家の中で、歴史と表裏になった伝奇世界を衒学性たっぷりに描く作者の快作といえよう。今回は源平の争乱に翻弄される取るに足らぬ人々の姿を独自の視点から捉えた連作で、特に「鼓」の主人公四郎法師が、後白河一派を「こ奴ら、化物じゃ」と断じる箇所には、一介の庶民にとっての歴史がいかに彼らと無縁に乖離されてしまった存在であるのか——所詮、その翻弄の中で歴史は自分たちと縁なき怪異の様なものでしかない、という主張が端的に示されていて興味深い。

**⑩羽山信樹『邪しき者・生々流転剣』**

**『同・柳生秘剣影』『同・尊之介血涙剣』**

に続く三部作完結篇。南朝の末裔を軸に柳生にまったく新しい価値観を付与。五味康祐、隆慶一郎への正統的後継者の作品として堂々たる仕上りを見せた伝奇巨篇である。剣豪小説ファンをうならせる気合いの入った剣戟描写も嬉しい。

# 清原康正が選ぶベスト10




朝日新聞社
定価一八〇〇円




日本経済新聞社
定価各一五〇〇円




文藝春秋
定価一四〇〇円

**●それぞれの作家の力量と持ち味が存分に発揮されており、読む者を圧倒するボリューム感と迫力があった！**

ここに挙げた10作品は、それぞれの作家の力量と持ち味が存分に発揮されていて、どれを上位にとってもおかしくない、というのが正直なところである。10作のうち、全二巻や全三巻の大長編作が半数にも達する。一冊にまとめられた作品でも、上・下二巻分に相当する分量があるものもあり、全体としては長編中心のセレクトになってしまった。それだけ読む者を圧倒するボリューム感と迫力があったということだ。

**①宮城谷昌光『晏子』上・中・下**

古代中国の王朝の興亡と覇権の推移、その裏にひしめくさまざまな人間ドラマが全三巻にわたって繰り広げられ、ボリューム感という点からもやはり頭抜けた存在。格調ある悠々たる文体が濃密な風合をもたらしており、この作者独特の持ち味となっている。春秋時代の中期、秦・晋・楚・斉の四大国が覇権を争っていた時代、斉の国で軍事の才を発揮した将軍の晏弱、その息子で激しい内部抗争の中で直言を貫き通して人心を集め、名宰相となる晏嬰、この父子の乱世での確固たる生き方、そのまっすぐな節義のありようが、やはり大きな感動を誘う。絶対権力者への諫言者として機能した父子の魅力に加えて、脇を固めるさまざまな登場人物も実に魅力的で、善玉・悪玉という類別を超越して、人間のプリミティブなエネルギーを感じさせてくれる。

**②吉村昭『天狗争乱』**

水戸天狗勢による騒擾事件、世に言う天狗党の乱を扱った問題作。千人余りの一隊の軌跡と非業の最期を克明にたどり、彼らの尊王攘夷思想信奉の姿勢を浮き彫りにしている。一つの思想を信奉することで、その生涯を完結した壮士たちへの挽歌でもあるのだが、『桜田門外ノ変』（一九九〇年刊）を書いたことで生まれた作品で、水戸に興った尊王攘夷思想をより深く解き明かそうとする意図がある。この作者の一連の維新ものの中でとらえられるべき作品で、吉村史観ともいうべき一連の意識の流れ、歴史を見つめる視線を見いだすことができる。

**③陳舜臣『耶律楚材』上・下**

十三世紀の初めにモンゴル軍のチンギス・ハンとその子オゴディの二代に仕えた名宰相・耶律楚材の生涯と折々の内面を描き出した長編作。金朝に仕えていた楚材は、政治というものが存在せず、武力で征服した地域を経営する知識＝文明を持たないこの武闘集団に統一政権としての衣裳を着せようと、チンギス・ハンの陣営に加わり、行政面で腕をふるう。文明と人命を略奪破壊から守ろうとした楚材の政治哲学は、今日の日本の政治状況を対比して見ると、興味深い問題を投げかけてくるものがある。先の晏子といい、この楚材といい、名宰相を待ち望む心理が、読む側の心の内にあることを気づかせる。

**④永井路子『姫の戦国』上・下**

公家の社会に生まれ育った悠姫が駿河の今川氏親のもとに嫁ぎ、公家社会とあまりにも違う武家社会にカルチャーショックを感じる前半部、そして夫の病没後に出家して、幼い息子たちにかわって領国経営にいそしむ後半部と、読む者の興味を先へ先へとかき立てながら展開していく力量は、さすがにベテランだけのことはある。毛利元就夫妻を描いた『山霧』に続く新境地の戦国ものだが、ヒロインの生きざまを見据えて、これまでの今川氏のイメージを一新させる説得力に満ちている。

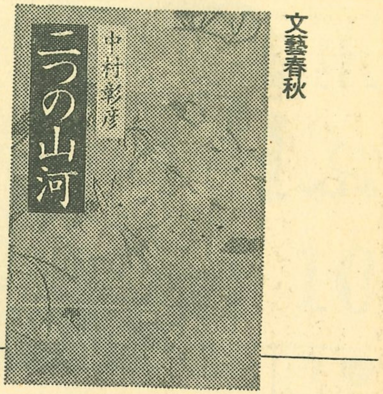
**⑤池宮彰一郎『高杉晋作』上・下**

幕末期における長州の麒麟児の二十八年の生のありようを描いた本格歴史長編。倒幕運動に奔走する晋作の奔放な行動の裏にあった美意識を浮かび上がらせ、彼なくして明治維新はありえなかったとして、晋作の立場から維新革命を直視し、自らの敗戦体験を根底に明治以降の近代史をも批判する。異色の忠臣蔵ものでデビューした作者だが、明治維新を革命と断言するなど、池宮史観はこちらの作品のほうが濃密に表れている。随所に見られる歴史解釈のユニークさは、読者の歴史常識を揺さぶるエキサイティングなものがある。

**⑥黒岩重吾『影刀』**

古代史最大の内戦となった壬申の乱を題材にとった表題作をはじめとする六つの短編を収めた作品集。乱の全貌をとら

文藝春秋
定価一三〇〇円




集英社
定価各一六〇〇円




えた長編作『天の川の太陽』のディテールに焦点を絞り込んだもので、鮮やかな短編の手法が凝らされ、乱の裏にうごめくさまざまな人間模様がとらえられている。また、蘇我・物部両氏の争いに材をとった短編作もあり、これも長編作『磐舟の光芒』をフォローする作品である。

これらの短編作は、長編作に比べると史実の考証などから解き放たれ、作者がそのイマジネーションを存分に飛翔させていく面白さがある。長編作に入っていく前の、すなわち黒岩古代史小説を本格的に楽しむためのウォーミング・アップとしてお勧めする次第だ。

**⑦北原亞以子『深川澪通り燈ともし頃』**

一九八九年に泉鏡花賞を受賞した『深川澪通り木戸番小屋』の続編。とかく「続」や「新」の作品は前作に比べるとイマイチというのが相場なのだが、この作品にはあてはまらない。前作が八編のオムニバス形式による連作短編集だったのに比べ、今回は第一話「藁一」と第二話「たそがれ」の中編二編で構成されており、しかも全体で一編の長編作としても読めるボリューム感がある。塩売りから狂歌師になった政吉と三十五歳の独り身の仕立て屋お若を主人公に、彼らと笑兵衛・お捨の木戸番小屋夫婦との心暖まる交流のさまが、喧騒の現代社会を生きる読者に安らぎを与えてくれる。この夫婦に表象される父性と母性は、北原作品のキーワードでもある。人生の深淵を垣間見せてくれる市井ものの逸品。

**⑧中村彰彦『二つの山河』**

表題作に二編の短編を併録した作品集で、表題作は第百十一回直木賞の受賞作。この中編がやはり圧巻である。第一次世界大戦時に徳島に開設されたドイツ兵を収容した板東俘虜収容所の所長の寛容な処遇のさまを描いて、所長が示す武士の情が会津出身者であることや韓国駐留体験にその要因のあることなどが分析されていく。収容所閉鎖後の彼の生きざまに触れるとともに、昭和二十年代にドイツ兵士たちの墓を守り続けた日本人女性のエピソードを加えることで、作品に奥行きをそえることに成功している。読み終えての爽やかな感動という点では、この年のピカ一的存在である。

**⑨北方謙三『林蔵の貌』上・下**

カラフト探検と間宮海峡発見で知られる間宮林蔵の壮大な夢とロマンを描く作者の渾身の長編作。林蔵の生きざまを軸に、朝廷を中心とする新体制を夢見る公家や蝦夷地での新国家建設を構想する水戸藩士との男の友情をからめつつ、薩摩藩・水戸藩・一橋治済(将軍家斉の実父)の三勢力が暗躍する状況の中での彼らの夢とロマンのありようが展開されていく。現状況を打破して新しい世界を打ち樹てることを夢見た三人の男たちの生に、全共闘世代の作者の熱き思い入れといったものが感じとれる熱血作である。

中央公論社
定価一三五〇円




**⑩杉本章子『間諜』**

文久二年に起こった薩摩藩士による英人殺傷事件である生麦事件を背景に、この事件がもたらした波紋を描いた長編作。事件の処理をめぐる英国と幕府の交渉と対立、攘夷問題にからむ幕府―朝廷―薩摩のそれぞれの思惑と動向の中で、洋妾(ラシャメン)として横浜の英国公使館に潜入した芸者おむらの変転の運命がたどられていく。美しき間諜おむらの情報収集のスリリングなさまや揺れ動く心情と並行して、幕末外交の裏面と複雑な内外情勢が丹念な筆致で描き出されており、作者の新境地をうかがわせるものがある。

番外として、この年の注目シリーズ『山田風太郎傑作忍法帖』(全13巻、講談社ノベルススペシャル)を挙げておきたい。一九六〇年代に起こった忍法小説ブームの先駆けをなした山田風太郎の忍法帖シリーズの復刻だが、現在の伝奇時代ロマン隆盛の原点がここに見られる。

# 石井冨士弥が選ぶベスト10

**●〔時代小説〕ブームと呼ばれる現象のもとに、量においては百花繚乱、各作家個々の手探りの作品が群立した**

かつて『歴史読本』本誌のほうに二十二年間新刊書評を担当していた頃、穏容無害をこととしている紳士であるはずのぼくが、カラクチ批評家と呼ばれ、閉口したことがある。――対象となるものが歴史の〔小説〕である以上、当然のことながら、第三者としての冷静な観測から分析する助言者の立場として、まず、〃文学〃を基底として眺める。そして、その完成度に、好意的であるほど、結果的にときには作者には辛辣に響くことを述べていたかも知れないが、ぼく自身はいささかも、そんな、鋭くも高邁不遜な言辞を毎回弄していた覚えがないので心優しき当人、大いに意外かつ心外だった。

この作品は愚作だ、あるいは小説になってない、なぞと一言のもとに斬り捨てることはもっともラクな仕事だ。でもそんな論争が飛び交う昭和三十年代初期に文学青年として切磋琢磨してモマれてきたぼくには、ただの感情や皮相批評だけの良否の即断でこと足らすことは出来難い。せっかく作者が心血を絞った一編一編に、なにかより以上の成果をあげることができるような一臂の助力ができないものか、という姿勢で一貫してきたからである。――もっとも人は耳に快い言葉はしごく素直に肯定するけれども、反対の諫言には立腹するというのは、なにもお殿様だけに限らない。猟師山を見ず、で第三者の位置だと明らかに指摘できる造型上の欠陥でも作者自身注いだ努力にしてみれば、それをすこしも理解してくれない、と主張したくなるのも、これまた当然だ。そういう努力は認めながら、かつより以上高い完成度へ迫れる質的真贋を見極め、平静に何の夾雑物も交えず助言できるところに批評家というものの存在理由があると信じてきたからだ。

なぜ、こんなことをベスト・テン選びの冒頭にもち出したか、といえば、まずそれにふれる前に、近来、そういう〃書き手〃と〃診断家(ひひょう)〃という永遠に平行線






集英社
定価各一六〇〇円




新潮社
定価一五〇〇円

上で諍いながら共存せざるをえない席の位置が、すこしずつズレ出し――もっとハッキリいえば、〃批評家〃ではなく内容(ストーリー)〔要約〕家ないし〔解説(ガイド)〕家に席換え、あるいは迎合しなければならない風潮がいよいよ強くなってきたことを考えたかったからにほかならない。これは、氾濫する出版洪水の中では、なにも大真面目な分析批評をする者を必要としなくなってきたということだ。――つまり、それでなくとも情報過剰の中に生きなくてはならない出版界にとって、ともあれ売れている商品を一刀両断するような営業妨害者は邪魔な存在なだけだ。

せっかく各新聞・週刊誌その他の〃公的〃注目を浴びたうえは、より以上、その人気のゆえんを一般的に煽ってくれる者としての役割を果たしてくれる以外の要求はない。だから、小説作品に例をとれば、ただその作品内容と、その作家を識るに必要とするデーターをつぎはぎし解説(みちあんない)してくれればそれでいいので、質の判定なぞまで立ち入られるのはまったく、語呂合わせではないが要らぬ迷惑、ということになるわけだ。

だが、しかし、批評家が、そんな主として作家の経歴をセレクトしただけで手を引かざるをえないという踏み込みの浅い紹介的姿勢で作家の輪郭ばかり書いているような現状では、作家たちにとっても真の意味での前進的・客観的〃作家論〃は得られず、ただ手探りで世の嗜好に合わせた題材ばかり追うことを自分でやるよりしかたないということになるであろう。――この風潮は読者離れに狼狽低迷しはじめた昭和四十年代後半から五十年代に入って顕著になった。

こういう商業主義優先の渦中に、思い出したように永く続いた社会派推理や歴史小説ブームをなんとなく押しのけて訪れた〔時代小説〕ブームと呼ばれる今回の現象だった。

それも、昭和61年飄然と現われ進歩的にかつての伝奇小説的面白さを再現した『吉原御免状』(隆慶一郎)の登場や、真ッ四角な史劇調で厭きられてきていたNHKの大河ドラマを、ホーム・ドラマ風の人間味で描きなおした『独眼竜政宗』(昭62＝原作・山岡荘八／脚本・ジェームス・三木)の好評が火つけ役となり、史実ばかりに頼る〔歴史小説〕に、もうひとつ別の虚構性が愉しめる〔時代小




富士見書房
定価一六〇〇円




角川書店
定価八〇〇円

説〕が再浮上してきて九年――どうやら全体的に見渡せば昨年あたりをピークに、悲しいことだが、そろそろ気紛れな一般読書人の鼻につき出してきたような気がする。

つまり永い歴史小説ブームで、読者のほうがなまなかな史的背景・風俗ならとっくに心得ているからだ。それを作家がどう目新しい鮮度でふり向かせるか？が、これからの課題であろう。ヘタをすれば時代小説不振でもっとも敗退した昭和五十年代の、あの日常性の濃やかさを描いてわずかに息をついていた江戸市井物（武家生活も入る）の時代へ、また逆戻りしかねないし、その予兆は『鬼平』の異常な一般的支持ぶりからでもすでにうかがわれる気配が匂うのである。

復活した〔時代小説〕は、もっと大きく夢のあるものでなければ、意味がない。

さァ、そこで昨年だ。これは一見前年の余波をうけ、量においては百花繚乱愛好家の机の上に山を築いた。が、文字どおり〔百花〕らしきものが統一なく斉放されたにすぎず逆に特徴のない前述のような各作家個々の手探りの作品が群立しただけというのが、正直な観望だ。そのどれにも共通しているのはマゲをつけただけの現代人向きの話という印象では、移り気な一般読者の目は、またつぎの新奇なものを求めることになろう。――がその広汎な作品量のなかからこれだけは是非というのを選べば次の通り。

**①吉村昭『天狗争乱』**

これは時代小説でなく正調〔歴史小説〕だ。これだけあざとい作品が出回っているのに、悠々とした手練で天狗党一件を彫りあげる文学者の姿勢に脱帽。

**②宮城谷昌光『晏子』上・中・下**

こちらは前掲作と対照的な斉の晏嬰父子と、その周辺の的確な人間関係とでこの大冊を一気に読ませる。文学の基礎がキッチリしているところから生じる地力だろう。『重耳』からさらに将来の〝国民〟作家的スケールへ大きく広がった。

**③陳舜臣『耶律楚材（やりつそざい）』上・下**

これまた中国西北の草原から出て、後世まで名を残すことになった成吉思汗父子に仕えた名宰相の名を標題としているが、重量感ある展開がじわじわと胸に伝わってくる。

**④池宮彰一郎『高杉晋作』上・下**

これは司馬版『竜馬がゆく』が出ていなければさらにもっと高く評価されていただろう。なにより作者の憑かれたような筆力が、同じ維新物でもその奇矯さのため人によって好悪がはっきりしている主人公の、その奇矯さをダイナミックに描き出していて胸がすく。

**⑤北原亞以子『その夜の雪』**

同じ作家の『深川澪通り燈ともし頃』にしようと思ったが、どちらもいい。ただ市井物のゆきつくところには即現代小説が待っているのではないか？

**⑥北方謙三『林蔵の貌』上・下**

この作家は自らの個性を大事にしつつ、着実に作品の幅をひろげて見事。

**⑦童門冬二『黒田如水』**

頭の切れる標題人物への著者の同化力が成功して、その人間観察の鋭気には、ちと不気味でもある。

**⑧羽山信樹『邪（あ）しき者』全三冊**

純然たるエンターテインメント。この壮大な物語構成は抜群。ただ文体が剣豪物的すぎた。

**⑨佐江衆一『神州魔風伝』**

『八犬伝』仕立ての趣向にこの著者の関心のあり方がうかがわれる。ただ少し愉しみすぎたようだ。

**⑩白石一郎『風雲児』上・下**

昨年ギリギリ刊行のため損をした。勝手に貼られた海洋作家なるレッテルにはもうウンザリしているのではないか。ともあれ、山田長政を年輪の入った雑物を洗った筆で描いてジックリの名品。




講談社
定価一七〇〇円

●奇謀と軍略によって戦国の世を生き抜いた知将の生涯！

# 謀将 真田昌幸

（ぼうしょうさなだまさゆき）

六〇〇枚一挙掲載

南原幹雄（なんばらみきお）

鴇田幹画



# 敗亡の一族

五月雨が降りつづいている。合戦は、雨中でおこなわれていた。

戦況は日に日に悪化していた。

信州、海野平には敵兵があふれている。敵兵は三方から海野平をかこみ、滋野一族のせん滅を期していた。北信から村上氏、南信から諏訪氏、さらに甲斐から武田氏の軍勢が海野平を包囲したときから、滋野一族の敗色は濃くなった。

北信濃の雄族村上氏は長年、滋野一族の領土小県郡海野平の侵略をねらっていたが、天文十年（一五四一）五月、とつじょ戸石城から南進を開始し、それと同時に南信濃の諏訪氏と甲斐の武田氏が呼応した。

滋野一族はただちに関東管領上杉氏に援軍を乞うたが、対応がにぶく、いたずらに出陣準備に手間どっているうちに、形勢はほぼ決定的になってしまった。

「小次郎、覚悟をきめておけ。全滅するまでたたかいぬくか、それともいったん落ちのびて再起をはかるかだ」

滋野一族の棟梁、海野信濃守棟綱が二男小次郎にそう言ったのは、嫡男小太郎幸義が戸石城から殺到してきた村上軍を荒れくるう神川のほとりで迎え討ち、壮烈な最期をとげたときだった。小次郎はそのとき、北上して海野城にせまった武田軍とたたかっていた。

滋野一族は清和天皇の皇子貞保親王の孫善渕王が信濃守として小県郡にくだって、この地に勢力をきずいてきた氏族で、平安時代の末期には〈滋野三家〉と称する海野、根津、望月にわかれた。その後、この三家から会田、塔ノ原、田沢、苅屋、光、真田などにわかれて小県郡と筑摩郡にひろがった。しかし、この二、三代の数十年間、滋野一族は周囲の豪族の勢いに押されつづけており、おおきな期待をになって棟梁となった棟綱もはかばかしい勢力の挽回はかなわず、今回の戦いをむかえていたのだった。

「覚悟はできております。墳墓の地を敵にうばわれるくらいなら、全滅を覚悟でたたかいぬいて、いさぎよく討ち死にを」

小次郎は雨や汗に濡れ、泥によごれた鎧姿でまようことなく言い切った。

「うむ」

棟綱は小次郎の答を聞いて、安心したようだった。

期待した上杉氏の援軍の見込みがなく、棟綱は三氏の軍勢を相手にして、勝算はとてもなかった。降服はもとよりのぞむところではなく、もし滋野一族が降服を申しでても、相手の三氏がこれを容れるかどうかわからなかった。

（屈辱をこうむるよりも、いさぎよい死を）

これは武士として当然のかんがえであった。

「勝敗は時の運です。三氏に攻められて負けるなら、仕方ありません」

小次郎は開戦のときから、この覚悟をしていた。

「できるならば、小次郎には落ちのびてもらいたいが」

と棟綱は言ったが、

「もとよりのぞむところではありません」

小次郎は簡単にそれを一蹴した。



滋野方の名ある武将はすでにつぎつぎに討ち死にをとげていた。兵のほぼ半数も三氏の軍勢に雨中で討ちとられていた。生きのこっている将兵の大半も傷を負っていた。

「わが一族はよくたたかった。相手は三倍の軍勢だ」

と棟綱は言ったが、さすがに無念の色はかくせない。自分の代で、信濃第一の名族をほろぼすことの悔しさが鎧をぬいだ姿ににじみでていた。根津、望月、尾ノ山、矢沢、常田などの諸城はことごとく落ち、今や、海野城は武田、村上、諏訪の軍勢に包囲され、海野平は敵方の鬨の声や雄叫びにみちている。

「明日、最後の一戦を」

「降服をのぞむ者には降服させよ。逃げのびたい者は今夜のうちに城からおとせ」

棟綱はこの日最後の命令をくだした。

城内には海野方の諸城からおちのびてきた将兵たちをくわえて、千数百人がたてこもっていた。

五月雨はやみそうにない。足場はわるい。城をおちるにしても、なかなか困難な状況である。一同は運命の明日をひかえて、盃をかわし、今生のわかれをおこなった。

小次郎は連日の戦いにくたびれ、子の刻をまわったころ鎧姿のまま本丸の広間で寝入った。

どれくらいねむったか、小次郎は一陣の風が広間に吹きこむのを感じた。ひやりと肌につめたい風である。

小次郎はおもわず、風の吹き寄せてきた太郎山の峰をながめた。

そのとき、風とともに近づいてくるものがあった。雲に乗り、甲冑を身につけ、片手に鉾、片手に宝棒をたずさえた忿怒の相の武神形が見えた。

（毘沙門天……）

とさとって、小次郎はおもわず立ちあがった。

毘沙門天は四天王の一つで、十二天の一つである。

小次郎はおのずから敬虔な気持にひたって、毘沙門天をむかえた。

毘沙門天は忿怒の形相で、小次郎を見すえた。

「海野小次郎、聞くがいい。一族討ち死にして全滅いたせば、名族滋野はほろぶ。それでは先祖代々にたいして申しわけがたつまい。城をおちのびて、再起をこころがけるがよい。この鉾をもって敵陣を切りぬけ、時を待て。末はきっと目出たいであろう。わが言葉を信じよ。滋野の領土を回復し、一族を再興せよ」

そう言い、毘沙門天は鉾をさしだした。

小次郎はその鉾をうけとった。ずしりと両手に重みを感ずる鉾であった。小次郎はその鉾を手にしたとたん、不思議に全身に勇気がみちあふれ、霊気が吹きこまれるのをおぼえた。

「毘沙門さま、有難きお言葉をたまわりました。かならずこの海野平を回復し、一族を再興いたします」

小次郎はこたえた。

「小次郎よ、一族を再興するためには、犠牲をおそれるな。命を惜しむな。不惜身命たれ」

毘沙門天がそう言ったとき、周囲にふたたび風がおこった。そして、風とともに毘沙門天の姿は消えた。

小次郎はわれにかえって、目をさまし

た。夢であった。
時刻はまだ丑の刻である。あたりには疲労困憊した海野家の将兵たちが泥のようにねむりこけている。
だが、小次郎はたしかに鉾を手にしていた。それは海野家重代の鉾で、小次郎がこの連日手にしてたたかってきた武器であるが、それをにぎる自分には不滅の勇気と不屈の闘志がこもっているのを感じた。
(毘沙門さまがこの鉾に勇気と霊気をあたえてくれた)
と小次郎は信じた。まざまざと見えた毘沙門天の姿は脳裡から消えようがなかったし、小次郎を勇気づけたその声は耳からはなれなかった。
一時してから、小次郎は棟綱の寝所へむかった。
棟綱はまだおきていた。
「父上、小次郎は今、討ち死にはいたしたくありません。一族を再興し、領土を回復するために、城を落ちのびることといたしました」
とうったえた。
「左様か、小次郎はそのつもりか。いさぎよくたたかって死するも武士、おちのびて再起をはかるも武士。わしはお前と行動をともにしよう」
棟綱はしばしかんがえた後、そう言った。
翌日は五月二十五日である。早暁、時ならぬ法螺貝のひびきが城内に鳴りわたった。
将兵らはとびおきて、手ばやく出陣の身仕度をととのえた。
「今から城をでて、かこみをやぶって生きのびることとした。そしていつの日かふたたびこの地、この城にもどってくる所存じゃ。降服いたしたき者はするがいい」
棟綱が号令をくだした。
棟綱の横には小次郎が甲冑に身をかため、鉾を手にして毘沙門天のごとく立っている。
小次郎はまわりを見わたした。側臣の夏目兵庫、深井棟広がおり、股肱の海野十郎左衛門、望月三郎兵衛、別所八郎太、松尾権之助、塩田信兵衛、浦野五郎三郎、生島紋太夫などの姿があった。ふだんなら当然ここに姿をそろえているべきおおくの家来たちがすでに戦死しているのはさびしいかぎりである。
「城に火をかけよ!」
棟綱の命令を待っていたかのように、城の各所から火の手があがった。
城内の女たちの悲鳴が聞えた。女たちも城をおちる者と降服する者とまちまちである。
ふたたび底力のある法螺貝がひびきわたった。
五月雨が数日ぶりにあがり、暁天にはほの白い明りがにじみだしていた。
「それっ、突きすすめ!」
棟綱が軍配をかかげて号令した。
鬨の声とともに滋野一族の将兵がいっせいに打ってでた。その陣形は滅多に例を見ぬ円形である。中に婦女子を入れ、その周囲を何層にも将兵たちがつつみこんだ陣形で、一隊は押しすすんだ。
「突きすすめっ、敵をおそれるな!」
小次郎は愛馬稲妻にまたがり、手に鉾をたずさえて、将兵を叱咤しつつ先頭を駆けた。
城をかこむ敵兵はとつぜん城中からあがった火の手におどろき、法螺貝のひびきとともにおこった突撃に肝をぬかれた。が、すぐに武田、村上、諏訪の軍勢が滋野の軍の行く手をさえぎろうとした。
暁闇のなかから黒雲がもくもくとわきおこるように敵勢があらわれた。
「打ちやぶれっ、斬って斬って、斬りまくれ!」
小次郎は先頭にたち、鉾をふるって敵をたおした。
将兵たちも死にものぐるいの鬼気せまる突撃をつづけた。
ばたばたと面白いように敵勢がたおれていった。必死の者とそうでない者との勢いのちがいだ。
滋野の軍のなかでも傷を負う者はいくらでもいたが、その二倍、三倍の敵兵がたおれていった。
「滋野勢は小勢なるぞっ、おそれるな。突き伏せろ!」
敵勢のなかからもひときわひびく音声があがって、勇敢な将兵たちは滋野勢に突きかかり、突進してきた。
暁闇のなかで壮烈な白兵戦がくりひろげられた。
貝の音がひびきわたり、鬨の声、雄叫び、陣馬の音が海野平を圧した。
暁天の一角があかあかと燃えだした。まさに真夏の朝焼けを見るようである。火の手のあがった海野城が一気に燃えひろがっていったのである。炎が天を焼き、黒煙と異臭がひろがった。
滋野の一団は北をめざしてすすんだ。大室山の裾を鳥居峠へおちのびる道をえらんだのだ。
小県郡には滋野一族が古来住みついていたが、その大半はすでにほろぼされたり、降服していた。だから小県郡も今は敵領である。
武田、村上両軍は入れかわり立ちかわり滋野の一団に攻撃をくりかえしてきた。とくに大将棟綱と勇名高き小次郎の首を討ちとろうと目の色をかえて殺到してきた。
小次郎は右に左に敵兵を薙ぎたおして馬をすすめた。とくに鉾の威力はすさまじかった。昨夜、夢にあらわれた毘沙門天が本当に勇気と霊気をあたえてくれたことを疑わなかった。
小次郎の奮闘にひきずられたように滋野の将兵、郎党たちも勇敢にたたかった。何度もくりかえされる敵襲にもかかわらず、滋野の一団は容易に円形の陣をくずされなかった。幾度か陣形をくずされかかり、婦女子らが敵の攻撃におびやかされたが、すぐに滋野勢は隊伍をととのえなおした。
「毘沙門さま、わが一族に加護をたまわりませ。この危難から一族をおすくいください」
小次郎は危機がせまると、心中でいのり、阿修羅のごとく鉾をふるった。
そのかたわら、右と左には夏目兵庫と深井棟広が寄りそうようにしたがっている。小次郎に危機があれば、身を挺してまもりぬこうという意図である。
滋野一団はぐんぐんすすんでいった。
武田、村上、諏訪の三軍は何度も肉迫しながら滋野勢をつきくずせなかった。棟綱と小次郎を討ちとることもできない。
しかしさすがに滋野勢も時とともに数を減らしていた。小次郎や棟綱の近くでも、敵に討たれる者はすくなくなかった。
そしてとうとう滋野勢はまるくなって、殿城山の裾をぬけた。
ここまでくると、さすがに追撃してく

る三軍の数はしだいに減ってきた。
　滋野一族の戦意と闘志はすさまじかった。何がなんでも落ちのびようという意志のつよさのあらわれである。
　敵はあきらかに滋野勢の勢いをおそれていた。しだいに滋野勢がつきすすむ正面が手薄になっていった。あえて前面にたちふさがる強者が減ってきたのである。
　そしてついに滋野勢は敵をふり切った。もう追撃してくる敵はいなかった。
　棟綱も小次郎も無事であった。円陣のなかの婦女子たちも大方無事だった。
「めざすは鳥居峠じゃ」
　棟綱は馬上、号令した。
　鳥居峠は信州、小県郡と上野との国境である。
　その西上野の吾妻郡にも、古来滋野一族の支族や分家などが多数分布している。
　とくに吾妻郡の羽尾に住む羽尾家は小次郎の妻の実家である。
　暁の闇は完全にふっきれた。
　地上には朝の光がみちてきた。そのなかを滋野一族の面々は信州から西上野へと黙々とおちていった。

## 鳥居峠

　今し方、鳥居峠の西に夕立雲がわいたと見えるや、たちまち雷鳴とともに篠つくようなはげしい雨が峠の道をおそった。
　峠の道をあるいていた旅人はたまらず半丁ばかり駆けだして、峠の茶店にはしりこんだ。山道で夕立におそわれたら、とりあえず茶店かお堂にでも逃げこむしかない
　その旅人が茶店の縁台で茶をのんでいると、信州側から頭巾をかぶり、鈴懸衣に結袈裟をかけ、笈を背負った修験道がはげしい夕立ものものかは全身ずぶ濡れになりながら平然と上野側へあるき去っていくのが見えた。
　修験道というのは奥深い山岳で荒修行によって験徳を積むものであるから、夕立くらい何物でもないのであろうと旅人はおもった。それくらいその修験道の足取りはしっかりしていた。
　旅人が茶を飲みおわったときには、もう夕立はやみ、夏木のむせぶような緑の香を吹きつけて青嵐が峠をこえてわたっていった。夏の山岳地の天候はこれほどかわりやすいものである。
　その修験道は山並の折りかさなる西上野の山道をずっとあるきつづけた。
　この山道は鳥居峠を水源とする吾妻川とほぼ並行しており、山間をぬけたり、渓谷の景観をぬってすすむ。
　修験道は夕刻にいたる前、長野原のはずれにある禅寺大津寺の山門をくぐった。
　この寺は参道がながく、山裾に伽藍がひろがっている。修験道は本堂と鐘楼とのあいだをぬけ、裏山の坂道をのぼり、一宇の塔頭へむかった。
　青嵐が吹きおろしてくるので、真夏の暑さも感じられない爽快感だ。
　庭に入ると、塔頭の一室に長々と寝ころんでいる侍の姿が見えた。
「小次郎さま」
　修験道が呼びかけると、その侍はむっくりと体をおこした。



「蓮華坊、ひさしいな」
　小次郎は胡座をかいて修験道をむかえた。
　小次郎の貌にはいくらかの鬱屈が浮かんでいる。これが信濃随一の器量人と呼ばれた男である。敗亡の日から一ヶ月余がたっていた。
　滋野一族はあの五月雨のなかで四散した。討死にした者、降服した者、おちのびた者……、運命はまちまちであるが、信州小県郡から滋野一族の領土は消えた。かわって武田、村上、諏訪の勢力が小県郡におよんだ。
　滋野三家のうちでも、根津は諏訪に降服し、望月はちりぢりとなり、その一部が武田にくだった。
　海野棟綱、小次郎父子とともに上州羽尾におちのびた人数は約三百人である。
　小次郎の妻多津はあの戦のなかで焼け死んでいた。多津の父、羽尾入道幸全はおちてきた海野一族をあたたかくむかえ、城内の郭の一角に棟綱父子の住む屋敷を用意し、城外に一族のための家屋と田地をあたえてくれた。海野一族は自分たちの食い扶持まで羽尾家にたよるわけにはいかなかったため、できるだけ自給自足しようとしたのである。
「若殿もご壮健で、なによりにございます」
　蓮華坊は言った。
　滋野一族、とりわけ海野家と修験道とのつながりは長く、ふかい。海野平は烏帽子岳や四阿山、角間山、太郎山などにかこまれた盆地であり、四阿山はふるくから山岳宗教の聖地とされ、修験道の修行の場であった。それで滋野一族は古来、修験道、巫女などを支配し、盲人や妖術、医術などとのかかわりも深かった。
「壮健とは言えぬが、領土を追われた武士は生きてゆくために元気でなくてはならぬ。食うためにはたらかなければならぬのだ」
　小次郎はそう言ったが、表情にさほどの暗さはなかった。それは一族再興と旧領回復の野望が小次郎の胸にふつふつと渦巻いているからだ。
「信濃、甲斐方面をあるいてまいりました」
　蓮華坊はすこしむつかしい表情を見せて言った。
　修験道や巫女は諸国の通行が自由であるため、情報収集や探索の仕事にはもってこいなのであった。
「あちらの様子はどうだ？」
　蓮華坊がわざわざ鳥居峠をこえてここまできたからには、何か情勢の変化があると小次郎は察したのだ。
「信濃はさして変りませぬが、甲斐に異変がおきましてございます」
「甲斐に異変が？」
「謀叛がおこりました。武田信虎が国守の座を追われて、駿河におしこめられ、近臣も何人か殺されたそうです」
　蓮華坊がおもいがけぬことを言ったので、小次郎の眸がひかった。
　武田信虎といえば猛将として四隣にきこえ、家中からさえ恐れられていた人物である。まして滋野一族を攻め、海野家を信濃から追いおとした中心人物だけに、小次郎がもっとも関心をいだいている相手であった。その信虎が国を追われたとは聞き捨てにはできなかった。
「信虎にとってかわった者は？」
「武田太郎晴信です」
　小次郎は耳をうたがった。

「まことか。太郎晴信といえば、信虎の倅ではないか。しかも嫡男だな」
「左様でございます。日ごろ信虎は晴信をうとんじ、弟の信繁を可愛がっておりましたので、晴信が危機をおぼえ、この挙にでたものとおもわれます」
「これは大変なことだ。それにしても、あの信虎が息子にやられたとは。猛将信虎が甲斐からいなくなった」
これは小次郎にとって何よりも耳よりな情報であった。
駿河の今川義元には信虎の娘がとついでいる。信虎はそこへ追いやられたのだ。信虎としてはいかにも迂闊なことである。
戦国の世では、親が自分の子をころしたり、また実の子に追われる悲劇もすくなくはなかったが、小次郎の身近でこうしたことがおきたのは衝撃であった。
「とりあえずそれをご一報にまいりました。これだけで甲斐一国がしずまるとはおもえません」
「晴信というのは、いくつになる?」
「二十一とか」
「若いな」
聞いておどろいた。小次郎より八歳も年下である。小次郎はこれまで晴信という男をほとんど意識したことがなかった。
だから晴信についての知識もあまりなかった。信虎の後は二男信繁が継ぐかもしれないとおもっていたくらいだ。
「さぐってみますと、晴信はなかなかの男だという評もございます」
蓮華坊はそう言ったが、小次郎はすぐにその言葉を信じることはできなかった。
「信虎を追ったので、そういう噂がたったのだろう」
とおもった。
「そうともかんがえられます」
「いずれにしろ、甲斐がかわれば、信濃の様子もかわるかもしれぬ」
小次郎はまだ晴信の人物評価をすることはできないが、すくなくとも晴信が信虎に匹敵する武将とはおもえなかった。
信虎の評価は一様ではないが、すくなくとも四隣をおそれさせた猛将であったことは間違いなかった。その信虎をしのぐのは並大抵のことではないからだ。しかも年が若すぎる。
「かわるかもしれません。信濃における武田の勢力はおとろえるやもしれません。ほかの勢力が武田の領土をうかがうでしょう」
信濃には雄族村上のほかに諏訪や小笠原などがおり、さらに古くから関東管領上杉家にしたがう諸豪族がいる。それらがたがいに虎視眈々と周囲の隙をうかがい合っているのである。若き当主にかわった武田家などはまず四隣の雄族にねらわれるとみなければならない。
小県郡を追われた棟綱も、かねて上杉家に信濃出兵を嘆願しているところである。
「この機に上杉家が信濃へ出兵するかもしれぬ」
「左様でございます。大殿さまの願いがかなうかもしれません」
「どうかな……」
小次郎はもともと関東管領上杉家にたいして、さしたる期待はいだいていなかった。
昨月の戦いでも、上杉家がいちはやく援軍をおくってくれていたら、滋野一族



はこのような無残な敗北を喫してはいなかっただろう。長いあいだ関東管領というふるい権威のなかに安住していて、敏速な行動をとれなかったからこそ、滋野一族を見ごろしにする結果となった。上杉家の内部は外から見た以上にふるくなり、腐りかかっているのではないかと小次郎はおもっていた。何よりも前回の事態がこのことを物語っているような気がした。
しかし棟綱はあくまでも上杉家の力によって、海野家ひいては滋野一族が信州に復帰することに望を託している。
「蓮華坊、甲斐の晴信の器量をさぐってみてくれ」
「うけたまわりました。駿河におわれた信虎がすぐに巻き返してくるかもしれません」
「晴信は三日天下におわる恐れもある」
甲斐には信虎が溺愛した信繁が無傷でのこっている。しかも信繁は家臣に人望があると言われている。この信繁の勢力と駿河に追われた信虎とがむすびつけば、事態は容易にかわるような気もしたのである。
「ご報告をお待ちくださいませ」
と言って蓮華坊は立ちあがった。
蓮華坊が去っていくのを、小次郎は見おくった。
蓮華坊は塔頭をでて、大津寺を去っていった。
小次郎が羽尾城内の屋敷をぬけでて大津寺の塔頭ですごすことがおおくなったのは、棟綱とのあいだに意見のくいちがいが生じてからである。二人とも信州復帰という目的はおなじでありながら、あくまでも上杉家をたよろうとする棟綱と、上杉家を信じられなくなっている小次郎とのあいだに溝ができてきていた。
翌七月。猛暑の晩夏のなか、上杉管領家の重鎮長野業政がとつじょ上野の諸豪族の軍をひきいて碓氷峠越えに信州佐久へ怒濤のように侵入していった。
その軍勢の先頭には、羽尾入道幸全と海野棟綱、小次郎父子がたっていた。
棟綱の嘆願がここにいたってようやくむくわれたと言うべきであった。晴信が信虎にとってかわったことが上杉家に信濃侵入の機会をあたえたのである。
吾妻郡にひろがる滋野系の諸家はほとんど上杉家の被官であり、群馬郡箕輪城の長野業政の旗下であるから、意気さかんに進撃していった。むかうところ、敵なしの勢である。先々月、武田軍が荒らしまわって武田家に帰属した佐久、小県の諸豪が今度はことごとく上杉軍になびいた。
上杉軍は約三千騎、一万人以上の大軍で破竹の進撃をつづけた。
この大軍をさえぎる敵勢はなく、ほとんど無人の野をゆくごとくであった。
五月の戦いで諏訪頼重に降服してゆるされた芦田信守は部下とともに城を捨てて逃走した。諏訪頼重は長窪まで出馬したが、上杉軍の勢を見て、それ以上はうごかなかった。村上軍も戸石城にたてこもったまま、出動しない。
ところが、上杉軍は芦田やその附近の民家を焼きはらって気勢をあげたものの、海野平の手前でふみとどまった。それ以上は積極的に戸石城を攻めることもなく、諏訪へ進攻することもなかった。
「拙者ども父子で先陣をつとめます。ぜがひでも、海野平へ攻めこむべきとかんがえます」

棟綱は長野業政の本陣へでかけていって、しきりに進言した。が、棟綱の進言はいれられなかった。
　この戦いは業政が武田家の騒動を聞いて、晴信の出方を小手だめしするためのものであり、また棟綱の乞いをいれての出陣であった。
　長野業政は在原業平（ありわらのなりひら）を先祖とする上野の豪勇で、父祖の代から上杉家の最大の重臣として威権をにぎっていた。上野の西半分、すなわち群馬、吾妻、碓氷、甘楽の諸郡の上杉家の諸豪はほとんど業政の指揮下に入っていた。大井、平賀、内山、志賀など信州佐久の諸豪も業政の指揮にしたがっており、彼等を佐久箕輪衆と言っていた。
「海野平には、かつてのわが一族、縁者たちが多数住んでおります。策戦はおもうようにたてられます。敵方を内応させることもできるとおもいます。海野平を占領すれば、小県一郡をおさえることができるでしょう」
　小次郎も棟綱とともに業政にたいして進言した。
　けれどもその効果はなかった。
　業政は信州に侵略し、関東管領上杉家の勢威を近隣にしめすことには成功した。佐久箕輪衆の地位も安定させたというかんがえである。
　深入りしすぎて、諏訪、村上、武田三氏の包囲をうける恐れを心配したか、業政はそれ以上東信濃を席捲する意志はなかった。
「管領家と武田家との和談が成った。これ以上すすむわけにはまいらぬ」
　業政はおもいがけぬことを棟綱と小次郎に言った。
「管領家と武田が……」
　小次郎はおもわず聞きかえした。
　二十一歳で武田家の当主になったばかりの晴信が、一体どのような会談を管領上杉憲政とおこない、講和にもちこんだのだろうかと驚きをおぼえた。なんとも迅速で、機を見るに敏な和談交渉ではないか。
「左様じゃ、武田晴信という男、なかなかのきけ者らしい」
　業政も小次郎とおなじ驚きをいだいているようだ。
　父を追い、まだ自国さえまとめきれないと見られた時期に、晴信はまことにあざやかな外交交渉で関東管領と話をつけてしまったものである。
　豪勇の誉たかく、関東から甲信越に名をとどろかせている業政はもう五十歳をすぎた老練でもある。その業政が舌をまくほど晴信の交渉はあざやかだったらしい。
「箕輪へ！」
　と業政は号令をくだし、馬首をかえして帰陣していった。
　小次郎の胸のなかにはにがい失望とむなしい落胆がのこった。
　棟綱も、馬上悄然と上野へかえしていった。
　海野家の信濃復帰には大変な年月がかかる、とこのとき小次郎はおもった。
　羽尾に帰陣してからほどなくして、小次郎は棟綱の部屋に呼ばれた。
　棟綱は帰陣してからしばらく失意をつづけていた。海野平を前にしてむなしく兵をかえした棟綱の失意ははなはだおおきかったのだ。
「小次郎、ここに長居をいたすのは羽尾家に迷惑がかかる」



　棟綱は小次郎を見て言いだした。
「ここは多津の実家（さと）ですから、迷惑というほどではないでしょう。羽尾どのも何も言うておりません」
　小次郎は父が何を言いだすのかとおもった。
「嫁の実家とはいっても、多津はもう死んでおる。お前とも縁は切れておるわけじゃ」
「多津が死んだからといって、すぐに縁が切れるものではありません。羽尾どのは親身になってわれわれの面倒を見てくれているではありませんか」
　小次郎は棟綱が何か意図していることがあるのかもしれないとおもった。
「面倒を見てもらっておるから、余計気づまりなのだ。羽尾の家も、けっして裕福ではない」
「裕福ではなくても、われわれの面倒くらいは見られるでしょう」
　小次郎はそんなことはまるでかんがえていなかった。それで棟綱の心中をおしはかってみた。
「お前はそうおもうかもしれんが、われわれはそうはいかん。羽尾家でも多分気づまりであろう」
　海野家と羽尾家は小次郎と多津の縁がなくなったにしても、先祖をおなじくする同族である。信州をおちてきた海野家が羽尾家をたよるのは不思議ではないのだ。
「父上、羽尾をでて、どこへ行こうというのですか」
「箕輪へまいるのはどうじゃ。長野家ならば所帯がおおきい。わしらが行っても、さほど迷惑はかかるまい」
　と棟綱は言ったものである。
　棟綱はあくまでも上杉家の力によって信濃復帰を計画しているのだと小次郎はおもった。それで上杉家最大の重臣の膝元へ居をうつそうというのだ。羽尾にいるよりは箕輪のほうが上杉家への距離が近くなる。
「それは、ねがいでれば長野さまは嫌とはおっしゃいますまい」
「小次郎は不満か？」
「不満ではありませんが、このたびの信濃出兵で、上杉家や長野家がどういうものか大体わかりました」
「たのむに足らずと言うのか」
「おおきな信頼は持てません。しかも前回は援軍をおくってくれませんでした。管領家と長野家には限界がござります」
　今までは名家でとおってきたが、とてもこれからはげしい戦乱の世のなかで伸びてゆく家ではないことが小次郎には見てとれたのだ。
「小次郎はそう見るか。されど海野独自では今後信濃にもどることはできぬ。たよるべきところといえば、やはり関東管領しかあるまい」
「はたして関東管領がたよれるでしょうか」
「関東管領はくさっても鯛じゃ」
　これまでも、棟綱と小次郎はこの問題で意見がわかれていた。今回の信濃出兵でかんがえの違いがより鮮明になった。
　小次郎は関東管領に失望し、肚のなかではすでに見かぎっていた。
　棟綱の頭のなかでは関東管領というふるい権威がまだ生きつづけているのだ。
「関東管領にたよるだけでは、信濃復帰ははたせないでしょう」
「どうすればよいとおもう」
　聞かれて、小次郎は返事にこまった。

「わたしはすこし旅にでたいとおもっています」
「旅か」
「ほうぼうあるいて、世の中を見てみたいとおもいます。上野に閉じこもっていただけでは、よい思案や機会にめぐまれないでしょう。今の世ははげしい勢いでかわってきておりますから」
小次郎ははじめて肚のうちをあかした。
「旅もいいが、海野は信濃に復帰しなければならない。それもなるべくはやいうちにだ」
棟綱の年齢をかんがえれば、あせるのも仕方がないとおもった。けれどもあせったとて復帰はむつかしい。
棟綱ははやくその望を実現しなければ、一族がばらばらに四散してしまうと心配しているのだ。
「海野の信濃復帰が簡単にいくとはおもいません。かなりの年月がかかるでしょう」
「年月がかかるほど、望は遠のいていくだろう」
二人のかんがえは平行線であった。
「父上が箕輪へうつるのならば、わたしもうつりましょう。わたしはそれから旅にでます」
小次郎は自分の決意をうちあけたのだった。父子のわかれは仕方がないと小次郎はおもっていた。

## 鶴姫

翌年。
海野一族郎党は羽尾から箕輪に移住した。
むろん小次郎も約束どおり同行した。
箕輪城は関東最大をほこる城で、小次郎はその規模のおおきさと堅固な構えにおどろかされた。郭は並郭式に櫛比した構造で、各郭をわかつ堀は深さ十間、幅十数間もあり、それに比例した高さの土塁をめぐらせてある。
しかも業政はこの箕輪城を中心に半径約一里の地域に十数の支城や出城をきずいている。そして群馬郡の豪族十四人に自分の娘をとつがせて姻戚関係をむすび、上野一円に不抜の勢力を確立しているのだ。
その業政がみずから棟綱、小次郎をむかえ、城内の木俣郭に案内した。二の丸をへだてたこの木俣郭の半分が海野家の居所として用意されたのだ。
「身にあまる光栄にござります。有難きしあわせと存じまする」
棟綱が丁寧に礼をのべたのも当然であった。
「わが城同然におもうて、気ままにお暮しくだされ」
業政は戦陣できたえぬいた六尺になんなんとする体躯と、大ぶりな目鼻、眉、口をしており、半白の見事な髭をたくわえている。彼は国を追われた浪々の一族としてではなく、信濃の名門海野の棟梁として棟綱と小次郎をむかえたのだ。
零落したとはいえ、海野家の支族、分家は信濃、西上野一帯に無数にひろがっている。何百年ものあいだつちかってきた彼等の勢力は抜きがたいものがある。支族、分家にあたえる宗家海野の影響力はいまだうしなわれてはいない。その勢力を抱きこむためにも、棟綱父子を大切



にすることは業政にとって無駄ではなかった。
棟綱は感涙をながさんばかりであった。
「棟綱、長野さまのため、上杉家のため全力をあげて、お役にたちたい所存であります」
「海野家ができるだけはやい時期に信濃へもどれるようつとめたい。管領家へもそのようにはたらきかけよう」
棟綱と業政は意気がつうじ合い、おたがいによろこび合った。
「万端よろしくおねがいいたします」
「なあに棟綱どの、両家はやがて親戚になろうかという間柄だ。遠慮やお気づかいは無用でござる」
業政がそう言ったとき、小次郎は胸にピンとくるものがあった。
業政は小次郎にたいして微笑を見せたが、棟綱はとぼけたように知らぬ顔をしている。
両家は親戚になるという棟綱の言葉がなにを意味するものか。業政は十四人の娘を諸豪にとつがせているが、もう一人手もとにのこしている。十五番めの鶴姫は美貌の名声たかく、業政はことのほか鶴姫を可愛がっていると聞いていた。
小次郎は縁組するとすれば二度目であるが、まだ若い。その上、
〈信濃随一の器量人〉
と評価されていた。
昨年の戦いで、海野家は信濃を追われたが、それでも小次郎の評価はおちていない。いずれいつかは再起するだろうと期待されている。
棟綱と業政のあいだには、小次郎と鶴姫との縁組がはなし合われているようだ。
業政は小次郎を将来の婿だとおもっている節がありそうだ。
(困ったことになった)
と小次郎はおもった。正妻の多津は死んだが、海野平の河原村には海野城落城の前にひそかに城からおとした側妾の明乃と一子源太郎がいる。源太郎は六歳になるが、小次郎の子だということは世間に知られていない。
小次郎には鶴姫と祝言をあげて、業政の婿になろうという気持はなかった。
棟綱が箕輪に居をうつそうとしたのには、こうした理由があったのだ。これは棟綱がしくんだ政略結婚だとおもった。
(親父どのもなかなかぬけ目のない策略家だ)
小次郎は感心したが、その手に乗るわけにはいかなかった。
小次郎の前に、また一つ難問が出来した。
長野家としては、西上野の安定をはかるためにも、隣接する東信濃の静謐が必要である。それを実現するには小次郎を婿にするのがもっともよい手段だと業政はかんがえたのかもしれぬ。
木俣郭におちついた翌日、
「兵庫、おれの縁談について聞いておるか」
小次郎は側臣の夏目兵庫にたずねてみた。
「いえ、聞いておりませぬ。若殿にご縁談があるのでございますか」
兵庫は逆に興味をしめしてきた。
「そうか、兵庫も知らぬか。だとすると、まったく父上の独断じゃ」
棟綱は近臣にも相談なく、小次郎と鶴姫との縁談をすすめようとしているの

だ。

「どなたでございますか、お相手は」

兵庫は聞きつのった。

「わしは知らぬ。父上に聞いてみるがいい」

「左様でございますか。うかがってみましょう」

兵庫はそうこたえた。

数日後、

「縁談の相手がわかったか」

小次郎はふたたび兵庫にたずねた。

「本当に若殿もご存知ないのでございますか」

兵庫は不思議そうに言った。

「本当に知らぬ」

「大殿にうかがいましたところ、おしえてはくださりませんでした。けれども近々にはわかるだろうとおっしゃられました。大体、想像がつきましてございます。大層よきお相手ではございませんか」

と言って、兵庫はにこりとした。

小次郎は兵庫が近々にはわかると言ったのが気がかりであった。

「兵庫、おれと旅にでぬか」

小次郎は言った。

「箕輪をでるのでございますか。縁談はどうなさるのでございます」

兵庫は困惑顔だ。

「縁談などおれは知らん。一切、聞いておらぬ」

「それはこまりました」

「父上が勝手に画策なさっておる。今は縁談どころではあるまい。信濃復帰が先であろうが」

「旅はどちらでございますか」

兵庫はこれにも興味をそそられたようだ。

「諸国だ」

「何の旅でございます」

「世間を見るため。諸国の様子を知るためだ。答はそれでよかろう」

「では、ご縁組は？」

「それは信濃に復帰してからのこと。父上のおかんがえになっておることは順序がさかさだ」

「それほどはやく信濃へもどれますか」

兵庫はおどろきの顔で言った。

「はやくもどらなければなるまい。おれはもどるつもりだ」

「そのお言葉を聞き、うれしゅうございます。たのもしく存じます」

兵庫はにわかに眸をうるませて言った。

兵庫は近臣中の近臣であるから、小次郎の資質、器量をもっともよく知っている一人だ。重代の股肱（ここう）で、小次郎よりも三つ年下である。

「まず信州、甲斐。それから関東、東海を旅したい。一見は百聞にしかずだ」

「同行させていただきます。しかし大殿がおゆるしになられますかどうか」

兵庫はそれを心配した。

棟綱は小次郎を幼いころから掌中の珠のごとく大切にしてそだててきた。小次郎の資質、器量に抜群のものがあったからだが、それを伸ばしていったのは棟綱の薫陶（くんとう）のたまものであった。

棟綱自身もおおきな期待をかけられて棟梁になったが、一族の勢力の挽回はできず、逆に領地を追われる結果になってしまった。人生の盛りを過ぎようとしている棟綱が期待をかけているのは、自分よりむしろ小次郎であった。

小次郎にはそういう父の気持が手にとるようにわかっていた。小次郎なくして



棟綱の信濃復帰策はあり得ないのである。

小次郎は青年期に入ったころには、もう声望、器量ははるかに兄の小太郎幸義をしのぎ、信濃一円から他国にまで聞えた。小次郎と政略結婚をのぞむ豪族もおおかった。このたび業政が棟綱からの縁談にこころをうごかした様子なのは、相手が再婚とはいえ小次郎だからにほかならない。

小次郎は父に旅にでることはうちあけてあるが、棟綱がそれをよろこんでいないことはたしかだ。鶴姫と祝言をあげさせ、小次郎を箕輪に足どめさせようとおもっている節もあるのだ。

「なるべくはやく旅にでよう」

と小次郎が兵庫に言った翌日。

暑い夏の昼下りのころ、

「今から鶴姫さまがご挨拶に木俣郭においでになります」

と近臣の深井棟広が小次郎に言いにきた。

「今から？」

小次郎は二の句がつげなかった。今からでは理由をもうけて延ばしてもらうわけにもいかぬ。

棟綱が先手をうってきたなとおもった。

「姫さまはもうお仕度をなさっております」

棟広は小次郎の心中をほぼ察していた。棟広はおなじ近臣でも、小次郎より十一歳上である。

「承知した」

と小次郎がこたえたのは、今回は見合いというのではなく、海野家父子を箕輪城にむかえての挨拶だとかんがえたからである。

「おうつくしい姫さまですぞ」

と棟広は言ったが、小次郎は聞きながした。

棟広は棟綱のもっとも柔順な忠臣である。棟広が棟綱の意を体しているのは仕方がない。

しばらくして、木俣郭の客の間に、鶴姫が侍女と老女をつれてあらわれた。

小次郎は棟綱とともに、すこし前に客の間にでていた。

「お初にお目にかかります。長野業政の娘、つると申します。このたびは箕輪にご来城くださりまして、ご苦労さまにござります。それに昨年は信濃のお国をはなれられまして、他国でのお暮しをなされ、お気の毒に存じあげます。はやく信濃におかえりになられることを願っております」

鶴姫は棟綱と小次郎にむかって、利発そうなしっかりとした挨拶をした。

夏の正装に薄化粧をほどこした鶴姫は噂にたがわぬうつくしさであった。棟広の言葉は世辞ではなかった。父業政似というよりは、先祖の在原業平の血筋をひいているのだとおもわれた。

「海野小次郎にござります。このたびは長野さまに大変ご面倒をかけ、お世話をこうむることになりました。姫さまにもよろしくお願い申しあげます」

小次郎は父につづいて挨拶した。そのときの小次郎の心中は、想像していた以上の鶴姫のうつくしさと可憐さに新鮮なおどろきをおぼえていた。可憐とはいっても、ただ深窓そだちのけがれない姫君というよりは、賢さを秘めたういういしさと言ってもよい。幼くは見えるが十八歳にはなっているそうである。

「箕輪は関東の田舎でございます。海野さまのおこころをおなぐさめするものとてございませんが、もしご退屈あそばされましたら、つるをお呼びになってくださいませ。上手ではございませんが、いくらか琴や舞いなどをたしなみます。お耳ざわり、お目ざわりになるかもしれませんが、おなぐさみにご披露いたすつもりでございます」
鶴姫は表情もゆたかに言葉をつづけた。
その声や言葉は小次郎の胸にふかくひびいた。たしなみもわきまえもあり、くわえて匂うような高貴な雰囲気につつまれている。初対面ながら、小次郎はこころをうごかされそうになった。
もしこれが見合いの席であったらどうだろうとおもった。あるいはこれが見合いなのかもしれぬ。小次郎はすでに旅にでる決心をしている。いったん旅にでれば、一年くらいでもどってこれるかどうかわからない。長くなれば、鶴姫が小次郎を待っているかどうか疑問である。
ほろにがいおもいが小次郎の胸のうちをかすめた。どうかすると、小次郎の足をひき止めるものがある。
「ぜひとも折あらば、姫さまの琴や舞いを拝見いたしとうございます」
小次郎は折あらばという言葉をことさらつかって言った。
すると、鶴姫がはじらうさまを、棟綱がここちよげにながめていた。棟綱は小次郎が鶴姫にこころをうばわれたと確信しているのだ。自分の計画が功を奏したとおもっているのだろう。
「何時でもお声をかけてくださりませ」
「そのような果報が箕輪に待ちうけておろうとはおもいもかけませんでした」
小次郎の言葉はあながち嘘でも、世辞でもない。
鶴姫は半刻（約一時間）ばかり客の間ですごし、
「小次郎さまもぜひ本丸のつるの部屋におこしくださいませ」
と言って席をたち、客の間をさがっていった。
「よき姫であろう」
鶴姫が去ってから、棟綱はさりげなく小次郎に言った。
「かほどの姫君は関東、信濃はおろか、東国をふくめて、そうはいらっしゃいますまい」
棟広が棟綱へこたえた。
「そのとおりかとおもいます」
小次郎はこたえた。それが実感であるし、そうこたえねば棟綱がよけいな心配をするからだ。
それから数日後の朝、小次郎は早おきをした。暁のうちからおきた。
兵庫も同様である。
旅の仕度は前夜のうちにしておいた。裁っつけ袴に菅笠、草鞋姿で箕輪城をでた。
「朝あるきをいたしてくる」
城の門番にそう言いのこして、碓氷峠へむかった。
「まず信州でございますか」
「なんと言っても小県郡、とりわけ海野平が気がかりだ」
小次郎は最初にこれから取りかえすべき海野の地、それから滋野一族が長年住みついていた小県郡の今の様子が知りたかった。
「若殿、こころのこりはございませんか」
しばらくあるいてから、兵庫が聞いた。



「ないわけがあるまい。父上の行く末が気になる。あくまでも管領家、長野家をたよりに望を達するおつもりであろうが、まずそれは無理だろう」
「管領家、長野家をたのみといたしておられましょうが、大殿の作戦の中心にあるのは若殿でございましょう。若殿がおいでにならなければ、大殿の作戦は何もなりたちません。なるべくはやく大殿のもとにおかえりになってさしあげることが肝要かと存じます」
兵庫は今から帰国についてかたった。
「何を言うか、おれの帰国はいつになるかわからんぞ。二年も三年もかえらぬかもしれぬ。兵庫は今から里ごころがついておるのか」
小次郎は兵庫をふりかえって言った。
「大殿は若殿をたよりになさっておられます。大殿がお気の毒です」
「おれがいなくても、一族郎党がついておる。それほどに気のよわい親父どのではあるまい。おれは諸国廻国がおわらなければ、かえらぬ」
「姫君もお待ちでございましょう。縁談がすすんでいる様子でございます」
「親父どのと長野さまのあいだでな」
豪族の婚姻といえば、ほとんどすべて政略結婚である。一族の安全と勢力の拡大などを目的として豪族の結婚はおこなわれる。しかもそれは大部分が当主間の意志で決定される。当人同士の意志で縁組がおこなわれることはまずない。
「すばらしい姫君だとおもわれますが」
「おれも同感だが、海野家は長野家とはなれられなくなろう。管領家の臣下になることもおなじだ」
「それでは不足でござりますか」
兵庫は一歩ふみこんで聞いてきた。兵庫は小次郎の真意をこのところさぐっていたのである。
「兵庫も知るとおり、管領家はいささかもの足りぬ。不足かどうか見さだめるために、諸国の様子や諸豪の力をはかりたい」
「それは同感でございます」
海野家が信濃に帰国し、旧領を回復するには独自の力だけでは困難である。信濃には古来いくつもの豪族が割拠しており、周囲諸国にはより強力な戦国大名がそだちつつある。海野は一族の再興のためにどうしても周囲の有力な戦国大名の力を借りなければならない。今はその選択が大切なのである。
この選択をあやまれば、旧領回復、一族再興の望はついえるばかりでなく、全滅の危機にさえおちいる。小次郎が長野家や管領家に万全の信用がおけないのは、こうした理由である。
「追手はこぬか。兵庫、背後をよく注意しろよ」
棟綱がもし小次郎の旅だちに気づけば、つれもどしにくるかもしれぬとおもったのである。
「こぬようでございます。大殿は若殿の意図を知ってでございましょう」
兵庫は背後を見て言った。
「さあ、知ってか知らずか。親父どのの管領家崇拝は死ぬまでなおらぬだろう」
「無理もござりません。大殿のおそだちになった時代は管領家の全盛時代でございましたから」
「それもそうだ」
「若殿が旅にでていらっしゃるあいだに、鶴姫さまとのご縁談が正式にまとま

るかもしれませぬ」
「そうかもしれぬ」
　と小次郎はこたえた。個人的に言えば、鶴姫は申し分のない再婚の相手である。小次郎も鶴姫にははなはだ好感をいだいていた。鶴姫も小次郎に好感情をいだいてくれているようである。
　だからと言って、小次郎はすぐに鶴姫と縁組をする気持にはなれなかった。鶴姫と縁組をすることは管領家の臣下に組みこまれることだからだ。
　戦乱の世では、縁組はたんに両者、両家のむすびつきを意味するものではない。それより以上の意味をもつものである。
　小次郎も兵庫も健脚である。この日の午後、はやくも碓氷峠をこえた。
　峠のむこうは、信州である。峠に立つと、はるか前方に佐久平がひろがっている。その先に海野平がつづく。
　信濃の天地が小次郎の目前に見える。昨年、落ちのびてきていらい、信濃の地を見るのははじめてであった。
　小次郎の胸にせまってくるものがある。
（あの天地にわが一族はもどれるだろうか。いや、どうしてももどらなければならない。そもそもあの地は滋野一族の住むべきところなのだ）
　と小次郎はおもった。
　白い雲が峠をわたって、勢よく信州の空へながれてゆく。
　風が信州の蒼い大地へ吹きこんでいく。
　小次郎は雲や風になって、信州へ海野一族がなだれこんでいく日のことをおもった。

## 甲斐の虎

　ほぼ一年ぶりに小次郎が足をふみ入れた故地海野平、さらに滋野一族の旧領小県郡には一時、村上、武田、諏訪の三氏の勢力がおよんでいたが、今はほとんど村上氏がおさえていた。
　村上の本拠にいちばん近いうえ、諏訪氏の勢力がややおとろえ、武田氏は猛将信虎が舞台から消え、勢力が後退していた。
「わが海野の地は村上の領土となったか」
　修験道に身をかえて海野平に潜入した小次郎と兵庫は何度も無念のおもいをかみしめた。
　いったん焼けおちた海野城は村上の手で再構築され、戸石城の出城になっていた。
　昨年の合戦のとき五月雨で水があふれ、大河の奔流のように荒れくるっていた神川は、今はおだやかでしずかな流れに変じている。いったん水があふれると荒れくるう神川は〈あばれ川〉と地元で呼ばれているのだ。
　太郎山、大室山、烏帽子岳などの山並はいつにかわらぬ故郷のなつかしい景色だ。
　村上氏の戸石城ははるかに海野平を見おろすように太郎山の峰のはずれにきずかれている。
　百姓たちは昨年の戦火をわすれたように、緑一面の田の草とりにせっせとはげんでいる。目下は平和な光景だが、いったん戦いとなれば、ふたたび田は焼か



れ、ふみにじられる。
　行きかう百姓は修験道姿の小次郎を旧主とも気づかずに、かるく頭をさげてとおりすぎてゆく。
　小次郎はもとより兵庫の口数もすくない。わが手からうしなわれ、人の手にわたった旧領をながめることほどみじめなものはない。
「兵庫、どんなことがあろうとも、どんなことをしてでも、かならずこの地をとりかえし、もどってこよう。そのためにはいかなる苦労や悲しみもあまんじてうけようぞ」
　小次郎は海野の産土神をまつった白鳥神社をもうでて誓った。
　境内には欅の巨木が幾株もたちならんでいる。白鳥神社は昨年の戦火をまのがれたのである。
「わたしも一身がほろぶまで、若殿のお供をいたします」
　兵庫も神社にちかった。
　このあたりの地は、北東の空に特異な山容でそびえる四阿山を霊山とする山岳宗教の聖地であるから、修験道があるきまわったにしても、不審をいだかれることはない。
　烏帽子岳、湯ノ丸山、角間山、高峰山もみな浅間山につらなる火山群で、いかにも神秘的な山岳風景を見せている。
　小次郎はこのときほど故郷の山々や川に切ないほどの愛着をいだいたことはなかった。山河が小次郎にやさしい声をかけてきているような気さえした。山河も海野一族の一日もはやい復帰を待っているように感じられた。
　二人は佐久、小県を半月ほどあるきまわった。そして、
「これから埴科へ入ろう」
　とつぎの予定地をさだめた。
　埴科郡は小県郡の北、雄族村上氏の本拠坂城のあるところだ。
　このころ、小次郎がいちばん関心をいだいていた相手といえば、北信の雄族村上義清である。村上氏と滋野一族は信州において領界を接し、何代も前から抗争をくりかえしてきたが、昨年ついにその勝敗が決した。村上氏は村上天皇を祖とする名族で、当代の義清も戦略、戦術にすぐれた勇将との評判がたかい。
　しかも現在、海野平は実質的に村上氏の勢力下にあるのだから、小次郎は村上義清を当面の敵とかんがえたのである。
　上田から千曲川ぞいに坂城へむかおうとしたとき、背後から早足でやってくる人の足音を感じた。
　まず兵庫がふりむいた。
「何者だ」
　小次郎は前へすすみながらたずねた。
「修験道です」
「そうか。いそいでいるようだな」
　修験道の足がはやいのは当然だが、それにしてもはやい。みるみるうちに追いついてきた。
「お先に」
　後ろからきた修験道が声をかけて、二人を追いこそうとした。
「おいそぎだな。何かござりましたか」
　戦国の世である。いつ、どこで何がおこってもおかしくはない。それに修験道はおたがいに情報を交換し合うことがおおい。
「戦がおこりましたぞ」
　中年のいかつい修験道は言った。それをいずれかの地へつたえに行くのにいそいでいるようだ。

「どちらで」
「甲斐の武田が諏訪へむかって軍を発した。大戦になるだろう」
修験道がそう言ったので、
「武田が諏訪へ？」
いぶかって小次郎は聞きかえした。
武田と諏訪といえば、昨年、滋野一族を追った友軍ではないか。それに武田は昨年、若い晴信が父を駿河へ追いだし、今は自国をかためるために必死なときである。他国に出兵などする余裕はないはずだ。
まして、武田と諏訪は友軍というばかりではない。信虎の娘ねねが諏訪頼重にとついでいる。昨年四月には、ねねは虎王という子をもうけているのだ。ねねは晴信の姉であるから、頼重は姉婿にあたる。
小次郎が不審をいだいたのは当然である。
「信じられぬことがおこっておる。武田晴信は今月十五日甲府を発した。千五百騎、一万五千人におよぶ大軍だ。父を追ったつぎには姉婿の諏訪をほろぼそうというのだろう。晴信というは若いが、大変な男だ」
中年の修験道が言った言葉を小次郎はすぐには信じられなかった。
「それほどの大軍か」
「この目で見てきた。もう武田の軍勢は甲信国境をこえ、信濃になだれこんだ」
「晴信という男、それほどの大将か」
「聞きしにまさる戦の鬼だ。信虎ほどの猛将をいとも簡単に追いだした」
「部下の統率は」
「統率は見事にとれているようだ」
小次郎と兵庫、それに中年の修験道はあるきながら言葉をかわした。
「大したものだ」
小次郎は感嘆した。
信虎が追われ、若い晴信が当主となって武田の力は大幅におちたと一般に見られていたのだ。が、それは間違いかもしれぬ。
「晴信は大した男よ。信虎をしのぐ猛将であることはたしかだ」
「姉婿の領土にとつじょ侵入しようというのだからすごい」
「この勢なら、武田と諏訪では喧嘩になるまい」
「晴信は諏訪をほろぼす気か」
「そのようだ」
小次郎はすくなからず衝撃をうけた。兵庫も同様である。
小次郎の胸の中はおおきく揺れうごいた。晴信という武将はどうやら、今までの常識ではとらえきれない男のようだ。
小次郎の興味は晴信へかたむいていった。晴信という人間を見きわめたいという衝動にとらえられた。
もしかしたら、晴信は世間知らずの大馬鹿かもしれない。我欲にこだわって父を追い、ついで姉と姉婿をほろぼそうとしているだけなのかもしれぬ。
けれども、ひょっとすると、従来になかった天才的な英傑が甲斐の国に誕生したのかもしれないとおもった。
「どうする？」
小次郎は兵庫の顔を見た。
「武田晴信の戦ぶりを見たいものです」
兵庫はこたえた。それは小次郎の心中を言いあらわしたものである。
「晴信の戦ぶりをこの目で見ることができるかもしれぬ」
こんな機会はまたとあるものではない。小次郎の気持はもうきまっていた。こころは南へむいていた。



「諏訪へ行かれるか？」
中年の修験道に聞かれ、
「そういたす。失礼」
小次郎はこたえた。
そして小次郎と兵庫は踵をかえした。
「村上よりも武田だ」
中年の修験道とわかれ、今きた道をもどりながら兵庫が言った。
村上義清よりも武田晴信に鮮烈な印象をいだいたのは仕方がない。
晴信は本当に諏訪家をほろぼそうというのだろうか。それともべつな意図があるのかもしれない。
このまま海野平にもどり、南へくだってゆけば、諏訪にいたる。武田の軍勢を目のあたりにすることができるかもしれぬ。
小次郎と兵庫の足はきたときよりもこころなしかはやくなった。はやく武田の軍を目にしたかった。
小次郎はまだ見たことのない晴信を脳裡にえがいてみた。
晴信の名が世間に知られるようになったのは昨年である。猛将信虎を国外へ追った嫡男がまだ二十一歳だと聞いて、世間はおどろいた。けれども驚きはただそれだけではなかったのだ。
(どのような男であろう？)
小次郎の興味はつきなかった。
(単なる若き暴君か、それともおそるべき英雄か)
小次郎と兵庫は、ひたすら諏訪をめざして足をすすめた。
武田晴信は六月十五日、大軍をひきいて甲府を発し、諏訪をめざして進撃を開始した。
諏訪氏は神代いらい諏訪明神につかえてきた旧家である。鎌倉時代には神党と称して、その一族が幕府で威をふるった。戦国時代に入っても、その伝統的な力はおとろえることなく、諏訪頼満は信虎とたたかい、一勝一敗、ついに和をむすんだ。
晴信はこのたびの諏訪攻めをおこなうにあたって、十分な準備をおこなっていた。晴信はまず諏訪氏の一族で、総領をねらっている伊奈郡高遠城主の高遠頼継にはたらきかけて、これを味方にした。さらに諏訪上社の禰宜矢島満清をもひそかに抱きこんでいた。
これに反して、諏訪頼重は晴信のこうした策謀にまったく気がつかなかった。妻の実家が隣国から攻めこんでこようとは夢にもかんがえていなかったのは、晴信にくらべて頼重に人間的なあまさがあったからだ。
ようやく六月二十四日、上原城において武田の軍勢が侵入してくるという報に接したが、それでも頼重はよもやと半信半疑だった。そのためその後の貴重な四日間を疑心暗鬼のままむなしくすごしてしまった。抗戦の準備をすすめる側近の臣や重臣もいたが、頼重はぎりぎりまで立ちあがろうとしなかった。
二十八日の夜、いよいよ武田軍の侵入が確実になったところで、ようやく頼重は法螺貝や鉦を鳴らして軍兵をあつめた。ところが諏訪氏はこの数年ずっと小笠原氏と戦をかさねていたのと、昨年の小県出陣ですっかり兵がつかれていた。士気もおとろえていた。そのためあつまった軍兵は頼重があてにした数の半分に

もみたなかった。
武田軍は二十九日、富士見の御射山原に陣をおいた。晴信は山中のウズラを捕って料理させるほど、こころにくいばかりに余裕のある進撃ぶりだった。
翌々日、頼重は上原城の南東、矢崎原犬射馬場に出陣した。ここで物見をだすと、武田軍はすでに御射山原を出立し、進撃を開始していた。その軍勢は諏訪勢のおよそ十倍という報告に、頼重は仰天した。
「ことここにいたっては、夜襲を敢行いたすしかありますまい」
諏訪軍の軍議で夜襲策をとなえる者がおおかった。極端に多勢に無勢となれば、夜襲以外に策のたてようがなかった。夜襲となれば、地理にくわしい地元勢に利があることはたしかである。
しかし、ここでも頼重は夜襲の決断ができなかった。結局、この策はとりやめとなった。そして夜に入ってから、諏訪軍は上原城下に退陣した。
翌日、諏訪軍はふたたび犬射馬場まで進出したが、このとき予想もしていなかった事態がおこった。
杖突峠をこえて、とつじょ諏訪軍の西の腹背をついた軍勢があったのだ。
ただでさえ浮き足だっている諏訪軍はたまらなかった。
この軍勢は諏訪側の安国寺門前にいっせいに放火した。折からの強風にのって火は門前に燃えひろがり、音をたててあたりを焼きつくした。
諏訪軍ははじめこの不意の侵入軍がどの軍勢かわからなかった。武田軍の別働隊かとおもった。
ところが風にはためく軍陣の梶葉紋の旗印を見て、はじめて支族の高遠頼継の軍勢とわかって、仰天した。よもや味方のはずの高遠が寝返るとは信じられなかった。
この日は、双方の軍の激突はなかった。小ぜり合いが散発的におこなわれただけで、諏訪軍は上原城にひきあげた。
晴信はなんとも巧妙な大将であった。圧倒的な大軍を擁し、くわえて敵の一族を寝返らせて諏訪軍の側面をおびやかしながら、なおも総攻撃をかけないのである。敵の自滅を待つ作戦のようだ。
この日の両軍の推移を杖突峠から峰つづきの守屋山の頂き附近にひそんで終始見まもっていた、二人の修験道姿の男がいた。
「たまげた大将がいたものだ。侵略する勢は火のごとく、策略はまるで老巧な武将の狡知がうかがえる」
守屋山の頂き附近でそううめいたのは小次郎である。
「末おそろしい武将でございます」
うなずいたのが兵庫である。
二人は両軍の攻防のさまを昨日から今日まで逐一山の上から見とどけていた。
「信虎が追われたというのもわかる。晴信は武田家中をすばやくまとめてしまったのだろう。弟信繁や重臣たちにも一言も文句を言わせなかったにちがいない」
「諏訪頼重も信虎にはともかく、子の晴信にはすっかり油断をしていたものと見えます」
「諏訪にとっては信虎のほうがましであったな」
「この戦の結末を見るまでもなく、名族諏訪はこれで終りでありましょう」
「諏訪郡が武田の勢力となると、大変こまったことになる」



小次郎は一方で感心するとともに、慨嘆するほかはなかった。諏訪郡と小県郡は南北の領界を接しているからだ。
武田氏は新羅三郎義光を祖とする清和源氏であり、鎌倉時代に甲斐守護となり、現在甲斐一国から四隣の隙をうかがう戦国大名に成長していた。
「おそるべき強敵があらわれたものでございます」
これで海野家の一族再興、旧領回復の計画にくるいの生ずる恐れがうまれた。
「しかしまだ晴信がどれほどの大将か見とどけねばならぬ」
小次郎もまだ晴信の将器をはかり得たというのではなかった。武田軍の諏訪攻めを最後まで見とどけるつもりであった。晴信に関して知り得るかぎり知りつくそうとおもった。
その夜、上原城で諏訪一族の軍議がおこなわれた。
「明日、最後の一戦を武田と高遠にこころみて、いさぎよく討ち死にをとげる。それにしても憎き武田、高遠め」
頼重は全滅覚悟の最後の戦いを主張したが、重臣たちは、
「明日、両口から攻撃されれば、諏訪のお血筋が絶えてしまう。桑原城へおつぼみください」
とこぞってすすめた。
「武田、高遠をゆるすことはできぬ。とくに高遠はわが一族じゃ」
頼重はあくまでも決戦、討ち死にを強行しようとしたが、重臣や近臣たちが無理に手をひき、馬の口をとって桑原城にうつらせた。
桑原城は上原城から半里北の、詰めの城である。
頼重一行が立ちのくや、上原城の館は火を発して燃えあがった。
武田軍はそれを見て、すぐさま上原城下になだれこみ、城下町の各所に火をはなって燃やした。
翌朝は桑原城のまわりで小ぜり合いがあったが、日中は攻防がなく、戦場は無気味なしずけさに支配された。が、この日夕方から、にわかに天候が荒れだした。つよい風が吹きだし、大雨になった。
この風雨のなか、頼重は軍勢の配置を検分するために、山頂の本丸から雨具の仕度で山をくだった。すると浮足だっている城兵たちは、
「すわ、殿が城をでられた。取りのこされるな」
とつぎつぎに先をあらそって脱城していった。
頼重が本丸にもどってみると、城はほとんどもぬけのからである。頼重はおどろき、憤激したが、もはやどうするすべもない。
武田、高遠の軍はじりじりと包囲の輪をせばめている。
翌七月四日、頼重はいよいよ討ち死にを覚悟して、兄弟三人、打物をとって、斬ってでようとした。
そのぎりぎりの土壇場に、おもいがけず武田軍から使者がおとずれた。
こころみに頼重が使者に会ってみると、なんと和睦の申し入れであった。この城を開城すれば、異議なく和談して、武田軍は甲斐へひきあげるというのである。
頼重にすれば、ことここにいたって開城するもしないもない。和睦とは狐につままれたような申し入れであった。戦いをつづけるにしても、諏訪にはもうほと

んど人数ものこっていなかった。
　それで頼重はあきらめて、城をあけわたし、武田の軍門にくだった。
　頼重の身柄は甲府へおくられた。そして東光寺に押しこめられ、監視がついた。
　晴信の意図ははじめから、頼重を生捕りにすることであった。和睦の申し入れは詐略であった。頼重はまたしても欺されたのである。
　やがて晴信から頼重に無情な切腹の命令がくだった。
「酒と肴を」
　切腹に先だって、頼重は武田の臣に乞うた。肴は脇差の意味である。
　頼重は酒を一口ふくんでから、腹に脇差をぐいと突きたて、二度引きまわして、最後に胸を深々と突き、後ろにたおれて果てた。二十七歳の無残な最期であった。
「名族諏訪がかくもあっけなくほろび去るとは……」
　諏訪氏の滅亡を目前に見て、小次郎はふかい感慨をおぼえた。その前年に滋野一族が諏訪、武田、村上に領土を追われたのであるから感慨はひとしおだった。
「諏訪の棟梁があまかったのは論外でしょう。諏訪を追いつめ、ほとんど兵をそこなわずに相手をほろぼしてしまった晴信の手腕がすごい。進撃すること疾風、果敢、和睦をもって敵をあざむくこと狡知なる狼のごとし。今までにいなかった大将の器と言えるでしょう」
　兵庫も感嘆しきりである。
「ひどく感心いたしておるな」
「事前にあらゆる手をうち、できるだけ決戦を避け、兵をうしなわず勝利をおさめるのは、兵法、軍略でいうところの謀将でございましょう」
「やがて信濃では高遠も矢島も、藤沢、知久、小笠原なども武田の軍門にくだるであろう」
　小次郎は溜息をもらしながら言った。

## 半月寺

　翌々年（天文十二年）の秋、小次郎と兵庫は、関東小田原の城下、不動山の麓にある半月寺の塔頭に身をおいていた。
　小田原は北条氏の領地であるから、海野家との敵対関係はなく、小次郎も兵庫も修験道の姿はしていない。浪々の武士の姿をしていた。
　一昨年、甲斐の武田晴信の諏訪氏討滅を目前に見て、その後、信州伊奈におもむき高遠頼継、矢島満清の没落を目にし、藤沢頼親が武田軍に攻められて降参したことを聞いた。
　その後、木曽に足をのばし、木曽義昌の統治ぶりを見たあと、小笠原が支配する深志（松本）をまわり村上の坂城をじっくり観察して、今年の秋から小田原にめぐってきたのであった。各地をあるき、領主の統治、領民の暮しぶりを研究し、国力をはかり、地理、地勢、天候まで頭に入れた。いつか役にたつときがあるとおもったからだ。
　小田原の北条氏は伊勢新九郎長氏と称していた北条早雲が延徳三年（一四九一）、堀越公方の子足利茶々丸をころして伊豆韮山にうつり、その後小田原の大森藤頼を追放して、ここを本拠にした。その子氏綱は父の後を継いで小田原城主



となり、上杉朝興をやぶって江戸城をうばい、上杉朝定をやぶり松山城を攻略。後に、下総国府台に足利義明、里見義堯とたたかって勝利し、南関東を制圧し、北条氏の覇権を確立した。
　現在の三代目氏康はその氏綱の子であり、はやくから父をしのぐ英雄の器と噂されていた。小次郎はその氏康の器量、人柄に注目し、興味をいだいていたのである。将来、関東全域に覇をとなえ、信州や駿河にまで進出してくることが予想された。そうなると甲斐の武田晴信、駿河の今川義元とも衝突がおこるとかんがえられた。
　小次郎と兵庫は半月寺を根城にして、小田原城下をあるきまわったり、韮山、藤沢、鎌倉、江戸、松山などへ足をのばしたり、猟をたのしんだりしていた。
　とはいっても小次郎は浪々の身で、領主の保護をうけているわけではないので、身過ぎはけっして楽ではなかった。箕輪城から仕送りがおこなわれているのでもない。兵庫が旅先で托鉢をおこない、二人分の食糧を得てくることもあった。
　半月寺の典客（接待係）の晃運字伝という者が小次郎の生れや身分がいやしくないのを察して、何かと厚遇してくれるのもたすかった。
　今日も午後、小次郎と兵庫が鎌倉からもどってくると、
「小次郎、昼ごろ客があったぞ」
　晃運が塔頭に顔をだして言った。
　晃運は年ごろ四十歳くらいの、瘠せて、背のたかい坊主である。
「客が……」
　小次郎はおもいあたる節がなかった。
「供をつれた立派な武士であった」
　晃運の言葉が小次郎は気になった。
「何者やら見当がつかぬ」
　そうこたえると、
「箕輪からの使いではないのか」
　晃運は何やら聞いたふうなことを言った。
「坊主、おれを知っておるのか」
　小次郎が相手の顔に見入ると、
「知っておるわさ。おぬし、滋野一族の海野家の後継者じゃろう。一ヶ月も見ておれば、見とおしじゃ」
　晃運が得意そうに言った。
「嘘をつくな。今日の客から何やら耳にしたな」
　小次郎は言いかえした。
「見やぶられたか。海野小次郎どのはおいでになるかと言って、客がたずねてきたのじゃ」
　晃運は破顔した。
　わらうと前歯が一本折れた晃運の顔に他愛ない人の好さがひろがる。
「どんな客だ」
「客ははじめ名乗らなかった」
「後で名乗ったか」
「名乗らなくば言付けはせぬとこたえてやった」
　いかにも晃運らしい。
「それで」
「相手は甲斐武田の臣、原隼人正と名乗った。原隼人正ならば、武田家中で聞いたことのある名だ」
　と晃運は言った。
「うむ」
　小次郎はうなずいた。
「原隼人正とは懇意なのか」
「おれが海野小次郎ならば、懇意であろうはずがあるまい」

「それはそうだ。見ず知らずの武田譜代の家老がどんな用でまいったのであろう」
「知らぬ」
「明日になればわかるだろう。明日もう一度くると言っておった」
「そうか、それなら会わずばなるまいな。しかし仇敵の間柄だ」
「よもや、小次郎の首を獲りにきたのではあるまい」
「どうかな。獲りにきたのなら、その前におれが原隼人正の首を獲る」
「いずれ面白き勝負であろう」
「坊主、面白がっておるのか」
「人の命のやり取りじゃ、面白くないはずがなかろう」
「坊主らしくもないことを言う。血なまぐさい坊主め」
「戦国の坊主は血なまぐさくて当然じゃ。今川の大軍師太原雪斎などは名僧ながら一軍をひきいて戦陣で指揮をとるわい」
「明日をたのしみにして待て」
小次郎と晃運とはおたがいに口はわるいが、それはこころをゆるし合っている証拠である。
明日がきた。
昼下りになろうとするころ、編笠をかぶった武士が供を一人つれて、塔頭をおとずれた。
小次郎がでむかえると、武士は編笠をとって辞儀をした。
「武田晴信が家臣、原隼人正昌胤と申す。お見知りおきを。本日は海野どのにご相談があってまいった」
若いが、精悍な武士である。
「海野小次郎でござる」
小次郎は簡単な挨拶だ。武田はあくまでも海野を信濃から逐った相手である。こころをゆるせるはずがなかった。
「主人武田晴信からの命令によって、海野どのの所在をつきとめ、まいった次第でござる。ぶしつけながら、お許しありたい」
原隼人正はきわめて尋常な挨拶である。
「では、お上りください」
小次郎は原隼人正と供を塔頭の座敷にあげた。
兵庫も丁寧に隼人正をむかえたが、隙は見せない。
「一昨年の戦いでは、海野どのに大変お気の毒なことになった。けれどもこれは戦国の習いであるから、お許しねがいたい。当方に恨みつらみはござらぬ」
「こちらとて同様でござる」
小次郎もそう応じたが、負けた側に恨みのないはずがなかった。
「ならば聞いていただきたき用件がござる。むろん用件は主人晴信からのものでござる」
隼人正は折目ただしい態度で言った。
隼人正は原昌俊の子で、譜代家老衆百二十騎持ちで、山県昌景とともに両職をつとめている。武田家竜朱印状の奉者として知られている。
「どうぞお聞かせねがいたい」
小次郎は感情を見せずにこたえた。
「わが主人晴信かねて海野どののご高名を聞き、一度お会いいたしたく存じておりました。拙者、一昨年来海野どののご消息をたずねておりましたところ、最近こちらにご滞在になられておることを聞き知った次第にござる。海野家と武田とのあいだには二年前、戦がございました



が、それも戦国の習いゆえ、いたしかたなきことにござります。なにとぞわが主人の願いをお聞き入れくださりませぬか」
隼人正は生真面目に言った。
「甲斐の晴信公のお耳にわが名が入ったのは、きわめて名誉なことでござる。晴信公の勇名は関東、東海一円はおろか、天下に聞えはじめておられる。若き御大将ながら、大層めでたきことにござる。しかしながら、晴信公が拙者にお会いいたしたいとおっしゃられるのは、いかなるご意図にもとづくものでござりましょう。さしつかえなくば、お聞かせねがいたい」
晴信は年に似合わぬ謀略ふかき大将である。その謀略ぶりは、昨年小次郎が守屋山からほとんど一部始終を見とどけたところである。うかつにすべてを信用するわけにはいかない。晴信の謀略ぶりは徹底しており、血も涙もない。
隼人正はしばし黙った。言うべきかどうか、すこしのあいだ思案した様子である。
「ならば少々、拙者の知りおくところをお聞かせいたそう」
やおら隼人正は口をひらいた。
「かたじけない」
「主人晴信、かねてより海野どののご高名を耳になされ、かくほどの器量人、わが輩下にもてばいかほど幸せかとおおせられておりました。おそらくわが主人の意向はそこらあたりに発するとおもわれます。くわしくは主人晴信よりじきじきうけたまわっていただきたいと存じます」
「左様にござりますか。有難きお言葉をたまわりましたものにござります。さりながら、わが海野はもとより滋野一族の諸家は一昨年、武田、村上、諏訪三氏に攻められ、討ち死にいたした者おおく、生きのこりました者も国を追われ、浪々の暮しを過しております。海野の跡取りが今武田家におつかえいたすこと、おもいもおよびませぬ。恨みをのんで死んでいった者にたいして、申しひらきができますまい。お声をかけていただきました晴信公には感謝いたしますが、面謁をたまわり、武田家に召しかかえられますこと到底無理と存じあげます。晴信公にそうおつたえくださいませ」
小次郎はまようことなく言い切った。
それは当然の返事であった。
戦国の習いであるから恨みはわすれろというのは、勝者の言い分である。小次郎には今でも武田に一矢むくいたいという気持がある。それがあの戦いで討ち死にしていった者への礼節であるとおもった。
「左様でござるか、海野どのがそうおっしゃるのももっともでござる。そのお気持は当然でござろう。されども一昨年の戦にいつまでもこだわられて一生を過されるのも何かとご不自由かと存ずる。昨日の敵は今日の友という言葉もござります。一度おかんがえくださいませぬか」
隼人正は懇願するように言った。
「原どののお言葉も有難く存ずるが、今のところ武田家につかえて世にでようという野心はまったくござらぬ。晴信公にもそうおつたえくだされ」
小次郎はすこしの未練もなく言った。
晴信の器量のおおきさや武将としての卓越さは知りすぎるほど知っている。しかし一族の仇敵に召しかかえられるわけ

にはいかないのが当然である。
　隼人正の顔にはありありと無念の色が浮かんでいる。それはよほど晴信が小次郎にこだわっている証左とも言えた。
「はなはだ残念にござる。何とかおかんがえなおしていただけませぬか。わが主人どうしても海野どのにお会いいたしたいと申しております」
「まことに有難きお言葉ながら、拙者、晴信公にお会いいたす気持はござりませぬ。原どのにはまことに申し訳なきことにござります。おかえりになって、晴信公にそうおつたえくださりませ」
　小次郎は再度拒否した。
　隼人正はやむなく腰をあげた。
「海野どの、わが主人まことに執念ぶかきお方にござる。海野どののお言葉であきらめになられるかどうか、わかりませぬ」
　そう言いのこして、隼人正は塔頭をでて、半月寺を後にした。
「大したものじゃな、小次郎。甲斐の武田晴信に目をつけられるとは。晴信は先のある、有望な大将だ。どうして晴信のまねきをことわった」
　隼人正が去るや、今までどこにひそんでいたのか、晃運が姿をあらわして言った。こころなしか晃運の小次郎を見る目が、今までとちがっているようだ。
「かんがえてみろ、晃運。痩せても枯れても、仇敵の禄が食めるか。海野小次郎そこまで落ちぶれてはおらんぞ」
　小次郎がそうこたえるや、晃運がわらいだした。
「古くさいぞ、小次郎。家を再興し、旧領を回復するのにどうして道をえらぶか。世はそれほどあまくはないぞ。小次郎も晴信の器量は知っておるだろう。小田原の城主北条氏康もなかなかのものだが、晴信はまたとはなき大物だぞ。その大物に声をかけられて、何の不足があって仕官をことわる」
「そう言うのは、晃運が武士でないからだ」
　晃運はわらいながら言った。
「もしそうならば、武士とはなんとこころの狭きものだ」
「武士の意地だ。坊主には武士の気持はわかるまい」
「武士とて人間だ。わしは人間のこころならわかる。晴信をことわって、一体誰につこうというのじゃ。たった一人で海野を再興しようというのか。いずれどこかの戦国大名につくしかあるまい」
　そう言われて、小次郎はすぐに返答ができなかった。たしかに晃運の言うことは一理ある。というよりも真実をついている。
「……」
「返事がもどってこんな。意地だの義理だのにこだわっていたら、世にでることはできぬぞ。大事をなすには、大切なものも時には捨てなくてはならん。捨てるものが多ければおおいほど、得るものも多い。けちな料簡では、この世で大したことはできぬ」
　小次郎はだまって晃運の言うことを聞いていた。
「洒落たことを言うのう、坊主」
「わしは小次郎を大器とおもって言うておる。ちいさな意地にこだわって、あたら大器を無駄にするな」
「坊主、なかなかうまいことを言う」
「そんなことに感心するな。わしの言うことと小次郎のかんがえておること、どちらがただしいとおもう？　誰にでもわかるはずじゃ」
　晃運は遠慮会釈なく言った。
「坊主だけあって、講釈がたくみだ」
「勝負あったな」
　晃運はにやりとわらった。
「晴信に会ってみようか」
　もともと小次郎は晴信の器と将来性をみとめていた。武将としての才腕が抜群であることも知っていた。
「それがいい。おのれをみとめてくれる者は世にそうはおらんはずだ」
「坊主の言うことをきこうか」
「小次郎、ただでは済まんぞ。おぬしが成功し、旧領を回復したならば、わしのために寺を建ててくれ。わしを開山にしろ」
　晃運はまたにやりとして言った。
「よかろう、坊主。そのときは寺を建ててやろう」
　小次郎は応じた。
「わすれるなよ、小次郎」
「わかった、約束しよう」
「当てにしておるぞ」
　晃運はどこまでも本気のようだ。
　翌日、小次郎は兵庫をつれ、晃運に見おくられて半月寺をでて、不動山をくだった。
　むかうは甲斐、甲府。晴信の居館つつじヶ崎館である。
　原隼人正のむかえをことわってしまったため、こちらから晴信のもとへでむくことになった。
　つつじヶ崎館は、信虎がきずいた居城である。平地に一重の堀をめぐらし、その土をもって土塁をあげた。東西百五十六間（約二百八十米）、南北百六間（約百九十米）。四方に堀があり、門は四ヶ所にある。内部は三つの曲輪にわかれ、東曲輪、中曲輪、西曲輪と称する。
　つつじヶ崎の北約一里のところに石水寺山に山城がきずかれており、これは本城にあたるもので、戦時にたてこもるのである。
　小次郎は城門の門番に名乗り、
「原隼人正どのにお会いいたしたい」
とつげた。
　しばらく待つと、隼人正自身がでてきた。
「海野どの、わざわざご足労いただき、恐縮に存じあげる」
　隼人正は先日の無念そうな表情とはうってかわった、さわやかな顔で小次郎をむかえた。
「武田晴信公にご面謁をたまわりたく、まかりで申した。よろしくお取りつぎをねがいたい」
　と小次郎は挨拶した。
「こちらとしてはのぞむところ。よくおいでくださった。早速殿にお会いしていただこう」
　隼人正はよろこんだ。
　小次郎と兵庫は隼人正の先導で中曲輪にとおされた。
　ひろい庭に面した客室で待つことしばし。
　やがて、晴信が近習を二人したがえて入ってきた。
　顔はおもいのほか端正である。が、さすがに眸はおおきく、理性的で、底力のある光をやどしている。顎はしっかりしており、感情に負けない意志のつよさを感じさせた。体躯は骨太であるが、中肉中背である。動作には若々しさがみなぎっている。

「海野小次郎にござります。はじめて御意を得ます」
小次郎は晴信を前にしてふかぶかと礼をした。
晴信はうなずいて、
「その方の高名、以前から耳にいたしておった。本日会えてまことにうれしい」
案外卒直な言葉を吐いた。晴信は八歳年下である。
「武田晴信公の令名、以前からうけたまわっておりましたが、お会いできる機会があろうとは夢にもおもうておりませんでした」
小次郎が言うと、
「左様であろう。武田はその方にとって仇敵にあたる」
晴信はさらりと言ってのけた。
今仇を討つ気があるなら討てぬことはないと小次郎はおもった。
その瞬間、晴信の眸が小次郎の胸中を見すかすようにひかった。
「世は戦国でありますれば、合戦の勝敗はいたしかたなきものにござります。弱きがやぶれるは世の運命でございましょう」
「しかし滋野一族をやぶったのは、わが父信虎じゃ。わしはその信虎にかわって甲斐に武田の旗印をたてておる。その旗印を信州においてもたてたい。海野小次郎の力を借りたい」
晴信は若者らしく、単刀直入に切りだした。
「昔はともかく、今の海野は浪々の一族にて、殿にお貸しすべき力もございません」
小次郎はかしこまってこたえた。
「しかしその方、浪々の境涯から身をたてなおし、いつかは信濃海野平を回復し、還住いたす所存であろう」
晴信は小次郎の胸中をくまなく読みとっていた。
「できますれば本望にござりますが、かなわぬ夢でございます」
と小次郎は言った。
「夢はかなえてこそ価値のあるもの。かなわぬ夢は妄想、たわ言ごときものじゃ。小次郎はかならず信濃還住、一族再興をはたすつもりだ。顔にそう書いてあるわ」
「できるならかなえたいものにござります。信濃海野平は、わが先祖代々の墳墓の地でありますから」
「武田における甲斐のようなものだな。小次郎、その方の望み、わしとともに力をあわせてとげる気はないか」
晴信は早々に本心をぶつけてきた。
「まことに有難きお言葉にござります。さりながら、それがし上野箕輪に父棟綱がおり、信濃還住をめざして関東管領上杉家をたよっております。おそらくわが父はそれがしの武田家仕官について反対いたすでございましょう。海野家の者たち、いずれも父とおなじ気持であろうと存じます」
小次郎は自分でも気がかりなことについてのべた。
「海野家を丸ごと召しかかえられれば、それに過ぎることはない。しかし海野家は上杉家とのかかわりがふかく、棟綱どのが一族郎党をひきつれて武田がもとにやってこられるとはおもわれぬ。わしははじめから海野小次郎がほしかったのじゃ。そのほうが何人郎党をつれてまいろうとかまわぬが、わしの目当ては小次郎一人だ」





力のある眸をむけて晴信は言った。その言葉は小次郎の胸に突きささるようにひびいた。よくぞ言ってくれたというおもいだ。
晴信が小次郎と海野一族の生きのこりすべてをかかえこもうとするのだったら、この話は頓挫するしかなかった。小次郎は今でも父との確執が気になっている。この確執がとけることは永久にあるまいとおもっていた。
「有難きお言葉にござります」
小次郎はほっとすると同時に、本当に晴信の気持をうれしくおもった。晴信はあくまでも小次郎自身の器量を買ってくれているのである。
「わしは父の後をおそってわずか二年だ。武田は古き家で、家来、郎党の数はおおいが、信濃や上野でおもう存分にはたらきまわれる家来はおらぬ。小次郎にまず信州先方衆をつとめてもらいたいのが、わしの望みじゃ」
晴信ははっきりと心中をひろげてみせた。
海野家はじめ滋野一族が信濃で長年にわたってつちかってきた実績は根づよい

ものがある。今後信濃全域から上野まで手中におさめようとしている晴信にとって、海野家、とくに小次郎の力がほしくないはずがないのだ。
「それがし、殿のもとにて信州先方衆をつとめたく存じます。全力をもって信濃の地において存分のはたらきがいたしとうございます」
小次郎の心中はきまっていた。若い将来性のある大将晴信のもので、自分の力を十分に発揮してみたかった。
「わしは信濃、上野ばかりでなく、駿河、遠江はおろか、天下をめざしておる。この戦国の世から誰かがでて、天下をしずめなければならぬ。世に多士済々の人物がおるが、わしも名乗りをあげたい。そのためには、そのほうのようなつよき家来がほしい」
晴信の言葉のはしばしに情熱のほとばしりが感じられた。
若いからこそ、自信があるからこそ、これだけ卒直にものが言えるのだろうとおもった。小次郎は晴信の情熱に共鳴するものをおぼえた。相寄る魂である。
晴信の野望のためにはたらき、信州還住、一族再興の自分の望みを達することができればよいと小次郎はおもった。自分と晴信とは性格的にも相性がよいように感じられた。
すでに老朽化した管領家でなく、晴信のような清新な若き大将のものではたらけるのは幸せである。不惜身命のこころ意気で戦陣を邁進していこうという熱情が燃えた。
（どうせ武田家中ではたらくなら、晴信公と一心同体、命つきるまでとことん頑張ろう）
と小次郎はおもった。
晴信に見いだされたことをかぎりない幸せと信じた。
（よくぞ見いだしてくださった）
小次郎も命をかけて晴信を盛りたてようという気持に駆りたてられた。
「殿、よろしくお願いいたします。それがしを召しつかってくださりませ」
素直なこころで小次郎は言った。
「その言葉を待っておったぞ。海野小次郎。武田家中ではたらくに際し、その方、一つなすべきことがあろうかとおもう」
晴信は呼吸を見はからって、そう口にした。
「いかなることで？」
小次郎は何事かとおもった。
「海野の姓をあらためてはいかがじゃ」
武田、村上らに追われて海野は信濃の領土をうしなった。武田を海野の仇敵とおもうのはごく自然である。
小次郎はなるほどとおもった。晴信はキメのこまかさも持った大将である。
「異存はござりませぬ」
小次郎は海野の姓にはとくにこだわらなかった。姓はあくまでも一家、一族の名称にすぎぬ。
「好きな姓をえらぶがいい。やはり海野にゆかりある姓がよかろう」
晴信はかんがえながら言った。
小次郎もかんがえた。海野は自分が名乗らなくても、なくなるわけではない。父棟綱が名乗っている。そうおもうと気持がかるかった。
海野平のいちばん北の位置に真田郷がある。小次郎も幼きころからよく行ききしたところである。真田は滋野一族の名家ながらも、三年前の合戦でこの家が



絶えた。小次郎は以前からそのことを気にかけていた。いずれは再興させてやりたいとおもっていた。今自分がこの姓をつぐのがいちばんよい方法だとおもった。
「真田がよかろうかと存じます」
逡巡を見せずに小次郎は言った。
「真田は由緒ある、よい姓だ。名はわしがつけよう」
晴信も二つ返事だ。
「真田とくれば、名は、幸隆。呼び名は弾正忠ではいかがじゃ。真田弾正忠幸隆。よき姓名ではないか」
「有難くその御名、頂戴いたしまする。本日より真田弾正忠幸隆と改名いたします」
小次郎はさっぱりとした気持で言った。これから世にでていこうとするわが身にとって、海野小次郎の名を捨てるのは惜しくはなかった。かえっておもいきりよくはたらくことができるとおもった。
「姓名をあらためたのならば、いっそのこと家紋もあらためたほうがよかろう」
晴信が言葉をたした。
「まことに左様でござります。家紋もあらためるべきかと」
小次郎はただちに応じた。
海野の家紋は名誉ある月輪七九曜だ。これをどうあらためるべきかかんがえた。
小次郎は瞑目した。
するとおのずから脳裡に、一文銭を三つずつ横二列にならべた六文銭が浮かんだ。
六文銭は六道銭の意味である。
六道とは仏道でいう言葉で、一切の衆生が善悪の業によっておもむく六つの迷界をあらわしている。すなわち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つである。
それに六道銭と言えば、死人を葬るとき棺に入れる六文の銭のことになる。俗にいう三途の川の渡し銭だ。これを武士が家紋とし、旗印にすることは、文字どおり、〈不惜身命〉の道理をあらわす。
「六文銭にいたしとうござります」
今度も迷いなく小次郎は言い切った。
「六文銭とは見事な紋じゃ。六道銭の意だな。見事な武士の覚悟をあらわしておる。それがいい」
晴信は感心して言った。
小次郎も六文銭の紋所は気に入った。
この日の晴信と小次郎の会見は上々の首尾でおわった。

## 出陣

「真田弾正忠幸隆だと？　そんな家来の名は武田家中で聞いたこともないな。おそらくもっともらしい姓名をつけた雑兵であろう」
箕輪城木俣郭の長屋の一室において、望月三郎兵衛は言った。
「雑兵などではござりませぬ。海野小次郎さまが姓名をあらためて、武田家中に召しかかえられたのでござります。わたしは小次郎さまの命令をうけて、望月さま、別所八郎太さま、生島紋太夫さま、松尾権之助さまをおとずれました」
こたえたのは頭巾をぬいだ修験道の蓮華坊である。
「小次郎さまが武田晴信につかえられた

と？」

望月三郎兵衛は信じられぬ表情で問いなおした。

「左様でございます。小次郎さまは武田晴信公におつかえになり、只今、甲府つつじヶ崎におすまいでございます。小次郎さま、いや真田幸隆さまはぜひとも望月さま、別所さま、生島さま、松尾さまらをつつじヶ崎にお呼び寄せいたしたく、手前を使いにおくったのでございます」

蓮華坊の態度、顔つきを見れば、それが狂言でないことはあきらかである。けれども三郎兵衛にとっては、蓮華坊の言葉はまことに信じがたきものであった。

「よりによって小次郎さまが仇敵の武田に……。まことなら、太陽が東にしずんで、西からのぼってきたようなもの」

「信じがたければ、ご自分で甲斐つつじヶ崎までおいでになってご覧になられますか。そうすれば真田幸隆さまのお姿がご覧になられるでしょう」

蓮華坊としてはそう言うほかはなかった。

「どうやら本当のことらしい。まことに驚き入ったことだ。小次郎さまが真田弾正忠幸隆さまとは。どういう心底をもって一族の仇敵におつかえなさったのだろう」

望月三郎兵衛はどうしても小次郎の心中を理解しがたいのである。

「それは幸隆さまが一族を再興し、信濃海野平に復帰いたすためでございましょう。そのために武田晴信さまにおつかえいたしたものとおもわれます」

「おそらく左様でござろう。小次郎さまがたんに禄高を得るために武田家におつかえいたしたとはおもえぬから」

「幸隆さまは今後、武田家の信州攻略の先方大将となって、第一線でおはたらきになるおつもりのようでございます。そのために何はともあれ信頼のおける部下が必要なのでございましょう。一度幸隆さまにお会いになってくださりませんか」

蓮華坊は使者として幸隆の気持をつたえた。

「お会いいたすのはかまわぬ」

三郎兵衛の口ぶりはおもたい。もしつつじヶ崎で会えば、小次郎の意にしたがわぬわけにはいかなくなるからだ。

「わたしとご同道くださいますか」

「別所、生島、松尾諸氏と相談いたそう。いずれも小次郎さまについていくのに異論はなかろうが、武田晴信につかえることに異論がござろう」

「晴信公は幸隆さまがおつかえになった人物ですから、間違いはござりますまい」

蓮華坊はそう言って説得するしかなかった。

「明夜、ふたたびここにきてくれ。そのときはっきりと返事をいたそう」

三郎兵衛はそうこたえた。いずれにしろ自分一人では返答ができなかったのである。

つぎの夜。蓮華坊はふたたび箕輪城の堀をわたり、土塁をこえて、木俣郭にしのびこんだ。

信州の山岳道場できたえた蓮華坊の身はかるく、堀でも土塁でも難なくこえていった。人の目をくらます術もこころえている。発見されて攻撃されたにしても、五人や六人の相手ならば十分にしのぐことができる。

さいわい、蓮華坊は誰に見とがめられることもなく、木俣郭の長屋に到達した。

蓮華坊がでむいたところは、昨夜と同じ望月三郎兵衛の長屋である。

二更、亥の刻、長屋の入口に立って、ちいさくトントンとたたいた。

すると間もなく、音もなく戸がひらいた。

大きな三郎兵衛が立っている。

「約束どおりきたな。あがれ」

三郎兵衛が言った。

入口から二番めの部屋に、別所、生島、松尾の三人が顔をそろえていた。いずれも海野家の股肱の臣であり、とくに棟綱よりは小次郎についていた者たちである。

行灯の明りが部屋のなかを照らしている。

「ご返事はさだまりましたか」

蓮華坊は下座にすわって言った。

「小次郎さまのご命令とあらば、つつじヶ崎でもどこへでも行かねばなるまい」

全身に精悍さのにじんだ別所八郎太がみなを代表するように言った。

「ほかのご三方にご異存はございませぬか」

蓮華坊が三郎兵衛、権之助、紋太夫の顔を見まわすと、それぞれ三人はうなずいた。

「全員同行いたすこととした。ほかの臣はどういたす」

八郎太は聞いた。

「幸隆さまはいずれ、もっとおおくのご家来をつつじヶ崎にまねかれるおつもりと存じます。とりあえず、この四方をおまねきいたして、武田家において真田の基礎をきずくご決心のようです」

「武田家において、小次郎さまはいかがおすごしになっておられる？」

今度は三郎兵衛が言った。

仇敵の根城に乗りこんでいった小次郎の真意がどんなものであるか、つかみ兼ねているのだ。小次郎は仇討ちのために武田家臣になったという憶測もまだある。その小次郎を武田家がどのようにむかえ、待遇しているかも気になるところであった。

「幸隆さまはつつじヶ崎でいともすこやかにお過しになられております。晴信公との折り合いはきわめて良好でございます。しかし家来たちのなかには、幸隆さまをこころよくむかえてないむきもあるのは、いたし方ございません。されども幸隆さまは一向気になさっておる節もござりません。やがて戦場のはたらきで武田家中の信頼をかちえてゆかれるおつもりでございましょう」

蓮華坊は言った。

「大殿にうちあけることはできまい。さればわれら箕輪の城を脱城いたすことになる」

やや小柄な松尾権之助が口にした。脱城する者にたいしては、味方であろうと討手がかけられるのは仕方がない。

「覚悟いたすしかあるまい」

「そうなったら朋輩をたおしてでも、つつじヶ崎へ行く」

三郎兵衛と八郎太はすっかり覚悟をきめたようだ。

「それではつつじヶ崎にてお待ちいたしております」

そう言って蓮華坊は長屋をでていった。

蓮華坊はただちに甲府にもどって、幸隆に首尾を報告した。

「左様か。箕輪ではまだおれが真田弾正忠と名をかえたことも、武田家に召しかかえられたことも知らぬ。おそらく四人はうまく脱城いたしてまいるだろう」
と幸隆は予測していた。棟綱はまだ家来たちの脱城を心配していないからだ。
海野の家来四人が何人かずつの郎党をつれて箕輪からつつじヶ崎に居をうつせば、この後もそういう者がふえるだろうと幸隆は予測した。この問題について父子ではなし合うつもりは幸隆にはなかった。父が断じて幸隆の武田家への仕官をゆるすはずがなかったからである。はなせば、父子のあいだで血の決着がつけられることになるだろう。
「もう一つ、報告がございます」
このとき蓮華坊は言った。
「何か」
幸隆はややけげんなおもいをした。幸隆は蓮華坊に命令した用件は一つだったからだ。
「箕輪城において、若殿と鶴姫さまとの縁談がととのったようでござります」
蓮華坊はおもいがけぬことを口にした。
「おれの縁談がととのったか……」
幸隆はおもい口ぶりで言った。この縁組がきまったことはおもいがけないようで、一方では予想どおりだとかんがえられた。棟綱と業政の意志は以前からさだまっていた。
幸隆は他国へでているが、いつか箕輪城にもどってくるとみなかんがえていたからだ。このまま他家につかえるなど誰も予想はしていなかった。
棟綱は家ごと長野家と一緒になり、管領家をうごかし、信州に出兵して海野平と小県郡を奪いかえす計画をすすめているのだ。策としてはよい策である。今の海野家でかんがえられる最上の策といってもいい。
幸隆はいくらか胸の痛むおもいで鶴姫のことをおもった。
幸隆は父や業政ばかりでなく、鶴姫まであざむくことになった。棟綱と業政は策にやぶれたにしろ、またべつの策をかんがえればよい。両家の縁組がなくても、海野家と長野家がむすびつく手立はある。
が、鶴姫にべつの縁組を用意すればよいかというと、そうではなかった。鶴姫はもうすっかり幸隆にとつぐものとさだめていることがうかがえた。その一途さをおもうと幸隆はどうしてよいかわからなかった。
「若殿が箕輪におかえりになり次第、縁組をむすぶものと言われております」
「困ったことになった」
幸隆は鶴姫に好意をいだいているだけに、困惑をおぼえた。幸隆が武田家に召しかかえられた以上、鶴姫との縁組はほぼ完全にない。武田家と上杉家とは関東および信濃においてきびしい敵対関係にある。
「鶴姫さまの行く末が気がかりでございます」
幸隆が箕輪をでてからもう二年がたっている。それだけ鶴姫は年をかさねていた。妙齢だった鶴姫はすでにその時期を過ぎているのだ。
幸隆は自分のかえりを信じて箕輪城で待っている鶴姫のことを心配した。できるだけはやい時期に幸隆は自分の状況を知らせてやらねばとおもった。
それから十日余りたった夕方、四人の



武士が郎党をつれて、甲府つつじヶ崎にあらわれた。望月三郎兵衛、別所八郎太、松尾権之助、生島紋太夫である。
一行はつつじヶ崎館へむかった。
幸隆の屋敷は館内にはない。武田家の将士の屋敷は居館の四周に配置されている。
幸隆の屋敷は居館の東に位置した。居館の東につつじヶ崎という山があり、その麓である。
「お召しによりまして、われわれ参上いたしました。若殿におきましては、ご健勝にて何よりと存じあげます」
四人は横一列にならんで幸隆に拝謁し、最年長の三郎兵衛が久闊の挨拶をのべた。
「みなの者たちも壮健にて、めでたい。よく箕輪からでてきてくれた。ひさびさに会えてうれしい」
これは幸隆の実感であった。幸隆は四人ぜんぶが箕輪から甲府までやってくるとはおもわなかったのである。武田を仇敵としてにくむ者、棟綱への恩義から箕輪にとどまる者、箕輪から討手に追われてたおれる者、いろいろな場合がかんがえられた。
「真田弾正忠幸隆さま、本日からわれわれ真田家の臣となります。よろしくお願い申しあげます」
別所八郎太が明快に言った。
「その方らにはとつぜんのこととて、戸惑いもあったであろう。このたび武田家につかえて、真田幸隆と名乗ることとなった。そうこころえよ。家紋は六文銭じゃ。六連銭というてもよい」
「六文銭というと一文銭を六つならべた紋所でござりますか。まるで商家の紋所のようでございますな」
八郎太がけげんそうにたずねた。
「六文銭の家紋、旗印は戦場において、敵前で一歩もひかぬ覚悟をあらわすものだ。地獄へまいる閻魔の手形とおもえば間違いないわ」
幸隆が言うと、四人はようやくその意味を察した。
「われら一同、いつにても若殿の馬前にて死ぬる覚悟でおつかえいたします。われら以外にも、若殿におつかえいたしたき者は箕輪に大勢おりましょう。ご便宜のほどよろしくお願いいたします」
「箕輪には父上がおることゆえ、そう大勢ひきとることはできぬが、おいおいのぞみの者にはこちらにきてもらおう」
幸隆はいずれはそうするつもりであった。
「しかし若殿が武田家におつかえなさるとは、われらおもいもよりませんでした」
いちばん若い松尾権之助が口にした。
「晴信公がいちばん将来のある大名だ。今川、北条、上杉とくらべてもすぐれておる。しかも晴信公は信州侵略をかんがえておられる。真田は信州先方衆として、まず信濃へ討ち入る」
「信州先方衆でござりますか」
「信州侵略で真田がめざましいはたらきをいたせば、海野平はわが手にもどることになろう」
幸隆は自信をもって言った。
「左様かもしれません。しかし悪くすれば、武田家につかい捨てにされる恐れもございましょう。生やさしき御大将とはおもわれません」
三郎兵衛が心配して言った。
「たしかにそのとおり。晴信公は生やさ

しき御大将ではないわ。おのれの父すら追いはらい、姉婿を切腹させた非情の大将だ。もしわれらのはたらきが気に入らねば、つかい捨てにされよう。だからこそ、真田の家は六文銭の紋所をつけたのだ。いつにても死ぬ覚悟ではたらけば、勝利はおのずから手に入る」

「左様でござりましょう。いつにても地獄、修羅、餓鬼の道におちる覚悟とは誰にもできるものではございません。この覚悟のできる者はかならずや勝利を得るでしょう」

八郎太はそう言ってうなずいた。

「信州にはわが一族や類縁、知人もあまたとおる。ここを戦場とすることはわれらにとってはなはだ好都合だ。晴信公ごのみの謀略、調略戦が存分にできる」

幸隆は自信をおぼえていた。自信があるからこそ晴信の要請をうけ入れたのだ。

「一年でも、いや一日もはやく海野平をわれらが手に取りもどしとうござります」

無口な生島紋太夫も口をひらいた。

「六文銭の旗印のもとに、われら死を恐れず一丸となってたたかうつもりです」

権之助も感きわまったように言った。

その年が暮れた。

翌年、春早々に、浦野五郎三郎、和田勝之助、丸子(まりこ)重兵衛など五人の海野家の武士が箕輪からつつじヶ崎にやってきて、幸隆の家来になった。

武田家の武士は、原則的にはみな領地を持ち、そこに城をかまえて住んでいる。

だが幸隆の場合はまだ持ち城がなく、出陣の命令もなく、当面つつじヶ崎の屋敷に住んでいた。望月三郎兵衛、別所八郎太なども、おなじ屋敷の長屋に住んでいる。約三千坪の屋敷であるから、箕輪から何人家来がやってこようと手狭になる心配はない。しかし家来が住む長屋や厩(うまや)などの整備はしなければならなかった。

幸隆は家紋はおろか姓も名もかえての武田家への仕官であるから、気持は日々あらたであった。何年かの浪々の暮しから屋敷持ちになったので、気持におちつきがでた。武田家を自分の終生のはたらき場として、晴信とともに乱世を生きぬこうという気概に燃えていた。

その晴信は信濃侵略、平定をめざし、まず上伊奈那の経略に乗りだしていた。武田の信濃経略の拠点は目下は諏訪である。武田の重臣板垣信方(いたがきのぶかた)が諏訪、上原城を再建して城代になり、前線の指揮をとっていた。

四月二日、晴信は信濃出兵をおこない、そのとき幸隆にも出陣の命令がくだった。

幸隆以下は勇躍した。六文銭の赤地の旗印がこのときはじめて地上にひるがえった。

「初陣とはいえ、あせるな。無理な功名はこころがけるな」

真田のはたらき場はいやでもいずれおとずれるのであるから、幸隆は武田家における初陣にはやる家来たちをおさえた。幸隆もひさびさの出陣で、むしろ自分自身をおさえる気持であった。

武田軍は上原城に到着するや、やすむ暇なく翌日、杖突峠(つえつき)に布陣して、高遠城をのぞんだ。

高遠頼継は天文十一年（一五四二）晴信とともに諏訪攻めにくわわったが、その後恩賞が意のごとくでないとして矢島



満清とかたらい、板垣信方のまもる上原城を攻め、下諏訪にも放火していた。そのとき晴信は安国寺前の宮川をはさんで両者とたたかい、これを蹴散らしていた。

今回はそれにつづいての戦いである。武田軍が圧倒的な大軍をもって杖突峠から押しだしていくと、高遠軍はいくらか抵抗を見せただけで、もろくも敗走しはじめた。武田軍が高遠へ進撃を開始すると、高遠城はほとんどたたかうことなく落城した。

兵をそこなわず、できれば威嚇するだけでたたかうことなく敵をやぶるのが晴信のもっとものこのむ戦法であり、その意味では理想的な戦いであった。真田軍もほとんど戦場ばたらきすることなく、敵がやぶれた。

晴信はひきつづいて上伊奈郡の福与(ふくよ)城をとりかこんだ。城主藤沢頼親は一度は武田に降服していたが、高遠頼継と手をくんでふたたび叛旗をひるがえしたのである。

福与城は天竜川の急流にのぞむ天然の要塞であるうえ、藤沢頼親は勇猛な将であり、妻が小笠原長時の妹であるから、長時の援軍が竜ヶ崎山に陣を敷いた。

武田軍は城を包囲して攻撃をしたが、攻めづらいうえに敵は守りがかたく、なかなか落ちない。

落ちぬまま何日も過ぎた。

晴信は辛抱づよく包囲をきびしくして、城が落ちるのを待っている。

そのまま一ヶ月以上が過ぎた。

幸隆は晴信の本陣へでかけて行って、

「福与城がこれほど長い期間籠城戦にたえているのは、竜ヶ崎山のせいでござりましょう。城を攻めおとすにはまず竜ヶ崎山の援軍をやぶるにしくはありませぬ」

と建策した。

晴信のそばには板垣信方がおり、

「よき策だとおもわれます」

と賛同した。

晴信はしばらくかんがえ、

「よし、真田の策をいれよう。信方が出陣せよ。真田も出陣にくわわれ。信方が竜ヶ崎山の正面へ攻め寄せ、真田は山の背後にまわれ」

と命じた。

「承知つかまつりました」

真田の兵は信方の兵を借りても三百そこそこであるから後方にまわって攻めるにはもってこいだ。

その夜、板垣勢と真田勢は高遠城包囲軍のなかからひそかに抜けだして、竜ヶ崎山へむかった。

夜間に進軍をつづけ、作戦どおり板垣勢は山の正面にむかい、真田勢は山の腹背へまわった。

暁、卯(う)の刻前を期して、まず板垣勢が総攻撃にでた。喊声(かんせい)をあげて一気に山の麓へせまった。

呼応して、小笠原軍もうってでた。喊声が双方からおこって、山間にこだました。

小笠原の軍も弱兵ではない。百戦の強者たちが中核をなしている。

暁の山麓で両軍ははげしくぶつかり、白兵戦になった。喊声とともに馬のいななき、蹄(ひづめ)の音、干戈(かんか)をまじえる音が入りみだれた。

攻防はつづいた。しかし、しだいに板垣勢が押されて、麓から押しもどされた。

小笠原勢はきおいたって押しこんだ。

その後は互角の攻防である。

暁闇はしだいに明けてきたが、それにかわって、山霧が一帯をひろくおおいだした。

最前線は敵も味方もない乱戦になった。板垣勢は合印をつけているが、それも霧のためさだかではないのだ。

板垣勢は押されながら、ひきだした。

小笠原勢は勢に乗って追った。

そのころ、竜ヶ崎山の背後で、あらたな喊声がおこった。

ころ合いを見はからって、真田勢が奇襲攻撃にでたのだ。約三百の勢が一度にうってでた。

法螺貝を吹き鳴らし、鉦をうち、喊声をあげて山頂へ攻めのぼっていった。

竜ヶ崎山の山腹に色あざやかな六文銭の旗がひるがえった。

月輪七九曜でない六文銭の旗のもとにたたかうのは幸隆も兵庫もこれがはじめてである。意気があがり、闘志が燃えさかった。

「小笠原の本陣は手薄であるぞっ、大将長時をうちたおせ！」

幸隆は馬上、号令しながら小笠原の本陣めがけて、愛馬稲妻を駆った。

稲妻も幸隆の気持がわかるのであろう。勇躍して敵陣へすすんだ。

兵庫も、三郎兵衛、八郎太、五郎三郎、権之助、紋太夫、和田勝之助、丸子重兵衛らも意気さかんに敵陣へ攻めこんでいった。

霧のなかの敵陣はみだれたち、兵は右往左往している。全軍のほぼ八割方が麓へ駆けおりて行ったため、本陣を守備する軍勢はごくわずかなのだ。

真田勢は丁度いいところをついた。しかも真田勢は全員勇敢である。戦いに飢えていた。功名にも飢えていた。武田家への挨拶がわりの功名もほしいところだ。いくら幸隆がおさえても、いったん戦場にでれば戦いが武士の命となる。

甲冑姿の三郎兵衛、八郎太、権之助、勝之助らが霧のなかを突進し、敵の本陣にせまった。

敵の本陣は腹背をおそわれて、陣をたてなおすことができなかった。霧のなかからつぎつぎに突撃してくる真田軍の様子も数もつかめず、みだれたって四散しはじめた。

こうなるともう、どれが大将か兵かわからないまま、旗は折れ、将兵も馬もたおれていった。体勢をたてなおして反撃する余裕もなかった。

しばらくのうちに敵はちりぢりになった。勝負はあっけなくついた。

幸隆はみずから槍をふるい、敵の兜首を二つとった。

三郎兵衛、八郎太、権之助、勝之助らもそれぞれ兜首の手柄をあげた。

竜ヶ崎山の本陣がくずれたので、板垣勢とたたかっていた小笠原の軍は敗走していった。

板垣勢と真田勢は意気揚々と帰陣した。

晴信は本陣をでて、でむかえ、

「真田弾正忠、あっぱれ。見事な手柄であった。本日の戦功第一である」

と賛辞を惜しまなかった。

幸隆も武田軍での初陣をかざれたことがうれしかった。真田幸隆としての出発はまず第一歩が成功した。

したがう将士たちの損傷はほとんどなく、完璧な勝利をおさめた。将士たちのよろこびも一方ではなかった。



「若殿、戦場で六文銭の旗印を見ると、はなはだ勇気がわいてまいりました。地獄も修羅もこわくないという気分にかりたてられました」

三郎兵衛が戦場の血と汗と埃によごれた顔をほころばして言った。

「この旗印は戦場でよく目だちますし、勇気がふるいたってまいります。不惜身命とはよく言ったものです」

八郎太も兜をぬいで言った。

「竜ヶ崎山がおちたから、福与城はもう持ちこたえられまい」

幸隆は自信をもって、そう言った。

その翌々日、藤沢頼親は武田の軍門にくだり、福与城は焼き捨てられた。

晴信は城の跡を検分し、小笠原の本領筑摩郡塩尻へでて、その領内をあらしまわって甲府に帰陣した。

幸隆も家来たちも、まさに凱旋するような気分であった。

「これで本当に武田家の一員になったような気がいたします。今まではつつじヶ崎にいても、他国に仮ずまいいたしておるような気持でしたが」

屋敷にもどって、兵庫は言った。

武士というのはそういうものである。とくに戦国の武士は武功あってこそ存在をみとめられる。武功なき武士は肩身がせまい。まして新参の武士は、何よりもまず武功をあげることによって、家臣として認識されるといっていい。

とくに幸隆は期待されて召しかかえられたのであるから、よりおおきな武功をもとめられている。幸隆は今回の出陣でまずおおきな荷をおろした。

「晴信公はこれくらいでは満足いたすまい」

「われらとて、これほどで満足はいたしません」

幸隆が言うと、兵庫が黒びかりのした顔でこたえた。

「晴信公は真田が信州の戦陣において獅子奮迅のはたらきをいたすことを期待いたしておる。また、そうでなければ海野平を取りもどすことなどおもいもよらぬ」

「左様でございます。文字どおり不惜身命のはたらきをいたしませねば」

「相当な血をながさねば、海野平はとりかえせぬ」

「晴信公は敵にも味方にもきびしい大将でございます」

幸隆と兵庫は帰国した日の夕方から宵にかけて、ゆっくりとはなし合った。

伊奈から帰国して旬日もたたぬ朝、幸隆は晴信に呼ばれた。

そのとき幸隆はなにやら血のざわめきをおぼえた。

幸隆は居館の中郭に伺候した。

「帰陣早々であるが、近々のうちに海野平へおもむき、真田郷のまもりをかためて、村上の戸石城を警戒せよ」

晴信は幸隆を前にして言った。

幸隆の血のざわめきはいはげしくなった。

海野平は村上と武田の勢力がぶつかり合う一帯であるが、どちらかといえば村上が押し気味である。すぐ近くに戸石城が睨みをきかせているからだ。

真田郷は海野平の北端に位置し、戸石城とは至近距離である。

「うけたまわりました。真田郷のまもりをかためてまいります」

幸隆はこたえた。

「真田郷は、その方の姓の由来の地であろう。海野平の内であるから、地理、人のつながりなどその方以上に有利な者はおるまい。まず松尾城を修築いたし、そこを拠点といたすがよかろう」
晴信は幸隆の旧領に出陣させて、そこで存分にはたらかせようというのだ。
村上は戸石城から南下をねらっており、晴信は小県郡を完全に掌握しようという目論見である。
真田郷は旧真田家が鎌倉時代のころから住んだところで、松尾城のほかに松尾古城、横尾城、根小屋城などの山城がきずかれていた。けれども天文十年の海野平の合戦で松尾城は焼けおち、そのほかの城もいらい放置されたままになっていた。晴信が言う松尾城とは真田城の別称である。真田郷の中心になる城をさしている。
「おおせのとおり、真田郷ならば海野に近く、父祖の代からなじんでおる地でございます。あのあたりでしたら、小道から田の畦道までよく存じております。戸石城の付近も同様でございます。小県のことでしたら、それがしにおまかせくださいませ」
幸隆はそうこたえた。
幸隆が真田郷に派遣されれば、彼がいわば松尾城代ということになる。自分の旧領の近くに復帰するわけではないが、城代として指揮をまかされることだ。
幸隆は勇躍した。
いわば信州先方衆の筆頭におどりでることになる。

## 真田郷

幸隆は真田勢約百人をひきいて、諏訪から和田峠をこえ、丸子の手前の山腹から海野平をのぞんだ。
あとおよそ二百の真田勢は諏訪の上原城にのこしている。一度に三百の兵士をうごかすのは目立ちすぎるので、ひとまず兵を二分したのである。
海野平は周囲を山々にかこまれ、千曲川やその支流にそって平地がひろがっている。丸子、海野、白鳥神社、常田、上田、真田などをのぞむことができる。
幸隆は今回、領主ではないが、真田の城代としてこの地にもどってこられたことに感慨をおぼえて、足をとめたのだ。
「山や川の姿はかわらぬ。領民たちも滋野諸家の子孫がほとんどだ。はやくわれらがこの地に領主としてもどることをのぞんでいるだろう」
三郎兵衛は感慨ぶかげに言った。
「領主としてもどるも、城代としてもどるもおなじではないか」
ある者が不用意にそう言ったが、
「そんなことを申すのはどやつじゃ。城代としてもどるのは、この地が他人ののだということだ。よく分別してものを言えっ」
とたんに八郎太に一喝された。
滋野一族の諸家は平安時代の末期からここに領主として、あるいは牧監、名主として代々住んできたのだから、故地を追われた悲哀はふかいのである。何にも増して故郷への執着、帰郷の願望が強い。
海野平は若草が萌え、木の緑があくまでもあざやかである。牧のいくつかが目にとまる。このあたりは地質がやわらか



く、草も豊富で、馬や牛の放牧に適しており、昔から牧の経営がさかんであった。だから牧監としてさかえた家々がある。
いずれにしろ真田勢は故地をながめて、旧領への復帰の意欲をつよくした。
真田勢は山腹をくだり、丸子にいたった。そのすこし先はもう海野である。
丸子は丸子重兵衛の出身の地である。したがって、ここには重兵衛の親戚や知り合いがいくつもある。
「重兵衛、隊をはなれてよい。会いたい者があれば会うてくるがいい。そのかわり明日中には松尾城にこい。ほかの者たちも同様だ。めいめい行きたいところへ行ってこい」
幸隆はそう言った。
そして幸隆自身も兵庫と八郎太をつれて隊をはなれ、千曲川ぞいに馬をすすめた。
千曲川のながれる先に河原という村がある。川ぞいの村である。
村には百姓家が数十軒ほどある。
幸隆はそのなかで土塀にかこまれたおおきな百姓家の庭先に入っていった。百姓家とはいっても、おおきなところはみな武士であった。農耕をおこないながら戦になると、槍や刀を持ちだして、馬をひいて合戦にでる。この地方では、武士と百姓との区別は以前からさだかでないのである。
とくにここ河原家は代々の土豪であり、海野家にしたがう侍大将格の家であった。
「丹波はおるか」
幸隆は庭さきから声をかけた。
すると間もなく、母屋の広縁に百姓袴をはいた、がっちりとした体格の男があらわれた。
「若殿ではございませんか」
その男からよろこびの声が口をついた。三十半ばくらいの年である。
「みなは達者か」
幸隆は馬を庭の木につないで言った。まるで自分の家にかえったような気分が幸隆の表情にあらわれている。
「源太郎君、昌次郎君、それに明乃、三人とも達者ですごしております。ようこそお見えになられました。母子三人いずれも若殿のおいでをいつかいつかとお待ちいたしております。どうぞお上りくださいませ」
と河原丹波隆正はすすめた。
幸隆が旅装をといて座敷にあがると、
「父上さま、おかえりくださいませ」
と九歳の源太郎と三歳の昌次郎の手をひいた明乃も姿をあらわした。
明乃は幸隆の側妾であり、源太郎と昌次郎は幸隆の子である。そして明乃は丹波の妹である。
幸隆は明乃を見そめて、天文六年、源太郎を生ませたが、棟綱はあくまでも滋野一族の有力豪族の娘か、ほかの雄族の娘との政略結婚をのぞんで、明乃を幸隆の正妻にすることを承知しなかった。
その後、棟綱のすすめで羽尾幸全の娘多津を正妻にむかえたが、わずか二年後には海野平の合戦がおこって、多津は命をおとした。多津の実家羽尾へおちのびるに際し、明乃をつれて行くことができないので、源太郎とともに丹波をつけて河原家にあずけたのだった。
丹波は帰農して、河原村にとどまった。その役目は海野平および小県郡の情報をあつめ、幸隆のもとにおくることで

あった。

源太郎は幸隆の子とは世間に知らされずに、明乃と丹波がそだてた。それにくわえて先年幸隆が海野平にひそかに立ち寄ったさいに次男昌次郎ができたのである。

海野家が羽尾におちたとき、丹波とともに帰農して故地にのこった者は何人もいる。彼等はいずれも農耕をしてくらしながら、幸隆の子をまもり、敵状の探索をつづけていた。

武田、村上、上杉などの力が拮抗して影響をおよぼす小県郡の情勢には微妙なものがあり、目がはなせないのである。まして旧領に復帰しようとする幸隆のためには、故地にのこった者たちのひそかな活動が必要であった。彼等と幸隆との連絡には蓮華坊など滋野一族の修験道や忍びの者があたった。

「父上さまにご挨拶をなさい」

明乃にそう言われても、昌次郎にとって幸隆ははじめての対面なので、当然実感はなさそうである。

「ちちうえさま、おかえりなさいませ」

昌次郎はなんとか挨拶したものの、その後の言葉はつづかない。

源太郎はいかにも幸隆になつかしげな眼差をむけ、

「おなつかしゅうござります。ようこそおかえりになられました。ごゆるりとお過しくださりませ」

利発そうな挨拶をつづけた。

「とつぜんこの地にくることになった。長くはおられぬがお前たちの元気な顔を見られてうれしい。父はいずれはこの地にもどるが、それまでは母上と丹波の言うことをよく聞くのだぞ」

幸隆は幼い兄弟にむかって言った。

「はい、父上のおおせにそむかぬよういたします」

源太郎は幸隆の眸から目をそらさず、健気にこたえた。

「源太郎と昌次郎はやがて滋野一族の宗家をつぐ武士になるのだ。心身をきたえ、武芸の稽古も油断なくいたさねばならぬ」

幸隆は源太郎にむかって言った。

「はい、父上に恥じぬ立派なつよい武士にきっとなります」

源太郎は精悍にひきしまった幸隆の顔をまぶしそうに見てこたえた。

明乃にはこの場では何も言わなかった。

明乃もここでかくべつなことは口にしなかった。

幸隆は明乃を正妻にしてやれなかったことにたいし忸怩たるものをずっとおぼえていた。けれども海野平の豪族として棟綱のいうことにも理解ができた。武士の棟梁というものは一族の運命をになって、ひたすらつよく、おおきくこの世を生きてゆかなくてはならない。そのためにあらゆる手をつくさなければならない。結婚し、子供をつくることもその一つである。いくら人間としてただしく生きようとも、ほろぼされ、放逐されたりしては武士の棟梁としての意味がない。

幸隆は今後真田家の棟梁として、かつての海野一族や滋野氏を復活させるべき宿命をになっている。今息子たちや明乃につらいおもいをさせているのもそのためである。

「源太郎や昌次郎にははやくつよい武士になって、父のたすけになってもらいたい」

幸隆は本当にそうおもっていた。つよい息子をそだてることは一族を次代につなげる道である。つよい家来をたくさんやしなうことも大切であるが、つよい息子をそだてることは一族のためにもっと大切だと信じた。

つよい息子をそだてれば、さらにすぐれた孫がそだつ。戦国の世に一族の血筋をまもり、家をおこし、興隆させていくには単純なようだが、それがもっとも基本的な方法だと幸隆はかんがえた。だから源太郎、昌次郎にはおおきな期待をいだいているのだ。

結婚は政略のためばかりでなく、子孫をながく後世につたえるためでもある。幸隆は真田の家をおこし、五代も十代も後の世に繁栄させたいとねがっていた。これは幸隆ばかりでなく、どんな豪族や大名といえどものぞんでいることである。

家臣団を養成し、つよい一族をつくりあげ、領土をひろげ、できれば天下に名をあげたいと幸隆は野心もいだいていた。それができるかどうかは、武田家における真田のはたらきにかかっている。とくにこの十年間が大切である。この十年間に目だったはたらきをするならば、旧領回復、一族再興の望はかなえられると信じていた。

それがためには犠牲も必要なのである。犠牲なくして成功はあり得ない。

「明乃、すまぬ。しばらく辛抱をしてくれ。源太郎と昌次郎をたのむ」

後になって、幸隆は明乃にそう言った。

明乃はわらってうなずくばかりである。明乃も幸隆を信頼しているのだ。

その一夜をこの屋敷ですごし、翌朝、幸隆は兵庫と八郎太をともなって、真田郷へむかった。

真田郷は山々にかこまれたせまい盆地である。東へは鳥居峠ごえで上野につうじ、西へは地蔵峠ごえで善光寺方面へつうじ、北は菅平、南は海野、上田にいたる要害の地だ。

旧真田家は鎌倉時代ごろからここに住み、滋野一族の一部を形成していた。ところが海野平の合戦で家がほろび、このたび幸隆が真田家をおこした。

そのゆかりの地に入った幸隆の感慨はふかいものがあった。真田郷はさきの合戦で村上氏に焼かれ、松尾城も破却され、そのほか横尾城、根小屋城、松尾古城などの出城もつぶされていた。平安時代からの古い歴史をもつ山家神社も今はすっかり荒廃していた。代々住んでいた百姓屋のなかには疲弊してしまったところもある。

けれどもまわりの自然や風景は幸隆が知っていたころと変りはない。田畑や木々の緑もすこやかである。戦乱のあいだのつかの間の平和を感じることができた。

真田郷の南西面の斜面の道を、幸隆、兵庫、八郎太はのぼっていった。この斜面上に松尾城があった。

のぼるにつれて盆地の周囲をめぐる山並がくっきりとあらわれてきた。ここからは村上氏の戸石城をも指呼の間にのぞむことができる。その戸石城からなだれこんできた村上氏の軍勢に城を焼かれ、一郷を蹂躙されたのである。

頂上の本丸の広さは東西数間、南北はほぼ二十間あった。南側には高さ約一間の土塁がきずかれ、北方には二の丸、三

の丸と段差がつけられてのび、その北側はふかい急涯がおちこんでいる。

人の声がきこえてきた。姿も見えてきた。昨日わかれた真田の勢約百人が本丸にあつまっていた。彼等も海野郷のゆかりの家などに立ち寄った後、今朝方から三々五々ここにあつまってきたのである。

「若殿、お待ちいたしておりました」

浦野五郎三郎がそう挨拶したとき、

「もう若殿とお呼びするのはおかしいな。歴とした真田家の棟梁である。これから殿とお呼びしようではないか」

三郎兵衛が大声で言った。

「望月どのの言われるとおりだ。一家の棟梁を若殿と申しあげるのは間違いだ。本日からあらためたほうがよい」

八郎太もすぐに同調した。

「そのとおりだ。同感じゃ。若殿にご異存はございませぬか」

松尾権之助が幸隆のかんがえをたずねる。

「主をかえ、姓名をかえ、紋所もかえた。呼び方をかえるのも丁度よいころだな」

幸隆がそうこたえると、あたりからいっせいに歓声があがった。

「殿、よろしゅうございました。これで真田家にようやく棟梁がお生まれいたした。気分一新でござります」

「真田郷に入りましたのを機に、われわれも生まれかわった気分でおつかえいたします」

丸子重兵衛、和田勝之助もよろこびの言葉を口にした。

「今日から、この松尾城を再建いたし、武田方の拠点をつくりあげ、村上に対抗いたそう。戸石城の見張りも厳重にいたす。真田郷の守りが完全にできれば、海野平全体が武田方としてさだまる」

幸隆は戦略的意図を説明した。海野平の北端にクサビを打ちこむことによって、武田方の最前線の要塞としようというのである。しかも守りがかたまれば、ここを村上氏攻撃の拠点にすることもできる。

「真田は今真価を問われている。ここで頑張らねば、真田の明日はない。一族再興も旧領回復もできぬであろう」

三郎兵衛はみなに言った。

「望月どのの言うとおりだ。ここで戦功をあげれば真田の名があがる。いつの日かわれわれの望みがかなうだろう。それがたのしみだ」

生島紋太夫も言葉をそろえた。

それにしても、真田家は旧領にもっとも近い真田郷で再起の仕事ととりくめるのであるから幸だった。

数日のあいだに諏訪上原城から約二百の真田勢があつまることになっている。

「まず城郭の整備をいたさねばならぬ。山から木を切りだし、堀を掘り、土塁をきずくことからいたそう」

幸隆は望月三郎兵衛を普請奉行に任じた。

「名誉ある普請奉行をうけたまわります」

それでこの日から普請の下準備がはじまった。

真田家の将士たちはみな、城づくりの工事にたずさわった。幸隆といえども、毎日終日、工事を指揮督励した。

松尾城だけを再建すればよいというものではない。各出城とたがいに関連しあい、つながりあって城の役目ははたされる。したがって松尾城が再建できれば、横尾城、根小屋城、松尾古城なども再建していかねばならなかった。



戸石城では見張りや物見などをだしているはずだから、動静はまもなく敵方に通報されることになるだろう。

そうすれば村上方から攻撃がおこなわれるのはたしかである。

真田方はそれにたいしてそなえねばならなかった。

翌月早々、本丸の物見台ではるか四方を警戒していた真田方の物見は西方神川の流れがきらきらときらめいているのをながめた。神川の流れは、この日はいたっておだやかであった。

神川の流れのむこうに太郎山の峰がつらなり、その後尾の山頂に戸石城がかすむように見えている。神川にちかい田畑には百姓たちの姿が豆粒のようにうつった。

見張りはそれから方向を転じて、北方横尾城、神川の上流、菅平の方面を望遠し、さらに東北方の松尾古城のほうをながめた。見張りはしばらくして、ふたたび西方戸石城のほうへ視線をもどした。

そのとき、神川の流れのほうにまた百姓の姿が見えた。

今度は百姓の人数がふえていた。予想以上のふえ方である。

（……？）

異常を感じて、見張りはもっと近くを見た。意外なほど近くまでその百姓たちはきていた。

十人とか二十人といった数ではなかった。数十人はおろか、百人以上いる気がした。

こんなところにそんな大勢の百姓が一時に姿をあらわすはずがなかった。

「敵だっ、敵の来襲だあ！」

見張りは大声でさけんだ。

さけびながら見張りはなおも人数を概算した。まだぞくぞくと百姓姿の男たちが神川をわたって、こちら岸にやってきている。

雨の日だったら、とても神川の流れをあるいてはわたれないが、今日のように晴れた日には容易にあるいてわたれる。

近くの百姓たちの姿もずっとふえている。百姓姿だからてっきり鍬や鋤をかついでいるのだとおもったが、どうやら槍や刀を手にしている者がおおい。

「敵だ、敵だっ、村上勢の攻撃だぞ！」

さけびながら見張りは鐘をうち鳴らした。

建築や土木工事にたずさわっていた真田の者たちは、おっ取り刀で物見台近くに駆けつけてきた。

幸隆も駆けつけた。

西方をのぞむと敵勢がイナゴの大群のように真田郷に侵入し、松尾城にむかって攻めこんできていた。

はじめは騎馬ではなく、兵のみが百姓に偽装して侵入してきたのだ。そのために西方の見張りが気がつかなかったわけだ。

「弓隊、むかえ討てっ、あわてるな！」

幸隆が号令すると、数十人の弓隊が本丸の下、中腹あたりまで駆けおり、木の繁みにひそんで遠矢をはなちはじめた。

麓には、あらかじめ騎馬隊が伏せてあった。

鉦の乱打によって騎馬隊数十騎が突撃した。

とつじょ真田郷で戦がはじまった。

鉦や法螺貝の音が盆地にひびきわたっ

た。

別所八郎太、浦野五郎三郎、生島紋太夫、丸子重兵衛らのひきいる騎馬隊が村上勢へむかって突撃した。

村上勢は千人に近い兵員であった。

もうすこし発見がおくれていたら、真田郷はまちがいなく村上勢に蹂躙されていた。

村上勢が殺到してきた。

騎馬隊が村上勢に乱入していった。

村上勢はつぎつぎに神川をわたってやってくる。数かぎりなくあらわれるという感じだ。

真田勢が勇敢なのは当然だとしても、村上勢も勇敢である。騎馬隊へむかって一歩も臆せず槍で突きかかってくる。数では圧倒的に村上方が優勢である。伏せていた旗をたて、怒号しながら突進してきた。

しかも真田方の虚をつくように、とつじょとして百騎くらいの騎馬隊が神川の上流のほうからあらわれた。

これで形勢は決定的とおもわれた。真田方は蹴散らされて惨敗をこうむることは目に見えた。

ところがこのとき、上流の田畑の中から不意に黒雲が湧きでたように、真田の弓隊数十人があらわれ、数列にならんで隊伍をととのえた。

第一列が矢を射はなつと、ばたばたと村上の騎馬勢がたおれた。つづいて間をおく暇もあたえず、第二列の弓隊が矢をはなった。これでまた騎馬隊がたおれていった。

第三、第四、第五列の弓隊が順ぐりに矢を射はなったときには、村上の騎馬隊はおよそ半分に減っていた。

しかも、つづいて最初の第一列が前面におどりでてきて、またもや騎馬隊をたおしていった。従来の弓隊の戦法とはまったくことなるものであった。

あざやかな弓隊の連続攻撃によって、村上の騎馬隊はたちまち大打撃をこおむった。のこった騎馬はやむなく後方にしりぞき、さらに神川をわたって対岸へひきあげていった。

これで両軍の勝負はきまった。

村上勢はことごとく神川へむかって逃げだした。

「追えっ、先年の敵討ちだ！」

真田勢は天文十年の合戦のとき、神川のあふれる水に呑まれて死んでいった者もおおく、そのときの恨みをはらすべく、村上勢を神川へ追いおとしていった。

幸隆はかねて、村上勢の襲来を予想して神川の上流に弓隊を伏せておいたのが勝利の因となった。しかも弓隊を数列にわけて、順次に攻撃しては後へしりぞいていくという新戦法がものの見事に功を奏した。

幸隆の軍法、戦術に村上方は恐れをなして、以後なかなか神川をわたって真田郷に攻めこんでこられなくなった。

〈真田郷に幸隆あり〉

幸隆の武名が四隣にとどろきわたった。

## 平尾将監

昨年末、箕輪城木俣郭に異変がおこっていた。

海野家の家来たちが三々五々、脱城し



ていったのである。家族のある者は家族をつれてまで箕輪城をでていった。

彼等の行く先が甲斐つつじヶ崎とわかって、棟綱は激怒した。

つつじヶ崎には小次郎がいる。小次郎が武田晴信につかえたとわかったときほど棟綱が衝撃をおぼえたことはなかった。その報告は小次郎自身から手紙でおこなわれた。

武田といえば滋野一族をほろぼし、海野家を海野平から追った当面の相手であるから、棟綱の怒りはおさまるはずがなかった。くわえて長野家や上杉家をたよって信州に復帰しようとした棟綱の計画は、これでくるった。棟綱は自分は上州の中にたおれたとしても、小次郎がかならず、この宿題をとげてくれると信じていたのだ。

棟綱の衝撃がまだしずまらぬうちに家来の脱城がはじまって、衝撃が怒りにかわっていった。棟綱は家来たちをあつめて、甲斐の小次郎のもとにはしることを厳禁した。もし禁をやぶる者があれば裏切者として討手をかけると宣言した。

しかしその宣言にもかかわらず、家来たちの脱城はつづいていたのである。実際に棟綱は脱城者にたいして討手をかけた。ところがその討手が脱城者とともに箕輪をでていってしまうという事態までまねいた。

ついで今年七月、真田弾正忠幸隆と姓名をかえた小次郎が海野平真田郷の武田家の城代として松尾城におもむいていると聞いたとき、

「これから小次郎を討ちに真田へまいる」

と息まいて、側臣深井棟広にとめられた。

棟綱が本気であるので、棟広は死を決しての諫言であった。棟綱から切腹を命じられれば腹を切るつもりであった。

棟広は窮余の策として、鶴姫に依頼し、棟綱の激情をおさえてもらうことになんとか成功した。

鶴姫は小次郎の正妻になるべき姫であり、業政の最愛の娘であるから、棟綱も拒絶することはできなかった。一応鶴姫の説得をいれたが、棟綱の気持がそれでおさまるはずがなかった。自分がいちばん信頼し、もっとも信濃復帰に期待した小次郎に裏切られたことが、信じられないほどの痛手であった。

七月もおわろうとする暁のころ。

箕輪城の城内の袖門の戸がしずかにひらいて、人影が三つ暁闇のなかに浮かんだ。

門番が二人すすみでて、

「今時分、何用でござる」

と三人にたずねた。

二人は箕輪家の臣で、あと一人は小袖、打掛姿の女である。

「こちらは鶴姫さまにござる。拙者は鶴姫さま付きの吉武光之丞、こちらはおなじく梅村掃部助である。急用あって、姫さまが城下の春日神社までおいでになる。心配は無用である」

と一人が言った。

門番たちは海野家臣の脱城がおこなわれるようになってから、城門の警戒をとくにきびしく命令されていたのである。

「左様でござりますか。失礼申しあげました」

門番はそう返事をしてひきさがった。

鶴姫の城の出入りについてとやかく言う筋合はなかったからである。

三人は鶴姫を中にはさむようにして、城下の方向へおりて行った。

「城門をぬけることはできました。けれどもいつ追手がかかるかもしれません。なるべくはやく城から遠ざかりませんと」

梅村掃部助が鶴姫にかたりかけた。

「その方たち二人には面倒をかけることになりました。つるのわがままとおもうて堪忍してくだされ」

鶴姫にそう言われて、二人は恐縮した。

「姫さまのわがままとはおもってはおりませぬ。姫さまのお気持は十分に察しられます」

吉武光之丞は暁闇のなかで鶴姫の足もとに気をくばりながら言った。提灯は追手の目印になるので持ってきていなかった。それに東の空はもう十分に白んでいた。

昨夜おそく、鶴姫におそるべき決意をつたえられたとき、二人は当然のことながら驚愕した。

「姫さま、殿のお許しがなければお城をでることはできません。拙者どもも殿を裏切ることになりましょう」

掃部助がいさめると、

「つるの気持はもうきまっております。このことは昨日、今日きめたのではありません。いく月も前からかんがえた末にさだめたことです。父にねがったとて、お許しのでることではありません。つるが無断でお城をでてゆくしかないのです」

鶴姫はこころに揺らぐものがないとみえて、落着きはらった態度で言った。

「けれども姫さま、それでは殿がおなげきになられます。おかんがえなおしくださいませ」

光之丞も同様にいさめようとした。

すると鶴姫が胸の懐剣をとり、くるくると紐をといた。

「何と申されようとも、つるの決意はかわりません。どうしても許されぬとあれば、胸をついて死にます。それくらいの覚悟はできております」

鶴姫が懐剣の柄に手をかけて言うと、光之丞と掃部助の表情が凍りついた。

沈黙が双方でつづいた。

「姫さま、懐剣をおしまいくださいませ。われら姫さまのお供をさせていただきます」

掃部助があえぐように言った。

「行き先はどちらでございますか」

想像はつくものの、光之丞が念のためにたずねた。

「信州小県郡真田郷です」

鶴姫ははっきりとこたえた。

「左様でございますか。われらきっと姫さまを真田郷へおつれいたしましょう」

「しかとお約束いたします」

掃部助と光之丞は覚悟をさだめるしかなかったのである。

箕輪城は榛名山の山麓にきずかれている。

一行は城下まで山をくだった。

一行を追ってくる者はいなかった。

城下までくるころには暁闇はすっかり消え、右手の空に榛名山が頂きから麓までの全容をあらわしていた。

鶴姫はふたたび箕輪にはもどらぬ決意をしていた。

こころはすでに小次郎、いや幸隆の妻である。妻が夫の住まうところへおもむくのは当然だというおもいである。



双方の父がさだめたことであるから、今さら父や棟綱に反対される謂はまったくない。問題は幸隆の胸中であるが、鶴姫には自信があった。

自分はこころの底から幸隆を慕っているし、幸隆も自分のことをいとしくおもってくれていると信じていた。はからずも両方の父と幸隆とは敵味方の立場になってしまったが、これは戦国乱世のゆえであって、仕方のないことである。

一行は城下で笠や脚絆、草鞋などの旅の仕度をととのえた。

「姫さま、旅には難儀はつきものでございます。小県郡までは遠くはありませんが、何分にも山道です。それに何がおこるかわかりません」

光之丞が言うと、

「つるが言いだしたことですから、何事がおころうと、弱音ははきません」

鶴姫は覚悟のほどを言葉にした。

鶴姫のこの言葉を聞いては、二人とももう後もどりはできなかった。

「姫さま、まいりましょう。われらが命にかえて姫さまをお守りいたします」

掃部助も光之丞も、どうしても真田郷の幸隆のもとに鶴姫をとどけようという気持になった。

一行はまず安中へむかった。

安中からめざすは東山道である。

東山道を西へむかえば、松井田から碓氷越えである。碓氷峠を越すと、むこうはもう信州佐久である。さらに佐久から小県は近い。

西上野は大体関東管領上杉家の力がおよんでいるが、佐久郡となると複雑な勢力が交錯している。上杉家の被官もおれば、武田家にしたがう豪族もいるし、関東の北条家の影響下にある豪族も蟠踞している。あるいは村上家とつながる豪族もいる。

いずれにしろ安心して道中できるところではない。危険は覚悟しての道中になる。

一行は碓氷峠ののぼり口横川の宿で一泊した。一日あるきとおしても鶴姫はつかれを見せなかった。どんな危険が今後おころうとも、ことごとくそれらを突破して、どうしても真田郷までたどりつこうという決意が鶴姫をささえているのだ。

翌朝もはやくから出発した。

「もう追手はきそうにありませんね」

鶴姫は箕輪の方面を見かえって言った。

「まだわかりません。殿が大勢の追手をだしているかもしれません。それにこれからの道中は山賊やら、群盗の出没も警戒しなければなりませんぞ」

掃部助は一行の気持をひきしめるように言った。

東信濃、西上野一帯は小土豪が乱立しており、武田、北条、上杉などが攻めこむたびに帰順はするものの、兵をひけばふたたび旗色がわからなくなるという状態をずっとくりかえしている。帰順におくれ、攻められて土地を逃亡する土豪などもおり、そういう連中が山中にひそみ、山賊となっている場合もある。彼等は生きるために必死であり、凶暴になっている連中もいるのだ。

女の山越えや山中の旅は危険この上ない。

行くほどに道は急坂となる。しかも坂本からは九十九折りの坂道である。右も左も前方も、峰また峰の連続であ

る。
　鶴姫につかれが見えはじめたので、山駕籠に乗せて山のぼりをつづけた。
　道は昼なお暗き深山のなかをつづいている。
　昼ごろ、ようやく峠にでた。
　峠は上信の国境いである。
　峠の茶屋で昼餉をしたため、休息をとった。
　ふたたび一行が出発し、ようやく山中をぬけ、軽井沢にでたところ、掃部助が聴き耳をたてた。
「どうした梅村」
　言いつつ光之丞も耳をかたむけた。
「聞えるか?」
「うむ、聞える」
　二人はまだしばらく風の音のなかで聴き耳をたてた。
　遠雷のような音が聞えた。
「雷か?」
「ちがう……」
「蹄のひびきだ」
　そう言って二人は顔を緊張させた。遠くから馬の群れが押し寄せてくるような地ひびきが風のなかから聞えるのだ。
「何事だろう」
「戦がおこったのか」
　二人は聴き耳をたてながら首をかしげた。
「騎馬の群れだ」
　掃部助と光之丞は鶴姫をどうしようかと思案した。
　駕籠屋も立ちどまっている。
　そうしている間にも、馬蹄のひびきはしだいに大きくなってきた。こちらにむかって近づいてきていることはあきらかだ。
　やがて東方の浅間山の麓のほうから、こちらにむかって疾駆してくる二、三十騎の騎馬の群れが、もうもうとあがる土煙のなかに見えてきた。
「山賊か、どこかの土豪か?」
　一行はすでに逃げる暇がなかった。あたりは一望の原であるから隠れることもできぬ。
　見る見るうちに土煙と騎馬の群れがつむじ風のように近づいてきた。
　旗や差物をたてていないので、諸豪の騎馬隊でないことはたしかである。
　騎乗する面々は甲冑や具足を身につけていない。
　近づいてくる面々が見えてきた。いずれも不敵な面がまえをした荒くれ者どもである。上半身をむきだしにした者もいる。
　弓や槍や大刀をひっさげて一行めがけて疾駆してきた。
　駕籠かきは駕籠のなかに鶴姫を入れたまま放置し、二人とも今きた道のほうへ逃げていった。
　騎馬の群れは一行の近くまで疾駆し、それぞれ馬から飛びおり、おめき声をあげて殺到してきた。
　掃部助と光之丞はただちに鶴姫の駕籠をかばいながら、抜刀した。
　二人と二、三十騎とでは戦いにならない。しかし命にかえても鶴姫をまもらなければならない二人の立場であった。
　掃部助と光之丞は殺到してくる荒くれどもにむかって、果敢に打ってでた。
　荒くれどもは圧倒的な数で、二人にせまった。
　掃部助はたちまち大刀をたたきおとされ、光之丞は大刀をもぎとられた。
「刃向かえば、命はないぞ」



　荒くれどもはそう威嚇し、駕籠から鶴姫をひきだした。
「上等な獲物だぞ。どこぞの姫君かもしれぬ」
「とんだ上玉だな。身ぐるみはいだだけでも相当な値だ。体はみなで頂戴をしよう」
「顔も体もとびきりだ。白い肌がたまらねえ。ほどよく熟れてるだろう」
　男たちは下卑た笑いを浮かべて、鶴姫の体に触れた。
「者ども、さがるがよい! わらわは真田弾正忠幸隆の妻である。手だしをいたさば、そのままにはおかぬ」
　そのとき鶴姫が男たちの手をはらって、胸に差した懐剣に手をやり、凛然とした声をあげた。
　鶴姫は長野業正の娘とは言わなかった。
　男たちがいったん手をひいた。
「なに、真田幸隆だと。近ごろ小県の真田郷にやってきた武田の武将だな」
「少々手柄をたてたそうだが、女房をひっとらわれたらどんな顔をするかな。存分になぐさんでやろう」
　鶴姫の威しはこの無法者たちにはつうじなかった。かえって男たちを挑発する結果になった。
　掃部助と光之丞が鶴姫をまもろうとはしり寄ったが、
「うごくなっ!」
　男の怒号とともに槍の石突で一撃された。まず掃部助が頭部を打たれて昏倒し、ついで光之丞が腰をはらわれて、地べたにたおれた。
　多勢に無勢で手のくだしようがなかった。
　ほかの男たちも掃部助と光之丞が反撃にでれば、すぐにも打ちのめすか、ころしかねない勢であった。
　勝気な鶴姫も、掃部助と光之丞がたおれるのを見て、顔面は蒼白となり、体がふるえだした。
「真田幸隆の妻ならば、ほかにつかい道があるかもしれぬ。とりあえず砦につれて行ったほうがよかろう」
　このとき荒くれの先頭にたっていた男がそう言いだした。
「頭領の意向を聞こう」
　べつの一人も言った。
「それがいい。砦につれてかえろう」
　ほかの男たちが賛同した。が、上等な獲物をうしなったような顔をして、くさる男もいた。
　鶴姫はたちまち両手をしばりあげられ、男にかかえられて馬の背に乗せられた。
　掃部助と光之丞も同様のあつかいをうけ、両手をしばられて馬の背に乗せられた。
　やがて騎馬隊は三人の捕虜を乗せ、鳥井原から地蔵ヶ原のほうへむかって、土煙をあげて駆け去っていった。
　騎馬隊は地蔵ヶ原をつっきって、さらに南へくだり、日暮山の麓から山腹へむかった。
　日暮山は上信の国境いの山であり、八風山、物見山、熊倉峰、内山峠、荒船山、兜岩山……と国境いの山々が南へつらなる。
　騎馬隊は途中から馬をおり、日暮山と八風山のあいだの山道をすすんでいた。
　しだいに道は急坂となり、山はふかく

なった。
一行は山道をどこまでもすすんだ。初秋とはいえ、山中の残暑はきびしい。
山道はさらにほそくなった。このあたりは、普通の者はとおらない。猟師や樵などの道である。しかし彼等にとっては、とおり慣れた道のようだ。
やがて樵小屋のようなものが見えてきて、そこから牢人ふうの男の姿があらわれた。
その男は合図のように手をあげた。樵小屋ではなく、物見小屋であった。
男たちも合図をおくった。
「獲物か」
男が聞くと、
「分捕り品だ。今日の獲物はなかなかのものだぞ」
騎馬隊の先頭の男が、鶴姫や掃部助、光之丞を指さして得意そうに言った。
さらに数丁、山道をのぼったところに山城のような砦が見えてきた。様子からすると隠し砦のようだ。
一行はその隠し砦の中に入っていった。
砦は本丸のほかに、二の丸、三の丸などの段郭もある。かつてはしかるべき豪族がきずいた山城である。戦にやぶれた豪族が捨てた砦に一行は住みついているのだ。
砦には、まだ二、三十人の男たちがのこっていた。
本丸の建物の中から、大柄な堂々たる風采と面がまえの男が供をしたがえてでてきた。
「真田弾正忠幸隆の妻と名乗る女と、その家来をつかまえてまいりました」
一行の男は主君にたいするように報告をした。ほかの男たちも同様な態度である。
「真田幸隆の妻……。たいした獲物だ」
一同の主君と見える男はそう言った。
その男は佐久平、平尾に領地をもっていた平尾将監頼政という人物である。代々諏訪氏にしたがっていた土豪であるが、天文十一年、諏訪氏がほろんだとき、武田軍におわれて平尾城を捨て、上信国境いの隠し砦に逃げこみ、手勢数十人をひきいて時をうかがっているのだ。
日ごろは山中にひそみ、猟をしたり、畑をつくり、ときに山をくだって農家や武家、旅人などをおそって掠奪し、暮しをたてている。
「殿、獲物はどういたしますご所存で？」
鶴姫をつれてきた男がたずねた。
「滅多に手に入らぬ獲物だ。これならうまくつかえる」
平尾将監はこたえた。一つの意図が浮かんだからである。
家来たちは、将監がまず女の獲物を手なずけ、それを後で自分たちにさげわたしてもらうことをのぞんでいる。今まで、そうした例が何度もあった。
ところが今回はそういきそうもない。
主君将監が一人占めしようとかんがえているのかもしれぬと家来たちはうたがった。
将監は掃部助と光之丞をあらためてしばりあげ、本丸の食糧倉にとじこめた。
そして鶴姫一人を自分の部屋に呼んだ。
将監は本当に鶴姫が幸隆の妻かどうかをたしかめたかったのだ。



はたして、将監の前にでてきた鶴姫は、
「わたしは真田弾正忠幸隆の妻です。無礼な振舞はゆるしませぬ」
とこたえた。
鶴姫の態度に将監は嘘ではないと信じた。言葉や物腰、なによりも気位の高い、誇りにみちた振舞で将監は間違いないとおもった。
「幸隆のもとへでかける途中か」
将監がきくと、
「左様でございます。真田郷へまいる途中です。どうかここからだして、真田へまいらせてください」
鶴姫は臆することなくこたえた。
「そうか、かんがえておこう」
将監はそう言い、鶴姫をひとまずさがらせた。
鶴姫は将監の部屋とおなじ棟の一室にとじこめられた。
それから何日かが過ぎた。
鶴姫は掃部助や光之丞がどうなったかおしえられなかった。
ある朝、とつぜん将監が鶴姫のいる部屋に入ってきた。
鶴姫が身をかたくし、もし振舞におよばれたら舌を嚙みきって死のうとしたところ、
「これから真田郷へまいる。そなたをおくりとどけに行く」
将監がおもいがけぬことを口にした。
鶴姫が半信半疑で仕度をし、外にだされたとき、掃部助と光之丞の姿が見えた。
二人とも元気で旅立ちの仕度をしていた。
鶴姫は二人の無事な姿を見て、ひとまずほっと安堵した。一時は、ころされてもうこの世にいないかもしれないと案じていた。
将監は馬をひいた二十数人の家来をしたがえ、鶴姫、光之丞、掃部助をつれて隠し砦を出発した。途中で一行は馬に乗り、山をくだって佐久平に入った。
佐久平のとなりはもう海野平である。
一行は小諸にでて、奈良原から地蔵峠へむかった。
途中で鶴姫が気がつくと、将監と数人の家来の姿が見えなくなっていた。
一行が夕方、上信国境いの湯ノ丸高原の山小屋に着いたとき、将監と家来たちは真田郷に入っていた。湯ノ丸山を一つこえると真田郷である。
郷の入口にある男石神社の境内に、幸隆と十人あまりの家来が将監を待っていた。将監が真田郷に使者をおくり、双方の会談が神社境内でおこなわれることになっていたのである。
「お待ちいたしておった。真田弾正忠幸隆である。初にお目にかかる」
兵庫、三郎兵衛を左右にした幸隆が将監をむかえて挨拶した。
「平尾将監頼政でござる。ただ今あるところまで長野業政どのの姫君をおつれいたしておる。できることなら鶴姫君ののぞみどおり、無事に真田どのへおわたしいたしたい」
将監は相手の領地にわずか数人で乗りこみ、恐れる様子もなく交渉をはじめたのだ。乱世のなか、領地を追われながらもしぶとく山中にひそんで時をうかがっている将監のふてぶてしさがうかがわれる交渉である。
「鶴姫君を無事おつれしていただき感謝のきわみにござる。こちらにおわたしい

ただくにはどうすればよろしいか」
　幸隆は将監に条件の提示をもとめた。
　幸隆はもとより平尾将監のことは知っている。が、それは武田家が諏訪をやぶるまでのことであり、それ以後の将監の消息は知らなかった。現在どうしているかもよくはわからない。
「単刀直入に申しあげる。黄金ならば千金。千金が用だてられぬならば、わが平尾一族を武田晴信公に召しかかえてもらえるよう取りはからっていただきたい。聞きおよぶところによれば、真田どのはきわめて晴信公の信任あつき由。真田どのの進言があれば、信濃の出城の一つなりともたまわれるでござろう」
　将監の口からでた条件というのはそれであった。
　黄金千金というのは誰でも手に入れたいものであるから不思議はない。後者のほうの条件は、三年以上ものあいだ領地を追われて、いずれかの地にひそんでいたか、彷徨しているらしい将監にふさわしい。
「本当に鶴姫君かどうか証拠をお持ちでござるか」
　念のために幸隆はたずねた。
「おあずかりいたしてまいった品がござる」
　将監はそう言って、懐中からとりだした品を幸隆へわたした。
　鶴姫が所持していた懐剣である。
　幸隆は懐剣を袋からだしてながめた。金梨子地に長野家の剣花菱の紋を蒔絵にした立派な懐剣である。
　将監は隠し砦を出発するに際して、この懐剣を鶴姫からあずかっていたのだ。
　幸隆は鶴姫が所持していた懐剣に間違いないとおもった。
「千金と武田家への出仕、いずれを希望なされる」
　と幸隆は聞いた。千金をのぞまれると、幸隆としては用だてる途がない。
「できれば出仕をのぞみたい。いかがでござろう」
　将監はこたえた。
　千金は大金であるが、一時のものである。将監も三年以上の隠し砦の暮しにつかれたのだろう。主家諏訪氏を追った武田家につかえようというのは上杉、北条、村上などにくらべて武田家がいちばん将来性があると踏んでのことである。
「承知いたした。話をいたしてみよう。しかしどれほどいそいでも、数日はかかろう」
　現在、晴信はつつじヶ崎にいる。使者をおくるにしろ、幸隆が往復するにしてもそれくらいの日数は必要である。
「ではたのみ入る」
　将監はあっさりと了承した。
　晴信の返事がでるまで、将監は松尾城に逗留することとなった。

## 正妻と側妾

　鶴姫はめでたく松尾城にむかえられることになった。
　武田家に召しかかえられることがきまった将監が湯ノ丸高原から部下とともに鶴姫をつれて入城したのである。
　鶴姫は入城したとき、すこぶる毅然とした態度であった。親を捨て、一族と故郷をも捨て、見知らぬ異郷に勝手にとついできた不安もおそれも感じさせない。



　とつぐとはいっても、文字どおり身一つで家来二人とともにやってきた。女としての決意と覚悟のほどはおどろくほど立派なものだ。
　はじめて城内で幸隆と対面したときも、表情はかわっていなかった。冷静で落着きのある態度であった。
「鶴姫どの、ようこそおいでなされました。道中、大変な難儀に遭ったようでございますが、ご無事でようございました」
　幸隆はこころからあたたかく鶴姫をむかえた。箕輪を脱城してまでよくここまでやってきたと感心した。幸隆は鶴姫の心情にうたれた。
　世は政略結婚ばかりであるが、幸隆は政略をはなれて鶴姫を正妻にむかえる気になったのである。
「本日、つるは幸隆さまへ勝手にとついでまいりました。両親のゆるしも、嫁入りの道具とて何もありませぬが、おゆるしくださいますでしょうか」
　鶴姫の言ったけなげな言葉に幸隆はいっそう感動をおぼえた。
「もともとわれらの縁組は、われらが両親がさだめたもの。天地神明に恥じるところはない。嫁入りの道具など、あっても無くてもおなじこと。この城をわが城とおもうてお過しください。わたしとて、姫さまをめとる用意は何ひとついたしておりません」
　幸隆も素直な気持でうけこたえた。
　城主には奥方というものが必要である。城代といえども、それはおなじである。側妾とは立場がことなる。
　その夕、松尾城内はよろこびに湧いた。
　兵庫、三郎兵衛、八郎太、五郎三郎、権之助、紋太夫、勝之助、重兵衛らの準備によって、形ばかりの祝言がはじまった。両人は、三々九度の盃をかわした。
　結納も常陸帯の祝いもない祝言であるが、幸隆は紋服に裃をつけ、鶴姫は白小袖を着て、本丸の広座敷にならび、酌人は兵庫と三郎兵衛がつとめた。このときも鶴姫は終始かわらぬ落着いた態度であった。
　あまりの落着きぶりに、陪席の八郎太が、
「姫さまは涙の一しずくもお見せにならぬか」
　と小声でつぶやいたものである。
　その夜、幸隆の部屋ではじめて二人だけになり、幸隆が抱き寄せたとき、鶴姫の両肩ががたがたとふるえだした。
　幸隆はどうしたのかとおもった。羞恥と緊張のせいだとすると、ふるえかたがはげしすぎた。なおもひき寄せようとすると、鶴姫はがばと幸隆の膝にくずれ落ちた。それから鶴姫の身をよじるようなはげしい慟哭がはじまった。
　今までおさえていたものがここで一気にはじけたのである。その慟哭はしばらくのあいだ止まなかった。幸隆はそれがしずまるまで、何も言わずに待った。止めようもなかった。
　数日後、将監が家来数十人をつれて、松尾城に挨拶にきた。
「真田さま、お陰さまにて、武田家につかえることができました。ふかく御礼を申しあげます」
　そう言って将監は幸隆の前に両手をつき、ふかぶかと頭をさげた。
　将監は幸隆の願いで、武田家の信州先方衆に任じられた。幸隆が寄親で、将監

が寄子である。
　武田家の軍制は、基本的には寄親と寄子の制である。寄親は部将であり、寄子は部下である。戦時において、寄子はさだめられた寄親の指揮にしたがう。
　先方衆というのは、一族をしたがえた信州や上野の武田家臣の豪族をいうのである。おなじ先方衆であっても、寄親と寄子の関係はなりたつ。
　将監は真田郷の西南、荒井郷の城代に任じられた。荒井といえば村上氏の戸石城にもっとも近隣した地域である。
　幸隆としては将監はこころづよい味方である。いわば、村上氏にたいする前線基地の役割をあたえられたのだ。三年以上も上信国境の隠し砦にこもって野武士か山賊のような暮しをしてきた将監の荒くれぶりが晴信に買われた。
　前線のなかで、幸隆と鶴姫との新婚の日々はつづいた。
　真田方の当面の敵は北信の村上義清である。村上方は戸石城を前線基地として、隙あらば真田郷や海野平に侵入すべくうかがっていた。真田方も物見やスッパをはなって、村上方の様子をさぐっていた。
　双方とも折りにつけて兵をくりだし、小競り合いは絶え間なくつづいた。
　真田郷はつねに臨戦体勢にあると言っていい。
　北信の村上勢のほかに、佐久郡には、大井貞清のたてこもる内山城や、笠原清繁のまもる志賀城が、頑強に武田に抗戦をつづけていた。大井貞清は小笠原一族で、昔からこの地に勢力を張っており、笠原清繁は上杉家との関係がふかく、上杉家の援軍を背景にして武田軍とたたかっていた。
　幸隆は信州先方衆として、この両城をもつねに監視のなかに入れていた。
　そのほか、府中（松本）を根城にした小笠原長時にたいしても警戒をゆるめることはできない。小笠原氏はもと甲斐源氏で、武田信義の弟加賀美遠光が信濃守に任ぜられ、その子長清が伊奈飯田に住んだのがはじまりである。以降南北朝のころから信濃守護として、信濃に根づよい勢力をきずいてきたのである。
　周囲におおくの敵をもつ真田郷でも、松尾城に鶴姫がきたことで城内の雰囲気はかわった。これまで松尾城には女気はまったくなかったのである。幸隆は真田郷の農家から娘を三人えらんで、鶴姫の侍女につけた。城内に女が四人入っただけで、殺伐な空気がだいぶやわらいだ。
　幸隆は城内で鶴姫とむつまじい日々をおくっていたが、それだけではなかった。月に二、三度は城をでて、河原村に河原家をおとずれる。
　そこで明乃や源太郎、昌次郎に会うことも幸隆のこころのなぐさめであった。羽尾やつつじヶ崎にいたころはまったく会えなかったのであるから、真田郷にきてからは家族とのかたらいもたのしめた。
　幸隆のもとに正妻がとついできたことは、明乃の耳にも入っているようである。だが、はじめから明乃は側妾の立場であるから、それについて何も幸隆には言わなかった。ときたま幸隆が家にやってきて、自分や息子たちとの時間をすごせるようになったことだけで幸せだとおもっているのである。
　幸隆は源太郎や昌次郎に武将としての自分の姿を見せ、生き方をしめすことで



息子を教育し、薫陶することができるとおもった。やがては二人とも城内に入れて、生死のなかで日常をともにする日がくることを幸隆はたのしみにしていた。
　二人は妾腹ではあるが、歴とした幸隆の嫡男であり、次男である。真田家の行く末がいつかはこの二人の背にかかってくるのだ。だから、息子たちの教育はなおざりにはできない。かつて棟綱が幸隆におおきな期待を託したと同様に、幸隆も息子たちに期待をいだいていた。
　源太郎は年齢のわりには大柄で、骨太な体である。が、一見茫洋としており、小さなことにはあまりこだわらないたのもしい性格である。
　ふだん父親が家にいないので、河原丹波が武将の息子としてのしつけを怠りなくおこなっている。学問も武芸も丹波が手をとって身につけさせていた。
　昌次郎は生まれながらにやんちゃである。気もつよい。体はやや小柄であるが、成長とともにどうなるかまだわからない。
　幸隆は月に二、三回、息子たちに会うのをたのしみにしている。しかし会ったからといって、やさしい言葉をかけたり、あまやかしたりするわけではない。どちらかと言えば、きびしい父として接している。
　息子たちがすぐれた武将にそだつかどうかは、幸隆にはわからない。人間としての器もまだわからない。そだつものはそだつし、駄目なものは駄目である。
　幸隆には天にいのるようなものがある。駄目であろうとなかろうと、自分の代から息子の代へ、真田の家を託していかねばならない。家は代々ついでいかなければならない。
　戦は勝つも運命、負けるも運命であるが、一族がほろんでは、先祖重代にたいしても申し訳がたたぬ。乱世のなかをたくましく生きぬいて、旧領を回復し、将来おおきくそだってゆくことが一族の棟梁の責任である。
　そのためには自分の力だけがたよりではない。子、孫、さらにその先の子孫たちの力にもたよらなければならない。
　棟綱も幸隆におなじ期待をいだいたろうが、幸隆は棟綱とべつの道をあるきだした。目的はおなじであったが、そのやり方が父と子のあいだでことなった。一族の将来のためには父子がわかれ、肉親ともたたかわなければならぬことがあるという乱世の仕組のせいである。
　幸隆はとりあえずは、つつがなく二人の息子をそだてあげなければならなかった。どうそだつかは時の運と本人次第だ。途中で生命をうしなう悲運も世の中にはある。
　幸隆は自分が父にそむいた生き方をしたために、親子という関係をかんがえることがたびたびあった。自分と源太郎、昌次郎がこの先どのような生き方をするかは予測できない。自分とおなじように、子がそむくこともかんがえられる。が、それはそれで仕方のないことだ。
　それに悪いことばかりが予測されるわけではない。今後、棟綱とのあいだにもどのようなことがおこって、わかれた父子が元にもどっておなじ生き方をするようになるかもしれない。
　すぐれた家来をそだてなければ、その一族はつよくならないが、すぐれた子をそだてることは一族の将来にとってそれ以上に大切である。

そんなおもいで、この夜、幸隆は源太郎と昌次郎との寝顔をみつめた。明乃がかざす行灯の明りのなかで、二人の息子はすこやかにねむっている。

「つよい武将にそだってくれるでしょうか」

明乃がかんがえていることもおなじであった。

「つよい武将にそだたねば、真田の家はほろぶ」

幸隆がこたえると、

「殿のような武将にそだってもらいたいとおもいます」

明乃はそうつぶやいた。

それは明乃の本心からのねがいであり、幸隆への精いっぱいの愛情の告白である。

幸隆も明乃がいとしい。その気持は松尾城に鶴姫をむかえたからといって、かわるものではなかった。正妻は正妻、側妾は側妾である。どちらにも愛情をおぼえていた。それが戦国の武将というものである。

その上、明乃には、源太郎と昌次郎の母だというかくべつな気持がある。自分の息子を産んでくれた者へのかぎりない愛情があった。

明乃は性格も素直で、賢い女である。ひかえめなのは側妾という立場と、臣下の家柄というためもあるだろう。

その夜、幸隆は明乃を抱いた。

二人の子の母でありながら、明乃は羞恥のこころがふかい。おなじ床に入るときは、まるで処女のようなういういしさをうしなわない。

その羞恥をわすれさせ、女のよろこびを開眼させることに幸隆のよろこびがあった。ちかごろ明乃は女のよろこびをふかく感じはじめたようである。昼の明乃と夜の床とでは、まるでべつの女のようだ。

「明乃、もう一人おれの子を産んでもらいたいな」

幸隆は明乃を裸にして言った。

明乃は羞恥で体をかたくしている。しかしその体は幸隆の愛撫でだいぶ感じはじめているのである。それをさとられまいとしているのが、幸隆のこころをより攻撃的にさせる。

「殿がおのぞみになるならば」

明乃は蚊の鳴くような声でこたえた。

幸隆は明乃の腰を抱き、足をひらいていった。

二人の子を産みながら、明乃の体はほそい。けれども明乃の体は微妙に娘のころとかわってきている。わずかではあるが肉置きのゆたかさを感じさせるようになった。そのために体の張りと艶がでてきた。

「のぞみを言うなら、まだ二人でも三人でもほしい。明乃の子がほしい」

幸隆が言うと、明乃がぴくんと体をふるわせた。

幸隆が明乃の体の微妙な部分に触れたからである。

「わたしも、もっと殿の子を産みたい……」

あえぐように明乃がこたえたのは、幸隆の指が微妙な部分に侵入していったせいである。

それから後は、明乃がみだれはじめた。夜が、闇が、羞恥をわすれさせてくれる。

以前ではとてもかんがえられぬ姿勢をとって、明乃は幸隆をむかえた。





秋もおしつまったころ、関東に大きな波瀾がおこってきた。

関東で勢力をきそい合う上杉家と北条家とのあいだにおおきな戦雲がうごきだしたのである。

ことのおこりは、関東管領上杉憲政が扇谷上杉朝定とくんで、北条氏康を一挙に潰滅しようと行動をおこし、駿河の今川義元をもさそった。それで今川家は氏康方の長久保城を包囲した。

その一方、両上杉は武蔵川越城の攻撃にかかった。川越城はもとは上杉朝定の居城だったのを北条がうばったのであった。

この川越城攻撃に古河公方足利晴氏が加担してくわわったので、関東で北条家がまったく孤立した状態にいたった。川越城は上杉憲政、上杉朝定、足利晴氏の連合軍八万の勢にかこまれてしまった。

川越城は果敢に抗戦したが、当然旗色はわるく、籠城が一ヶ月も二ヶ月もつづいた。

そしてこのころ、武田家に今川家から義元の使者がきた。

武田家と今川家とはずっと同盟関係にあった。それで使者は、武田家にも北条攻撃の出陣をもとめてきた。今川が包囲している長久保城に武田家の出陣を依頼してきたのである。

このころ武田家は信濃侵略をめざしていたので、後方に出陣し、上杉家の戦略にまきこまれるのを得策としていなかった。

東信濃で武田家は上杉家の勢力と衝突をきたしていたからだ。信濃で上杉家とたたかい、関東で上杉家を味方するような戦陣にくわわることはできなかった。

が、同盟軍今川はそれを武田家にもとめてきたのである。

武田家の内部は紛糾し、晴信は今川家への返事を遅延させた。晴信の意中は、あくまでも上杉家との戦いにある。まず東信濃から上杉の勢力を一掃したかった。古くから東信濃に影響力をおよぼしてきた上杉家の力はいまだにあなどりがたいものがあり、武田家の進出にたいしておおきな障害となっていたのである。

が、同盟相手の今川家の依頼も無視することはできない。

つつじヶ崎館においても、喧々囂々の論議がおこなわれた。

晴信もただちに結論をくだすことはできなかった。若き果断の将晴信も、おおいにまようところであった。

関東の北条を寄ってたかってたたきつぶせば、今回の作戦の指導力をもつ上杉家がふたたびおおきな力を取りもどす。関東管領というふるい権威が世に跋扈することを晴信はこのまなかったし、武田家の信濃進出の邪魔になることをもっともおそれた。

今川家から二度めの使者がきた。晴信の決断をうながす使者である。

それでも晴信は回答をのばした。

武田家の重臣板垣信方、甘利虎泰なども晴信の意中を解しかねていた。

「どうなされますか殿、今川ではしびれを切らしております」

板垣信方は見かねてたずねた。

「いましばらくなりゆきを見よう」

晴信はそうこたえるばかりだった。晴信はぎりぎりまで情勢を見まもる気持であった。晴信はねばりの武将でもある。果断な武将は忍耐もつよい。守りもつよい。

年の暮れがせまるころ、武田軍はついに出陣し、長久保城の包囲にくわわった。

武田軍の出陣によって、川越城の命運は風前の灯となった。落城寸前の様相が見えてきた。

ところが年があらたまってから、その情勢に変化をきたした。氏康が小田原から八千の軍をひきいて、川越城救援に駆けつけた。

しかし援軍がきたとはいっても、兵力の差は十対一である。尋常な手段では到底、北条方に勝ち目はない。

それで援軍の将氏康は、城を包囲する



足利晴氏や上杉家の部将小田氏などへ使者をつかわし、

「合戦になれば多勢に無勢、勝敗はあきらかです。なんとか籠城の将兵たちの命をすくう手立てはないものでしょうか。おたすけくだされば、川越城は包囲の軍勢にさしあげます」

と嘆願した。

豪勇無双で知られた氏康の弱気なさまに、包囲軍の諸将らは嘲笑をあびせた。

「北条方は臆病風にとりつかれておるぞ。もう勝負はついたも同然だ」

と包囲軍はすっかり勝利気分に浮かれはじめた。

氏康はこのとき、忍びの者をつかって、敵情の変化を逐一報告させていた。敵方に油断が生じ、将兵たちは酒盛りや博打などにうつつをぬかしていることを氏康は知っていた。

日がたつほどに包囲軍の士気はゆるみ、勝利気分はつのっていった。

「ころはよし！」

氏康は日がおちてから、ひそかに出陣。体勢をととのえさせ、まず軽装の精兵をもって斬り込み隊を編成し、夜襲を敢行させたのである。

斬り込み隊は敵陣ふかく侵入し、城兵と呼応して、襲撃につぐ襲撃を敢行した。

暗夜の奇襲に、上杉方連合軍はただあわてふためくばかりで、反撃をくわえる余裕もなかった。

北条軍は勢にのって攻撃をつづけ、ついに八万の大軍を潰走させた。扇谷上杉朝定はこの戦いで戦死し、上杉憲政、足利晴氏はほうほうの体で自国に逃げかえった。

今川義元と武田晴信とは川越には出陣していなかったので、被害をこうむることをまぬがれた。

氏康はこの川越の合戦でさらなる勇名をとどろかせた。

## 志賀城の戦い

天文十五年五月、晴信は信濃出陣の号令をくだした。

武田軍はつつじヶ崎から信濃へ北上し、海ノ口から佐久郡前山城に着陣、大井貞清のたてこもる内山城攻撃の体勢に入った。

大井貞清は、佐久郡大井郷に勢力を張っていた旧族であり、武田家の侵略の前にたちふさがっていた。三年前、武田軍は小県郡長窪城の大井貞隆を攻めて生捕りにしたが、貞清は貞隆の子である。

内山城は断崖絶壁上の本丸を中心に、二の丸、三の丸などの曲輪がかこむような縄張りになっており、馬場の平と呼ばれるところは本丸から断崖の下十数丈のあたりにある。城の水の手は、三の丸北方の下の井戸であり、これが城の生命線だ。

武田軍の作戦はこの水の手をうばうことであった。八日に先陣が攻撃を開始し、十日にははやくも本隊が水の手をおさえた。

水の手をうばわれた山城はみじめである。あとはたくわえてある水と雨水にたよるしかない。

内山城はすぐに落ちるかとおもわれた。が、これがなかなか頑強な抵抗を見せた。折からの梅雨で連日雨水がたま

り、くわえて雨のため山城を攻めるには足場がわるく、城はなかなか落ちなかった。

地の利を利して、城方は寄せ手に奇襲攻撃をかけ、二の丸、三の丸はうばわれたが、本丸はしぶとく持ちこたえた。武田軍は二の丸と三の丸から攻撃をくりかえしたが、城は容易に落ちなかった。

しかしようやく貯水もきれた二十日、城主大井貞清はついに降服し、城をでて、野沢へくだった。

この戦に真田はくわわらなかった。幸隆が内山へむかえば、背後の戸石城から村上軍が攻めてくることがわかっていた。まだ真田郷の守りはそれほど余裕がなかった。

内山の落城によって、佐久郡の諸豪はほとんど武田家にしたがった。唯一の例外が、内山城の北にある志賀城であった。

志賀城だけは内山落城を見ながらも、頑として降服はしなかった。

晴信もこの志賀城攻めを強行せず、この年はいったん甲斐に軍勢をひきあげた。

そして翌年、晴信は〈甲州法度〉と呼ぶ五十五ヶ条の武田家の法律を制定した。戦に勝つためには、まず民心をやすんじ、国を富まさねばならぬというところから、この法度はさだめられた。

父の信虎は勇猛の将ではあったが、民心を得ることには失敗した。晴信は父の失敗を目のあたりに見ていたので、まず民政をこころがけようとしたのである。

五十五条めに、

『晴信が、その行ないなどについて、民心にそわぬことがあるならば、貴賤を問わず、目安（箇条書）をもって申しでよ。考慮をくわえるであろう』

とさだめているところには、若き晴信の自分を律しようとする理想が万民に感じられたであろう。

『乱舞、野牧、川狩等にふけり、武道をわするべからず。天下戦国のうえは、諸事をなげうち、武具の用意肝要たるべし』

という二十条めには、晴信の戦国大名としての自覚がしのばれる。

家臣団の統制、年貢、夫役、訴訟、貸借のことなどがさだめてあり、軍制においては、寄親、寄子の制が制定されている。

幸隆は松尾城において、この〈甲州法度〉にふれ、晴信の若いながらの国づくりについて感心させられた。

さて法度がだされた翌々月、晴信はすかさず、出陣の命令をだした。ここに志賀城攻めがはじまった。

武田軍は晴信がみずから板垣信方、甘利虎泰、横田高松、多田三八などの諸将をひきいて志賀城攻めにむかった。

志賀城には笠原清繁が、上野の上杉家の援軍をたのんでたてこもっていた。志賀城は、志賀越えと称する街道の入口にあたり、三方切りたった岩山上にきずかれている。西口尾根づたいに平地につづくが、この一帯にはいくつもの堀や石垣がきずかれ、山中の要所々々には、崖からころがし落として敵をふせぐための石があまた積んである。内山城を上まわる要害堅固な山城である。

武田の出陣が知れると、笠原氏の親戚である上野甘楽郡の高田憲頼父子がただちに援軍におもむき、志賀城にたてこもった。高田父子のほかにも上杉家から援軍の命がくだった上野の諸将が出陣の準



備をはじめた。

このたびの戦は昨年の内山城攻めとは比較にならない困難が予想された。

武田軍が南佐久郡桜井山城に到着すると、上野の諸将がぞくぞくと碓氷峠をこえて信州に打ち入ってくるという情報がもたらされた。

それを聞くと、

「水の手をうばえ」

晴信は命じた。と同時に、

「真田を呼べ」

と使者を真田郷につかわした。

幸隆は松尾城で使者をむかえ、援軍の命に接するや、

「承知つかまつりました。さっそく志賀へ出陣いたしますとおつたえください」

と使者の草壁左衛門助にこたえた。

武田の志賀城攻めがおこなわれるときまったときから、幸隆は援軍の命令を予想していた。真田は信州先方衆であるし、真田郷と志賀城とはそうはなれていないからだ。いわば幸隆の仕事の縄張りである。

幸隆は勇躍していた。

志賀は佐久平の東端に位置し、そのあたりの地理地勢や天候にはくわしい。

幸隆はただちに出陣の準備を命じたが、一方で一つだけ気になることがあった。

幸隆は蓮華坊を呼び、

「碓氷峠へ潜行し、敵方の来援の諸将たちをさぐれ」

と命じた。

蓮華坊はただちに修験道の姿に変じて、碓氷峠へむかった。

幸隆は約五百の兵をひきいて、志賀へ援軍にむかった。この一、二年で幸隆輩下の将兵の数は増していた。箕輪からやってくる者もあり、天文十年に四散した海野一族や滋野系の一族の将兵らが旧縁をたよって真田郷にあつまってきていたのである。

そのなかには幸隆の弟である矢沢綱頼もいた。綱頼は海野家からでて、滋野一族の矢沢をついだが、天文十年の戦いにやぶれて、数年姿をくらましていたのである。

矢沢綱頼が幸隆をしたって入城してくれたことは、幸隆にとって誰よりもこころづよい味方であった。

幸隆は出陣に際し、綱頼に留守を託したが、そのとき、

「兄上、もしや……」

綱頼も気がかりな表情を見せた。

「うむ、わかっている」

と幸隆はこたえた。

「父上が志賀城の援軍として、上杉方の諸将のなかに入っておるかもしれませんぞ」

綱頼は憂悶の顔を見せて言った。

「その恐れはある。羽尾殿か父上か、いずれか援軍にくわわってくるであろう」

幸隆は前からの心配を口にした。

「戦場でもしぶつかり合うことになれば、いかがいたします」

「そうならぬことを願う」

幸隆はそうこたえたが、簡単に自分の願いどおりになるとはかんがえられなかった。

「願ったとしても、うまくはいかぬでしょう」

「そうなったら、なったときにどうするかかんがえる」

「父と子、岳父と婿がたたかうことになるかもしれません」

綱頼は自分のことのようにそれを心配しているのだ。
「戦国にはままあることだ。なったとしてもいたし方ない」
幸隆はそうこたえるしかなかった。
棟綱や羽尾幸全も、出陣のときそれを心配していたかもしれない。
幸隆は長野家の庇護をはなれて武田家につかえたときから、将来こうしたことがあるかもしれないと懸念していた。その心配がはやくも実現しそうになった。
懸念をいだきつつ、幸隆は真田の軍勢をひきいて、志賀へむかった。
そのあいだ蓮華坊からの使者はこなかった。
志賀への援軍の数はすくなくはないようだ。佐久の天地は戦雲につつまれている。
（もしそうなった場合に、おれは父とたたかえるか？）
幸隆は進軍しながら自問した。
たたかうしかないだろうと答はでたが、実行できるかどうかとなると、問題はべつだ。
進軍している途中、武田軍の使者と出会った。
「敵方の援軍はぞくぞくと浅間山麓、小田井原（おだいはら）に展開し、陣を敷いております。真田どのは小田井原へむかってください」
と使者は晴信の命令をつたえた。
小田井原というのは志賀城の北にひろがる広野である。上野の諸将は志賀城救援のためにその広野に陣取ったのである。
「上野からの援軍の諸将の名はわからぬか」
幸隆が聞いたが、
「わたしは聞いておりませぬ」
という答だ。
「わかった」
了承して、幸隆は軍を小田井原へすすめていった。
翌日、真田軍が小田井原に着くと、上野からの援軍は横根から平尾にかけてひろく、展開していた。
幸隆は千曲川の支流を背にして岩村田に陣した。
岩村田の南方、さらに志賀城の西方から南方にかけて、武田軍の寄手が無数の旗差物や幟（のぼり）をなびかせて陣を敷いていた。
「八郎太、物見にでよ」
幸隆は命じた。
物見に数十人がえらばれ、別所八郎太がそれをひきいた。
「わしも物見にでるぞ」
と幸隆が言った。
通常、大将が物見にでることは稀だ。
と言うよりほとんどない。
「殿が行かれるなら、拙者も」
兵庫も言いだした。側臣であるから、大将がでれば、兵庫もでることになる。
海野十郎左衛門、望月三郎兵衛、浦野五郎三郎などが留守の本隊をあずかることになった。
物見一行は騎馬で小田井原を西から東へ突っきり、横根の北方から山地に踏みこんでいった。
その山地を行けば、平尾富士と呼ぶ山の裏側にでられる。その山の麓に上野の援軍は陣を敷いているのだ。大将幸隆がみずから物見にでれば、いちばんよく敵陣の様子がわかる。
物見は周囲を警戒しつつすすんだ。敵



も物見を出していて遭遇する恐れがあるのだ。
幸隆自身も物見一行も小田井原周辺の地理には大体通じている。だから物見も困難ではなかった。
一刻（約二時間）余りのうちに、平尾富士の裏側に到達した。山と言ってもさほど高い山ではない。一行は地理に精通した者を先頭にたてて、山の裏側から山腹の道をとって表側に近づいていった。
やがて展望がひらけ、平尾富士の山裾に展開している上野の諸将の援軍が見えた。
数おおくの旗印や幟、差物を背後から一望にすることができた。
「およそ一万」
と幸隆は援軍の数を読んだ。
「それくらいでございましょう」
兵庫もそう見たようだ。
山の上から見おろすと、敵の援軍は音もなくしずかに陣を敷いている。
この静けさが何日かのうちにやぶられ、武田軍との激戦が広野にくりひろげられる予感がして、幸隆の身も緊張でひきしまった。
幸隆は敵の旗印を背後の山からながめまわした。
兵庫も同様である。
緊張がたかまったと同時に、
（あった！）
幸隆は心中で声を発した。
敵の援軍のなかに、幼いころから見なれたあざやかな月輪七九曜の旗印が見えた。
「海野の旗印がございます」
兵庫が言った。
「父上が出陣いたしておる」
棟綱自身の存在をしめす馬印（うまじるし）も見えた。
かんがえてみれば、信濃帰還をめざす棟綱がこの出陣に参加していないわけがなかった。棟綱はこの出陣におのれの悲願を賭けているとも言えた。
一瞬、幸隆の体をつめたいものがはしった。
戦場で父子が相討つ情景を幸隆は想像したのだ。
父は不運にして戦にやぶれ、滋野一族を四散させてしまったが、けっして凡庸な大将ではない。勇気も智謀もあり、一族の期待をになって棟梁になった。しかも今は、一族再興、信濃帰住の悲願に燃えている。あなどれる大将ではない。
兵庫も海野家の旗印と棟綱の馬印にじっと見入っていた。
「合戦になれば、ぶつかり合うことになるでしょう」
兵庫がにがいものを飲みこむように言った。
「戦になれば敵は敵、味方は味方だ」
敵をえらぶことはできないのが道理だ。晴信も見ているはずである。
父を国外に追放し、姉婿を切腹までさせた戦国の鬼とも言える晴信が合戦で私情をゆるすはずがなかった。幸隆自身も戦国の鬼と化さねばならないのである。
その覚悟はあった。松尾城を出陣したときから、すでにその決意をしていた。いや箕輪をでて、武田家につかえたときからその覚悟はしていたのだ。
棟綱も幸隆が中途半端でない、正真（しょうしん）の鬼となることをのぞんでいるはずである。そのように薫陶したのは棟綱であった。幸隆は今こそ父がのぞむとおりの武将にそだった自分を棟綱に見せてやらね

ばならなかった。
「棟綱さまもきっと、そのお気持でしょう」
「手ごころはいたさぬ。おもいきりぶつかる」
「いたし方ありませぬ」
戦国の世にうまれた父と子はそうあらねばならないと兵庫は言ったのである。
武田が軍をひくか、さもなくば志賀城が降服するか、いずれかの道をとらなければ両者の激突は避けられなかった。自軍の兵の損傷をもっとももきらう晴信であるが、今回は作戦のたて方から言って、また相手の出方からして、決戦は避けられそうにないのだ。
「返すぞ」
幸隆は命じた。
幸隆が大将みずから物見にでたのは、敵陣の様子をさぐる以上に、棟綱の存在を自分の目でたしかめたかったのである。
武田方はすでに志賀城の水の手を押えている。
兵糧はまだしも、城方の貯水はそう多くはないはずだ。このまま日数が過ぎてゆけば、城方はもちこたえられなくなる。
決戦の日はしだいに近づいた。
幸隆は岩村田の陣にあって決戦の日を待った。
先にうごいたのは、上杉方だった。横根、平尾の陣をやや北へうつしはじめた。
従来の位置にあると、背後は山だ。もし決戦に敗れた際に退却がむつかしくなる。もっと北へ移動すれば、背後に碓氷峠へつうじる街道がひらけている。
八月六日、武田軍に出陣の号令がくだった。
真田軍は岩村田から北へうごいた。真田軍が先陣となった。その後から板垣信方、甘利虎泰、横田高松、多田三八らの武田軍が北上してきた。
秋の日が真上近くまでのぼったころ合戦の幕が切っておとされた。
小田井原に双方の軍の法螺貝が鳴りひびき、鉦がうち鳴らされた。
晴れあがった空に太陽がまぶしい。
ドン、ドン、ドン、ドン……。
武田の軍勢が先手をとって、押太鼓のひびきとともに、喊声をあげて打ってでた。
まず弓隊が最前線にでて、遠矢を射はじめた。
それから、槍隊と騎馬隊がほぼ同時に進撃を開始した。小田井原にもうもうと土煙と雷鳴のような馬蹄のひびきがあがった。
みるみるうちに武田の騎馬隊と槍隊は上杉隊に突っこみ、激戦がはじまった。
武田の騎馬隊は勇壮烈日である。馬が駆け、土煙があがり、人がさけび、槍や大刀がきらめいた。
いたるところで騎馬がぶつかり合い、槍と槍との激突がおこなわれた。怒号があがり、血しぶきがとんだ。
双方の陣から押太鼓が打ち鳴らされている。
壮絶なぶつかり合いだ。地獄絵図が小田井原に展開している。
いたるところで人が死んだ。馬もたおれた。たおれた上に武者がころげおちていく。
ドン、ドン、ドン、ドン……。
押太鼓のひびきが小田井原を圧し、将兵たちを鼓舞した。
しばらくのあいだ激戦がつづき、小田



井原には突きたおされた将兵や馬の屍が敵味方の別なく横たわっていた。
かなりの時間が経過し、乱軍がややしずまった。敵味方はそれぞれ何ヶ所もの足場を中心にしてまとまりだした。双方、将兵の数が減っていた。
真田軍も同様である。先陣であるから、手柄もおおいが、被害もおおい。
幸隆は鎧甲に身をかためて、軍配を打ちふり、最前線で指揮をつづけていた。みずからも軍馬をおどらせ、大刀をふるって敵方の武者を薙ぎたおした。
そのとき、武田の本陣から引き太鼓が鳴りだした。
いったんひいて、隊伍をととのえ、ふたたび攻撃をいどもうという意図である。
「ひけっ、ひけっ」
幸隆は軍配をかざして、真田軍をまとめ、整然と後方にひいていった。
上杉軍でも引き太鼓を鳴らし、軍勢を後方にまとめていた。
これは双方、退却の作戦ではない。再度の攻撃をはかるために、いったん兵をまとめたに過ぎない。
はげしい喧騒がしばしのあいだしずまって、小田井原に不気味な静寂がおとずれた。
その静寂がやぶられた。
ふたたび、法螺貝が鳴りわたり、勇壮な押太鼓がひびきだした。
そしてまた喊声と馬蹄のひびきだ。
今回が決戦になる。これで勝敗がきまる。上杉軍にも退却の意志はないようだ。
今回、志賀城が落ちれば、佐久郡から上杉家の勢力が一掃されることになるからである。上杉家も関東管領としての最後の意地を見せようというのだ。
両軍はふたたび激突した。
喊声と絶叫と罵声がもどってきた。
武田軍も必死だが、上杉軍も懸命の戦いである。武田軍は勇猛であるが、上杉軍もそれにひけをとらない。
幸隆は疾駆しながら、敵陣のなかに月輪七九曜をさがした。
前回の激突でも海野の旗印をさがしたが、とうとう見つけられなかった。
今回も、馬上からさがしもとめることはできなかった。
兵庫もぴたりと幸隆に馬を添わせて、敵陣のなかに海野勢をさがしていた。
あっという間に、目前に敵陣がせまった。
両軍は激突し、ふたたび死闘がはじまった。双方の押太鼓が鼕々と鳴り、騎馬隊はぶつかり合い、槍隊も白兵戦となった。
二度の激突で小田井原は血の広野にかわった。いたるところに血しぶきが飛び、血がながれた。
「死をおそれるなっ、修羅となって地獄へ落ちよ！」
真田軍は赤地に黒い六文銭を染めた旗印のもと、勇猛果敢に突激し、死をおそれず相手をたおしていった。
激戦のなかでも死をおそれぬ真田の軍はひときわ異彩をはなった。戦いがつづくうちに、相手が真田軍をおそれはじめた。
激戦がしだいに乱戦となり、乱軍となった。けれども真田軍は六文銭の旗印のもとに比較的整然とした戦いぶりをつづけていた。
上杉軍はしだいに押され、じりじりと丘陵地へ後退していった。

幸隆はこのときまだ海野の旗印をさがしていた。
　小田井原のこの乱戦のどこかにかならず海野の軍もいるはずだが、今のところ遭遇はしていなかった。
　武田軍は上杉軍に追いせまった。とは言え、武田軍もかなり損傷を負っている。真田の軍も死傷者がすくなからずでていた。
　しかし真田の軍は士気がまったくおとろえない。上杉軍を追って丘陵地へ馳せた。
　このとき、丘陵地の一角に、あらたな敵勢がとつじょ出現した。
「あっ……」
　と幸隆はさけんだ。
　その敵勢は今まで合戦にくわわっていなかった新手の軍だ。
　その敵軍の中央に、なんと月輪七九曜の旗印がはためいているではないか。
　凝然として、兵庫も八郎太も三郎兵衛、重兵衛もかつて自分たちがあおいだその旗印をみつめた。
　海野の軍は前方の丘陵地から、雪崩のように一団となってこちらにむかって突進してきた。
　めざすは真田軍だ。
「海野の軍は敵勢ぞっ、ひくな!」
　幸隆は叱声をあげ、軍配をうちふり、自分からまっしぐらに海野勢めがけて突進していった。
「それっ、殿におくれるな!」
「おじけるなっ、ひるむなっ、敵を打ちやぶれ!」
　八郎太、三郎兵衛も声を涸らしてさけび、馬を疾駆させた。
　真田軍はそれに勢を得て、突進をつづけた。
　一方、後退していた上杉軍も新手の海野軍がくわわって、勢をもりかえし、踏みとどまって戦いをいどんだ。
　ここでふたたび乱戦になった。
　真田軍も海野軍も乱戦のなかに呑まれていった。
　幸隆の視界から月輪七九曜が消えた。
　一瞬、幸隆のこころのうちを重荷をおろしたような気持がかすめた。
　が、ふたたびそれが視界に入ってきた。半丁ほどはなれた乱陣の高みにその旗印が風にへんぽんとはためくのが見えた。
「父上……」
　おもわず声をだして、幸隆はそのほうへ馬首をむけた。その旗印のもとに甲冑を身につけた老武将の姿があったのだ。
　棟綱も幸隆に気づいたようだ。
　幸隆の体のなかを一瞬、氷のように冷たいものがはしりぬけた。
　棟綱はそのとき、馬腹を蹴って、こちらにむかって一騎駆けにはしりだしていた。あわてて数騎がそれにしたがった。
　幸隆も駆けた。
　ややかたむいた太陽が高みの上にあった。
　幸隆は大きな太陽にむかって馬を駆けた。
　おどろいた兵庫や八郎太がそれにつづいた。
　馬上の棟綱の姿が背後から日をうけて、黒い影となった。
　影が日のなかに消えた。
　幸隆の視界が光だけとなり、すべての物音も絶えた。
　幸隆は目のくらむような光の中をまっしぐらに駆け、駆けながら大刀をぬいた。



　不意に日輪のなかから月輪七九曜とともに一騎の老武将が姿をあらわし、幸隆に突進してきた。
　とつぜん馬の音がひびきだした。自分の馬と棟綱の馬の音がかさなるようにひびいてきた。
　幸隆は大刀を頭上にかざした。渾身の力をこめて太陽を一刀両断し、おもい衝撃を上半身におぼえながら幸隆はそのまま吸いこまれるように、燦然たるかがやきの世界へ駆けぬけていった。
　かろうじて前方の馬上に重心をたもっていた棟綱の体がやがてくずれ、大地にどっところがり落ちた。
　幸隆の大刀はあざやかに棟綱の肩口から胸の下まで斬りさげていた。幸隆も傷を負った。
　――この合戦で、武田軍は上杉方の大将十五、六人、兵士三千人以上を討って大勝した。この首を志賀城のまわりに掛けならべて城兵に見せたので、城中の士気はまったく沮喪したのである。
　城内は水にくるしみ、しだいに戦闘力をうしなっていった。
　そして八月十日の昼、外曲輪が炎上し、落城は寸前にせまった。深夜、二の丸が焼かれ、翌日、城主笠原父子、援将高田父子が討ちとられ、志賀城は落ちた。

## 出生

　真田郷に帰陣するや、幸隆は軍装をとき、兵庫一人をつれてただちに河原村へむかった。
「間に合いそうでございますな」
「うむ、よかった」
　兵庫に言われて、幸隆はこたえた。志賀城の戦いがもっと長びいていたら、間に合わないところであった。
「殿は大丈夫でございますか」
　兵庫は棟綱からうけた疵について言った。
「父の太刀技は見事なものであった。一瞬おそければ、おれがやられていた」
　幸隆は鎧のシコロと袖のあいだを棟綱の大刀でやられ、左肩にかなりの怪我を負っていた。
「父と子が本当に打ち合うとはおもいませんでした。あの情景は生涯わすれることはできないでしょう」
　小田井原の棟綱と幸隆との一騎打ちについて兵庫が言った。
「父も本気であったな。自分に負けるような息子であれば死んでも惜しくはないとおもったのであろう」
　幸隆は棟綱の心中をそう読んでいた。
　棟綱は土壇場にいたって、自分をころさせることによって幸隆に不惜身命の精神を根づかせようとしたのかもしれない。父の命を犠牲にまでした幸隆の行く道には、もう逃げ道も、もどり道もない。地獄の涯まで戦国の修羅道をつらぬいていくしかないのだ。
　それに反して、千曲川の流れは今はおだやかである。秋の日をあびて、ゆるやかにながれている。
　秋の蜻蛉が空中をおよいでいる。
　幸隆は命のすこやかさを感じていた。
　河原家にいたると、丹波が幸隆をむかえにでた。
「今回の戦勝、まことにおめでとうござ

います」
　丹波はまずそう言った。武田軍の勝利はすでにこのあたりに喧伝されているのだ。
　幸隆はうなずいてから、
「明乃はどうだ」
とたずねた。
「今日か明日のようでございます。明乃はいたってすこやかでございます」
とこたえた。
　幸隆は明乃が寝ている部屋にとおった。
　明乃はおおきな腹を横にして寝ていた。
「おかえりなさいませ。ご無事でようございました」
　明乃はにこやかに言った。武田の勝利よりも幸隆の無事のほうが明乃はうれしいのである。
「生まれてくる子を父なし子にはできぬからな」
　幸隆がわらってこたえると、明乃は幸隆の笑顔にさそわれて、うれしそうな顔をした。
　明乃は三度めの出産をひかえていた。
　産婆とその手伝いの女が明乃のそばに待機している。
「そんな可哀そうな子は産めません」
　それは女として当然のかんがえであろう。
　けれども戦国であれば男が戦で死んでいくのは避けられない。男が死ねば父なし子はふえる。
　かと言って、武士であれば死をおそれるわけにはいかぬ。とりわけ、真田の武士は死をおそれてはならないのだ。どんなことをしても勝ちぬいていかなければならない。一度はやぶれて国を追われた一族だけに、その願いはつよい。
「父上が死んで、海野一族はいったんほろぶであろう。おれはそれを真田一族として再興しなければならない。再興して、領土を回復し、それを子へつたえるのがおれの役目なのだ」
「殿のお子を産めるわたくしは幸せです」
　はじらうように明乃は言った。それは本妻でありながら、まだ子を産めぬ鶴姫への優越感かもしれない。
「今度子が生まれたら、源太郎と昌次郎は城にひきとろう」
　明乃のこころをやすんじるためにも幸隆は言った。嫡男であり次男ではあっても、妾腹であることを明乃は気にしているからだ。
「ありがとうございます」
　自分の産んだ子とわかれるのはさびしいだろうが、城に入れば嫡男、次男としての立場がしっかりとしてくる。明乃にとってはよろこばしいことだ。
　陣痛がはじまったのは、夕刻に近いころだった。明乃は庭に建てられた産屋に入った。
「きっと安産でございます」
　安産を祈願にきた白鳥神社の神官がそう言ってくれた。
　幸隆は座敷にひかえて待っていた。幸隆が子の出産をそば近くにひかえて待つのはじめてである。源太郎のときも、昌次郎のときも幸隆は戦場にでていた。
　今回はその直前まで戦場にいた。これが戦国の豪族というものである。
　産婆が何度か産屋を出入りしている様子であった。
　だが、夕刻になっても明乃はまだ出産



しない。
「おくれているようでございます」
　夕刻もおそくなって、明乃の侍女がそうつたえにきた。
（難産だ）
と幸隆はおもった。
　宵に入ったが、生まれたという報せはこない。
　幸隆もさすがにやきもきしはじめた。
（ひどい難産だ）
と想像した。
　ひどい難産の場合、生まれてくる子はもちろん母親のほうにも生命の危険がある。
　さらに時間がたった。
　初更（戌ノ刻）も尽きようとするころ、ようやく産屋から産婆や手伝い女がでてきた。
「男の子が生まれました。お子はお元気ですが、明乃さまはおつかれになっております」
　と侍女がつたえにきた。
「明乃は大丈夫か」
たずねると、
「逆子でございまして、明乃さまは大層おくるしみのご様子でした」
　侍女も大層つかれきった様子でこたえた。
「逆子か。それにしても大変だったな」
　幸隆はようやく安堵した。
　廊下へでて空をあおぐと、秋にはめずらしく、血にまみれたような赤い月がでていた。
（父の生まれかわりか……）
　父が死んで、すぐに子が生まれたことに幸隆は不吉な因果をおぼえざるを得なかった。まして戦国のこととは言え、自分が父を手にかけただけに、その因果をかんがえぬわけにはいかなかった。
（どんな子にそだつか）
　と幸隆はおもった。いくらか不安をおぼえた。
　やがて、生まれた子が産婆に抱かれて、産屋をでてきた。
　幸隆は自分の第三子と初対面した。
　産着につつまれた赤ん坊を見て、幸隆はまずほっとした。目鼻、口、耳、いずれも異常なかったからである。子は元気な産声をはなって泣いていた。手足、体つきにも異常はなかった。
「まことに元気なお子です」
　と産婆が言うとおりだ。
　顔が赤く、皺くちゃなのは仕方がない。が赤ん坊は手をかたくにぎりしめてはいない。皺だらけの掌を見せているのだ。
　目は普通より大きい。そして赤ん坊ながら顔骨がやや張っている。
（赤ん坊らしくない子だ）
というのが幸隆の第一印象であった。
　しかし、親としては五体満足な男の子が生まれたのをまずよろこぶべきであった。
「おめでとうござります。立派な男の子ではありませぬか」
　兵庫が赤ん坊をのぞきこんで言った。
　赤ん坊は元気に泣きつづけている。元気は十分にありそうな子だ。
「まずはめでたい」
　と幸隆が言ったのは、いくらかこころに屈託があったからである。父が死んだ直後に生まれた子であるということ。赤い月、逆子……。それらのことがなんとなく、生まれた赤ん坊が尋常ではない運命を背負ってきたような印象をあたえた

のだ。

「掌をひらいて生まれてくるお子はめずらしいでありませんか。将来の大器とはおもわれませぬか。大胆不敵な大将になられるかもしれません」

兵庫はそう言ってよろこんだ。

あたかもその翌日、ボロの墨染をまとい、草鞋をはき、饅頭笠をかぶったひょろっと背の高い雲水が、飄然と真田郷に入ってきた。

雲水は松尾城をめざしてあるきだした。

松尾城の登り口で、数人の番士に行く手をさえぎられた。

「何者だ」

「見られるとおり、旅の雲水じゃ」

雲水は番士をおそれるでもなくこたえた。

「いずこへ行く」

「松尾城の小次郎どの、いや真田幸隆どのに会いにまいる」

と雲水は人を食ったようなこたえぶりだ。

「坊主、名は?」

一人の番士が乱暴にたずねたが、雲水は顔色も変えなかった。

「晃運じゃ、晃運がまいったと幸隆どのにつたえてくれ」

薄らわらうように名乗った雲水の前歯が一本欠けているのが愛嬌だ。

こうした客が城主をおとずれてくるのは稀である。

「殿は今は城にはおらぬ。数日たってからまたまいるがいい」

番士がそう言うと、

「遠来の客じゃ。幸隆どのは拙僧にはそのようなあつかいはせぬはず。ならば今どこにおいでになる」

晃運がそうこたえるので、番士の一人がそこからすこしのぼったところにある曲輪まで上司に処置をたずねに行った。

もどってきて番士は、

「今から案内する」

と言った。

晃運はその番士について、河原村へむかった。

「幸隆どのはお元気か」

道々、晃運は番士に話しかけた。

「殿はいたってお元気でござる」

「それはよかった。そなた、よき大将のもとについたな。幸隆どのは末は信濃一国をも支配する大将にもなれるお方だ」

「信濃一国とは大したもので」

その番士は晃運の言葉を半分はホラとして聞いた。

なにせ幸隆は松尾城代とはいえ、まだ自分の領土さえ持っていない武将である。信州先方衆という呼び方さえうつろに聞こえるほどだ。

「幸隆どのは並の大将とはちがう。つかえ甲斐のある大将だ」

晃運はまるで我がことのように、うれしそうに言った。

「並の大将とどこがちがう」

「天分、資質がことなるうえに、運気がちがう。幸隆どのの運気は生涯、上昇一途じゃ。上昇のとどこおることがない。第一に武田晴信につかえたことが開運のはじまりじゃ」

「武田晴信公はそれほどの大将か」

「まず天下第一とこころえてよいであろう。英雄、英傑は天下にゴマンと輩出いたしておるが、晴信に比較できる者は二三をかぞえるのみじゃ」

「そして坊さまはわが殿とはいかなるか



かわりのお方でござる」

番士がたずねた。

「そうさな」

晃運は一時間をおいて、

「幸隆どのはわが弟子のようなもの」

と言って、呵々とわらった。

「わが殿の師でござるか」

「もっとも、先方がどのようにおもうておるかわからぬ」

と言って、ふたたびわらった。

やがて、河原村についた。

「ここにおいでになる」

番士が言うと、晃運は河原家の門や母屋の屋根のほうをのぞんで、しばらく凝視した。

「ほう、この家には最近、あたらしい運命が誕生いたしたな。つよい運気がはなたれておるわい」

晃運がそう言ったので、番士は感心した。

「じつは昨日、殿の第三子がお生まれになった」

「左様か、父以上につよい運気、天分をもった子である。父をしのぐ武将に成長するかもしれぬ」

「それほどのお子か」

「それほどのお子じゃ。長じて、天下を賭けた戦の駆け引きをいたすかもしれぬ」

「坊さま、それはすこし言いすぎでござろう」

番士はそう言ったが、半分はそれを信じかけている。

「そういう器、天分を握っておられるということじゃ。なるもならぬも時の運と、おのれの努力次第よ」

晃運はそう言い、河原家へ入っていった。

番士が庭先から入り、家の者に来客をつげた。

まもなく晃運はまねかれ、玄関にとおされた。

そこに幸隆があらわれた。

「晃運坊主か。達者なようだな」

幸隆は晃運のやぶれ法衣の姿を見て、なつかしさをおぼえた。

「真田幸隆どの、おなつかしや」

晃運も今までの言葉や態度をあらためて言った。

「元気で何よりだ。まあ、上れ。あばら家だが、半月寺よりましだ。その節は世話になった」

幸隆は浪々時代に晃運から好意をうけたことをおもいだしていた。

「遠慮なくあがらせてもらう。幸隆どの、開運を得られたな」

「それよりも、よくたずねてきてくれた」

幸隆はそれがうれしかった。

「幸隆どのとの約束があるからな」

晃運は座敷にすわって、にやりとして言った。

「約束?」

「左様、わしに寺を建ててくれる約束じゃ。わすれられてはこまる」

「坊主を開山にしようと言ったおぼえがあるな」

「おもいだしたか」

「しかし、おれはまだ旧領を回復しておらぬ。一族を再興したとは言えぬ」

「それはもう目前まできとるわい。志賀城の合戦でのはたらきぶりも目ざましい。やがて、武田家屈指の武将になられるでござろう」

晃運は志賀城の合戦における幸隆の活躍を聞いて、会いにきたのである。

「左様なことはわからぬ。合戦にでて矢

にあたればそれでおしまいだ。武将には、やがてなどと先の推量はできぬ」
「何をたばかりごとを。幸隆どのにかぎって矢にはあたらぬ。槍も刀も触れられぬわ。それでなくては一族再興、旧領回復など夢見ることはできまい」
晃運の言葉は相かわらず隙がない。
「それはそうだ。死なぬと信じてたたかっておる。死をおそれては、武将の役にはたたぬからな」
「それはともかく、お子ができたそうじゃな。目でたいお子をもうけられた」
晃運は話をかえて言った。
「よくご存知じゃ。昨日生まれた。難産の逆子だった」
「逆子か」
やや晃運は眉をひそめた。
「凶運か？」
幸隆は心配した。
「あながちそうとは言えぬが、昨日はこの季節にしてはめずらしく赤い月だった。場合によってはそうなるやもしれぬ」
「晃運は人相、骨相を観るの」
「いくらか」
「では、我が子を観てもらおう」
幸隆はそう言い、昨日生まれた子をつれてこさせた。
侍女弥生が抱いてつれてきた。
「名は？」
「まだない」
晃運は弥生に抱かれてねむっている子を見つめた。
しばしそれがつづいた。凝視と言ってもいい。飽かずにながめている。
「異能、異才をもったお子じゃと観る。三男にいたしておくのはもったいない」
晃運は赤ん坊から視線をはなさず言った。
「すでに上に二人おる」
「惜しいが、それでは仕方がないの。だが、一族を背負ってたつ骨相をいたしておる。まずはめでたい」
「そうか観相にはそうでておるか」
幸隆はそう言ったが、晃運の異能、異才という言葉にいくらか気になるものをおぼえた。
「名はどういたす」
「源三郎とつけようとおもう」
すでに幸隆はそうきめていた。
「源五郎君……。いい名ではござらぬか」
「源太郎、昌次郎、源五郎じゃ」
「結構な名じゃ。真田の行く末はめでたいとおもう」
「そうならば、晃運に寺をたててやれそうだな」
「当てにはいたすまい。わが観相もそう当てにはならん」
と言い、晃運は苦笑した。
「ならば武田の行く末は？」
「これもめでたい。破竹の勢があると見る」
今度は晃運は明快にこたえた。
「晃運、真田に滞在してゆかぬか」
幸隆は半月寺のころをおもいだして言った。
「有難くその言葉、頂戴しよう」
晃運はよろこんでこたえた。

## 戸石崩れ

内山城と志賀城をおとし、佐久郡をほとんど掌握した晴信は、その勢をかって、今度は北信と東信の雄村上義清を撃滅しようと方針をたてた。
天文十七年正月、
『信州本意の上は、相当の地をあてがう……』
という朱印状を晴信は各将にあたえて、士気を鼓舞した。
こういう空手形を部下にだす戦国大名は数おおいが、晴信の場合は本気である。一度空手形とわかれば、以後効果がなくなるからである。晴信はいつも、本当の損得をかんがえていた。
が、今回晴信はいくらか功にはやっていた。
小県へむかって甲斐を出陣したのは、二月一日であった。このころと言えば、甲信地方は春とはいえ、まだ雪の中である。
甲州の軍はふかい雪のなかを大門峠から小県へむかった。
村上義清も甲州軍が進発したのを知って、坂城をでて、上田原にむかえ討とうとした。
上田原は北信の更級、埴科二郡と小県郡との境にある岩鼻の狭間から小県の盆地にでたところである。真田郷とはだいぶ近いところだ。
武田軍は村上方の牙城戸石城を一気に攻めるよりも、川西、塩田地方を侵略しようとした。ここを確保すれば川中島へ侵入するには峠口からでも室賀峠越えからでも可能であるからだ。さらに筑摩郡にすすんで、府中の小笠原氏を攻略する絶好の拠点にもなる。
ところが村上方にとってもここは重要な地帯である。この地をへて保福寺峠越えに筑摩郡につうじる道は、昔から東山道の要路であり、信濃の動脈である。さらにここは地味豊沃の小県郡の穀倉地帯だ。ここを武田軍におさえられれば、村上は死命を制せられることになる。義清は全力をあげて、死守しなければならなかった。
甲斐、信濃の武田軍は精鋭八千である。依田窪から砂原峠をへて、塩田平へすすんだ。が、天候はわるく、雨やみぞれが再三武田軍の進軍のさまたげになった。
武田軍は十日ごろ塩田平にでて、生島足島神社の附近から東方の高地に本陣をすえた。
村上軍は葛尾城下から、一手は室賀峠越えに室賀に進出し、ほかの一手は千曲川ぞいに上田原へすすんだ。そのほか戸石城からも援軍がくりだされた。そして村上軍はほぼ保福寺街道ぞいに山岳地を背にして布陣した。本陣は天白山を背にして上田原にすえた。
真田軍は主力が戸石城にたいしてそなえるとともに、別働隊が千曲川をこえ、村上軍の腹背をつくべく中之条のほうへ潜行した。
川西、塩田平原は俄然殺気が天地をおおった。
対陣数日にして、武田軍は板垣信方の部隊が先手となって上田原へすすんだ。甘利虎泰の部隊もこれにつづいた。ほかの部隊も同様である。
武田軍は一気に決戦をいどんだ。これまで慎重な戦略戦法で敵軍が自滅するのを待ったり、策略、調略によって相手を混乱におとしいれるのを常法としてきた晴信が、昨年、一昨年と内山城を連破してきた自信のためか強行策にでた。
（あぶない）

中之条に到着した幸隆はそんな予感がした。晴信らしくもなく、はやり過ぎているとおもった。
義清は援軍もふくめて、よりすぐりの精鋭部隊で合戦にのぞんでいる。村上の興亡をこの戦にかけているのである。
幸隆は晴信をいさめるべく使者をおくろうとした。
が、事態はそれ以上にはやくすすみ、両軍の激突はおこっていた。
「晴信公の作戦ともおもわれぬ」
幸隆は両軍の激突を聞いて、兵庫につぶやいた。
両軍死力をつくした戦闘が上田原においてくりひろげられた。武田軍は猛然と猪突し、村上軍は果敢にこれをむかえ討った。遠矢の攻撃からはじまり、騎馬隊、槍隊の激突となった。
攻防はおよそ一刻（約二時間）つづいた。両軍ともに押太鼓を打ちつづけた。双方、押せ、押せである。
晴信得意の押したりひいたりの作戦が影をひそめた。
激突に激突がくりかえされ、両軍の将兵はばたばたとたおれていった。壮大な地獄絵図が上田原に展開した。
「板垣駿河守さまお討ち死に！」
「甘利備前守さま、ただ今、壮烈なご最期！」
武田家を代表する二人の重臣がつづけざまに討ち死にするという惨事がおこった。
「才間河内守さまお討ち死に」
「初鹿野伝右衛門さまも、ご最期をとげられました」
重臣、功臣たちの死をつげる伝令がつぎつぎに本陣にもたらされた。
その直後、武田方の本陣も村上の軍勢におそわれた。
旗本たちは必死でたたかい、懸命に晴信をまもった。
晴信も本陣に踏みとどまってささえたが、敵勢はくりかえしおそってきたので、槍をもって応酬した。実際に敵を突き伏せた。
何度か晴信のまわりが手薄になり、危険にさらされたが、晴信は気魄で敵の攻撃をふせいだ。
武田軍も押されてばかりではなかった。
小山田出羽守の部隊が死に物ぐるいのはたらきをして村上軍を突きかえし、真田軍も中之条から進撃し、村上軍の腹背をついた。これで村上軍はおおいにあわてた。
双方の軍入りみだれての乱戦になった。
村上軍では大将義清が負傷し、屋代、雨宮、小島などの名だたる勇将たちが戦死をとげた。
武田軍は劣勢ではあったが、晴信はけっして本陣を引きはらわず、意地をしめした。
そのため村上軍は武田軍に追撃をかけることができず、千曲川をこえて北へ退き去った。
双方、おおきな傷手をこうむり、武田軍はこの合戦で村上一族が本当にあなどり難い敵であることを知った。
晴信は本来の自分の戦略戦法をわすれていたことを悔やんだかもしれない。しかも晴信も義清同様、怪我を負っていた。
戦いおわってから、幸隆は晴信に呼ばれ、
「真田軍の横槍は見事であった。あの横槍が入らなければ、武田軍は惨敗を喫していただろう」
と賞せられた。
このとき幸隆は、晴信の戦法の誤りを進言しようとおもったが、結局やめた。
（言うな、幸隆。わかっておる。これからはもっと調略をおもんじよう。おぬし、たのんだぞ）
晴信の眸がそう言っているのを読んだからである。
（殿、戦はまず駆け引きが第一でございます。馬上、弓槍の戦いはそのつぎでございまする）
幸隆も無言で言った。
（つい戦の根本をわすれておった。幸隆にたすけられたぞ）
晴信がつぎにはそう言ったとおもった。
（拙者のはたらきなど何程のこともございません。殿には浅疵ですんでまことにようございました）
という幸隆の本心が晴信につたわったようであった。
武田家にしたがってから四年め、幸隆と晴信は本心がおたがいに通じ合うようになっていた。幸隆は自分が見こんで晴信につかえたのであるから、晴信にたいしては表裏なく衷心からしたがった。晴信をもりたて、武田家を強大にすることが自分の一族の再興につながると信じた。
晴信は軍容をととのえ、塩田の本陣をようやく陣払いして、村上方の追撃にそなえつつ、ゆっくり諏訪へむかった。
晴信が負傷したということが、諏訪につたわったため、夫人が側臣を途中までむかえによこした。晴信は途中で温泉療法をおこない、たっぷり休養してから諏訪にもどった。
諏訪では諏訪郡代の板垣信方が戦死したために、人心が動揺していた。晴信の怪我の様子も知られず、重傷説もながれ、諏訪西方衆が武田方から離脱しようとするうごきもでていた。
晴信はそこで、諏訪や佐久の仕置を厳重におこない、自分の健在ぶりを知らせ、諏訪郡代の後任には板垣信方の弟室住玄蕃允を任じ、土豪や社寺に朱印状をだし、甲府にもどった。
武田と村上の戦いは、この後もずっとつづけておこなわれた。
晴信の信濃経略を要約して言うと、諏訪郡を拠点として一方は佐久郡から小県郡をへて川中島へ進攻し、北信四郡を支配する。また一方、筑摩郡に侵入して、ここから北信攻略に手をつくすという作戦である。
この二方面作戦において、晴信は村上攻撃にもっとも力を入れた。信濃経略には村上討伐が不可欠なのであった。村上さえたおせば、小笠原やそのほかの豪族などはたいした問題ではないと晴信はみていた。だから一にも二にも、相手は村上なのである。
上田原の合戦の二年後（天文十九年）、晴信はいよいよ村上の要塞戸石城攻略を決意した。
だが戸石城を攻略するためには、まず救援にむかうとおもわれる小笠原をたたいておかなければならない。
七月初旬、晴信は諏訪郡に出馬した。諏訪をへて筑摩郡の村井城に入り、小笠原の属城や出城の攻略を激励した。

武田軍は最初に深志（松本城）の出城である戌亥城を攻めまくって、これを占領。ついで林城、深志、岡田、桐原、山家、島立、浅間などの諸城を攻め、またたくうちにこれらを落とした。大体これらの城は武田軍の威勢におそれをなして、城兵が逃亡したり、降服したりで、ほとんど抵抗らしいものは見せなかった。

小笠原長時は林城を捨てて逃亡し、小笠原の支柱と称された安曇郡の豪雄仁科道外も降参した。

武田軍は破竹の進撃をして、晴信は深志城に入り、ここを筑摩郡の根拠とすべく修築を命じ、宿将の馬場民部信春を城代に任じた。そして晴信は休む暇もなく、小県郡へむかった。筑摩郡がわずか旬日で壊滅し、小笠原が没落したので、この機逸すべからずと戸石城を攻略して葛尾城の死命を制しようとしたのだ。

そのために晴信は一日、数十騎の供をつれて松尾城にやってきた。

幸隆は晴信自身がここまでくるとはおもわず、鎧姿の晴信を見ておどろいた。

「なかなかよき城じゃな。地の利もよければ縄張りもよい。くわえて、何よりも城代がたのもしい」

晴信は本丸までのぼって、四方を望遠しながら言った。

「有難きお言葉にございます」

幸隆はこんなことを言いに晴信はここまでやってきたのかとおもった。

この城は西南わずか一里余のところに戸石城をのぞみ、ここから横尾、曲尾をへて地蔵峠をこえると、埴科の東条あるいは清野にもでる。戦略要地として絶好の地の利を有している。

晴信は松尾城を、戸石にたいする攻撃砦とともに、川中島へ進出する拠点にともかんがえているのである。しかも幸隆は小県郡、海野平出身の豪族であり、地理は山の高低から小川の深浅まで知悉しており、城代として申し分がなかった。

「しかし作戦の拠点となるところだ。いささか修築の個所もあるようだ」

晴信は城の中を一巡しただけで、すぐに城の不備を二、三指摘した。

「さっそく修築いたしまする。ここを拠点に戸石城をおとすことができれば幸です」

「今日はその方にわたすべきものがあって、やってまいった」

おもいがけず、晴信が言った。

幸隆は何がわたされるのかとかんがえた。

「これじゃ」

晴信は近習に持参させていた書状を幸隆へ手わたした。

「はっ、頂戴いたしまする」

幸隆はそう言ってうけとり、書状をこの場で読んでいった。

其方年来の忠信祝着に候、然れば本意の上に於ては、諏訪方参百貫並びに横田遺跡上条都合千貫の所これを進め候　恐々謹言

天文十九庚戌七月二日　晴信（花押）

真田弾正忠殿

文面は右のようになっている。

幸隆のこころがおどった。幸隆は二度読みなおした。

やがておどったこころがしずかな喜びにかわった。

戸石城攻略がなったならば、横田遺跡すなわち海野原が幸隆にあたえられるという証文であった。



晴信がわざわざ松尾城にきたのは、この証文を幸隆に手わたすためだったのだ。

幸隆の胸をしめつけてくるものがあった。晴信を見こんでつかえた幸隆の目はたしかであったのだ。

幸隆は晴信にしたがっていらい、戦場でたびたび功名をあげてきたばかりではない。調略や説得によって、かつての滋野一族やその遠縁の豪族たちを何人も武田家に服属させてきた。たとえば望月新六、望月左衛門佐、伴野信友、芦田某、金井彦右衛門、常田右衛門綱旨、海野左馬亮などがそうである。

晴信はこれらの幸隆の功にたいして、証文をあたえたのである。

もっともこれは今のところ紙切れ一枚の証文にすぎない。戸石城を攻略したときに、これが本当に実現するのである。このころの宛行状というのは武田家にかぎらず、こういうものがおおかった。

「まこと喜びのきわみにございまする。わが家人の者どもも勇気百倍、今後とも捨身のはたらきを惜しまぬでございましょう」

幸隆はさまざまな感慨をおさえて言った。

海野を追われて一族四散し、上野羽尾へ落ちのび、さらに箕輪にうつって、幸隆は父と訣別した。ついに戦場で父と相見える悲惨な相剋のあげく、幸隆はついに旧地を自分の手元にひき寄せた。それもおおくの血をながし、各地を転戦した結果である。

「幸隆ならば、この宛行状を本物の領土にかえることができるであろう」

晴信は前方の戸石城をのぞんで言った。

「有難き幸せにございます」

「すでに七分どおり手中にいたしたも同然であろう」

晴信はけしかけるように言った。晴信はとても善良なる人情家ではない。功名とひきかえに、幸隆に旧領を手当てしてやろうというのである。これがこの時代の現実である。

「そのようにいたしたく存じあげます」

そうこたえた幸隆はすでに、その戦略を胸にいだきはじめていた。

幸隆の戦略といえば、まず謀略と調略である。少数の軍をもって大軍にあたるには、これがもっとも効果的な戦法であるからだ。幸隆は小をもって大をやぶる快感をこれまでおぼえていた。いわばこれは兵法の極意、神髄と言ってもいい。

それに信濃にはかつての滋野一族の縁者が多数ちらばっており、謀略、調略をもちいるのにこれほどめぐまれた地の利はないのである。

たとえば戸石城をささえる村上方の勇将のなかでも、清野左衛門、大塚、西条、東条、寺尾などの諸士は元をただせば滋野一族である。今は敵味方にわかれているが、昔は同根で、かつては血のつながりもあった。海野小太郎幸氏のころ、一族が会田、塔ノ原、田沢、刈谷原、光などにわかれたが、その刈谷原の家から清野と大塚がでたのである。

これらの由緒をたどれば、幸隆が清野以下の諸将を調略することはずいぶん可能である。幸隆はまことにめぐまれた地縁、血縁を持っていたと言える。

幸隆はこれから伸しあがっていくためには、これらの利点を存分に生かしていこうという考えであった。それから知

略、謀略である。戦いに知と謀がなければ、たんなる兵力のぶつかり合い、激突にすぎない。それは愚か者のなすことである。知者は謀をもって進退、駈け引きをおこなう。小が大を制するのはこの道しかない。

だから、幸隆はかんがえた。要塞戸石城をおとすにはどうすればよいかと熟考をつづけた。

戸石城は要害堅固の名城である。千曲川の北方太郎山の東端の高陵にきずかれ、小県郡の大半と北部佐久郡を一望におさめることができる。城の南方は麓にむかって大手をひらいているが、東方は十数丈の切りたった断崖で、その裾を神川の渓流があらい、西方も険峻をきわめる渓谷である。その渓谷づたいに米山という出城につうじ、この出城が戸石城の守りに磐石の重みをくわえている。さらに北方の尾根つづきに地蔵峠道へでることもでき、村上氏の本拠葛尾城につながる道ものびている。

退路、補給路を兼備し、なおかつ信濃の大動脈北国街道と北上野につうじる吾妻街道がこの城下で分岐点をなし、交通は発達し、人口もおおく、まことに山城としての好条件をみたしている。

これだけの名城に拠る村上軍だけに、武田軍の進攻を前にしても、義清は強気であった。二年前、上田原の合戦で武田軍におおきな打撃をあたえていたので、その自信もあった。

八月十九日、晴信は諏訪上原城を出馬し、約一万の軍をひきいて長窪城についた。

それから数日滞陣し、敵状偵察をおこなった。

二十四日、戸石城への偵察に今井藤左衛門、安田式部少輔が辰ノ刻にでて、ほぼ酉の刻にもどってきた。

二十五日には、おなじく戸石城偵察に大井上野助、横田備中守、原美濃守が出動した。

この日、長窪の陣所から辰巳（東南）の方角に黒雲がわき、そのなかに赤雲がのぼりたち、西の雲先があやしくたなびいた。見る者に合戦の容易ならざるなりゆきを暗示させるようであった。

二十七日、晴信は長窪の陣をたち、未の刻、海野平向ノ原に着陣した。このとき、陣の中を一頭の大鹿が悠々ととおりぬけた。吉兆かそれとも不吉の暗示かと、陣中の諸将はかまびすしくかたり合った。

翌二十八日、戸石の城際、屋降というところに陣をおいた。屋降という地名が〈敗る〉につうじるので、縁起がよくないという説がしきりにおこった。

そして二十九日、晴信は戸石城のきわへ物見へでかけ、矢入れをはじめた。しかもこのとき酉の刻（夕方六時ごろ）、西空に赤黄の雲が五尺ばかりわきだし、やがて虹のごとく消えた。これも瑞兆か不吉の兆かと陣中がものものしかった。

いずれにしろ、今回は戦の前から、妖気がしきりに戦陣にただようごとくであった。

幸隆は松尾城内で赤黄の雲がたなびくのを見て、こころおだやかではなかった。これが何の暗示であるか陰陽師にうらなわせると、

凶

とでた。

幸隆は今回は地元の戦いであり、村上方の属将や豪族たちにさかんに手をのばし、調略に大わらわであった。幸隆がいちばんにねらいをつけているのは埴科郡の清野左衛門である。清野は西条山下、千曲川にのぞむ川中島の要衝で、村上氏の本城葛尾城の北の防衛線の基地であった。この清野がもし寝返れば、村上氏のこうむる打撃は甚大である。

清野調略に失敗すれば後の幸隆の戦略に齟齬をきたすおそれがあった。それで幸隆は清野に武田内応をすすめ、もしそれが実現すれば、武田家において厚遇があたえられることを約束していた。

清野を調略することに成功すれば、同族の西条をも寝返らせることができる。そうすれば、近くの東条、寺尾をもさそうことができるとふんでいた。その調略には幸隆自身と弟の矢沢綱頼があたっていた。

翌九月になって、武田軍は城際へ陣をすすめ、しきりに矢を射こむ一方、城内にむかって降服をすすめた。

しかし村上方は降服をうけ入れず、城内からさかんに矢を射かえしてきた。

そして何日か、小競り合いがつづいた。

武田軍は何度か兵をだして城を攻めたが、相手の守りは鉄壁であった。おもったほどの戦果はあがらなかった。

幸隆の調略も今一歩、効果がとどこおりがちであった。

戦場に雪が降りはじめた。九月下旬からの雪は例年よりはやい。

信州は雪の国である。まして小県以北は雪がふかい。

太郎山に雪がつもった。

〈太郎山に三度雪が降れば、里にも雪が降る〉

という言いつたえが地元にある。

内地に雪がつもれば、当然、遠征軍が不利となる。村上軍は城にこもっておればよいのだから、戦況は有利だ。

武田軍は出兵をくりかえしたが、おもったほどの戦果はあがらなかった。

「雪がふかくつもれば、すすむにしろ、しりぞくにしろ軍がうごかなくなります」

矢沢綱頼が幸隆にそう言ってきた。

幸隆もそれをかんがえていたところだ。

「調略がもっとすすんでおれば、一気に勝負をつけられたものを」

幸隆にはいくらか悔いがのこった。真田にとってはこの戦いに千貫の領土が賭かっていた。旧領の回復は今回は無理だと幸隆は判断した。

「あせりは後悔となってかえってくるでしょう」

「今回は、御馬をおさめられたほうがよい」

幸隆はそう結論をだした。

そして、幸隆は深夜、晴信の本陣へおもむいた。

晴信はまだおきており、幸隆をむかえるなり、

「弾正忠、何事ぞ」

と言ったが、晴信には幸隆の用件がわかっていたようだ。

「おもいのほか戦況がかんばしくありませぬ。それに今年は雪のおとずれが早いようで」

幸隆が言うと、

「弾正忠、その方、領土をあきらめたのか」

晴信は複雑な顔色を見せた。

「今回は見おくったほうがよろしいかとおもいました」

「左様か、弾正忠もそうおもうか」

晴信もおなじかんがえにかたむいていたようだ。
「晦日には御馬をおさめたほうがよろしいかと存じあげます」
「こうなって長滞陣をつづければ、村上のおもう壺となるであろう」
「これからは、雪が村上方に幸いたすでありましょう」
「わかった、軍をひこう」
晴信の結論もはやかった。幸隆の進言がとりあげられた。幸隆はこのころすでに武田家謀将の地位をかためつつあった。
晴信としては上田原の合戦で村上方にしてやられただけに、今回は期するところがあった。そのため晴信は何の戦果もなく兵をかえすことには悔いがのこりそうだが、武将の決断は迅速であらねばならない。
十月一日、卯の刻（朝六時ごろ）、払暁を期して武田の退軍がはじまった。
軍をひくのは、すすめるよりも何倍かむつかしいと言われる。それは晴信も承知していた。とくに敵前での退軍がもっともむつかしい。古来、名だたる勇将や名将が退軍するところで敵襲にあい、おおいなる敗北を喫していた。
村上方は手ぐすねひいて、このときを待っていた。
「敵軍がひく！」
「追い討ちをかけろっ」
城兵の意気はおおいにあがり、追撃の太鼓と鉦が打ち鳴らされた。
村上軍は今までさんざん城内で耐えてきただけに、勇気百倍して、打ってでてきた。
それを武田の殿軍がむかえ討った。殿軍も追撃は予想していたので、十分な用意があった。
たちまち激戦がはじまった。
武田の殿軍もたたかい慣れた勇者ぞろいだ。殿軍には戦巧者がえりぬかれている。退きながら、むかえ討ち、討っては退いていく。
「討てよ、討て、討ちまくれ！」
村上軍は押太鼓を打ち鳴らして、攻めてきた。
神川の東方、海野平でもっとも激戦となった。
晴信の本隊は粛々と退いていく。ひたすら退くしかない。殿軍が苦戦していたとしても、踏みとどまってたたかうことはない。今は退くのが仕事だ。
武田の殿軍はよくたたかった。しかし、作戦上、地理上、村上方のほうが断然有利である。善戦する武田方の殿軍はばたばたとたおれていった。
「横田備中守お討ち死に」
ついに殿軍の大将横田備中がたおれた。横田は武田家屈指の大将である。
「武田信尭さまご最期！」
武田信尭は武田家の親族である。
「小山田備中守さまもお討ち死に」
小山田備中も武田家の宿将である。
そのほかの大将、侍分がぞくぞく死んだ。
武田軍としては一昨年の上田原の合戦以上の痛手となった。武田にとって不運な戦いがまたおこったのである。
しかし晴信の本隊は後を振りかえりもせずにひいていく。晴信の本隊を無事にひかせるために殿軍はたたかい、死んでいるのだ。
激闘はいつまでもやまなかった。いくら武田軍がひいても、村上軍は追ってくる。いつまでもきりのない戦いであった。
武田の殿軍はおびただしいまでに討ち死にをとげていった。退軍のむつかしさをこれほど実証した戦はなかった。晴信が甲斐の大将になってからこれほどまでに悲惨な戦いをしたことはなかった。
開戦の前に不吉な雲がわきおこったことを、今にして武田の将兵たちはおもいおこした。
殿軍がくずれ、それにつづく部隊が殿軍の役目にくわわったが、さしたる効果もなかった。
村上軍は執拗なほど追撃をかさねてきた。戦はもう半日以上つづいた。
白いものが空に舞いだした。武田軍にとってわるい状況がかさなった。
そのとき、丘陵の森陰からとつぜん一団の軍兵が幻のようにあらわれた。と見るや、その軍兵は村上軍におそいかかっていった。
「六連銭の旗だ、真田の援軍だ」
「よくぞきてくれた！」
武田軍は村上軍におそいかかる軍兵の旗印を見て歓喜した。
幸隆は万一をおもって、かねてここに伏兵をおいていたのだ。それが生きた。それまでは見通しのよい平地つづきで、伏兵をおくところがなかったのだ。
真田軍はもうだいぶ疲れはてていた村上軍を蹴散らしはじめた。こちらは手ぐすねひいていた伏兵である。一気果敢に村上軍をうちくずしていった。
武田軍はようやく隊伍をととのえることができ、夕暮れの雪の中を諏訪をめざしてひいていった。

## 山家神社

真田郷の神川流域、松尾城の近くに山家神社がある。
平安時代の延喜式にもすでに見えている神社で、相当古くからひらけていた。菅平の主峰四阿山を奥宮とし、神川流域一帯におおくの氏子を持つ大きな神社である。農耕の神をまつっており、真田郷が昔から農業生産のゆたかなところであったことを物語る。
神川の水を取り入れた吉田堰は養老元年（七一七）に開さくされたという里伝があるほど歴史が古く、山家神社を信仰の中心とする流域の一体感が形成されていったものとおもわれる。
天文二十年の晩春三月の朝、松尾城をでた女乗物が十数騎の供をしたがえて、山家神社へむかった。
信濃の空はぬけるように蒼く、緑の山並が周囲をかこんでいる。田畑には田をうつ人、畑をかえす人が見え、田植えが近くなったことを感じさせる風景がつづく。農家はこれからいそがしい季節に入っていく。
うららかな日和である。春はふかく、やがて季節の盛りを過ぎようとしている。
女乗物は山家神社の参道に入り、鳥居の前でとまった。
戸がひかれ、中から打掛け姿をあらわしたのは鶴姫である。
鶴姫が自分から松尾城に輿入れしてきてから、もう六年たっている。気性のはげしい姫だった印象はだいぶうすれ、今は落着いたゆかしさが表にもあらわれてきていた。
供のなかには海野十郎左衛門の姿があ

る。和田勝之助の姿も見える。
　毎年三月下旬には幸隆が〈農耕始め〉の祈りにくるが、今年は幸隆が近郊豪族への調略でいそがしく、鶴姫が代参にきたのであった。真田郷の農耕のはじまりは、領主の山家神社への祈願にはじまると言ってよい。領主の農耕始めの儀式がなければ、里人たちの農耕ははじまらない。
　だからこの儀式は里人たちに待たれているのである。
　幸隆がこの儀式に代参をたてたのは、今年がはじめてである。このころ、武士にとっても農耕の行事はもっとも大切なものであったが、戦や敵との駈け引きに匹敵するくらい大切な意味合いがある。
　鶴姫は幸隆にかわって、神への供え物を持参してきた。それらの品々は海野十郎左衛門がかわって持参していた。
　宮司が鶴姫一行を待ちうけていた。
　一行は神社の中にむかえ入れられ、儀式にのぞんだ。
　そのころ……、地蔵峠のほうから山をこえてやってきた修験道の七、八人の一団が神川をわたって山家神社に近づいた。いずれも日焼けした精悍な顔の男たちである。
　農耕始めの儀式は、ほぼ半刻（約一時間）を要した。
　おわってでてきた鶴姫は鳥居の前から乗物にのり、一行は帰途についた。
　鳥居をはなれてしばらく行ったころ、とつぜん、
　シュッ
　風に弓弦の鳴るような音がおこった。と同時に、供の侍が胸をおさえて、その場にたおれこんだ。
　その侍の胸に長々と矢が突きたっていた。
「曲者だっ」
　海野十郎左衛門がさけんだ。
　ほぼ同時に、
　シュッ
　ふたたび音がして、十郎左衛門の頬を矢がかすめて、飛び去った。
「前方の林の中に曲者がおるぞ！」
　和田勝之助がさけんだとき、三たび弓弦の音とともに、矢が供の侍の腹部を射ぬいた。
「乗物をお守りしろ！」
　海野十郎左衛門は乗物をかつぐ家人たちを叱咤し、山家神社へ逃げるよう指示をくだした。
　前方の林の中から七、八人の修験道がとびだし、せまってきた。
　修験道たちの中に三人ほど弓をたずさえている者がいる。そのうちの一人が、また矢を射はなった。
　矢は勝之助の足もとに飛んだ。
　こちらにも弓を背負った武士が三人いた。
　その三人がそれぞれ矢をとってつがえた。
　双方で同時に弓弦の音がした。
　矢をつがえていた武士の一人が股間に矢をうけて、悶絶していった。
　こちらからはなった矢も、弓をかまえた修験道の一人を射たおした。
「狼藉者めっ」
　勝之助が先頭をきって、大刀を抜きはなって修験道の中へ斬りこんでいった。
　その後に三、四人がつづいたが、そのうちの一人は至近距離から矢を射はなたれ、肩にうけてたおれていった。
「何者だっ、偽行者め！」



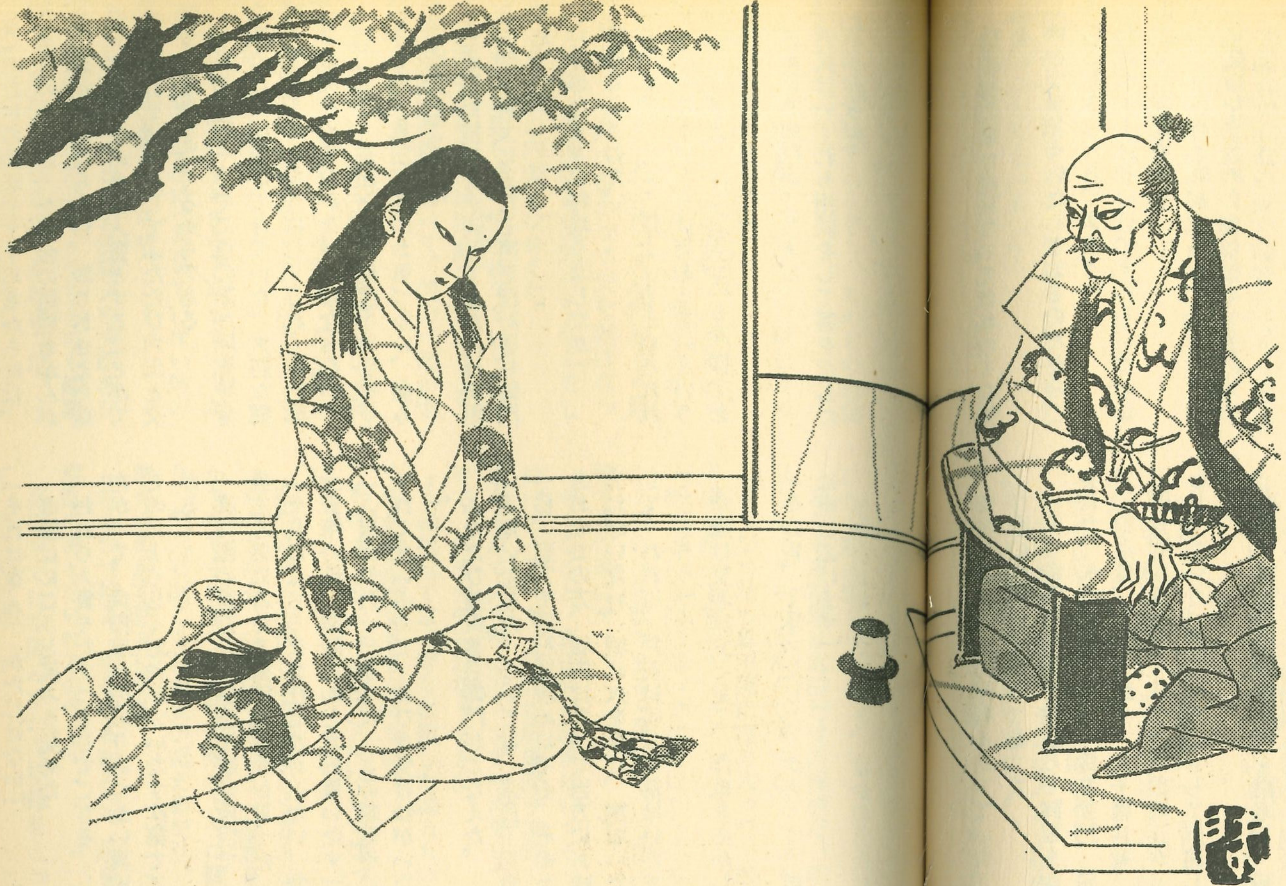
　勝之助は怒号して、修験道の一人を斬った。
　山家神社の近くがたちまち修羅場と化し、罵声、血しぶきが飛びかった。
　修験道の射る矢がなおも、一人、二人……と供の侍をたおしていった。
　代参の一行は領内でよもや敵襲に遭うとは予想しておらず、完全に虚をつかれた。奇襲攻撃をうけて、反撃はどうしても後手にまわった。
　槍をかまえた供が三人突き入ったが、一人は矢をうけ、もう一人は錫杖にしこんだ槍ではげしく反撃された。あと一人の槍が修験道の首をつらぬいた。
　農耕始めの神事の直後に、とんだ修羅場が待ちうけていたものである。
　鶴姫の乗物を追って、三人の修験道がはしった。
　その前に数人の供の侍が立ちふさがって乱戦になった。
　修験道の錫杖にはみな槍がしこんである。槍の穂先がきらめいて、ばたばたと二人たおれた。
　修験道の荒修行というのは並の程度ではない。命の危険をかえりみずに日常的におこなわれるもので、生半可な武士の鍛練などは比較にならぬ。
　しかし真田の武者もそれぞれ豪の者である。日ごろ、戦場で命を賭けた戦に慣れており、平時における奇襲攻撃で臆するはずもなかった。
　当初の犠牲はおおきかったが、時の経過とともに体勢をたてなおしてきた。
　修験道の数は三人になり、やがて二人に減った。
　もうこうなれば勝敗はあきらかである。
　二人のうち一人は傷を負っている。
　だが二人には死に物ぐるいの勢があった。二人とも血眼になって、錫杖をふるってあばれまわった。
「降参いたせ、いたさば命だけはたすけてやろう」
　十郎左衛門が言葉を投げたが、耳をかそうとはしなかった。逆に騎虎の勢を増し、猛然たる闘いをいどんできた。
　そのために、供の一人が命をおとし、さらに一人が重傷を負った。
　つづいてもう一人があやうく側頭を突かれそうになった。が、勝敗が逆転される可能性はすでになかった。
　修験道の一人がたおれ、ついに生きのこるのは一人となった。
　最後の修験道も生きてかえる望みは持ってなさそうだ。
「生け捕れっ」
「ころすな！」
　十郎左衛門と勝之助がさけんだ。生け捕って身許を吐かせようという意図である。
「そうはいかぬぞ」
　修験道はそう言い、もっとも手近にいた供の侍の太腿を錫杖で突いてたおし、
「やあっ！」
　壮絶な叫びをあげると同時に、錫杖を逆手に持ちかえ、槍の穂先をずぶりと自分の胸に突き刺した。
　死にきれぬと見るや、一度穂先をひき抜き、今度は首を突き刺した。血が虚空に飛び、修験道は力つきて、たおれた。
　後刻……。
　一行は松尾城にひきあげた。
　さいわい乗物の中の鶴姫は無事であった。気丈な鶴姫は動転もしていなかった。

夕刻、調略活動から帰城した幸隆は十郎左衛門から事件の報告をうけた。
「何者か」
　幸隆はたずねた。
「深傷で死にきれぬ者を一人つれもどりました。きびしく詮議いたしますと、長野業政どのの家来と判明いたしました」
　十郎左衛門はこたえた。
「鶴姫をつれもどそうといたしたのだな」
「そのようでございます。六年がかりの計画だったのでございましょうか。今後も油断はできませぬ」
「今までも隙をねらってはいたのだろう。執念ぶかいとは言っても、相手にいたしてみれば当然のことだ」
　幸隆は少人数の供で鶴姫を城外へだした油断を反省した。業政はまだ鶴姫の所業をゆるしてはいなかったのだ。
　幸隆は鶴姫を見舞い、
「そなたの父上の手の者だったそうだ」
とつたえた。
「やはり左様でございましたか。そうではないかとおもいました」
　鶴姫は顔色もかえずにこたえた。
「今後もおそってくるかもしれぬ」
　と言うと、
「今度おそってまいりましたら、わたくしがじきじきに説教をいたしてやります。そして父上にもうこのような愚かなことはやめるよう言づけてやるつもりです」
　と気丈にこたえた。
「そなた、地蔵まいりも当分ひかえたほうがよい」
　幸隆はこのとき言葉を付けたした。
　鶴姫はこの二、三年、地蔵まいりをつづけていた。真田郷の戸沢にある子安地蔵に、子宝にめぐまれますよう祈願をしているのだ。とついできて六年もたつというのに、いまだに懐妊を見ない自分に鶴姫はいらだちをおぼえているようである。
「地蔵まいりもいけませぬか」
　と言う鶴姫の顔にはかなしげな色が浮かんだ。
「子はなくとも、夫婦は夫婦じゃ」
　と幸隆は言ったが、それはあまり慰めにはならなかったようである。
「けれども子のない夫婦と、子のある夫婦とはちがいます」
　鶴姫はよほど子のできないことを気にしているようだ。それが鶴姫の最大の悩みなのである。
「夫婦はすこやかなのが一番だ」
　と幸隆は言ったが、
「殿のお子を産むのが、わたしの一番おおきなつとめだとおもっています」
　鶴姫は納得のいかぬ顔でこたえた。
（殿には外にお子がいらっしゃるから、そのようなことをおっしゃる）
　鶴姫の顔はそう言っているようである。
　幸隆はそれについては弁解をしなかった。
　子は何としてもつくらねばならぬ。一族を将来繁栄させるには、すぐれた子孫をのこしていかなければならない。これは武士として、一族の棟梁としての責任であった。
「子を産むのにあせることはない。いつ産まれてもいいのだ」
「女子が子を産むにしても年ごろがございます。いつでもいいと言うわけにはまいりませぬ」



　鶴姫はこの一点についてはかたくなである。
「仲むつまじくいたしておるのだから、そのうち生まれるであろう」
「それが生まれないのですから、つるは困っております」
　気丈な鶴姫の眸がうるんできた。
　幸隆はなぐさめようもなくなった。

　幸隆はこのところずっと、戸石城の乗っ取りをかんがえていた。
　昨年の〈戸石崩れ〉は武田家に甚大な被害をあたえた。総指揮をとったのは晴信自身であるが、情報収集や現地案内をおこなったのは幸隆である。しかも幸隆地元の戦いであった。
　昨年幸隆の調略がもっとすすんでおれば、あのような結果は見なくてすんだはずである。幸隆はその失敗を取りかえさなくてはならないとおもっていた。
（調略と謀略だけで戸石城を落せたら……）
　と心中ひそかにおもっていた。武田一万の大軍で成せなかったことを真田家のみでやってしまおうというのだ。
　幸隆は着々とその作戦をたてていた。
　作戦の絵図はできつつあった。
　一夕、幸隆は重臣、股肱らと謀議をかさねた。矢沢綱頼、海野十郎左衛門、望月三郎兵衛、別所八郎太、丸子重兵衛、浦野五郎三郎らに、今夕は河原隆正がくわわっていた。兵庫も側臣として同席した。
　昨年、幸隆は清野左衛門を調略し、味方につけた。さらに同族の大塚の調略に成功していた。
　ところが戸石崩れのころは、まだ西条氏、東条氏、寺尾氏、須田氏などの調略が途中であった。そのために清野、大塚両氏がまだうごけず、結果的に武田軍の惨敗をまねいたと言える。
「西条、東条、寺尾、須田のこころがほぼきまった」
　本丸座敷で幸隆は口をひらいた。
「その四氏がこちらにつけば、村上の内部はがたがたになる。戸石城は落ちたも同然となろう」
　矢沢綱頼が言った。
「清野、大塚は大丈夫として、西条、東条、寺尾、須田の四氏のこころはぐらついてはおりませぬか。もし変化があったとしたら、大変なことになります。こちらの作戦はくつがえされてしまうでしょう」
　と言ったのは海野十郎左衛門である。
「長年、村上に忠勤をはげんできた者たちですから、よほどの確信がありませんことには、迂闊に信ずるわけにはまいりません」
　河原隆正もそう言った。
「迂闊には信じておらぬ。確信はある。西条らは村上を見はなしておる。武田にほろぼされると見ておるのだ。今の領土を保障してやれば、かならず村上を見かぎって、武田をたよるだろう」
　幸隆は昨年から書状によって西条、東条、寺尾、須田を説得しつづけてきたのである。
　上田原の合戦、戸石崩れと二度にわたって武田は村上に苦杯を喫したが、それでもじわじわと小県以北の北信に武田家の力は滲透してきたのであった。底力の差というものだろう。
「四氏が晴信公を信用いたすでしょうか」



八郎太がいくらか疑いをはさんだ。晴信が敵にたいして非情苛烈な大将だという印象を持たれているからだ。

「かつて海野家も武田とたたかった間柄である。が、わしは真田として武田家で厚遇をうけておる。武田に忠誠をつくせば、晴信公はかならずそれにむくいてくれるとわしはこたえた。わしが間に入るから、ともかく幸隆を信じよと説得した」

幸隆は一座の諸将に言った。

どのような局面でも、味方を裏切り、敵に内通するのは大変な覚悟と決断を要する。戦国の世に表裏内通はしばしばおこなわれるが、けっして安直な利害や打算だけでおこなうものではないのである。一家一族の存続と興廃を賭けて必死なおもいでおこなわれる。とことん結果を問いつめたうえで実行されるのである。

昨年、四氏がこころをうごかしながらも決断にいたらなかったのは、そういうむつかしさがあるためだ。裏切ろうとする者も必死である。

「今回は、この四氏も信じてもよさそうな気がするが」

丸子重兵衛が言うと、

「四氏はもちろん、清野、大塚からも人質をとるつもりだ」

幸隆はきびしい口調で意図をあかした。

「四氏と清野、大塚が応じましょうか」

「応じてもらうよう説得する」

「それができれば、もう安全でございましょう」

「人質はどうしても取る。取らねば大胆な策がとれぬ」

「人質をとれば、真田だけで戸石城を落せるかもしれません。武田の大軍は必要ではありません」

八郎太が意気さかんに言った。幸隆の意図が八郎太にはわかったようだ。

「四月いっぱいに返事がくることになっておる」

「それはたのしみでございます。戸石城が落ちれば、村上の本城葛尾も運命がきわまるでございましょう」

「まだよろこぶのははやい。人質を見てからだ」

幸隆は今回は長々と村上軍と戦をすることをかんがえていなかった。戦闘となれば村上は北信の勇族として覇をとなえてきただけに、兵はつよい。勇敢でもある。幸隆は一回か、おそくとも二回で戸石城を落すことをかんがえていた。

四月晦日を一日前にして、真田郷と村上領が触れ合う千古温泉の近くの古寺、耕竜寺に、清野、大塚、西条、東条、



寺尾、須田の重臣、宿将がひそかにおとずれた。

その耕竜寺に幸隆も兵庫や八郎太、三郎兵衛、丸子重兵衛らをつれてやってきた。

耕竜寺の阿弥陀堂において一同は会した。

この寺は千曲川の支流洗馬川のほとりの閑静なところにある。近くに河童伝説をもつ千古の滝があり、耳をすませば滝の音が聞える。

「お待たせいたした、ご一同。わざわざご足労をおかけして、かたじけない」

幸隆はにこにこわらって一同を見まわした。

態度に余裕を見せてはいるが、幸隆は人質の件を六分四分の可能性と見ていた。まだ四分の疑いをいだいていた。

したがって幸隆は兵庫や八郎太だけをつれてここにきたのではなかった。矢沢綱頼のひきいる二百の兵が、ひそかに耕竜寺の周囲をとりかこんでいた。もし、否の答がかえってきたならば、ただちに二百の軍が六氏の重臣、宿将を取りおさえる手筈をつけていたのである。

これだけの調略をすすめるからには、うまくいかなかった場合の処理もかんがえておかねばならない。取りおさえた重臣、宿将はそのまま人質とすることができ、それを材料としてふたたび六氏と交渉する余地を持てるからである。
　幸隆の合図一つで二百の軍が阿弥陀堂に攻めこむ準備ができていた。大胆な調略、謀略をおこなうには、これくらい細心な準備をしておかなければならない。
「当方こそ、真田どのに何度もお手間をとらせた。真田どののお気づかい、痛み入る次第でござる」
　と最初に挨拶をかえしてきたのは清野左衛門の叔父にあたる宿老清野喜右衛門であった。
「いかがなことに相成りましたか」
　幸隆はたずねた。
「武田家にしたがう以上、もとめられれば人質をだすことも仕方あるまいという結論でござる。ほかの五氏も同様である」
　清野喜右衛門がこたえた。
　六氏はいずれも相談をして答をだしたようであった。
「それは重畳(ちょうじょう)、かたじけない」
　幸隆はにこりと笑みを見せた。
「われら人質をだすつもりでござる。したがって、武田家への取りあつかい真田どのによろしくおねがいいたす次第でござる」
　高井郡の有力な豪族須田家の重臣で、当主の弟にあたる須田勘兵衛が言った。
「それはこちらにお任せねがいたい。領土安堵の件、幸隆しかとお約束いたす」
「人質は来月十日までに、この耕竜寺につれてまいるので、おひき受けねがいたい」
　ふたたび清野喜右衛門がこたえた。
「承知いたした。ついては、来月下旬の一日、当方で戸石城攻めにでる。そのときおのおの方、城内にあって当方にお味方ねがいたい。城に火をかけ、脱城いたしてくれれば、戸石は容易に落城いたすでござろう」
　幸隆は交渉成立と見て、作戦をあかした。
「その旨、了承いたした。かえって主君に申しあげます」
　須田勘兵衛が応じると、ほかの五氏はうなずいた。
　密約の交渉はこれで成立であった。
　約束の四月十日の朝方。清野、大塚、西条、東条、寺尾、須田六氏がそれぞれ、当主の嫡男や次男、あるいは三男をつれて耕竜寺阿弥陀堂にやってきた。
　それから十余日たった夏の夕方、太郎山、大峰山、鳩ヶ峯のつらなる西の空が見事な夕焼けにそまった。真夏の夕焼けだけにひときわ色彩があざやかである。
　誰もが夕焼けの空に見入った。
　その夕焼けが徐々に薄暮につつまれ、夕闇に消えていったころ、太郎山の東端の高陵にたつ戸石城にむかってすすむ真田数百の軍兵があった。
　さらに太郎山と谷づたいの峰にある米山にむかっても、約三百の軍兵がすすんでいった。
　そして太郎山がすっかり宵闇につつまれたころ、ときならぬ一陣の喊声(かんせい)があがり、全山にこだまする法螺貝と陣太鼓のひびきが鳴りだした。
　真田の軍勢が城の南方、大手側から、矢や火矢を射こみはじめた。
「すわっ、夜襲だ！」



「真田の奇襲であるぞっ、おのおの出会え！」
「真田の軍の背後から武田の本軍が攻め寄せてくるかもしれぬぞっ」
　戸石城内はただちに応戦にたちあがったが、何分(なにぶん)夜間のこととて、物見台からも寄手の様子が見えぬ。大手門から弓隊がしきりに南へむかって矢を射はなった。槍隊、騎馬隊も出陣のそなえをして、大手門の内側にひかえた。
　物見が出動して、偵察にでていった。
　真田軍からの矢は雨霰(あめあられ)と降ってくる。火矢は大手門にとどいて、門の一部が燃えはじめた。
　昨年の戦いで武田軍を追い散らし、甚大な被害をあたえているので、村上側は真田軍が簡単に攻めてくるとは予想していなかったのだ。
　しかも夜襲はなおさら予期していなかった。夜間は地理につうじていない敵のほうが不利となるからだ。
　米山城のほうからも法螺貝や太鼓のひびきが聞えてきたので、そちらにも敵襲がおこなわれていることがわかった。
「守りを固くし、夜明けを待て。夜が明けたら総攻撃だ」
「どうやら攻撃は真田だけの模様だ。明日になったら、蹴散らしてやる」
「こうなったら真田郷に攻め入って、松尾城を落してやろう」
　村上軍は夜間の戦いでばたばたとうろたえるのは無駄であると判断し、守備に徹する作戦にでた。
　そうなると、真田軍の攻撃はいっそうはげしくなった。弓隊は騎馬隊や槍隊にまもられて大手門の近くまで攻め寄せてきて、矢や火矢をはなってきた。
　この状況では、守りに徹した城方もいくらかは応戦せざるを得ない。
　それでふたたび攻防がはげしくなった。
　夜空に火矢が飛びかう情景はすさまじいものである。いやがうえにも、戦意をかきたてられる。火の粉が雨のように散り、門内に射こまれた矢が燃えあがり、消火の兵が右往左往する。
「攻めつづけよ、手をゆるめるな。敵を混乱におとしいれるのだ！」
　真田軍では幸隆みずから指揮をとって、軍兵を鼓舞した。
「戸石城を落とせば、本領は回復し、一族再興はなるのだ！」
「死に物ぐるいで攻めよ」
「昨年の恥辱をかえすのだ」
　諸将は麾下(きか)の勢を叱咤し、攻撃をつづけさせた。
　昨年の一万の軍勢にたいして、今年はわずか八百の少勢であるが、真田軍の意気は昨年以上だ。
　夜はしだいに更けていった。
　攻防はなおつづいている。
　火矢はまだ夜空を焦がしている。兵の喊声や、貝、太鼓のひびきもやまぬ。
　二更(にこう)から三更(さんこう)に入った。
　そのとき、戸石城の各所からおおきな火の手があがった。
　火の手は見る見るうちにさらに大きくなって燃えひろがってゆく。
　城内に半鐘が乱打された。
　城兵たちは消火にあたっているのだろうが、ききめはないようである。一度に何ヶ所からも火の手があがったので、失火とはかんがえられなかった。
　平地ではさして風のない夜であるが、

山の上となるとべつである。かなりつよい風が吹いている。
その風の勢にあおられて、火の手はのびるばかりだ。
城内は混乱におちいった。
「裏切りだっ、須田、西条が敵方に寝返ったぞ！」
「清野、大塚も寝返った」
「ほかにも裏切り者がいるぞ！」
燃えあがる炎のなかで、城兵たちのわめき声があちこちにひろがった。
「裏切り者をゆるすなっ」
「寝返った者どもをとらえよ！」
「寺尾、東条もあやしい。裏切者が城に火をはなったのだ！」
城内の混乱はもうおさまらなかった。
これで真田一軍だけで攻撃をかけてきた理由もわかった。
村上の陣営は夜襲と放火とで、まったく統制がとれなくなった。統制がうしなわれれば混乱はひろがるばかりだ。坂道をころがる石のようなもので、この勢はもはや誰にも止めることができない。
裏切者の出現で、誰が味方で誰が敵かわからなくなった。
右往左往の混乱と狼狽が城内をおおった。
火の勢もはげしくなるばかりで、本丸の半分近くが火につつまれた。
城から逃げだす城兵が続出した。
諸将の命令ももう城兵たちにとどかなくなった。
翌早朝には、難攻不落をほこった要塞戸石城があっけなく落ちた。
城兵たちは本城のある坂城めざして落ちていった。
日のあがるころには、真田軍が戸石城を占領した。

## 長谷寺

真田郷に活気のある槌音がひびいている。
一昨年の戸石落城によって、上田をふくむ海野平が晴信の朱印状どおり幸隆にあたえられていた。天文十年に海野平を追われ、十年めにして、幸隆はその領土に復帰したのである。
そして今、真田郷の岩井堂川のほとりに、槌音もたかく一宇の寺が建立されていた。そこには昔から種月庵という草庵があったが、それを廃して真田家の菩提寺がつくられているのである。
その名は長谷寺である。
開山になる坊主は毎日松尾城から足をはこんできて、自分が住職となる寺の建築を見まもっている。
背がひょろっと高く、わらうと欠けた前歯の見える僧である。
「晃運坊主との約束がようやくはたせたので、肩の荷がおりたおもいだ」
今日は幸隆も建築現場にきていて、自分の菩提寺ができていく様子を見ていた。
「ものは言うておくものだ。よもや半月寺で言ったことが、本当のことになるとはおもうておらなかった。あのころ小次郎と名乗っておった貧乏侍がよもやこれほどの大将になろうとはな」
晃運は今でも着ふるしの墨染をまとっており、風体に当時とあまりかわっていない。のびた不精髭に白いものがまじっているくらいがかわったところだ。



「あのころ、わしを見て将来きっと世にでると言ったのは坊主ではないか」
幸隆が言うと、
「おぼえておらんわ。けれどもあのころから幸隆どのは一頭地をぬく雰囲気を持っておった。それで口から出まかせにそう言うたのだろう。元気づけるためだったかもしれぬ」
今や武田家の宿将になった幸隆だが、浪々のころから知っている晃運は昔馴染のままの態度である。
「おそらくその程度のことだったろう。だが、約束は約束だ。坊主にわが菩提寺の開山になってもらうことにした」
のどかな田園風景に目をあそばせつつ幸隆は言った。
「見かけによらず、幸隆どのは律気な大将じゃ。世に謀将と言われておるのが不思議なくらいだ」
「坊主を相手に謀はいたさん。後生がわるいからな」
「武士をたばかるのは兵略だから、いくらやってもかまわん。はかられるほうがわるい。しかし幸隆どのがこれほどの謀将になろうとはわしもおもうておらなかった。まだ幸隆どのは若い。これから天下に名だたる謀将となられるかもしれぬ」
寺を建ててもらったためか、晃運はいくらか世辞らしいものを口にした。それに若いころから知っている幸隆が出世したことが晃運もうれしいらしい。
「わしはことさら謀将などとはおもうておらん。信濃のちいさな豪族がこの世をたたかいぬいていくには、いくらか謀も必要なのだ。これなくしては、とうに滅んでおるだろう」
「そうだ、謀なき武士は生きてはいけぬ。が、謀だけでも生きてはいけぬ。信義なき武士もいつかはほろぶ」
「坊主、抹香くさいことを」
「幸隆どのとて、晴信公へ信義をたてとおしたであろう。信義は武士にも必要なのだ」
「相かわらず説法はうまい」
「説法がへたでは坊主はつとまらぬ」
「真田一族の菩提寺を坊主にまかす。たのんだぞ」
「いつでも骨はひろうて進ぜる。こころおきなく幸隆どのはたたかわれるがいい」
「今度、源五郎が甲府へゆく」
幸隆がそう言うと、晃運の眸に生真面目な光がやどった。
「源五郎君が甲府へ……」
晃運は真田郷にきてから何度か幸隆の息子たちに会っている。息子たちのなかでは晃運が源五郎にいちばんつよい印象をもっていることを幸隆は知っていた。
「晴信公のもとに行かせる」
幸隆は言った。幸隆が晴信から領土をたまわり、武田家の有力な武将になったのとひきかえに人質にだすことになったのである。源五郎は今年七歳なので、人質にだすのに不足はない。自分の手元においてそだてるのもいいが、晴信ほどの大将のもとに小姓としてつかえるのも将来のためだと幸隆はおもった。
「可愛い子には旅をさせろというから、源五郎君のためにはなるかもしれぬ」
「晴信公のもとで立派な武将にそだてばいいとおもっておる」
「源五郎君はきっとつよい武将にそだつ。わしは以前からそう見ておった」
「源太郎、昌次郎とちがうか」
「兄君二人も見所のある資質をしておら

れる。が、源五郎君はそれとはちがうつよい運勢と天分をお持ちのようだ。幼いながらも骨相にそれがあらわれておる。わしは源五郎君の行く末をたのしみにいたしておるんじゃ」

「坊主、そう見るか」

「あるいは幸隆どのをしのぐ武将になられるかもしれん」

「だとすれば、人質にだすのは勿体ないか」

「今更、だし惜しみはできぬであろう」

晃運の言うとおり、もう変更のできぬ事態になって、幸隆は急に源五郎を晴信のもとへやるのが惜しくなった。

いったん晴信のもとへおくれば、源五郎の運命は晴信の意のままになる。幸隆の意はおよばなくなるとおもうべきであった。

幸隆は晴信のもとへ人質をおくるのにあたって、はじめは人選にまよった。源太郎は嫡男であるから、真田の家においておかねばならない。昌次郎をだすか、源五郎をだすかでまよった末に源五郎にきめた。源五郎には親もとからはなれて、幼いころから他国できびしい修行をつんでもらいたいという願いもあったのだ。

赤い月の夜、逆子で生まれてきた源五郎は三歳ごろまではよく病気をし、高熱をだして死にかけたりしたこともあったが、近ごろはとても元気な子供になった。知能は生まれながらにすぐれていた。肝は兄二人よりもふとい。

幸隆はこのごろ何となく、源五郎が将来大物になりそうな予感をおぼえているのであった。自分の幼いころにくらべると、源五郎のほうが知能にすぐれ、肝もすわっているような気がするのだ。これで晴信のもとで薫陶をうければ、まちがいなくひとかどの武将になれるような気がした。

一昨年の戸石落城いらい、信濃の様子はおおきくかわった。昨年の八月、中信濃における最後の反抗の拠点であった小岩岳城がおち、中信濃はまったく武田軍のもとにしたがった。

晴信は中信濃から村上氏に圧力をかけ、今年四月深志城に出陣し、苅屋原城を改めておとし、塔ノ原城もおとした。さらに晴信が十二の部隊で村上の本城葛尾を攻めると、意外にもこれがたたかうことなく落城した。どれほど堅固な要害であろうと、落ち目になるとまるであっけなく落城してしまうという証明であった。

村上義清は本領の信濃を捨てて、長尾景虎（のちの上杉謙信）をたよって越後へ落ちのびた。

屋代、塩崎、石川、高坂ら川中島の豪族は武田家にくだり、高梨、井上、島津、栗田などの豪族は村上とともに越後へ逃げた。

葛尾城のおちた後の四月下旬、武田軍の先鋒八部隊がはじめて、八幡において越後軍と北信諸豪族の連合軍と遭遇して戦いになった。これが武田軍と長尾軍（のちの上杉軍）との最初の戦いであった。

長尾景虎は北信濃が武田の制圧するところとなり、諸豪族が越後に逃げてきたので、その乞いをいれて北信濃を武田から奪還するために出陣したのだ。自分が信州に雄飛する野心ももっていた。

武田軍は劣勢におちいり、いったん帰国してから大軍をもよおして攻めのぼり、一時、敵の手にわたっていた和田城、高島屋城、内村城、塩田城などをたちまちうばい返し、そのほか近隣十六城をも落とした。

このときの功績で、真田に信濃の地三百五十貫があたえられ、交換条件に人質をもとめられたのである。このとき真田にあたえられたのは上田の西方につづく秋和という地である。

幸隆は今いったん帰国しているが、すぐに出陣して武田軍との合流が待っていた。その出陣には源太郎が初陣することになっており、彼はこれを期に源太左衛門と名をあらためることになっていた。

幸隆は、嫡男の初陣と三男の甲府行きという二つの事態を目前にしていたのである。

幸隆が晃運と会った数日後、河原家にひさびさに源太郎と昌次郎が城からもどってきた。

河原家で両親のもとに、三人の兄弟があつまった。

源太郎は十七歳になっており、実質的な初陣はすでに一昨年、戸石城をおとした戦いではたしていた。武田軍の一員として戦いに今度はじめて参加するのである。

兄弟三人があつまったところで、明乃は感慨がふかく、眸をうるませている。源太郎がたくましい若者にそだってきているのはよろこばしいかぎりであるが、まだ七歳の源五郎が甲斐へ人質として出発することへのおもいが胸をしめつけていた。

明乃は来年出産を予定しているが、それまでは河原家に子供が一人もいなくなる。

源太郎と源五郎を見ると、明乃には自分の現在と過去がおもいだされる。

十二年前、源太郎が五歳のとき、滋野一族がやぶれ、海野家も海野平を追われた。明乃は源太郎とともに、帰農した兄隆正と河原にのこりひっそりと忍従の暮しをつづけた。その源太郎が立派にそだち、源五郎は海野家が没落したときの源太郎の年齢をわずかにこえた。そのあいだの年月が明乃におもいだされた。

兄隆正は帰農して、隠忍の暮しをしつつ明乃や源太郎をまもってくれた。幸隆の行方がまったく知れなくなった歳月がつづき、そのあいだは生死もわからなかった。それがある日とつぜん海野小次郎から真田幸隆になってもどってきた日の驚き。それから幸隆のまるで昇り竜のような活躍の日日がつづいた。そして立派に旧領を回復したばかりでなく、かつての滋野一族の面々が幸隆のもとにぞくぞくともどってきている。幸隆は今や武田家の重臣のうちにかぞえられ、昔の海野家当時とは比較にならない勢威をほこっている。それまでに昌次郎や源五郎が生まれ、明乃と幸隆のあいだはむつまじさがつづいているが、ある日とつぜん幸隆に正妻がとついできたときの驚きとかなしみ。

いろいろな感慨が明乃のうちを去来した。

「母上、わたくしのことでしたら、何も心配はございません。甲府は海野平の地つづきでありますし、四日もあれば行けるところです。気候もここと変らないようです」

源五郎は敏感に母の胸中を察して言った。

「そうです、母上、源五郎は晴信公のもとに修行にでかけるのです。立派な武将

になって、いつか真田にもどってくるでしょう。すこしも心配はいりません」
　源太郎も兄らしく言葉をそえた。源太郎は今や大人の領域に近づいている。母の明乃でさえ、近ごろははっとするほどの男くささをにじませているのだ。
「わたしは源五郎の心配などいたしておりません。源五郎に立派な武将になってもらいたいとおもっているのです。父上の後はそなたたち兄弟で真田の家をささえていかなければなりません。三人力をあわせて、真田家をまもっていってください」
　明乃はそう言ったが、源五郎の身が心配でないはずがなかった。いったん甲府へおくりだせば、簡単にはもどってこられないし、源五郎の運命は晴信の掌のなかににぎられることになる。
「わたしは父上がつくった真田の家をしっかりとまもっていけるような武将になるために甲府へまいります。安心して待っていてください」
　源五郎はその年ごろの少年には似合わない大人びた言葉で言った。
「戦国の時代というのは、どんな国であれ、いつほろぼされる事態となりかねない。そんなとき兄弟三人そろっておれば、かならずよい方策が生まれるだろう。たとえ一人がたおれても、あと二人が頑張ればよい。兄弟三人力を合わせれば、どんなことがおこっても恐くはない。戦国の世に小豪族が生きていくには並大抵のことではないのだ」
　幸隆は三人の息子たちに言った。息子三人とも今まですこやかにそだってきたことが、幸隆はうれしかった。
「父上も小豪族ゆえに領地をうしない、他国でご苦労をかさねられましたから」
　源太郎はそのあいだの時代を知っているだけに、身にしみていた。父は他国を流浪し、母と伯父にそだてられた。
「信濃はとりわけ小豪族のおおいところだ。しかも周囲をとりまく戦国大名が折あらばと信濃への侵入をねらっておる。生やさしい気持では、信濃の豪族は生きてはゆけぬ。そのことを肝に命じて、生きていってもらいたい」
　幸隆が言うと三人の息子はうなずいた。将来、自分と父棟綱との確執の実体を息子たちが知ったならば、幸隆の言葉の真実がわかってもらえるだろうとおもった。小豪族が生きてゆくには、ときとして肉親同士ですら血をながし合わなければならないといううきびしさは言葉だけでは説明できなかった。
　そのヒソミにならって言えば、幸隆の息子の三兄弟でも、場合と時代の局面によっては相剋の運命をたどることがあるかもしれない。明乃は無意識のうちにそれをおぼえたのである。
　そんな三人の兄弟が今は幸隆と明乃のあいだで源五郎の別れの膳を前にしている。
　源太郎はすでに幸隆の跡継ぎとしての自覚をもち、これからたくましい青年にそだとうとしている。末弟の源五郎も幼いながらしっかりとした強さが感じられる。
　次男昌次郎を幸隆は少々ものたらなく感じていた。性格がやさしいためか、表には弱さがでてくるが、これとてもまだ少年であるから心配はしていなかった。これからの鍛えようで武将の器がみがかれるだろうとおもった。
「今後、真田の家はどのような方向です



すんでいけばよいとおもうか」
　幸隆はこころみに聞いてみた。
　幸隆が源太郎を見ると、
「わが真田の家は先祖伝来の海野平をしっかりと確保いたし、そのために武田家の信州先方衆として第一線ではたらきをつづけてゆけば、おのずから安泰の道が得られるでしょう。場合によってはその上がのぞめるかもしれません」
　源太郎はそうこたえた。
「昌次郎はどうおもう」
と聞くと、
「兄上と同じです」
とこたえた。
「うむ、源太郎の答えに間違いはない。だが、もし武田家がほろぼされたときのことをかんがえたことがあるか」
　そう言ってふたたび源太郎を見た。
「そのときは率先して武田家のために仇を報じる所存であります」
　源太郎はこたえた。
「源五郎は?」
　まだすこし早すぎる質問だとは幸隆はおもった。
「はい、わが家は武田家の宿将であります。武田家がほろんだときは、真田家のみにて独立して生きていく機会ではないかとおぼえます」
　まだあどけなさののこる源五郎がそうこたえた。
「真田の家が周囲の戦国大名に伍して独自で生きてゆけるか」
「はなはだむつかしいとはおもいまする。けれども全力をもってたたかい、その道をさぐることがただしいかとおもいます」
　源五郎はまっすぐに幸隆を見てこたえた。
　幸隆は源五郎の肚のおおきさに喜びをおぼえた。
「源太郎の言うことも、源五郎の申すこともただしい。双方成就できれば言うことはない。そのときになって、できることを考えるべきであろう。ひとつ、付けくわえるならば、武士というものは時機にあたって野心をもつべきであろう。上へ上へと伸びてゆく気持をうしなわぬことが大切である。時運に賭けて大飛躍を期するこころがけが武士の魂だ。武力であたるもよし、謀でぶつかるもよし。これなくして何の武士であろうか」
　幸隆はそうしめくくった。
　三人の息子たちは幸隆の言葉に聞き入っていた。
　その翌日、源五郎は甲府へむかって旅だった。矢沢綱頼の息子三十郎も源五郎に同行した。
　八月中旬、晴信がふたたび甲信の軍勢をひきいて川中島地方の南部へ進出したのに際して、幸隆も源太左衛門をともなって、その軍に合流した。
　晴信は初陣の源太左衛門を見て、
「弾正忠の息子であるか。たのもしき若者であるな。その方の親父は戦の天才である。親父どのの戦ぶりをよくながめて、戦略戦法をまなぶがよい」
　としたしく声をかけた。
　晴信は幸隆に似て大柄で骨太な源太左衛門を将来有望だと見こんだようだ。そして、親父は戦の天才とまでもちあげた。戸石城を真田軍だけで落とした戦績を見れば、あながちそれを大袈裟とは言えないのであった。晴信はその幸隆の嫡男に期待するものがあったのであろう。
「はいっ、ご期待にたがわぬようつとめ

まする」
　源太左衛門はさすがに緊張でこちこちになってこたえた。
「真田は村上軍にくまれておるばかりではない、越後の軍勢も真田となると必死で戦をいどんでくるであろう。覚悟をしておけ」
　晴信はもう一度源太左衛門に声をかけた。
「真田の武士はいつにてもどこにても、死ぬ覚悟ができております。不惜身命の旗印のもとで戦をいたしおります」
　源太左衛門がこたえると、
「よきことを言う。その覚悟をわすれるな」
　一喝するように晴信は言った。
　源太左衛門は晴信に謁見し、言葉をかわしたことで、落着きができ、自信がわいた。真田をほめたたえられたことで勇気もでてきた。
　晴信の川中島進出によって、長尾景虎もただちに越後から川中島に進撃してきた。
　両軍は布施でたたかい、つづいて、八幡、荒砥城であらそい、越後軍は青柳に火をはなち、埴科郡にも進出してきた。
　総じて、越後軍のほうが優勢で、晴信は塩田城にこもったまま、主力部隊の決戦を避けた。
　景虎は武田の占領地を広範囲にあばれまわったあげく、九月末には越後へひきあげていった。
　晴信も十月の初めごろには信濃から甲斐へ軍をひきあげた。

## 葛山攻め

「おつる、このごろ気分はどうなのだ」
　翌々年の春も盛りを過ぎた日の昼下り、幸隆は戸石城の本丸の鶴姫の居間で声をかけた。
　幸隆の居城は昨年から戸石城にかわっていた。村上がやぶれ、城の一部が燃えた戸石城を修築し、幸隆はここから川中島ににらみをきかせ、真田郷の松尾城には矢沢綱頼が留守をしていた。
「毎日がこよなくたのしゅうございます。殿が毎日お城にいらしてくださるので、これ以上のよろこびはございません」
　鶴姫はあでやかに微笑んで幸隆にこたえた。
　鶴姫の笑顔に幸隆はすくわれたようなおもいだが、その笑顔のなかに少々翳るものがあるのを幸隆は感じていた。いくらか鶴姫の頰におとろえの感じられるのも、気がかりであった。
「おつるの笑顔を見るのが、おれはいちばんたのしい」
　幸隆がそう言うのは本当である。
　かつての鶴姫らしくもなく、近年鶴姫がさびしげな表情を見せるときがあるのを幸隆は気づいていた。とくに昨年、明乃が四男六郎太を産んでから、そんな様子をしばしば見せるようになった。
　依然として鶴姫には懐妊のきざしはなかった。言葉にはしないが、鶴姫にはそれがずいぶんこたえているようである。
　けれども子安地蔵まいりはまだつづけている。子は夫婦にとって必要なばかりでなく、豪族や戦国大名にとって子孫をのこすことが繁栄につながる。それは長野業政の娘として、鶴姫がいちばんよく



知っていることであった。
「殿のよろこんでくださることが、わたくしのいちばんのたのしみです」
　鶴姫はそう言って、おだやかにわらった。
「子のできないことは、おつるが気にすることはない」
　と以前に言ったことがあったが、それは鶴姫へのなぐさめにはならなかった。
「わたくしはどうしても欲しいのです。この世で殿と夫婦となった甲斐に子供の一人くらい産めなくてどういたしましょう」
　とそのとき鶴姫はこたえたものであった。
「世に子供のいない夫婦はいくらでもいる。それでも夫婦はむつまじくやっておる。子供のいるいないで夫婦のむつまじさがかわることはない」
　幸隆がどうなぐさめようと駄目だった。それいらい幸隆は子のはなしは口にしたことがなかった。
　どこまでも明るくて、気性のはげしい姫だけに、しずんでいる鶴姫を見るのは幸隆もしのびなかった。
「このごろ何故か、箕輪から殿のもとにとついできたときのことがおもいだされてなりません。わたくしも、あのころは若く、元気でした」
　鶴姫が以前のことを口にした。
「今だって、おつるは若くて、元気ではないか」
「あのころは恐いもの知らずで、世の中のこともわかっておりませんでした。ですからあんなことができたのでしょう」
「おつるなら、今だってやるだろう。あのころと変っていない」
「少しは変っておりましょう」
　言いながら鶴姫はわらった。その笑顔は当時と変っていない。
「もしおれが他所の国へ行ったら、おつるはきっと追いかけてくるだろう」
「そうかもしれません。わたくしは殿に賭けたのですから、殿とはなれるわけにはまいりません」
「そうら、以前とすこしも変っておらぬ。これからも、きっと変らぬだろう」
「殿は変らぬわたくしはおいやですか」
「そんなことはない。今のままで十分いい」
　幸隆はそう言ったが、鶴姫にはぬけるような明るさはない。笑顔を見せるにしても、どこかに翳がある。
「源五郎どのはお元気でしょうか」
　鶴姫は話題をかえた。
「元気なようだ。三十郎もついておるので、さびしくはないだろう。たとえさびしくとも、耐えていかなくてはならぬ。それが豪族の子だ」
　幸隆はそれについてはまったく心配していない。敵国に人質としてとらわれているのではない。幸隆が晴信を裏切らぬかぎり、源五郎は甲府で大切に待遇されているのである。無事に晴信の小姓をつとめあげれば、ゆくゆくは武田家の旗本として取りたてられる可能性がある。いずれにしろ源五郎の将来はひらけている。
「源五郎どのは逆子で、幼いころはよく病気をいたしましたが、今はお元気で何よりです。わたくしはお子たちのなかで、源五郎どのがいちばん殿に似ていらっしゃるような気がいたします」
「おれは逆子なんかではなかった。母親

をくるしめるようなことはなく、すんなりと産まれた」
「左様でございますか」
「だが、最後にわしは親を剋する運命が待ちうけていた。情知らずの男だと今でも世上言われておる」
「それは合戦がおこなわれたのですから、仕方がありません。武士は敵味方になれば、親兄弟といえどもたたかわなければならないでしょう」
「それはそうだが、親を子が剋した例はあまりない」
「戦場での一騎打ちですから、やむを得ません」
「親父どのもおそらく、そうおもってくださっておるだろう。これほど武士というのは生きづらいものだ。よほどの覚悟がなくては、武士は生きていかれぬ」
鶴姫の前だから、幸隆はおもうことが言えた。
「戦国の世では、そのような例はいくらもあります。お父上さまがうらんでいらっしゃるはずはありません」
鶴姫がいやにはっきりと言うので、幸隆もそのような気がしてきた。
「もしも殿がそのお立場にたったとしても、お子をおうらみあそばされることはないでございましょう」
鶴姫はかさねて言った。
「おれに負けるような子供たちであっては困る。それではそだてた甲斐がないと言うものだ」
幸隆は本当にそうおもった。
これから数日後には、幸隆は源太左衛門とともに真田軍をひきい、武田軍として川中島に出陣した。
晴信は善光寺の南、大塚に本陣をおき、景虎は善光寺境内の東につづく城山の横山城を本陣として、両軍は犀川をへだてて対陣した。
両軍は七月十九日、犀川附近で衝突し、競い合ったが、決定的な勝敗のないまま双方は軍をひいた。
対陣は四ヵ月もの長きにおよんだが、そのほとんどは両軍のにらみ合いと探索に終始し、冬に入りはじめるころ、甲越両軍は今川義元の和談の仲介によって、甲斐と越後に軍勢をひきあげた。武田軍にとって、みのりのすくない長き対陣であった。
甲斐、越後の両国と戦場となった信濃はいずれも雪国であって、冬季の戦闘がままならぬ。それと、甲越両軍とも兵糧は原則として兵の自弁であるため、あまりに長い対陣には耐えられない。長期にわたりすぎると兵が疲労し、脱軍しはじめて、軍のまとまりがつかなくなるのである。
幸隆も源太左衛門とともに軍をひきいて、鶴姫のもとにもどった。
「このたびはとても長き出陣でございました。もう太郎山には三度雪が降りました」
鶴姫は幸隆をむかえて、待ち侘びたように言った。本当に鶴のように首を長くして待っていたことがうかがえた。
「里にも雪が降っておった。越後軍との戦いは、今後長きにわたるだろう」
幸隆はこたえた。
長尾景虎ひきいる越後軍は今まで武田軍が相手にしてきた小笠原や村上などの軍とは一段も二段も強さがちがう。軍勢の規模もことなる。しかも景虎は晴信よりも年少ながら、勇敢無比であるばかりでなく、神仏に一生の不犯をちかった神



がかり的な精神力にささえられた稀代の勇将というべき人物である。人間的な気迫、器の面でも晴信と五分々々にわたり合える大将だという評価が武田軍の内部にもある。幸隆もそうおもっていた。
武田軍はついに国内最大ともいうべき敵とぶつかった。しかも、その先鋒をつとめる立場に真田はたった。
「左様でございますか、越後の軍は強敵と聞いております」
鶴姫の顔には憂色がしのび寄っている。
「噂にたがわぬ強敵だ。甲信の軍と長い年月死闘をつづけ、共倒れになることが心配だな。そうすると漁夫の利を得る者がでてくるかもしれぬ」
それは兵略家としての幸隆の予感であった。不吉な予感と言ってもいい。
しかし現実に景虎が晴信の最強の敵として登場してきた以上、最善の努力をもってたたかうしかない。真田は信州先方衆として逃げ場のない戦場に追いこまれたことになる。これから何年つづくとも知れない戦いである。幸隆もよくよくかんがえなければならなかった。
鶴姫はそれを本能で察しているようである。
「気をつけねばなりませんね」
「ともかく今は講和がむすばれた。しばらくは越後軍との戦いはないだろう」
と幸隆はこたえたが、鶴姫は返事をしなかった。戦の講和があてにならないものであることを鶴姫は知っているのだ。
「いつまで、その講和がもつでございましょう」
鶴姫はつぶやくように言った。
「長くはもつまい」
今川義元の仲裁で、晴信と景虎は誓紙をとりかわしているが、幸隆もそう看破していた。
本来、誓紙とは神仏にかけて誓った約束である。しかも晴信にしろ景虎にしろ、神仏にたいしては敬虔であり、信仰ぶかく、寺社領を寄進し、あつく祭祀をおこなっている。だが、晴信も景虎もいつまでもその誓紙にとらわれ、しばられているわけではないのだ。
翌弘治二年八月八日、晴信から幸隆のもとに手紙がとどいた。
（きたな）
と幸隆はおもった。
『雨飾城はその後どうなっているか。片時もはやく陥すようつとめてもらいたい。こちらは一両日人馬をやすめているから、要請がありしだい駆けつける』
手紙はそういう内容であった。
晴信ははやくも誓約をやぶれと言ってきたのだ。
雨飾城は、海野平から地蔵峠をこえて川中島へ入る口元をおさえる山城である。峻険な雨飾山の頂きにあり、ここを真田が占領すれば、地蔵峠道がひらけ、川中島への戦略距離がいちじるしく短縮される。
幸隆は三年前、この城を攻めたが、村上方の残党がここにこもり、死守したので、城は落ちなかった。が、三年前と今とでは周辺の状況がちがう。周辺の諸豪族はあらかた武田に帰順していた。ほとんど幸隆の調略によるものである。
幸隆は八月中旬、ひそかに戸石城を出陣して、地蔵峠をこえた。
地蔵峠道を北西へすすみ、雨飾城を前にした。
雨飾城の近くには清野、西条、寺尾な

どの豪族が古くからおり、それらは今は武田に帰順している。真田軍が雨飾城を攻めると、その諸豪族が周辺から掩護した。
そのため今回は攻撃が順調にすすんだ。
十日余りの攻撃で雨飾城は落ちた。
だがこの年はもう冬が近づいていたので、甲信の軍勢は川中島には出動しなかった。幸隆が雨飾城に入って、在番をつとめることになった。
明けて弘治三年、晴信は甲信の雪がとけはじめるのを待って、川中島へ出動した。晴信ははじめから誓約などまもる気持はなかったのである。
神仏との約束をやぶっても、神仏は当然ゆるしてくれるという考えが武将たちにはあった。戦国武将として絶対に必要な戦略のためには神仏への違約は仕方のないものという考えは幸隆にも理解ができた。違約をするから、ふだん神仏にたいしては丁重に祭祀をおこなって許しを乞うのである。
甲信軍は地蔵峠から一気に川中島へぬけた。
晴信の攻撃目標は善光寺西北の葛山城である。葛山は善光寺の裏山つづき、一里にたりない至近距離にある山城で、善光寺北方の山々を根拠地にすむ葛山衆がここをまもっていた。またこの城は戸隠から善光寺にでる道をもおさえており、戸隠から越後につうじる道を封じることにもなる。
その朝、幸隆はひそかに晴信に呼ばれた。
「弾正忠、葛山をおとす兵略はあるか」
晴信は単刀直入に聞いた。それだけ晴信と幸隆との距離は近いものになっていたのだ。
「落合一族の調略がきめ手となるでしょう」
幸隆は即答した。落合一族は葛山衆の中心になる存在である。
「落合一族を調略する方策はいかに」
「落合一族への調略は静松寺がきめ手になるとおもいまする」
これも即答だ。
晴信はにやりとわらった。
落合氏は裾花峡谷を根城とする鎌倉時代いらいの旧族であり、静松寺は葛山城の中腹にある落合一族の菩提寺である。
「さすが」
晴信はわらいながら言葉をもらしただけである。調略の方法については幸隆に聞かなかった。信用が厚いのである。
幸隆は静松寺の住職静照と晃運とが昵懇であることをおもいだしていたのだ。
「おまかせくださいますか」
「まかせよう」
晴信は二つ返事だ。
「うけたまわりましてございます」
そう受けた以上、もし幸隆は失敗すれば切腹ものである。武田軍の作戦はすべて幸隆の調略にかかってくるからである。
請け合ってから、幸隆ははたして晃運が調略をひきうけてくれるかどうか不安をおぼえた。かりに晃運がひきうけたとしても、調略が成功するかどうかはわからない。
その翌日、幸隆はひそかに兵庫、三郎兵衛、八郎太の三人をつれ、雨飾城から地蔵峠をぬけて、真田郷へもどった。
幸隆が長谷寺に姿をあらわすと、



「幸隆どのはまさに神出鬼没じゃ。今は川中島の戦場におるとおもうたが」
晃運はおどろいてから、前歯の欠けた口をあけてわらった。
「わが軍の兵も、おれが川中島におるとおもうているだろう」
「変幻自在じゃな」
「それほどのことはない。それよりも晃運坊主にたのみがある」
幸隆が言うと、
「よし、引きうけた」
晃運は聞く前に応じた。
「難問だぞ、晃運坊主」
「どのような難問だとて、寺を建ててくれた大檀家のたのみは聞かずばなるまい」
「葛山静松寺の静照和尚と懇意であったな。和尚に一肌ぬいでもらえぬかな。葛山衆をこちらに引きつけてもらいたい」
幸隆が切りだしたとたんに、晃運の顔色がわるくなった。
「……」
「晃運坊主、顔の色がよくないな」
「落合一族は昔ながら村上家にしたがっている。これを寝返らすのは大変なことだ」
「わかっておる、だから晃運坊主にたのんでおるのだ。たのむ、引きうけてくれ」
「ううむ」
晃運はうなった。
「わしは晴信公に約束してしまった。引きうけましたとな」
晃運はうなりつづけた。
「やってみよう。だが、結果はわからんぞ」
「何事も必死になってやれば、成せぬものはない」
「ようし、死ぬ気でぶつかろう」
「そうだ。なせば成る」
晃運はそうこたえ、その日のうちに長谷寺からいなくなった。
翌々日の昼下り、善光寺の裏山つづきに葛山の坂道をゆく晃運の姿が見られた。晃運は若いころ荒行をしたり、行脚の旅暮しをつづけていたので、健脚である。そして方々に知己がおおい。静照もその一人である。
山道の途中で、晃運は葛山衆の番士から呼びとめられた。裾花峡谷や葛山一帯には山番所がいくつもうけられているのだ。
「坊主、どこへ行く」
番士は警戒の詰問をおこなった。
「坊主の山あるきはめずらしいか」
晃運は持ち前の野放図さで反問すると、
「こちらの尋問にこたえろ。このあたりはやがて戦場になる」
番士がきびしく一喝した。
「静松寺へ行く」
「何をしに行くのだ」
番士は疑わしそうに詰問した。
「知り合いの坊主をたずねに行く」
「何という坊主だ」
「静照坊主」
「住職ではないか。おぬし知り合いか」
少々驚いてたずねるので、
「以前、世話になった。わしは晃運という旅の坊主じゃ」
晃運がこたえると、番士の態度はいくらか変った。
「気をつけて行け。あやしまれると、弓で射られるぞ」
と注意した。
「山をあるいて弓で射られてはかなわ

ん。気をつけて行こう」
　そう言いのこして、晃運はあるいて行った。
　中腹あたりに静松寺はあった。その名のとおり、松や杉などの古木にかこまれたしずかな寺である。境内は山腹のかなりの広さを占めている。
　坂道の参道をのぼり、方丈をたずねた。
「晃運か」
　静照は晃運を見るなり言った。
「久しいな」
　晃運もなつかしそうに静照を見て言った。
　静照は大柄な五十歳くらいの僧である。
「以前わしがここにきたのは十数年も前のことだな。この寺の住職になったとは立派だ」
「聞くところによると、晃運も住職になったとか、しかも開山とは大したものだ」
　静照もなつかしさをあらわして言った。
「近くの寺なので挨拶にまいった。だいぶ挨拶がおくれた」
「真田の菩提寺だそうだな。おたがいの領主はこれから戦をいたそうというところだ」
「僧と俗とは噛み合わぬことがある」
「いたし方なかろう」
　両人はたちまち昔の仲にもどって、懐旧の談義に花を咲かせた。
「このたびの戦は大変なこととなるじゃろう」
「ところで晃運、何かわしに話があってまいったのではないか」
　静照はふとそう口にした。
「話もあってまいった。静照に折り入ってのたのみがあるのじゃ」
「そんな気がした。簡単な話ではなさそうだな」
「難問じゃ」
「言うてみよ」
「落合一族を武田に味方させてもらいたい。真田幸隆どののたのみじゃ」
　晃運は打ちあけた。
「晃運、いくらお前のたのみでも、それは無理だ。落合一族ばかりでなく葛山衆はみな村上に恩をこおむっておる。武田は敵だ」
　静照はあきれたように言った。
「静照、それはわかっている。だからたのんでおる。村上は落ち目の大将だ。と言うより、すでに領地をうしない、越後へ落ちのびておる。今さら恩を持ちだすこともあるまい」
「越後へ落ちても、まだ信濃への復帰をねらっておる。長尾景虎どのも村上の後押しをしている。知ってのとおり、わしは落合一族の菩提をとむらっておるのだ」
「村上がどうおもおうと、もう信濃にもどることはできまい。川中島の地はいずれことごとく、武田の領土となる。そうなれば、否でも応でも落合一族の菩提などとむらえなくなる。はやく見切りをつけたらどうだ」
　昵懇の仲だけに、晃運は遠慮なく言った。
「見切りをつけるにしても、今でははやすぎる」
「けっして早すぎはしないぞ。村上がやぶれてから武田につくのと、やぶれる前につくのとでは、天と地の違いがある。坊主も先が読めなくてはならぬ。やぶれる前に武田に忠勤をはげんでおけば、恩



賞がもらえる。寺領もふえる。和尚の目先のよしあしによって、下の坊主たちは浮かびもすれば、しずみもする。よくかんがえてみてくれ」
　晃運は説得をはじめた。
「坊主は武士でもなければ、商人でもないわい。檀家を捨てて裏切るわけにはいかぬ。落合一族はわが寺をこころの拠りどころとしておる」
「だから、和尚が落合一族を武田方に寝返らせるのだ。それが一族のすくいとなろう」
「そうはまいらん」
「だとすると、真田が先陣となって葛山城を攻めおとすことになる。そのときは静松寺がいちばん先にやられる」
　晃運はやんわりと威しをまじえた。
「晃運、武田の手先になったか」
「いや、わしは真田の手先だ」
　と晃運は苦笑し、
「幸隆どのとは昔馴染じゃ。和尚とも昔馴染。その馴染み甲斐に今日たずねてまいったのだ。和尚、わしは悪いことは言わぬ。村上をはなれ、武田にこぬか。それが静松寺のためじゃ」
　ざっくばらんに言った。
「簡単にははなれられん」
「寺がつぶれてもいいのか。落合一族を寝返らせるのが無理なら、静松寺だけでも、こちらの味方になってほしい」
「むつかしいな」
「和尚、今の世は戦国じゃ。坊主とても戦国の世に住み暮らしておる。坊主も兵略をいささかこころ得ねばならん」
　晃運の口は闊達である。
「無理なことを言うのう」
「落合一族も村上についておるより、武田についたほうがどれだけましかわからん。所詮、村上はこれまでじゃ。もう先がない。真田、武田はこれからぐんぐん伸びてゆく。坊主にもいくらかは世渡りが入り用じゃ」
「かんがえておこう」
「もう戦ははじまっておる。悠長にかんがえておる暇はそれほどないぞ」
「明日まで待て」
　ようやく静照がそう言った。
「よし、待とう」
　晃運はうなずいた。
　数日後の明け方。
　葛山と裾花峡谷にとつぜん新兵器鉄砲の銃弾のひびきがつづけざまにあがった。
　暁のしじまをやぶる銃弾の音は葛山衆ばかりでなく、静松寺の僧侶たち、山や峡谷の野鳥たちまでおどろかせた。
　銃弾の音はその後もやすみなくひびき、それに喊声がかさなって聞えた。
「すわ、武田の攻撃だっ」
「応戦しろ！」
　葛山城からも鉄砲が打ちはなたれ、矢が射はなたれた。
　武田軍ではもう数年以上前から鉄砲を軍備に取り入れることがおこなわれていたが、本格的に鉄砲隊を組織したのは、この二、三年のあいだである。武田軍は善光寺の裏山づたいに攻撃隊をくりだし、さらに峡谷からも攻撃隊が山頂の葛山城めざして攻めのぼっていった。
　葛山城からも鉄砲で応戦した。
　そのために山と峡谷にはやすみなく鉄砲の音がひびきわたった。
　鉄砲につづいては弓矢の応酬である。
　鉄砲が戦場に登場したとはいえ、弓隊の重要性が落ちたということはなかった。

鉄砲は大量には製造ができないし、購買することもできない。そういう点では、まだ飛び道具では弓が主要武器である。
さらに勝負を決する戦闘は騎馬隊、槍隊である。とくに武田軍の兵のつよさは騎馬戦にある。
武田軍は一気呵成に攻めたてた。
葛山城は難攻不落の要害である。城兵も城は滅多に落ちぬという自信にささえられている。とくに落合備中守を城主にいただく落合一族は敢闘精神にみちていた。
天文二十二年には、葛尾城を敗走した村上義清がこの城にたてこもったとき、葛山衆は武田軍とたたかい、しりぞけた経験があった。その経験が落合一族の自信になっていた。
それでも武田軍は二方面からはげしく攻めたてた。
そのころ、静松寺の僧侶十数人が境内をでて、葛山城へむかった。
錫杖を手にして僧侶一行がむかったのは、城の水の手である。城の水の手は三の丸の崖下にあった。
崖をつたって、一行は水の手に近づいていった。
水の手は城の命綱であるから、番士が十人ばかり詰めていた。これは戦時だから詰めているのではなく、いつでも水の番をしているのだ。
番士たちは人の足音が近づいてくるのに気づいて飛びだしてきた。
「何者だっ」
さけんで誰何したが、いずれも静松寺の僧侶だとわかって安堵した。
その瞬間、僧侶たちは錫杖をふるって番士たちに打ちかかった。
「何をする！」
番士たちも大刀をぬいて応戦したが、不意をつかれて狼狽し、たちまち打ち負かされていった。
約十人の番士たちははげしく殴打され、突かれて、深傷を負ったり、虫の息となった。僧侶とはいっても、この時代までは僧兵の言葉がしめすとおり、荒くれの僧が寺にはいたのである。
僧侶たちが水の手をうばうと、すぐにべつの僧侶たちから案内された真田の武士百人あまりが姿をあらわし、水の手を完全に占領してしまった。
これによって葛山城は干あがった。が、それでも落合一族を中心にした葛山衆は果敢な戦を武田軍にいどんだ。
死守すること約十日。葛山衆はほとんど全員干ぼしになって全滅し、とうとう落城した。なんとも凄惨な落城であった。
景虎は春日山城にあって葛山の落城を聞き、兵をあつめ、まだ残雪のふかい越後道をたどって出陣してきた。
葛山の落城は北信濃の中心地善光寺が武田の手に帰したことを意味する。
晴信は景虎の軍がまだ川中島に到着する前に、高梨政頼のまもる飯山城を攻めた。
景虎はようやく信越国境をこえ、善光寺に陣をとり、武田方の山田城、福島城をうばい、さらに旭山城を再興し、兵をおいた。
景虎ははやりにはやって晴信に決戦をいどんだ。
ところが晴信は決戦を避けるばかりか、その居所さえ越後軍につかませなかった。そして景虎が川中島方面に注意をうばわれている隙に、板垣信安らの兵を北安曇郡の小谷城へおくって攻略させ、さらに糸魚川口をおびやかした。
景虎は神仏に願文をささげて晴信との戦いに勝利を祈ったが、肝腎の晴信の所在をどうしても捕捉することができなかった。
はかばかしい決戦もないまま、景虎は八月末ようやく軍を越後にひきあげた。
越後軍がひいたあとは、武田軍が善光寺戸隠社付近を確実に勢力圏に入れた。

## 白い湯煙

天長二年（八二五）、信州別所温泉の東北にある金剛山の麓から火柱がふきだした、という記録がある。都から円仁慈覚大師という高僧がこの地にくだり、火坑にむかっていのると、火がしずまって観音菩薩があらわれ、北向山の桂の木にとどまった。円仁慈覚大師がその姿をうつして北向きに安置したのが北向観音である。
観音菩薩のとどまった桂の木は、愛染桂とよばれ、縁むすびのご利益があると言いつたえられている。
弘治三年の晩秋九月、北向観音に参拝した三人の旅の武士がいた。旅とはいっても馬に乗っている。幸隆と夏目兵庫と別所八郎太の三人である。
北向観音は南向きの善光寺とむかい合い、この世の幸福をまもると言われている。
「八郎太は観音さまに何をねがった。まさか縁むすびではあるまい。縁むすびといっても縁組ばかりとはかぎらぬ。旅先でいい女とぶつかるかもしれん」
幸隆は八郎太をからかった。
「わたしは殿の疵がはやくおなおりするようねがいましたが、この観音、縁むすびのご利益もありましたな」
八郎太はそう言った。
「拙者も殿の疵のご快癒をねがい、さらに長尾景虎討滅を祈願いたしました」
兵庫は生真面目に言った。
「そうか、二人ともよき家来であるな。わしの怪我など大したものではないわ。

別所温泉は別名〈美人の湯〉じゃ。わしはいい女との出会いをねがった。旅の余禄といえばそんなものであろう」

快活に言ったのは幸隆である。

戦から帰陣して、すくなくとも来春までは合戦はないと見られているので、幸隆は葛山城の合戦で手疵を負った治癒のために、外傷によく効く別所温泉へでむいてきたのだ。幸隆の怪我は左太股と右の脇腹である。いずれも槍による突き疵である。葛山衆の抵抗がいかにすさまじかったかを物語るものだ。

幸隆は怪我にはつよい男である。今までも身に十数ヶ所の怪我を負っている。戦国の豪族ならば大抵の者はこれくらいの怪我はしている。

幸隆は戦場の手当てで一応疵はふさがっていたが、帰国してみると二ヶ所の疵がうずいて仕方がないので、怪我におおいなる効能があると言われている別所温泉へむかったのだ。

別所温泉は戸石城や真田から近く、上田の西南二里ほどの山中にある。飯縄山、十観山、大明神岳、独鈷山などが周囲をめぐり、信濃最古の温泉と言われている。

八郎太の家はもとこの一帯からおこった。

一行は山々の麓、八木沢から山道へ入っていった。

別所村には人家が二十数戸あり、安楽寺という寺がある。

今では真田領であり、幸隆がゆけば安楽寺の和尚がむかえてくれるが、そこは避けて、八郎太の親戚にあたる別所善左衛門という庄屋に草鞋をぬいだ。

ひとやすみすると八郎太が、

「まず湯につかりましょう」

と言い、さっそく湯へむかった。

もう夕方に近い時刻で、山の中は閑寂さにつつまれている。

鵙や椋鳥の鳴き声が聞え、行くほどに山はふかくなった。

木々の繁みのなかを道はとおっている。道の左右には岩も露出しているのが見える。

先のほうに乳色をした山霧がわいて、こちらにながれてくる。

「湯の煙でございます」

八郎太が言った。山霧とおもったのは湯煙であった。

温泉特有の匂いがしてきた。

かくれた湯の里である。

その昔、景行天皇の御代、日本武尊の東征の折に発見された湯だとつたえられている。古名七久里の湯といわれ、清少納言の〈枕草子〉にも書かれている名湯である。

しずけさのなかに湯のわきでる音がする。

ふだんはこの村の者しか湯に入らない。わざわざ旅をして湯に入りにくる者は稀である。

岩にかこまれた温泉があらわれた。山の中の秘湯というにふさわしい。

今は人気がなく、静寂そのものである。岩と岩が幾重にも組み合わされて、岩風呂になっている。

一つの岩風呂のむこうに、もう一つ岩風呂があり、すこしはなれてその奥にも岩風呂がある。岩風呂はいずれも湯煙のなかになかばかくれ、幽玄な雰囲気さえする。

「今は湯に入っている者はなさそうだ」

八郎太はそう言い、まわりを見まわした。

古びた東屋のようなものが、木の下蔭にたっている。そこが脱衣をするところであろう。

「いい趣の湯だな」

幸隆はわざわざやってきた甲斐があったとおもった。十日ばかり庄屋に逗留するつもりできたのだが、一ヶ月くらいこの湯につかってのんびりしたいという気持になった。

「殿、大師湯がようございましょう」

と八郎太は言い、いちばん奥にある岩風呂に案内した。

大師湯と名づけられた湯は慈覚大師が入ったと言われる湯である。大小の岩々にかこまれた岩風呂は神秘の香りすらつたえてくる。

「わたしどもはこちらの湯に」

と兵庫が言い、八郎太とともに大湯という岩風呂のほうへ行った。

大湯は言いつたえによれば、木曽義仲が愛妾葵御前をつれて逗留したとつたえられる湯である。

幸隆は衣類を岩と岩のあいだに脱いで、大師湯に入っていった。

湯加減は丁度いい。疵痕にしみるが、それも存外ここちよいものである。

幸隆はしばらく岩にもたれて湯につかっていた。湯の香もすばらしいし、湯の質もやわらかく、肌身によい感触である。

季節も入湯にはいちばん適した時期である。

ながい戦闘の疲れが湯のなかでほぐされていくようである。以前から八郎太に別所温泉の効能を聞いていたが、多忙にとりまぎれて足をのばさなかった。

本当に極楽の湯につかっているようである。時をわすれ、浮世の苦労をまぎらわせる効能もある。

幸隆のまわりを白い湯気と岩がかこんでいる。

野鳥のさえずりも聞こえる。

このままずっとこの時空が無限につづけばよいとおもった。

そのとき、幸隆の背後で湯の音がした。

自然の音ではないので、幸隆はふりむいた。いつどこに敵がひそんでいるかもしれないからだ。

幸隆は湯の煙をすかして見た。

岩風呂が幸隆の背後にもつづいていた。これまで気がつかなかったのだ。

湯のゆらめくむこうに、うごくものがある。

幸隆はじっと見た。

湯のなかに何かいるようだ。

幸隆は本能的に身がまえていた。

何やら白いものがうごいた。と同時に湯の音がざあっとした。

女である。女が奥の湯につかっていたのだ。

女が立ちあがって、こちらに近づいてきた。白い湯気のなかにもっと白い裸身が見えた。

乳房が見え、まろやかな腹部から腰への曲線も湯気のなかに浮かんだ。

最後に顔である。長い黒髪とともに女の顔が見えた。

顔と顔とが合った。

女が幸隆を見て、

「申しわけございません」

羞恥を見せながら、蚊が泣くように言った。

まだ二十歳くらいの娘であろう。

幸隆の前をとおりすぎなければ、湯から上がれないのだ。

「どうぞ、とおりなさい」
　幸隆はつとめて平然と言った。こういう場合、双方が照れては始末におえないことになる。
　幸隆は顔を横へむけることもしなかった。岩風呂の中ではそうするのもおかしいからだ。
　女は困った様子だが、意を決したように幸隆の前をとおった。手拭がわずかに女の股間をおおっている。
　幸隆の前を白い裸身が幻のようにとおりすぎた。幸隆は一瞬、錯覚かとさえおもった。
　幸隆は声をかけようとして、かけなかった。
　女が湯からあがった。
　湯気のなかの裸身に見とれてしまったのだ。それほど女の裸身はたおやかで、うつくしかった。
「失礼申しあげました」
　女はもう一度声をかけ、岩場に脱いであった着物を手にして、湯煙のかなたへ消えていった。
　まるで山に棲む狐に化かされたような気がした。
　幸隆の瞼の裏には、今去っていった女の裸身が焼きついている。
（一体、どういう女なのだろう）
　村の女ではなさそうな雰囲気であった。
　幸隆は目を閉じ、しばし想像をめぐらした。と言うより想像をたのしんだ。
　その想像がやぶられた。幸隆の前にむくつけき男の裸が二つあらわれた。兵庫と八郎太である。
「殿、どうなさいました」
　兵庫が問いかけた。
「お前たちに、いい夢をやぶられた」
　幸隆が言うと、
「今さっき、若い娘が小ばしりに去ってゆきましたが、殿と混浴をなさっておりましたか」
　八郎太がおどろいて聞いた。
「混浴をいたしておったわけではない。おれの後ろのほうに入っていたのだ。おなじ湯ではあるな」
「何もございませんでしたか」
「あるわけがない。おれの前をとおって、湯からあがっただけだ」
「それでは女の裸は丸見えでございますな。しかし、何事もなくてようございました」
　兵庫は立場上、つねに幸隆の身を案じているのだ。
「敵のまわし者だと心配したか」
「敵はどんな策をもちいて殿のお命をとろうといたすかわかりません」
「敵の女間者であれば、わしが取りおさえたところだ」
「そうでなくて幸でした。世の中何がおこるかわかりません」
　兵庫も八郎太もほっとした様子だった。
　それから三人はそろって湯からあがり、庄屋にひきあげた。
　八郎太が善左衛門にその女のことを聞くと、
「村の女ではありませんな。きっと湯治にきている女でございましょう。別所の湯が傷にきくこと、女の体がきれいになるということは世間に知られております。それで時たま遠くからここにくる者がございます」
　という返事だった。
「湯治にきている女なら、当分別所におるでしょう。また会うかもしれません」
　兵庫はいささか心配がのこるような言い方をした。
　幸隆の脳裡にはまだ岩風呂の女の姿かたちが夢幻のようにのこっている。
　翌朝、朝餉の後、三人はふたたび岩風呂へむかった。
「昨日の女、今日もきておるでしょうか」
　八郎太が気になると見えて言った。
「殿、今朝は申しわけありませんが、わたしどもも殿とおなじ湯につかってようございますか」
　兵庫が聞くので、
「かまわん、一緒に入れ」
　幸隆はこたえた。
　幸隆も昨日の女のことは気にはなっているが、どうしてもまた会いたいというほどのことはなかった。幸隆がやらねばならぬこと、かんがえねばならぬことは、ほかにいくらでもある。
　川中島以北にのこる反武田の豪族はまだかなりいる。それらを調略して武田家に服属させることが、幸隆の大切な仕事である。長尾景虎への戦略もかんがえておかねばならなかった。
　今朝は三人一緒に大師湯に入った。
　兵庫と八郎太は奥の湯のほうを気づかったが、白い湯煙がたちのぼるばかりで、人の気配はしなかった。けれども今にどこからか昨日の女があらわれるような気がして、こころ待ちにしながら湯につかっていた。
「しずかな、よい湯だ」
　八郎太はそう言ったが、こころのうちでは女を待っている様子であった。
「美人の湯という名にふさわしい女のようだったな」
　兵庫もこころは昨日の女のところへ飛んでいるのだ。
「それほど会いたければ、朝から夕までずっと湯につかっておることだ。そうすれば会えるだろう」
　幸隆は言った。
　三人は小半刻（一時間たらず）湯につかってからあがった。
　大湯や石湯などにも女の姿は見えなかった。
　三人は庄屋にもどり、半日のんびりとすごし、夕方近く、ふたたび湯をあびにきた。
　三人のあるく前方を猿の親子が横切った。
　大湯のほうに村の男が三人入っていた。が、くだんの女はきていない。
　今度も小半刻ほど大師湯につかっていたが、とうとう女はあらわれなかった。
　翌日も、翌々日も同様であった。
　三人はその女のことをほとんどわすれた。
　数日のんびりとすごし、さらに数日がたった。
　翌日は戸石へかえるという最後の夕であった。
　幸隆は大師湯につかっていて、なんとなく予感をおぼえた。女が姿をあらわしそうな気がした。
　兵庫と八郎太は大湯のほうに入っていた。
　四半刻（約三十分たらず）ほどたったころ、ふと気がつくと、人の近づく気配がした。
　幸隆が知らぬ顔をしていると、
「失礼いたします」
　白い湯気のむこうから、女の声が霧のようにわいた。

「ご一緒いたしてもよろしゅうございますか」
すぐにまた女の声がした。
「どうぞ、お入りなさい」
幸隆は一介の湯治客のような気分になってこたえた。
間もなく、湯気のなかに雪人形のように白い裸身があらわれた。
しかも立ったままゆっくりと幸隆の前に近づいてきた。声といい、その裸身といい、先だっての女に間違いなかった。
「先日は失礼いたしました」
女は近づいてきて声をかけた。
「いいや、誰が入ってきてもかまわない湯だ。遠慮はいらない」
と幸隆が言うと、女はずいぶん近くまできて、幸隆とならぶように湯につかった。
「ここのお湯は体にいいと聞き、やってきました」
女のほうから話しだした。
「どちらから」
幸隆は話し相手になった。
「佐久からまいりました」
女はそうこたえて、湯の中でくつろいだ。
幸隆は先日とくらべて、大胆な女だという印象をいだいた。
「別所の湯は美人の湯と言われているらしい。あなたはこの湯にふさわしい女だ」
幸隆がそう言うと、女の顔がほころんだ。
「本当に肌によいようです。全身がなめらかになってまいりました。そちら様は疵養生でございますか」
「どちらの戦でございますか」
「そう、戦で疵を負った」
「川中島の戦だ」
「武田さまと長尾さまの戦が長くつづいております。佐久からも兵がでてゆきました。今後もなかなかおわらぬ長い戦になるだろうとうかがいしました」
「うむ、そうなるかもしれぬ」
「今は戦の世でございますから、仕方がないのかもしれませぬ」
「うむ」
いくら湯煙がたっているとは言え、相手は半間の間近にいるのであるから乳房はほとんど丸見えである。手拭いを股間に当ててはいるが、どうかすると淡い黒い影さえ見えるような錯覚におちいる。
「このような世がはやく落着けばようございます。それでなければ、民もおちおち営みをつづけてゆけませぬ」
そう言う女の顔には憂いが浮かんでいる。
「まことにそのとおりだ、武士も民もみな傷つく者ばかりだ」
幸隆はそう言ったが、武士は戦のなかで勝ちぬいていけば、身代、所領をどんどんふやしていけるとおもった。武士にはみんなそういう野心がある。野心と野心がはげしくぶつかり合うから、天下いたるところ戦だらけの世になったのだ。幸隆はそんな戦国の世であるから、最後まで勝ちすすんでいかなければならないとおもっているのだ。
「わたくしの父も兄も戦で死にました」
女が言った。
「それは気の毒なことだ」
幸隆はそれ以上は言葉にしなかった。信濃の戦いとなると、自分がどこかでかかわっているかもしれないからだ。
女がうごくと、乳房がゆれる。淡い乳首の色まで見える。おたがいに湯の中にいるという意識があるので、女は平気で裸身をさらしているのだ
「もう二、三日で佐久へもどろうかとおもっております。わたくし、長百姓の家の離れに泊まらせてもらっております」
と女は自分から口にした。
長百姓と言えば、庄屋につづく村方三役である。
「わたしも明日はここを去る」
「左様でございますか。はかなき旅のご縁でございました」
と言った女の顔がわかれを惜しんでいるかのように幸隆には見えた。
「縁があったらまた会おう」
と言葉をのこして幸隆は湯からあがった。
「殿、また会いましたな。いかがいたしました」
帰路、兵庫が聞いた。
「世間話をかわした」
「大胆な女でございますな。裸で殿に近づいて世間話をいたすとは」
八郎太は興味津々でたずねた。
「温泉場の客はそういったものだろう」
と幸隆はこたえたが、自分でもあの女に興味をいだいていた。女が逗留場所をあかしたことも意味があるような気がした。
(ひょっとして自分をまねいたのだろうか?)
と幸隆は思案した。
「温泉場の客とはいっても、殿が大体どのようなお方かわかるはずだし、若い女が平気で裸で男に近づくとは」
「何か他意があると言うのか」
「あるかもしれません」
「たとえば、どんな」
「それがわかれば苦労はいたしません」
「ふうむ、どんな他意があるか……」
ふたたび幸隆は思案した。
だが、戦略、戦術をかんがえるほどには答はでてこぬ。
庄屋にもどってから、
(あたってくだけるが最善の方法か)
とかんがえた。すなわち、幸隆がもう一度女に会ってみることだ。
居場所はわかる。女がつげていったのだ。会いにこられても困らぬからだろう。
結論はすぐにでた。が、幸隆はそれを言葉にはしなかった。すれば、兵庫や八郎太がきっと邪魔をするからだ。
夜になった。
幸隆は、兵庫、八郎太とは別室にとまっている。
一度、床についてから半刻ほどして、むっくりとおきあがった。表着のまま夜具に入っていたので、何の仕度も必要としないで外にでた。
長百姓治兵衛の家は、事前に聞いてあった。
提灯の明りで、一丁ほどはなれた治兵衛の家まできた。
(まるで夜這いだ)
幸隆は心中苦笑を禁じ得なかった。
この時刻ならば、女は寝床の中にいるにきまっている。そういう女をひそかにたずねるのだから、夜這い同然というよりも、夜這いそのものである。
屋敷に門はない。正面だけ生垣が切れている。

晩秋の落葉をふんで、幸隆は母屋の前をとおりぬけ、離れの前にでた。

ときどき、鵯の鳴く声が聞える。

離れの雨戸はしまっている。雨戸をどうしてあけようかとおもった。忍者が雨戸をあける技は簡単である。苦無や五寸釘などを雨戸の溝に入れて浮かしてはずすのである。

しかるべき道具は一応持参してきてある。

だが、道具をつかう前に、ちょっと雨戸をひいてみると簡単にうごいた。

（何のことはなかった）

と幸隆はおもったが、それが反対に警戒心を呼びおこした。

（はたして女間者か？）

とおもったが、それだったら余計つかまえなければならない。

雨戸をあけて、障子戸もひいた。

廊下があった。

あがりこむしかない。

あがって廊下をすすんだ。

部屋は二た間ありそうだ。

手前の部屋の襖をひらいた。とほとんど同時に、

「ちょっとお待ちくださいませ」

女の落着いた声が聞えた。幸隆がくるのを待っていた声である。

部屋のなかはほの暗い有明行灯がともっていた。夜具がのべてある。

女は夜具の中におきあがり、羽織をはおろうとした。

その瞬間、幸隆は今朝、湯のなかで見た女の乳房や姿態が網膜に浮かんだ。にわかに欲情がつきあげてきた。女の声が呼び水になった。

「大師湯で会った男だ。会いにまいった」

幸隆はそう声をかけた。そのときに決意は不動のものになった。

幸隆は一頭の獣になった。

女は沈黙している。

「おれは真田弾正忠幸隆である。そなたを頂戴したい」

言うや幸隆は二歩、三歩すすんで、女の夜具をはいだ。

女の体をつつんだ白い夜着が浮かびあがった。

女は拒絶はしなかった。真田幸隆と聞いておどろきもしなかった。

幸隆は女の体をかかえた。しなやかで、弾みがある。

かぐわしい匂いをかいだ。

女の体が幸隆の両うでのなかで、大きくあえいだ。

「本当においでになろうとは……」

抱かれたまま女は言った。

「何故にさそった」

乳房をまさぐりながら幸隆は言った。

「殿御と女子がこうなりますのに理由は入り用でございますか」

女の口から大胆な言葉がこぼれた。

「では遠慮なくいただこう」

言いつつ幸隆は女を寝かせた。

女はもう目を閉じている。

幸隆は夜着の紐をぬいた。夜着の胸がはだけ、乳房がほとんどあらわになった。

幸隆が一度まさぐったので、乳首はもうとがっていた。

幸隆は顔を近づけ、乳を吸った。

女がかすかにうめき声をあげた。

乳房の大きさはさほどではないが、その感触は豊饒である。さわればさわるほど弾力がでてくる。

美味なるあじわいに満足をおぼえ、幸隆は手を下へのばした。



腹部から下腹へいたり、やわやわと萌えいずる草むらにいたった。幸隆はその草むらを手でおおった。

女は夕方ふたたび湯を浴びにいったとみえ、肌はつやつやとなめらかで張りがあった。肌から湯の香がにおった。

欲情がうずいた。女の肌が欲情を喚起させた。

幸隆は欲情に身をゆだねていった。女の股間をややひろげ、そこに顔をうずめていった。

「あああっ……」

女がかぼそい声をあげ、腰をよじった。

その股間からも湯の香がたちのぼった。

幸隆は湯の香をいっぱいに吸いこみながら、さらに股間をひろげた。女はいくらか抵抗をこころみたが、幸隆はそれをゆるさなかった。

女は足をあげ、完全に男をむかえ入れる形になった。

羞恥をかみころして、女はたえている。この姿をとることで、女は完全に幸隆に服従した。

幸隆は一気に止めを刺しにいった。

## 川中島の激戦

年号が永禄にかわって、四年めである。

この年の秋、史上に名高い川中島の激戦がおこなわれた。

さきにうごいたのは景虎改め、上杉謙信である。八月十六日、甲府に川中島から飛脚がとどいた。

『謙信が出陣して海津城の近くの妻女山に陣をとり、海津城を攻略しようとしております。その軍勢は約一万三千』

というものである。

晴信はその翌々日には甲府をたち、二十四日、川中島に到着した。まさに疾きこと風のごとしだ。妻女山のこなた雨宮の渡しをわたり、そこに陣をとった。

この位置だと、上杉軍は越後への帰路を止められ、袋の鼠のような状態となった。

晴信は雨宮に五日間滞陣したが、六日めの朝、陣をうごかし、風林火山の軍旗を先頭に、おびただしい旌旗をつらね、広瀬の渡しをわたって海津城に入城した。その武田軍のなかに、幸隆、源太左衛門のひきいる真田軍もいた。

武田、上杉両軍は海津城と妻女山とでにらみ合った。

これより先……、関東管領上杉憲政は北条氏康の圧迫にたえきれなくなって、天文二十一年、上野の平井城を捨て、景虎をたよって越後へはしった。

景虎は上杉憲政から関東管領をゆずられ、永禄三年、関東に出陣して武威をふるい、翌四年、長駆して北条家の小田原城をかこんだ。そして鎌倉にひきあげ、上杉家をもゆずられ、鶴岡八幡宮にその報告をおこない、姓名を上杉謙信とあらためたのである。

一方、晴信はその間に北条家と和し、娘を氏康の子氏政にめあわせ、同盟をむすんでいたのだ。

海津城と妻女山の両軍対陣はつづいた。月がかわっても、両者はにらみ合ったままだ。

そもそも謙信が妻女山に陣をおいたのは、みずから虎穴に入った捨て身の戦法

である。今回こそ興亡の一戦を覚悟した武田軍への挑戦であった。

晴信が雨宮の本陣から海津城に入城したのは、謙信に九死に一生の決戦をいどませるのを避け、越後への退路をあけて、上杉軍の帰途を討つ作戦である。

妻女山の上杉軍はようやく兵糧がすくなくなってきたとの情報が入ったが、それかあらぬか、謙信はいささかの動揺も見せず、悠然と琵琶を弾じ、鼓をうつばかりで、軍のうごく気配は見えなかった。

信濃の秋は一日、一日とふかまり、蕭殺たる空気は紅葉に染まりはじめた山野をおおっていた。九月九日、重陽の日をむかえるころには冷気がきびしくなり、妻女山の篝火も日ましに明るさを増していった。いやが上にも決戦の日は近づいた。

この日、晴信は諸将をあつめ、軍議をひらいた。

宿将飯富兵部虎昌はすみやかに上杉軍と有無の一戦をこころみられるよう進言した。

武田家の足軽大将小幡山城守はこの六月病死しており、原美濃守もこの夏の割が嶽の戦で負傷して、参陣していない。

「民部、その方のかんがえやいかに」

晴信はまず馬場民部の意見を聞いた。

「飯富どのの意見に賛同でござります」

馬場民部はただちにこたえた。

「典厩はいかに」

ついで晴信は弟の典厩信繁にただした。

「おなじく」

信繁は賛同した。

「弾正忠は」

晴信は今度は幸隆を見た。

「上杉軍とはいずれ決戦し、勝敗をつけねばなりません。先々に決戦をのばすよりも、今回がその機会だとおぼえまする」

幸隆は言った。幸隆は今年で四十九歳になり、頭に霜をおいたように白髪がまじりはじめている。

若い若いと見られた晴信にしても、四十一歳である。謙信と一進一退の戦いをつづけて、もう長年月になる。いつまでも同様の状態をくりかえしていては、年月と戦力を消耗するばかりである。

幸隆はできるだけはやく謙信との戦いに決着をつけるべきだとかんがえていた。

「勘助、作戦の妙手はあるか」

晴信はついで山本勘助に戦法についての意見を徴した。

「二万の軍勢を二手にわけ、一万二千を謙信の本陣妻女山へむけ、明朝卯ノ刻攻撃をしかければ、上杉軍は勝っても負けても、千曲川をこえて越後に退くにちがいありません。そこを御旗本組、二の備衆で待ち受け、前後よりはさみ討ちにいたせば、わが軍の勝利は疑いありません」

山本勘助はそう意見をのべた。

「キツツキ戦法じゃな」

晴信は大きくうなずいた。キツツキは木のなかの虫をとらえるのに、穴の反対側をつついで虫をおどろかせ、穴からでてきたところをついばむので、ここから名づけられた戦法である。

晴信はこの戦法に同意し、軍勢の手配をした。

妻女山攻撃隊は、高坂弾正、飯富兵部少輔虎昌、馬場民部、小山田備中守昌辰、真田弾正忠、甘利左衛門尉富忠、柏木、芦田下野、小山田信茂、小幡尾張守の十頭である。武田軍では一部隊を一頭



とかぞえるのである。御旗本組は山県昌景、中陣左陣は典厩信繁と穴山信君、右陣は内藤修理昌豊、諸角豊後。御旗本脇陣は原卓人佐昌胤、武田逍遙軒信廉、右脇備は武田太郎義信、その右に望月。旗本後備は跡部大炊助、今福善九郎、浅利式部丞。この十二備、旗本ともに八千である。

妻女山攻撃隊は、地の理にあかるい海津城主高坂弾正を先鋒として、真夜中に出陣した。

晴信のひきいる部隊八千は、未明、海津城を出陣し、広瀬の渡しをこえ、暁闇につつまれた川中島に陣をしいた。晴信は八幡原の社に本陣をおき、左右に六隊ずつ半月形に布陣した。鶴が両翼をひろげたかたちで、鶴翼十二段の陣と名づける。

一方、謙信は、前夕、眼下にかすむ海津城からふだん以上に炊煙がたちのぼるのを見て、武田軍の出陣の炊きだしと見やぶった。

謙信は侍大将をことごとく呼びあつめ、つぎのように決意をのべた。

「十五年以前、天文十六年の秋、晴信二十七歳、謙信十八歳のときより取り合いをはじめ、たびたび合戦をいたしたが、晴信の備えをやぶることができず、いつも戦場を晴信にとられ、みな謙信のおくれのようになり、無念であった。明日は必定、合戦とみゆる。敵は人数を二手にわけ、この陣へ攻撃をかけ、わが旗本の川を越し退くところを、半分の人数をもって討ちとるべき計略、鏡にうつるごとく見えている。されば謙信もただちに川をこし、そこにて夜をあかし、日ノ出にいたらば、おそいかかり、晴信と我と手に手をとり合い、討つか討たれるか、二つに一つの決戦をいたす所存」

上杉軍はただちに出陣の準備をはじめたが、越後の軍法は従来、一人で三人の食事をととのえることになっているので、さして目立たない。

謙信はほぼ亥ノ刻（夜十時）、全軍をひきいて妻女山をくだり、雨宮の渡しから、鞭声粛々と千曲川をわたって、川中島へすすんでいった。

翌九月十日の早朝、川中島はふかい霧

につつまれて、まわりが見えなかった。

平原の中央、八幡原に本陣をおいた晴信は八方に物見をだしたが、いずれももどってこなかった。敵方にとらえられたとかんがえるしかなかった。

明け六つごろ、忽然と霧のなかから、毘沙門天の旗をなびかせた上杉軍の大軍がまるで大地から湧き出たように出現した。まぎれもなく大蕪菁の大纏を押したてて、喊声と咆哮を発しつつ一団となって突進してきた。これこそ上杉家の猛将柿崎和泉守のひきいる先鋒隊であった。

両軍の主力部隊がここにはじめて接触し、激突した。双方の喚声と怒号が早朝の川中島の天地にどよめいて、激戦がはじまった。

上杉軍は謙信の旗本を中心にして、水車がまわるように、つぎつぎに新手の部隊をくりだして、猛烈果敢な攻撃をくりかえしてきた。兵法でいうところの〈車懸〉の戦法である。幾廻りめかにかならず旗本と旗本とがぶつかることになる。謙信は言葉どおり決死の戦法にでたのだ。

謙信は大剛の侍大将甘糟近江守に千人をあずけて殿軍とし、直江に二千人をもって小荷駄を指揮させ、みずからは一万の主力をひきい、柿崎の先陣につぐ二陣の先頭にたって猛攻撃をかけた。

上杉軍はまず武田の右陣太郎義信に猛攻をつづけた。

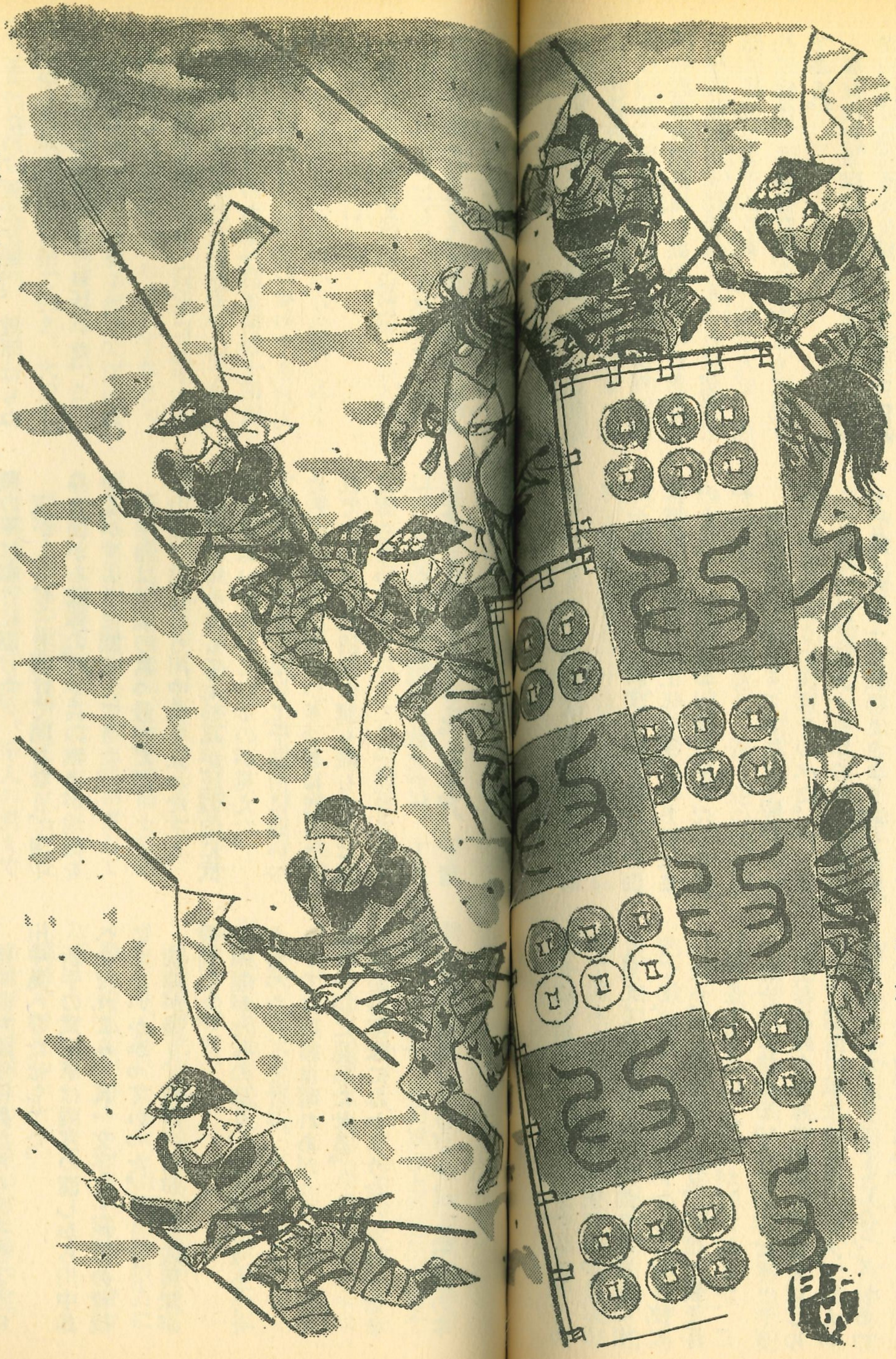
さしも広大な八幡原の平原に銃弾のひびき、剣戟の音、喊声がとどろいて、全軍が激突し合った。

やがて武田軍はしだいに切りくずされ、晴信の本営すらくずれかかった。

これを見た弟の典厩信繁は兄の危機をすくおうものと、猛然と馬を疾駆させ、敵陣におどりこんだ。広瀬の渡しの近くの水沢部落で信繁は奮戦したが、宇佐美駿河守定満の槍をうけて、討ち死にした。

武田軍は十二段の備えをわずか三段をのこすのみとなり、晴信の本陣も手薄になった。





このとき、萌黄の胴肩衣を着た武者がただ一騎、頭を白布で行人包にし、月毛の馬にまたがり、三尺ばかりの太刀をふるって、晴信の本陣に殺到してきた。

晴信は諏訪法性の兜をかぶり、黒糸縅の鎧のうえに緋の法衣をまとい床几にすわって戦陣を指揮していた。

そこに行人包の武者が疾風のごとく月毛を乗り寄せ、三太刀、七太刀斬りつけた。

晴信は立ちあがり、軍配団扇でうけとめたが、肩先を斬られた。晴信の御中間衆頭、二十人衆頭など二十騎ほどが、敵味方に知られぬよう晴信をとりかこみ、寄る者を斬りはらい、突きはらっていった。原大隅という中間頭が青貝の槍で、月毛の馬に乗る行人包の武者を突いたが、突きはずし、具足の綿がみを打とうとする手先がくるって、馬の尻をたたいてしまった。

月毛の馬はおどろいて棒立ちになり、猛然と疾りだした。後ほど、その月毛の馬の行人包の武者が謙信だとわかった。

武田軍では、山県昌景の部隊が上杉軍の一の先手柿崎隊を追いくずし、三町ほど追い散らし、穴山信君も敵の柴田隊を四町ほど追い討ちした。

晴信は床几の場所をすこしもうごかなかったが、そのほかの九部隊はことごとく敗れ、千曲川広瀬の渡しまで追いつめられ、諸角豊後守、旗本足軽大将山本勘助、初鹿野源五郎らが討ち死にし、太郎義信も手傷を負った。この合戦は完全に

武田軍の敗北とみえた。

一方……

前夜、妻女山へむかった武田軍の攻撃隊十頭は夜をとおして敵陣めがけてすすんだ。

敵陣が近づくにつれ、幸隆はいやな予感におそわれた。謙信に武田軍のキツツキ戦法を見やぶられているのではないかという予感である。

はたして妻女山の上杉軍の陣地の篝火(かがりび)は消えていた。

「しまったっ、源太左衛門、敵陣はもぬけのからだ」

幸隆はいちはやくそう見抜いた。

「敵は夜のうちにこの陣を捨て、川中島へ押しだしたのだ」

キツツ戦法はやはり上杉軍に見やぶられ、その裏をかかれたのだ。

「川中島の本陣があぶない！」

源太左衛門は肝をうしなってさけんだ。

「晴信公があやうい！」

弟の兵部丞昌輝(まさてる)もうめいた。

十頭の武田軍はしばし呆然となった。

妻女山に陣をしいているはずの上杉軍は一人もいなかったのだ。

「敵軍は川中島へすすんだ。わが軍もいそぎ川中島へ！」

「手おくれかもしれぬが、川中島へ急行しろ」

馬場民部、小山田備中がさけんだ。

武田軍はただちに作戦の転換をせまられ、川中島へ急行することとなった。

今から急行しても、川中島の武田軍は全滅しているかもしれぬ。しかし妻女山の武田軍がとるべき道はただ一つだ。十頭の軍は駆けに駆けた。

夜がしらじらと明けて間もなく、川中島方面から銃弾の音や兵の喊声が地軸をゆるがすように聞こえてきた。

川中島は激戦の真っ最中だ。

山腹、山麓から川中島を見わたすと、八幡原を中心にして上杉軍が圧倒的に武田軍を追い散らしているのが見えた。

武田軍は陣をみだして千曲川に追いつめられ、騎馬武者はつぎつぎに討ちとられていった。武田軍の旗も幟も大半は地におちている。

「しまったっ、武田軍の敗北だ」

「本陣もくずされておる。いそげっ、者ども！」

「上杉軍の背後をおそえ！」

真田軍のなかにあって、兵部丞、幸隆、源太左衛門はさけんだ。

武田軍の本陣には、晴信の近習として幸隆の三男源五郎も初陣しているはずである。

「武田軍の本陣をまもれ！」

幸隆は怒号して、馬を疾駆させた。

源太左衛門、兵部丞もおくれじと馬をはしらせた。

ほかの九頭の将兵たちもきそうように川中島へひたはしった。

新手の武田軍は雨宮の渡しから川中島へなだれこみ、真一文字に上杉軍の背後におそいかかっていった。

銃弾が鳴り、喊声があがり、騎馬隊が殺到した。

硝煙がたちのぼり、土煙がもうもうとあがった。

すでに朝霧は晴れあがっている。川中島は一望に見わたせる。

「ほかの部隊にはかまうな。本陣をおまもりしろ！」

源太左衛門はさけびつつ、武田軍の本陣を取りまく敵軍にむかって斬りこんでいった。

幸隆も兵部丞も上杉軍の背後におどりこんだ。

さすがの上杉軍も払暁からの戦いにくたびれ、力尽きかかっていた。

そこに新手の武田軍の精鋭部隊十頭がおそいかかったので、たちまちのうちに形勢は逆転した。

上杉軍はみるみるうちにくずれさった。ささえる力をうしなっていた。

武田軍は縦横無尽にあばれまわった。面白いように上杉軍を槍で突き、大刀で斬りたおしていった。

上杉軍の旗や幟はたおれ、将兵は死んでいった。

八幡原は一瞬のうちに武田軍の一人舞台となった。

上杉軍は一度くずれた陣をふたたび立てなおすことはできなかった。乱戦乱軍のなかで、北へむかって逃げだした。

北には犀川の流れが横たわっている。犀川を越えれば、越後方面に逃げられる。

武田軍は追撃にかかった。

「雑兵にはかまうなっ、兜首をねらえ！」

幸隆は自軍の将兵にそう命じた。雑兵はいくら討っても手柄にはならぬ。十人の雑兵を討つよりも、一つの兜首をとるほうが大切なのだ。

典厩信繁の首をとっていた上杉の武士を真田軍の山寺上総(やまでらかずさ)という者が取りかえした。

諸角豊後の首は諸角隊の石黒五郎兵衛、三河牢人成瀬某が取りかえした。

高坂弾正、馬場民部、飯富虎昌らの新鋭部隊は犀川の丹沼島の渡しをめざしてしりぞく上杉軍を追撃した。

だが上杉軍の殿軍(しんがり)甘糟近江守は名だたる百戦錬磨の勇将である。千人の備えで追いはらい打ちはらい孤軍奮闘して、謙信をまもってしりぞいていった。

高坂弾正、馬場民部の部隊が甘糟隊を切りくずし、大打撃をあたえたが、ついにこれを壊滅させることはできなかった。

「さすが甘糟近江、見事なる殿軍ぶり」

おくから幸隆はこれを見やって賛辞を口にした。

かくして川中島の激戦はおわった。

この戦いは卯ノ刻（朝六時ごろ）からはじまり、前半は上杉軍が勝利し、巳ノ刻（午前十時ごろ）から以後は武田軍の勝利であった。武田軍は上杉軍三千百十七の首帳をもって、その日申(さる)ノ刻（午後四時ごろ）八幡原で勝どきの式をおこなった。

幸隆、源太左衛門、兵部丞はろくろく源五郎と対面もせず、九月末には戸石城へひきあげた。

真田軍が武田軍とわかれ、地蔵峠まできたとき、峠にたちならぶ赤松の根方に十数人の武士が待ちうけているのに会った。

「綱頼ではないか」

幸隆がまだ遠くから見つけて言った。

「矢沢さまがお出迎えでございますか」

兵庫が首をかしげた。

矢沢綱頼は戸石城代として留守をしているのだから、わざわざ出迎えにきているのは不審である。

「戸石城で何かあったのかもしれぬ」

八郎太もいぶかしげに言った。

何もなかったら、地蔵峠までわざわざでてくるはずがない。

幸隆、源太左衛門、兵庫らは一行からはなれて馬を峠までとばした。

「川中島の合戦における勝利おめでたく存じあげます。留守をいたしておる者たち、勝利の報に接し、よろこんでおります」
　綱頼は徒歩ですすみでて、まず勝利のよろこびをのべた。
　このたびの合戦は、武田、上杉両軍がそれぞれ勝利の報せを各地へはなっているのである。
「合戦は勝利いたしました。けれども上杉軍はなかなか手ごわく、武田軍もかなりの被害をうけた」
　幸隆は相手が綱頼であるから、かくすことなく言った。
「さぞかし大変な戦でございましたでしょう。とくにわが真田軍に被害がすくなく、祝着でございました」
　真田軍は妻女山攻撃隊にくわわっていたので、被害は最小限度にとどまった。八幡原で上杉軍をむかえ討つ側に入っていたら、大変な被害がでていたはずだ。
「まずまずであった。これも神仏の加護のたまものであろう」
　幸隆は殊勝に言った。
「まことに左様でございます」
　綱頼はさらに殊勝だ。
「ところで、何の報せじゃ」
　幸隆はうながした。
　綱頼の顔が一瞬かすかにひきつった。
　綱頼は風貌は幸隆によく似ており、体軀がひとまわり小さい。
「おこころしずかにお聞かれくださりませ」
　綱頼は前置きをしてから、
「お方さま、鶴姫さまがご他界なされました」
　と口にした。
「なにっ」
　おもわず幸隆は声をあげた。
「……」
「鶴姫が死んだと？」
　戦場では往々、予期せぬことがおこるものである。このたびは武田軍のキツツキ戦法が見事に裏をかかれた。ところが八幡原の激戦でようやく勝敗を逆転して帰国したところで、幸隆はまったく想像だにしなかった報告をうけた。
「三日前に、お命を絶たれました」
　綱頼の言葉はさらに意外であった。
「自害をいたしたか」
　信じられぬおもいで幸隆は聞いた。
「懐剣で喉をおつきになり、果てられました。近くの者が気づいたときはすでにお亡くなりになられておりました」
　さすがにふるえる声で綱頼は言い、目をうるませた。綱頼は義弟として鶴姫を日ごろしたっていたのだ。
　幸隆には鶴姫自害の理由がわからなかった。
「何かあったのか」
「近くの者たちにたずねましたが、おもいあたるところはとくにございませんでした」
「左様か……」
　幸隆は両膝から力がぬけていきそうになるのを感じた。そして両膝が小きざみにふるえるのをとめることができなかった。
（どうして鶴姫が……）
　幸隆は怒りに似たものをおぼえた。病気や怪我などで命をうしなったのならば、あきらめもつく。だが、みずから命を絶つとは、慮外というほかはない。
　戦の困難ならば、いかようなことであれ、対処することができるし、逆転する



こともできる。だが、自害されては手のうちようがない。
　幸隆は峠の赤松の下に呆然と立ちつくし、鶴姫へおもいをはせた。
　鶴姫が子を産めないことについてなやんでいたことは知っている。
　しいて理由をさがせば、ここにたどりつく。これよりほかに自害の理由はかんがえられぬ。
　子が産めないことは仕方がない、と幸隆はおもう。が、鶴姫にとっては仕方がないではすますことができなかったのだろう。
　しかも、明乃は六郎太の下に源七郎を産んでいる。
　鶴姫にとっては屈辱であり、自分に正妻としての資格がないものとおもいこんで、命を絶ったとしかかんがえられない。
（鶴姫、死ぬことはなかった。おれたちはよき夫婦であった）
　幸隆の怒りはそのおもいからきた。一方的に夫婦の絆を断ち切られた理不尽さをおぼえたのだ。
（これからも、ずっとよき夫婦をつづけられたではないか）
　ぶちまけようのないおもいが幸隆をくるしめた。
（子はいなくても、夫婦は夫婦だ）
　幸隆はずっとそういうおもいで生きてきたが、女の鶴姫はそうはおもえなかったのかもしれない。
（女は子を産むためにのみ存在するものではないぞ）
　幸隆はこころのうちでさけんだ。
　鶴姫はずいぶん賢い女ではあったが、そこのところの理解ができなかったようだ。幸隆はそれを悔んだ。
　しかし本当のところは、鶴姫の遺体を自分の目でたしかめなければ自害が信じ切れない幸隆であった。
　川中島の合戦で逆転勝ちしたにもかかわらず、帰国の途中でとんだ悲報が幸隆を待っていたものである。
　戦国というのは、生と死がとなり合わせにある時代である。それだけに死は日常的に存在するが、幸隆にとってこれほど手痛い人の死に会ったのははじめてだった。
　鶴姫がとつぜん幸隆のもとにとついできた日の昔をおもいだしながら、戸石城へいそいだ。
　鶴姫への惜別の情がどっとこみあげていた。

## 春

　信濃に春がきた。
　永禄六年の二月である。
　海野平の河原郷は春まっさかりだ。春風が木々をゆらし、草原をわたってゆく。まわりの山々は蒼くかすんでいる。
　春の日はうらうらとおおらかである。
　河原家の門前に六文銭の紋を入れた幔幕がめぐらされ、門前、玄関にはおなじく紋入りの提灯がつらねてある。
　親類、縁者が紋服姿で大勢あつまっており、戸石城から真田家の侍が二十人あまり派遣されてきていた。彼等もみな神妙な立居振舞である。
　今回は河原家の式日、婚姻である。
　とつぐのは戸主丹波守隆正の妹明乃である。明乃はすでに源太左衛門信綱を筆頭に何人もの子をなし、齢は四十路にい

たっている。
とつぎ先はむろん、主家真田家である。
幸隆とちぎってからあまりに年へた婚姻であるが、それはいろいろな事情があったのだから仕方がない。幸隆の最初の妻は天文十年の戦のとき死に、二番めの妻鶴姫は二年前に自害をとげた。
昨秋、鶴姫の二度めの法要がおこなわれたときから、明乃の輿入れはさだまっていた。明乃は年齢も四十をこえていることから、輿入れを遠慮したが、幸隆をはじめ子供たちからすすめられて、側妾の立場から正妻になおることになったのである。
嫡男源太左衛門はすでに妻帯している。その源太左衛門信綱をはじめ兵部丞昌輝らの子供たちは今日、戸石において、母の輿入れを待っている。
三男源五郎は、晴信の肝煎で甲斐の名家武藤家が一度絶えたのをきっかけに、その家を継ぎ、武藤喜兵衛を名乗っている。四男六郎太は源五郎にかわって、晴信の近習をつとめている。
明乃の産んだ子はそれぞれ一人前にそだっているのである。
昼前、輿入れの乗物がしたてられ、明乃は白綾の小袖に綿帽子の嫁入り衣装で乗りこみ、介添人、侍女をともない、長持、簞笥、挟箱などをつらねて、戸石へむかった。その花嫁行列を真田家の家臣たちが供奉していった。
夕方近く、花嫁の乗物は戸石城の麓にある伊勢山の居館に到着した。
このころ幸隆は戸石城を本城としていたが、日常はその麓に居館をつくって住んでいた。
婚姻の式は、伊勢山の居館でおこなわれた。
この年五十一歳の幸隆は紋服、裃をつけ、脇差をおびて式三献にのぞんだ。式場の広間には矢沢綱頼、常田新六郎など幸隆の弟たち、源太左衛門信綱、兵部丞昌輝などの子、家老河原丹波守隆正、重臣海野十郎左衛門、おなじく望月三郎兵衛、側臣夏目兵庫、宿将別所八郎太などがつらなった。
色直しなどはなく、概して簡素な式であった。
居館の門前にも六文銭の幔幕が張りめぐらされ、日がおちたころから家紋を入れた提灯に火がともされて、にぎにぎしい雰囲気につつまれだした。
居館内に鼓の音や謡曲の唄声が夜おそくまでながれ、家臣たちには祝いの振舞酒や祝儀の品がくばられた。
この日をもって源太左衛門、兵部丞以下の子供たちは妾腹ではなく、正妻の子となった。
本人も家来たちもこれをよろこんで、祝った。
広間において、幸隆はべつの感慨にふけっていた。かつては放浪の一族であった海野家は今は真田家として信濃に確固不抜の勢力をきずき、弟や子や股肱たちがそろって自分を祝ってくれているのが夢のようである。滅亡に瀕していた一族は完全に復活し、往時の勢力をもしのいでいる。かつてこのような日を想像することができたであろうか。
往時、無数に信濃に存在した豪族たちが淘汰され、そのおおくが滅亡するか、没落して行方がわからなくなっていた。信濃の雄族と称された村上、小笠原、諏訪、大井、高遠などの諸族さえ、今は信



濃から姿を消した。今やまったく信濃は様がわりしているのである。激変したと言ってもいい。
真田はよく乱世に生きのこったと言うべきであった。
しかも今後ますます伸びてゆくだけの基礎が真田にはそなわっている。
伸びる者があれば、ほろぶ者がある。これは戦国の原理である。真田といえども油断しておればほろぶ可能性はおおいにある。これは豪族だけに言えることではなく、戦国大名の場合もおなじである。名家関東管領さえほろんでしまったことがその証左であろう。真田くらいのものがほろぶのに造作はいらないのである。
力だけでは戦国を生きぬくことはむつかしい。
知謀がなければ生きてゆけない。知謀だけでも駄目である。
力と知謀がそなわって、さらに運がつよくなければ戦国を生きぬくことはできないのである。
幸隆は自分一代は大丈夫だと確信していた。何故なら、幸隆は力と知謀と運を兼ねそなえているからである。
だが、二代、三代となるとどうかわからない。
息子たちにはめぐまれているが、息子たちがどう生きてゆくか明確ではない。幸隆の死後の真田の運命は想像ができぬ。
息子たちには幸隆自身が生きざまをしめして、教訓とするしかないのである。幸隆はそれを実行してきた。それ以上はできない。
あとは息子たちが幸隆の教訓をどう生かして生きてゆくかである。
幸隆は源太左衛門信綱に期待をしていたが、二男の兵部丞昌輝、三男の源五郎(武藤喜兵衛)にも期待を託していた。武士は戦場にでるものであるから、いつどこで死をとげるかわからない。これは武士の宿命である。これまで当主や後継ぎが死んでほろんでいった豪族や大名の数は知れない。
幸隆は真田の将来に夢をいだいていた。
(どこまで大きく伸びるか)
そういう興味もあったが、ふだん口にしたことはなかった。息子たちは三人三様、いや六郎太をくわえれば四人四様、末子の源七郎を入れれば五人五様となる。
幸隆は今や男の生き甲斐を感じる年齢になっていた。
居館内の鼓や謡曲のひびきはやまない。
真田の家運はのぼり坂をつづけている。まだまだのぼりつづけていくだろうとおもった。
今宵は家来たちも振舞酒を飲み放題の無礼講だ。
幸隆は鶴姫が亡くなった今となっては、明乃を本妻になおすことはまったく自然だとおもった。家来たちもそれをよろこんでくれているのだ。
明乃は家来たちにもしたわれていた。
今日から明乃は伊勢山の居館に住むことになるが、幸隆とはそう長くともにいることはできない。
真田の出陣がすでにきまっているのだ。しかも今後は戦陣が信濃ではなく、上野にかわった。
信濃の戦陣は永禄四年の川中島の合戦

でほぼ決着がついたと見るべきであった。戦場での勝負は両者ほぼ五分五分だったとしても、戦後、川中島をはじめ北信濃はほとんど武田家によって制圧された。これはまったく晴信の戦略の勝利である。いかに戦場の勝負に勝ったとしても、戦後、領土を確保できなければ、勝利の意味はなかった。

晴信は着々と信濃を武田の領土下におさめてゆき、ついに大部分を征服してしまった。

「間もなく、出陣でございますね」

明乃は祝言が一区切りしたところで言った。

「これからは上野が戦場である。留守をたのむ」

幸隆はこたえた。明乃のはじめの仕事は留守居ということになる。

「上野でございますか？」

明乃はそれまで何も聞いていなかったとみえて驚いた。

「そうだ、真田は今後、信濃と上野でたたかわなければならない」

信濃が一段落したとはいえ、真田は信州先方衆であるから、信濃についても責任がある。何があっても真田がでてゆかなければならない。それに謙信はまだ信濃についてあきらめたわけではないのだ。川中島へも進出してくる可能性は十分あった。

「左様でございますか」

「上野はわしの第二の故郷であるし、あの地には滋野一族がたくさんおる。真田にとってはたたかいやすいところだ」

と幸隆は言った。

晴信もそれをわきまえて真田を二方面で重用しようというのであろうが、普通にかんがえれば、真田はつかわれ過ぎである。幸隆は鳥居峠をこえてひっきりなしに信濃と上野を東奔西走しなければならない。真田は信州先方衆にくわえて上州先方衆の役目も負わされたのである。幸隆の謀略的手腕が買われたと言うべきであろう。

上野の戦地は吾妻郡であるが、ここで以前から対立抗争をしている羽尾家も鎌原家もともに滋野一族である。

晴信はこの抗争に介入して、上野を武田領としてかためていこうという作戦である。

一方、謙信も虎視眈々と関東、上野をねらっている。武田、上杉の戦いが信濃から上野へ場所をかえておこなわれていきそうな形勢なのである。

謙信は関東管領の権威にかけて、関東を慴伏させなければならないし、晴信もかねてから関東進出の野心をいだいていた。

晴信の最初の妻は扇谷上杉朝興の娘であった。山内上杉、扇谷上杉両家は新興の小田原北条氏に圧迫され、とくに山内上杉憲政が没落して、越後の謙信をたよってからは、関東の大部分は北条家の支配下に入っていた。

ところが永禄三年、謙信の関東出兵、小田原城攻囲によって、北条家の関東の兵勢はおおいにくじかれた。とくに西上野の北条家の勢力は一掃された観があった。

晴信はこれを見て、関東経略の野心をあらたにしたのである。北条家にかわって、おのれがとって代ろうとした。

幸隆は明乃と伊勢山の居館で数日すごしただけで、真田の軍勢をひきいて、鳥居峠をこえた。したがう面々は矢沢綱



頼、常田新六郎、源太左衛門、兵部丞、望月三郎兵衛、別所八郎太、丸子重兵衛、これに信濃衆の室賀、根津、柏木、芦田などをくわえて三千の数である。

攻略の目標は関東屈指の要害といわれる岩櫃城である。岩櫃城は吾妻郡の中心にあり、前面は吾妻川にのぞむ高い断崖で、背後はけわしい山がつらなり、文字どおり岩の箱をつらねたような地である。しかも山上は水が豊富で水の手を取られる心配のない山城である。

吾妻郡では羽尾と鎌原の抗争がひさしく、両氏とも幸隆の調略で武田家に帰順していた。ところが昨年六月、羽尾入道が万座温泉へ入湯に行っている留守をついて鎌原宮内少輔は羽尾城を急襲してこれをうばった。

羽尾入道は岩櫃城へおもむいて、斎藤憲広に援けをもとめた。すると斎藤は上杉方の白井城長尾憲景にも援軍を依頼したので、岩櫃城は俄然上杉色がつよくなり、武田もこれをほおっておくことができなくなったのである。

地縁、血縁が複雑に錯綜しているので、極地的な抗争がおおきな戦いを招くことはよくある。そのために幸隆はかつての義父であり、以前、海野一族が信濃を追われたときに世話になった羽尾入道幸全とたたかう羽目になった。

幸隆としては、何とも気のおもい戦であった。

晴信とても幸隆と羽尾の関係を知らぬではないが、大きな戦略のなかで、個人の血縁や姻戚関係まではあまりこだわっていられないのである。

三郎兵衛、八郎太、重兵衛、兵庫などにしても羽尾の恩をうけており、戦意はにぶりがちである。面々はいずれも浮かぬ顔をしていた。

「おれたちは以前ずいぶん羽尾どのの世話になった。羽尾どのとたたかう気分にはどうしてもなれぬ」

直情な八郎太は困りはてたように言った。

「八郎太、そのようなわがままを言うものではないわい。昔からいる真田の家来はほとんど羽尾どのの恩をうけておる。だからと言うて、戦で敵のよりごのみをいたすわけにはいくまい」

望月三郎兵衛がたしなめた。

両人とも羽尾の好意をうけたのは若きころのことであるが、その恩はいずれもわすれていない。兵庫も八郎太も三郎兵衛も今は四十代後半の分別ざかりになっている。

「しかしいかに戦場とはいえ、恩をうけた相手に太刀をかざすことができるか。矢をむけることができようか。相手は放浪のわれわれに衣食住をあたえてくれたお方だ」

八郎太は二十年以上前をおもって、恩義との板ばさみにくるしんでいるのだ。

「それを言うなら、殿のお立場はどうなる。羽尾どのは殿の義父にあたるお方。しかし殿は一言たりとも、泣き言を口にしてはおるまい」

三郎兵衛はそう言って叱った。

「殿のご心中は察してあまりある。戦略のために私の情をころしておられる。本当にお気の毒と言うしかない」

八郎太は感情をおさえかねるように言った。

「羽尾どのを攻めれば、おそらく殿は血も涙もないお人と世間で言われよう。自分の出世のために恩になった岳父とさえ

たたかったと言われることはたしかだ。人非人だと言われるかもしれぬ。武士ならば、そういう立場にたたされることはある」
　今度はさとすように三郎兵衛は言った。三郎兵衛自身も、このたびの戦いは身を切るようにつらいのだ。
　兵庫や丸子重兵衛、松尾権之助、和田勝之助は無言で両人のやりとりに聞き入っていた。こころのうちにあるものは、みな一緒なのだ。
「武士ならば戦場にでれば、みな戦わなくてはならぬ。殿はご自分の父上さえも戦ってたおされたではないか」
　八郎太がおこったように言うと、さすがに三郎兵衛はもう何も言わなくなった。戦場の非情さを幸隆くらい身にしみている者はいないからだ。幸隆が志賀城の戦いにおける父子決戦のことについてけっして触れないのはそのためである。
「今度の戦は長びくかもしれぬ」
　矢沢綱頼は羽尾との関係はべつとして、作戦面、戦術面からそう見ていた。
「できるだけはやく岩櫃城をおとさねば、謙信が後詰めとしてでてくる恐れがある」
　真田軍がもっともおそれていることがそれである。そうさせないためには、武田軍が北信濃から越後をうかがうなどの陽動作戦をおこない、謙信を越後に張りつかせておかなければならない。
　それにこのたびは幸隆が総大将であり、甲斐から武田軍が出動することはない。晴信はあえて幸隆にこの戦いの指揮をすべてまかせたのであった。
　そのかわりに甲府から、検使として三枝土佐守、武藤喜兵衛の二人がつかわされてくることになっている。幸隆は三男源五郎の見ている前で戦の指揮をとることになる。
　幸隆にとってはやりにくいというほどのことはないが、源太左衛門や兵部丞などにとっては、弟の検使で合戦するのは荷がおもいかもしれぬ。源五郎は今や、武藤喜兵衛として晴信の旗本にとりたてられており、ほかの兄弟とはいくらか立場をことにしている。
　幸隆は一人前の旗本に成長した源五郎と会うのがたのしみである。一昨年の川中島の合戦の際には初陣の源五郎とゆっくり言葉をかわす機会がなかった。しかしおおきく成長した源五郎の姿に、幸隆は感慨をおぼえた。七歳の少年のときに晴信のもとへ手ばなした源五郎は今や十七歳の若者になっているのだ。
　幸隆からすれば、源五郎の検使ぶりを見てみたいという心境である。少年のおりから晴信の小姓、近習として薫陶をうけ、晴信を身近に見てそだっているので、どのような影響をうけているか、それを見るのもたのしみであった。
　幸隆の息子たちは五人ともみなつつがなくそだっている。だが、これからはそれぞれ運命がかわってくる。この中から誰が伸びてくるか今はわからない。幸隆は息子たちの将来をたのしみにしていた。
　軍勢は途中から、二手にわかれた。
　岩櫃城を攻めるには、道が二つある。一つは吾妻川にそって西からすすむ正面からの攻撃であり、これには岩櫃城の手前にある長野原城をまず落とさなければならない。
　もう一つが、大戸口方面から北へすすんで岩櫃城を攻撃する道である。



　幸隆は主力の軍をひきいて、正面からの攻撃にむかった。しかし岩櫃城の手前の長野原城には羽尾入道が守将としてたてこもっていた。
　幸隆ははじめから難敵とぶつかることになった。
　幸隆は力攻めにすることは当初からかんがえていなかった。調略によって羽尾入道を武田に帰属させるか、それとも退城させるかすることができるとおもっていた。
　今は敵味方にわかれているが、かつては岳父であり、婿であった。根気よく説得すればこちらの意をくんでくれるだろうとかんがえていた。羽尾でともに暮したこともある間柄である。
　それで幸隆は弟の常田新六郎を使者として長野原城へおくった。
　新六郎は三郎兵衛をともなって、城内に入った。
　城内の雰囲気は当然、険悪である。敵意の視線が二人にあつまった。
「真田は昔のことをわすれたか。よく上野に軍をすすめることができたものだ」
「三歳の子でも、うけた恩はわすれぬと言うぞ」
「幸隆の今あるのは誰のお陰じゃ」
　新六郎と三郎兵衛にたいし、羽尾の家来から罵声がとんだ。
　新六郎も三郎兵衛も羽尾家で世話になっていた。
　城内には見おぼえのある顔がいくつも見え、その顔はみな憤怒をあらわしている。
「以前は大層お世話になりましてございます。おなつかしく存じあげます」
　新六郎は羽尾入道幸全にむかって丁重に頭をさげた。
「常田新六郎、なかなか立派な若武者になったではないか。今日は弾正忠の使者か」
　幸全は新六郎と三郎兵衛を見やって言った。
　新六郎が羽尾に落ちのびてきたときは、まだ十代の少年であった。
　それにかわって幸全は当時男ざかりであったが、今は六十路の白髪頭になっている。
「左様にございます。真田の使者としてまいりました。それがし、羽尾入道さまと敵味方の立場にたとうとはおもいもよりませんでした。兄もきっとおなじでございます」
　新六郎は神妙に言った。
　羽尾幸全は従来上杉管領家に帰順していたが、上杉憲政が越後へ逃げてからは、幸隆の説得によって武田家にしたがっていたのである。
「常田新六郎、世の中はそうねごうたようにすすむものではないのじゃ。われも弾正忠もこのんで敵として相見えることになったわけではない。世の中、往々にしてはからざる成り行きというものはある」
　幸全は人生最悪のにがみをこの年であじわうように言った。
「当方でも、羽尾さまの軍とたたかうことはまことにしのびません。できることならば、双方刃をおさめ和談によって、この場をおさめるのが最上の策かと存じあげます」
　新六郎は真ごころをこめて言った。
「わしもこの年で、婿の軍を敵にまわしてたたかうことになろうとは露おもわなんだ。世の中は皮肉、非情なものでござ

る」
幸全もできるならば、和談によってことを解決したいという心底がのぞき見えた。
新六郎はすばやくそれを察し、うまくしたら調略は成功するかもしれぬとおもった。
「まことに皮肉、非情でございます。なろうことならおたがいに意地を捨て、同族が相たたかう悲劇は避けたいというのが、兄の心中でございます」
「もっともなことじゃ。できるならば意地は捨てたい。だが、武士たるうえは捨てられぬ意地もあろうというもの。まことに武士というものは生きにくきものでござる」
苦衷をのぞかせて幸全は言った。
「左様でございまする。武士はどうしてこのように戦ばかりいたすものなのでございましょう」
新六郎は若さにまかせて言った。
「戦がなければ武士はいらぬ。戦が武士の仕事じゃ。だから武士は戦をする」
「ときに味方とまで戦をしなければならないのはどういう理由でございましょう」
「人間はな、敵と味方といったふうに整然とわけられるものではない。だから、ときに味方になったり敵になったりいたすのじゃ」
幸全は当然だと言わぬばかりに言った。
「だから戦をするのも仕方がないと言うのでございますね」
「あたらずと言えども遠からずじゃ」
そう言ってつくづくと幸全は新六郎を見た。
「兄弾正忠幸隆からあずかってまいりました手紙でございます。ご一読たまわりたくおねがい申しあげます」
新六郎は幸隆から託された手紙をさしだした。
幸全はうけ取って、目をとおしていった。
読みおわって幸全は手紙をたたんだ。
「弾正忠も戦をのぞんではおらぬ。できることなら和談をいたしたいと申しておる」
戦をしたくないならば、どうして幸隆は三千もの軍をひきいて出陣したのだろうという疑問がおこるが、そこが幸隆の謀将たるゆえんである。戦を避けんがために出陣するという作戦もあるのだ。
「真田家の者たち羽尾入道さまと戦をいたしたいとおもうておる者は一人もおりません。なんとか戦をやめる方法についておかんがえいただけませぬか」
新六郎はうったえた。
「戦はわれ一人でいたすものにあらず。したがってわれ一人だけのかんがえでもやめられぬ」
幸全はこたえた。つよがりを言っているのではなかった。
「有難きしあわせにござります。なんとか羽尾家と真田の戦は避けとうござりまする。戦をやめるような交渉をいたしたいとおもっております」
「その交渉をすることができれば、戦は避けられるかもしれぬ」
と幸全が言ったので、新六郎は希望が見えてきた。
武士の戦いのほとんどは領土争いが原因でおこるものだ。このたびの戦の発端となった原因も、羽尾と鎌原との領土争いである。



羽尾と鎌原との領土争いで、斎藤憲広が羽尾に加担したために、鎌原は上野を退去し、信濃小県郡の親戚根津に身を寄せた。晴信は小県郡海野平の一部に鎌原の領地をあたえてなだめていた。ところがこのたび鎌原は幸全が万座へ入湯に行っている隙に羽尾城をうばったという次第なのだ。
「羽尾さまのご要望は」
新六郎が聞いた。
「鎌原がうばった羽尾城をおとなしくかえすことだ。羽尾城は羽尾家代々の城じゃ。これをかえすならば、こちらは戦をいたす必要はない」
幸全の要求はまことにもっともなものであった。
「左様でございますか。しかるべきご要望かと存じあげます。持ちかえりまして、兄弾正忠や鎌原さま湯本さま、西窪さまらと相談いたして、ご返事を申し上げましょう」
新六郎は手落ちのないように言い、幸全の了解を得て、真田の陣営にもどってきた。
真田の陣というのがほかならぬ羽尾城である。幸隆も新六郎も若きころ幸全に世話になった城だ。
「鎌原どの、羽尾どのはこの城がもどれば、戦をやめてもよいと言うてござるが」
幸隆はまず鎌原に言った。
「羽尾入道の言をそのまま信じてよいかどうか疑いはのこる。しかも鎌原と羽尾とのあいだにはもっと以前から争いの種になっていた土地がござる。それを入道が斎藤の後押しで強引に持っていったので、鎌原が羽尾城をうばうこととなった。その袋田という土地を入道はどうしようとかんがえておるのか。そこのところをはっきりと知りたい」
というのが鎌原の言い分である。
「鎌原どのはおかんがえは？」
幸隆は聞いた。
「袋田はかねて羽尾と悶着のある土地でござるが、鎌原としては昔から鎌原の領土とかんがえてきた場所であるから、この城はともかく、袋田についてはゆずれぬ一線である」
鎌原は断固として言った。
「左様か、ならば羽尾入道の意向をたずねよう」
ということになって、ふたたび常田新六郎と三郎兵衛が長野原城へでかけることになった。

## 銃声

新六郎と三郎兵衛が翌日、でかけてその件を幸全にたずねた。
だが、幸全の主張も袋田についてはまったくゆずる余地のないものであった。
「あの袋田こそは、わが羽尾家の代々の血と汗がにじんだ土地である。他人にわたせるわけがない」
両者はまったく平行線だ。
「ごもっともとは存じますが、双方が言い分をゆずらずに突っ張り合いますと、和睦の交渉はまとまりません。袋田の土地について、ゆずれるところはござりませんか」
新六郎が言うと、幸全はこまりはてた顔をした。
「弾正忠のあつかいであるから、なるべ

くならば手打ちに応じたい。けれども袋田についてはゆずる余地がない」
「分割については？」
「おのれの土地をどうして人とわける必要がある」
という返事だ。
新六郎はかさねて説得をこころみたが、効果はなかった。
新六郎と三郎兵衛はむなしく帰城した。
「入道どのはまったくゆずる気持がございません。鎌原どのも同様でござりますから、和談はとてもまとまりませぬ」
新六郎は苦悩の色を見せて言った。和談がまとまらなければ、真田と羽尾の戦いが本当に実現することになる。もっとも愚かで悲惨な戦になることはあきらかである。
新六郎は自分が役目をはたせぬことについてなやんだ。
「入道どのも袋田については意地になっておる。鎌原もだ」
幸隆はそう言ったが、表情はわりにあかるかった。見通しについて絶望的ではなかった。
元来、武士は領土に命をかけている。〈一所懸命（いっしょけんめい）〉という言葉どおりである。
「妙案はござりますか」
「どちらか一方をゆずらせるわけにはいくまい。五分五分のところで手が打てれば結構だ。が、そこまで持ってゆけるかどうか」
領土に関しては武士はきわめてかたくなである。だから一つこじれた場合、和解はなかなかむつかしい。もし、真田が鎌原や羽尾の立場にたっても、おそらく同様である。不十分な条件では、絶対に和解はできない。
「いかがいたしましょう」
新六郎は言ったが、幸隆とて双方を納得させる条件をだせるはずがなかった。
幸隆は本当にこまったときは存外あかるい顔をしている。謀将たる者、余人に自分の肚を見すかされるわけにはいかないからだ。
その反対に幸隆がむつかしい表情をしているときは、割合ことを楽観しているときである。これも同様の理由からだ。
新六郎はだから幸隆が本当にこまっていると感じていた。
翌日、幸隆はまた新六郎を呼んで、
「もう一度、入道のところへ行ってくれないか」
と三度めの使いを依頼した。
「あと二度でも三度でも、望みがすこしでもあるうちは使いいたします」
新六郎は殊勝にこたえた。
「晴信公に許しを得たいことがある。往復六日間休戦をいたしたいとつたえてくれ」
幸隆は羽尾か鎌原に袋田の代替地（だいたいち）をあたえる案をいだいており、それによってこの戦を避けようという腹案を持っていた。今ここで羽尾とたたかうことは、同族相討つことになり、謙信を関東にまねき寄せる恐れがある。どうしてもこの戦を避けたかった。
だがそのためには、晴信の許しが必要であった。
新六郎と三郎兵衛は三たび長野原城をおとずれた。
「入道さま、あと六日間だけ猶予をおねがいいたします。こちらも攻撃はいたしませんので、城からも発砲をご遠慮ねがいます。別の案がかんがえられるかもし



れません。ただ今、弾正忠が奔走いたしております」
新六郎は婉曲に言って、幸全の理解をもとめようとした。
「よし、わかった。新六郎、あと六日間休戦をつづけよう。わしもできるなら、真田との戦は避けたいところだ。その別の案とやらの成功をいのっておる」
と幸全は了解した。
新六郎と三郎兵衛はよろこんでもどった。
「有難い、入道どのはうけてくれたか。これでこの戦をしないですむかもしれぬ」
幸隆はそう言い、弟の矢沢綱頼を呼んだ。
「わしのかわりに今すぐ甲府へ行ってくれ。晴信公に許しを得てきてもらいたい。六日間の猶予だ。時間はない」
幸隆は代替の土地を晴信に用意してもらいたいという旨の手紙を綱頼に託した。
綱頼はただちに丸子重兵衛、生島紋太夫をつれ、馬で甲府へむかった。羽尾から甲府へいたるには、地図の上ではまっすぐに南下すればよいが、実際には関東の山脈が行く手に立ちふさがっている。いったん佐久にでて、佐久から南へくだり、八ヶ岳の東南をへて甲府にいたるのが最短の道である。
その道を先導にたったのが、蓮華坊（れんげぼう）である。
「薩摩守さま、わたしにおまかせくださいませ。あのあたりの道でしたら、猟師や樵（きこり）の行く道までそらんじております」
蓮華坊はひさびさの大役とあって、いさんで先導に立った。
「蓮華坊、さすが言葉にいつわりはないの。見事なる先導だ」
と綱頼が感嘆するほど蓮華坊の先導はたしかだった。一口に羽尾、佐久、八ヶ岳、甲府とはいっても、途中に山や峠はあるし、谷や渓谷、沢もある。そういうところをすべて知りつくして、しかもできるだけ安全な道をえらんで蓮華坊は、三人を甲府まで先導した。
蓮華坊はすでに五十の坂の半ばにいたっているが、体はまだおとろえを知らないし、気迫も十分であった。今までつみかさねてきた年輪がいぶし銀にかがやく年齢をむかえていた。これまで二十数年間、真田家の重大な密使にはたびたび蓮華坊がたっていた。その功績ははかりしれない。
予定どおり三日めに一行は甲府つつじヶ崎に到着した。
綱頼はさっそく晴信に対面し、幸隆の手紙をわたした。
晴信はそれを読んで、
「弾正忠の申し分、しかと了解いたした。どこぞに替地（かえち）を用意いたそう。かえってそうつたえよ」
と快諾したのだった。
晴信も鎌原と羽尾といういわば身内同士の戦いに戦力を消耗するのはこのむところではなかった。謙信に隙をつかれ、つけこまれる恐れもあったからだ。
「ご配慮のほど有難うございました。弾正忠もさぞかしよろこぶことでございましょう」
綱頼はふかぶかと頭をさげ、礼を言った。
晴信も幸隆が昔、失意落魄のとき羽尾入道に世話になったことを知っているし、婿、舅の関係にあったことも知って

いる。それへの配慮が晴信にあったのはたしかである。
「弾正忠はたのもしき弟、息子たちにめぐまれて何よりじゃ。会って行くか」
　と晴信が言ったのは、幸隆の五男源七郎のことである。
「あまり時間もありませんが、お言葉にあまえまして一目」
　綱頼はそうこたえた。
　源七郎は源五郎の後、晴信の小姓としてつかえている。
　ここで叔父と甥の対面はおこなわれた。綱頼と源七郎は半刻（約一時間）ばかり話をかわし、その後、一行は上野の戦場めざしてとってかえした。
　羽尾では幸隆を筆頭に諸将が綱頼一行の帰還を待ちわびていた。
　幸隆は晴信の了解さえ得られたら、この戦いを避けられる成算があった。
　今日が休戦五日めである。
　現地の兵士たちは敵の城を間近にして、どうして無為に滞陣しているのかわからぬむきもあった。戦意に燃えて進軍し、敵前までいたって攻撃にでぬことにいらだつ兵士たちはたしかにいる。
将がすみやかに兵に作戦の意図をつたえられれば申し分はないが、作戦によっては意図をあかせぬ場合もある。今がそうであった。幸隆は攻撃回避、和睦へすすもうとしているが、晴信の意向がわからず、兵士たちに今の状況をつたえるわけにはいかぬ。
「戦はどうなったのだ」
「敵を前にしておびえたか」
「御大将はかつての舅を相手に攻撃はできまい。このままずっと何をしておれと言うんじゃ」
　敵前にいる兵士たちは無為な日々をもてあまし、指揮官たちへ不平不満をもらす者もおおかった。
　この日もよく晴れていた。
　西上野は大方、山岳地帯である。山々の見晴しもよい。
　時は晩春で、季節もよい。山々は新緑のあざやかな色にみち、吾妻川の清流には山女、アユ、ヤマベなどの魚がはつらつとおよぐ姿が見られる。
　兵士たちは山の竹などを切ってきて即席の釣竿をつくったり、網をもちいて、おもいおもいの漁法で川魚をとった。
　指揮官たちは見て見ぬふりだ。兵士たちが戦場で暇をもてあましているのを知っているのである。なかには兵士たちにまじって魚釣りをたのしむ者もいた。
　山のなかには雉子や山鳥がいる。雉子は今が繁殖期で雄の金緑色の羽がとてもうつくしく、雌を呼んでさかんに鳴いている。だからこの時期の雉子はすぐに居る場所がわかる。
　雉子の長い尾と華麗な羽の見事さにひかれた兵士の一人がおもわず、鉄砲に火薬と弾丸をつめて、火縄の引金をひいた。
　ダーン
　銃声は山中にこだまして、木の枝から雄の雉子がおちた。
　すると間もなく、
　ダーン
　すこしはなれた山中からも銃撃の音が聞こえた。
　おそらくべつの兵士が真似て雉子か山鳥を撃ったのであろう。
　ダーン
　ダーン
　やがて散発的にではあるが、山中のいろいろなところから銃声がおこった。これもいずれも鳥をねらった銃声である。
　はからざる事態がおこったのは、その直後であった。
　長野原の数丁におよぶ尾根のあいだに六つの支点をもおけて細長く構築された長野原城から、寄手の真田軍、鎌原軍、湯本軍などにたいして俄然はげしい銃撃がはじまった。
　羽尾城内にいて綱頼のかえりを待っていた幸隆が顔色をかえた。銃声を聞いて幸隆が顔色をかえたのははじめてである。
「敵方が発砲をはじめたな。こちらからは撃つな。銃撃はひかえよ！」
　幸隆はそう命じたが、それが前軍につたわる前に、前線の鉄砲隊が呼応して、城へむかって銃撃を開始した。
　双方のはげしい銃撃戦がはじまった。今までしずかだった上野の山野はたちまち戦雲につつまれ、硝煙がたちこめた。
　これは時の勢と言うしかない。一発の銃声がはずみになって、たちまちのうちに銃撃戦に発展した。誰が発砲を命じたわけでもないのに、こんなことになった。戦場では稀におこることである。
「発砲やめっ、銃撃をやめよ！」
　真田軍、鎌原軍の前線では指揮官がしきりに号令をくだしたが、鉄砲隊はなかなか銃撃をやめようとしない。城方の鉄砲隊がはげしくつるべ撃ちしてくるのだから、途中で止めようがない。
　撃ちかえさなければ、ますます相手から撃ちこまれる。しかも銃撃の後に騎馬隊や槍隊が突撃してくる恐れがあるのだ。
「発砲やめろっ、鉄砲隊は後ろにさがれ！」
　指揮官は必死に号令をつづけたが、発砲はやまぬ。
　銃撃戦はしだいにはげしくなるばかりだ。死者もではじめた。
　指揮官はもう銃撃中止の命令をあきらめるしかなかった。戦場の異様な雰囲気がそうさせるのだ。自分一個の意志など吹きとばされてしまう。
　幸隆は城内にあって、すばやく事態を把握した。
「これは畢竟おさまるまい。こちらが銃撃をやめても、むこうがやめるまい。相手は勢に乗ってしまった」
　幸隆はうめくように言った。
「こうなっては、もうどうする術もありません。戦いになっていくでしょう」
「こちらも戦うしかありません。たたかわなければ戦に負けます」
　新六郎と兵庫はあきらめきれぬ表情で言った。とくに新六郎は幸全入道と休戦の約束をしてきただけに、無念のおもいに耐えることができなかった。
　六日間の休戦という約束はあえなかった。
「あと一日でもどってくるというのに……」
　幸隆はなおあきらめきれぬおもいだった。晴信の許可までとって和睦にようやくこぎつける寸前だったのに、一発の銃声がすべてを崩壊させた。
「羽尾入道さまはさぞお怒りでございましょう」
　新六郎は自分の責任のように言った。入道を裏切ることになったとおもった。
「新六郎のせいではないわ。自然の勢い、こちらの鉄砲隊のせいでもない。天命というものであろう」

幸隆は新六郎をなぐさめ、自分も具足を身につけだした。本意であろうとなかろうと、合戦ははじまってしまったのだ。

新六郎もやむなく具足を身につけた。

戦いは本格的な合戦となり、はげしい攻防へうつっていった。鉄砲隊と鉄砲隊との撃ち合いである。

天文十二年に九州種子島に火縄銃がつたわって今年で二十年めになり、近年では諸国に火縄銃が普及し、戦国大名や諸豪族は鉄砲隊を組織し、合戦の形態もおおいにかわってきていた。戦端を切るのは、それまでは弓隊であったのが、今はほとんど鉄砲隊である。鉄砲隊の撃ち合いによって、戦の形勢がなかば決定づけられる。

今回もそうなりそうな様子である。

羽尾方はことさら戦意に燃えていた。六日間休戦の約束をやぶられたとおもっているからだ。

「真田方は約束をやぶった。信義をまもらぬ軍ぞ。とことん攻めて打ちやぶれ」

「信州へ追いかえしてやれ！」

羽尾入道すらも怒った。

「真田も鎌原も湯本、横谷も攻めやぶれっ。手加減は無用だ。大将首には賞金をかけるぞ！」

入道幸全は怒りに燃えて、全軍を叱咤した。

今まで真田にたいしかくべつの配慮をもってしただけに、裏切られたとおもったときから、それは憎悪と闘志にかわった。幸全の年齢と経験をもってしても、戦場の雰囲気のなかにあると合戦の異常な衝動にかられるのである。

大将の叱咤号令で、将兵たちは戦意に燃えた。

長野原城は西端が本城で、それから東数十間（約百米）に秋葉山の出丸、さらに数十間をへだてて第二の出丸、その東数十間に箱岩の出丸、ついで第四出丸をへて、突端の物見郭となる。各郭が鉄砲隊を装備して雨霰と銃弾をうちはなった。

「敵兵を城に近づけるな。撃ちつづけよ」

入道幸全は最前線にでて指揮をとった。

真田軍もこの猛攻には、城に攻め寄せる余地がなかった。

少数の羽尾軍にたいして、多数の真田軍が打ち手を持たなかった。

その日は撃ちまくられて、夜になった。

「どうにかいたさねばなりませんな」

鎌原宮内少輔が幸隆に言った。

「今の羽尾軍をうちやぶるのはむつかしい」

幸隆はずっと思案していた。

「何か妙案は？」

「ないことはない」

幸隆はそう言ったが、躊躇があった。

「いかなる妙案で？」

「大将をねらい撃ちすれば、羽尾軍の士気はいっぺんにしずむ。あとは押しまくればいい」

幸隆は言いたくないことを口にした。これは兵の心理をついた作戦である。しかも幸全は陣頭指揮にたっている。

「たしかに妙案にござる」

かくして、真田軍から狙撃部隊がつくられることになった。鉄砲隊のなかからとくに射撃にすぐれた者を十人えらび、それに三十人の警固をつけて、夜陰ひそかに長野原城へ接近させた。



一行は吾妻川の渓谷から東へすすんでいった。わずかな月明りだけをたよりに、音もなく接近をこころみた。

しずかな夜で、川の流れの音が聞えるばかりだ。暗い水辺にときたま黄色いちいさな光が明滅した。

蛍である。蛍を見て、一行は季節が初夏になったのを知った。

一行は渓谷をすすみ、長野原城の西端にある本城に近づいた。本城は大堀切りによって南北にわかれ、本丸は北、二の丸は南である。西端の大手虎口は二重の堀切りに土橋をつうじ、枡形の構造をなしている。

朝がしらじらとあけそめるや、この日は真田軍が先手をとった。

まず鉄砲隊と弓隊がじりじりと前進してきて、攻撃を開始した。弾丸や矢が本城にむかってしきりにはなたれた。

「何を小癪なっ」

「飛んで火に入る夏の虫じゃ」

城方の鉄砲隊、弓隊も大手虎口をでて応戦した。

たちまち弾丸と矢の応酬がはじまった。

城方には地元の利があるし、要害による強みがあった。

「真田、鎌原勢、何するものぞ」

「やがて岩櫃城から後詰めがくるぞ。白井城からものぞめば援軍がくる。敵はそのうち退散だ！」

意気さかんに攻撃してきた。

入道幸全は本城の二の丸の断崖上にでて指揮をとった。

寄手の鉄砲隊と弓隊はやや射ち負けて、ひるんだ。

「それっ、撃ちまくれっ」

幸全はいさみたって攻撃を指揮した。

そのときである。

ダーン

ダ、ダーン

おもわぬ二の丸の足元、すなわち断崖下から銃弾の音がひびいた。

よもやそんな城の近くに敵の伏兵がひそんでいようとは誰も想像していなかった。

つづいて一斉射撃の音がおこった。

幸全ははげしい衝撃をうけた。まともに顔面を撃たれ、顔を血みどろにし、体を二間ほどとばされた。

胸を撃たれる者、腹や腰を撃たれる者、手足を撃たれる者。血をながしてうめく者。さけぶ者。二の丸の西端ははからずも血みどろの惨状にかわった。

「御大将が撃たれたっ」

「敵の伏兵がおるぞ！」

「崖の下だあ」

崖上の二の丸にいた将兵たちはあわてふためいて、右往左往した。

何しろ一城の総大将が撃たれたのだから、騒ぎをしずめようがなかった。

幸全は顔の半分を吹きとばされていた。鼻と片目がなくなっていた。将兵たちにたすけおこされたが、すでに虫の息だ。

「無念だ……。幸隆にはかられた」

幸全はせまりくる死を前にして、幸隆への恨みを口にした。幸全には幸隆の和睦交渉そのものが謀略だったとかんがえられたのである。自分の婿にあざむかれた恨みをのんで、息絶えていった。

長野原城が落ちたのは、その翌日であった。

守将なき城が攻撃にたえられるわけがなかった。

幸隆は暗然たるおもいで、羽尾入道の死を聞いた。幸隆自身にも悔いはあった。
実父についで、岳父まで幸隆は自分が手をかけたことになった。
（これが戦というものか……）
というおもいのほかに、父をころし、岳父までころした自分をかんがえるとつよい自虐の念にさいなまれた。
「あっぱれじゃ、弾正忠どの。さすがでござる。この戦功しかと殿におつたえいたしておく」
検使の三枝土佐守は感涙をながさんばかりに幸隆をほめたたえた。
けれどももう一人の検使武藤喜兵衛は幸隆の心中を察して、何も言わなかった。
「喜兵衛、見たとおりじゃ。これが戦というものよ。これに堪えられぬ者は武士をやめて百姓にでもなることだ」
幸隆が言うと、
「はっ、肝に命じておきまする」
源五郎の喜兵衛はこたえた。
「武士というものはいたずらに人をころすものではない。だが、戦となったら、親兄弟といえどもたたかわなければならぬ。臆したら負けぞ」
もう一度言うと、
「しかとうけたまわりました」
と喜兵衛はこたえた。喜兵衛は今にも泣きだしそうな顔をしていた。
長野原城が落ちて、幸全の弟海野長門守と海野能登守兄弟は敗兵をまとめて、岩櫃城へ逃げかえった。
幸隆はいよいよ本来の岩櫃城攻めにかかった。
大戸口にすすんだ軍は、大戸城の大戸真楽斎が海野一族であるため、調略の使者をおくるや、たちまち真楽斎は降服し、以後真田軍にくわわった。
しかし岩櫃城は、近国無双の堅城といわれ、これをおとすことは幸隆をもってしてもなかなか困難であった。
この城は岩峰岩櫃の東腹にきずかれた牙城部から北方平沢の平地に展開する広大な城域と、その外側をおさえる岩つづみ、天狗丸の両出丸から構成されている。また岩櫃山西南面に岩下城をかまえて背面をかためている。よほどの大軍が攻めてきても容易に落ちぬ自然の防禦がほどこされている。
幸隆は二方面から岩櫃城に攻撃をかけたが、びくともしない。
兵を寄せても、押しかえされるばかりだ。
それで幸隆は調略、謀略によって城内の将兵を切りくずすことにきめた。地縁、血縁からいって、調略、謀略をほどこすにはもってこいであった。
幸隆はまず海野兄弟にはたらきかけた。兄弟はもともと幸隆とは同族である。地縁と行きがかりから斎藤についているにすぎなかった。
それで海野兄弟に武田家に帰順して、晴信に忠勤をはげむようすすめた。
海野兄弟は形勢が不利なのをさとって、幸隆に内応した。
幸隆はさらに、城主斎藤憲広と甥の弥三郎憲実が不和であることを海野兄弟から聞きだし、弥三郎に謀略の手をのばした。
弥三郎は伯父にかわって自分が城主になれるものとかんがえ違いをおこし、幸隆の謀略にまんまとのった。
この三人が内応したために、岩櫃城は大混乱におちいった。城主斎藤憲広は嫡



子憲宗とともにようやく城を脱出し、山づたいに越後へおちのびていった。
この結果、晴信は幸隆を吾妻郡の守護に任じ、三枝、鎌原、湯本の三将を岩櫃城においた。

## 佐久の女

幸隆はその年ひきつづき岩櫃城にあって、岳山城攻略の指揮をとっていた。
岳山城攻めは上杉方の沼田城攻略のための前段である。岳山は岩櫃から沼田へでる道の口をおさえる要地なのだ。
岳山城は岩櫃城ほど大きくはないが、堅固さでは岩櫃におとらぬ要害である。池田佐渡守という猛者が斎藤の遺児虎王を擁してまもっていた。
だが、この城も容易におちず、年を越した。
翌春、幸隆は前年から長期間信濃を留守にしていたので、信濃の仕置をするために一度戸石にもどることになった。
今の幸隆は信濃先方衆、上州先方衆として席のあたたまる暇もない多忙の身である。信濃、上野二国の最前線にたつ者として幸隆ほど適任の者は武田家のなかにいないのであった。
しかしさいわい、上信二国は鳥居峠によって隣接しているので、距離はさほどにははなれていない。幸隆は鳥居峠を東西に移動すればすむのである。いそげば二日間で両地を移動することができる。
戸石の留守は家老河原丹波守隆正と海野十郎左衛門がまもっていた。戸石城は謙信への押えの役でもある。
さいわい、幸隆の留守中、謙信に川中島をうかがわれることもなかった。
幸隆は十日間ほどで仕置をおえ、一日、白鳥神社へ兵庫と八郎太をともなって参詣にでかけた。幸隆は氏神にこの約一年間の報告をおこない、宮司石和家に社地の寄進をおこない、石燈籠などを奉納した。
その帰途、幸隆はふと気持がうごいた。
（別所温泉……）
へ行ってみようかという気になったのだ。
「湯で汗と埃をながして行こう」
と兵庫と八郎太に言った。
「別所の湯でござりますか」
八郎太はにやりとわらった。
「そうだ、美人の湯だ」
かくさず幸隆はこたえた。
「前回、殿は美人にお会いなされましたが、今回はあの女はおらぬでございましょう」
兵庫が釘をさすように言った。
「さあ、どうかわからんぞ。人間の縁、男女の縁は摩訶不思議なものだ」
幸隆はわらって言った。三年前、大師湯のなかで見た女の裸身、治兵衛の屋敷の離れで自分の腕に抱かれた女の容顔がはっきりと脳裡に浮かんでいた。
「佐久の女だと言っておりましたが、嘘か本当かわかりませんぞ」
八郎太は幸隆をからかうように言った。
三保と名乗った女への興味はあるとしても、幸隆は女にこだわったわけではなかった。別所温泉への郷愁とでもいったものをおぼえていたのである。
「女はもうおるまい。だが、湯に入りたい」

幸隆がこう言う以上、兵庫も八郎太も反対はしなかった。
　この三年間、幸隆ははたらきづめにはたらいてきた。はしりつづけたと言ってもいい。いくらか疲労もたまっている。いろいろなことがあって、気持の切り替えも必要であった。
　湯は体をほぐすとともに、精神の疲れをもいやす。近ごろ幸隆は、
『不死身の男……』
と言われはじめてきたが、けっしてそのようなことはない。死の危機を何度もくぐりぬけてきているが、それは死を恐れぬ勇気が幸隆の命をすくってきたのだ。
「まいりましょう。あの湯は古傷にもあたらしい傷にもきくと言いますから」
　幸隆の体には新旧とりまぜてあまたの傷がある。幸隆は謀略の将であるとともに、戦場で陣頭指揮をする将でもあった。
　一行はその足で別所温泉へむかった。
　午後の日が落ちなずむころ、一行は別所温泉に到着し、湯につかった。
　地元の客がまばらにいるくらいで、当然と言うべきか、三保の姿はなかった。
　幸隆はかくべつ失望をおぼえず、大師湯のなかでゆったりと時間をすごした。
　ふるい傷にも湯がしみこむようにここちよい。
　兵庫も八郎太も湯に体をしずめて、一時の快楽に身をゆだねている。
　カサコソと木の繁みをゆらす音がして、岩と岩とあいだに猿の顔がのぞいていた。
　幸隆と視線が合うと、猿は一瞬バツのわるそうな顔をして岩の後ろに姿をかくし、またのぞいた。幸隆が知らぬ顔をしていると、そっと近寄ってきた。
　八郎太が横のほうから湯をかけると、
キャキャッ
と声をあげて逃げ去った。
　前回には気がつかなかったが、猿は湯の近くまででてきて、湯治の客から食べ物でももらうのかもしれない。
　ここには間違いなく戦からはなれた閑寂な世界がある。あるいは敵方であっても、湯に入って傷をなおしてゆく者があるのかもしれない。
　そうおもって幸隆はまわりを見まわしたが、それらしい者はいなかった。
「ここの湯は体がほぐれる。四、五日逗留してゆこう」
　幸隆がそう言うと、
（やはり……）
といった顔で兵庫と八郎太は顔を見た。
　幸隆はそれにたいして言い訳をしなかった。どうおもわれようとかまわないのである。ともかく一夕でかえるにはもったいない湯であった。
　逗留先はむろん庄屋善左衛門の屋敷である。
　屋敷に姿を見せると、
「殿さま、とつぜんのおとずれで」
　善左衛門は幸隆をむかえてよろこんだ。
　こころづくしの夕餉の後、
「八郎太、一応様子をしらべてきたほうがいいのではないか」
　兵庫が幸隆のいないところで言った。
「治兵衛のところか？」
「うむ」
「行ってみたほうがいいかもしれん。殿は顔にはださぬが、あの女のことが気になっているとおもう」



「おれが行ってこよう」
と兵庫は言った。どちらが行くべきかと言えば側臣の兵庫のほうだろう。
　兵庫は長百姓治兵衛の屋敷へ行った。
「佐久の女三保はここにまいっておるか」
　兵庫は屋敷の玄関からたまたまでてきた女中にたずねた。
けれども、
「三保さんでしたら、このごろまったくおいでになりません」
という返事だ。
かえって、八郎太につげると、
「そうか、それはよかった」
と八郎太はこたえた。
　八郎太はなんとなく三保に警戒心をおぼえていたのだ。
　兵庫も内心ほっとしていた。だから、このことは幸隆にはつげなかった。
　この夜善左衛門の家に逗留して、翌日、三人は朝から岩風呂へでかけた。昼前にかえってきて、夕方近くまたでかけた。
　またたくまに四日間が過ぎた。
　最後の朝も、三人は飽かず温泉へでかけた。
　もう三人とも三保のことはわすれていた。戸石にもどったら間もなく、岳山城攻めの戦場へもどっていかなければならない。幸隆の頭のなかも戦のことでしめられていた。
　カサコソと後ろのほうで木の繁みのゆれる音がした。
　幸隆はまた猿が近づいたのかとおもった。今回は気にもしないでほおっておいた。
　すると今度は湯の音がした。湯の中でうごく音である。
　八郎太が音のほうを見ておどろいた顔をした。
　幸隆は八郎太の顔に気付いて、横手をながめた。
　白い湯気のなかに、女の胸から上の姿がかすむように見えるではないか。
（まさか）
とはじめ幸隆はおもった。
　けれども湯気のむこうに見える女の顔はたしかに三保ではないか。
　三保もこちらを見ている。羞恥が三保の体をつつんでいる。
「およそ三年ぶりでございます」
　三保のほうが先に声をかけてきた。
「なつかしいな。会いたかった」
　幸隆はおもわず本当のこころを口にしていた。そして幸隆はうれしそうな笑顔をむけた。
　三保は兵庫と八郎太がいるので、さすがに近づいてこられなかった。いくら湯と湯気のなかとはいえ、男三人の前に裸身をさらすほどの勇気はなかったと見える。
「遠慮いたします」
　兵庫と八郎太はそう言い、大師湯をでてとなりの湯にうつった。
「昨日、治兵衛さまのお屋敷につき、殿さまがおいでになっていることをうかがいました。ご縁と申すものでございましょうか」
　三保は今度は幸隆のほうに近づいてきて、なつかしげに挨拶をした。
　湯気のなかの白い裸身には見おぼえがあった。三年前とかわっていない。いくらか脂がのってきたように見えた。やはり乳房がうつくしい。この裸身を抱いた

のだと幸隆はおもった。湯がゆれて、乳首が半分顔をだし、またかくれた。
幸隆は三年間の時の経過をわすれそうになった。三保を抱いたのが、つい先日のような気がした。
三保が顔をあからめた。
幸隆の心中を察したからであろう。
「縁があるのかもしれぬ」
幸隆は最後の日に三保に会えたのがうれしかった。
「わたくしもうれしゅうございました。本当にご縁があるのでございましょう」
三保も驚きや恥しさよりもうれしさのほうが大きいようだ。
「わしは今日、戸石へかえらねばならぬ。一緒にこぬか」
突然おもいついて幸隆はそう言った。
すぐには三保は返事ができなかった。どきまぎとしたこころのうちが窺えた。
「わたくしが戸石へ……？」
三保が聞いた。
「今日わかれたら、もう一生会えまい」
「それは殿さまのおこころ次第でござりましょう」
裸と裸でむき合っているためか、三保はしだいに大胆になってきた。
「三保をつれてかえりたい」
「けれどもお城には、奥方さまがいらっしゃいます」
「城下かどこかに三保の住居をさがそう」
三保はおどろいたが、幸隆は本気である。三保をしっかりとつかまえておきたかった。三年間その気持は幸隆の胸のなかでねむっていたのだ。
「でもわたくしは、佐久の女でございます」
三保が顔をあげて言った。
「佐久へはかえりたくなったとき、ときどきかえればよい」
幸隆が言うと、三保が微笑した。幸隆の一方的な言い分をたしなめているようでもあった。
「どうする三保、ついてくるか」
幸隆にも戦国の武将らしい強引さがある。
戦国は力と謀略の時代である。それに勝ちぬいていった者が最後には覇者になる。だから女を獲得する方法にもそれがでてしまうのは仕方がない。
「こいとおっしゃられるのならば」
三保はそういう返事をしたものだ。
「そうか、その気になってくれたか。有難い」
幸隆はうれしくなった。幸隆には領土欲もあるが、男の欲望もある。これが涸れてしまっては、武将として先が見えたも同然である。
「おかしい……」
と言って、三保は手を口元へはこんでわらった。
「そうか、おかしいか」
「真田弾正忠さまとおっしゃれば、もっと謀のおおいお方かとおもっておりました。これほど真っすぐなおっしゃりようをなさるお方とは存じませんでした」
それで三保は戸惑ったのだ。
「策をめぐらし、熟柿がおちるのを待つというやり方か」
「まあそのほうが謀将と言われるお方に似合っておいででしょう」
三保はもう一度、笑みをふくんだ。
「それも時によりけりだ」



「殿さまのお言葉にしたがいます。佐久をでてくるとき、殿さまにお会いできるような気がいたしておりました」
三保はそんな予感がはたらくらしい。
おもしろい女だと幸隆はおもった。今後三保とともにすごす時間のたのしさが想像された。今までにこういう女と接したのははじめてだった。
「おれは今朝、庄屋の屋敷からくる道すがらなんとなく三保のことが頭に浮かんだ」
それは嘘ではなかった。
「すこしでもおもっていてくださって、有難うございます」
三保はうれしそうにこたえた。
これで、帰途は四人となった。幸隆は三保の素姓や家族などのことについては、ほとんどたずねなかった。ついてくるという三保の言葉を信じるほうが間違いなかった。
実際に三保は幸隆についてきた。
幸隆は三保をひとまず真田郷の長谷寺にあずけた。
「幸隆どのは長谷寺を尼寺にしようというのか」
晃運ははじめはそう言ったが、ことわりはしなかった。
「晃運坊主、たのんだぞ。わが愛する女子じゃ」
幸隆があからさまに言うと、
「この寺は幸隆どのの寺じゃ。好きなようにするがいい。三保どののことは、わしがひきうけた」
と晃運は請け合ったのである。
これから三保は長谷寺の方丈の離れに住むようになった。
幸隆はいったん戸石へもどり、それからいそぎ上野の岳山城攻略の陣へかえっていった。
岳山城攻略も遅々としてすすまぬ。
晴信は上野や信濃の将兵を援軍として幸隆のもとにおくり、攻略を催促してきたが、相手も謙信の援軍を得ており、はやい決着はつきそうになかった。
春がすぎて、夏の風が上野の山岳地帯に吹きはじめた。が、あいかわらず攻略ははかどらなかった。
攻撃に調略に幸隆はさかんに活動していたが、いずれの方面もおもうようにすすまぬ。
一夜、幸隆は綱頼を呼んだ。
小具足をつけた綱頼がやってきた。
綱頼は調略の相談でもうけるのかとやってきたのだ。
「何事でございましょう」
綱頼が問うと、
「数日、ここを留守にする。留守居をたのむ」
幸隆は言った。
「うけたまわりました。しかしながら戦況にうごきがないとは言え、相手も反撃をねらっておりましょう。なるべくお早くおかえりくださいませ」
綱頼は実の弟だけに、おもったことが言える。
「わかった。なるべくはやくもどろう」
そう言い、幸隆は兵庫と八郎太だけをつれて、夜のうちに岩櫃城をしのびでた。夜間ひそかに城をでたのは、味方の将兵にも幸隆の不在をさとらせないためである。
三人は夏の夜をかけて、岩櫃城からひたすら西へ、松明をかざして吾妻川ぞいに馬ですすんだ。
道はずっと山岳地帯であり、ところによ

ってはY谷である。けっして簡単な道ではない。

けれども幸隆も兵庫も八郎太も何度もこの鳥居峠への道を往復しているので、慣れている。馬はためらいもなくすすんでいく。

嬬恋で一刻（約二時間）ほど馬をやすめ、明け方、鳥居峠をこえた。

峠をこえれば、戸石は近い。

兵庫も八郎太もてっきり行き先は戸石だとおもっていた。

ところが幸隆は戸石より手前で、真田郷へ入っていった。

ここでようやく兵庫と八郎太は幸隆の行き先が読めた。

長谷寺である。長谷寺方丈の離れへ幸隆はむかった。

兵庫と八郎太は離れへはついて入れないので、方丈の庭に馬をつないだ。

幸隆は夜旅の疲れも見せず、離れへ入っていった。

折よく、三保はいた。

「三保、会いにまいった」

幸隆が声をかけると、三保はおどろいている。

「戦はもうおわったのでございますか」

と三保が聞くので、

「戦の中途をぬけだしてきたのだ。三保、腹が減った。喉もかわいておる。湯漬けを用意してくれぬか」

幸隆はいきなり言った。

「はい、ご用意いたします」

三保は言い、離れの勝手にたった。そしてすぐに膳に湯漬けの支度をしてきた。

「三保、さすがだ。できる女じゃ」

幸隆はそう言い、飯に湯をかけ、香のものでさらさらと一膳食いおえた。

喉がうるおい、腹がみちると、幸隆は急激に眠気をおぼえた。

「三保、膝を貸せ、ねむとうなった」

幸隆は野放図そのものである。

「はい」

三保が微笑して膝をだすと、幸隆はその場にごろりと横になり、膝枕をした。

「やはり年かな」

幸隆がそう言ったので、三保は微苦笑をもらし、

「いえ、まるで若者のようでございます。でも上野からいくつも山や峠をこえて会いにきてくださって、うれしゅうございます」

と言ったが、そのときは幸隆はもうかるい鼾をかいていた。

しばらく三保は幸隆の様子を見ていた。

幸隆はひたすらねむりつづけている。欲も得もないようなねむり方だ。三保がかるく膝をゆすってもおきない。

それで三保はそっと膝をはずそうとした。となりの部屋へ行きたかったのだ。が、すぐに、

「三保、どうした」

幸隆に声をかけられ、三保は立てなかった。

仕方なく、三保は一刻半（約三時間）あまり、その場でうごかなかった。膝枕をさせたままであった。膝がしびれたが、じっと我慢した。

鼾がとつぜんとまって、

「よくねむった」

大アクビをして幸隆は目ざめた。だが、幸隆はしばらく三保の膝を借りたままだ。

三保はしばらくそのままじっとしていた。

するといつしか、幸隆の手がのびて、三保の身八口にするっと侵入していた。

「あ……」

三保はおもわずちいさな声をあげた。

身八口から入った手が乳房をじかにつかんでいたのだ。

三保は仕方なく、つかまれたままじっとしていた。

幸隆の手はやわらかく三保の乳房をもみたてた。

それがとても気持よかった。快感が背骨をつたって、頭のほうと、尻のほうへぬけていった。

（こんなことで気持がよくなるなんて……）

三保は恥しさをおぼえ、耳のあたりまであかくなるのをおぼえた。

幸隆は乳房をもみながら、撫でまわしている。ときに乳首をつまんで、やわらかく指先でころがすようにした。

（あ……）

おもわぬ快感でまた三保は声がでそうになった。

「これに触れたくて、岩櫃からやってきたのじゃ」

幸隆はそう言い、今度は反対側の身八口にもう一方の手をさしこんできた。

三保は両方の乳房を下からもまれて、よけいに顔をあからめていった。

「いたずらなお殿さま……」

三保は快感が倍になって腰をよじった。

「三保、おれに口吸いをしてくれ」

幸隆は膝枕をしたままはずかしい注文をしてきた。

催促されて、三保はまわりを見まわしてから、やおら顔を近づけていった。

口をつけると、たちまち舌を吸いだされ、吸いこまれて、はげしい口吸いをされた。三保はぞんぶんに舌をもてあそばれた。

気がつくと、三保は畳のうえに仰むけに寝かされていた。

幸隆は三保の体の上におり、乳房を吸いまわしている。

しかも三保の両足はひらき、膝はわれて、幸隆の腰が間に入っていた。小袖の裾は上までまくれ、三保ははずかしい形にされてしまっているのだった。

しかしやがて、三保ははずかしさをわすれ、幸隆の愛撫で忘我の境地へすすんでいった。

## 箕輪攻め

この年十二月、岳山城がようやく落ちた。が、西上野の戦闘はまだおわりをつげたわけではない。幸隆にとってくるしい戦いはつづいた。

しかも岳山城攻略のつぎにひかえる箕輪城攻めは、幸隆にとってもっともくるしいものであった。

箕輪城はかつて、青年時代の一時期の幸隆や海野一族が世話になっていた城である。

当時の城主長野業政は永禄四年に没し、今はその子の右馬允業盛が後をついでいた。

長野家は旧上杉家の重鎮であり、上杉憲政が越後へ逃げてからも、箕輪城を中心にして武田や北条の圧迫をはねのけ、独自の勢力をたもってきた。長野家は時

代がかわった今も、旧上杉家の再興を夢見ていたのである。

　業盛はまだ年若く、父業政ほどの実力は持ち合わせていなかったが、長野家の誇りのために、武田、北条両家への屈服をこばんでいた。

　しかし西上野の諸城をほとんど風靡した武田家としては、いつまでも箕輪城をそのままにはしておかなかった。はやくも業政の死んだ年から、武田家は箕輪城攻略にむけて手をうちはじめていた。

　もとより、幸隆も箕輪城攻略は以前から覚悟しており、国峰城、安中城、松井田城など周辺属城の攻略にうごいていた。

「兄上にとっては、業政どのも岳父、業盛どのは義弟にございます。羽尾家につづいてまたしても嫁の実家とたたかわなければならぬとは……」

　綱頼は幸隆の窮状を見るにたえられぬ様子で言った。

「鶴姫のこの世にいないことがまだしも幸となった」

　幸隆もさすがにくりかえされる骨肉との戦いで、こころにふかい傷を負っていた。

「……」

「戦国の世にあっては、こうしたことは稀ではあるまい。父子、兄弟、親族ともあらそわねばならぬのは戦国の宿命(さだめ)じゃ。業盛どのや長野一族には恩こそあれ、恨みはあろうはずもないが、戦となったらたたかわねばならぬ」

「できるなら、業盛どのがこちらの調略に応じてくれれば幸でござりますが」

　綱頼は顔色をくもらせて言った。

　もとより幸隆はかねて、業盛へ調略の手をさしのべてはいた。再三にわたって使者や書状をおくっていた。

「その望みはほとんどあるまい。業盛どのは最後の一兵までもたたかって壮烈にほろびる覚悟のようだ」

　幸隆の気持は暗然たるものだ。

「わたしが一度、使いにまいってみましょうか」

　綱頼も父棟綱や幸隆とともに箕輪に厄介になっていた時期があるので、気持は幸隆とおなじである。

「お前が行けば、人質にされるのがオチであろう。若い業盛は力とたのんでいた倉賀野城もおち、頭に血がのぼっておる。わしが行ってもおなじであろう」

　幸隆も綱頼も打ち手に窮しているのである。

「なまじ業盛どのが父ゆずりの豪傑肌だけに、かえって調略もつうじないことになりはしないでしょうか」

「勇敢な後継ぎを持ったがために、長野一族は悲劇でおわるかもしれぬ」

　幸隆は長野一族をおしむ気持がつよい。なんとか業盛にも長野一族にも生きのびてもらいたいのだ。

　自分の父棟綱を剋(こく)し、岳父羽尾入道をたおしてきた幸隆だけに、今度は嫁の実家との戦いを避けたいのが本音であった。

「どうして戦国はこの世に悲劇ばかりを生みだしてゆくのでしょう」

「まだ戦国は当分おさまるまい。あと何十年もつづくであろう。わが真田はたたかいぬいて滋野一族の血筋をまもってゆかねばならぬ。生きぬいていくためには、どんな残酷な戦も辞してはならないのだ」

　幸隆は父棟綱や岳父羽尾入道を犠牲にして、ここまで伸しあがってきた。この犠牲を無にしないためにも、今真田がくじけてはならないのである。

「しかも晴信公はいつまでも待ってくれませんでしょう」

「そのとおりだ。今年、鷹留城がおちていらい、晴信公は出陣の要請がありしだい三万の大軍をおくると満を持しておられる」

　幸隆はそれを懸念していた。

　このころ、武田、上杉、北条の関東争覇は複雑な様相になっていた。関東管領になった謙信は毎年のように雪の三国峠をこえて関東に出馬し、その兵の行くところほとんど諸豪諸城は恭順を表したが、謙信が越後へ去るとたちまち北条氏康の軍が侵入し、形勢が一変してしまう有様であった。北条の軍には武田が援軍をおくることがしばしばであったが、一昨年ごろからは西上野一帯は武田軍が主力で北条軍がこれに援軍する傾向になり、しだいにこの地方は武田軍の領地のようになっていた。氏康はこれを不満としていたが、謙信の関東経略に対抗するには、どうしても晴信の力を必要としたのである。

　それから数日後、岩櫃城のもとに長野家の使者があらわれた。

「吉武どのと梅村どのにございます」

　兵庫に言われて、幸隆は使者之間へでていった。

　使者之間には吉武光之丞と梅村掃部助(かもんのすけ)が端座していた。

「ひさびさの対面であるな。その方ら健勝にてなによりである」

　中年の二人の武士を見て幸隆は言った。

　二人は鶴姫づきの側臣として二十年前に松尾城にやってきた者である。そして両人とも松尾城にとどまった。鶴姫の死後、箕輪城に帰参していたのであった。

「おなつかしゅうございます。弾正忠さまのその後の目をみはるご活躍おめでとうございます。箕輪にあってわたくしどももおよろこび申しあげておりました」

　吉武が代表して挨拶をおこなった。

「松尾城に在城いたしておったころは鶴姫が大層世話になった。感謝いたしておる。その方らも堅固で何よりじゃ」

　幸隆も両人にたいしてなつかしさをおぼえた。幸隆は鶴姫の死後も真田家にとどまるよう両人にたいしてすすめたのだが、二人ともそれを固辞して箕輪へもどっていったのだ。

「弾正忠さまもご壮健で、おめでたく存知あげます」

「なに、わしもぼつぼつ年寄の仲間入りじゃ。昔がなつかしいわい」

　と言った幸隆は五十四歳である。見方によってははたらきざかりであるが、一般的には初老に入ろうとする年ごろである。

「弾正忠さま、以前にくらべてすこしもお年を召していらっしゃりません。わが記憶にあるままでございます」

　梅村がそう言ったのも、松尾城時代をなつかしんでのことであろう。

「本日は右馬允どのの使いでまいったか」

　幸隆は先をうながすと、

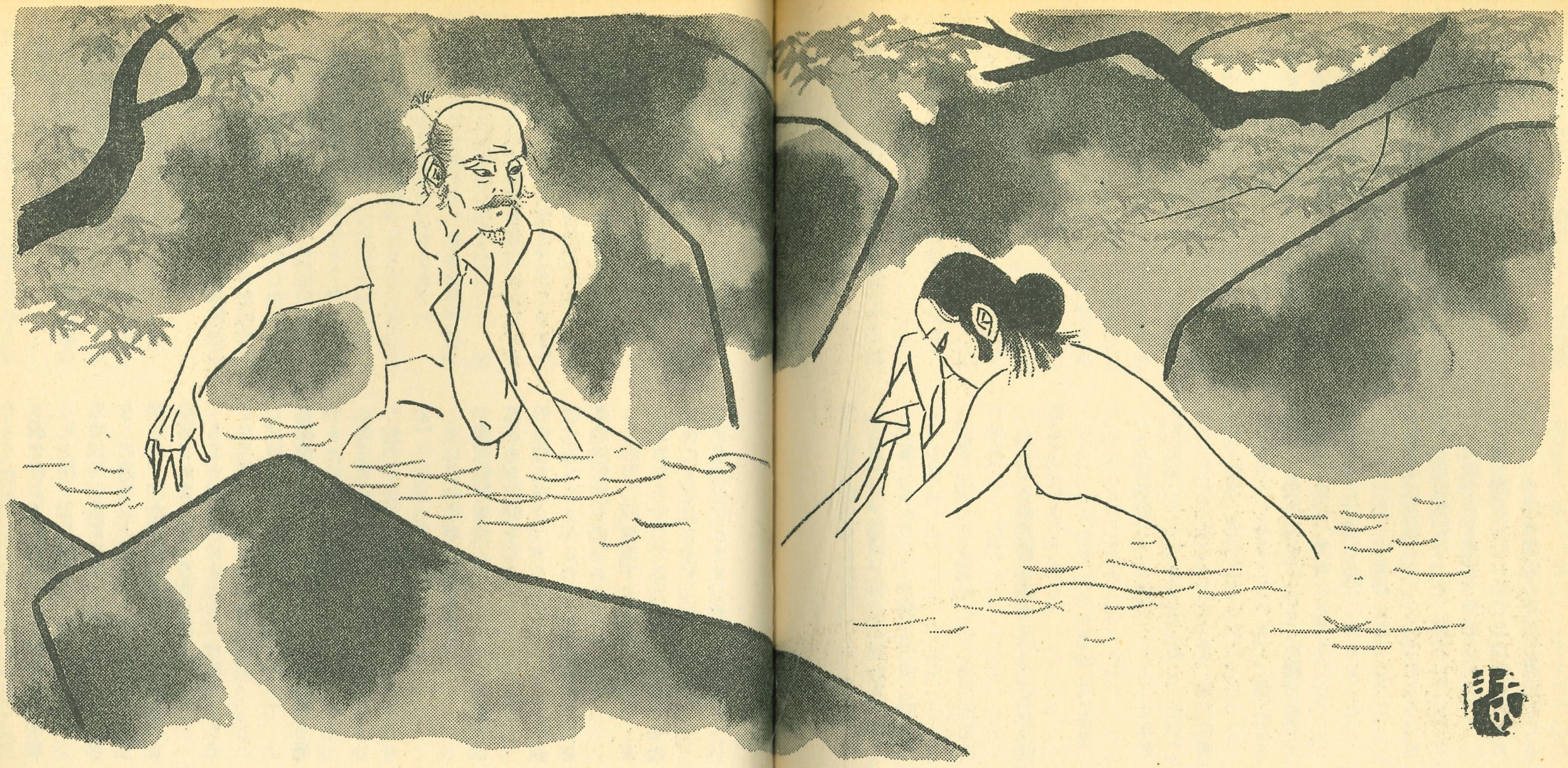
「左様でございます。主人右馬允さまの使いにて参上いたしました」

　吉武はこたえた。

「聞こう、言うてみよ」

　幸隆はうながした。

　吉武と梅村は居ずまいをただし、やや緊張の態度となった。



「わが主人長野業盛さまがおっしゃいますには、真田弾正忠さまが武田家を見かぎりて当方にお味方いたせば、真田家に信州海野平と上州岩櫃城を安堵いたそうとのことにございます。わが長野家には越後上杉家の援軍が近々のうちにいたり、上州および信州をたちまち席捲するであろうとのお言葉にございます。早々にわが軍にお味方いたせば、真田家の将来は安泰であろうとおっしゃられております。なにとぞご一考のほどおねがい申しあげます」

予想もしないことを吉武は口にした。

幸隆もそばで聞いていた兵庫も唖然となった。返事のしようのない言葉であった。業盛は幸隆の調略を無視したばかりでなく、武田を見かぎってこちら側につくならば、現在の真田家の領土を安堵しようと強気に言っているのだ。

幸隆がもっと年若ければ顔色を変えたかもしれない。しかし幸隆は老練であり、巧妙である。若い業盛の挑発にのるわけもなかった。

「ご親切なる業盛どののお言葉、有難くうけたまわった。さりながら、われ幸隆は武田家につかえて二十余年、今さら武田家を見かぎるべき理由も筋道もない。長野家には旧恩があればこそ、長野家の将来をおもんぱかって使者をだしたのでござる。業盛どのに武田家にしたがう意志があれば、幸隆が仲立ちをいたす所存であった。そうすれば長野家の所領と将来については、不肖幸隆が保障することができたのじゃ。さりながら長野家にその気持が毛頭ないならば、このたびの交渉はまったく無用のものと相なった。この上は戦場にて決着をつけるほかに途がなくなり申した。業盛どのにそうおつたえあるよう」

幸隆は和睦交渉の決裂を言いわたす羽目となった。

いかに幸隆が老練巧妙の将であるとはいえ、こちらの和睦の意を嘲弄するがごとき返事にたいしては断固たる態度をとるしかなかった。

業盛が血気にはやるのは、若さからして仕方がないとしても、業盛のそばに若い主人をたしなめ、過不足のない意見をする重臣、股肱のいないことがあきらかにされた。

吉武と梅村は赤面して、頭をたれるばかりだ。
「まことにつたなき使いにて、弾正忠さまには申しわけなきことにござりました。かえりまして、わが主人にお言葉をおつたえいたします」
と吉武は手をついて言った。
幸隆はこれまで、晴信の箕輪城攻撃の命令をおさえて時をかせいできたのであるが、こうなってはもういたしかたなかった。
「今度は戦場にて相見えようかもしれぬ」
と両人にもつたえた。
「いたし方なきことにござります」
吉武は今にも泣き出しそうな顔で言った。
「弾正忠さまのご好意を無にいたし、まことに申しわけなき次第にござります」
梅村もそう言って詫びた。
「戦国の世なれば、戦は仕方なきことにござろう」
これが幸隆のわかれの言葉であった。
二人は悄然と幸隆の前をたち去った。
幸隆は今はこれまでと、甲府に使者をおくり、晴信への出陣要請をおこなった。
満を持していた晴信はただちにみずから総大将となり、内藤昌豊、山県昌景、馬場信房、飯富虎昌、甘利春吉、原虎善などの諸将以下三万の大軍をひきいて出陣した。約十倍の大軍で一気に箕輪城を陥落させようというのである。
ところがこれによって、はからざることが幸隆のうえにおこった。
武田軍の大軍出動の情報に接して、上杉謙信がみずから兵をひきいて越後を発するという報告がいたった。
『弾正忠はただちに岩櫃城へ軍をひきいてもどり、上杉軍の関東侵入を阻止せよ』
という命令が幸隆にくだった。
謙信の関東侵入路というのは、春日山城から三国峠をこえて猿ヶ京にいたり、沼田城を拠点とするものである。この前面にたちふさがるのが、武田軍の最前線基地岩櫃城なのである。
上杉軍の関東南下を阻止するのは、真田軍本来の役目であった。幸隆は本来の役目にもどれと命じられたのだ。
「軍を岩櫃にかえす。岩櫃から南へ上杉軍をすすめてはならん！」
幸隆はただちに諸将に命じた。
「兄上、箕輪の戦場からはなれるのですか」
綱頼はほっとしたような顔で言った。
兵庫と八郎太も安堵の表情を見せている。
「上杉の軍をはばむのじゃ。相手は長野以上に強敵ぞ！」
幸隆はすこしも安堵の色を見せずに号令した。
しかし厳しい表情の下にはとつぜんの僥倖に接したよろこびがあった。どんな困難な作戦命令をうけようとも、箕輪攻略からぬける喜びは大きかった。
これで鶴姫の弟を追いつめ、ほろぼす役目から逃れることができた。いかに幸隆が非情苛烈の武将とはいえ、骨肉、縁者とたたかうこころの疵はふかい。
晴信はあえて幸隆の立場をかんがえて、箕輪攻略の作戦からはずしたのだろうか。いや、晴信は合戦の場に私情をもちこむような武将ではない。これはまったく天祐というべきであろう。
（鶴姫が陰から力をあたえてくれたのだ）
と幸隆はおもった。
鶴姫は父の城が幸隆の兵によって落ち、弟が死にいたるのを堪えることはできなかったのだろう。鶴姫は死して、幸隆と業盛との直接のたたかいを分けたのだろうと幸隆は信じた。
真田軍は岩櫃城にひきあげた。
岩櫃城は上杉軍の来攻を前にして、緊張感がはりつめていた。謙信は一万五千の軍をひきいて攻めてくると言う。
一万五千の軍を岩櫃城でささえるのは大変困難である。それに沼田城が攻撃にくわわってくる。
しかしそれでも幸隆は、箕輪城を攻めほろぼすよりは気持が楽であった。幸隆としては妻の弟とたたかうよりは剛雄謙信と兵をまじえるほうがどれだけ楽かしれない。
（よいときに謙信が攻めてきてくれる）
という気持である。
「三国峠と清水峠へ物見をだせ」
そう命じておいて、幸隆は謙信迎撃の作戦に入った。
どちらかといえば、岩櫃城は甲府よりも春日山に近い。信濃においても、上野においても真田は武田領のもっとも北に位置して、上杉と対峙しているのである。
真田の物見隊が三々五々、猿ヶ京から三国峠と清水峠へむかった。
春日山から関東に侵入するには三国峠と清水峠の二つしかないが、今までの謙信の足取りを見ると、ほとんどが三国峠ごえなのである。ここさえおさえておけば、上杉軍の動向はすぐにわかる。
謙信は箕輪城あやうしと見て、とるものもとりあえず兵をあつめて春日山を出陣するようである。岩櫃城など謙信には眼中になく、鎧袖一触、箕輪へむかうつもりであろう。
武田軍三万は晴信が軍用道路としてつくらせた棒道をまっしぐらに駆けて、はやくも鼻高（今、高崎）に陣を敷いた。
そして上杉軍がいたる前に箕輪城をおとしてしまおうと、本陣を北方の八幡にすすめ、若田ヶ原を占領する作戦をたてた。若田ヶ原は碓氷川の北岸にあり、板鼻の鷹巣城の北東十数町にある高台の野である。箕輪城にとっては西南方の支城の喉にあたる重要な地域である。
武田軍は安中を発し、鷹巣城に兵站部をおいて、晴信も鼻高の陣をはらい、碓氷川をこえて八幡に入り、大聖寺に本陣をすえた。和田城を攻めおとした晴信の子勝頼と副将原加賀守も晴信の軍にくわわり、一挙に若田ヶ原にむかった。
長野側は重臣藤井豊後守を総帥とし、諸将をひきいて若田ヶ原にすすんだ。
両軍の戦いははじまった。まず鉄砲隊と弓隊が撃ち合い、長野軍青柳金王忠家の騎馬隊が武田軍の内藤昌豊の陣をつきやぶった。
武田軍の小幡信定の隊は三百余騎をもって青柳隊を撃退した。
さらに長野軍白川満勝、下田昌勝隊が突撃し、武田軍の那波無理之助の隊を一気につきくずし、三杉勘解由、井野弥治衛門は五百余の兵をもって、白川、下田隊を横手から切りくずした。
若田ヶ原に太鼓、法螺貝の音がひびき、銃声が鳴り、喊声が天をついた。
長野軍の総帥藤井豊後守は精兵五百騎をもって武田軍の主力に突撃し、縦横にたたかい、下田、青柳、そのほかの諸将

も備えをととのえ、赤石、神尾、寺尾の諸隊とともにいっせいに突撃した。

この長野軍の猛攻撃で武田軍は混乱し、後退していった。武田軍の大将内藤昌豊は形勢はなはだしく不利であるのをみてとって、引き太鼓をうち鳴らし、全軍を安中へ退却させた。

一方、長野軍は少勢のうえ、疲労がはなはだしく、追撃する余力もなかったので、藤井豊後守は追撃せず、軍をまとめて箕輪城にひきあげた。

ついで翌日、ふたたび若田ヶ原で両軍は激突した。しかし衆寡の差は歴然としており、ついに武田軍は若田ヶ原を占領した。

武田軍は三万の軍勢をもって箕輪城を包囲し、晴信は生原に本陣をおき、勝頼を搦手の大将として、小幡信定を遊軍とした。東は今宮、中里。東南に保渡田、井出、鳥子の森、西新波。西は高浜、白岩、愛岩の原。北西から北東へかけて阿蘇山、相馬ヶ原、舟尾山、桃井の原……。箕輪の山野はすべて武田軍でうずまった。

武田軍は正面から堂々と押しだしていった。

城兵は武田軍を近くに寄せつけて、鉄砲をならべていっせいに狙撃した。

これで大勢の死者がでて、武田軍は混乱した。

城からはさらに鉄砲隊がいっせい射撃をし、武田軍は第一日だけで数百の死者をだした。

翌日から武田軍は正攻法をやめて陽動作戦に切りかえた。軍の主力を搦手へうつし、大手、搦手双方から鉄砲、弓などで攻めた。

長野軍も少数ながらたがいに士気を鼓舞して勇敢に抗戦をつづけた。

攻防たがいにきそい、ここを先途と両軍は懸命にたたかった。

攻防はつづいた。しかし武田軍はつぎつぎに新手の勢をつぎこみ、つかれた兵は後退し、入れ換え入れ換えして猛攻をつづけ、相手に休息の暇をあたえなかった。

一方、長野軍も精いっぱいたたかった。士気は武田軍にもおとらなかったが、勢力に差があり過ぎた。まもってもまもっても、その十倍の勢力で攻撃されて、



悪戦苦闘におちいっていった。

そして武田軍はついに城中に乱入していった。

長野軍の総大将業盛はまだ十九歳の若武者である。目にあまる大軍を城下にひき寄せ、奮戦に奮戦をかさねたが、郭の外を攻めやぶられて、ついに本丸にひきしりぞくことになった。むらがる武田軍の将兵二十八人を馬上から斬ってはおとし斬ってはおとし、自分の鎧につきたつ矢をもぬかず、疵口からあふれる血が白絲の縅をまっ赤に染め、兵をまとめて本丸にしりぞいた。

このとき業盛は藤井豊後守が搦手の大軍とたたかい、ついに戦死したと聞き、

(長野一族の戦はこれまで)

と覚悟した。

業盛は城をおち、越後へ逃げることをすすめる老臣たちを逆にたしなめ、本丸の持仏堂に入り、祖先と父業政の位牌に三拝し、鎧をぬぎ捨て、辞世の一首をしるした。

春風に梅も桜も散りはてて
名のみぞのこる箕輪の山里

業盛はこころおきなく念仏をとなえてから、壮烈に腹をかき切って果てた。

一族郎党おおくの者が業盛に殉じて果てた。

強豪をほこった箕輪城はついに落城し、ここに名族長野一族はほろんだ。

晴信は多年の望みを達し、内藤昌豊を箕輪城代に任じた。

幸隆は箕輪落城の報に接する何日も前から、岩櫃城下の商人や北へむかう行商人などに一摑みずつの銭をあたえ、

「箕輪城陥落」

「長野一族滅亡」

の情報を越後へつたえさせた。

その情報はたちまち三国峠をこえて、越後へひろまり、春日山にまでつたわったと言う。

そのためかあらぬか、謙信は一万五千の大軍をひきいて三国峠近くまできたが、途中から春日山城へひきかえして行った。

## 三　保

真田郷の空は高く澄みわたり、山々は蒼く周囲をめぐり、ゆたかな稔りの田畑が盆地にひろがっている。

信州にまた秋がめぐってきた。

箕輪城がおちてから二年がたち、永禄十一年も後半にいたっている。

幸隆が真田郷の土をふむのは、これが今年二度めである。

西上野はほぼ完全に武田領となったが、岩櫃城の真田軍にゆとりが生れたかというと、そうではなかった。従来、武田家と同盟をむすんでいた北条が武田家と断交し、越後の上杉とむすんだために、西上野で真田は上杉と北条を敵としてつねに警戒しなければならなくなったのである。

このころ、晴信は信濃、上野から一転して、南と西をめざしていた。謙信の目がつねに京都へむかっているのと同様に、晴信の大望もまた中原につながっている。

甲斐の西は高峰をつらねる赤石連峰でたやすく越えることはできないが、諏訪、伊奈、木曽方面の道は今や武田が確保している。のこるは、西南、今川氏の領国であった。晴信は従来の同盟国今川を討滅すべく機会をねらっていた。

そのため今川氏と親戚の北条は武田と手を切り、今までの敵国越後の上杉と同盟したのである。そのシワ寄せが上野の武田勢にあつまって、とくに真田は上杉、北条の二勢力からねらわれる局面にたった。幸隆は岩櫃城において上杉と北条にたいして睨みをきかせ、敵が蠢動するとみるや、ただちに出動していった。上杉にたいしても、北条にたいしても、岩櫃城が最前線にたっていた。

したがって幸隆が信州戸石や真田郷に帰国する機会はほとんどなかったのである。上杉も北条も密偵をつかって虎視眈々と幸隆の留守をねらっていた。幸隆が岩櫃城にいるかぎり、上杉も北条もまず兵をうごかすことはできなかった。

幸隆はその隙をみて、わずか五人の近臣をしたがえただけで、今日真田郷に入

ったのだ。行き先は長谷寺(ちょうこくじ)である。
わが菩提寺への道をたどる幸隆のこころにはたのしさがひそんでいる。菩提寺といえば、こころの拠り所であり、安住の場所である。ひさしぶりに住職晃運にも会いたいし、三保の顔も見たい。三保の顔見たさに上野から五人の供をつれて信州まで足をはこんだと言ってもいい。
秋の落暉(らっき)が西の山にかくれたころ、一行は長谷寺についた。
山門のそばに立つひょろっと背の高い坊主の姿が見える。
「晃運和尚、わざわざの出むかえか」
幸隆は馬の背から声をかけた。
「なんの、馬のひびきが聞えたのででてみたのじゃ。それにしても呼び名が坊主から和尚にかわったの」
晃運はそう言い、にこりと笑顔を見せた。年はとっても、笑顔は昔とかわらぬ。
「わが菩提寺の開山じゃ。大切にいたさねばなるまい」
幸隆が言うと、
「よくそこに気づいたの。幸隆どのは並の大将ではないという評価が世に言われておる。わしはそれを二十余年も前に見ぬいた。今や武田の中になくてはならぬ大将じゃ」
晃運は幸隆の出頭ぶりが自慢でならないのである。
「若きころはよく和尚の世話になったものだ」
「まだまだ幸隆どのの出頭はこんなものではあるまい。末がたのしみじゃ」
「和尚、おれは今年五十と六歳じゃ。末はもうあまりない」
幸隆は苦笑した。
「なに幸隆どのはお若い。とても五十六歳とは言えまい。武田の信濃、上野進出は幸隆どのなしにはかんがえられなかった。これまで武田の屋台骨をささえてきた」
「それは誉(ほ)めすぎじゃ。和尚、贔屓(ひいき)のひきたおしと言うものよ」
「わしはそうはおもうておらん。自分のことは存外見えぬもの。しかも幸隆どのの後にはたくましい息子たちがそだっておる。ほかの武将たちが見ればみな涎(よだれ)がでそうな若武者ばかりだ。どれをとってもいずれも幸隆どのの後継ぎとして不足はない」
ひさしぶりに会ったためか、晃運は今日は世辞の大盤振舞いだ。
「息子たちのことはわしにはよくわからん。歯がゆいおもいをすることもしばしばだが」
長男源太郎は今や源太左衛門信綱(のぶつな)として押しも押されぬ武将に成長し、二男昌次郎も兵部丞昌輝(ひょうぶのじょうまさてる)と称し、武田家の百足衆(むかでしゅう)の一人にかぞえられている。三男源五郎は武田の名家武藤家をつぎ、武藤喜兵衛として晴信側近の旗本に成長し、重要な役割をあたえられていた。四男の六郎太も晴信に召しだされて近習をつとめ、名家加津野(かつの)をついでいた。さらにこの下に五男源七郎もおり、ほかの諸将がうらやむばかりに子にめぐまれているのだ。
「幸隆どの、それは親の贅沢と言うものじゃ。五人めの源七郎どのはまだわからぬとしても、上の四人はいずれをとっても器量にめぐまれた有望な若武者ばかり。よくこれだけ見事にそだったものよ」
晃運は感嘆しきりである。
「武家は後継ぎがすぐれておらなければ、家と一族を将来にのこすことができぬ。一代かぎりとなってしまうだろう。そうなれば所詮は無駄ばたらきじゃ。武家は後世につづいてこそ意味がある」



幸隆はこれまで信濃、上野を戦場として、おおくの豪族をほろぼしてきた。その中には平安、鎌倉いらいの名家もすくなくはないので、そういう感慨をいだくのである。
「おのれ一代かぎりでつぶれてしまえば、武家もさびしきものでござりましょうな」
幸隆は信濃の名族滋野を後世にのこし、真田家をおこすためにこれまではたらいてきたのだ。
「わしの菩提は晃運にゆだねてある。よろしくたのむぞ」
幸隆が言うと、
「おこころおきなく一生懸命のおはたらきをなさいませ。後は晃運におまかせあれ」
と晃運は請け合った。
「三保はつつがなく過しておるか」
照れることもなく幸隆はたずねた。
「三保どのは一日千秋のおもいで、殿のおかえりをお待ちでございましょう」
晃運の言葉を聞いて、幸隆はやや安堵した。上野の戦地において幸隆はずっと三保の身の上にこころをくだいていた。
戦国の武将たちが子孫の繁栄をねがうために女を身に近づけるのは常道である。が、幸隆のおもいはそればかりではなかった。男の性(さが)として三保のことを気にかけずにはいられなかったのである。
幸隆は馬をつなぎ、本堂にあがって、先祖の位牌(いはい)をおがんでから、方丈の離れへむかった。
三保はすでに幸隆の帰国を察しており、離れの入口にでて待っていた。
およそ半年ぶりに見る幸隆の姿であった。
「殿さま、おかえりなさいませ。三保は待ち侘(わ)びておりました。昨夜(ゆうべ)、殿さまがおかえりになる夢を見ましたので、お待ち申しあげておりました」
そう言って三保は幸隆をむかえた。三保の姿には幸せがみちており、地味な打掛けに小袖の姿にうつくしさがいやまし、艶冶(えんや)な雰囲気さえたたえていた。
「三保の顔が見とうて、もどってきた。達者でなによりじゃ」
幸隆は三保の顔を見ると、おのずから頬笑みがもれた。
「殿のご無事な姿に会えて、うれしゅうございます」
三保もこころからよろこんでいるのが幸隆にはわかった。戦国の世においては、生きてふたたび会えるということが非常にめでたい。一期一会である。
「生きておればこそ、こうして三保にも会える。死んでしまえばすべてはおしまいじゃ。生きんがために、わしはつねに死を恐れずたたかっておる」
三保とともにいると、幸隆の体に青年客気の血がみなぎってくる。幸隆はこういうときこそ自分の年齢をわすれてしまう。二十代の若者とおなじこころにもどっているのをおぼえた。
「わたくしは殿にまもられて生きていけるのが幸せでございます」
そういう三保の言葉が幸隆の身にしみた。
「一族の女子供たちをまもるためにもわしは生きている」
幸隆のこの言葉に偽りはなかった。青

年のころ、一族がやぶれ、四散したがために、幸隆はこのおもいがつよいのである。
「西上野は、上杉と北条にはさまれたところと言われておりますが」
三保もこのことをつねに心配しているようだ。
「真田が岩櫃にいるために、あの地はささえられておる。あの地が危険であればあるほど真田の名が天下に高くなる。武士は名をあげることも大切な仕事なのだ」
「たのもしいかぎりでございます。そのような強きお方にまもられている三保は幸せでございます」
「わしがもっと若ければ、三保にわしの子を産んでもらいたかった」
幸隆にこう言わせたのは、戦国武将の本能と言うべきものである。
「今からでもおそくはありません。こころとお体が若ければ、殿御はいくつになっても子を産ませることはできるでしょう」
三保はそう言ってから、おもわずぽっと顔をあからめた。
幸隆はすぐれた息子たちにめぐまれているが、それで多すぎるということはない。多ければおおいに越したことはないのである。長野業政が十数人もの娘を諸豪族に配し、勢力をかためたのもそのよい例である。
幸隆も好いた女に自分の子を産ませたかった。
三保もそれをのぞんでいる。
離れの襖と障子はあけはなたれており、秋風が座敷に吹きこんでくる。この月（八月）の上旬までは月の出がはやく、すでに半月が境内の松の木の上空にかかっている。
モズやキツツキの鳴き声が聞えてくる。
「殿、今は一年でいちばんよい季節です。近くをあるきにまいりませんか」
三保が言いだした。もっともよい季節に好きな男と外をあるいてみたい気になったのだろう。
「いいだろう。わしも夜あるきなどたのしみたい」
夜とはいっても、まだ宵もあさいうちである。
幸隆は三保にさそわれて離れから境内へでて、さらに岩井堂川のほうへあるいていった。
月の光だけでなんとか道筋はわかる。
三保のほうがよく道を知っていて、先に立ってあるいた。
幸隆は三保についてあるいて行けばよかった。
道はなだらかなところである。
風はほとんどなく、秋の天地はしずかである。虫の声だけが聞える。
三保が幸隆にならんだ。三保の体から女の匂いがかおってきた。
いつの間にか、三保の手が幸隆の手にからまっていた。三保はいかにもたのしそうにあるいていく。
しばらく行くと、せせらぎの音が聞えてきた。
川岸までは草原がつづいている。
三保が幸隆の手をつよくにぎった。
「殿、三保を抱いていって」
あまえるような声で言った。まわりの暗さが三保の羞恥を消したのだ。
幸隆にもためらいはなかった。三保の体を力づよく横抱きにしてあるきだし



た。幸隆は自分が青年にもどったような気分になった。
三保は片手を幸隆の首に巻きつけてきた。そして自分の顔をいっそう幸隆に近づけた。
「わしは上野におり、三保は真田郷におる。なかなか会うことができぬ」
幸隆はかたりかけた。
「わたくしは長谷寺で殿さまがおいでくださるのをお待ちいたしております」
三保はしおらしい。
「佐久へかえりたくはならぬか」
「わたくしは殿の女でございます。佐久へはかえりません」
「上野に呼ぶこともできるが」
幸隆が言うと、
「ふふ……」
三保がふくみ笑いをもらした。
「いやか」
「いやではありませんが、わたくしはここで殿をお待ちするのも苦ではありません。待っておれば、こうして殿にお会いできるのですから」
三保はふたたびあまえるように言った。
幸隆は三保の体の感触をほとんど全身で感じていた。三保は自分のすべてを幸隆にゆだねきっている。
幸隆は別所温泉の湯の中の三保の裸身をおもいおこしていた。それはつい先だってのことのようにおもいだされた。
幸隆と三保とは不思議な出会いでむすばれた。不思議な運命の糸によってむすばれたと言ってもいい。運命的にむすびついたのだと幸隆はおもった。
「遠くにはなれていても、三保がわしからはなれることはあるまい」
幸隆はこの自分の言葉を信じていた。
「わたくしも今おなじことをかんがえておりました。どんなに遠くにいても、はなれることはないでしょう」
そう言って三保は一層つよく抱きついた。
幸隆の官能に火がついた。幸隆は三保の体を草原に横たえた。
三保も幸隆にいどまれるのを待っていた。
あわい月の光が三保を照らしている。
幸隆は三保の体におおいかぶさっていった。
三保の口を吸うと、なやましいあえぎがもれた。そして三保はつよく幸隆の口を吸いかえしてきた。
舌と舌とがからみつき、二人で吸い合った。三保の唇と舌はとろけるようにあまい。幸隆はしばらく吸いつづけた。
三保の体の感触と匂いが、幸隆の官能を刺激した。
打掛けをとり、小袖の衿をひろげると、夜目にも白く二つの乳房があらわになった。
三保は顔をやや横にむけ、乳房への愛撫を待っている。
幸隆は乳房にふれた。岩風呂の湯気のかなたではじめて見た乳房とおなじである。はじめて触れたときの感動をおもいだしていた。
ちいさくとがった乳首を口にふくんだ。
「ああ……」
三保が泣くような声をもらした。
吸いつづけると、三保の首が右に左に何度もゆれた。
「ああ……ああ……」
三保は首を揺すりながら、あえかな声

をもらしつづけた。
　乳首のまわりを何度も舐め、舌先を乳房に這わせていった。
　三保の声がしだいに大きくなり、首の揺れかたもはげしくなった。
　幸隆は小袖の裾へ手をのばしていった。裾の中へ手を入れると、三保の体がぴくんとふるえた。三保がそれを待っていたのはあきらかである。
　幸隆は奥へ奥へと手をのばしていった。それにしたがい小袖の裾がめくれて、白い足が見えてきた。膝があらわれ、内腿もはだけてきた。
　幸隆は三保の腰をおおう腰布を左右に分けた。そして手をさらにその奥へ分け入らせていった。
　内腿の奥の股間に到達した。そこは湿原のようにぬめぬめと濡れている。湿原のなかの泉のわきでる口に指を侵入させた。
「ああ……」
　またしても、しのび泣くような声がもれた。
　三保は腰をよじって、ふたたび首をふりだした。
　敵の隙を見て、上野からわざわざここまでやってきた甲斐が十分にあった。幸隆は生きているよろこびを実感した。
　三保はいつのときでも新鮮である。いつでもはじめての体験のような感動を幸隆におぼえさせる。これがあるからこそ、幸隆は上野から真田郷までやってくるのだ。しかもくるたびに三保の体のよろこびは深くなっていくようだ。
　幸隆は三保の足をひろげ、股間に顔をうずめていった。
　三保の腰がふるえ、内腿がけいれんをつづけた。
　幸隆の感動はたかまっていった。泉に口をつけ、吸いつづけた。まわりの暗さゆえに、幸隆も大胆になった。戸外でこのようなはげしい交わりをむすぶことに興奮していた。
　三保も同様である。三保のあえぎ声ははげしくなる一方である。しのび泣くような声から、むせび泣きにかわっていった。無人の戸外だからこそ、このように大胆になれる。
　濃厚な愛撫をつづけられて、三保はしだいに羞恥をわすれていった。羞恥の扉を幸隆の愛撫で一つ一つはずされていったのだ。
　三保は声をあげてもとめた。
　ついに熱い鋼鉄のようなかたまりが三保の体をつらぬいた。
　と同時に幸隆は雄々しく三保を攻めたてていった。謀将幸隆が一匹の雄となって三保にいどんだ。
　三保はたまらず喜悦の声をあげた。自分の体のふかいところで何度も火花が散った。
　幸隆は三保の声で一層ふるいたち、三保の両足を高くあげ、自分もしだいに夢中になっていった。ひとたび我をわすれると、経験ゆたかな男であっても制御がきかなくなりがちである。
　今の幸隆もそうであった。当初は三保を翻弄していたが、今は忘我の境地にはこばれて女の体に没入していった。
　三保の体はしなやかで、したたかである。達しても達しても、燃えつきることがない。すぐにまた回復して、幸隆をうけいれる。
　幸隆もしりぞく気持はまったくなかった。まだ若いという自尊心がかぎりない



交わりに幸隆をかりたてた。そして欲望にひきずられた。三保の若さと魅力に幸隆は自分をうしないかけた。
　何度めかに達しかけたとき、三保の手がそろりと下へおりた。そして自分の体の中に埋没する陽根の元のあたりに手を添えた。
（危い……）
　無我夢中のたかまりの中で、幸隆は無意識のうちにそう感じた。戦場で敵と生死をあらそう武将の本能的な感覚がめばえたのだ。
　三保が勃起している幸隆の男根を短刀で切りおとそうとしたのと、幸隆がはねおきるのとがほとんど同時であった。
　三保は幸隆の体がはなれるのを両足で精いっぱいさまたげようとした。そして短刀をあてておもいっきり引いた。
「三保っ、何をする！」
　幸隆はさけんではねおきたが、一瞬、一物を三保の体の中においたままにしてきたかと疑った。
　股間をにぎってみると、萎えた一物がぶらさがっていた。
「三保、おまえ何者だ？」
　つづいてとびおきた三保へ幸隆は悲痛な叫びをはなった。命の危機にさらされた驚きよりも、三保にあざむかれていたという衝撃のほうがつよかった。
　三保は逃げる気はなさそうだ。
「真田一族に攻めほろぼされた葛山の落合遠江守の娘です。恨みを晴らすために真田幸隆に近づいて、機会を得たのに失敗したのは無念のきわみじゃ」
　三保は草原にすわりなおして、幸隆を見すえた。
　幸隆の衝撃はつづいた。三保のその姿が信じられなかった。
「そうか、三保は落合どのの姫御か……。たしかにわしは落合一族をほろぼした。落合どのに恨みはないが、乱世なれば武士と武士がたたかい、ころし合うのは宿命だ」
　幸隆は胸をしめつける痛みをこらえて言った。
「宿命は宿命として、ころせばころされるのもまたこの世の掟でありましょう。しくじったことはかえすがえすも口惜しい」
　と三保は唇をかんだ。
「三保に父と一族の敵を討たせてやりたいが、まだ死ぬわけにはまいらぬ。しなければならないことが沢山のこっている」
　幸隆の事業はまだ半ばにしか達していない。
「敵に情をうけたくはありません。わたくしの負けでした」
　言うや、三保は短刀を両手でにぎって、いきなり胸を突こうとした。
「やめろっ」
　叱咤して幸隆は短刀をはね飛ばした。
「女の操をかけた敵討ちに失敗しました。もう生きていく意味はありません。情があるならどうして三保を自害させてくれませんでした」
　三保の言葉は悲痛である。
　その言葉に幸隆は胸をえぐられた。
「わしはこれまでずっと三保をいとおしんできた。敵討ちの志を捨てるわけにはいかぬか。三保はここまでやったのだ。葛山で死んだ一族の者たちもわかってくれるとおもうが」
　幸隆は必死のおもいで言った。
「そうはまいりません。わたくしは死ん

だ一族の者たちにかならず敵討ちをするから成仏してくれと約束したのです」

三保の意志はかわりそうにない。

「三保がもしわしを討ったとしても死んだ一族がよろこぶはずはないぞ。勝敗は合戦の宿命だ。場合によっては真田が落合一族のために敗れていたかもしれぬ」

幸隆は三保の自害をふせぎたい一心であった。

「真田は謀略をもちいて、落合一族をやぶりました」

「謀略も武略のうち。武芸のうちとかんがえておる」

謀略について言えば、幸隆は恥じるところはなかった。戦場での弓矢、鉄砲の戦いばかりが合戦ではないのだ。

君子は仁をもっておこなうが、武士は武芸と武略をもって覇をあらそうものである。これは三保からどのようなことを言われても、仕方がない。まして真田のようなちいさな豪族は、武略、策略、何でもおこなわぬことには戦国の世を生きぬいていくことは不可能である。それに耐えていけない豪族はほろんでいくしかない。残酷ではあるが、それが戦国の掟と言うべきものだ。

弱肉強食。乱世は獣の世界とかわるところがない。これを肝に銘じておかなければ生きのこることはできないのである。

「謀略で相手をほろぼした者は、謀略で敵（かたき）を討たれるのも武士の掟の一つでしょう」

「そこまで言うなら、三保も立派な武家の女。今後もわしを敵とねらうがいい。身のふり方は晃運に相談いたせ」

そう言いのこし、幸隆は後も見ずにその場をはなれて行った。

## 三方ヶ原の合戦

年号がかわって元亀三年（一五七二）の春。幸隆は源太左衛門信綱とともに、上野国群馬郡にある上杉の属城白井（しろい）城を攻めていた。

この城は利根川と吾妻川の交流点にある要衝で、上野長尾氏累代の居城である。城主長尾一井斎憲景（いっせいさいのりかげ）は豪傑の聞えがたかく、西上野がほとんど武田に制圧されてからも、よくこの地で頑張りつづけてきた。

幸隆はかねて白井城を奪取すべく、長尾憲景にたいして調略をおこなっていた。もし武田方に寝返れば白井城と周辺の土地を晴信からもらえるよう尽力する旨の使者を再三おくっていた。

けれども長尾憲景はまったく幸隆の調略にこころをうごかさず、逆に上杉の上野における基地沼田城とともに、岳山城、岩櫃城へ攻め寄せる機をうかがった。そしてある日、白井城から出撃した兵が岩櫃城に近い小野上（おのがみ）の村々を焼きはらった。

これが幸隆に白井城攻めを決意させる原因となった。それでなくても、上杉方の沼田城をおびやかすためにもその南方の白井城の攻略はぜひとも必要な作戦であった。それは武田方の長年の懸案でもあった。

「源太よ、白井をおとそう」

幸隆は嫡男信綱を呼んで言った。

「妙策がございますか」

信綱はたずねた。



「沼田、白井を分断する策がある」

「その策は……」

信綱はこの年すでに三十六歳になっており、武田家で一人前の武将としてあつかわれていた。

「沼田、白井の中間、暮沢（くれさわ）にでる山道をみつけた。ひそかに暮沢に人夫をおくって砦をつくる準備をはじめておる。山中であるから、沼田にも白井にも気づかれていない」

幸隆はこの準備をすでに半月前からはじめていたのだ。

「上策でございますな。よく左様な山道が見つかったもので」

信綱は感心した。

「沼田からの援軍がなければ、白井城はただの小城にすぎぬ。岩櫃の兵だけでもおとすことができる。調略によっては岩櫃の兵もうごかさず憲景を降すことができるかもしれぬ」

幸隆は齢六十になったが、謀略のひらめきはすこしもにぶってはいない。幸隆もこの戦略には満足していた。成功を確信して信綱にうち明けたのだ。

「成功は疑いありませぬ」

信綱から上々の返事がかえってきた。

「暮沢の隠し砦は間もなく出来あがる。出来あがったと同時に白井へ兵をだす」

幸隆は自信をもって言った。

「うけたまわりました。わたくしが兵の指揮をとりましょう」

「いや白井攻めの兵はわしが指揮しよう。白井が攻められれば、沼田から上杉の勢が援軍にでてこよう。そのとき暮沢から上杉の援軍を源太に攻めてもらおう」

上野は山国であり、沼田と白井は渓谷をながれる利根川ぞいのほそい道一本でむすばれているのだ。この道を断てば白井城はまったく孤立してしまう。

「承知いたしました」

幸隆のこの策がおもい浮かんだとき、白井城の命運はきわまったと言える。

二月下旬の一日。岩櫃城から幸隆の指揮する千の軍勢が吾妻川の渓谷ぞいに白井へむかって出動した。

日没のころ千の軍勢は白井城から約一里はなれた子持（こもち）村に宿営し、翌日の暁を待った。

暁がいたるや、

「出陣じゃ！」

幸隆の号令で真田軍は白井にむかい、吾妻川岸と利根川岸に展開した。

城は両岸にはさまれた高台にきずかれている。

「撃てっ」

の号令で鉄砲隊が最前線から城へむかって銃撃をはじめた。払暁のしじまをやぶって銃声が川岸にとどろいた。

城兵はまだねむっており、前日から真田軍が近くせまっていたことを知らなかった。

長尾憲景はただちに反撃の体勢をととのえ、城内から鉄砲を撃ちかえしてきた。

ここにはげしい銃撃戦がはじまった。

城内の長尾軍も約千の軍勢で、真田軍と対等にわたり合った。吾妻川と利根川がいわば城の堀をなしており、双方、川をへだてて撃ち合いをつづけた。長尾軍は日ごろ真田軍の急襲にそなえており、うろたえることはなかった。

かねての手筈どおり、城内から、十数騎にまもられた伝令が利根川づたいに沼田城をめざして出発した。

真田軍は伝令が城をでたのに気づいた

が、それを追わなかった。

伝令一行が暮沢の渓谷にさしかかったとき、山腹から真田の物見が発見したが、これもあえて銃撃をおこなわなかった。そのため、一日たらずで伝令は沼田城に到着した。

沼田城から約千の援軍が、翌朝はやく白井へむかった。昼ごろ援軍が暮沢の渓谷にさしかかるや、

ダダーン　ダダーン

とつじょ銃声が渓谷の中腹あたりからひびきわたった。と同時に、ばたばたと将兵が馬からおちた。

「敵だっ」

「敵軍が中腹にひそんでいるぞ！」

下から上を見あげて長尾の将兵たちはさけんだ。

長尾の鉄砲隊はただちに火縄に火を点じて反撃にうつったが、相手は中腹の岩陰や木陰に身をひそめており、なかなか命中させることは困難だった。中腹をねらって右往左往しているうちに、狙い撃ちされ、つぎつぎにたおれていった。

「六文銭の旗だ。真田の軍だぞ」

「よくこんなところに伏兵がおけたものだ」

歯ぎしりしながら長尾軍は中腹にむかって銃撃をつづけたが、地理的にも不利はまぬがれなかった。撃っても撃っても、敵にあたらぬ。そして自軍からはぞくぞくと犠牲者がでた。

真田軍はカサにかかって銃弾を撃ちおろしてくる。渓谷の道であるから、上からねらわれると、逃げ場も身をかくす場所もない。無残にも上から狙い撃ちされて、むなしく屍をさらしていった。

長尾軍は前進もできなければ後退もできなかった。真田軍の術中におちいって進退きわまった。

援軍をひきいる長尾家の家老長尾玄蕃は歯ぎしりして、

「退けっ、ひけ！」

と後退を命じた。後退すれば白井城を見ごろしにすることになるが、前進はむつかしいし、この先どんなところに伏兵がひそんでいるかわからない。前進よりも後退がましだと決断をくだしたのだ。

這々の体で危地を脱した長尾軍は約半分の五百にしかすぎなかった。およそ半分は渓谷で命をおとした。

白井城では、待てども援軍がこぬ。

二日後、憲景のおくった伝令がようやくもどってきて、暮沢の惨劇について報告をおこなった。

「やんぬるかな……」

憲景は唇をかんでうめいた。沼田からの援軍がなく、連絡も絶たれてしまえば、白井城はまったく孤立状態である。城にたてこもってたたかえば、一ヶ月は籠城ができるかもしれない。だが、それ以上は無理だと判断した。

謙信が越後から大軍をひきいて来援してくれれば話はべつだが、そうでなければ落城するまでたたかうか、降服するしか道はないのだ。

軍議をひらき、諸将にはかったが、妙案はなかった。籠城討ち死に説と、打ってでて討ち死にする説が諸将の大部分をしめた。

「討ち死には勇壮に見えても、その実、無益だ。降服して将来に望を託そう」

と憲景は決断した。

そうしているうちに、白井城に幸隆の使者がおとずれ、ねんごろに降服をすすめた。



憲景は一も二もなく勧降をうけ、城をひらいた。

幸隆のあざやかな作戦がここでまた実をむすんだ。幸隆は白井城を占領し、憲景を一里ほどはなれた八崎という出城に逼塞させた。

晴信は元亀三年七月、領国内に大動員令をくだし、生涯の念願ともいうべき上洛戦にたちあがろうとした。

すでに永禄十年に、晴信は今川氏の領国駿河に進出し、今川氏の娘を嫁にしている嫡男義信を自害に追いこんでいた。ひきつづいて翌年、晴信は三河の徳川家康とはかって駿河に出陣し、今川氏をほろぼして領土をひろげた。

晴信の念願とする〈上洛〉の前には、かねて織田信長がおおきく立ちふさがっていた。信長は永禄十一年に足利義昭を奉じて上洛し、義昭を将軍にして、天下の実権者にのしあがっていた。けれども信長は四周に敵対勢力をおくかかえ、けっして安定した地位にはなかった。

晴信と信長とはかねて縁をむすんで、表面的には友好関係をたもっていた。しかし両者はいつかは衝突しなければならぬ運命にあった。晴信の野心も天下取りにあったからである。晴信は越前朝倉、近江浅井、一向宗、三好三人衆などあらゆる反信長勢力と款を通じており、実質的には信長包囲網の盟主の立場にあったのである。そして信長包囲の手を着々と打っていった。名将晴信の名声はすでに天下に聞え、その上洛が噂されはじめた。

ところが遠大緻密な上洛準備がととのい、九月の出陣が間近になったころ、不運にも病魔が晴信の体をむしばみはじめた。一時病をやしない、小康を得て、いよいよ晴信は上洛戦にたちあがり、甲府を出陣し、伊那谷から青崩峠をこえて遠江に打ち入った。健康に一抹の不安をおぼえつつも、戦国武将の念願実現にむけてふるいたったのである。

十月中旬、晴信は遠江袋井へ進出した。

信長と同盟する家康も浜松から出馬したが、武田軍の有力部隊と衝突しそうになったので、本多平八郎忠勝を殿軍として退却した。武田軍は一言坂で徳川軍に追いつき、攻撃したが、家康はかろうじて浜松城に帰陣した。

晴信は軍をすすめて、二俣城をかこんだ。

二俣城は遠江の山岳地と平野部をむすぶ要地にあり、天竜川と二俣川との合流点の断崖上にきずかれている。三方を川がとりまき、北方だけは尾根につづき、ここにふかい空堀をもうけてあった。主将は家康麾下の中根正照、副将は松平康安と青木貞治である。

晴信は合代島に本陣をすえ、寄せ手の大将に勝頼をおして攻撃にかかった。別働隊とし先発していた山県昌景も攻撃にくわわった。

家康は浜松城から救援に出陣したが、武田の馬場美濃守の軍にはばまれて、すすむことができなかった。信長の援軍もまだ到着しない状況であった。

二俣城は断崖上にあるため、水の便がわるい。それで城の真下をながれる天竜川から、天守台の西にもうけた井楼のツルベで水をくみ上げていた。

そこで晴信は一計を案じた。

「筏を組め。いくつも組め」

と命じ、頑丈な筏をいくつもつくらせた。
「筏を川にながし、城の井楼をこわすのじゃ」
天竜川は名だたる激流である。激流に乗って筏はながれ、井楼の根元を何回となく直撃した。
これには丈夫につくられた井楼もついには破壊され、流失してしまった。
このため城内は水にくるしみ、ついには開城の運命にいたった。
一方、晴信の武将秋山伯耆守信友は武田軍の本隊、山県昌景の別働隊とわかれて美濃に侵入し、岩村城を包囲した。この岩村城には信長の肉親である遠山友勝の未亡人とその養子、さらに信長の弟織田三郎五郎がこもり、河尻秀隆がこれをたすけてまもっていた。信長にとっては大切な城であった。
秋山信友は圧倒的な兵力で岩村城を攻撃し、ついにこれを落城させた。
そうして晴信のひきいる武田軍はいよいよ浜松方面へむかって進発した。
浜松城には家康がいる。家康は年はまだ若いが、海道一の弓取りと称されている豪の者だ。経験が浅く、強大な勢力とは言えないが、簡単に武田軍の攻撃に敗退するとはおもえなかった。しかも家康の背後には信長の援軍がひかえているはずだ。
晴信といえども、浜松城を鎧袖一触に攻めおとす自信はなかった。武田は遠征の軍だが、徳川は地元の軍である。地の利は相手にある。
晴信は諸将をあつめ、何度か軍議をもよおした。四郎勝頼、典厩信豊、穴山梅雪、武田逍遙軒、馬場、山県、内藤、小山田、小幡らの諸将は浜松城攻撃を主張し、高坂弾正一人は反対した。攻略に手間どれば信長がみずから大軍をひきいて後詰めにくるであろうし、今は家康と手をむすんだ謙信が信濃か上野に出陣してくることは疑いないという理由である。
諸将のなかには幸隆も信綱もくわわっていない。真田父子は謙信へのそなえとして信濃と上野にひかえていた。上信の戦線から真田をはずすことはまったくかんがえられなかった。代替の武将をおくこともできなかったのだ。
ただ武田家の旗本として、今や武田二十四将の一人にかぞえられるまでになった三男の武藤喜兵衛と、晴信の近習として出頭した四男加津野信昌は従軍していた。
ともかく武田軍は浜松へむかい、秋葉街道を南下していった。秋葉街道をくだった先に浜松城はあるのだ。
ところが武田軍は浜松城の北約一里余のところ有玉で通路を西へかえた。そして三方ヶ原の台地にあがり、追分にでた。追分で休息をとり、晴信は軍をととのえた。
徳川方はこれまで晴信の意中をまったくはかりかねていた。くるのか、通過しようというのか理解にくるしんだ。
三方ヶ原は浜名湖の東、浜松の北方によこたわる台地で、東西二里、南北三里のひろさの赤土の荒野である。野戦をおこなうにはもってこいの場所だ。追分はこの台地のほぼ中央に位置する。
徳川方にとっては、浜松籠城がもっとも安全な策である。その準備は不断にできている。野戦となると強豪武田のほうが一枚も二枚も上だ。



家康としては籠城をのぞんでいた。しかし武田の大軍が浜松城のすぐ近くを通り、徳川軍が一指もふれずにだまって通過させたとなると、家康は戦国大名として鼎の軽重を問われる。天下に恥をさらすことになる。そうなると遠江で家康を見かぎって武田につく豪族、地侍も数おおくでることが予想された。
家康にとってはまことにくるしい選択であった。おのれの領土を馬蹄でふみにじって通過する武田軍にたいして、負けを覚悟の一戦をいどまなければならない窮地に追いこまれることになる。
追分で陣をととのえた武田軍は、今度は北へむかって移動しはじめた。これは浜松城攻略の意図が晴信にないことをあらわしている。晴信は家康を三方ヶ原にさそいだすためにわざわざ浜松城の一里余のところまで近づいたのだ。
「家康は若い。かならず挑発にのってでてくるだろう」
と晴信は軍議で諸将に予言した。
「不利を承知で家康はでてまいるでしょうか」
穴山梅雪が反問した。
「見ておれ、家康は血気さかんな大将だ。挑発とわかっていても一戦をいどんでくる」
晴信は家康の性格をこのように読んでいたのだ。
はたせるかな、徳川の軍が浜松城からでて、武田軍に追尾してきた。
「どうだ。家康はわが軍が三方ヶ原の台地をおりるところをねらって、背後から攻撃してくるだろう」
と晴信は武藤喜兵衛ら近臣たちにもらした。
戦いは十二月二十二日、午後も夕方に近いころからはじまった。
武田軍は台地をおりると見せかけて、逆に徳川軍へさかんに投石をおこない、挑発した。台地をおりるところをねらわれる不利を避けようとしたのだ。
徳川軍の先頭部隊は挑発にのって、武田軍へ攻撃をしかけた。
「やはり、きたな」
と晴信はにんまりしたが、やがてのうちに晴信の顔から笑いが消えた。

徳川軍の猛攻で小山田、山県両隊がじりじりと押され、やがて押しまくられて、三町以上も退却する羽目となった。予想以上に家康は強気で、輩下の武将たちも勇猛であった。

徳川軍の酒井、石川両隊は武田の小山田勢を撃破し、本多忠勝らの旗本隊は、山県勢をやぶった。

「勝頼隊、馬場隊を投入せよ」

晴信は不利な戦況を見て、第二陣の投入を命じた。

このため徳川軍はほとんど全軍が戦闘にくわわった。

しばらく戦闘があった後、

「内藤昌豊、横槍を入れよ」

台地上から攻防を見まもっていた晴信は、絶妙の機をとらえて命じた。

内藤昌豊隊が一丸となって猛然と横から徳川軍を攻めたてると、形勢はみるみるうちに逆転し、徳川軍は苦戦におちいった。

いったん形勢が逆転すると、兵力に差があるだけに徳川軍はもろかった。兵力は武田軍二万にたいし、徳川軍は八千である。

徳川軍はみるみるうちに総くずれとなった。徳川軍の諸将は必死になってささえようとしたが、ふせぎきれなかった。

「攻撃の手をゆるめるな。ここが勝負どころだ。一気に攻めまくれ」

晴信は本陣の床几に悠然と腰をおろして命じた。

武田軍の諸隊は勢にのって一気呵成に攻めまくった。武藤喜兵衛の指揮する武藤隊も徳川軍の中に攻めこんだ。面白いように徳川の将兵をたおしていった。喜兵衛は二十六歳の若さにまかせて戦場を駆けめぐった。

喜兵衛は父幸隆と兄信綱のぶんもはたらく覚悟でこのたびの出陣に参加していた。喜兵衛は武藤家をついでいたが、体の底では真田家の意識が消えていない。血はもとより真田家のものだ。

喜兵衛は武田家のなかで真田の力をのばすために武藤家をついだ。真田をわすれたのではなかった。真田のためにはいつでも死ぬ覚悟ができていた。加津野家をついだ弟の源七郎信昌もおなじである。

徳川軍は全軍退却にうつった。家康は三方ヶ原の東北方をまわって退却した。予想以上の大敗北となった。

家康は旗本、近習をまとめて集団になって退却したが、しだいにその集団が散っていった。家康のまわりの近習たちも数すくなくなり、手薄になった。

徳川の援軍として来援した織田軍は、たたかう以前から戦意にとぼしかった。援軍の将平手汎秀は地理にうとく、退却して城に入ることができず、稲場というところでむなしく戦死した。もう一人の将佐久間信盛は合戦にくわわることなく、将兵を一人もそこなわず逃げかえって、後に信長の顰蹙を買った。

今一人の援将水野信元も途中から兵をかえし、恥をさらした。

家康は命からがら一騎駆けで浜松城に逃げかえった。これほどみじめな敗戦はかつてなかった。みじめと言うよりいっそ見事なほどの敗戦だった。

武田軍は徳川軍を猛追し、浜松城のすぐ北、犀ヶ崖というところまでせまり、この谷の北方に陣を張った。ここに晴信は十日ばかり退陣したが、指呼の間の浜松城にたいしては睨みをきかすばかりで、攻撃をくわえなかった。



浜松城では厳重な警戒をし武田軍にそなえたが、武田軍はうごく気配を見せなかった。家康に存分の攻撃をあたえたので、十分目的を達したとはいうものの、ここまできたのならどうして浜松城を攻略してしまわないのかという声が武田軍の中にもあがった。

じつはこのとき、晴信の体をふたたび病魔がむしばんでいたのである。病魔の正体は労咳である。わずか二十一歳のとき父信虎を謀略によって国外へ追い、いらい三十余年のあいだ四周の国々へたいして派兵し、連戦につぐ連戦をかさね、侵略の鬼と言われた晴信も疲労がつみかさなって、内部に病巣をやしなってしまったのだ。

晴信は生涯の念願である上洛がここに頓挫したことを察せざるを得なかった。

それでも晴信は最後まで執念の炎をもやした。三方ヶ原台地の北端、刑部において年をこし、いくらか体力の回復を待ち、翌年正月下旬、刑部から三河へすすみ、野田城をかこんだ。

晴信はごく一部の将をのぞいては自分の病を秘していた。晴信重病と世に知られれば、周囲の諸国がこぞって武田家討滅の兵をあげてくることがわかっていたからだ。それに晴信自身、最後の最後まで上洛の念願を追いつづけたかった。

野田城は、長篠の南約三里、豊川の岸の台地にきずかれ、二方が谷になり、西北から東南に細長くつきだした尾根の上に、三の丸、二の丸、本丸がきずいてある。

「二の丸と本丸のあいだに金掘を入れて、城を掘りくずせ」

晴信は野田城をのぞんで、そう命じた。鉱山の人夫を動員して地下道を掘らせたのである。金掘はみな穴掘りの名手だ。

かくして、二の丸と三の丸がおちた。

「本丸の下を掘って、井戸の水道を断て」

これが晴信のつぎなる命令である。いかにも鉱山国甲斐の国守にふさわしい作戦であった。

このため城内は水にくるしみ、ひそかに城中から瓶をつりおろして水を得た。すでに末期症状となった。

そして二月十五日、野田城主菅沼新八郎定盈と援将松平忠正は武田軍にくだり、野田城はおちた。

晴信のこころはさらに西へむかった。晴信は若くして甲斐の国守となり、識見、知謀、学識、人格、武勇、度量はどれをとっても戦国に群をぬき、四隣を征服し、ついに念願の上洛作戦に出陣したが、惜しむらくはその時機がいかにもおそかった。晴信すでに五十一歳のときであった。十年、いや数年はやければ、晴信の体をまだ病魔はむしばんでいなかった。

謙信と川中島および上野において十数年あらそい、信長包囲網を数年間にわたって綿密につくりあげ、ふかい山にかこまれた甲斐からようやく晴信が腰をあげたときには、すでに五十の坂をこえ、体は病んでいたのである。病んだ体に鞭打って晴信は上洛をめざした。晴信は野田からさらに三河ふかく西へ軍をすすめた。

# 訃報

このところ幸隆は体に気だるさをおぼえていた。どこといって体に欠陥はなかったが、活気や闘志がみなぎるのをおぼえなかった。なんとなく生彩を欠いているのを自分で感じていた。

医師は、

「風邪と疲れでございましょう」

と言った。

幸隆は二十九歳で戦にやぶれ海野平を追われていらい、諸国を流浪し、ある意味では晴信以上に辛酸をなめ、心身を疲労させて、一族再興に三十年間も心血をそそいできた。その疲れがないことはなかった。疲労はあるが、それは戦国武将なら誰にでもあるものとかんがえてきた。

幸隆は世間から鉄人と呼ばれてきたが、体は鉄でできてはいない。もうだいぶ肉体がおとろえていることも感じていた。

普通ならば隠居の年齢をむかえていた。が、幸隆は自分の体がうごくうちは第一線をしりぞく気はなかった。だから、風邪や疲れくらいで床につくことはなかった。彼は自分の心身の頑健さを信じていた。

晴信の上洛戦に参加できないのは残念であったが、信濃と上野は当初から幸隆にまかされていくので、この地をはなれるわけにはいかなかった。三男、四男が従軍しているのをむしろ満足する気持であった。

三男喜兵衛から上洛戦の戦果の報せが折にふれて、幸隆のもとにとどいていた。三方ヶ原の合戦の大勝、野田城の攻略の報せはあった。が、その後、喜兵衛からの報せはとぎれていた。

幸隆が体のだるさを感じるようになったのは、そのころからだ。

甲州出陣の前から晴信がたびたび病んでいたのも幸隆は知っていた。幸隆はそれを晴信の一時的なこととはかんがえず、晴信の衰えと感じていた。晴信がこれまであまりに多忙すぎる暮しをしてきたのを知っていたからである。

晴信の上洛の夢は、幸隆の夢でもあった。

しかし甲斐は京都からあまりにも遠い。周囲を高い山々にかこまれ、とくに西側にはけわしい山々が立ちはだかっていて、晴信の京都への道をさえぎっていた。天下をあらそうには晴信はあまりにもおおきな負を背負っていた。だからこそ上洛戦にたちあがるまでにいろいろな準備をおこなわなければならなかった。その準備をしているうちに、晴信は老いをむかえた。それ以上に幸隆も老いたのだった。

けれども老樹の足もとからはすくすくと若木がそだっていた。それも一本や二本ではなかった。幸隆はそれらの若木に後世を託していた。

源太左衛門信綱、兵部丞昌輝、武藤喜兵衛、加津野信昌たちは真田の若木である。

幸隆は幾株もの若木をそだてたから、自分の老いもむなしくはなかった。幸隆の願いはかならず息子たち、孫たちがうけ継いでいってくれるという夢があった。

今日も、初夏のあかるい日差しのなか、岩櫃城本丸の居室で幸隆はうつらうつらと午睡をむさぼっていた。体にだるさをおぼえるようになってから、幸隆は一日に一度は昼寝をする日がおおくなった。

幸隆は夢を見ていた。夕日の照りかがやく中で父棟綱と生きるか死ぬかの戦いを演じたときの情景が夢にでてきた。父は家紋を六文銭にあらため、家名まで真田と変えて武田につかえた幸隆にたいし驚きと怒りの色をかくしていなかった。幸隆は棟綱の顔にかなしみの色さえ感じていた。しかも両者は合戦の場で敵味方にわかれて相対していた。

両者はたがいに馬を蹴って突進した。疾駆する幸隆の正面には、赤い、おおきな夕日が見えた。

そのとき、不意に夕日が視界から没し、あたりは真っ暗闇になった。とつじょとして夜がおとずれた気がした。

幸隆は棟綱の馬上姿を見うしない、方向がわからなくなった。

「小次郎っ、父はこれにあり！」

棟綱の声が聞え、そちらから馬蹄がひびいてきた。

幸隆は声のほうにむかって馬を駆けた。

「父上、覚悟っ」

さけびながら幸隆は大刀をふりかざし、おもいきり振りおろした。その瞬間、自分の体にもおもい衝撃をうけ、闇の果てへとはしり去った。そして幸隆は馬上、血刀を手に呆然としていた。

そのとき、

「殿」

すぐ身近で声が聞えた。声は夏目兵庫のものだ。

幸隆は眠りからさめた。体がひどくおもい。全身に寝汗をかいていた。

「お加減がわるうございますか」

兵庫は幸隆の顔をのぞきこんで言った。

「いや、いくらか気分がわるいくらいだ」

幸隆はうたた寝の畳から身をおこした。

「ただ今、信州からお使いが手紙を持ってまいりました」

兵庫がつたえた。

「戸石城からか」

幸隆は戸石に留守をする矢沢綱頼からの手紙かとおもった。

「いや、伊奈郡駒馬からでございます」

「伊奈、駒馬……？　喜兵衛からか」

「左様でございます」

「殿は今、伊奈の駒馬にいらっしゃるのか。どうして信州におもどりになった？」

幸隆は武田軍は今三河から尾張、美濃へむかって進撃中だとおもっていた。

「武田軍は長篠から信州へ軍をかえしておりました由にございます」

兵庫がこたえた。

厳重につつまれた手紙をひらきながら、幸隆は不吉な予感をおぼえた。

幸隆は手紙を読みとおして、愕然となった。信じられぬことがおこった。喜兵衛の手紙は晴信の死をつたえてきた。

「晴信公が亡くなられた。四月十二日だ。病のためにいったん上洛を断念なされ、帰国中におたおれになった」

幸隆は茫然自失するおもいで、兵庫にもその手紙を読ませた。

「西上なされるのが数年ないし十年おそかった。さぞご無念であられたことだろう」

幸隆は今見ていた夢がその報せだった

のだろうとおもった。
　幸隆は自分で晴信を見こんで、武田家に一族再興の望を賭け、それと実現してさらにその上の飛躍を期していただけに、衝撃はおおきかった。昨今の晴信の疲労と病は知ってはいたが、回復するだけの気力、体力は十分あると信じていた。労咳に体がむしばまれていたとは、上州と甲州とにはなれていただけに気がつかなかった。
　幸隆はながい年月、晴信のもとで生死を賭けた戦や謀略に奔走してきただけに、おおきな支柱をうしなった気がした。
「中原（ちゅうげん）に旗をたてられなかったのは残念のきわみでございましたでしょう」
　兵庫の体はふるえていた。
「殿の死は三、四年のあいだ周囲に秘し、まず領内の備えをかためよと遺書にのこされておるそうだ。そして強兵をそだて、いつかは都へ攻めのぼるべしとのご遺言だそうじゃ」
　喜兵衛の手紙には遺書、遺言の内容も書いてあった。晴信他界の情報が他国につたわれば、敵がいっせいに蜂起するのは必然である。寄ってたかって武田領をうばい合うであろう。それが戦国の原理というものだ。
　晴信は自分の死によっておこるさまざまな事態を読んでいたのである。武田家は四郎勝頼がつぐことになる。勝頼とても弱将ではない。知恵もある。器量もある。しかし天下最大の版図をもつ武田王国を維持するのは至難である。
　だからこそ晴信は自分の喪（も）をかくすよう命じたのだ。そのあいだに勝頼が自分の後継ぎとしておおきく成長することをねがったのではあるまいか。
「今後、どうなるでございましょう」
　兵庫が不安をいだいて聞いた。
「喪をいつまでかくしておけるかによるであろう。三、四年とはいわず、一年か二年かくしておけば、領内のそなえを固められる。四隣に対応することができよう。しかし、喪を秘するのはむつかしいことだ。早々に感づかれると、武田といえども危うい。すぐとは言わず、数年のうちには危機をむかえるであろう」
　幸隆はそういう見方をしめした。
「真田もこころしておかなければなりませんが」
「そのとおりだ。わが家の方針をしっかり立てておかなければならぬ。晴信公亡きうえは、ともかく勝頼さまを盛りたててゆかねばならない」
　幸隆は晴信の死をいたむと同時に、はやくも今後の方針、対応をかんがえていかなければならなかった。
　いずれにしろ、晴信の死ははやすぎた。幸隆は自分より先に晴信が他界することをかんがえていなかった。そのために幸隆は今一度、真田家の行く道をかんがえておく必要にせまられた。
「上杉が喪を知ったら、すぐにも信濃、上野に兵をだしてくるだろう。守りをかたくし、攻撃にそなえよ」
　と幸隆は命令した。
　さらに幸隆は戸石城へも使者をおくり、上杉への守りを命じた。
　幸隆は岩櫃城にあって武田家の将来がどうなるかかんがえた。
　晴信の後継者は四郎勝頼できまりだ。ほかの者が継ぐというメはほとんどない。晴信が他界したからといって、武田家を見かぎっていく武将もいないと今のところかんがえられた。当座は勝頼を中心にまとまっていくだろう。



　だが、問題はこの勝頼だ。
　勝頼は今年二十八歳で、母は諏訪頼重の娘である。勝頼は晴信のような英傑、英雄ではなかったが、けっして凡庸な資質でもなかった。気鋭であり、覇気もあった。戦場で勇気もある。知謀もまずまずである。
　だが、晴信の後継者としてはそれだけでは不足なのだ。どうしても晴信と比較されることはまのがれない。そうした場合、父が偉大すぎて、子の勝頼ではだいぶ見劣りがする。晴信とは差がありすぎた。
　武田家の有力な武将たちは大部分、晴信にその才能をみとめられて引立てられた者たちである。だから彼等は晴信に心酔し、晴信の手足となって、まことによくはたらいた。そういう連中が晴信亡き後、勝頼にたいして晴信同様につかえるかどうかに問題があった。亡き父の旧臣たちを勝頼がつかいこなせるかどうか、これは難問である。
　幸隆も、勝頼にはややおぼつかぬものをおぼえた。武田家の当主たる貫禄、手腕、識見に疑いをいだいていた。
　かつての武田家は甲斐一国と信濃の一部を領するのみであった。ところが今は信濃全域、上野、駿河、遠江、三河の一部にひろがっている。これだけの領国を支配し、裁量することは大変な難事である。
　勝頼が武田領を支配していけるかどうか幸隆はかんがえた。そして真田の将来をもかんがえあわせた。
　勝頼はある意味で勘のするどい大将である。宿将たちが自分を信頼しているかどうか、不安をいだいているか否かを敏感に察しているはずである。そのために勝頼は必要以上に自分の武威を四隣にしめそうとするかもしれない。そうすると今の武田家では現在の武力に破綻をきたす。それが幸隆には目に見えていた。
（勝頼についていくべきか否か……）
　幸隆は武田家につかえていらいはじめて大きな難問にぶつかった。
　今武田家をはなれるのは得策ではない。晴信からうけた恩顧をかんがえなくてはならない。
（いずれは決着をつけなければならない問題だ）
　と幸隆はおもった。晴信の喪があけるまでは目だったうごきはするべきではなかった。
　源太左衛門信綱、兵部丞昌輝、夏目兵庫、海野十郎左衛門、望月三郎兵衛、別所八郎太、丸子十兵衛などの肉親、肱股たちを呼んで、晴信他界を打ちあけた。そして喪はかたくまもるよう命じた。
　したがって真田家中で、晴信の死について取沙汰されることはなかった。
　ところが六月に入ってから、勝頼は自分が武田家を相続したことを世間に公表した。
「何たることを。これでは晴信公がご他界されたことを表沙汰にいたしたも同様じゃ」
　幸隆は病床においてつぶやいた。どうして勝頼がそんな公表にふみ切ったのか、幸隆にはわからなかった。
「世間から自分が武田家の主人（あるじ）となったことをみとめてもらいたかったのでしょうか」
　信綱も首をかしげて言った。

いかに晴信の死を公表していないとはいえ、勝頼が家を相続したとなれば晴信の存在が宙に浮くことは必然である。
「そうかんがえるしかあるまい。予想以上の暗愚ぶりじゃ」
　幸隆は吐き捨てるようにもらした。彼は六月に入ってから病気がちになっていた。晴信につかえて戦国をひたむきにはしりつづけてきた幸隆の胸にぽっかりとおおきな穴があき、その穴を埋めきれなくなったのだ
「勝頼公には父親にヒケをとらぬという自信がおありなのでは。でなければみずから晴信公の喪をあきらかにするも同然のおこないをいたすわけがありませぬ」
　兵庫もにがにがしく言った。
「それが暗愚たるの証じゃ。おのれの器がわかっておらぬ」
　幸隆は勝頼の行為にひどく落胆した。
「晴信公におとらぬ太守の器と信じておるのでしょうか」
「それでなければこの時期に、武田家相続を公にいたしたりはすまい」
「せっかく晴信公が喪を秘すよう遺言なさったのも台無しではございませんか」
「これでは武田の将来もあやうい……」
　暗然たるおもいの幸隆であった。
　翌月、はやくも家康は晴信の死を察知したと見え、三河の長篠城に兵をくりだして攻めたてた。これは晴信他界をうらなうために家康が小手だめしをしたものとかんがえられる。
　武田の守備兵たちは城を明けわたして退却してきた。
　さすがにこの年は晴信の喪中とあって、勝頼は兵をだすわけにはいかなかった。
　これで家康は晴信他界の確信を得たようだった。
　翌天正二年になって、勝頼は満を持していたようににわかに活発な活動を開始した。
　正月下旬、修験道香華坊が喜兵衛の書状を甲府から岩櫃城に持ちきたった。それによると、勝頼は出陣の手はじめとして美濃明智城を攻撃にでた。そして城中の飯狭間右衛門という武将を調略し、武田方に内通させた。そのために城は落ち、救援にきた織田軍はそのまま後退してしまったという報告である。
「悪いことになった。なまじ緒戦に勝つと、図にのる恐れがある」
　幸隆は心配して言った。幸隆は勝頼がもし出てたたかうならば、出鼻をくじかれたほうが武田にとってはいい結果になると見ていたのである。だが勝頼は調略に成功し、織田軍までしりぞけた。
　幸隆の心配はその後ますます大きくなった。勝頼は美濃から兵をかえす間もなく五月八日、軍をひきいて甲府を出発し、高天神城をかこんだのである。
　高天神城は浜松城から九里にみたぬ地にあり、浜街道をおさえる要地である。かつて晴信が攻めても落ちなかった。剛勇で名高い小笠原与八郎長忠が守将である。城は小笠丘陵が尽きる先端に位置し、その先に平野が遠州灘までつらなっている。
　家康は勝頼の勢威に恐れをなし、徳川軍単独ではたたかおうとせず、信長に援軍をもとめた。あの三方ヶ原の合戦からまだ一年半しかたってなく、武田軍の剛強ぶりを徳川軍は肌身でおぼえていた。
　武田軍は火のでるような猛攻をつづけた。勝頼は高天神城をおとして、父におとらぬ勇名を天下にひびきわたらせる好機であった。
　戦況をつたえる報せと前後して、勝頼から幸隆の病気を見舞う手紙を使者がとどけに岩櫃城にやってきた。勝頼はいそがしい攻城戦のなかでも、父が信頼した宿将にたいして気をつかい、懇切な激励の手紙を書いて寄こしたのである。勝頼は幸隆ばかりでなく、武田家の宿将たちにたいしていろいろ気をくばり、起請文をあたえ、疎略にしない旨を約束していた。
　幸隆への手紙には、
『あと十日そこらで高天神城をおとすことができるであろう。城方は降参したいといろいろ悃望してきているが、断固はねつけている次第だ』
　と戦況についてもしるしていた。
　たしかに武田軍は三の丸、塔尾曲輪を攻めおとし、鶴翁山の東の峰にある本丸と二の丸だけで城はもちこたえていた。
　勝頼は守将小笠原長忠にたいししきりに降伏をすすめていたが、なかなか降参しなかった。それは長忠が信長と家康の援軍を待っていたからである。
　しかし援軍はなかなかあらわれなかった。
　攻撃は日に日にはげしくなった。
　信長は本願寺や長島一向一揆におびやかされ、長く岐阜をはなれられない事情があった。待てども援軍はこないはずであった。
　このころ、幸隆は病床で日に日に衰弱していた。
　病床には信綱、昌輝をはじめ、長年苦楽をともにした兵庫、十郎左衛門、三郎兵衛、八郎太、重兵衛、勝之助、紋太夫、権之助らがかわるがわる詰めていた。
　すでに幸隆再起の望は誰の目にも無理だと感じられた。病みおとろえて、幸隆は昏々とねむるばかりであった。頬はこけ、眼窩はおちくぼみ、黒い隈が死相のようにあらわれはじめていた。
　誰も声を発する者はなく、一族再興と繁栄のために六十二年の生涯を信濃と上野の戦場におくってきた千軍万馬の将の最期を看とろうとしていた。
　病間の空気はおもくるしく張りつめている。
　刻々と死期は近づいているように見えた。
　そのとき、幸隆がかすかに口をひらいた。
「勝頼さまの時代は長くはつづくまい。そう遠くない時期に武田家はつぶれるじゃろう。しかし勝頼さま健在のうちは武田家にとどまって忠勤をはげむよう。その後は真田は独自の道をすすむがよい」
　幸隆はやや聞きとりにくい声で言った。
　病床につめている者たちはじっと耳をかたむけて聞いた。
「父上のお言葉うけたまわりました。われら一同、父上のおっしゃるとおり相つとめます」
　幸隆にいちばん近いところにいる信綱がこたえた。
「喜兵衛、信昌、綱頼、新六郎にもよくつたえよ」
　幸隆はふたたび言った。矢沢綱頼、常田新六郎など弟たちは信州戸石城にいる。
「かならずつたえます。父上のお言葉、肝に銘じておきます」
　信綱もふたたびこたえた。
「真田の家訓は、不惜身命。これこそ六

文銭のいわれじゃ。命を惜しむ者は身をほろぼし、不惜身命たればおのずから道はひらける」

そう言って、幸隆は口をつぐんだ。

聞く者たちは幸隆がふたたび口をひらくものとおもって見まもった。

が、幸隆は今度はなかなか口をひらこうとしなかった。いつまでもひらかなかった。

みなは幸隆がねむりにおちたとおもった。

ところが、いつしか幸隆の呼吸がやんでいた。

「ご臨終でございます」

医師の言葉がしじまの中にひびいた。しずかな最期であった。

## 昌幸立つ

（勝頼公があぶない——）

と武藤喜兵衛はこのごろ感じていた。天正二年に入ってからの勝頼は明智城と高天神城をたてつづけに攻略した。とくに高天神城は晴信さえもおとせなかった難攻不落の城であった。これによって勝頼はおおいに自信をつけた。

自信をつけた以上に、自分は晴信と肩をならべる名将だという錯覚をいだいているのではないかと喜兵衛は感じた。晴信の生存中は、二十八歳にもなって子供あつかいをうけていたことが、逆に現在の慢心をまねいたともかんがえられた。晴信は勝頼を後継ぎとしてみとめていたが、けっして過大評価はしていなかった。勝頼を武田家の一武将のようにさえあつかってきた。

勝頼にはそういう父にたいする不満と競争心があるのだと喜兵衛は見ぬいていた。

喜兵衛自身は晴信子飼いの旗本として成長し、喜兵衛、曽根内匠、三枝勘右衛門、土屋平八郎の旗本四人衆がとくに晴信の殊遇を得た。晴信はこの四人にたいしては、しばしば秘密事項もうちあけ、意見を聞いたりしていた。

勝頼の代になっても、喜兵衛のこの地位と立場はかわらなかった。勝頼は父がそだてた気に入りの旗本を大切にあつかったのである。

その喜兵衛が近ごろとくに勝頼にたいして〈あやうさ〉をおぼえていた。

勝頼は武田王国の太守にふさわしい名将たらんとしてひたはしりだした。それには敵国徳川、織田、上杉などと苛烈にたたかい、敵領、敵城を斬り取っていく方法がいちばん手っ取りばやかった。それならば、誰の目にもわかる方法で力量を証明できるからだ。

勝頼は若さゆえにはやった。喪を秘すべきときに武田家相続を公表し、家康と信長に戦をいどんだ。

織田、徳川の連合軍といえば晴信でさえ、相手にするのにさまざまな包囲網をめぐらしてからでなければ決行しなかった難敵である。三方ヶ原でこの難敵を撃破したとはいえ、十分に状況と時機を読んだ上での戦いであった。

このところの勝頼は父でさえ恐れた信長と家康をさまでは恐れていない節が喜兵衛には感じられた。武田軍の精強部隊を自分がひきいて出陣するならば、織田、徳川の連合軍も撃破できるとおもっているようだった。



晴信が遺言したように、せめて三、四年は敵地へ侵攻せず、自国領をかためるべきだと喜兵衛はおもった。前代いらいの宿将、重臣たちもそうかんがえていた。

けれども勝頼はその三、四年が辛抱できなかった。また、明智城ばかりでなく高天神城までおとしたので、勝頼はさらにつぎの戦へと駆りたてられた。

戦には戦機というものがあり、軍にも勢というものがある。この二つを読みちがえては、いい戦はできない。

勝頼は今が武田攻勢の時機だと読んでいた。晴信が没して逼塞することなく、逆に攻勢にでて勢を挽回すべきときだと信じたのだ。

高天神城をぬいて約二ヶ月後、勝頼は武田領内に大動員令をくだした。勝頼は年来武田と徳川のあいだで争奪がおこなわれてきた長篠城の奪取に立ちあがったのである。

信濃と上野の西方面で対上杉の最前線にたつ信綱、昌輝の兄たちも、このたびは動員された。

天正三年四月、勝頼は一万五千の大軍をひきいて怒濤のごとく三河に侵入し、長篠城をとりかこんだ。

「信濃、上野の守りは大丈夫ですか」

喜兵衛は久方ぶりに会った二人の兄にたずねた。

「むろん手は打ってきた。しかし相手があることなので守りは万全とは言えぬ」

剛直な信綱はそうこたえた。

信綱にとっても昌輝にとっても、このたびの動員令は意外なうえにも迷惑なのであった。

「もし謙信が攻めこんできたら」

喜兵衛が聞くと、

「全力をあげてまもるしかない」

と信綱はこたえた。

晴信のころも、各地の先方衆を動員したことはあった。けれどもそのときはかならず敵の背後をおびやかし、敵を領国内に釘付けにしておいて動員したものである。今回もし謙信が信濃か上野に侵入してき、戸石城か岩櫃城が落ちてしまえば、長篠城をうばったとしても、それ以上の損失である。

「謙信が攻めこんでこないという保障はありません」

喜兵衛はややいらだって言った。

「その恐れは十分ある。謙信は今でも戸石城、岩櫃城をねらっている。なるべくはやく長篠城を攻めおとし、一日でもはやく信濃と上野に兵をもどすしかない」

信綱の言葉は苦悩にみちていた。

（武田はこれから十年もたぬかもしれぬ）

喜兵衛は口元まででかかった言葉をおさえた。

喜兵衛は十一歳の年から晴信の側近くつかえ、二十七歳まで晴信の公私にわたる生きざまを見てきただけに、勝頼の戦略には肝を冷やさざるを得ない。

「わたしはともかく、兄上たちには真田の家をまもるべき責任があります。真田の家は父上が苦労してきずきあげてきたものです」

「喜兵衛の言うとおりだ。喜兵衛は真田の家をでておるが、わたしたちは今もあくまで真田だ。お家のほろぶようなことはできない」

「喜兵衛、それ以上は申すな。お前の胸のうちはわかっておる。けれども父上の遺言にもあるとおり、勝頼公のあるかぎり奉公はつづけねばならぬ」

信綱と昌輝の顔はさらに苦悩の色が濃くなった。

「今回、武田が出陣いたせば徳川は織田とともに長篠に大援軍をおくってくるでしょう。高天神のときのようにはまいりますまい」

喜兵衛は相手方の兵略も読んで言った。喜兵衛には双方の兵略、駆け引きがよく見えた。晴信亡き武田の軍容が寒々しく見えるのは仕方がなかった。家康なき徳川、信長なき織田の軍を見るも同然であった。

武田軍は長篠城の野牛門から攻め、さらに瓢丸をも攻めた。

長篠城は大野川と寒狭川とにはさまれた三角形の断崖上にきずかれている。本丸の広さは約千坪、二の丸約七百坪、野牛曲輪二百七十坪、弾正曲輪約五百坪である。もともと山家三方衆の菅沼氏の城であったが、元亀元年のころから武田と徳川とのあいだで取り合いがつづいていた。晴信が没した後、家康が謀略によって奥平貞能、信昌父子を寝返らせ、いらい徳川方の城として奥平信昌が城将としてまもっていた。

武田方としては信昌への恨みからも、どうしても長篠城を落したかったのである。

城将信昌は武田の恨みを買っているので、降服してもゆるされるはずはなく、死ぬまで頑張るしかない立場であった。家康はその立場につけこんで信昌を城将に起用しているのである。

勝頼は攻撃につぐ攻撃を命じ、瓢丸を占領し、城兵は三の丸の巴曲輪にしりぞいた。

さらに三の丸の弾正曲輪も攻めおとし、長篠城は本丸、二の丸、野牛曲輪をのこすばかりとなった。しかしこの区域が城のもっとも堅固なところで、攻撃は一頓挫した。ここで勝頼は、

「金掘を入れ、本丸の土塁を切りくずせ」

と命じた。これは晴信いらいの武田家の得意戦法である。

一方、家康はしきりに信長に援軍をもとめ、今度は信長はみずから大軍をひきい、とくに大勢の鉄砲隊をしたがえてやってきた。長篠城から鳥居強右衛門が救援を乞う使者として脱出し、信長の大援軍がいたるのを確認して、帰城するとき武田軍につかまり、

「城の方々、信長公の援軍は岡崎に到着、家康公は野田まで出陣なさっておる。今しばしの我慢でござるぞ！」

と大音声をはりあげて、磔にかけられたのはこのときのことである。

かくして五月十八日、織田、徳川の連合軍は設楽原に展開し、陣の前に大がかりな柵をつくりはじめた。

「何事だ、あの柵は」

「敵軍は何をいたそうとしておるのだ。いかような作戦か」

武田軍は敵軍の作戦の意図がつかめなかった。ただ柵を幾重にもかまえた陣地に拠る敵軍に気味わるさを感じた。

「敵はわが軍の二倍じゃ。しかも陣地に柵をゆいまわしておる。決戦は避けたほうが賢明だ」

「信長は策のおおき大将である。何をたくらんでおるかわからんぞ」

「ひとたび退却いたし、織田、徳川連合軍がひきあげてから、この秋ふたたび出陣いたすのはいかが。今は敵連合軍の士気があがっておる。ここはかわす策がよかろうとおもう」





「決戦は避けるべきじゃ。勝つにしろ、負けるにしろ、おおきな被害がでるであろう」

二日後の軍議において、武田家の宿将たちはほとんど決戦を避ける発言をした。

この軍議の席において、勝頼は終始不機嫌であった。宿将たちが決戦に異議をとなえるのは総大将の自分を信頼していないせいだとかんがえられた。自分ではなく晴信が武田軍をひきいていたら、一も二もなく宿将たちは決戦に賛成するだろうと勝頼はおもった。

「今は織田、徳川軍に一撃をくわえる千載一遇の好機である。今をのがしたら両軍に痛撃をあたえる機会はなかなかおとずれぬであろう。有無の決戦をいたしたい」

勝頼は意地になって決戦を主張した。

宿将たちと勝頼とのあいだはしっくりとはいっていなかった。勝頼は武田家の当主となった当初は、しきりに宿将たちに気をつかったが、宿将たちは晴信にたいするような尊敬と信頼を勝頼に寄せなかった。それが勝頼のカンにさわっていた。

このとき決戦に反対した宿将は馬場信春、山県昌景、内藤昌豊、小山田信茂、原昌胤、真田信綱らである。

最後に、勝頼が御旗、楯無にちかって明日の決戦をさだめた。御旗は源氏の旗、楯無は武田家重代の鎧で、いずれも武田家の重宝として神格化されているものである。ひとたびこれに誓ったならば違背することはゆるされなかった。

一夜があけた。

設楽原は長篠城の西方約一里である。台地状の地形をなしており、そこを南北に連子川がながれ、その流域は平坦地であるが、両側はいずれも崖である。北方は山地で、台地上にもところどころに小山や丘が点在する。信長はその茶臼山に、家康は弾正山に本陣をおいた。そして連合軍は連子川を前にあて、三重の柵を約二十町にわたって立てまわした。

一方武田軍は高坂弾正、小山田信茂らの七将に二千の軍で長篠城にそなえさせ、勝頼はみずから二万の軍勢をひきいて、連合軍に相対した。勝頼の勢は天をつくばかりである。

信長は軍を十三隊に展開させ、鉄砲隊三千挺を三隊にわけて柵内に布陣させた。

決戦は二十一日の早朝からはじまった。

すでに前哨戦は前夜からおこなわれていた。先にうごいたのは、長篠城の周辺から設楽原へ移動した武田軍である。

徳川の重臣酒井忠次隊は夜陰にまぎれて豊川をわたり、南を迂回して、武田軍の鳶の巣山の塁を翌日未明のころ急襲した。酒井隊の攻撃ははげしさをきわめた。

武田軍は大将武田信実、副将三枝勘解由左衛門以下がまもって、頑強に反撃し、三度まで塁をうばいかえしたが、主だった者はみな討ち死にし、諸塁はおちた。

暁にいたって、武田軍の主力部隊は長篠城の囲みを解いて、設楽原の東部台地に陣をしいた。中央に逍遥軒信綱、典厩信豊、小幡上総介、左翼に山県昌景、右翼に馬場信春という強力な布陣だ。

攻撃の一番手山県隊がまず徳川軍の右翼におそいかかった。武田軍の押太鼓が暁の空にこだまし、鉦がひびきわたり、



天地を揺るがした。

一方、徳川軍はひっそりと静まりかえって、物音もしない。まるで無人と錯覚するほどであった。徳川家の前面につくられた木柵は一見簡単なもので、天下に剛強さを知られた武田軍の騎馬隊の前にはまったく無力のようにおもわれた。

ところが山県隊の先頭が柵を突きやぶるかと見えたとき、柵の背後から数百挺の鉄砲がいっせいに火を吹いた。

ダダダダダーン

ダダダダダーン

ダダダダダーン

一斉射撃は三度おこなわれ、連続的な轟音は三度ひびきわたった。

一面の硝煙がはれたあとには、無残な光景がひろがっていた。百戦錬磨とうたわれた山県隊の過半数がたおれ、屍が無数に散乱し、主をうしなった馬の姿ばかりが目についた。大将山県昌景も一兵すらたおさず、あえなく討ち死にした。

攻撃の二番手は逍遥軒隊である。押太鼓、鉦のひびきとともに騎馬軍団が猛然と突撃すると、

ダダダダダーン

ダダダダダーン

ダダダダダーン

またもや徳川軍の鉄砲隊から三度び一斉射撃の轟音があがった。

硝煙がはれるや、逍遥軒隊も過半が打ちたおされていた。柵にとどいた将兵はほとんどいなかった。とどいた者も柵にはばまれて、前にはすすめない。

織田、徳川軍は鉄砲隊を三組、三段にわけ、一組ずつ一斉射撃をおこなっては、後ろに交代し、装塡してはまた入れかわって銃撃する波状攻撃法をとった。これによって武田軍は銃撃の間隔をついて柵を突破する戦法がとれなかった。武田軍の名ある武将も織田、徳川軍の足軽隊の鉄砲にやすやすと撃ちたおされていった。

三番は小幡隊である。赤装束の小幡隊も勇壮に突撃しては、織田、徳川軍の鉄砲隊の一斉射撃をあび、ばたばたと無益にたおれていった。山県隊、逍遥軒隊とかわるところは何もなかった。

四番、五番は典厩信豊隊、馬場隊である。典厩信豊隊は黒装束で、馬場隊は武田軍随一の精強部隊である。黒装束隊も名だたる精強部隊も、柵と鉄砲隊の前ではなすところがなかった。勇将馬場信春も信豊もあっけなく死んだ。

鉄砲隊の一斉射撃がおこるたびに、勇猛勇敢な武田騎馬軍団が見るかげもなくたおれていった。

真田信綱隊も突撃した。指揮をとるのは信綱と昌輝である。幸隆いらいの宿将海野十郎左衛門、望月三郎兵衛、別所八郎太、丸子重兵衛、和田勝之助、生島紋太夫、松尾権之助らも轡をならべて突撃していった。

ダダダダダーン

ダダダダダーン

織田、徳川軍の陣が近くにせまるや、無情の一斉射撃が鳴りひびいた。

まず信綱と勝之助が、ほとんど同時に三郎兵衛と重兵衛が銃撃をうけて、馬からおちた。十郎左衛門、権之助も撃たれて落ちた。昌輝も撃たれた。玉石混淆、将も兵も無差別に撃たれ、落馬した。

「無念じゃ。射たれた敵の顔もわからぬ……」

重兵衛がそう言いのこして絶命した。

三郎兵衛は信綱を気づかって這い寄ったが、すでに虫の息となっていた。三郎兵衛も力つきて、息をひきとった。
「信綱公も昌輝さまもお亡くなりじゃ。この後、真田家はどうなる……」
十郎左衛門は頭部と腹、腿に銃弾をうけ、たすかる見込みはなかった。死に瀕して十郎左衛門は信綱と昌輝を同時にうしなった真田家の行く末を案じた。よもや一度も予想しなかった事態に見舞われたのだ。
真田隊千五百のうち、約半分がたおれ、のこったうちの半分も傷を負っている。かつてこれほど悲惨な戦いを演じたことはなかった。
真田ばかりでなく、武田軍は壊滅的な打撃をこおむり、手ひどい惨敗を喫した。山県、馬場、小幡、横田、土屋、内藤、原、高坂……など武田家の名だたる武将たちがほとんどこの一戦で討ち死にした。これほどの惨敗の記録は他家を見わたしても類例がない。決戦を回避しようと主張した宿将たちのなかにも、これほどの負け戦になると予想した者はいなかった。
設楽原は血に染まり、屍でうずまった。どこを見ても血と屍にいろどられている。
武田軍の攻撃は朝から炎天の午後まで、波状的にくりかえしおこなわれた。これだけの負け戦で逃げだした部隊はなかった。勇敢、精強なるがゆえに被害は甚大であった。
武田軍の本陣も総退却に追い込まれた。
喜兵衛は旗本であるから攻撃隊にくわわらなかったので、戦死をまぬがれた。が、本陣も追撃されてばらばらになった。
喜兵衛も勝頼からはなれ、さがしたが見うしなった。
勝頼は土屋忽蔵、初鹿野伝右衛門の二人だけを供として退却した。晴信伝来の諏訪法性の兜を勝頼はかぶっていたが、炎天下のためぬいで初鹿野に持たせた。けれども初鹿野も疲労で持てなくなり、それを捨てて退却した。それほど武田軍の退却は悲惨であった。
信州、海野平の盆地が目前にあざやかにひらけている。
盆地の東には烏帽子岳がそびえ、その奥に特異な山容をほこる四阿山がはるかに見え、正面から左手にかけて太郎山、大峰山、虚空蔵山などがつらなり、盆地をつらぬいて千曲川がながれる。戸石城は太郎山の峰の左端に位置する。
喜兵衛は今、二十二年ぶりに故郷、海野平を目前にしていた。
このたび喜兵衛は、はからざる運命に遭遇した。真田家の三男に生れ、他家へ養子にでたが、兄二人の陣没によって、真田家にもどり、家督をつぐことになった。武藤家をでて真田姓に復し、喜兵衛昌幸と称した。そして長年住みなれた甲府をでて、信州海野平へむかって旅だった。
十一歳のとき甲府へおもむいてからの帰国である。今回昌幸の供をしたのは、幸隆のかつての側近夏目兵庫と股肱の生きのこり別所八郎太、和田勝之助、浦野五郎三郎と、武藤家における昌幸の近習、側臣の数人である。
故郷の山河は昌幸をあたたかくむかえてくれた。盆地の空に浮かぶ白い雲にもなつかしさをおぼえた。



(わが故郷、わが家にもどってきた)
という気がした。
真田家をつぐにあたって、昌幸に違和感はすこしもなかった。くらべて言うなら、武藤家をついでいた今までの年月のほうが違和感に近い。三男でありながら、継ぐべくして真田の家をついだという感じをおぼえた。兄二人の死を予感していたわけではなかった。にもかかわらず、真田家相続は既定の事柄だったという気がしてならなかったのである。
昌幸が武藤家を継ぐときも、
『源五郎さまを外へおだしするのは惜しい』
と股肱、宿将たちがさかんに言ったことを昌幸は後になって聞いたのだ。
信綱、昌輝にけっして不足があったわけではなかった。にもかかわらず、重臣たちは昌幸の相続をこころの隅のどこかでねがっていたのだった。
その夕、昌幸は戸石城にむかえられて、古巣にもどったような気分になった。
「殿、おかえりなさいませ。長らくお待ちいたしておりましたぞ」
とまず言ったのは戸石城代の矢沢綱頼である。
綱頼は昌幸の叔父であり、昌幸の少年時代からの腹心矢沢三十郎の父である。
「よくおかえりくださいました。殿のおかえりを家臣一同たのしみにいたしておりました」
綱頼の弟、常田新六郎もよろこんでくれた。
長篠の合戦で討ち死にした望月三郎兵衛の息子雷之進も、丸子重兵衛の息子の三右衛門もいた。
「十一歳の折りに武田家へでむき、後に武藤家をついで、よそながら真田家を見ておった。このたび真田の家を相続することができて、まことにうれしい。父幸隆、兄信綱のときと同様、忠勤をはげんでもらいたい。武田家敗北の折であるが、わしも真田の将来のために身を粉にしてはたらくつもりである。よろしくたのむ」
昌幸は一族や家臣たちにそう挨拶した。武田のことは口にせず、昌幸は真田の名のみ口にした。
昌幸は長篠の合戦をつうじて、すでに武田家をこころのうちでは見かぎっていた。織田、徳川、上杉、北条などと伍して今後戦国の争覇戦に勝ちぬいていくことはできないとおもっていた。辛うじて今回滅亡をまぬがれることはできたが、勝頼のもとで武田家が今後力をおおきく回復していくことは、誰の目にも不可能に見えた。
今後は武田家につかえながらも真田独自の生き方をさぐっていくべき時代であると昌幸はかんがえた。
今の武田家はもうたのむにたらない。勝頼の命令にしたがったがために、晴信がそだてあげた武田家の宿将、股肱たちの大半が戦死してしまった。このために家臣たちのこころは勝頼からはなれていった。昌幸ばかりではないのである。
昌幸は戸石城に入って、一層そのこころをつよくした。これからは真田自立の将来を明確にえがいて、それにむかって生きていかなければならない時代であった。これができなければ戦国争覇の嵐のなかで泡沫のように真田が消えていくことは簡単である。
生やさしいこころでは生き残ることはできない。文字どおり、不惜身命の生き

方がもとめられているのである。自分はそんなはげしい生き方が性に合っているのかもしれないとおもった。
翌日、昌幸は数人の供とともに氏神白鳥神社を参詣し、さらに真田家の菩提寺長谷寺をたずねた。
ひょろっと背の高い、老いたる住職が昌幸の姿を見るや、
「おなつかしや源五郎さま。お達者なご様子、何よりのこととおよろこび申しあげます。幸隆さまばかりでなく、源太郎さま昌次郎さままでお亡くなりになり、まことに残念のきわみです。さりながら源五郎さまが、お家をご相続なさってこの地におもどりになられて、これにまさるよろこびはございません」
まるでわが子の成長を見るような目で言った。
「和尚も達者で何より。子供のころ大層世話になった。おぼえておるぞ」
昌幸も少年のころをおもいだして言った。
「源五郎さまがお生れになった翌日、わたしははじめて幸隆さまをおたずねして河原家にまいりました。そのとき門前につよい運気が立ちのぼるのを感じ、真田家につよいお子、将来英雄となるべき後継ぎがご誕生になられたとおもったものでございます。それが今なかば実現いたしました。まことにうるわしきことにございます」
晃運はやや興奮したように口にした。
「その夜は赤い月がかかり、わしは逆子で母を苦しめたそうだが」
昌幸が言うと、
「そのとおりでございます。されどお生まれになったお子は異能異才にめぐまれた類いまれなるお方と、わが観相にでておりましたぞ。どうやらわが観相のただしきことが明らかにされそうでございます。真田の将来はまことにめでたく存じあげます」
晃運は昌幸の成長ぶりを手ばなしでよろこんだ。
「和尚にはわが父、わが一族の者たちも大層世話になった。今後ともよろしくたのむ」
「わが観相がどこまであたるか、長生きをしてたしかめてみたいものです」
晃運は生まれたばかりの源五郎を見て、将来一族を背負っていく人物になると幸隆に保障していたのである。
「ならば今一つたずねよう。現在（いま）のわが骨相人相、和尚はどのように観る」
昌幸はあえてたずねた。
「天与の資質にますます磨きがかかっておられるものと観る。行く末は上信はおろか、天下を駆け引きするお立場にたたれよう」
晃運はためらいもなくこたえた。
「天下を駆け引きいたすと？」
「左様、そのとおりでございます」
晃運は再度こたえた。

（第一部　了）



'95別冊歴史読本春特別増刊　時代小説
定価　一五〇〇円（本体一四五六円）
一九九五年三月二十四日発行
編集人　田中満儀
発行人　菅英志
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　新人物往来社
東京都千代田区丸の内三―三―一
新東京ビルヂング（〒一〇〇）
電話三二一二―三九三六番（編）
振替口座〇〇一六〇―五―一五一六四三
雑誌コード　69645―89（第20巻第12号）